

阿武隈川上流河川改修事業
高木地区遺跡調査報告

高木遺跡
第1分冊〔本文編1〕

2019年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財團
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告

たかぎ
高木遺跡

第1分冊 [本文編1]

序 文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めています。

国土交通省福島河川国道事務所が実施する「阿武隈川上流河川改修事業(高木地区)」は、阿武隈川上流部左岸に位置する須賀川市大字浜尾に遊水地を整備することにより、下流部における洪水被害の拡大を防ぐことを目的とした事業です。

福島県教育委員会では、この計画地区内にある埋蔵文化財包蔵地について関係機関と保存のための協議を行い、現状保存が困難なものについて発掘調査を行って詳細な記録を残すこととしました。

本報告書は、平成27~29年度に実施した須賀川市所在の高木遺跡の1~3次にわたる発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査の結果、弥生時代から中世の遺構が層状に数多く発見され、それらが阿武隈川の洪水被害にあって埋没してきたことが明らかになりました。阿武隈川がたびたび洪水となつたことは文献史料などによって知られていますが、本遺跡の発掘調査によってその具体的な様相が明らかになりました。

このような貴重な成果を県民の皆様に広く知っていただくために、各年度にそれぞれ1回、合計3回の現地説明会を開催し、多くの方々に当遺跡の調査成果をご覧いただくことができました。

この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたって、御協力・御尽力をいただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、須賀川市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

阿武隈川上流河川改修事業にかかる埋蔵文化財の調査は、須賀川市の高木遺跡を対象として、平成27年度から平成29年度までの3箇年にわたって、のべ36,000m²に及びました。

本報告書は、この高木遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世のそれぞれの時代で集落が営まれていたことが明らかになりました。特筆されるのは、これら各時代の集落跡が阿武隈川の洪水堆積層の下に埋もれていたことです。

のことから、阿武隈川が多く災害を引き起こしていたこと、災害と向き合いながらも当時の人々の生活が各時代にわたって営まれていたことが明らかになりました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらには地域の歴史を理解する資料として、生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました地域住民の皆様をはじめ、須賀川市や関係機関に深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 杉 昭重

緒 言

- 1 本書は平成27～29年度に実施した阿武隈川上流河川改修事業埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 2 本書には、須賀川市に所在する高木遺跡の調査成果を収録した。
　　高木遺跡 福島県須賀川市浜尾字高木 埋蔵文化財番号：0720700184
- 3 本書は、第1分冊：本文編1、第2分冊：本文編2、第3分冊：自然科学分析・写真図版編で構成した。
- 4 本事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託により実施し、調査・報告にかかる費用は国土交通省が負担した。
- 5 福島県教育委員会では、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 6 公益財団法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の次の職員を配し調査・報告書の作成にあたった。

平成27年度

専門文化財主査 吉野滋夫 専門文化財主査 小暮伸之 文化財副主査 中野幸大
文化財主事 菅野美句 文化財主事 大内幸代 文化財主事 遠藤司洋
文化財主事 荒木麻衣 文化財主事 神林幸太朗

他に、藤谷 誠、門脇秀典、鶴見諒平、佐藤 俊、安田 削、松本 茂の協力を臨時に得た。

平成28年度

専門文化財主査 青山博樹 文化財副主査 中野幸大

他に、佐藤 俊、松本 茂の協力を臨時に得た。

平成29年度

専門文化財主査 青山博樹 文化財主査 中野幸大 文化財主事 神林幸太朗

他に、松本 茂の協力を臨時に得た。

平成30年度

副主幹 青山博樹 文化財主事 神林幸太朗 (職名は当時)

- 7 本書の執筆にあたっては、原則として調査を担当した調査員が行い、文責は文末に示した。
- 8 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し付章にその結果を掲載している。
　　株式会社加速器分析研究所 放射性炭素年代測定、樹種同定
　　株式会社パレオ・ラボ 放射性炭素年代測定、樹種同定、土器種実圧痕同定分析、
　　石材鑑定
　　パリノ・サーヴェイ株式会社 自然化学分析
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局福島河川国道事務所が作成した工事用地図を複製もしくはトレースしたものである。
- 11 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。
　　須賀川市教育委員会、東北大大学術資源研究公開センター、福島大学
　　市川一秋、稲田健一、植松晚彦、小倉徹也、及川良彦、管野和博、菊地芳朗、佐々木理、
　　鳴原晴彦、鈴木素行、高田 勝、辻 秀人、西川修一、藤沢 敦、藤原妃敏、森 幸彦、
　　柳沼賢治、谷中 隆、山田和史、吉田博行 (50音順)

用例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。
 - (1) 座標値 日本国土座標第Ⅹ系で設定した。
 - (2) 方位 図中の方位は真北を示す。表記がない場合は図の真上を真北とする。
 - (3) 標高 水準点を基にした海拔標高で示した。
 - (4) 評尺 挿図中のスケール右脇に縮小率を示した。
 - (5) ケバ 遺構内の急傾斜の部分は「↑」で、緩傾斜の部分は「↓」で表現した。また、後世の搅乱の傾斜部は「⇄」で表現した。
 - (6) 土層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字lと算用数字を組み合わせて表記した。
(例) 基本層位 - L I · L II …、遺構内堆積土 - l 1 · l 2 …
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著 1999 日本色研事業株式会社発行)に基づく。
 - (7) 網点 ■は黒色処理を、■は被熱範囲を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。
 - (1) 評尺 挿図中のスケール右脇に縮小率を示した。
 - (2) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕は一点鎖線で示した。
 - (3) 番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
 - (4) 注記 出土グリッド、出土層位などは遺物番号の右脇に示した。
 - (5) 遺物計測値 計測値・石質は各実測図脇に示した。()内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。
- 3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

須賀川市 : SKG	高木遺跡 : TKG	竪穴住居跡 : SI	掘立柱建物跡 : SB
柱列跡 : SA	溝跡 : SD	焼土遺構 : SG	土坑 : SK
土器埋設遺構 : SM	畑跡 : SX		
柱穴・小穴 : P	グリッド : G	基本土層 : L	遺構内堆積土 : l

総 目 次

[第1分冊]

序 章

第1節	事業の概要	1
第2節	調査に至る経緯	2
第3節	調査経過	2

第1章 遺跡の環境と調査方法

第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	9
第3節	調査方法	12

第2章 遺構と遺物

第1節	遺跡の概観	14
第2節	基本土層	15
第3節	住居跡(1~160号住居跡)	33

[第2分冊]

第2章 遺構と遺物

第3節	住居跡(161~237号住居跡)	1
第4節	建物跡	111
第5節	柱列跡	167
第6節	烟跡	171
第7節	方形区画遺構	187
第8節	溝跡	195
第9節	祭祀遺構・土器集中地点	212
第10節	土坑	223
第11節	土器埋設遺構	266
第12節	焼土遺構	274
第13節	遺物包含層	276
第14節	遺構間接合遺物	284
第15節	遺構外出土遺物	285

第3章 総括

第1節	遺物	292
第2節	遺構	321
第3節	まとめ	346

[第3分冊]

付章 自然科学分析

第1節	放射性炭素年代測定(平成27年度分)	3
第2節	出土炭化材の樹種同定	16
第3節	放射性炭素年代(平成28・29年度分)	37
第4節	樹種同定・種実同定	47
第5節	自然科学分析	61
第6節	プラント・オパール分析	76
第7節	大型植物遺体同定	79
第8節	レプリカ法による土器圧痕の同定	86

写真図版

付図1 遺構配置図 弥生時代終末期~古墳時代前期

付図2 遺構配置図 古墳時代後期~中世

[第1分冊] 目 次

序 章

第1節 事業の概要.....	1
第2節 調査に至る経緯.....	2
第3節 調査経過.....	2

第1章 遺跡の環境と調査方法

第1節 地理的環境.....	7
第2節 歴史的環境.....	9
第3節 調査方法.....	12

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概観.....	14		
第2節 基本土層.....	15		
第3節 住居跡(1~160号住居跡).....	33		
1号住居跡(33)	2号住居跡(35)	3号住居跡(36)	4号住居跡(40)
5号住居跡(41)	7号住居跡(43)	8号住居跡(46)	9号住居跡(46)
10号住居跡(50)	11号住居跡(52)	12号住居跡(54)	13号住居跡(59)
14号住居跡(63)	15号住居跡(65)	16号住居跡(68)	18号住居跡(71)
20号住居跡(73)	21号住居跡(75)	22号住居跡(76)	23号住居跡(80)
24号住居跡(84)	26号住居跡(88)	27号住居跡(92)	28号住居跡(94)
29号住居跡(98)	30号住居跡(101)	31号住居跡(104)	32a・b号住居跡(106)
33号住居跡(109)	34号住居跡(114)	35号住居跡(116)	37号住居跡(119)
38号住居跡(122)	39号住居跡(126)	41a・b号住居跡(130)	42号住居跡(134)
43号住居跡(137)	44号住居跡(140)	45号住居跡(141)	46号住居跡(143)
47号住居跡(145)	48号住居跡(148)	49号住居跡(150)	50号住居跡(152)
51号住居跡(158)	52号住居跡(164)	53号住居跡(168)	54号住居跡(171)
55号住居跡(175)	56号住居跡(177)	57号住居跡(178)	58号住居跡(180)
59号住居跡(183)	60号住居跡(185)	61号住居跡(186)	62号住居跡(187)
63号住居跡(188)	64号住居跡(195)	65号住居跡(197)	66号住居跡(200)
67号住居跡(203)	68号住居跡(206)	69号住居跡(207)	70号住居跡(209)
71号住居跡(211)	72号住居跡(212)	73号住居跡(213)	74号住居跡(218)
75号住居跡(220)	76号住居跡(222)	77号住居跡(224)	78号住居跡(225)

79号住居跡(226)	80号住居跡(228)	81号住居跡(232)	82号住居跡(236)
83号住居跡(237)	84号住居跡(238)	85号住居跡(241)	86号住居跡(242)
87号住居跡(243)	88号住居跡(253)	89号住居跡(257)	90号住居跡(258)
91号住居跡(261)	92号住居跡(263)	93号住居跡(264)	94号住居跡(267)
95号住居跡(269)	96号住居跡(270)	97号住居跡(273)	98 a・b号住居跡(276)
99号住居跡(278)	100号住居跡(279)	101号住居跡(282)	102号住居跡(283)
103号住居跡(284)	104号住居跡(285)	105号住居跡(286)	106号住居跡(289)
107号住居跡(290)	108号住居跡(292)	109号住居跡(293)	110号住居跡(295)
111号住居跡(296)	112号住居跡(298)	113号住居跡(299)	114号住居跡(300)
115号住居跡(301)	116号住居跡(303)	117号住居跡(304)	118号住居跡(306)
119号住居跡(307)	120号住居跡(308)	121号住居跡(311)	122号住居跡(314)
123号住居跡(316)	124号住居跡(319)	125号住居跡(320)	126号住居跡(323)
127号住居跡(325)	128号住居跡(326)	129号住居跡(327)	130号住居跡(328)
131号住居跡(329)	132号住居跡(333)	133号住居跡(334)	134号住居跡(336)
135号住居跡(337)	136号住居跡(338)	137号住居跡(339)	138号住居跡(340)
139号住居跡(342)	140号住居跡(345)	141号住居跡(345)	142号住居跡(348)
143号住居跡(349)	144号住居跡(352)	145号住居跡(353)	146号住居跡(358)
147号住居跡(358)	148号住居跡(359)	149号住居跡(362)	150号住居跡(363)
151号住居跡(364)	152号住居跡(366)	153号住居跡(368)	154 a・b号住居跡(371)
155号住居跡(373)	156号住居跡(376)	157号住居跡(378)	158号住居跡(379)
159号住居跡(380)	160号住居跡(382)		

挿図・表目次

[挿図]

図1 高木遺跡位置図	1	図21 1号住居跡・出土遺物	34
図2 浜尾遊水地工事計画と遺跡の位置	3	図22 1号住居跡出土遺物	35
図3 高木遺跡発掘調査の推移	5	図23 2号住居跡	36
図4 高木遺跡周辺の地形分類図	7	図24 3号住居跡	37
図5 周辺の遺跡位置図	10	図25 3号住居跡出土遺物(1)	38
図6 グリッド配置と地区割り	13	図26 3号住居跡出土遺物(2)	39
図7 遺構配置図(1)		図27 4号住居跡・出土遺物	40
弥生時代終末期～古墳時代前期	16・17	図28 5号住居跡	42
図8 遺構配置図(2)		図29 5号住居跡出土遺物	43
古墳時代後期～中世	18・19	図30 7号住居跡	44
図9 遺構配置図		図31 7号住居跡出土遺物	45
弥生時代終末期～古墳時代前期(1)	20	図32 8号住居跡・出土遺物	47
図10 遺構配置図		図33 9号住居跡	48
弥生時代終末期～古墳時代前期(2)	21	図34 9号住居跡出土遺物	49
図11 遺構配置図		図35 10号住居跡・出土遺物	51
弥生時代終末期～古墳時代前期(3)	22	図36 11号住居跡	53
図12 遺構配置図		図37 11号住居跡出土遺物	54
弥生時代終末期～古墳時代前期(4)	23	図38 12号住居跡(1)	55
図13 遺構配置図		図39 12号住居跡(2)	56
弥生時代終末期～古墳時代前期(5)	24	図40 12号住居跡出土遺物(1)	57
図14 遺構配置図		図41 12号住居跡出土遺物(2)	58
古墳時代後期～中世(1)	25	図42 13号住居跡	60
図15 遺構配置図		図43 13号住居跡出土遺物	62
古墳時代後期～中世(2)	26	図44 14号住居跡(1)	63
図16 遺構配置図		図45 14号住居跡(2)・出土遺物	64
古墳時代後期～中世(3)	27	図46 15号住居跡・出土遺物(1)	66
図17 遺構配置図		図47 15号住居跡出土遺物(2)	67
古墳時代後期～中世(4)	28	図48 16号住居跡・出土遺物(1)	69
図18 土層柱状図	30	図49 16号住居跡出土遺物(2)	70
図19 基本土層	31	図50 18号住居跡・出土遺物	72
図20 地層と遺構との関係模式図	32	図51 20号住居跡	74

■52	20号住居跡出土遺物	75	■87	39号住居跡(1)	127
■53	21号住居跡	76	■88	39号住居跡(2)・出土遺物(1)	128
■54	22号住居跡(1)	78	■89	39号住居跡出土遺物(2)	129
■55	22号住居跡(2)・出土遺物	79	■90	41a号住居跡	131
■56	23号住居跡(1)	81	■91	41b号住居跡	133
■57	23号住居跡(2)	82	■92	41b号住居跡出土遺物	134
■58	23号住居跡出土遺物	83	■93	42号住居跡	135
■59	24号住居跡	85	■94	42号住居跡出土遺物	136
■60	24号住居跡出土遺物	87	■95	43号住居跡(1)	138
■61	26号住居跡(1)	89	■96	43号住居跡(2)・出土遺物	139
■62	26号住居跡(2)	90	■97	44号住居跡・出土遺物	141
■63	26号住居跡出土遺物	91	■98	45号住居跡	142
■64	27号住居跡(1)・出土遺物	93	■99	46号住居跡・出土遺物	144
■65	27号住居跡(2)	94	■100	47号住居跡(1)	146
■66	28号住居跡(1)	95	■101	47号住居跡(2)・出土遺物	147
■67	28号住居跡(2)	96	■102	48号住居跡・出土遺物	149
■68	28号住居跡出土遺物	97	■103	49号住居跡・出土遺物	151
■69	29号住居跡(1)	99	■104	50号住居跡(1)	153
■70	29号住居跡(2)・出土遺物	101	■105	50号住居跡(2)	154
■71	30号住居跡	102	■106	50号住居跡出土遺物(1)	156
■72	30号住居跡出土遺物	103	■107	50号住居跡出土遺物(2)	157
■73	31号住居跡・出土遺物	105	■108	51号住居跡(1)	159
■74	32a号住居跡(1)	107	■109	51号住居跡(2)	160
■75	32a号住居跡(2)・出土遺物	108	■110	51号住居跡出土遺物(1)	161
■76	32b号住居跡	110	■111	51号住居跡出土遺物(2)	162
■77	33号住居跡(1)	112	■112	51号住居跡出土遺物(3)	163
■78	33号住居跡(2)・出土遺物	113	■113	52号住居跡(1)	165
■79	34号住居跡・出土遺物	115	■114	52号住居跡(2)	166
■80	35号住居跡・出土遺物(1)	117	■115	52号住居跡出土遺物	167
■81	35号住居跡・出土遺物(2)	118	■116	53号住居跡(1)	169
■82	37号住居跡(1)	120	■117	53号住居跡(2)	170
■83	37号住居跡(2)・出土遺物	121	■118	54号住居跡(1)	172
■84	38号住居跡(1)	123	■119	54号住居跡(2)	173
■85	38号住居跡(2)	124	■120	54号住居跡出土遺物	174
■86	38号住居跡出土遺物	125	■121	55号住居跡	176

■122	55号住居跡出土遺物	177	■157	75号住居跡・出土遺物	221
■123	56号住居跡	178	■158	76号住居跡	222
■124	56号住居跡出土遺物	179	■159	76号住居跡出土遺物	223
■125	57号住居跡・出土遺物	180	■160	77号住居跡	225
■126	58号住居跡	181	■161	78号住居跡	226
■127	58号住居跡出土遺物	182	■162	79号住居跡・出土遺物	227
■128	59号住居跡	184	■163	80号住居跡(1)	229
■129	59号住居跡出土遺物	185	■164	80号住居跡(2)	230
■130	60号住居跡	185	■165	80号住居跡出土遺物	231
■131	61号住居跡・出土遺物	187	■166	81号住居跡	233
■132	62号住居跡・出土遺物	188	■167	81号住居跡出土遺物	235
■133	63号住居跡(1)	190	■168	82・83号住居跡	236
■134	63号住居跡(2)	191	■169	83号住居跡出土遺物	237
■135	63号住居跡(3)・出土遺物(1)	193	■170	84号住居跡	239
■136	63号住居跡出土遺物(2)	194	■171	84号住居跡出土遺物	240
■137	63号住居跡出土遺物(3)	195	■172	85号住居跡・出土遺物	241
■138	64号住居跡	196	■173	86号住居跡	243
■139	65号住居跡(1)	198	■174	87号住居跡(1)	245
■140	65号住居跡(2)	199	■175	87号住居跡(2)	247
■141	65号住居跡出土遺物	200	■176	87号住居跡出土遺物(1)	249
■142	66号住居跡(1)・出土遺物	202	■177	87号住居跡出土遺物(2)	250
■143	66号住居跡(2)	203	■178	87号住居跡出土遺物(3)	251
■144	67号住居跡(1)	204	■179	87号住居跡出土遺物(4)	252
■145	67号住居跡(2)・出土遺物	205	■180	88号住居跡	254
■146	68号住居跡・出土遺物	206	■181	88号住居跡出土遺物	256
■147	69号住居跡・出土遺物	208	■182	89号住居跡	257
■148	70号住居跡	210	■183	89号住居跡出土遺物	258
■149	71号住居跡・出土遺物	211	■184	90号住居跡	259
■150	72号住居跡	212	■185	90号住居跡出土遺物	260
■151	73号住居跡(1)	214	■186	91号住居跡・出土遺物	262
■152	73号住居跡(2)	215	■187	92号住居跡・出土遺物	263
■153	73号住居跡出土遺物(1)	217	■188	93号住居跡	265
■154	73号住居跡出土遺物(2)	218	■189	93号住居跡出土遺物	266
■155	74号住居跡	219	■190	94号住居跡	268
■156	74号住居跡出土遺物	220	■191	94号住居跡出土遺物	269

■192	95号住居跡	270	■227	122号住居跡出土遺物	316
■193	96号住居跡	271	■228	123号住居跡・出土遺物	318
■194	96号住居跡出土遺物	272	■229	124号住居跡・出土遺物	320
■195	97号住居跡	274	■230	125号住居跡	321
■196	97号住居跡出土遺物	275	■231	125号住居跡出土遺物	323
■197	98 a・b号住居跡	277	■232	126号住居跡	324
■198	98 a・b号住居跡出土遺物	278	■233	127号住居跡	325
■199	99号住居跡	279	■234	128号住居跡	326
■200	100号住居跡	280	■235	129号住居跡・出土遺物	327
■201	100号住居跡出土遺物	281	■236	130号住居跡・出土遺物	329
■202	101号住居跡	282	■237	131号住居跡	330
■203	102号住居跡	283	■238	131号住居跡出土遺物(1)	332
■204	103号住居跡・出土遺物	284	■239	131号住居跡出土遺物(2)	333
■205	104号住居跡	285	■240	132号住居跡	334
■206	105号住居跡	287	■241	133号住居跡・出土遺物	335
■207	105号住居跡出土遺物	288	■242	134号住居跡	336
■208	106号住居跡・出土遺物	290	■243	135号住居跡	337
■209	107号住居跡・出土遺物	291	■244	136号住居跡	338
■210	108号住居跡・出土遺物	292	■245	137号住居跡・出土遺物	340
■211	109号住居跡・出土遺物	294	■246	138号住居跡	341
■212	110号住居跡・出土遺物	295	■247	139号住居跡	343
■213	111号住居跡・出土遺物	297	■248	139号住居跡出土遺物	344
■214	112号住居跡・出土遺物	298	■249	140号住居跡	346
■215	113号住居跡・出土遺物	300	■250	141号住居跡	347
■216	114号住居跡	301	■251	142号住居跡	348
■217	115号住居跡・出土遺物	302	■252	143号住居跡	349
■218	116号住居跡	304	■253	143号住居跡出土遺物(1)	351
■219	117号住居跡	305	■254	143号住居跡出土遺物(2)	352
■220	118号住居跡	306	■255	144号住居跡・出土遺物	353
■221	119号住居跡	307	■256	145号住居跡	354
■222	120号住居跡	309	■257	145号住居跡出土遺物(1)	355
■223	120号住居跡出土遺物	310	■258	145号住居跡出土遺物(2)	357
■224	121号住居跡	312	■259	146号住居跡	358
■225	121号住居跡出土遺物	313	■260	147号住居跡	359
■226	122号住居跡	315	■261	148号住居跡	360

図262	148号住居跡出土遺物	361	図270	154a・b号住居跡・出土遺物	372
図263	149号住居跡	362	図271	155号住居跡	374
図264	150号住居跡	363	図272	155号住居跡出土遺物	375
図265	151号住居跡	364	図273	156号住居跡・出土遺物	377
図266	151号住居跡出土遺物	365	図274	157号住居跡	378
図267	152号住居跡・出土遺物	367	図275	158号住居跡・出土遺物	379
図268	153号住居跡	369	図276	159号住居跡	381
図269	153号住居跡出土遺物	370	図277	160号住居跡	382

[表]

表1 周辺の遺跡 11

序 章

第1節 事業の概要

阿武隈川は、福島県西白河郡西郷村の旭岳に源流を発し、福島県中通り地方と宮城県南部を北上して、宮城県亘理郡亘理町荒浜にて仙台湾に注ぐ、流路延長239kmの一級河川である。

阿武隈川の治水対策は、大正8年から河川整備が推進されてきたが整備途中であったため、昭和61年8月洪水においては、戦後最大規模の被害をもたらした。その後、平成10年8月洪水も大きな被害をもたらした。その災害防止のため、阿武隈川上流の河川整備率向上と整備効果の早期発現を図ることを目的に、河川改修事業と災害復旧事業を総合的に短期間で集中実施する「平成の大改修」が、国土交通省東北地方整備局によって進められた。

そのなかでも須賀川地区では、築堤と江持橋架替の実施及び浜尾遊水地の整備が計画された。浜尾遊水地は、洪水時に流れてくる阿武隈川の水の一部を遊水地内に一時的に溜め込み、下流側へ流れる水の量を減らす目的で整備された。浜尾遊水地は、事業面積約75ha、調節容量約180万m³の規模で、平成16年11月に完成した。

しかし、平成23年9月の台風15号による出水では、浜尾遊水地が下流区間の水位低減効果を一定程度発揮する一方、なおも計画高水位を超過するという事態が発生した。これにより、下流域にお



図1 高木遺跡位置図

ける浸水被害のさらなる軽減と下流河道の負担低減の必要性が認識され、浜尾遊水地において洪水調節の容量拡大のための第二次掘削が実施されることになった。この追加掘削により、遊水地の容量は180万m³から50万m³増えて230万m³となることが見込まれた。

なお、浜尾遊水地では、通常時に地域に役立つよう土地の有効利用を図るため「浜尾遊水地利用計画書」が作成され、行政と市民が一体となって推進してゆくこととされた。
(吉　野)

第2節　調査に至る経緯

須賀川市高木遺跡は、奈良・平安時代の散布地として登録されている周知の遺跡である。

本章第1節で述べたように、「平成の大改修」における浜尾遊水地の整備をうけて、須賀川市教育委員会が平成13年に対象面積100,000m³の範囲で確認調査を実施した。

その結果、奈良時代の堅穴住居跡などが検出され、要保存面積は32,000m³とされたものの、福島河川国道事務所と須賀川市教育委員会によるその後の協議で高木遺跡を現状のまま保存することが合意され、発掘調査の実施は見送られた。

その後、平成25年に浜尾遊水地内の追加掘削が行われることとなり、その掘削範囲に高木遺跡が含まれた(図2)。これに伴う現地協議の際、すでに開始されていた掘削工事の一部が本遺跡の範囲内で行われていたため、須賀川市教育委員会はただちに工事の中止を要請した。あわせて、確認調査をあらためて実施して保存面積を確定し、これをもとにあらためて協議を行うことが合意された。確認調査の再度の実施は、前回の確認調査時に用地の未買収や作付けによる未調査部分があつたことなどによる。この確認調査により、本遺跡は古墳時代から平安時代にかけての集落跡であることが再確認され、要保存面積は26,000m³とされた。

福島県教育委員会と須賀川市教育委員会は、要保存面積が広大であることを鑑み、調査の主体を福島県教育委員会に移し、(公財)福島県文化振興財團に発掘調査を委託することとした。(吉　野)

第3節　調査経過

本遺跡の発掘調査と報告書の作成は4箇年度にわたった。ここでは、その経過を年度ごとに述べる。各年度の調査範囲は図3に示した。

平成27年度

平成27年度は、要保存面積26,000m³について重機による表土剥ぎを行い、このうち24,000m³を調査対象面積として、(公財)福島県文化振興財團遺跡調査部の職員8名を配置した。調査は5月12日から開始し、調査区縄張り後、重機による表土剥ぎを開始した。5月下旬には、調査連絡所・仮設トイレの設置を行った。引き続き、6月からは作業員を雇用して遺構検出作業を開始した。

表土剥ぎの過程で、掘削工事による搅乱が3,000m³以上の面積に及び、その一部は深く下層にま

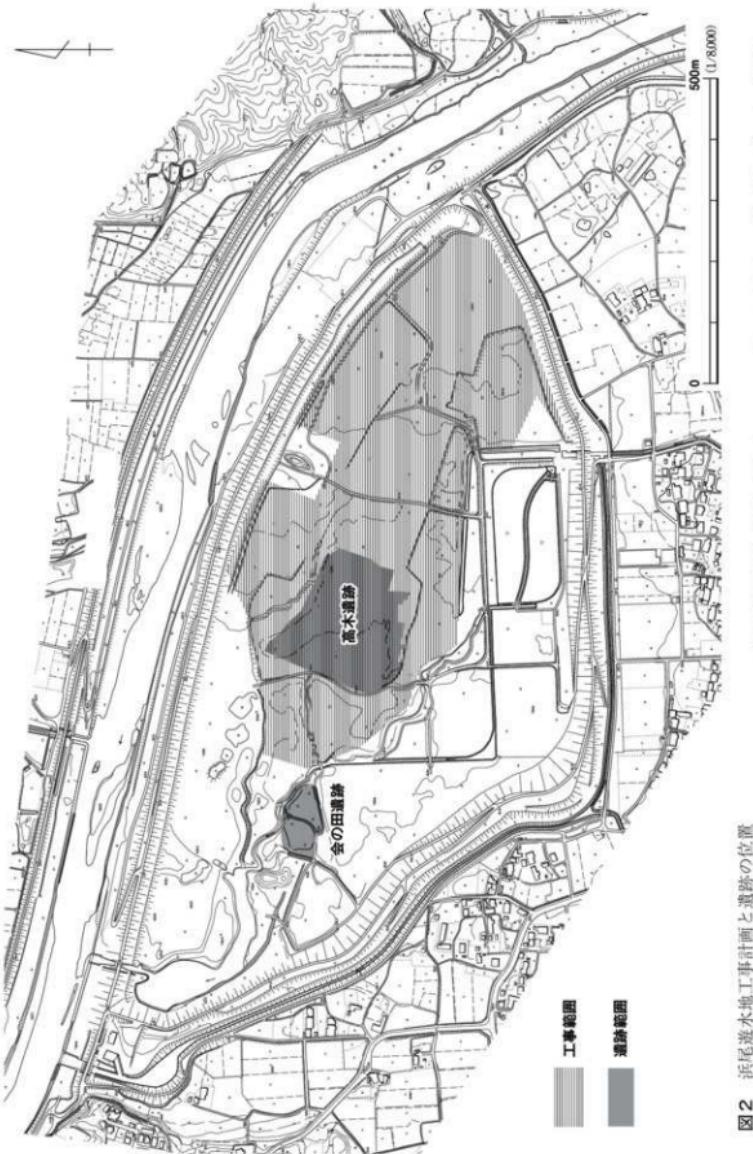


図2 浜尾進水地工事計画と遺跡の位置

で達していることが判明した。遺構検出作業において、下層から古墳時代前期の集落跡を、上層では平安時代の集落跡を検出した。このことにより、本遺跡には複数面の文化層が存在し、その範囲の把握が必要となった。7月上旬には重機による表土剥ぎが終了し、測量杭の打設が実施された。

8月には須賀川市立博物館主催による史跡めぐり、福島県文化財センター白河館が担当する教職員等発掘調査体験研修が、本遺跡を会場にして実施された。

9月には複数の文化層が及ぶ範囲の調査方針について、福島河川国道事務所・福島県教育庁文化財課・(公財)福島県文化振興財團とで協議を行った。この頃には、遺構は調査区北西部に古墳時代後期の大型住居跡が、調査区中央部には烟跡、調査区南西部には中世の掘立柱建物跡や方形区画遺構などが検出された。特に調査区北西部では遺構の重複が著しいことが判明した。

11月21日には、現地説明会を開催し130名の見学者が参加した。12月にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。また、公益財団法人大阪市博物館協会の小倉徹也氏を招聘して、地質学的な見地から遺跡の微地形等について現地指導を受けた。12月18日で年内の調査を一旦終了した。

年があけた平成28年1月12日から調査を再開し、調査区北西部の住居跡群と調査区南西部の掘立柱建物跡等の調査を行った。しかし、1月下旬には降雪により、調査区・駐車場とともに雪で覆われてしまった。そのため、重機や人力での除雪作業を行いながらの調査を余儀なくされた。

2月には数度にわたる協議の結果、本遺跡の要保存面積が $26,000\text{m}^2 + 10,000\text{m}^2 = 36,000\text{m}^2$ となり、新たに追加した東側部分と複数の文化層が及ぶ範囲について、重機による表土剥ぎと土砂掘削・運搬を実施した。作業員を雇用しての調査は、2月10日に終了した。2月上旬には福島河川国道事務所で住居跡の型取りを実施し、2月中旬には遺構記録の作成と器材撤収、調査連絡所・仮設トイレの撤去等の現場撤収作業を行った。平成27年度の作業がすべて終了したのは、2月26日である。

調査終了後は、出土遺物、写真、図面等の基礎整理を行った。

(吉野)

平成28年度

平成28年度は職員を2名配置し、4月18日から翌1月31日まで調査を行った。本年度の調査面積は $5,400\text{m}^2$ で、内訳は、古墳時代後期～奈良・平安時代及び中世の面が $3,400\text{m}^2$ 、その下層の古墳時代前期の面が $2,000\text{m}^2$ である。

表土剥ぎは昨年度に終えており、4月18日の作業員雇用とともに遺構検出作業に取りかかった。調査はまず上層の精査から始め、奈良・平安時代の集落跡、烟跡の他、中世の掘立柱建物跡群が確認された。これらの調査を7月上旬までに終え、同中旬から重機を用いて上層を掘削し下層の古墳時代前期の遺構確認面の検出を始めた。この作業については、古墳時代前期の遺構確認面を覆う洪水層が当初予想していたよりも厚く堆積しており、8月上旬までの期間を費やした。

これと併行して下層の古墳時代前期の遺構の精査を進めたところ、古墳時代前期の住居跡が狭い範囲に何軒も重複していることが判明した。最終的には調査区北部の一角に約30軒の竪穴住居跡が密集していた。この部分の調査に多くの時間を費やすこととなった。重機で掘削を行った下層部

分はこの住居跡群の東側に位置している。掘削の結果、住居跡群の標高より1m以上も低く、その部分に古墳時代前期の烟跡、土器集中地点、土器埋設遺構などが検出され、遺物包含層が形成されていることが判明した。

この間、7月25日に当財團の自主事業の小学生を対象とした体験発掘とテレビ局の取材（参加者約40名）、8月3～5日に福島県文化財センター白河館主催の教職員を対象とした発掘技術者講習会（参加者6名）が開催された。10月19日には仙台市地底の森ミュージアムのボランティア団体約30名が見学に訪れた。11月23日には現地説明会を開催し、48名が来場した。

本年度の調査の終盤は、調査区の南部に精査を移行し、やはり古墳時代前期の住居跡や土坑が多数検出された。今年度に検出された住居跡は85軒を数え、昨年度からの累計は161軒となった。多数の遺構が検出されたことを鑑み、調査期間を1月末日まで延長した。

1月26日にラジコンヘリコプターによる空撮を行い、同31日までに調査連絡所、仮設トイレ、発掘器材の撤収を終え、平成28年度の調査を終了した。
(青山)

平成29年度

平成29年度は3名の調査員を配置し、4月から12月まで調査を実施した。本年度の調査指示面積は6,600m²で、古墳時代前期の面が主体である。

作業員の雇用開始は4月18日で、ただちに遺構検出作業に取りかかった。まもなく住居跡や烟跡など多数の遺構が重複して検出され始めた。これまでと同様、検出面の土層が褐色に近い砂質土であり、遺構の検出は難航した。

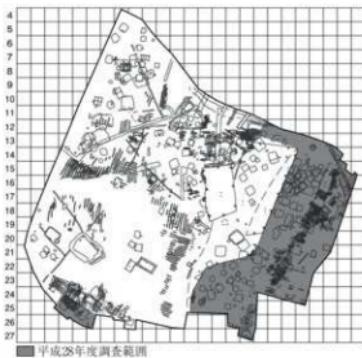
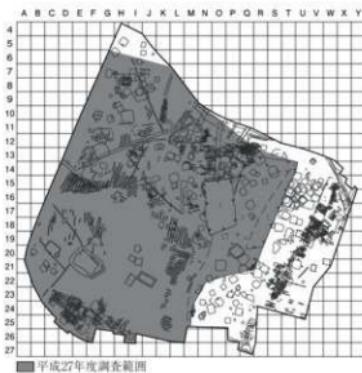


図3 高木遺跡発掘調査の推移

検出作業と遺構の掘り込みの進捗に伴い、検出された遺構の一部分が調査区外に延びることが判明したため、文化財課との協議をへて調査区の部分拡張を随時行った。拡張した部分では、あらためて上層からの調査となり、古墳時代後期の住居跡が新たに検出された。

検出された遺構の多くは古墳時代前期のもので、本年度の調査範囲の東部に位置する。遺構はおもに住居跡と畑跡からなり、過年度に調査した古墳時代前期の住居跡群の東西に広がっていた。

7月になると、古墳時代前期の遺構群の調査を進めていく過程で弥生土器の小片が少量ながら出土した。精査を始めたところ、下層から弥生時代終末期の住居跡が検出され始めた。弥生時代終末期の遺構群は、古墳時代前期の遺構検出面であるIV層を掘りこんでいるものの、一部は古墳時代前期の検出面では確認できず、IV層よりも下層で検出された。

これら古墳時代前期と弥生時代終末期の遺構は、今年度調査区の北東部に位置し、今年度においては、もっとも遺構が密集した地区となった。

今年度調査範囲の西側でも弥生時代終末期の遺構群が確認された。遺構群は複数の住居跡が重複していた。弥生時代終末期の集落跡の調査事例は少なく、遺跡の重要性があらためて認識された。

夏休み期間中には、小学生の親子を対象とした当財團の自主事業による遺跡見学バスツアーが行われ、11名が来訪した。9月上旬には、遺跡の重要性を鑑み、現地説明会を実施することが連絡調整会議で協議された。10月3日には、昨年度までに調査が終了した調査区南半部分17,000m²の引き渡しを行った。

10月23日に本州の南岸に上陸した超大型の台風21号は、当遺跡周辺にも大雨をもたらした。阿武隈川も急激に増水して一時は氾濫危険水位にまで達したものの、堤防の越流部をこえて遊水地内に川の水が流入してくることは幸いにしてなかった。ただし、調査区内は過去3年間で最悪の冠水被害を被った。現地説明会を目前にひかえ、復旧作業を急ピッチで行ったものの、排水作業は翌週までかかった。

台風被害の復旧に日数を費やしたものの、11月3日には文化財課主催の現地説明会が無事に開催され、見学者は約70名を数えた。遺跡全体の空中撮影は、翌週の11月8日に実施した。

その後も新たな遺構の検出は続き、さらに数軒の住居跡が確認されたが、12月8日には作業員を雇用してのすべての調査が終了した。翌週には、調査連絡所、仮設トイレ、発掘器材の撤収を完了した。現場の引き渡しは翌年の平成30年1月29日に行い、3年間にわたった当遺跡の発掘調査をすべて終了した。

(青山)

平成30年度

平成30年度は2名の調査員を配置し、報告書の作成を行った。前年度までに発掘調査と併行して基礎整理と報告書作成を進めており、引き続き、図版作成、遺物の写真撮影、原稿執筆を行い、10月に編集作業を終え、同月中の入札を経て印刷会社へ入稿した。以後、校正と収蔵に向けての整理・梱包を併行して行った。

(青山)

第1章 遺跡の環境と調査方法

第1節 地理的環境

福島県西白河郡西郷村の甲子旭岳に源を発する阿武隈川は、東の阿武隈高地、西の奥羽山脈を開析するあまたの河川を集合しながら、福島県の郡山盆地、福島盆地、宮城県南部の伊具盆地を北流し、仙台平野南部で太平洋に注ぐ、流路延長239kmの一級河川である。

その流域のうち、阿武隈高地と奥羽山脈に東西を画された地域は中通り地方と呼ばれ、日本海側の会津地方、太平洋岸の浜通り地方とともに、福島県を構成する一つの地域的なまとまりをなしている。「中通り」とは、阿武隈川沿いの内陸平野が、仙台平野と関東平野を結ぶ回廊の役割をはたしていることを言い表した呼称でもある。

高木遺跡は、この中通り地方中部のやや南寄り、須賀川市浜尾字高木の阿武隈川左岸に位置する。「地形分類図」（中村他1984）によれば、遺跡周辺の地形は、奥羽山脈から派生しその東麓をなす上位砂礫段丘と、阿武隈高地から標高を減じてその西麓をなす上位砂礫段丘に挟まれた最大幅

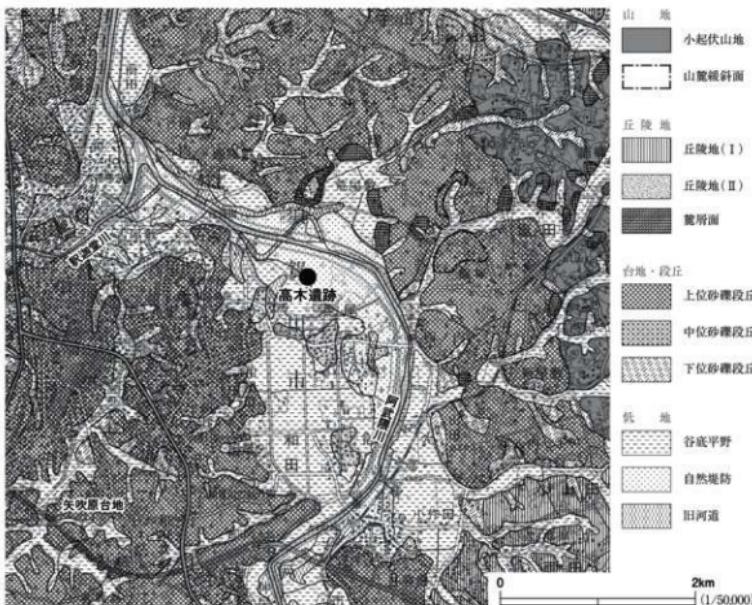


図4 高木遺跡周辺の地形分類図

2kmほどの沖積低地を、阿武隈川が蛇行しつつ北流していると概略できる。本遺跡は、この沖積低地においてひときわ大きく蛇行した阿武隈川によって三方を囲まれた袋状の地形に所在する。標高236～239mの氾濫原で、圃場整備前の空撮写真には阿武隈川の流路跡が多くみえる(写真図版1)。

高木遺跡の西方に広がる上述の上位砂礫段丘は標高280m前後の比較的平坦な台地で、矢吹原台地と通称される。矢吹原台地は、遺跡所在地点の下流約2kmで合流する阿武隈川と釈迦堂川によって東西と北を限られ、須賀川市街は両河川の合流地点を臨む台地の北端部に在る。阿武隈川は釈迦堂川を合流してさらに約3km流れ下ると郡山盆地に流れこむ。

矢吹原台地上では国道4号線(奥州街道)と国道118号線(石川街道、茨城街道)が交差する。須賀川はこの二つの街道の結節点にできた宿場町として発展した。あらためて述べるまでもなく、国道4号線は東京と青森を結ぶ大動脈であり、国道118号線は茨城県水戸市と本県の会津若松市を結ぶ主要道である。JR水郡線は阿武隈川のすぐ東側を通り、本県の郡山市と茨城県水戸市を結ぶ。

本遺跡をとり巻く景観は、西方に矢吹原台地を近景に奥羽山脈を遠望し、東方には標高677mの独立峰、宇津峰山をはじめとする阿武隈高地を見渡す。南北は阿武隈川の沖積地によって視界が開け、晴れた日には那須茶臼岳がはるか南東方に望見される。

遺跡のすぐ東側、阿武隈川畔には、同河川の浸食によって阿武隈高地の西端から分離した小残丘が孤立する。南北約50m、東西約30m、高さ約8mで、遊水地の整備以前は頂に愛宕神社が鎮座し、現在も大木が茂る。当地に付された「高木」という地名は、この小丘に由来するとと思われる。

遺跡西方の矢吹原台地上は須賀川市街によって旧地形が大きく損なわれている一方、遺跡周辺は遊水地の造成の他は、地形が比較的よく保存されている。発掘調査前はりんごや桃の果樹園であり、明治期の地図からは桑畠であったことを知ることができる。遺跡が立地する自然堤防と矢吹原台地の間の後背低地は阿武隈川の流路跡で、現在は水田として利用されている。

「土壤図」(中村他1984)によれば、本遺跡がのる自然堤防には「褐色低地土壤」からなる起伏の少ない微高地である。発掘調査で掘削した範囲に観察できたのはいずれも洪水堆積層で、部分的に



写真 宇津峰山と小丘(現地説明会時に撮影)

砂礫層をはさむ砂質土から粘質土までの土壤が堆積する。

遺跡周辺の気象は、冬は西からの季節風が強いため夏は比較的過ごしやすい。キツネ、タヌキが時折闊歩し、トビ、チョウゲンボウ、キジ、ヒバリ、ヒワなどが飛ぶ。遺跡周辺の本来の植生は現在すでに失われているものと思われる。
(青山)

引用文献

中村嘉男 1984 「土地分類基本調査 須賀川」

第2節 歴史的環境

高木遺跡の周辺、須賀川市域におけるもっとも古い人類活動の痕跡は、後期旧石器時代にさかのぼる。高木遺跡の5km南、阿武隈川左岸に位置する乙字ヶ滝遺跡である。約2万9千～2万6千年前に噴出した始良丹沢火山灰の下層から局部磨製石斧、ナイフ形石器などが出土している。

縄文時代は狩猟・採集の時代で、遺跡は山間に多い。須賀川市域では阿武隈高地の西麓と奥羽山脈東麓に遺跡が分布するが、矢吹原台地にはほとんどみられない。須賀川市内の縄文時代遺跡でもっとも古いのは早期の撲糸文系土器を出土した寺山A遺跡で、前期以降、遺跡数は増加する。

弥生時代にも同様の遺跡立地が継続する他、矢吹原台地の東麓にも遺跡が確認されている。須賀川市域では、竪穴状遺構や掘立柱建物跡、遺物包含層から大量の土器と鉄製品1点が出土した松ヶ作A遺跡、抜歯人骨を藏する土器棺再葬墓である牡丹平遺跡が、いずれも阿武隈高地西麓に位置する前期の遺跡である。中期は、管玉を出土した大久保A遺跡などの墓域のみである。後期には矢吹原台地の東縁の弥六内遺跡やイカヅチ古墳群下層で竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代前期には東北南部全域で大きな地域変動がおこる。弥生時代後期の文化が途絶え、南関東や北陸との親縁性の強い集落遺跡が出現し、古墳の築造を開始する。当地域では矢吹原台地と阿武隈川沖積地に遺跡が増加する。以後、古墳時代を通じて遺跡は増加の一途をたどる。

高木遺跡周辺では、矢吹原台地東端部に位置するイカヅチ古墳群で鉄劍・ガラス小玉を副葬し北陸系土器を出土した前期の前方後円墳と方形周溝墓、阿武隈川右岸に位置する仲ノ平古墳群で2基の小規模な前方後方墳が、南4.3kmに位置する团子山古墳が径約50mの円墳として知られる。同じ阿武隈川の自然堤防上には前期と後・終末期の集落跡が確認されたハツ木遺跡が知られる。

同中期には首長居館である上ノ代遺跡、鉄劍などを副葬した仏坊古墳群などの遺跡が知られる。本遺跡の西方約1kmには、該期の集落跡である柳原遺跡が位置する。

同後期には当地域に大型前方後円墳の築造がもっとも大規模に行われる。塚畠古墳、大仏15号墳、市野閑稲荷神社古墳が首長墓として築造され、それまで古墳時代遺跡が分布していなかった糸迦堂川流域にも集落分布が拡大する。上述のハツ木遺跡は奈良時代まで大規模な集落が継続する。

同終末期には切り石積みの横穴式石室から金銅装の頭椎大刀などを出土した蝦夷穴古墳が南1.3kmに築かれ、阿武隈川の対岸には單鳳環頭大刀を出土した上川原古墳が位置する。大仏横穴墓群などの横穴墓が出現して終末期を通じて数多く造営され、追葬は奈良時代にまで継続する。

奈良時代には、中央集権的な律令体制のもと陸奥国石背郡が成立する。現在の須賀川市、鏡石町、天栄村などを郡域とし、「和名抄」には、磐瀬、椎倉、広門、山田、余戸、白方、駅家の各郷が記載される。郡衙跡は阿武隈川と糸迦堂川の合流地点近くの栄町遺跡、その付属寺院は上人塙庵寺である。付近には南北を継続する東山道の存在が予想されるが、未確認である。

平安時代に集落遺跡は急増し、矢吹原台地の縁辺から内部への進出、阿武隈高地の山間部への進

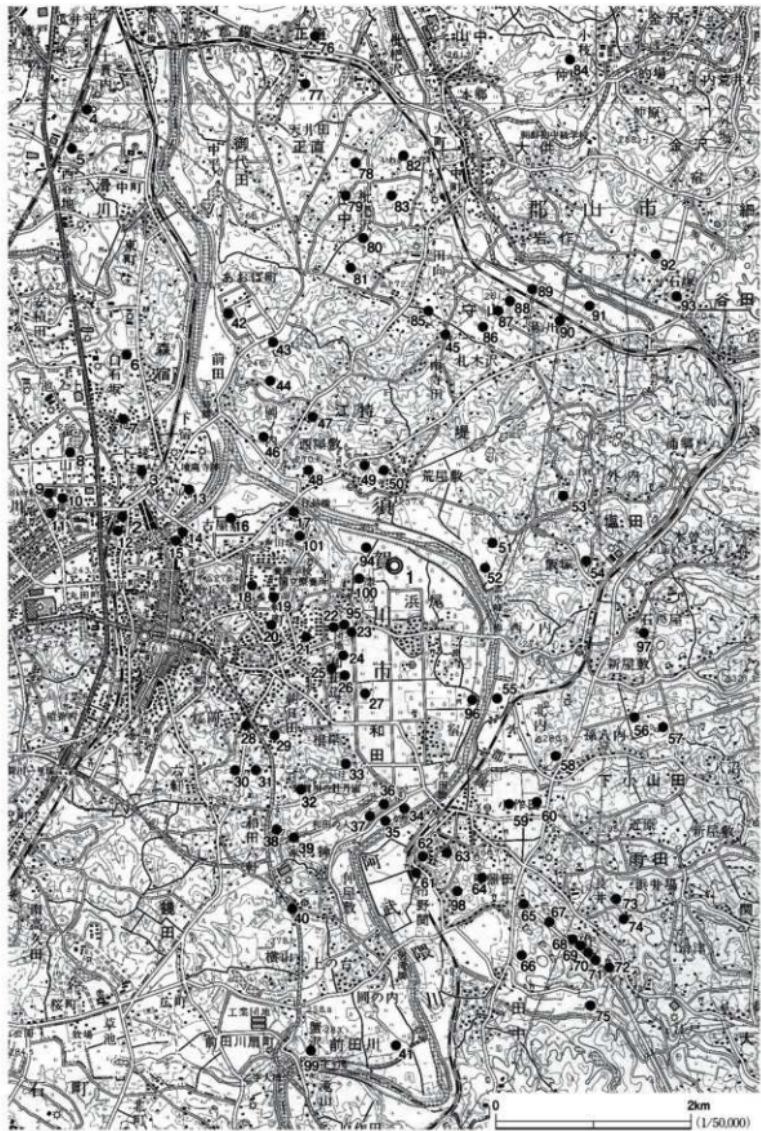


図5 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	高木道路	奈良・平安	集落跡	52	上川原古墳	古墳	古墳
2	柴町道路	奈良・平安	官衙跡	53	大塙古墳	古墳	古墳
3	上人塚廃寺跡	奈良・平安	寺院跡	54	神開田古墳	古墳	古墳
4	治郷池横穴墓群	古墳	古墳	55	早稲田古墳群	古墳	古墳
5	四丁古墳群	古墳	古墳	56	沼平道路	奈良・平安	集落跡
6	タキジロ古墳	古墳	古墳	57	沼平東遺跡	奈良・平安	集落跡
7	海道西古墳群	古墳	古墳	58	下小山田古墳群	古墳	古墳
8	山本道路	奈良・平安	散布地	59	蛭館跡	中世	船跡
9	米山寺跡	平安	經塚	60	蛭部古道路	古墳～平安	集落跡
10	米山寺跡	平安	寺院跡	61	市野開船荷神社古墳	古墳	古墳
11	かんじんの道路	平安	散布地	62	龍山横穴墓群	古墳	古墳
12	台機六墓群	古墳	古墳	63	仏寺古墳群	古墳	古墳
13	うやま道路	縄文・古墳～中世	集落跡	64	上ノ代古道路	古墳～平安	集落跡
14	石塚古墳	古墳	古墳	65	松原道路	奈良・平安	集落跡
15	古市東道路	縄文・奈良・平安	散布地	66	墨子山古墳	古墳	古墳
16	仲の町道路	奈良・平安	散布地	67	川原向道路	奈良・平安	集落跡
17	古市横穴墓群	古墳	古墳	68	松ヶ作A道路	弥生・奈良・平安	集落跡
18	芦田塚古墳群	古墳	古墳	69	松ヶ作B道路	縄文・弥生・奈良・平安	集落跡
19	芦田塚道路	奈良・平安	散布地	70	松ヶ作C道路	縄文・平安	集落跡
20	緑町道路	奈良・平安	散布地	71	松ヶ作D道路	縄文・弥生・奈良・平安	集落跡
21	イカヅチ坂南路	奈良・平安	窪路	72	孤山道跡	縄文・奈良・平安	集落跡
22	イカヅチ古墳群	古墳	古墳	73	十三仏道跡	奈良・平安	集落跡
23	浜尾横穴墓群	古墳	古墳	74	高畠道路	奈良・平安	集落跡
24	丸塚古墳	古墳	古墳	75	兎田東道路	奈良・平安	散布地
25	和田横穴墓群	古墳	古墳	76	正直A道路	古墳～平安	集落跡
26	平内塚古墳	古墳	古墳	77	正直B道路	古墳～平安	集落跡
27	鰐夷穴古墳	古墳	古墳	78	田向A道路	奈良・平安	集落跡
28	純瀬道路	奈良・平安	散布地	79	田向B道路	奈良・平安	集落跡
29	人參塚道路	奈良・平安	散布地	80	田向E道路	奈良・平安	集落跡
30	菱池跡	奈良・平安	窪路	81	田向F道路	奈良・平安	集落跡
31	金池東路	平安	窪路	82	ガガヤ田A道路	弥生～平安	集落跡
32	牡丹園道路	奈良～中世	散布地	83	弥明道路	旧石器・奈良・平安	集落跡
33	石古古墳群	古墳	古墳	84	東山田道路	縄文・古墳～平安	集落跡
34	大仏横穴墓群B	古墳	古墳	85	駒形B道路	古墳～平安	集落跡
35	環状古墳	古墳	古墳	86	梅木平道路	縄文・平安	集落跡
36	大仏古墳群	古墳	古墳	87	東作田C道路	奈良・平安	集落跡
37	大仏横穴墓群A	古墳	古墳	88	東作田D道路	奈良・平安	集落跡
38	ウメノ坂東路	平安	窪路	89	唐松A道路	奈良・平安	集落跡
39	香屋東路	平安	窪路	90	地蔵田A道路	奈良・平安	集落跡
40	かつ坂古墳	古墳	古墳	91	地蔵田B道路	縄文・奈良・平安	集落跡
41	大坂古墳	古墳	古墳	92	大供四十塙A道路	奈良・平安	散布地
42	仲ノ平古墳群	古墳	古墳	93	石塚道路	奈良・平安	集落跡
43	唯の屋敷古墳	古墳	古墳	94	会の田道路	古墳	集落跡
44	岡ノ内古墳群	古墳	古墳	95	弥六内道路	弥生	集落跡
45	椎原塚道路	古墳～平安	集落跡	96	八ツ木道路	古墳～奈良	集落跡
46	中江持古墳	古墳	古墳	97	大久保A道路	弥生	散布地
47	長者屋敷古墳群	古墳	古墳	98	小枝道路	縄文・弥生	散布地
48	江跡橋荷神社古墳	古墳	古墳	99	乙乎ノ瀬道路	旧石器	散布地
49	神明前板碑群	古墳	古墳	100	柳原道路	古墳	集落跡
50	神明前横穴墓群	古墳	古墳	101	古館古墳群	古墳	古墳
51	洞川岸古墳群	古墳	古墳				

出がみられる。律令制は弛緩し、在地富豪層の成長を示す居宅跡が出現するが、須賀川市周辺では未確認である。古代末には承安元年(1171)の陶製外筒が出土した米山寺経塚群が知られる。

中世には二階堂氏が当地を領し、稻村城、宇津峰城など多くの城館が築かれる。戦国期には諸氏が当地を巡って抗争し、天正7年(1590)、須賀川城が落城、二階堂氏は滅亡し伊達領となつた。奥州仕置に際して豊臣秀吉は長沼城に宿營し、勢至堂峠を越えて会津入りする。奥州仕置の結果、当地は蒲生氏郷領となり、その後、幾多の変動を経た。

近世には宿場町として発展し、現在の須賀川市街の原形ができる。明治維新を経て、須賀川村に岩瀬郡役所が置かれ、明治22年に須賀川町、昭和24年に須賀川市となり、平成の大合併を経て現在にいたる。

(青山)

第3節 調査方法

本遺跡は調査面積が大きいことから、調査区全体をI～V区の5つに区割りした(図6)。この区割りはあくまで調査をするまでの便宜的なもので、調査区を東西南北に四分して、その北東部から時計回りにI～IV区と呼称した。平成27年度に追加した東部はV区とした。

調査にあたっては遺跡全体を覆う10×10mの方眼(グリッド)を設定し、東西方向にはアルファベットの大文字を用いて西から東へA・B・C…、南北方向にはアラビア数字を用いて北から南へ1・2・3…とそれぞれ呼称した。個々のグリッドの呼称は両者を組み合わせてA 15、K 25などとし、調査区内における遺構や遺物の出土位置などを示すために使用した。

グリッドの方位と座標は、世界測地系に基づく国土座標第IX系に一致させた。グリッド境の交点には杭を打設し、グリッド杭と称した。グリッド杭は、測量会社に委託して調査区内の数箇所に標高杭を兼ねて設置し、そこに光波測距儀を据えて調査区内全体に打設した。グリッド杭は、地形測量、遺構の実測を行う際の基点とし、必要に応じて標高杭ともした。

表土と無遺物層の除去は機械力を用いて行い、遺構の検出作業、遺構内の掘り込みと遺物包含層の掘削は人力で行った。遺構の掘り込みに際しては、土層観察用の畦を残した。

遺構は、土層断面と平面形を、写真撮影、実測、註記によって記録した。写真は、35mmのモノクロとカラーリバーサルのフィルム、一眼レフデジタルカメラによって撮影した。遺跡の全景写真は、ラジコンヘリコプターによる上空からの撮影を調査員の立会いのもと委託によって行った。

遺跡に堆積する基本土層については「L」とローマ数字によって、遺構内に堆積する土層については「ℓ」とアラビア数字によって、それぞれ上層からL I・II・III…、ℓ 1・2・3…と呼称し、さらに細分された場合にはアルファベットの小文字、さらに細分された場合には丸数字を用いて、「L II a ①」のように表記した。

遺物の取り上げに際しては、出土した遺構の名称と層位を付し、出土状況に応じて写真撮影と実測によって記録した。遺構に伴わない遺物については、出土したグリッドと層位を記録した。

遺構断面図は、水平に張った水糸から実測し、「新版標準土色帖」によって各層の土色と土質を記録し、含有物などの量、大きさなどの所見を層ごとに註記した。

遺構平面図は、1m方眼の水糸を基準としたり光波測距儀を用いたりして実測した。平面図には遺構内各所の標高をレベルによって計測し記入した。

地形測量は、古墳時代後期～中世の面(L II b)と古墳時代前期の遺構面(L IV)の2面について、レベルと光波測距儀を用いた実測によりそれぞれ25cmセンター図を作成した。

発掘調査で得られた各種記録や出土遺物は、(公財)福島県文化振興財団遺跡調査部において、財団の定める基準に従い整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳類を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館(愛称まほろん)に収蔵・保管される。
(青山)

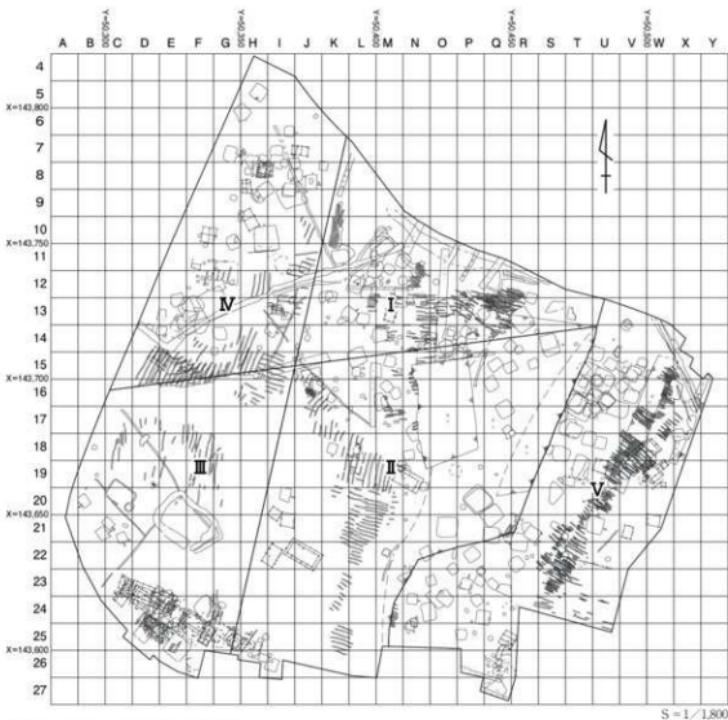


図6 グリッド配置と地区割り

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概観

高木遺跡は阿武隈川の左岸に形成された自然堤防上に位置する(第1章参照)。この自然堤防はおむね東西方向に長く、遺跡の北側と南側は、調査区のすぐ外側で比較的急激に標高を減らして低地となっており、以前は水田や畑として利用されていた。確認調査によってこの部分は遺跡から除外され、発掘調査によっても地形が急激に落ち込むことが確認された。

東西方向に延びる自然堤防にも最大12mほどの緩やかな高低差があり、遺跡が位置する部分は標高がやや高く、幅も広いことが遺跡調査前の地形測量図から読み取れる。高木遺跡は自然堤防のもっとも幅が広く標高の高い部分に立地している。

遺跡が立地する自然堤防の土壌は複数回の洪水によって形成された洪水堆積層である。このうち遺構が確認されたのは大きく2つの層である。遺跡中央部のもっとも標高の高い部分では各層がしだいに薄く収斂して区別がつかず、ほぼ同一の面を検出面としていた。これに対し、遺跡範囲の周縁部の標高を減じる部分においては両者が大きく二つの文化層を形成していた。このような状況から、まず上層の遺構を調査したのち、重機を用いてこれを除去し、下層の調査に取りかかるという手順をふんだ。

上層で検出されたのは、古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世の遺構である。よってこの面については、およそ6~14世紀ころまでの地表面であったと考えられる。この面の南西部には高低差50cmほど浅い谷地形が北西から南東に向かって延びている他はおむね平坦である。標高の高い部分には住居跡や建物跡などの遺構が分布し、浅い谷地形には畝跡が分布する。

古墳時代後期の遺構は北西部と南西部にまとまる。一辺10mほどの大型堅穴住居跡を含む、比較的大きな規模の集落跡が確認された。奈良時代の遺構は主に調査区東南部に分布し、堅穴住居跡と掘立柱建物跡、柱列、畝跡からなる。平安時代は堅穴住居跡と掘立柱建物跡、畝跡、土坑などとなり、調査区内の数箇所に散在している。中世の遺構は、掘立柱建物跡群が3群確認された。いずれも扇をもつ大型の掘立柱建物跡を含み、井戸跡、土坑から構成されている。

下層では弥生時代終末期と古墳時代前期の遺構が検出された。これらは遺跡の中央部においては緩やかな起伏をもちながらも比較的平坦である一方、遺跡の東部において比較的急な斜面をもって標高を減らし緩やかな谷を形成していることが判明した。両者の高低差は1.3mほどである。

弥生時代終末期の遺構は、古墳時代前期の遺構の分布とおむね重複している部分と、その西側の一群がある。古墳時代前期の住居跡の堆積土にも破片の状態の弥生土器が少量ではあるが広範囲に含まれていた。

古墳時代前期の遺構は調査区の東半部に分布する。標高の高い部分には堅穴住居跡、畝跡が、標

高の低い部分には、上下2面の烟跡、土器集中地点、土器埋設遺構、遺物包含層があり、生産域を含む大規模な集落を形成していた。この古墳時代前期の遺構群のうち、東部の標高の一段低い谷地形に位置する遺構は最大1mほどの厚さをもつ洪水堆積層によって埋没していた。

弥生時代終末期の遺構と古墳時代前期の遺構の関係については、前者が後者をやや掘り下げて検出されたことから、やや時間差をもった前後関係としてとらえることができる。
(青山)

第2節 基本土層

基本土層は、色調・土質の特徴からL I～VIIに7区分した。さらに、L IIとL III、L V、L VIIについては、a・bに細分し、L IVは、a～cに3細分した。また、本遺跡は沖積地特有の複雑な堆積状況を示すことから、土層の堆積状況に応じてa～cの区分をさらに①～⑥などに小細分した。

土層の観察と記録は、調査区際や堆積過程の複雑な箇所に応じて、トレンドチや土層畦を設定し、土層図および土層柱状図を作成した。以下、図18・19の土層図や、図20の模式図により説明する。

L Iは、表土層である。炭化物やL II b粒を含む土層である。層厚は、10～30cmである。

L II aは、いわゆる黒ボク土である。北側M～U-10～12グリッドや東側調査区斜面のW～Y-15～25グリッド付近では堆積が厚く、最大で1mほど堆積していた。また、調査区の上部平坦面においては、層が薄く、細分できないためL II aとして扱った。層内には、火山灰起源と考えられる白色粒子を含む。これは土壤分析の結果、榛名山起源とされる二ツ岳バミスと判明した(付章第5節参照)。本層からは、中世陶磁器や平安時代、奈良時代、古墳時代の土師器・須恵器が出士する。調査では、L II aを①～③に細分した。

L II a①は粗粒の暗褐色土である。火山灰起源の白色粒子を多く含む土層である。層厚は20～35cmである。中世の掘立柱建物跡や井戸跡、平安時代の堅穴住居跡堆積土にはこの層が流入する。

L II a②は、暗褐色土の粘質土で、褐色土の土塊状のものを多く含み、やや褐色ぎみに見える。また、窪地や遺構内に入り込んだ土層は、一部粘性の強い褐色に変色している。中世の遺構は、本層上面を掘り込んでいる。また、奈良時代・平安時代の堅穴住居跡の上部には、褐色に変色した本層が堆積している。

L II a③は、粗粒の暗褐色土である。非常に多くの白色粒子と砂粒を含み、削ると表面がシャリシャリとする。中世から平安時代、奈良時代の遺構は、本層上面を掘り込んでいる。また、古墳時代後期の堅穴住居跡には、本層が堆積土上層から中層に入り込むことから、古墳時代後期の遺構の鍵層として扱った。層厚は、10～20cmである。

L II bは、褐色土を主体とした土層である。調査区中央部のI～T-4～17グリッドの平坦面に堆積している。調査区北西部から南東方向にのびる自然堤防状の高まりを形成する基盤層である。このL II bが堆積している部分に古墳時代後期から平安時代にかけて断続的に集落が形成されたものと考えられる。調査では、L II bを①～③に細分した。



図7 遺構配置図（1） 弥生時代終末期～古墳時代前期

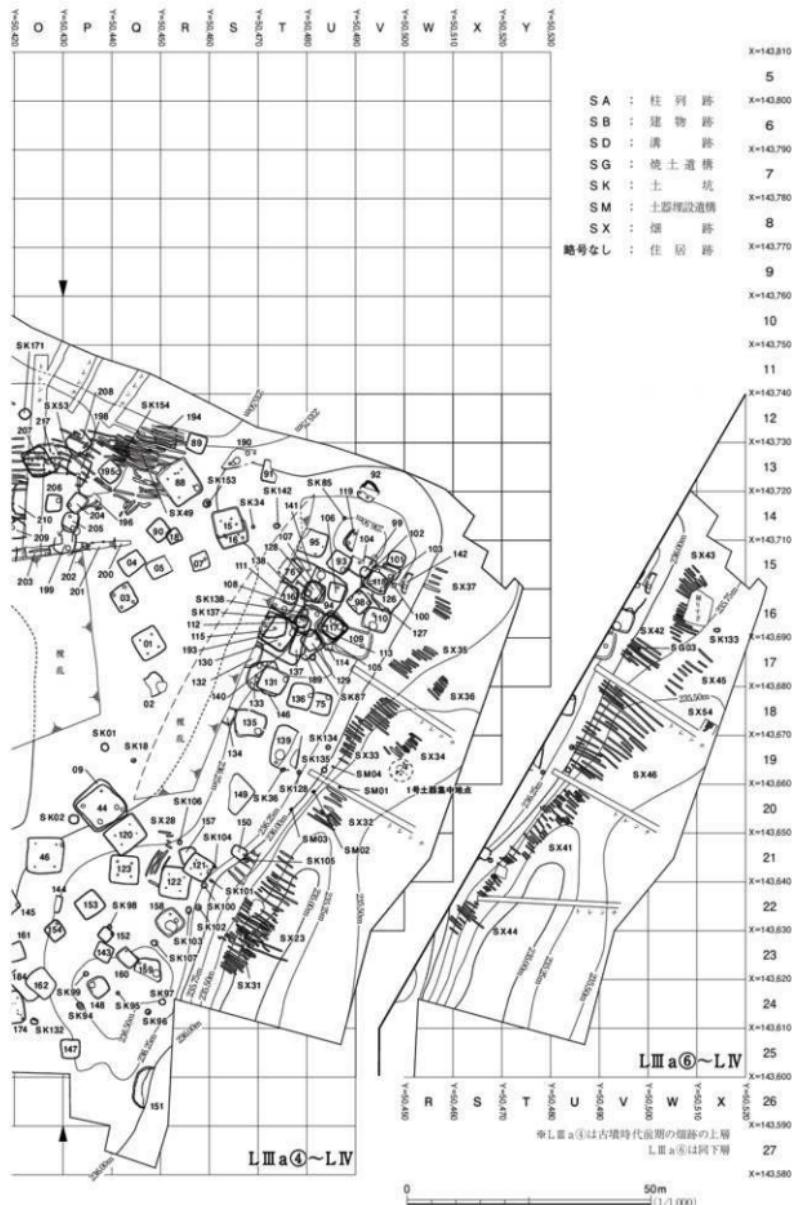
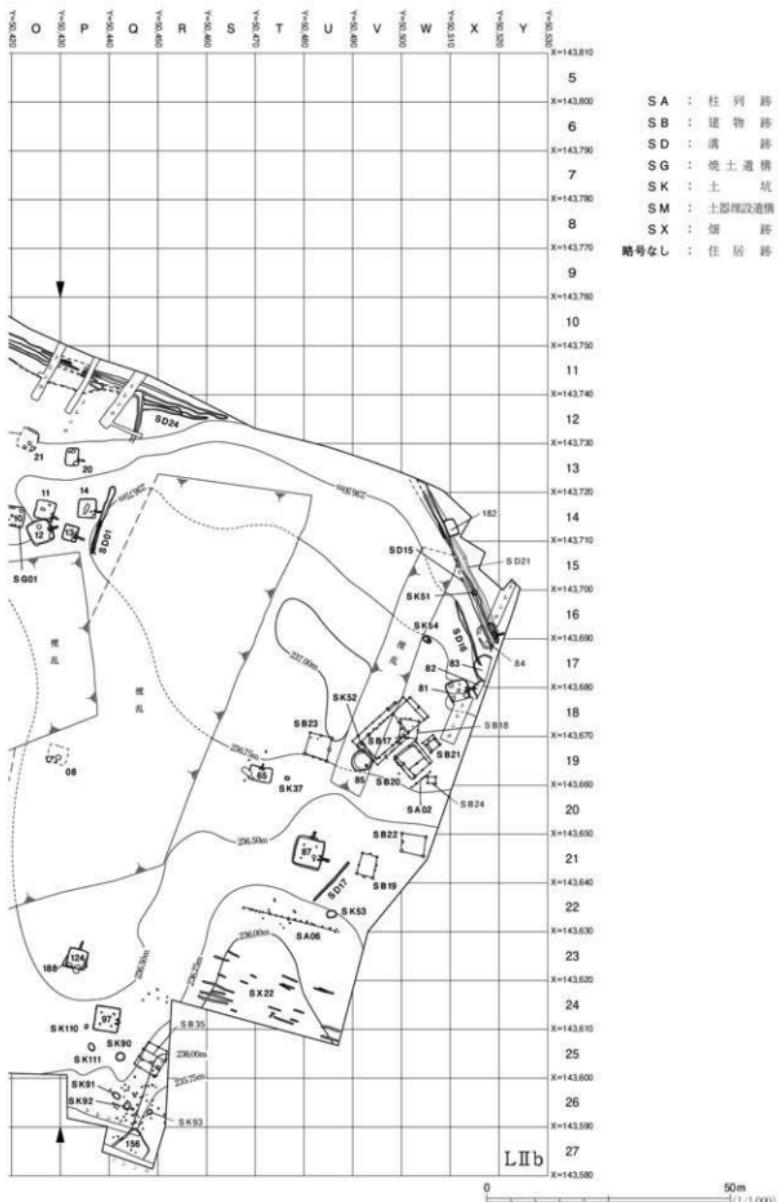




図8 遺構配置図(2) 古墳時代後期～中世



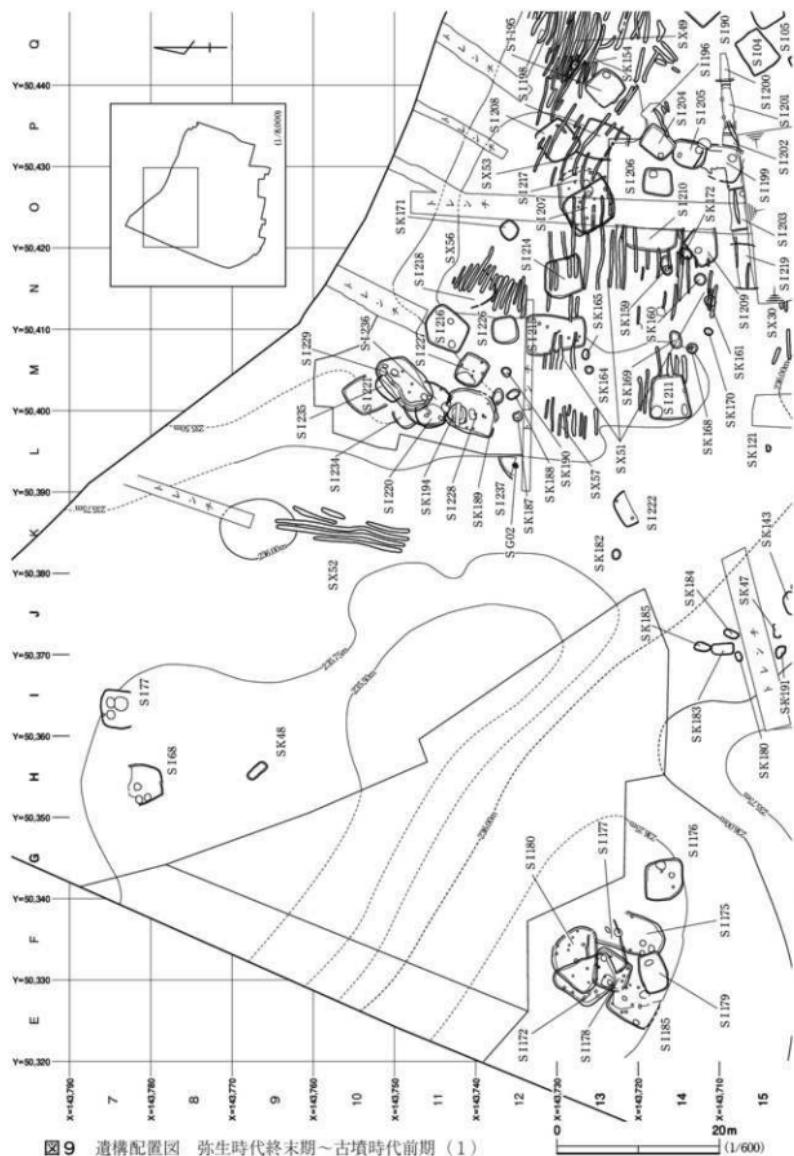


図9 遺構配置図 弥生時代終末期～古墳時代前期（1）

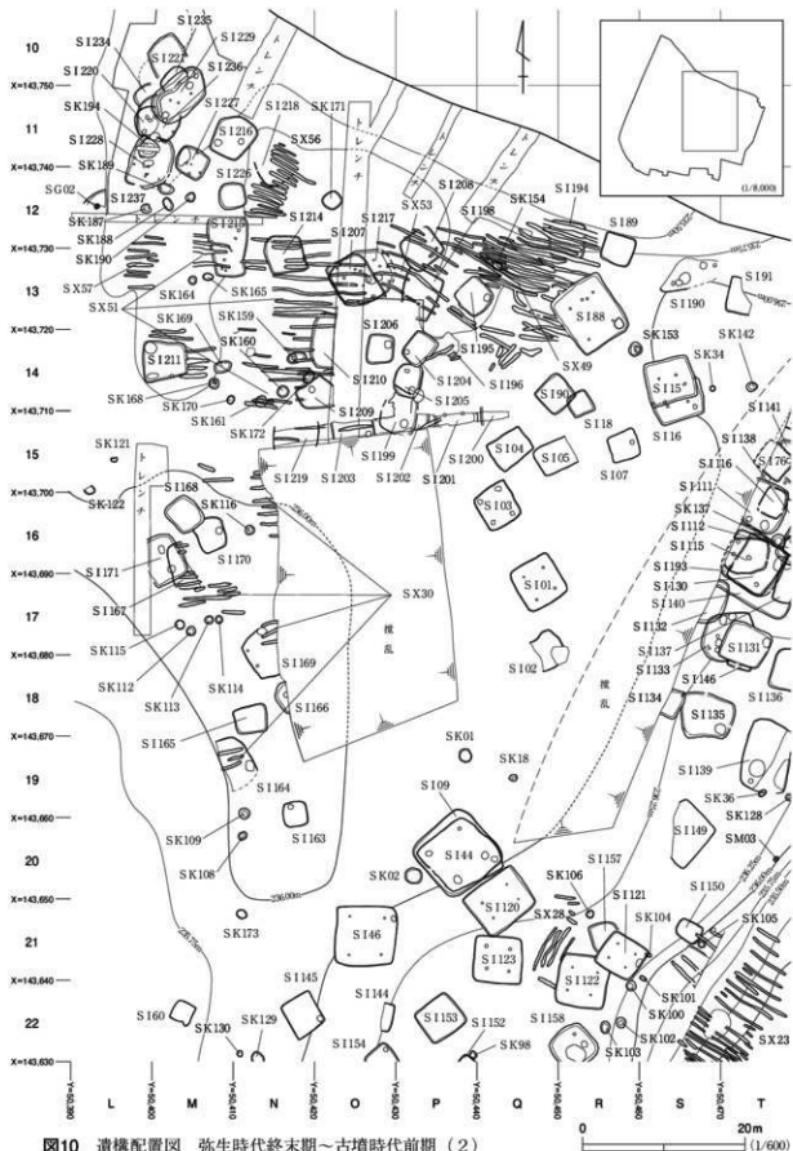


図10 遺構配置図 弥生時代終末期～古墳時代前期（2）

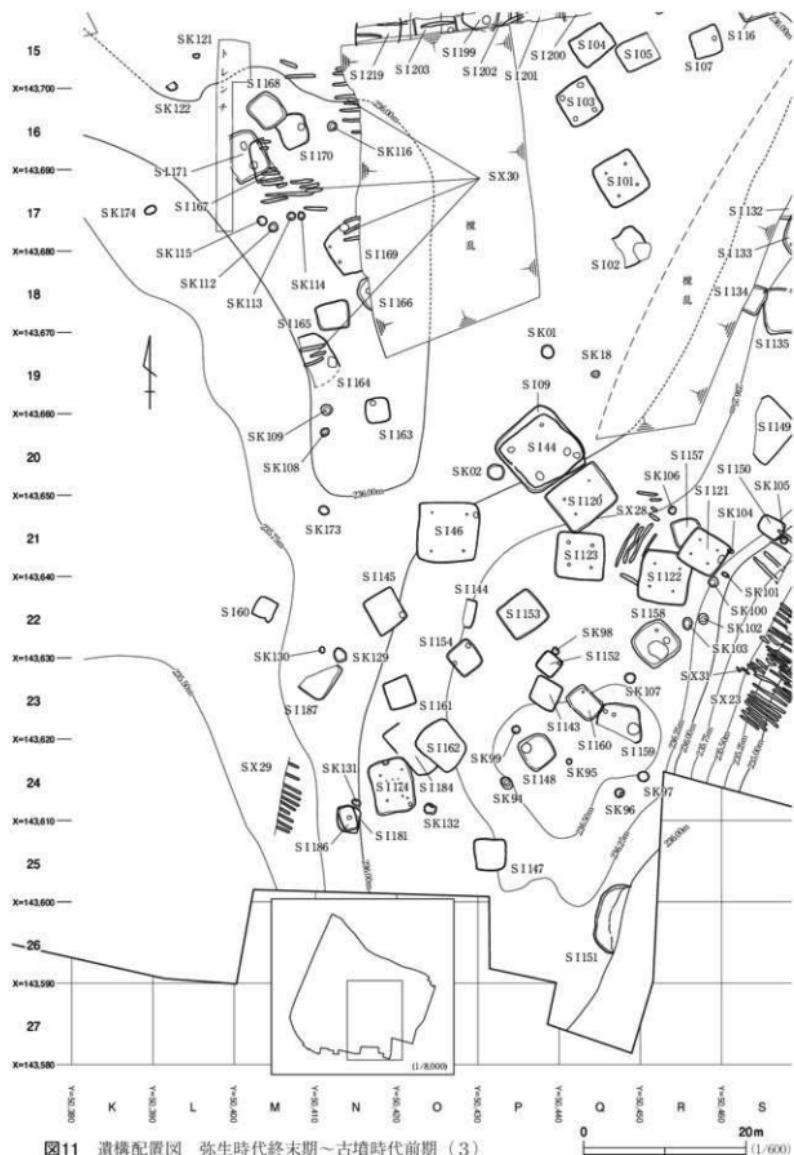


図11 遺構配置図 弥生時代終末期～古墳時代前期（3）

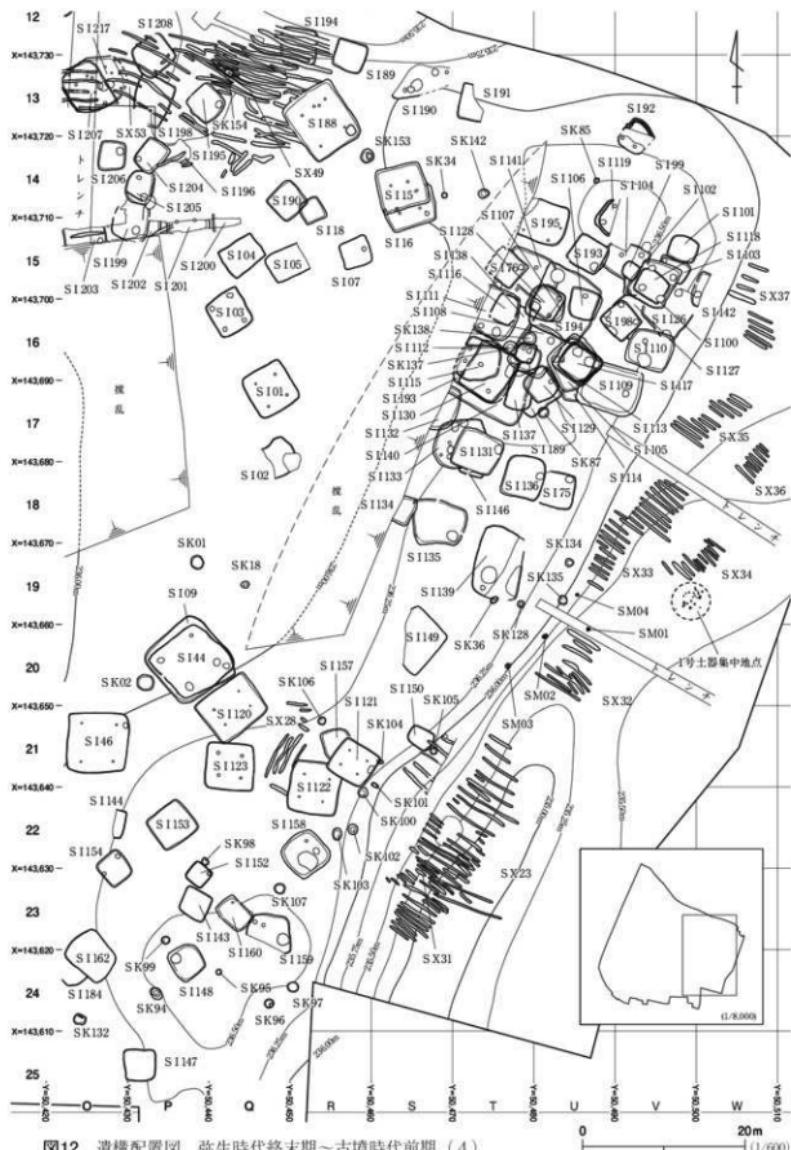


図12 遺構配置図 弥生時代終末期～古墳時代前期（4）

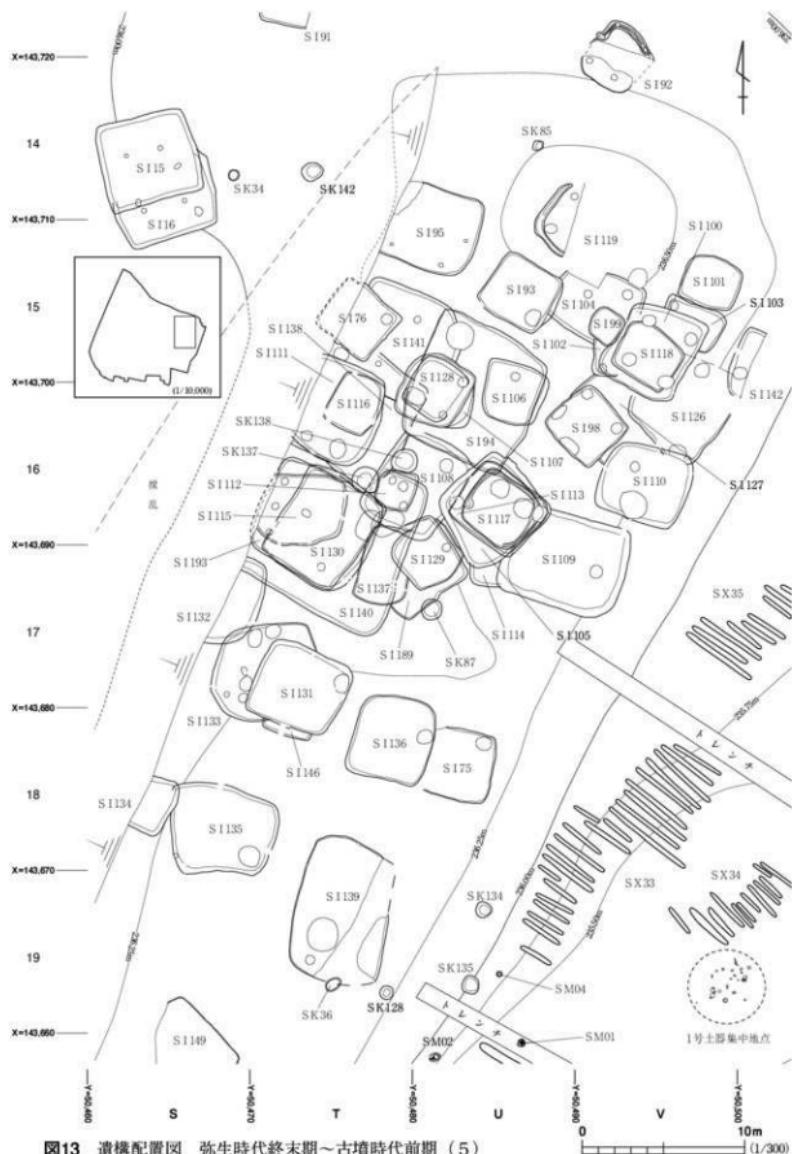


図13 遺構配置図 弥生時代終末期～古墳時代前期（5）

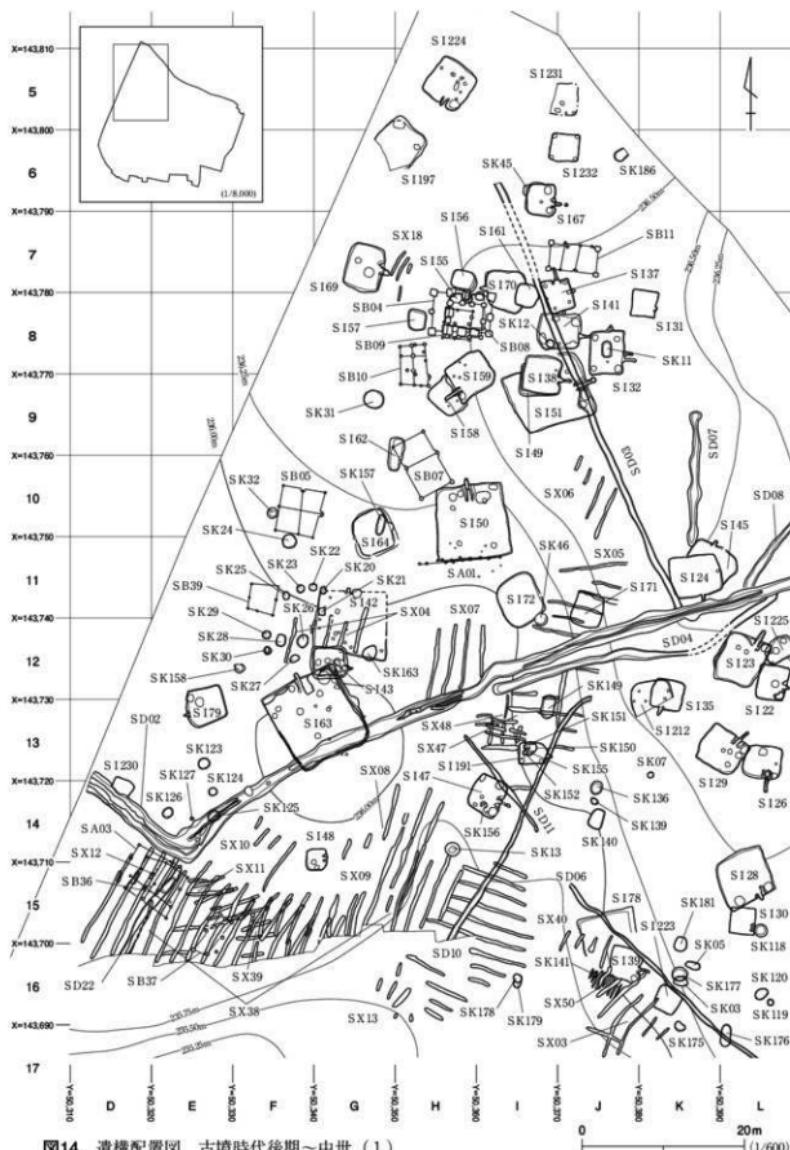


図14 遺構配置図 古墳時代後期～中世（1）

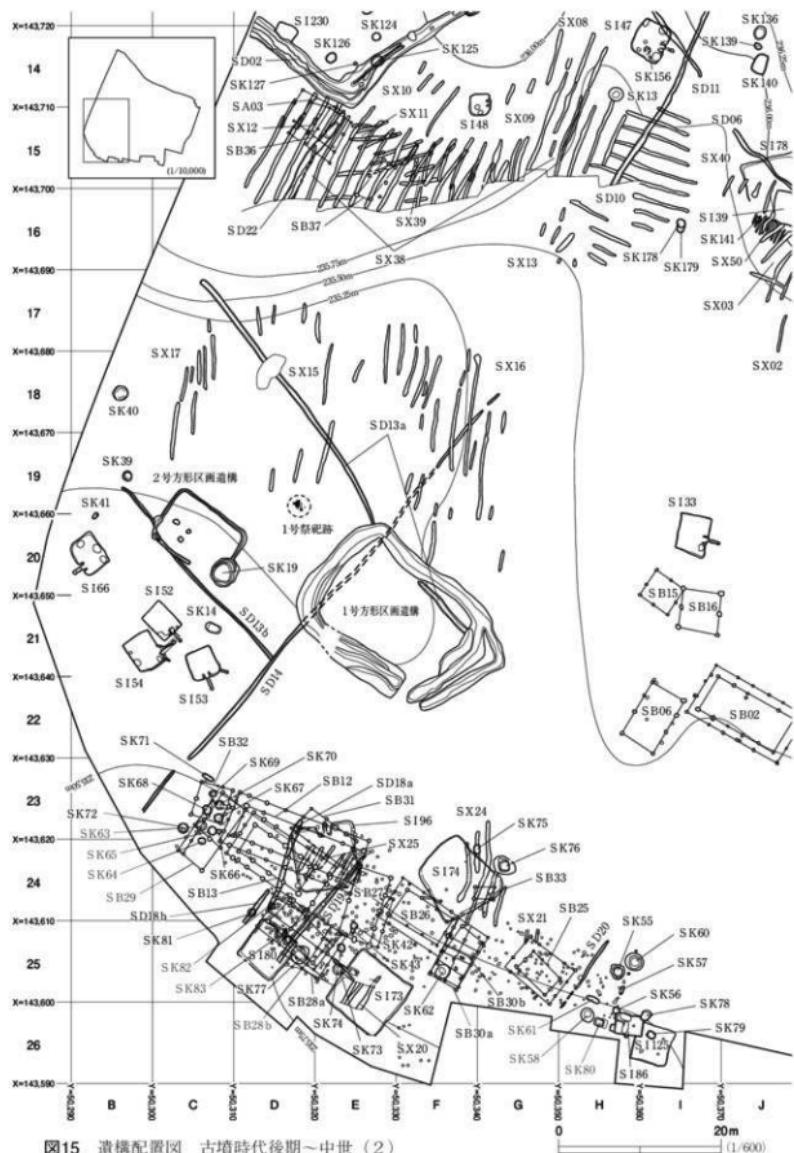


図15 遺構配置図 古墳時代後期～中世（2）

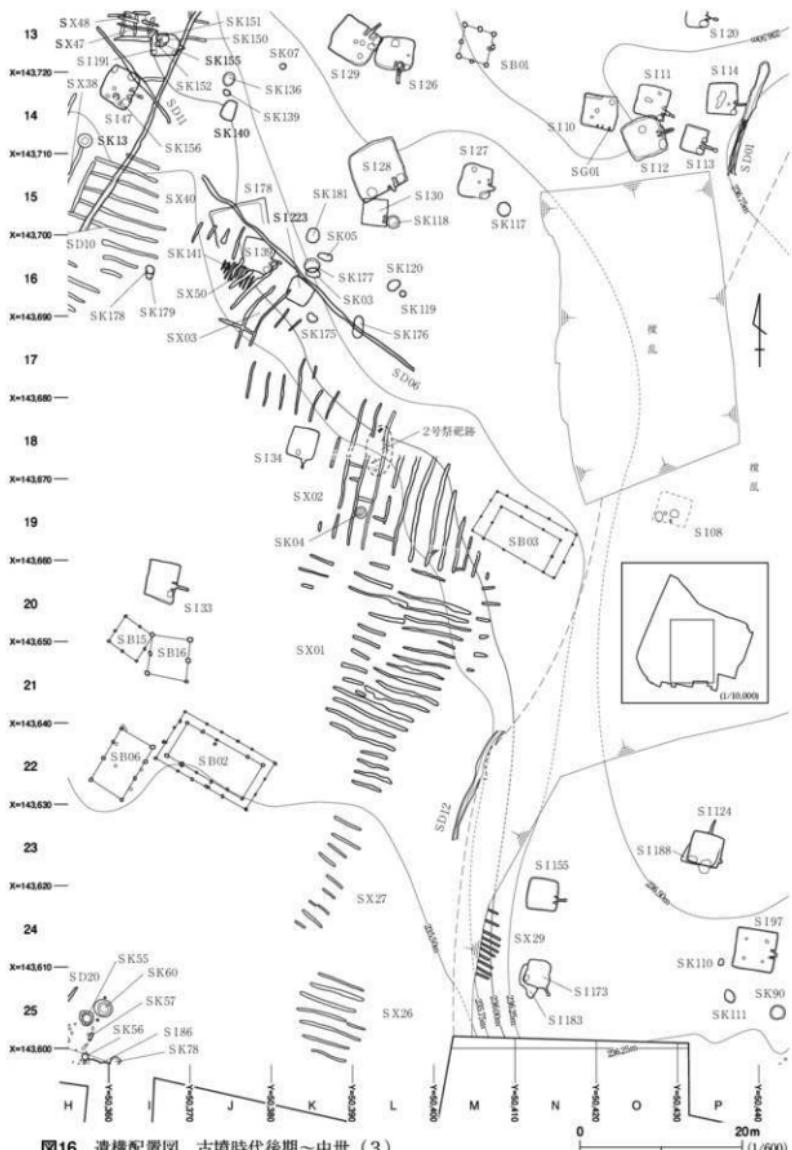


図16 遺構配置図 古墳時代後期～中世（3）

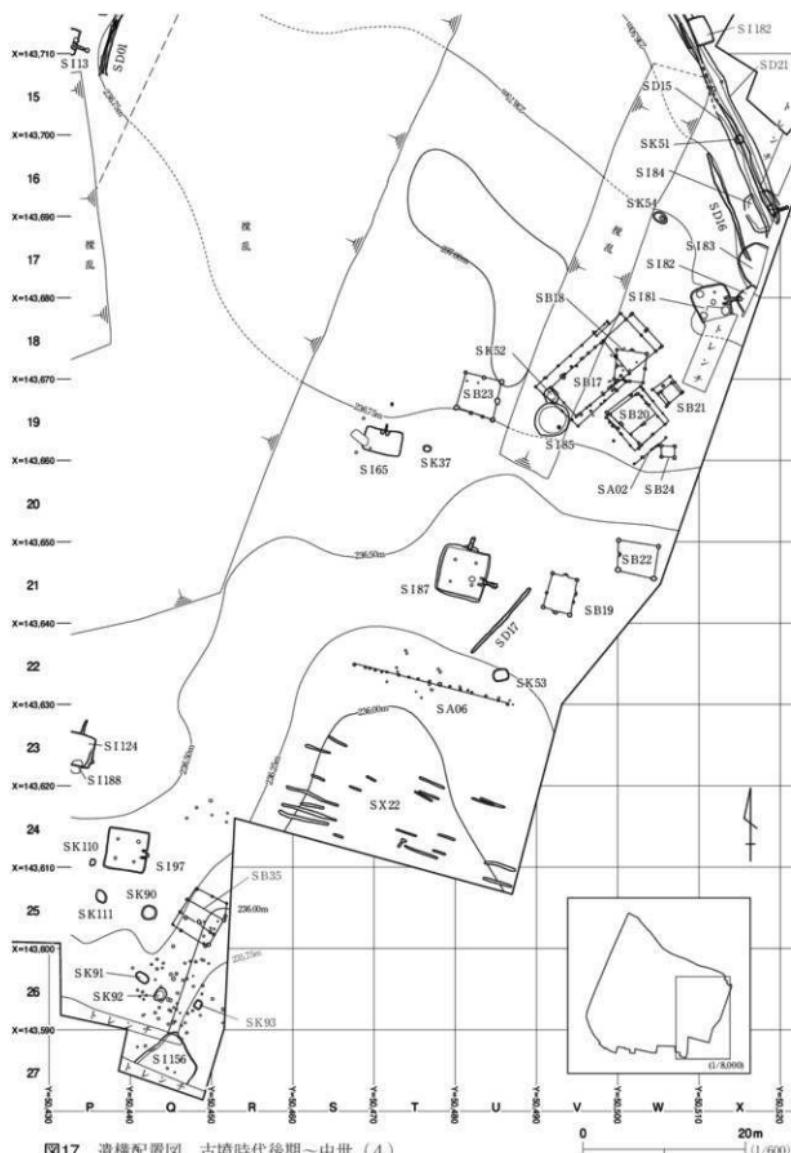


図17 遺構配置図 古墳時代後期～中世（4）

L II b ①は、粗粒の褐色土を主体とする土層である。細粒の砂と火山灰に起源する白色粒子を多く含むことがL II a ③に似ている。L II a ③と同様に、奈良時代・平安時代の竪穴住居跡が本層上面から掘り込まれている。古墳時代後期の竪穴住居跡では、堆積土の中層から下層にかけて堆積する。層の厚さは、10~20cmである。調査区の北側および東側斜面部においては、古墳時代後期の土師器片がやや多く出土する。

L II b ②は、均質な黄褐色土である。基本的には、調査区中央部のI~T-4~17グリッドの平坦面に堆積している。それ以外の調査区の大部分では、L II b ①とL II b ②が取扱い、細分できないことから、L II b 上層として扱っている。古墳時代後期の12号住居跡や80号住居跡などは、本層を掘り込んでいる。層厚は、10~40cmである。遺物はほとんど出土しない。

L II b ③は、均質な褐色砂質土である。L II b ②の下層がやや砂質化、もしくは砂が主体となった土層である。おそらく、洪水時などに流れの速い段階で運ばれてきた堆積土がL II b ③で、洪水がピークをむかえ、水が淀み、ゆっくりと土砂が沈殿し溜まっていたのがL II b ②と考えている。層厚は10~50cmで、無遺物層である。

L IIIは、暗褐色土を主体とする土層である。調査区のほぼ全域で検出することができた。調査区斜面部や窪地においては、土色が変化し、暗オリーブ褐色の砂質土となっていた。発掘調査においては、大体で窪地や斜面部に堆積するものをL III a とし、平坦面のものをL III b として扱った。調査区西側のⅢ区基本土層(図18・19-E)においては、L III b の上にL III a が堆積していることから、層位的には、L III b が古い。なお、L III a においては、窪地や沢部において重層化し、複雑な堆積状況を示すところから、遺構などと関連のある部分に関しては、さらに6つの層に細分した(図18・19参照)。

L III a は、砂質の暗オリーブ褐色から灰黄褐色の土層である。調査区中央部のL~N-11~13グリッドや、調査区東側斜面のS~X-16~24グリッドにかけての窪地や斜面部を中心に厚く堆積している。層厚は、最大で80cmである。

L III b は均質な暗褐色土層で、少量の炭化物を含む。斜面部や窪地を除く調査区全面に堆積している。層厚は10~30cmである。古墳時代前期の遺構は、L III b を上面から掘り込む遺構と遺構内に堆積土として流入する遺構がみられることから、時期差としてとらえている。出土遺物は、古墳時代前期の土師器および弥生土器が出土する。

L IVは、にぶい黄褐色土である。調査地点によっては、砂質が強い場所や粘性の強い場所も見られる。調査区のI~T-6~24グリッドにかけて堆積しており、L II b の堆積範囲と共通する。調査では、L IVを3細分した。

L IV a は、土質のにぶい黄褐色土で、微量の炭化物が含まれる。層厚は、20~40cmである。古墳時代前期の土師器や弥生土器がわずかに出土する。古墳時代前期の遺構や、弥生時代終末期の遺構はこの層の上面とそのやや下部を掘り込む。

L IV b はにぶい黄褐色の砂層である。粒径が1~3mmほどの粗い砂層で、部分的に粒子が粗くな

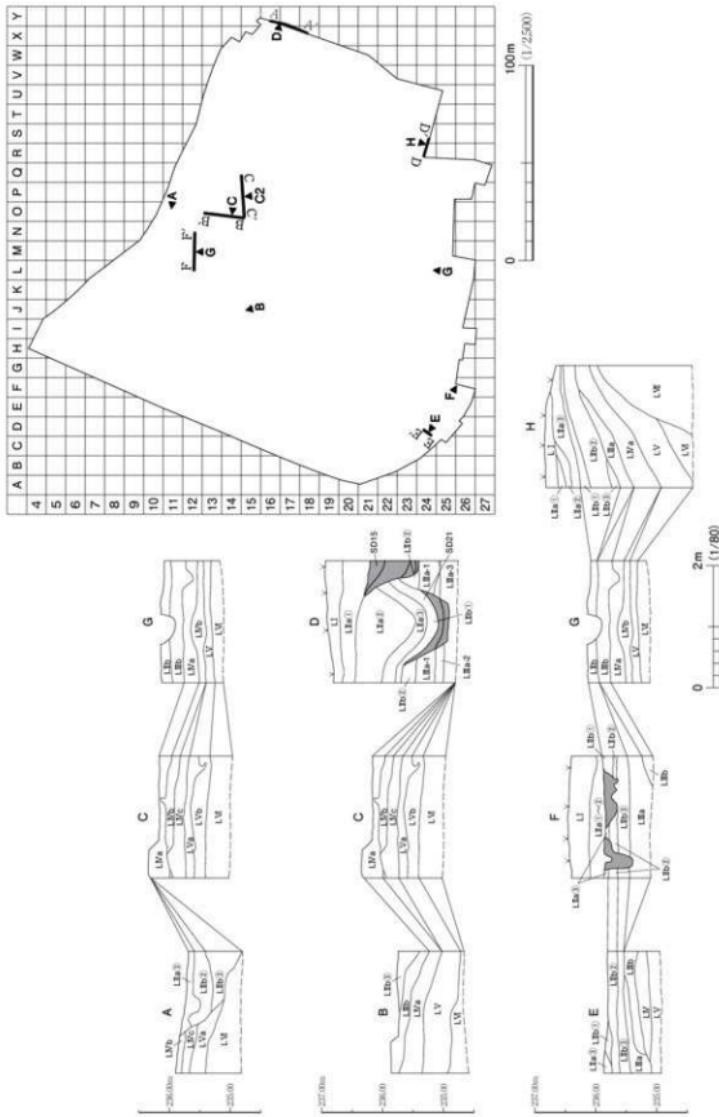
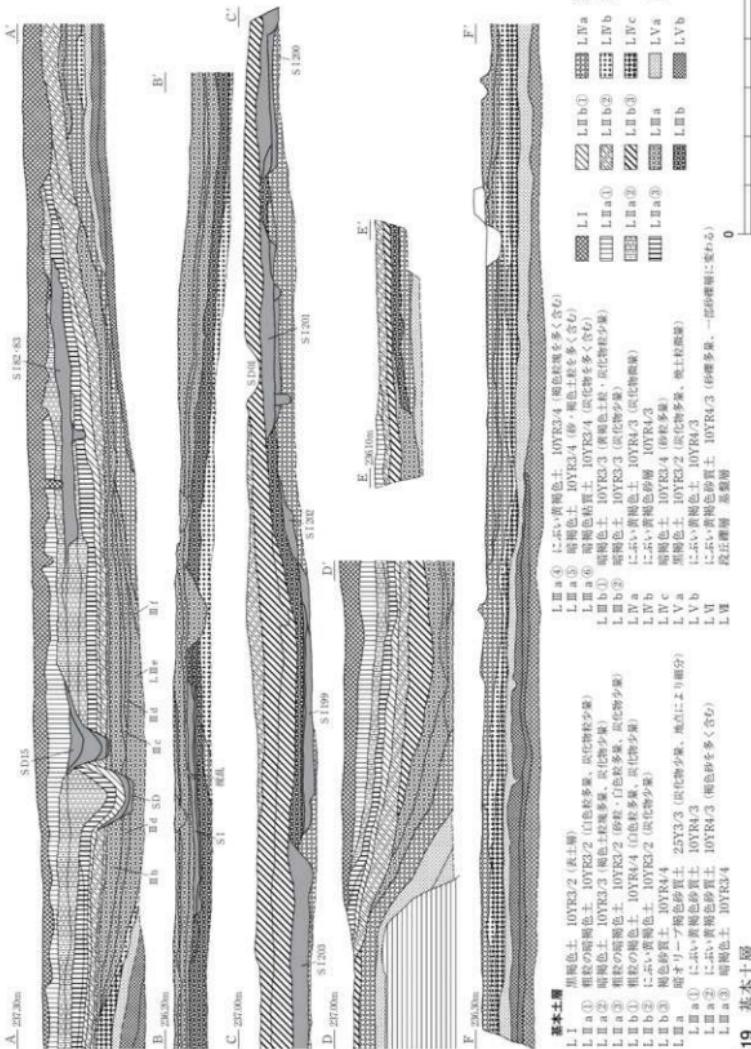


図18 土層柱状図



19 基本土層

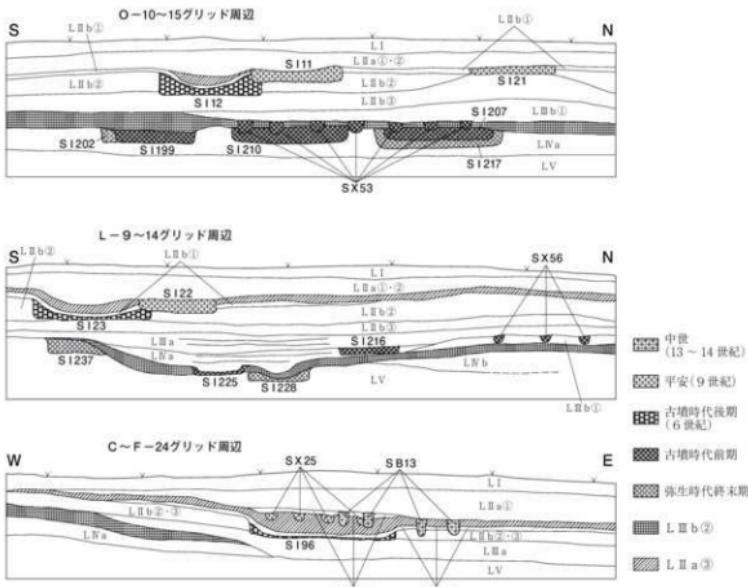


図20 地層と遺構との関係模式図

り、1~4cmほどの小礫も含まれる場所も見られる。層厚は、5~10cm前後だが、調査区南側においては厚く堆積し、最大で50cmである。遺物は出土していない。

L IVcは、均質なにぶい黄褐色土である。中央トレチで確認され、L IVとL Vの漸移層と捉えている。層厚は、10~15cmである。遺物は出土していない。

L Vは、炭化物を含む暗褐色土である。調査区のほぼ全域で堆積を確認している。炭化物が混入することから、遺物包含層の可能性も考えられた。しかしながら、基本土層の確認トレーニチでは、一部で比較的大きな炭化物塊が集積する場所や焼土粒が含まれる箇所も見られたが、遺構や遺物の確認はできなかった。炭化物や焼土の流入の理由は、調査段階では明らかにできなかった。層厚は、15~30cmである。

L VIは、にぶい黄褐色砂礫層である。L IV bに近い砂礫層で、無遺物層である。調査区の南側に堆積を確認した。層厚は、30~60cmである。

L VIIは、基盤の礫層である。南側基本土層のトレンチで確認した。粒径が0.3~5cm前後の砂と礫が混在する層で、M~V-14~26グリッドにかけて南北方向に細長く堆積しているものと考えられる。層厚は最大150cmまで確認している。おそらく、最初に礫を主体とした南北の自然堤防が形成され、それ以後阿武隈川の土砂が堆積していったものと考えている。(中野)

(中野)

第3節 住居跡

本遺跡では、弥生時代終末期、古墳時代前期、同後期、奈良時代、平安時代の住居跡が229軒確認された。本遺跡は基盤となる土層の多くが砂質土であり、さらに基盤層と遺構堆積土がわずかに違ったことなど、各遺構の検出作業には難渋する場面が多かった。このため、一度番号を付して調査をはじめたものの、掘り込みを進めるうちに住居跡とは判断できなかった例が多くあった。このため、このようなものについては欠番とした。また、遺構同士の重複が激しいものが多く、重複関係をすべて図示すると煩雑となるため、本報告書では事実記載の主題となる遺構より新しい遺構は図示したものの、それより古い遺構については図示しなかった。また、住居跡は軒数が多いため、1～160号住居跡は第1分冊、161～237号住居跡は第2分冊に分けて収録した。

1号住居跡 S I 01

遺構 (図21、写真14・15)

本遺構は、II区東部のQ・R-16・17グリッドに位置している。標高236.2mの平坦面に立地する。検出面は、L IV上面である。遺構検出時に、方形に広がるにぶい黄褐色土の範囲を確認したところから住居跡として調査した。重複する遺構はないが、北側6mに3号住居跡、南側4mに2号住居跡が位置している。

堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1は、遺物以外の混入物をほとんど含まず、L III bに近い土を主体に構成されていることから、自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は多量の炭化材と焼土塊を含む黒褐色土である。床面上の全面に堆積している。層中の炭化材は、上屋の構築材が崩落したような状態ではなく、床面から浮いた状態で出土していることから、住居廃絶時の解体に伴った廃材などを住居内で焼却し、土器などとともに埋めたものと考えられる。 ℓ 3は明黄褐色粘質土の貼床である。

平面形は南北方向にやや長い方形である。規模は、南北5.8m、東西5.6mである。方位は東壁で北から30度西を示す。周壁は、床面から直立ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、24cmである。

床面は、表面に多少の凹凸があるものの、おおむね平坦であり、上面には踏み締まりが確認された。貼床は中央部分に施され、周縁はL IVをそのまま床面としている。

住居内の施設は地床炉と柱穴である。地床炉は中央から北側に寄って位置する。平面形は不整な梢円形で、規模は長軸52cm、短軸36cmである。焼土化した深さは床面から最大で約5cmに及ぶ。

柱穴は4基検出し、炉を開むように方形に配置されている。平面形はいずれも不整な円形で、断面形は「U」字状となっている。規模は直径20～30cm、深さ27～35cmである。堆積土の観察からは、柱痕跡は確認されず、住居内堆積土 ℓ 2と共に黒褐色土が堆積していた。このことから住居の廃絶時に柱を抜き取ったと考えている。

遺物は、炭化材同様に ℓ 2上面で出土するものと、床面付近から出土するものがある。特に ℓ 2

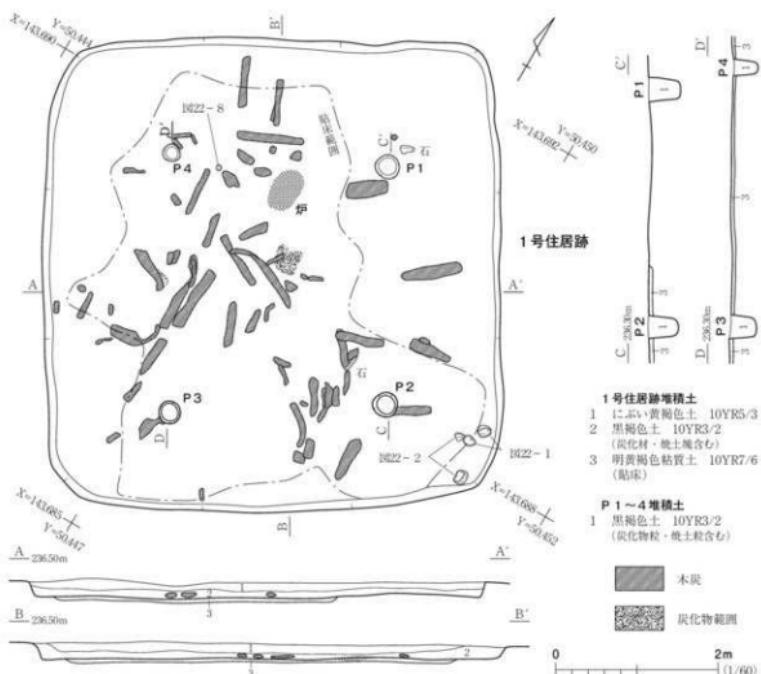


図21 1号住居跡・出土遺物

上面から出土するものについては南東隅にまとまって出土している。

遺物 (図22、写真364・437)

本遺構からは、土師器60点、弥生土器2点が出土し、土師器7点、弥生土器1点を図示した。

図22-1・2は土師器の壺である。いずれも口縁部を欠損し、平底である。また赤彩の痕跡が認められる。2はハケメ調整後に胴部外面に入念にヘラミガキ調整を施している。

3は鉢である。外面に輪積み痕を残して段をつくる。ヨコナデを施し、外面に赤彩を施す。

4は小型の鉢である。外面に指押さえ、内面にナデ調整を施す。5・6は器台である。5は逆「ハ」字状の受け部をもつもので、外面をハケメ調整後にミガキを施し、外面と受け部内面には赤彩を施す。6は外面にハケメを施す脚部片である。

7・8は台付壺の台部片である。9は外反する弥生土器の口縁部片である。地文に撲糸を施す。

まとめ

本遺構は、地床炉をもつ5.5mほどの方形の竪穴住居跡である。住居廃絶時に廃材を住居内で焼却するなどの特徴が認められた。また、床面からは、4本の主柱穴が地床炉を方形に取り囲むよう

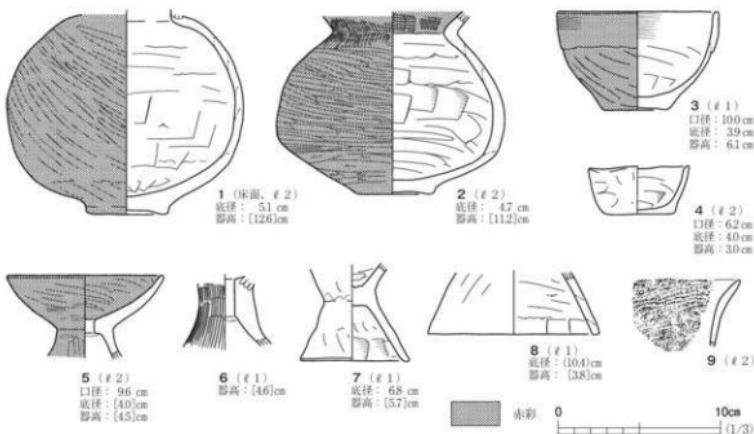


図22 1号住居跡出土遺物

に検出された。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と判断している。(小暮・中野)

2号住居跡 S I 02

遺構 (図23、写真16)

本遺構は、II区東部のQ・R-17・18グリッドに位置する。標高236.1m付近の平坦面に位置する。検出面はLIV上面である。1号住居跡の南側を検出中に、方形に広がるにぶい黄褐色土の範囲を確認したため住居跡として調査した。西側は搅乱により壊されており、遺存状態はよくない。重複する遺構はないが北側に1号住居跡が位置している。

堆積土は、にぶい黄褐色土の単層である。微量の炭化物と焼土粒が含まれる。LIIIbに近い堆積土であるため、自然堆積土と考えている。

平面形は、西側と南東隅を搅乱に大きく壊されているものの、方形ないし長方形と考えている。規模は、南北4.4m、東西遺存長3.0mである。方位は東壁で北から30度西を示す。周壁は、残りの良い東壁で、床面から60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、最大で17cmである。方位は、南壁を基準とするなら北に対して東に約70度傾く。床面は、LIVを掘り込み平坦にしており、貼床は確認されなかった。表面に多少の凹凸があるが、おおむね平坦な状態であった。

住居内の施設は確認されなかった。遺物は古墳時代前期の土師器片が7点出土したが、いずれも細片のため図示しなかった。

まとめ

本遺構は、一辺が4.4mの方形ないし長方形の竪穴住居跡である。所属時期は、出土遺物と検出面から古墳時代前期と推定している。

(小暮・中野)

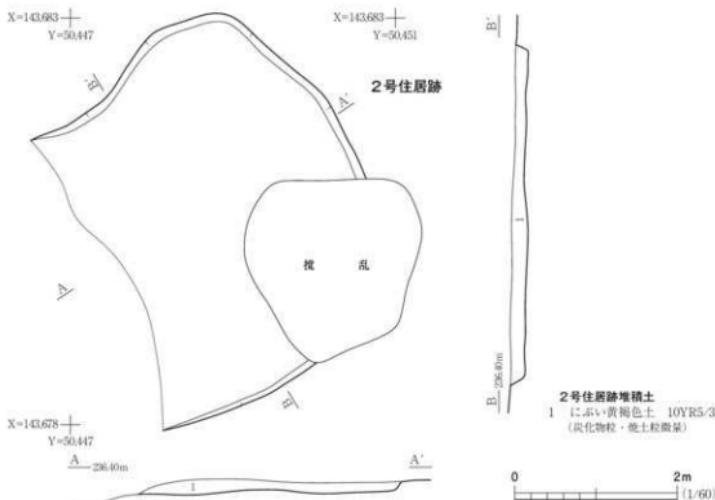


図23 2号住居跡

3号住居跡 S I 03

遺構 (図24、写真17・18)

本住居跡は、II区北東部、Q-15・16グリッドに位置している。標高236.1m付近の平坦面に立地する。検出面はLIV上面である。遺構検出時に、方形に広がるにぶい黄褐色土とにぶい黄褐色土の範囲を確認したことから住居跡として調査した。本遺構と重複関係をもつ遺構はないが、北側1mに4号住居跡、南側6mに1号住居跡、北東側6mに5号住居跡が近接する。

堆積土は5層に区分した。 ℓ 1・3は遺物以外の混入物をほとんど含まず、 ℓ 3bに近い土を主体に構成されることから、自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は土器と炭化物をやや多く含み、主に遺構の中央に堆積している。住居跡が廃絶した窪地に人为的な要因で堆積したと考えられる。 ℓ 4は、多量の炭化材や焼土粒を含む層で、層厚は10~30cmを測り、床面をほほ覆い尽くすように堆積している。炭化材は堆積土内に散在し、上屋などが崩落した炭化材ではない。また窓穴の北東部では炭化材とともに土器がまとまって出土しているが、炭化材と土器は床面直上からは認められない。 ℓ 5は、LIV粒主体の貼床土である。

平面形は、南北方向にやや長い方形である。規模は、5.0×4.6mである。周壁は、床面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は、最大で47cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して約30度西に傾く。床面は、貼床やLIVが踏み締めた状態で確認された。床面の規模は、4.8×4.4mである。表面に多少の凹凸があるがおおむね平坦である。貼床を掘り下げると深さ10cmほどの不整

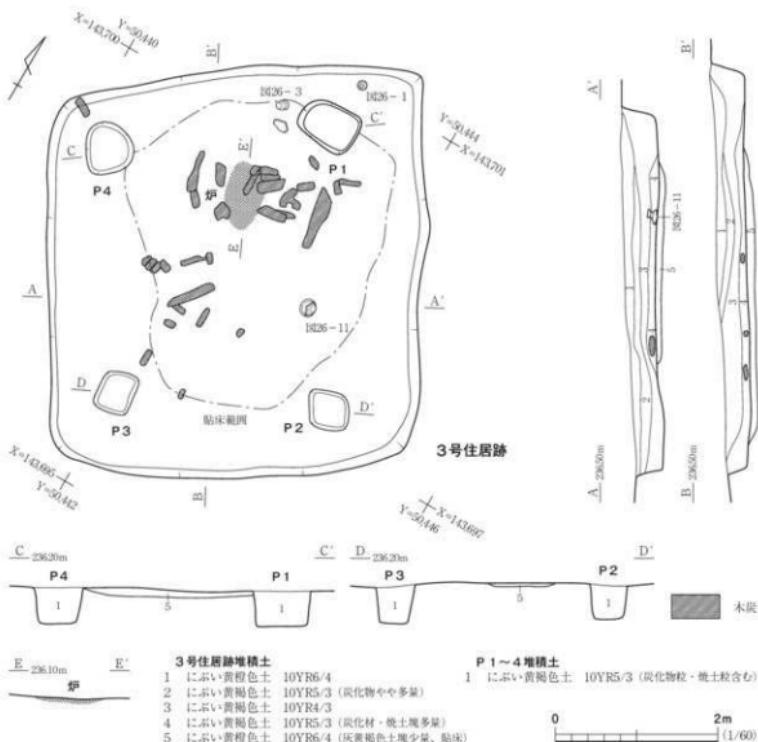


図24 3号住居跡

楕円形の掘形範囲が認められた。

住居内の施設は、地床炉と柱穴である。地床炉は、遺構中央からやや北側に寄って形成されていた。平面形は南北に長い不整な楕円形である。規模は長軸84cm、短軸48cmで、焼土の厚さは、床面から最大約5cmである。

柱穴は4基検出され、地床炉を囲むように方形に配置されていた。柱穴の直径は、40~70cm、深さは40~45cmである。柱穴内には住居内堆積土ℓ4と同じ性質のにぶい黄褐色土が堆積しており、柱痕跡は確認されなかった。

遺物は、図26-11が床面の中央やや東側から出土し、図26-1が北西隅から出土している。これらは遺構の時期に対応する遺物と考えられる。また、ℓ2~4にかけて、炭化材と混在するようないし土器がまとまって出土している。炭化材や遺物の出土状況などから、住居廃絶時に出た廃材を焼却し、土器も一緒に廃棄したものと考えている。

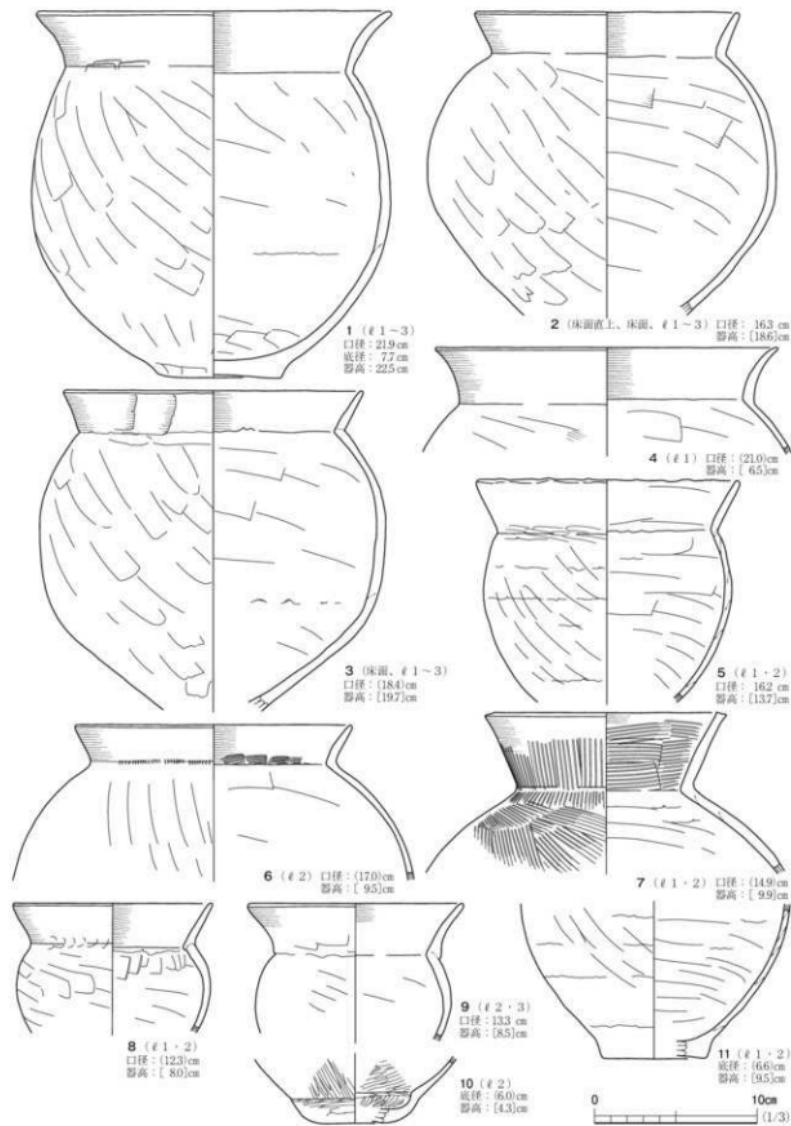


図25 3号住居跡出土遺物（1）

遺物 (図25・26、写真364)

本遺構からは、土師器が388点出土し、このうち25点を図示した。

図25-1～6は球胴形の壺である。口縁部形態が緩く外反する1・4と、頸部から「く」字状に屈曲し口縁部が外傾する2・3・5・6がある。7は口縁部から胴部上半が遺存する素口縁の壺である。ハケメ調整を施す。

図25-8～10と図26-1～7は、鉢である。図26-1・4のように複合口縁のものと、図25-8・9や図26-2・3・5・7のように頸部から口縁部が屈曲をもちらがら外傾するものがある。図25-10は内外面にヘラミガキ調整を施した鉢である。図26-7は赤彩を施す。

図26-8は体部がラバ状を呈し、つまみが指押さえでわずかに作り出されている特殊な形状をなす。鉢とも考え、器形の上下の判断も迷ったが、蓋とした。

図26-9は有孔鉢である。内外面にハケメの後ヨコナデを施す。図26-10・11は器台である。10・11は浅い受け部と「八」字に開く脚部をもつもので、10は外面をハケメ調整後にヨコナデ調整を施す。11は外面に赤彩を施す。

12は、台付壺の台部片である。13は、裾が「八」字に開く高杯か器台の脚部である。14は、壺か鉢の底部片である。

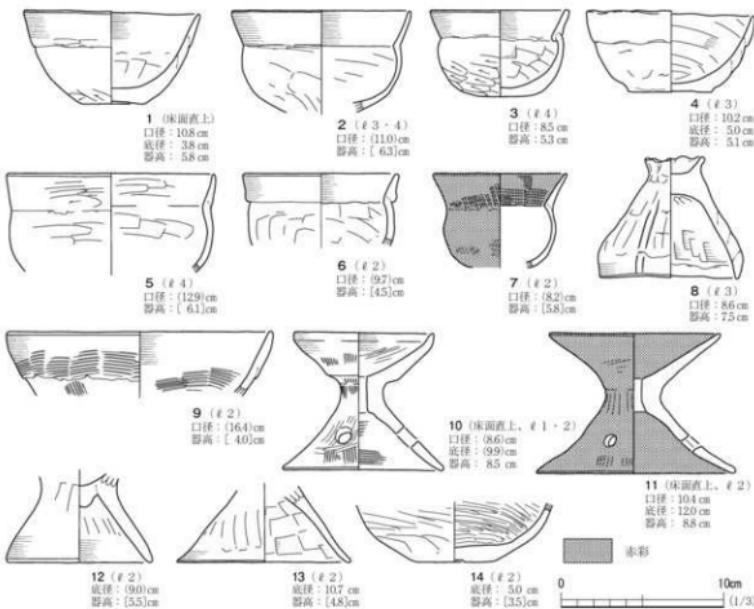


図26 3号住居跡出土遺物 (2)

まとめ

本遺構は、 $5.0 \times 4.6\text{ m}$ の方形の竪穴住居跡である。主柱穴4基と地床炉が検出された。床面の直上から堆積土下層にかけては、焼土塊や炭化材などが出土し、その状況から、住居廃絶後、廃材を焼却し、使用しなくなった土器器などと一緒に遺棄したものと考えている。遺構の床面や堆積土からは、古墳時代前期の土器器が比較的まとまって出土している。遺構の所属時期は、出土土器から古墳時代前期と考えている。

(小暮・中野)

4号住居跡 S I 04

遺構(図27、写真19)

本遺構は、II区北東部、Q-15グリッドに位置している。標高236.2m付近の平坦面に立地する。検出面はLIV上面である。遺構検出時に、隅丸長方形に広がるにぶい黄橙色土の範囲を検出したため、住居跡として調査した。重複する遺構は200号住居跡であるが、200号住居跡の遺存状態が悪く、直接的な重複関係を把握できなかったが、本遺構が古いと考えている。

堆積土は2層に区分した。 $\ell 1$ は炭化物・焼土粒を少量含み、土器片がまとまって出土したにぶい黄橙色土である。 $\ell 2$ は遺物以外の混入物を含まず、LIVに近いにぶい黄褐色土を主体に構成される。いずれも、自然堆積土と考えられる。

平面形は、東西に長い長方形である。規模は東西4.9m×南北3.8mである。方位は北東壁で北か

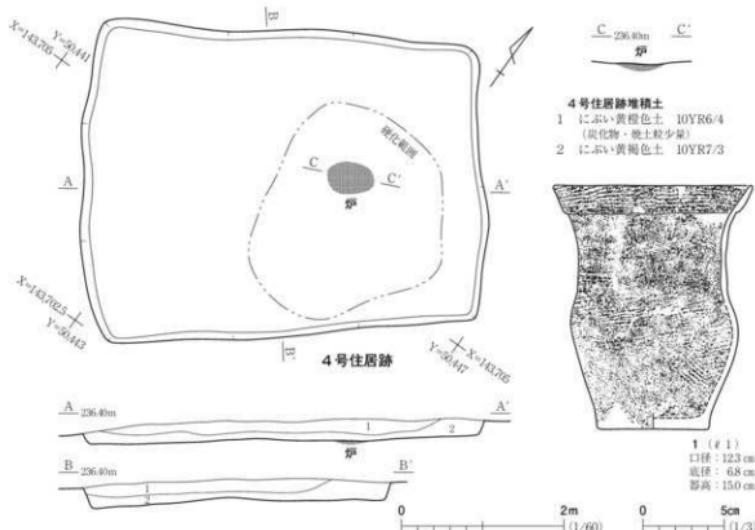


図27 4号住居跡・出土遺物

ら30度西を示す。周壁は、直立ぎみに立ち上がり、壁高は最大で23cmである。床面は、L IVを掘り込み形成されている。床の平面はおおむね平坦な状態であった。

住居内の施設は、地床炉のみである。地床炉は、遺構中央やや北東側で検出された。平面形は、東西に長い不整な楕円形である。規模は長軸60cm、短軸40cmである。焼土化した部分の厚さは床面から最大で約5cmに及ぶ。地床炉の周囲には踏み締まりが認められた。

本遺構からは弥生土器が出土した。出土位置は、ℓ 1下部の地床炉の直上付近である。

遺物 (図27、写真365・441)

本遺構からは弥生土器2点、土師器2点、剥片1点が出土し、弥生土器1点を図示した。

図27-1は口縁部が複合口縁でやや外反する。頸部は直立ぎみで、胴部上半がやや膨らむ。口縁部には横位に撫糸が施され、頸部は無文となる。胴部上半は横位に下半部は斜位に撫糸を施す。

まとめ

本遺構は、長方形の堅穴住居跡である。遺構の中央からやや北東側に寄った位置で地床炉が検出された。所属時期は、出土土器の年代観から弥生時代終末期と考えられる。 (小暮・中野)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図28、写真20)

本住居跡は、II区北東部のQ・R-15グリッドに位置する。標高236.3mの平坦面に立地する。検出面はL IV上面である。4号住居跡の東側を検出時に、長方形の範囲に広がる黄褐色土を確認したことから住居跡として調査した。本遺構と重複関係をもつ遺構はない。遺構の東側は後世の削平により消失している。

堆積土は2層に区分した。ℓ 1は、炭化物を含む明黄褐色土で、自然堆積土と考えている。ℓ 2は、貼床の構築土である。

平面形は、東側を失っているが、東西に長い隅丸長方形である。規模は、東西が4.5m以上、南北が3.7mである。方位は南西壁で北から31度西を示す。周壁は、床面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は最大で12cmである。床面はおおむね平坦な状態で、貼床土のℓ 2やL IVが踏み締まった状態で確認された。遺存する床面の規模は、4.4×3.5mである。貼床を掘り下げると不整形の掘形範囲が認められた。掘形の規模は、3.2×2.8mである。床面から掘形底面までの深さは、約10cmである。

住居内の施設は地床炉のみである。地床炉は、遺構中央やや北側において検出された。平面形は楕円形である。規模は長軸70cm、短軸56cmである。炉床は強く焼けており、床面から最大約10cmの深さまで焼土化していた。

遺物は北西隅や南西隅および地床炉周辺の床面上からまとめて出土した。

遺物 (図29、写真365)

本遺構からは、土師器が296点出土しており、10点を図示した。

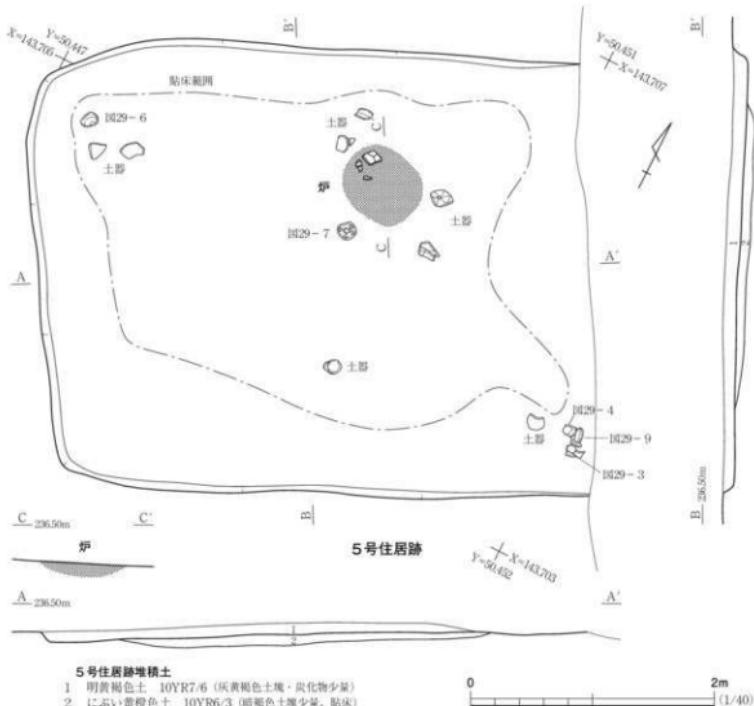


図28 5号住居跡

図29-1~4・10は、鉢である。1~4は、頭部から「く」字状に屈曲し、口縁部が1・2は長く、3・4はやや長く外傾する。底部は浅い窪みをもつ平底である。10は、椀形をした鉢で、外面にハケメ調整が施される。

5・6は浅い受部と脚部が「八」字状になる器台である。5はミガキ調整を施し、赤彩を塗布する。7は赤彩を施した高杯か器台の脚部片である。

8・9は壺である。8は、複合口縁の壺で頭部に隆帯をもつものである。ハケメ調整後に入念にミガキ調整が施される。9は、口縁部が外傾して立ち上がり、頭部に隆帯をもつ壺の口縁部から胴部上半の破片である。

まとめ

本遺構は、4.5mほどの長方形の堅穴住居跡である。床面中央から北に寄った位置で地床炉が検出された。床面の隅付近や地床炉の周辺の床面から古墳時代前期の土師器が比較的まとまって出土した。所属時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えている。

(小暮・中野)

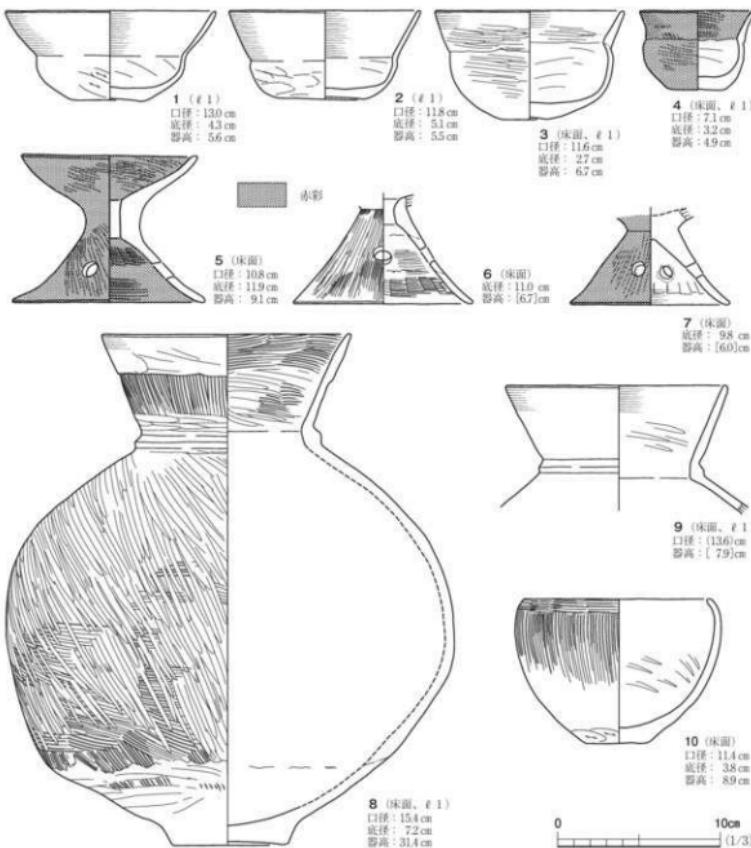


図29 5号住居跡出土遺物

7号住居跡 S I 07

遺構 (図30、写真21)

本遺構は、II区東部のR-15グリッドに位置する。標高236.0m付近の平坦面に立地する。検出面は、L IV上面である。R・S-15グリッド周辺の遺構検出時に、方形の範囲に広がるにぶい黄褐色土を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構はない。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1は土器と炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 2は黒褐色土塊を斑状に含む灰黄褐色砂質土で、いずれも住居内を覆い尽くすように堆積している。 ℓ 3はにぶい黄

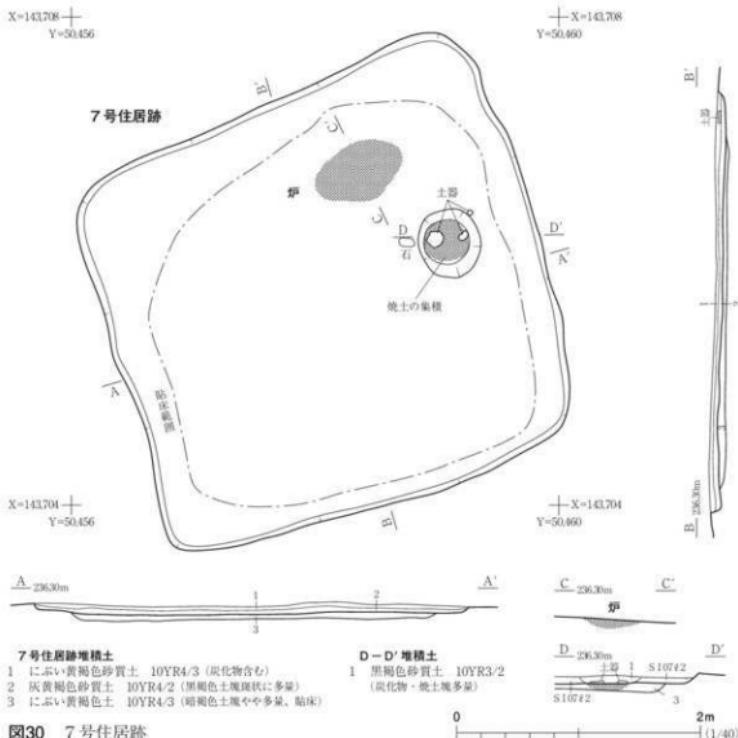
褐色土で貼床土である。 ℓ 1の下面から ℓ 2の上面では、土器片と礫がほぼ同一の高さで出土した。

遺構中央東寄りの位置からは、直径58cm、深さ5cmほどの窪みが確認され、底面からは焼土面が検出された。焼土面は楕円形で、規模は直径35cmである。焼土の範囲は最大6cmの深さに及ぶ。調査時は堆積土内の焼土集積と捉えていたが、遺物の出土状況と地床炉のような形状から、本住居跡の上位に新しい時期の遺構が重複していた可能性も考えられるが詳細は不明である。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は東西3.6m×南北3.4mである。方位は東壁で北から15度西を示す。周壁は、床面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は最大で10cmである。床面は、貼床やLIVが踏み締まった状態で確認され、おおむね平坦な状態であった。

住居内の施設は、地床炉が1箇所のみである。地床炉は遺構中央から北東側に寄った位置にあり、平面形は不整な楕円形となっている。規模は長軸75cm、短軸50cmで、焼土化した範囲は床面から最大6cmである。

遺物は、 ℓ 1・2の上面から図31-1~3の土師器が出土している。 ℓ 2から床面にかけては、



4の弥生土器の破片がまとまって出土している。おそらく、 ℓ 2上面の遺物は一括性が高く、また、 ℓ 2から床面出土の弥生土器とはやや時間差があるものと考えている。

遺物 (図31、写真365・441)

本遺構からは、土師器157点、弥生土器40点、剥片2点が出土し、このうち4点を図示した。

図31-1は鉢形をした有孔鉢である。 ℓ 2・3は鉢である。4は弥生土器の大型の壺である。口縁部および頸部、また底部の一部を欠損している。地文に撚糸を斜位ないし横位に施す。

まとめ

本遺構は3.6mの隅丸方形の堅穴住居跡である。床面の北東側から地床炉が検出されている。口縁部と底部を欠損した弥生土器が出土した。また、 ℓ 2の上面から底面に焼土面をもつ土坑状の窪みが検出された。遺物も古墳時代前期の土師器のみが上面よりまとめて出土することから、調査時は明らかにできなかったが、本住居跡より新しい時期の遺構が存在した可能性が考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物から弥生時代終末期から古墳時代前期と考えている。(小暮・中野)

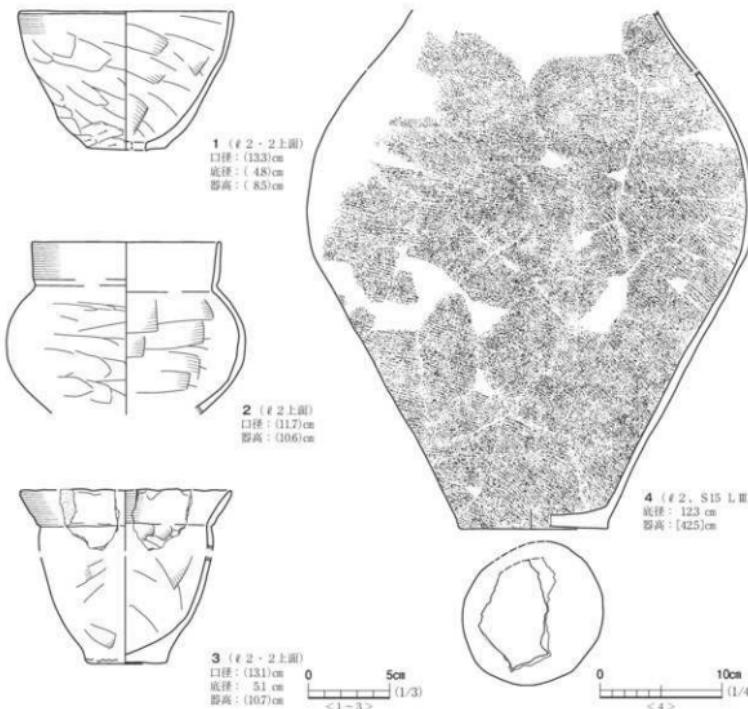


図31 7号住居跡出土遺物

8号住居跡 S I 08

遺構(図32、写真22)

本遺構は、II区東部のO・P-19グリッドに位置する。標高235.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVであるが、本来の掘り込み面はL II bと考えている。本遺構は、周囲を掘削し過ぎたため、掘形のみを検出した。平面形は明確ではないが、長方形であったと推定している。

堆積土は5層に区分したが、いずれも床面の貼床堆積土である。l 1~5はL IVを主体としたにぶい黄褐色粘質土から砂質土である。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは2基確認し、いずれも焼土面のみが遺存していた。カマド1は、床面の東部中央に位置する。焼土面の上面には、にぶい黄褐色土の粘質土と砂質土の堆積がみられ、おそらくカマドの天井崩落土の一部と考えられる。平面形は円形である。規模は、直径53cm、厚さ10cmにわたり焼土化している。カマド2は、床面の北部中央に位置する。平面形は円形である。規模は、直径40cm、厚さ2cmにわたって焼土化している。おそらく、カマドの一部が残っていたカマド1が最終的に機能していたカマドで、北部のカマド2がそれより古いカマドと考えている。

ピットは3基検出した。P 1は、床面中央よりやや南に位置する。平面形は不整梢円形である。規模は103×90cm、深さが22cmである。P 2は、P 1の西に位置するピットである。平面形が不整な円形である。規模は38×33cm、深さが16cmである。P 3は、南北隅付近に位置する梢円形のピットである。規模は、117×94cm、深さが10cmである。ピットの堆積土はいずれもL IV粒を多く含むにぶい黄褐色砂質土である。

遺物(図32)

遺物は、土師器34点が出土し、そのうち2点を図示した。

図32-1は杯で、体部外縁の下半に段がみられる。外縁の調整は、口縁部がヨコナデ、体部から底部はヘラケズリである。内面はヘラミガキと黒色処理がされている。なお、外面には輪積み痕がみられる。2は甕で胴部下端から底部が欠損している。内外面ともに口縁部はヨコナデ、胴部は外縁がナデ、内面がヘラナデである。胎土はよく選良され緻密である。

まとめ

本住居跡は周囲を掘りすぎてしまい、貼床のみを検出した。焼土範囲が2箇所あり、カマドの痕跡と考えている。遺構の所属時期は、出土土器から奈良時代を考えている。(古野・中野)

9号住居跡 S I 09

遺構(図33、写真23)

本住居跡はII区東部のP・Q-20グリッド他に位置する。標高は236.2mで、検出層位はL IVである。重複する遺構は44号住居跡で、新旧関係は本住居跡が新しい。本住居跡の南東側に120号住

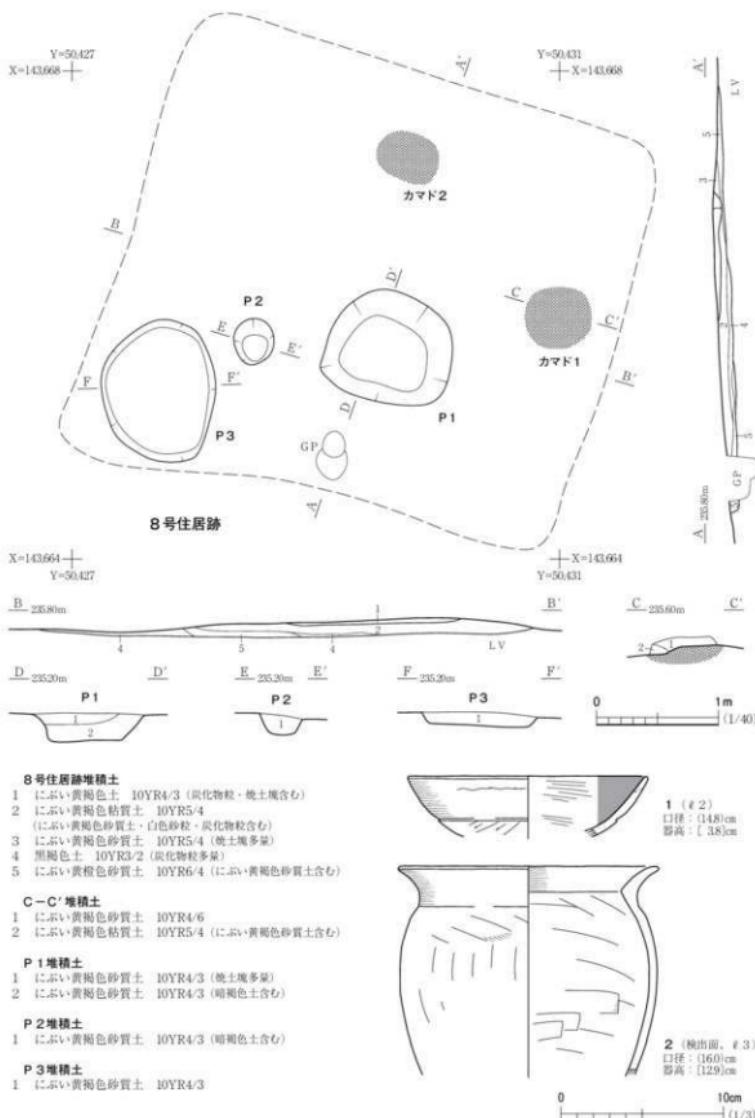


図32 8号住居跡・出土遺物

居跡が、西側には近接して2号土坑が位置する。

本住居跡の平面形は整った隅丸方形で、規模は南北が8.6m、東西が8.6m、壁の高さが20cmである。方位は北東壁が北から47度西を示す。壁は外傾ぎみに立ち上り、床面はほぼ平坦である。

堆積土は4層に区分し、その大半は砂質土である。いずれも流入土と考えている。

住居内の施設として地床炉2箇所と柱穴2基を検出した。地床炉は床面の北部にあり、南北に並列して位置していた。炉は北側に位置するものを炉1とし、南側に位置するものを炉2とした。炉1の平面形は不整梢円形で、規模は長軸100cm、短軸60cm、焼土化した厚さは4cmである。炉2の

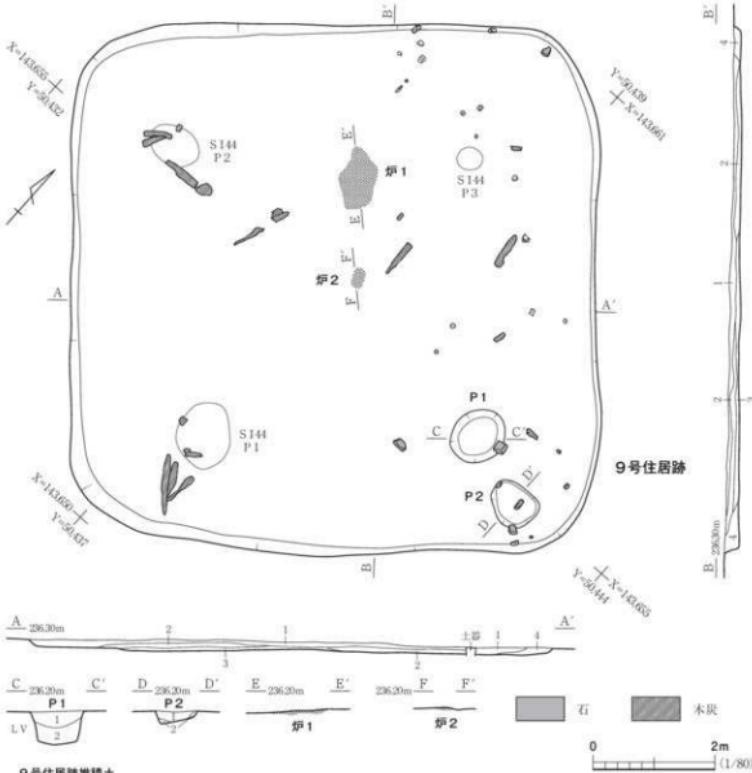


図33 9号住居跡

平面形は梢円形で、規模は長軸40cm、短軸20cm、焼土化した厚さは3cmである。

柱穴としたP1・2は床面の南東部に近接して位置にする。P1の平面形は梢円形で、規模は長軸100cm、短軸80cm、深さが56cmである。P2は平面形が不整梢円形で、規模は長軸80cm、短軸60cm、深さ20cmである。なお、44号住居跡P1～3に、本住居跡P1を加えると、方形の柱配列となることから、柱穴の再利用などが推定できる。

遺物は土師器の他に、ℓ1・2から炭化材が出土した。炭化材の長さは20～100cmで、堆積土の上層にまばらに散乱している状態で出土した。炭化材については、樹種同定を6点、放射性炭素年代測定を6点実施した。その結果は、樹種同定がクリ・アサダ・エノキ・タケ・コナラなどの複数な樹種であった。放射性炭素年代測定の歴年代でみると、資料の多くが3世紀代に入っていた。

遺物(図34、写真366・437)

本住居跡の堆積土からは土師器が128点、弥生土器1点が出土した。その大半はℓ1からの出土である。このうち7点を図示した。

図34-1・2は壺で、口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部が「く」字状に屈曲し、器厚が薄い。1は胴部が球形である。器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケメ、内面がヘラナデである。2の器面調整は、口縁部がハケメ後にヨコナデ、胴部は外面がハケメ、内面にヘラナデがなされている。3は鉢である。平底でやや偏平な球形の体部、短く外傾する口縁部をもつ。4は壺の口縁部で、逆「ハ」字状に開き、頸部に隆帯が巡る。器面調整は外面が継方向のミガキであるが、内面については器面の剥離が著しいため不明である。内外面に赤彩を施す。5は高杯の杯部、6は高杯か器台の脚部である。7は壺の口縁部である。内外面に赤彩を施す。

8は弥生土器の底部付近の破片である。外面に撫糸文を施す。

まとめ

本住居跡の時期は、出土土器の年代観から古墳時代前期と考えている。本住居跡の規模は、高木

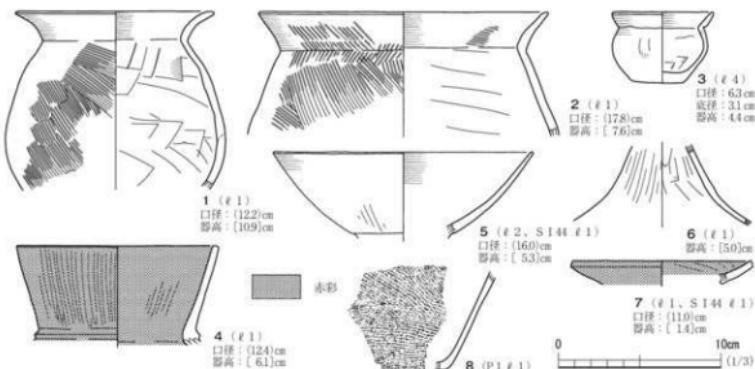


図34 9号住居跡出土遺物

遺跡の同時期の住居跡と比して大きいが、出土遺物は貧弱である。

炭化材については出土状況から、住居が廃絶された後に住居の構築材などを燃やしたものと考えている。高木遺跡の同時期の住居跡からも、炭化材が出土している例がみられるので、集落の特徴として挙げられる。

(吉野)

10号住居跡 S I 10

遺構 (図35、写真24)

本遺構は、I区南部のN・O-14グリッドに位置する。標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b上面である。重複する遺構は、1号焼土遺構で本遺構の方が古い。遺構検出時に暗褐色土と焼土が集積した範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土である。 ℓ 2はL II bを主体とする褐色土で周溝に堆積している。これらの層はいずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3は貼床土である。

遺構の平面形はおおむね方形である。規模は4.4×4.1mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で50度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存のよい北壁で10cmである。方位は、西壁を基準とするなら北に対して約10度東に傾く。床面は貼床が施されており、おおむね平坦となっている。全体的に硬く縮まっており、特にカマド前面から南東隅にかけては、硬化が顕著であった。

住居内の施設は、カマドとピットと周溝である。カマドは、南壁中央からやや東に寄った位置に構築されている。遺存状態はよくないが左右の袖と燃焼部から構成される。堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1は焼土粒や炭化物粒を多く含むにぶい黄褐色土で自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は袖の構築土である。 ℓ 3は袖の芯材の石を固定するための埋土である。

カマドの規模は、全長57cm、最大幅が80cmである。袖は残りが悪いが、南壁に直交するように住居内に張り出す形態である。規模は、左袖が長さ50cm、幅16cm、高さ10cmである。袖の内部には芯材となる25×10cmほどの角礫が据えられていた。右袖は、長さ38cm、幅30cm、高さ10cmである。燃焼部は直径46cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化部分の厚さは、燃焼部底面で3cmである。

ピットは3基確認した。平面形はいずれも梢円形ないし円形である。P 1は床面の北東隅に位置しており、貯蔵穴と考えている。規模は、直径70cm、深さ10cmである。P 2は床面中央に位置する。堆積土中には床面から5cmほど突き出るように20×15cmほどの角礫が据えられていた。石は被熱し一部赤褐色に変色している。規模は、直径50cm、深さ60cmである。P 3は床面中央からやや南に寄って位置する。規模は直径30cm、深さ10cmである。ピットの堆積土は、いずれもL II b粒を多く含む褐色土である。P 2は人為堆積層と考えている。P 1・3の堆積過程は層厚が薄く明確にできなかった。

周溝は、北西隅から北壁にかけて検出した。断面形は緩い「U」字状である。底面は凹凸が多くみられた。規模は、長さ210cm、幅36cm、深さ10cmである。

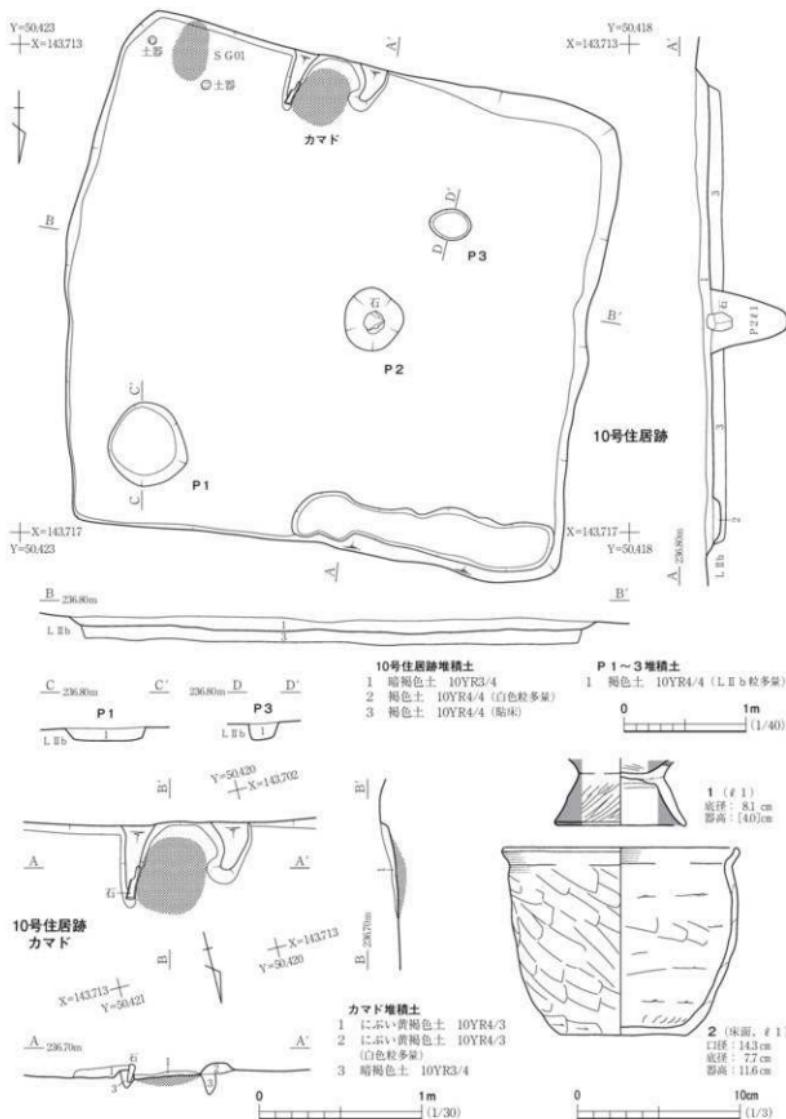


図35 10号住居跡・出土遺物

遺物はカマドの東側の床面や堆積土から破片が散在して出土している。

遺物 (図35、写真366)

遺物は、土師器86点、須恵器1点が出土した。このうち土師器2点を図示した。

図35-1は内外面黒色処理を施した高台付杯の底部片である。2は小型の壺である。内面には輪積みの痕跡が一部残り、外面にヘラナデとヘラケズリを施す。

まとめ

本遺構は、4.4mの方形の堅穴住居跡である。南壁にカマドをもち、床面中央からは石が据えられたピットを検出した。北西隅からは周溝も検出された。所属時期は遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

11号住居跡 S I 11

遺構 (図36、写真25・268)

本遺構はI区南部のO-14グリッドに位置している。標高236.7mの平坦面に立地する。検出面はL II a③からL II b上面である。検出時に暗褐色土が方形に広がる範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構は12号住居跡で本遺構が新しい。西側2mの位置には10号住居跡が近接する。

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で、基本土層のL II a①・②に対応する自然堆積土である。 ℓ 2はにぶい黄褐色土、 ℓ 3は暗褐色土である。いずれも壁ぎわに堆積した自然堆積土である。 ℓ 4はL II b粒を主体とする褐色土で貼床土である。

平面形は、おむね方形である。規模は、4.0×3.9mである。周壁は、床面から垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、最大で18cmである。方位は、東壁を基準とするなら、北に対して東に15度傾く。床面は貼床で作られ、上面は硬く踏み締まり、平坦となっている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、残りが比較的良く、左右の袖と燃焼部、煙道が遺存していた。カマド堆積土は、10層に区分した。 ℓ 1・2は燃焼部上に流入した自然堆積土である。 ℓ 3～5は焼土粒・炭化物を含む煙道に堆積した土である。 ℓ 6～10はカマド袖の構築土である。カマドの規模は、全長は180cm、最大幅が125cmである。袖は、全長42cm、幅42cm、高さ28cmである。左右の袖には、20×10cmほどの細長い角礫を2個立たせて芯材として使用していた。燃焼部は、床面と同じ高さに作られており、平坦である。使用面は、直径50cmの範囲で赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で2cmである。煙道は、燃焼部から18cmほど一段高く掘り込まれ、東壁に対し南に15度傾くように溝状に掘り込まれている。底面は緩く傾斜し、断面形は「U」字状を呈する。煙出部の先端では、煙出しピットが検出された。平面形は東西に長い楕円形で、規模は72×28cm、深さ17cmである。

ピットは、2基確認した。P 1は貯蔵穴である。カマド南側に位置し、平面形は円形である。規

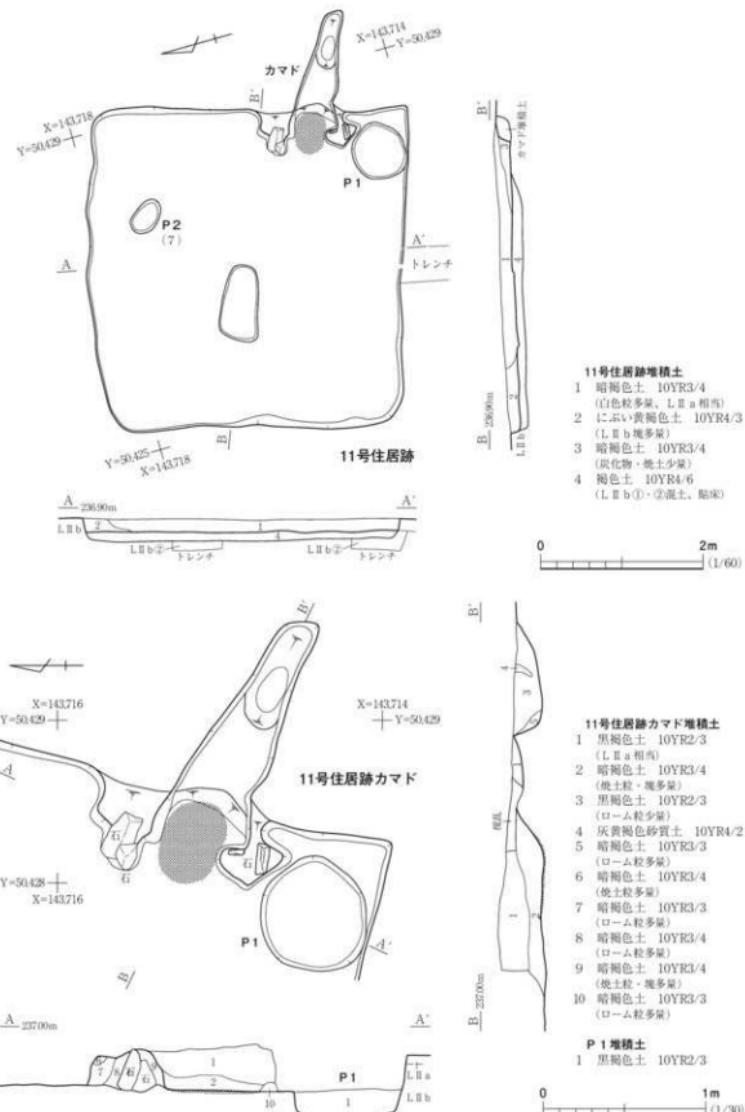


図36 11号住居跡

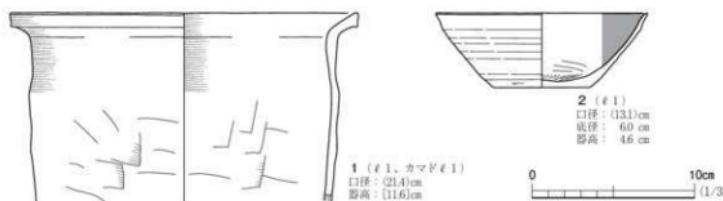


図37 11号住居跡出土遺物

模は直径65cm、深さ18cmである。P 2は、床面の北東側に位置する。機能などは不明である。規模は直径46cm、深さ15cmである。ピットの堆積土はいずれも黒褐色の自然堆積土である。

遺物はℓ 1・2から散在して出土している。明確に遺構に伴う遺物は確認できなかった。

遺 物 (図37)

本遺構からは、土師器64点、須恵器が3点出土した。このうち土師器を2点図示した。

図37-1は、壺である。2は、内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。

ま と め

本遺構は、4.0mの方形の竪穴住居跡である。東壁のやや南側の位置から、袖に石を芯材としたカマドと貯蔵穴が検出された。所属時期は、検出された層位や出土遺物などから、平安時代、9世紀と考えている。

(中野)

12号住居跡 S I 12

遺 構 (図38・39、写真26・27)

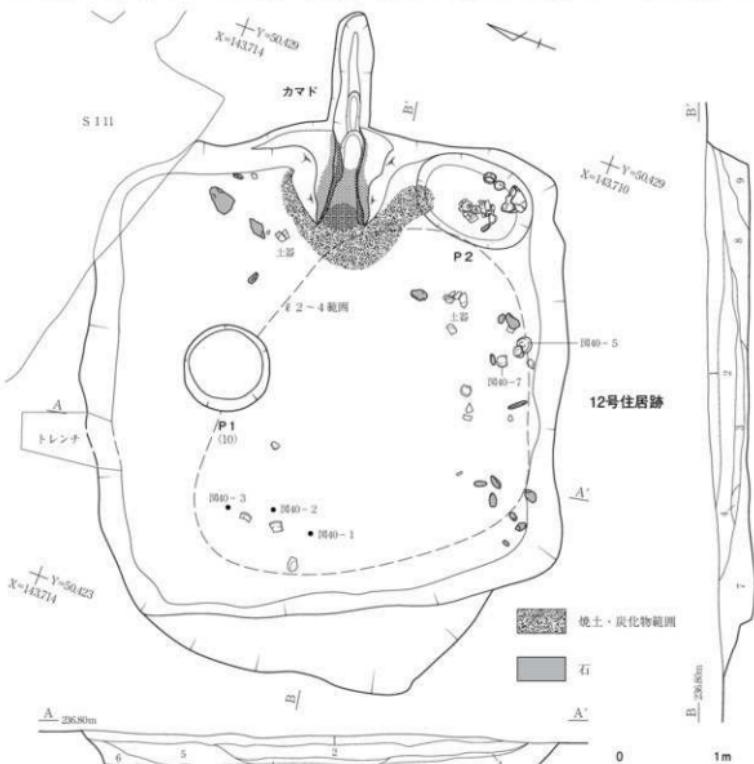
本遺構は、I区南部のO-14・15グリッドに位置する。標高236.6mの平坦面に立地する。検出面は、L II b ②である。L II b 上面で平安時代の遺構検出時に、L II a ③を主体とする、楕円形に広がるにぶい黄褐色土の範囲を確認したため、当初は性格不明遺構として調査した。調査が進むにつれて、東側にカマドを検出したことから住居跡であることが判明した。重複する遺構は、11号住居跡で本遺構が古い。

堆積土は9層に区分した。ℓ 1は、にぶい黄褐色砂質土で、火山灰起源の白色粒を多量に含むL II a ③に対応する自然堆積土である。ℓ 2は、にぶい黄褐色の自然堆積土である。ℓ 3・4は、焼土粒や炭化物を多く含む褐色土である。この2つの土層の上面からℓ 2下面にかけて、破碎された図40-4の土師器の杯や石製模造品、骨片が出土した。埋没途中の住居跡の窪みにおいて、何らかの祭祀が行われた可能性がある。ℓ 5～9は、褐色やにぶい黄褐色土を主体とする土である。いずれもレンズ状もしくは三角状に堆積することから自然堆積土と考えている。

平面形は、方形である。規模は5.0×5.0mである。周壁は、遺存状態の良い北壁で70度で立ち上がる。西壁上端部においては、三日月状の緩斜面となることから、崩落によるものと考えている。壁の遺存高は、最大で45cmである。方位は、西壁を基準とするなら北に対して西に25度傾

く。床面はL II b ③～L III bに作られており、おおむね平坦で全体的に踏み締められている。

住居内の施設は、カマドとピットを確認した。カマドは東壁中央で検出した。遺存状態は、比較的良好く、左右の袖と燃焼部、および煙道から構成される。カマド内堆積土は、8層に区分した。 ℓ 1・3は燃焼部上に流入した暗褐色土と砂質土である。 ℓ 2・4～6は、焼土粒・炭化物を含む燃焼部および煙道の天井崩落土である。 ℓ 7は煙出しに流入した暗褐色の自然堆積土である。 ℓ 8はカマド袖の構築土である。規模は、全長223cm、幅100cmである。袖は、東壁に直交するように住居内に張り出している。L II b ②を逆「U」字状にしたように掘り残して基礎部を作り、その上に土を貼って作り出している。規模は、左袖が全長50cm、幅50cm、高さ20cmである。右袖は全



- | | | |
|------------------------------|------------------------|-------------------|
| 1 にふい黄褐色砂質土 10YR4/3 | 4 暗褐色土 10YR4/4 (炭化物微量) | 7 にふい黄褐色土 10YR4/3 |
| 2 にふい黄褐色土 10YR4/3 | 5 暗褐色土 10YR4/4 | 8 暗褐色土 10YR4/4 |
| 3 暗褐色土 10YR4/4 (炭化物多量、焼土粒少量) | 6 にふい黄褐色土 10YR4/3 | 9 灰黄褐色土 10YR4/2 |

図38 12号住居跡（1）

長53cm、幅35cm、高さ22cmである。燃焼部は、床面よりやや低く作られており、煙道に行くに従い、緩く傾斜しながら立ちあがる。袖ともに強く焼けており、赤褐色に焼土化している。燃焼部は65×45cmの範囲で赤褐色に焼土化している。特に焚口部分の40×25cmの範囲が強く焼土化していた。焼土化範囲の厚さは、燃焼部底面で3cm、袖内側で4cmである。燃焼部の焚口側および両袖の南北の床面からは、微細な炭化物の集積範囲が確認できた。煙道は、東壁に直交する形で東側に向かって溝状に掘り込まれている。その底面は燃焼部から38cmほど高く作られ、底面は西側から東側へ緩く傾斜している。断面形は「U」字状を呈する。煙道の規模は、長さ120cm、幅40cmである。

ピットは、2基検出した。P1は、床面中央からやや北に寄って位置する。規模は直径90cm、深さ10cmを測る。堆積土は、暗褐色の自然堆積土である。P2は、カマド南側に位置し、貯蔵穴と考えている。規模は長軸123cm、短軸80cm、深さ20cmである。堆積土は、2層に区分した。ℓ1は暗褐色土、ℓ2は褐色土でいずれも自然堆積土と考えている。

遺物は、ℓ2から出土したもの以外は、床面南側およびP2堆積土内より比較的まとまって出土している。おそらくは、住居廃絶時に床面に遺棄された遺物、もしくはP2の壁上から落ち込んだ遺物と考えている。

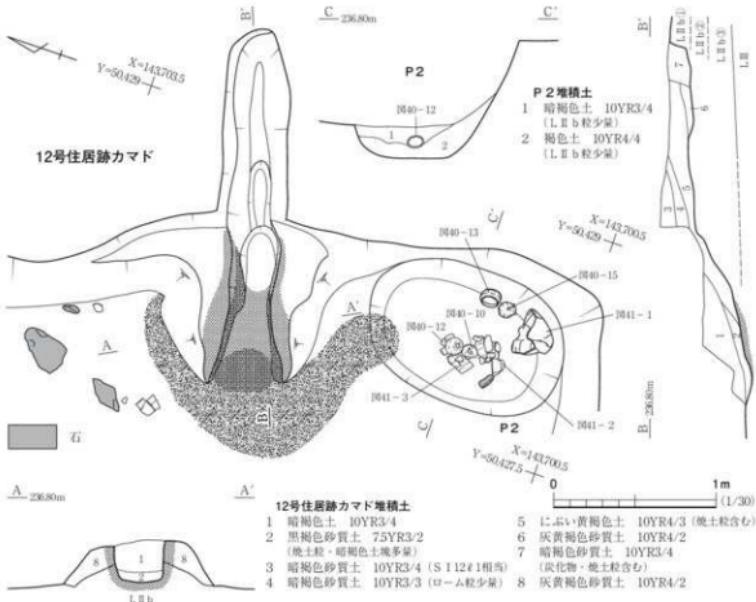


図39 12号住居跡（2）

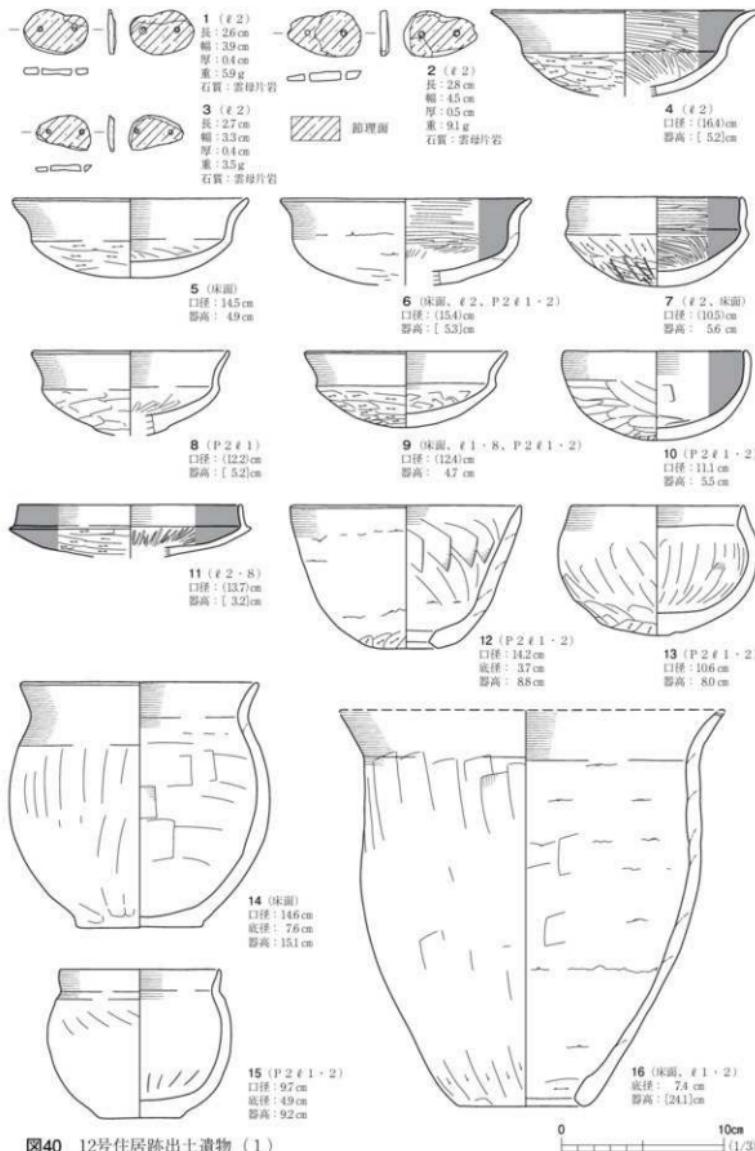


図40 12号住居跡出土物（1）

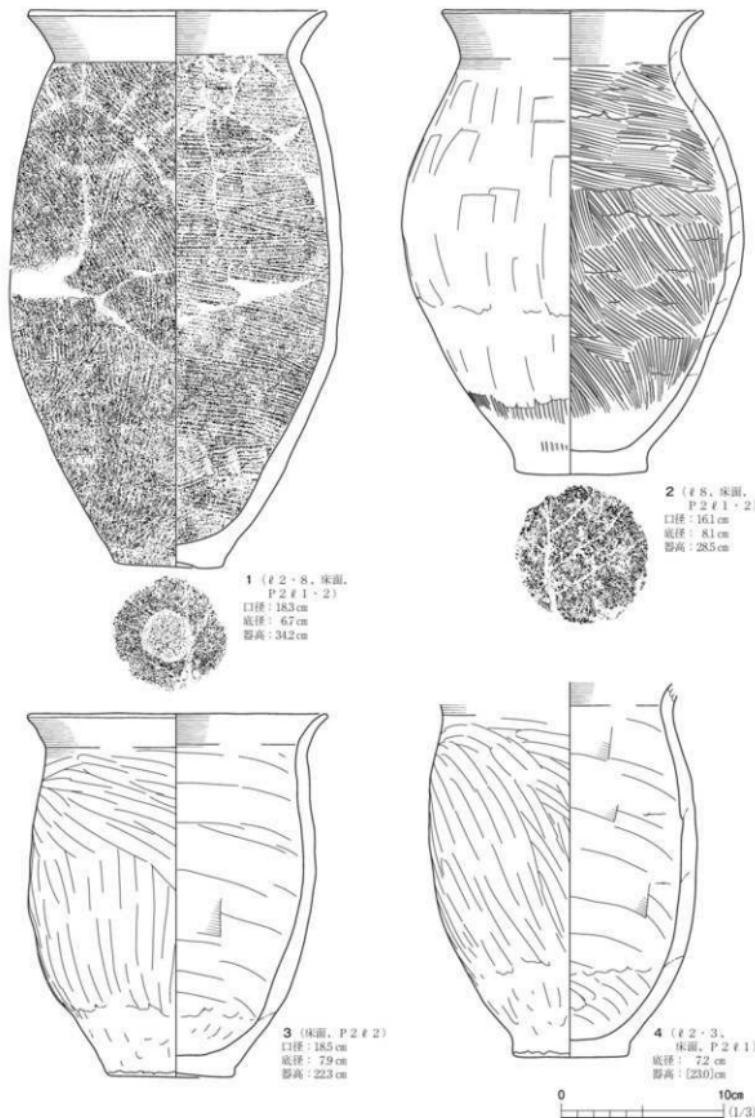


図41 12号住居跡出土遺物（2）

遺物 (図40・41、写真366・367)

出土遺物は、土師器片532点、石製品3点、いわゆる縞物石とされる自然礫が16点、獸骨1点である。そのうち20点を図示した。

図40-1～3は、石製模造品である。いずれも双孔円板で、同一母岩を薄く剥離させ、楕円形の剥片を加工している。一部に自然面を残している。研磨は粗雑で表面を数回ほど研磨しており、部分的には石の節理が残っている。

4～11は土師器杯である。口縁部が外反する4・6・8・9とやや内向きに直立する7・10がある。11は須恵器模倣杯である。杯は、4・6・7・10・11はヘラミガキもしくはヘラナデ調整後に内面黒色処理を施す。

12は有孔鉢、16は無底の瓶である。残りは良いが口端部が欠損する。底面の孔は内外面から面取りがなされている。

13は丸底の鉢である。底面に繩状の圧痕がみられる。14・15は平底の鉢である。

図41-1～4は長胴形の壺である。1は外面を縦位や斜位方向に、内面を横位方向にハケメ調整を施す。底面は中央部が浅く窪んだ平底で、木葉痕がみられる。2は外面にハケメ調整を施した後にヘラナデで調整している。3・4は外面にナデ、内面にヘラナデを施す。

まとめ

本遺構は、東壁中央にカマドをもつ方形の竪穴住居跡である。堆積土上部より破碎された土師器の杯や石製模造品、獸骨が出土しており、何らかの祭祀行為を行っていた可能性がある。床面や貯蔵穴周辺からは、土師器が複数点出土しており、当時の器種組成を探るうえで、良好な一括資料である。遺構の年代は、出土遺物などから古墳時代後期と考えている。

(中野)

13号住居跡 S I 13

遺構 (図42、写真28)

本遺構は、I区南東部のP-14グリッドに位置する。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b上面である。重複する遺構はないが、北側4mに14号住居跡、西側2mに11・12号住居跡が近接する。1号溝跡の西側を検出している際に、方形に広がる暗褐色土と焼土を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1はレンズ状に堆積した暗褐色土、 ℓ 2は周壁側に三角状に堆積した鈍い黄褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3はL II aとL II bを主体とする貼床の構築土である。

平面形は、おおむね方形である。規模は、3.2×2.9mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、残りの良い北壁で12cmである。方位は、東壁を基準とするなら、北に対して東に20度傾く。床面はL II b③上面に貼床を施している。平坦かつ水平に作っており、全体的に硬く締まっている。

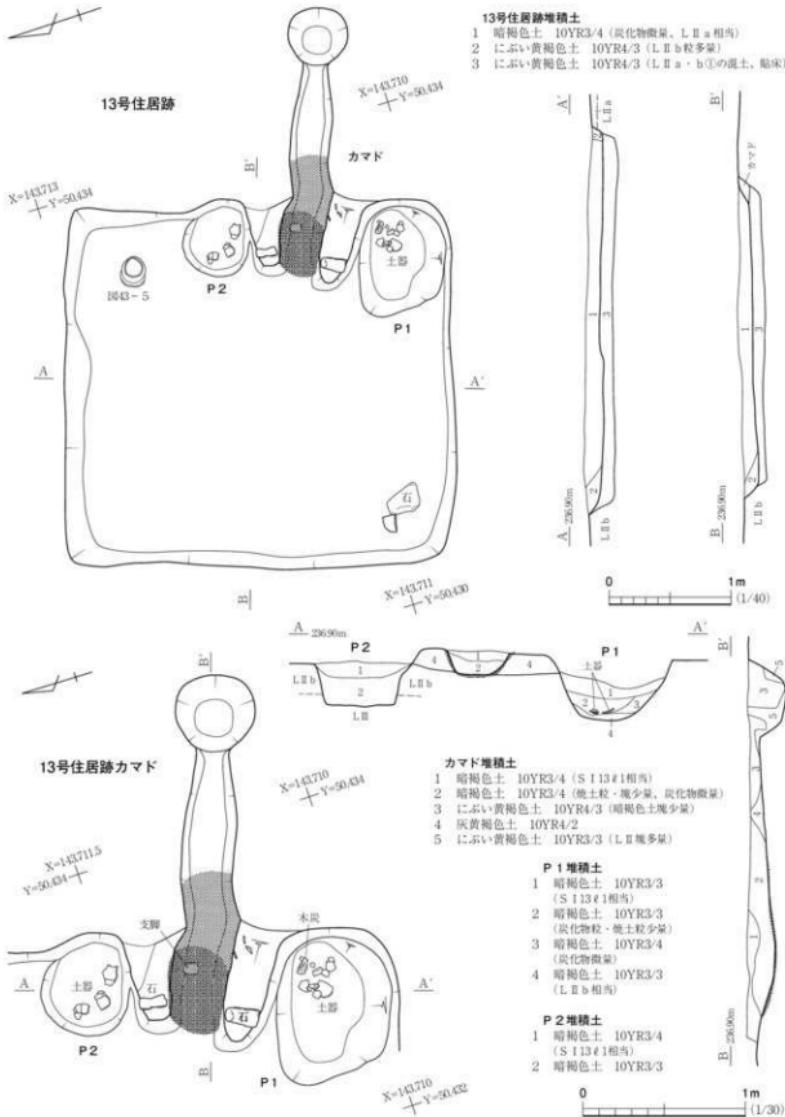


図42 13号住居跡

住居内の施設として、カマドとピットを確認した。カマドは東壁中央からやや南側に寄った位置に構築されている。カマドの遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。カマド内堆積土は5層に区分した。 ℓ 1は燃焼部に堆積した暗褐色土で自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は燃焼部から煙道にかけて堆積した暗褐色土である。焼土粒や炭化物を含み天井崩落土と考えている。 ℓ 3は煙道および煙出しピットに堆積したにぶい黄褐色の自然堆積土である。 ℓ 4は灰黄褐色土でL II bを主体とした袖の構築土である。 ℓ 5はにぶい黄褐色土で、煙出しピットの側面を埋めて煙突などを固定した人為堆積土と考えている。

カマドの規模は、全長230cm、最大幅100cmである。袖は、東壁面に直交するように住居内に張り出している。L II bを部分的に掘り残して基礎を作り、そこに ℓ 4を貼りつけて作っている。規模は、左袖が全長54cm、幅38cm、高さ12cmである。右袖は、全長74cm、幅50cm、高さ14cmである。左右の袖内部には芯材となる20×10cmほどの角礫が据えられていた。

燃焼部は、床面よりやや低く掘り窪められ、煙道に向かうにつれて、緩く傾斜している。使用面は、50×35cmの範囲で赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で3cm、袖内側で2cmである。燃焼部中央からやや北西に寄った位置には、砂岩を長方形に加工した支脚が据えられていた。

煙道は、住居跡の外側へ溝状に掘られており、先端には煙出しピットをもつ。燃焼部の規模は全長155cm、幅が30cmである。煙出しピットは、直径50cm、深さ23cmである。燃焼部東側から50cmの範囲は、強く焼けしており赤褐色に焼土化している。

ピットは、2基確認した。平面形は、いずれも楕円形ないし円形である。P 1とP 2はカマド南北にそれぞれ位置し、ともに貯蔵穴と考えている。P 1は直径90cm、深さ35cmである。堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土の堆積土、 ℓ 2～4は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土で、住居廃絶時にカマドを壊したときの構築材などで埋めた人為堆積土と考えている。P 2は直径60cm、深さ37cmである。ピットの堆積土は2層に区分した。いずれも暗褐色土で水平に堆積していることから人為堆積土と考えている。

遺物は、北東隅付近において、図43-5の甕が床面に逆位に置かれていた。また、床面南西隅からは、凹石が出土している。その他の遺物は、カマドの東側床面付近やP 1・2の堆積土、カマド堆積土などから散在して出土している。

遺物(図43、写真367・368)

遺物は土師器が150点、石器・石製品2点、鉄製品1点が出土した。このうち土師器5点、石器・石製品を2点、鉄製品を1点図示した。

図43-1～3は内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。3の底部にはヘラで「十」字状に線刻がされている。

4は小型の甕である。5は底部を欠損するロクロ成形の長胴形の甕である。胴部下半から底部にかけて表面に粘土がこびり付いており、カマドに据えられていた甕であろう。住居廃絶後にカマド

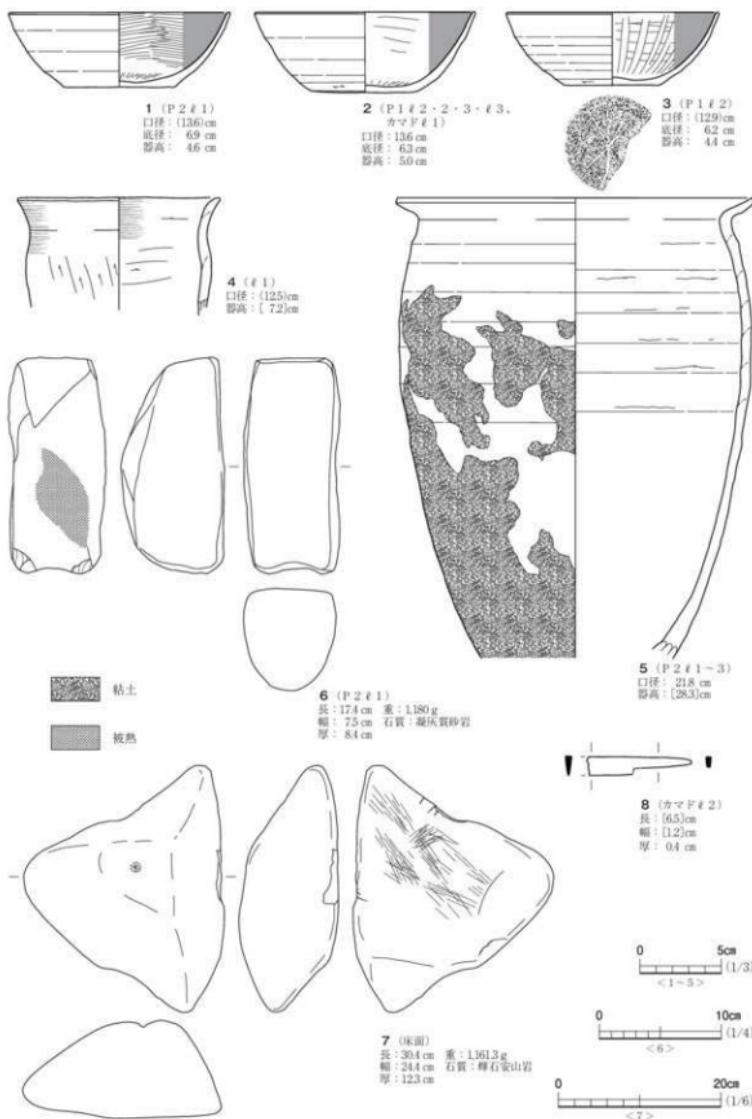


図43 13号住居跡出土遺物

を壊して取り出し、床面に逆位に遺棄したものである。

6は凝灰質砂岩を加工したカマドの支脚である。7は凹石である。凹部の反対側には線状の使用痕がみられる。8はカマド燃焼部の堆積土から出土した刀子である。刃部の先端を欠損する。

主とめ

本遺構は、一辺3.2mの方形の堅穴住居跡である。本遺跡で検出された平安時代の住居跡の中では、小型の住居跡の一つである。東壁側にカマドが構築されており、カマドの左右に貯蔵穴をもつていたと考えられる。床面の北東隅付近からは、土師器の甕が逆位に置かれていた。遺構の所属時期は、出土遺物から平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

14号住居跡 S I 14

遺構 (図44・45、写真29)

本遺構は、II区南東部のP-14グリッドに位置する。標高263.7m付近の平坦面に立地する。検出面は、L II b上面である。重複する遺構はない。1号溝跡の検出時に北西側において、暗褐色土と焼土が広がる範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は、3層に区分した。 ℓ_1 は暗褐色土である。層厚が薄く不明瞭だが、おおむね自然堆積土と考えている。 ℓ_2 は褐色土で、周壁側に三角状に堆積した土であることから、自然堆積土と考えている。 ℓ_3 はL II bを主体とする貼床土である。

平面形は、おむね方形である。規模は、 3.9×3.8 mである。方位は、西壁を基準とするなら、ほぼ真北を指す。周壁は、遺存状態の良い東壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも



図44 14号住居跡（1）

残りのよい東壁で16cmである。床面には貼床が施され、全体的に硬く締まっている。床面中央には $220 \times 80\text{cm}$ ほどの不整形なくぼみがある。くぼみの部分では踏み縮まりはみられない。くぼみの西側には、 $30 \times 25\text{cm}$ 、厚さ15cmの平たい自然礫が置かれていた。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、東壁中央から南側に寄って構築されている。遺存状態は悪く、左袖と右袖の基部、燃焼部、煙道から構成される。堆積土は5層に区分した。 $\ell 1$ は暗褐色土で自然堆積土と考えられる。 $\ell 2$ は暗赤褐色土で、焼土粒や炭化物を含む煙道に堆積した土で、カマドの天井崩落土と考えている。 $\ell 3$ は煙道に自然流入した黒褐色土である。 $\ell 4・5$ はL II bを主体とした袖の構築土である。

カマドの規模は、全長155cm、最大幅が105cmである。袖は、東壁面に直交するように住居内に張り出している。L II bを掘り残して基礎を作り、そこに $\ell 4・5$ を貼りつけて作っている。規模

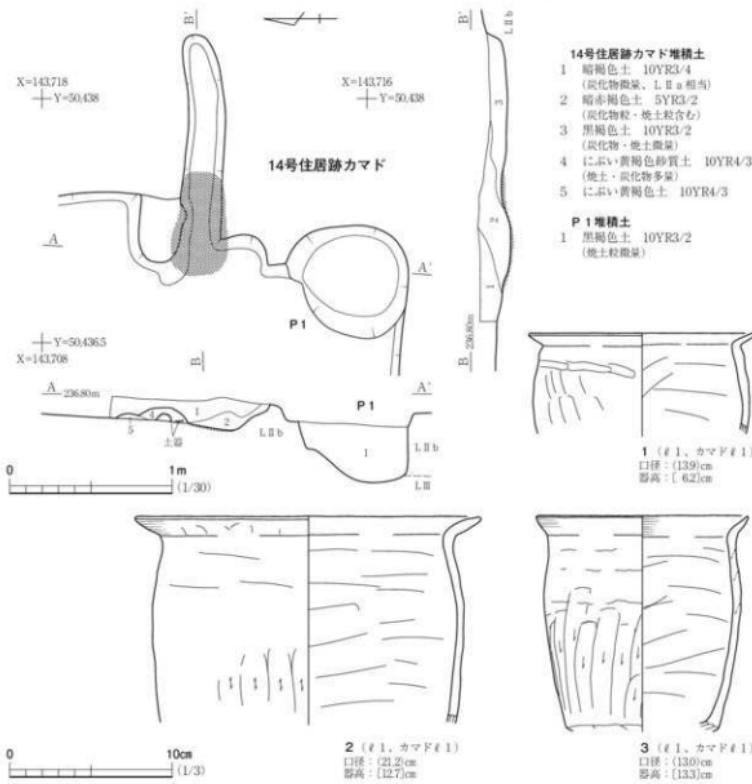


図45 14号住居跡（2）・出土遺物

は、左袖が全長50cm、幅40cm、高さ8cmである。右袖はほとんど壊されていたが、地山を掘り残した袖の基礎部分が遺存していた。右袖の規模は、全長20cm、幅45m、高さ20cmである。

燃焼部は、床面より3cmほど掘り窪め、煙道側へと緩く傾斜している。燃焼部底面は、60×35cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは、燃焼部底面で2cm、袖内側で1cmである。煙道は、東壁面に直交するように住居跡の外側へ溝状に掘られている。規模は、全長100cm、幅20cm、深さが最大で16cmである。底面は、床面に対しておおむね平坦に掘りこまれている。

ピットは、2基確認した。平面形は、いずれも梢円形ないし円形である。P1は、カマドの南側に位置し、貯蔵穴と考えられる。規模は、直径75cm、深さ35cmである。P2は、カマドの前面や西側に位置する。規模は、直径30cm、深さ37cmである。ピットの堆積土はいずれも焼土粒と炭化物を含む暗褐色土で自然堆積土と考えている。

遺物は、カマド堆積土や住居跡の堆積土から散在して出土した。カマドの堆積土から出土したもの以外は破片資料がほとんどで、遺構外から流れ込んだ遺物と考えている。

遺物(図45、写真368)

遺物は土器53点が出土した。このうち3点を図示した。図45-1・3は、壺である。2は長胴形の壺である。

まとめ

本遺構は、東壁にカマドをもつ一辺39mの方形の竪穴住居跡である。南東隅に貯蔵穴をもつ。床面の中央には不整形なくぼみを確認している。所属時期は出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

15号住居跡 S I 15

遺構(図46、写真30・266・271)

本遺構は、I区東部のS-14グリッドに位置する。標高236.4mの平坦面に立地する。遺構検出面はLIV上面で、方形に広がる褐色土の範囲を確認した。遺構周辺は、大規模な擾乱により、上部を壊されており、遺構の掘り込み面は現状より上層であったと推測している。16号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

堆積土は4層からなる。ℓ1～3は、LIIIbに対応する堆積土や、壁ぎわの崩落に伴って流入したLIVの再堆積層で構成される。いずれも自然堆積土と考えられる。ℓ4はLIV～Vを主体とする貼床土である。

平面形は、東西方向に長い長方形である。規模は、6.0×5.3mである。周壁は、床面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は、最大で50cmである。方位は、西壁を基準とするなら、北に対して約15度西に傾く。床面は、貼床やLIVが踏み締めた状態で確認された。多少の凹凸が認められるが、おおむね平坦な状態である。

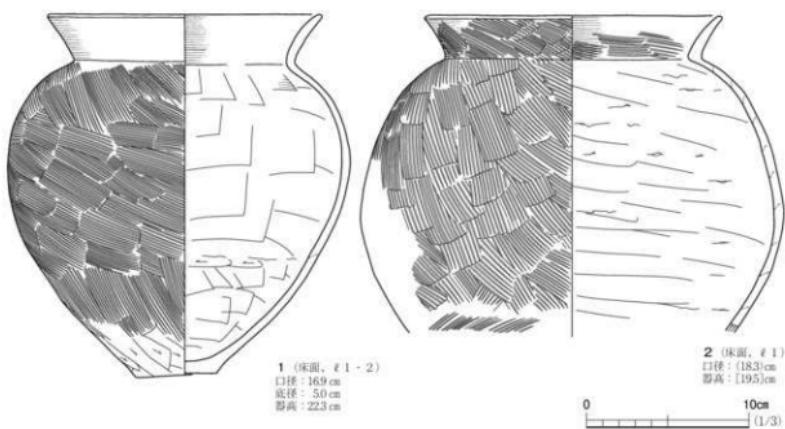


図46 15号住居跡・出土遺物（1）

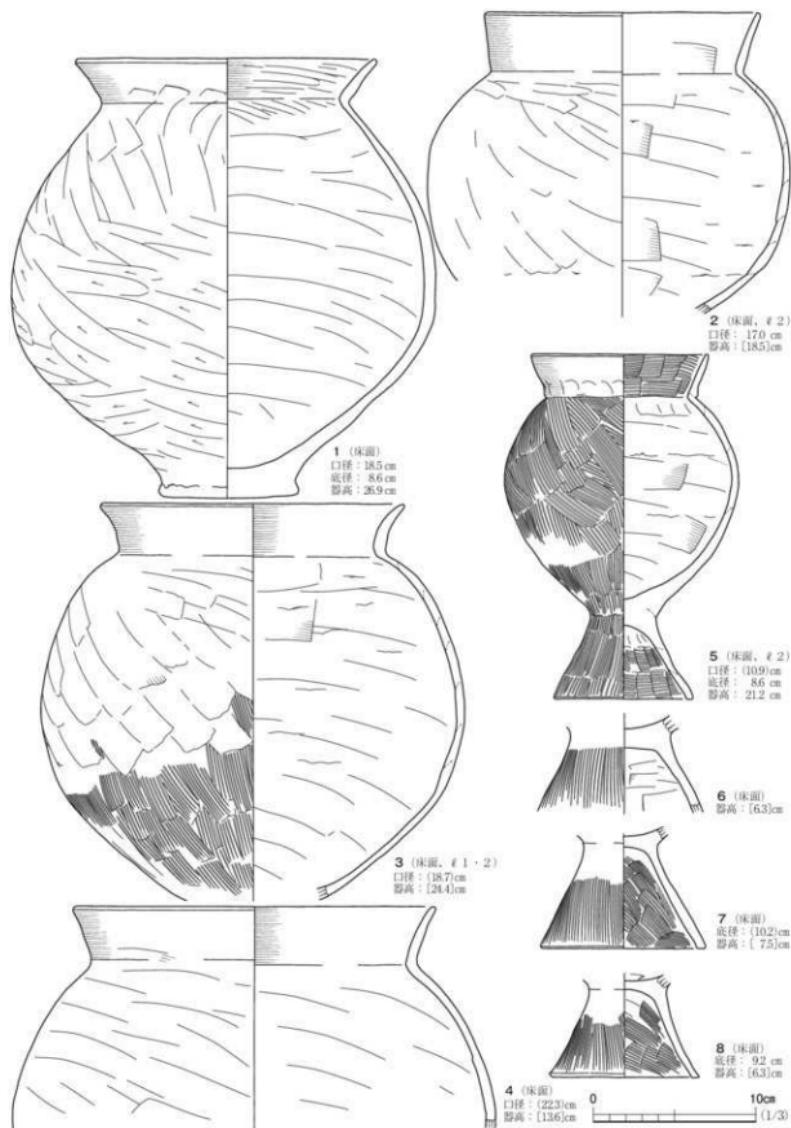


図47 15号住居跡出土遺物（2）

住居内の施設は、地床炉1箇所とピット3基である。地床炉は遺構中央に位置する。平面形は南北に長い不整な楕円形である。規模は、長軸70cm、短軸50cm、焼土化した部分の厚さは床面から最大6cmである。炉の南側縁辺部には、長軸30cm、短軸15cm、高さ15cmの自然石が設置されている。石は炉面より2~3cmほど高くなるように据えられている。

ピットは床面を掘り下げる段階で3基確認された。炉を挟んで西側にP1、東側にP2が位置する。P3は、炉のやや南西側に位置する。ピットは直径が20~46cm、深さが15~50cmである。堆積土はいずれもにぶい黄褐色である。P1・2は床面では検出できなかつたが、位置関係から柱穴だった可能性も考えられる。

遺物は、地床炉を中心に北東隅から西壁中央にかけて床面上から数点の土師器が出土している。いずれも床面に密着した状態で出土しており、住居廃絶時に遺棄された遺物である。

遺物(図46・47、写真368)

本遺構からは、土師器が462点出土している。このうち10点を図示した。

図46-1・2、図47-1~4は、頸部から口縁部にかけて「く」字状に外反する球胴形の壺である。図46-1・2は、外面にハケメ調整を施す。図47-1はナデ調整の後、体部下半にケズリ調整、2・4は外面にナデ調整を施す。3はハケメ調整後にヘラナデ調整を施す。

5は、ほぼ完形の小型の台付壺である。6~8は、台付壺の台部片である。

まとめ

本遺構は、6.0×5.0mの長方形の住居跡である。炉の縁辺部には自然石を設置していた。遺構の床面に密着した状態で、壺や台付壺を主体とする土師器が比較的まとまって出土している。遺構の所属時期は、出土土器の年代観から古墳時代前期と推定される。

(小暮・中野)

16号住居跡 S I 16

遺構(図48、写真31・266)

本遺構は、I区東部のS-14・15グリッドに位置する。標高236.3mの平坦面に立地する。遺構検出面は、LIV上面である。15号住居跡の検出時に、方形に広がる褐色土の範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複遺構は15号住居跡で、本遺構が古い。

堆積土は6層に区分した。ℓ1~3は、LIIIbに近い色調の堆積土である。ℓ4は、壁ぎわの崩落に伴って流入したLIVの再堆積層である。いずれも自然堆積土と考えられる。ℓ5は炭化物を含む黒褐色土や褐色砂質土などの混土である。床面中央に薄く堆積しており人為的な堆積土の可能性がある。ℓ6は貼床土である。

平面形は、15号住居跡に北側の大半を壊されており、明確にできないがおおむね長方形と推定している。遺構の規模は東西の遺存長が6.4mである。周壁は床面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は、おおむね50cmである。遺構の方位は、南壁を基準とするなら北に対して東に70度傾く。床面は貼床やLIV上面が踏み締まっており、表面に多少の凹凸があるが、おおむね平坦である。

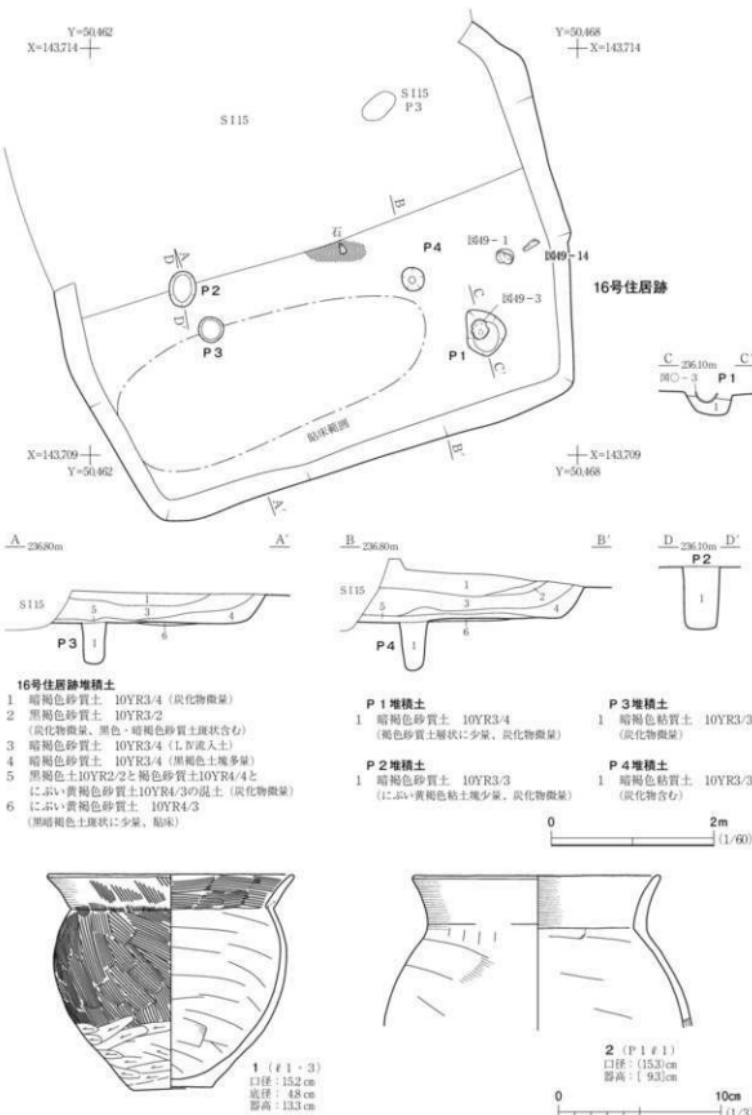


図48 16号住居跡・出土遺物（1）

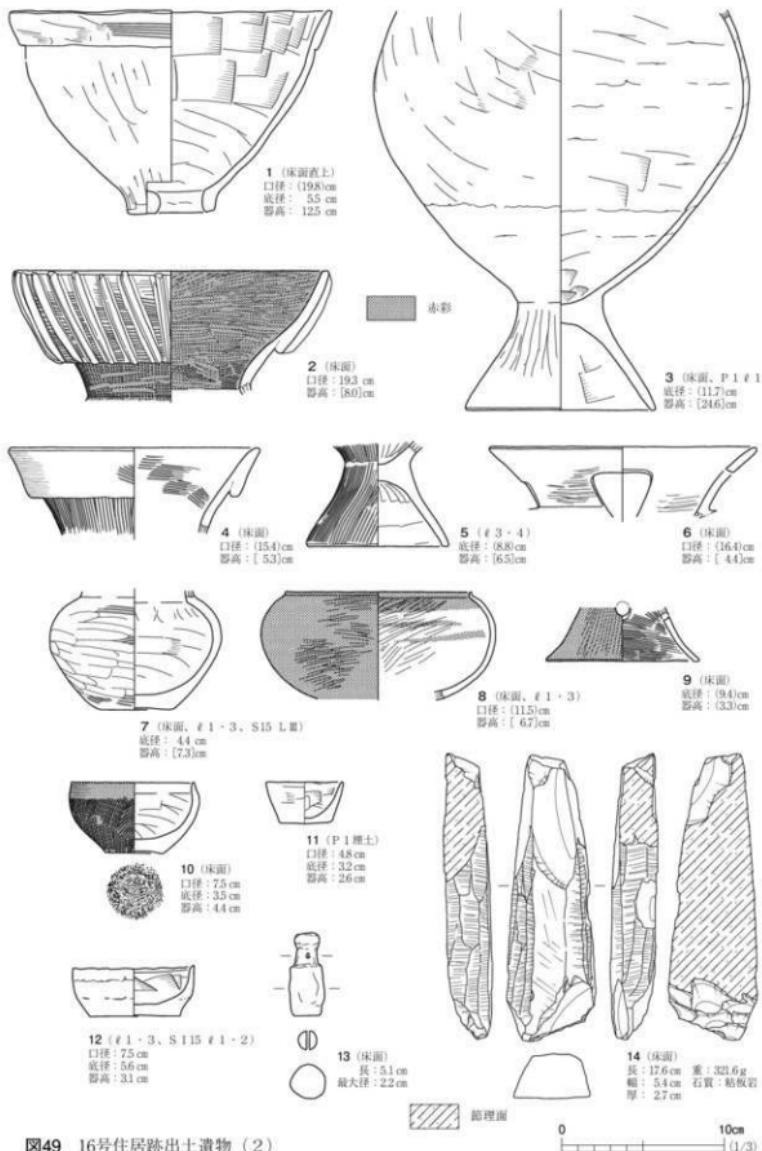


図49 16号住居跡出土遺物 (2)

住居内施設は、地床炉とピットである。地床炉は遺構のほぼ中央に位置する。平面形は東西に細長い楕円形である。16号住居跡に北側を壊されている。規模は長軸70cm、短軸20cm、焼土化した範囲は、床面から最大2cmの深さにおよぶ。炉の中央には15cmほどの石が置かれている。

ピットは4基検出した。P1が貯蔵穴、P2~4が柱穴と判断している。P1は南東隅に位置する。規模は、60×50cm、深さ20cmである。P3・4が東西に並ぶ配置に位置し、住居の主柱穴と考えられる。規模は、直径20~30cm、深さが50~55cmである。P4は、直径40cm、深さ75cmである。ピットの堆積土は、暗褐色の砂質土か粘質土である。

遺物は、地床炉の周辺や南東隅のP1周辺の床面上から、数点の土師器や土製品が出土している。P1の堆積土からは、図49-3の台付壺が出土した。

遺物(図48・49、写真369)

本遺構からは、土師器113点、土製品1点、石製品1点が出土している。このうち、土師器14点、土製品1点、石製品1点を図示した。

図48-1・2は球胴形の壺である。1は、ほぼ完形のハケメ調整を施した壺である。図49-1は、複合口縁の有孔鉢である。2は棒状浮文を施した装饰壺である。口縁部のみが出土した。外面にハケメ調整を施したのち、棒状浮文をほぼ等間隔に貼り付けている。内面は丁寧にミガキ調整を施す。外面の頸部と内面とに赤彩を施すが、外面の複合部には赤彩を施さない。

3は台付壺である。口縁部を欠損している。4は複合口縁壺の口縁部である。口縁部外面にヨコナデ、頸部外面と内面にハケメを施す。5は台付壺の台部片である。外面にハケメが施される。

6は結合器台の受け部上半部である。逆三角状の透かしが4方向に穿たれる。内外面ともに丁寧にヘラミガキが施されている。

7は、口縁部が欠損している小型の壺である。8は内外面に赤彩を施した鉢である。9は器台か高杯の脚部片である。

10~12は、平底の小型の鉢である。10は、外面にハケメ調整を施し、赤彩を塗布する。

13は、分銅のような形態の土製品である。上部がつまみ状に成形され、孔が穿たれている。砧などの木製品を模したものかもしれない。

14は、一部に節理面を残す砥石である。

まとめ

本遺構は、6.0mほどの方形ないし長方形の住居跡である。15号住居跡に北側を壊されているが、地床炉と貯蔵穴、柱穴などが検出された。遺構の床面からは、比較的多くの土器が出土し、土製品も出土している。所属時期は、出土遺物の年代観から古墳時代前期と推定される。(小暮・中野)

18号住居跡 S I 18

遺構(図50、写真32)

本遺構は、I区南東部のR-14・15グリッドに位置する。標高236.2mに立地する。検出面はL

IV上面で、方形に広がるにぶい黄褐色土の範囲を確認した。重複する遺構は90号住居跡であり、本遺構が新しい。南西側に4・5号住居跡、南東側に7号住居跡、北側に15・16号住居跡が接近している。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1～3はレンズ状に堆積することから、自然堆積土と考えられる。

平面形は、隅丸方形である。規模は $29 \times 28\text{m}$ である。周壁は床面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は最大で 38.5cm である。方位は、東壁を基準とするなら北に対して 26° 西に傾く。床はL IVをそのまま床面として利用していた。住居内の施設は確認できなかった。

遺物は、床面および堆積土から散発的に出土している。

遺物(図50)

遺物は、土師器が27点出土した。このうち土師器2点を図示した。

図50-1は口縁部から胴部下半まで遺存する球胴形の壺である。内外面にヘラナデを施す。2は小型の鉢である。外面には、念入りにヘラミガキ調整を施し、赤彩を塗布する。

まとめ

本遺構は、一辺 29m の隅丸方形の堅穴住居跡である。地床炉や柱穴などの住居内の施設は確認されなかった。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。(小暮・中野)

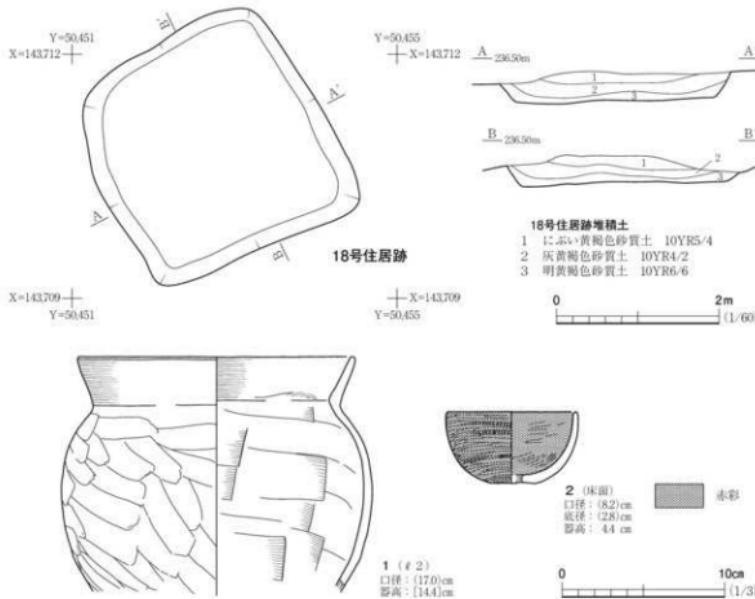


図50 18号住居跡・出土遺物

20号住居跡 S I 20

遺構（図51、写真33）

本遺構は、I区東部のP-13グリッドに位置する。標高236.6mの平坦面に立地する。検出面は、L II b上面である。14号住居跡の北側を検出時に、暗褐色土と焼土が広がる範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構はない。

堆積土は、炭化物を少量含む暗褐色土の単層である。層厚が薄く判断が難しいが、基本土層のL II a①～②が流入した自然堆積土と考えている。

平面形は、南北方向に長い長方形である。規模は、3.6×28mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で12cmである。方位は、西壁を基準とするなら北に対して5度東に傾く。床面は、L II b③に平坦に作られ、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設はカマドとピットを確認した。カマドは、東壁中央やや南側に構築されている。遺存状態は比較的良好く、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は5層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色土で自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は焼土粒を多く含む暗褐色土で天井崩落土である。 ℓ 3・4はカマド袖の土である。 ℓ 5は煙道に自然流入した褐色砂質土である。

カマドの規模は、全長187cm、最大幅が90cmである。袖は東壁に直交するようにつくられている。左袖は地山を三角状に掘り残して、袖の芯部を作っており、その上に ℓ 3・4を貼りつけていく。袖の規模は、左袖が全長40cm、幅36cm、高さ20cmである。右袖は、全長38cm、幅40cm、高さ18cmである。燃焼部は、床面より低く窪んでいる。底面は強く焼けており、直径33cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で1cmである。煙道は残りが悪く、途切れ途切れに検出された。燃焼部側から徐々に浅くなり、先端部にかけて再び深くなる構造と考えている。断面は「U」字状を呈する。煙道の規模は全長126cm、幅42cm、深さ12cmである。

ピットは3基確認した。平面形は、いずれも梢円形ないし円形である。P 1は、カマドのすぐ南側に位置し、貯蔵穴である。規模は、長軸105cm、短軸90cm、深さ32cmである。P 2は、床面の北側中央に位置する。規模は直径70cm、深さ25cmである。P 3は、P 2の西側に位置する。規模は直径50cm、深さ24cmである。ピットの堆積土は、P 1が焼土粒を含むにぶい黄褐色の自然堆積土である。P 2・3がL II b粒を多く含む褐色土で、人為的に埋めた土と考えている。

遺物はカマド堆積土内から比較的まとまって出土している。また、P 2堆積土上部より土師器の杯が1点出土している。これらは遺構に伴う遺物と考えている。

遺物（図52、写真369）

遺物は土師器54点が出土した。このうち土師器7点を図示した。

1～2は、ロクロ成形の土師器の杯である。1・2は回転ヘラケズリで再調整し、内面はミガキ

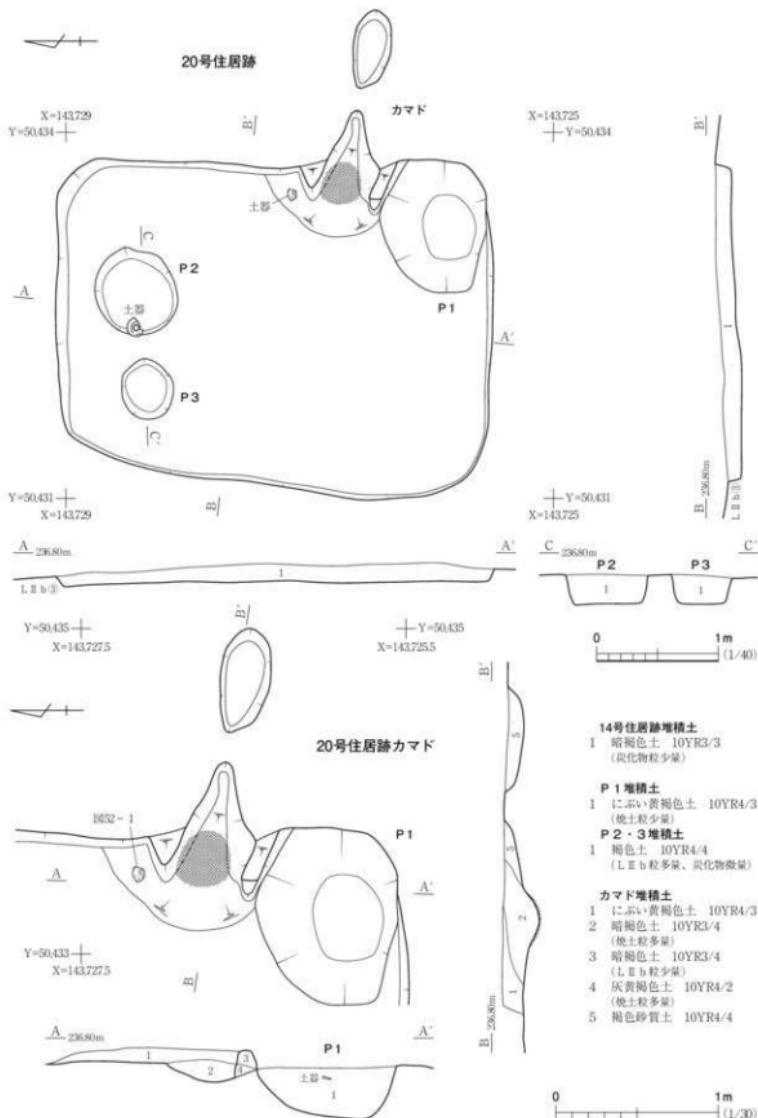


図51 20号住居跡

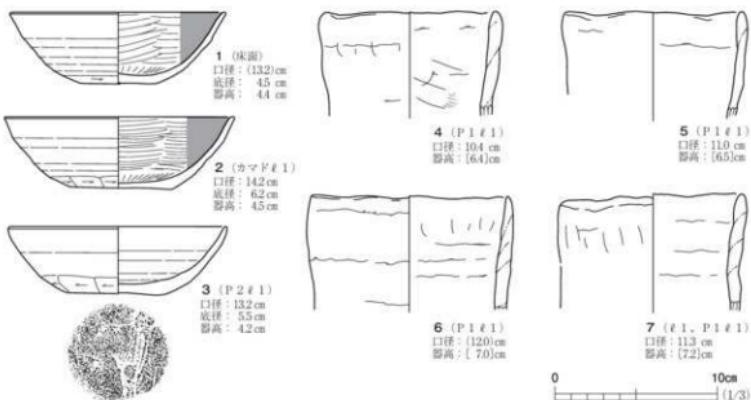


図52 20号住居跡出土遺物

のうち黒色処理を施す。3はロクロ成形で外面底部に手持ちヘラケズリで再調整を施し、内面にロクロナデを施す。赤焼土器と思われる。

4~7は、筒形土器である。すべて口縁部から胴部にかけての資料で、底部を欠損する。器壁には輪積み痕が残り、胎土内には骨針状の白色物質が含まれる。

まとめ

本遺構は、東壁側にカマドと貯蔵穴をもつ長方形の堅穴住居跡である。出土遺物に筒形土器が比較的多く出土している点が特徴的である。遺構の所属時期は、出土遺物などから、平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

21号住居跡 S I 21

遺構 (図53、写真34)

本遺構は、I区中央部のO-12・13グリッドに位置している。標高236.4mの平坦面に立地する。検出面はL II b上面で暗褐色土や焼土が堆積する範囲を確認した。検出された状況や、それぞれの位置関係から、床下の掘形のみが遺存した住居跡と判断した。

平面形は南北方向に長い長方形と推測している。規模は、推定長で4.2×4.0mである。堆積土は、ほとんど失われているが、周溝に堆積した土層は暗褐色砂質土である。

住居内の施設は焼土範囲とピット、周溝である。焼土範囲は、直径42cmにわたって赤褐色に焼土化している。その厚さは底面で3cmである。おそらくカマドの燃焼部の底部を検出したものと思われる。

ピットは、3基確認した。P 1は、焼土範囲のすぐ南側に位置し貯蔵穴と考えられる。平面形は、南北に長い長方形を呈する。規模は、長軸80cm、短軸70cm、深さ12cmである。P 2は、住居



図53 21号住居跡

南部の中央に位置する。規模は、長軸70cm、短軸55cm、深さ10cmである。P 3は、焼土範囲の西側に位置する。規模は、直径70cm、深さ12cmである。ピットの堆積土は、L II bを主体とするにぶい黄褐色砂質土である。堆積過程は不明である。

周溝は、北壁ぎわと東壁ぎわの北部で確認した。断面は「U」字状を呈する。底面には凹凸が多い。北壁ぎわで検出した周溝の規模は、全長2.6m、幅46cm、深さ20cmである。東壁ぎわで検出した周溝は、全長80cm、幅20cm、深さ8cmである。

遺物は磨滅した土師器の小片が14点出土している。図示した資料はないが、土師器の器種の内訳は、杯が1点、甕が13点である。杯は内面黒色処理を施したロクロ成形の土師器である。甕は長胴甕の小片である。

まとめ

本遺構は、4.2mの長方形の堅穴住居跡と考えられる。床面直上まではほとんどが削平されており、カマドの底面とピット、周溝が検出された。遺構の所属時期は、出土遺物や遺構の検出状況などから平安時代、9世紀頃と考えている。
(中野)

22号住居跡 S I 22

遺構 (図54・55、写真35・36)

本遺構は、I区西部のL-12グリッドに位置している。標高236.5mの平坦地に立地する。検出面はL II b上面で、方形に広がる炭化物や焼土粒を多く含む暗褐色土の範囲を確認した。重複する遺構は23号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は8層に区分した。 ℓ 1・2は焼土粒や炭化物を含む暗褐色砂質土であり、自然堆積土である。 ℓ 3は炭化材や焼土粒を多く含む暗褐色砂質土の人为堆積土である。 ℓ 4はカマドの周囲に堆積するL II b粒を多く含む暗褐色土である。 ℓ 5は焼土粒を多量に含むP 2堆積土である。 ℓ 6・7は貼床土である。 ℓ 8はP 4の堆積土である。

堆積土中の焼土と炭化材は、 ℓ 3から床面にかけてみられる。炭化材は、周壁側に比較的集中する傾向があり、カマド南側や北西側の隅付近では住居の中心から一部放射状に並ぶものもみられる。これらは垂木などの部材の可能性も考えられる。しかしながら、柱や梁のような建物の主要部材と明確にわかるものはない。焼土粒については住居北部を中心に堆積しているが、住居の周壁側では他の焼土粒と異なるやや橙色をした5~30cmほどの焼土塊が出土している。これらは、屋根材の土の一部が焼けて住居内に落ち込んだものと考えられる。

平面形は南北方向に長い長方形で、規模は4.3×3.6m、周壁は遺存状態の良い北壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している南壁で40cmである。方位は東壁を基準とするなら北に対して東に約10度傾く。床面には貼床が施され、全体的に硬く締まり、平坦となっている。

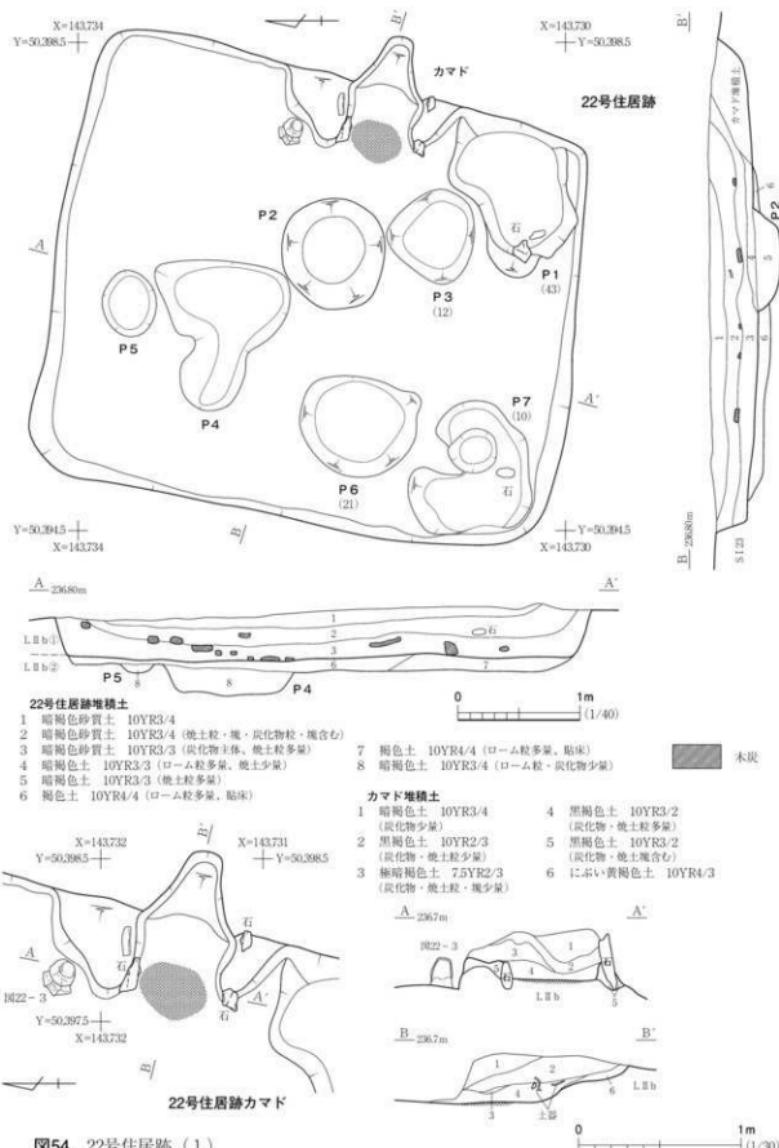
貼床を取り除くと5基の床下ピットが検出された。床下ピットは平面形が椭円形ないし不整形である。規模は70~120cm、深さは10~28cmである。堆積土はいずれもL II bを多く含む暗褐色の人为堆積土である。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、東壁中央部に構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は6層に区分した。 ℓ 1・2は暗褐色土と黒褐色土で住居堆積土の ℓ 3に対応すると考えられる。 ℓ 3・4・6は焼土粒を含む暗褐色砂質土、暗褐色土および褐色土でカマドと煙道の天井を潰した際の崩落土である。 ℓ 5は袖の構築土である。カマドの規模は、全長103cm、最大幅が150cmである。袖は、東壁に直交するよう住居内に張り出している。規模は、左袖が全長60cm、幅60cm、高さ20cmである。右袖は全長50cm、幅38cm、高さ36cmである。左右の袖には、芯材となる角縁を3個用いていた。

燃焼部は、床面より2cmほど高く作られていた。底面はよく焼けており直径43cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは、燃焼部底面で2cmである。煙道は、住居からあまり張り出さず、短いのが特徴である。底面は、燃焼部側から徐々に傾斜しながら、端部に行くにつれて浅くなる。規模は、全長74cm、幅60cmである。

ピットは、2基確認した。P 1は、カマドのすぐ南側に位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形は、不整形で住居跡の隅に掘り込まれている。規模は100×120cm、深さ43cmである。P 2は、カマドの焚口より少し西側に位置する。平面形は円形である。規模は、直径85cm、深さ24cmである。ピットの堆積土は、P 1が焼土粒を少量含む暗褐色土、P 2が焼土粒を多く含む暗褐色土である。いずれもカマドを壊した際の土で埋めているものと考えている。

遺物は、カマド堆積土やP 1堆積土などから散在して出土している。左袖の西側床面には図55-3の甕が逆位に置かれていた。



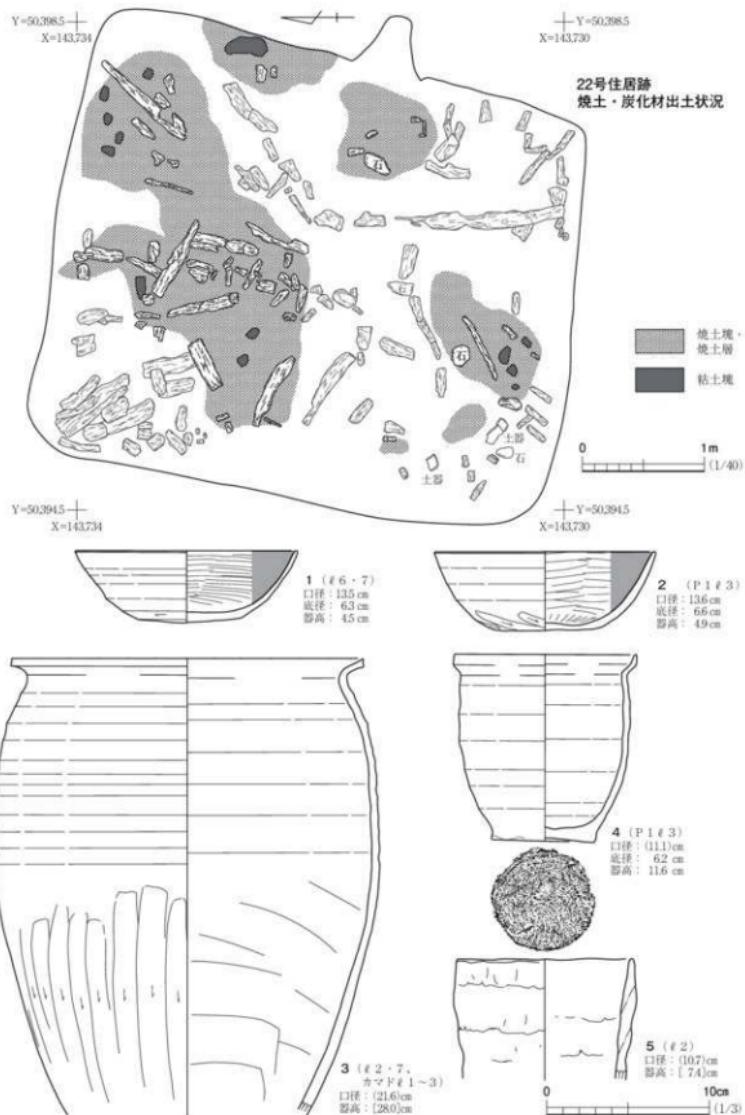


図55 22号住居跡（2）・出土遺物

遺物(図55、写真370)

遺物は、土師器が351点出土した。このうち土師器5点を図示した。

図55-1・2は、内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。3は、ロクロ成形の長胴形の壺である。底部が欠損している。4は、ロクロ成形の小型の壺である。底部に回転糸切りの痕跡がみられる。5は筒形土器である。

まとめ

本遺構は、東壁中央にカマドをもつ長方形の竪穴住居跡である。床面から堆積土の下層にかけて炭化材や焼土粒が多量に出土することから、火災に遭った住居と考えられる。炭化材は、一部住居跡の中央に向かって放射状に向いているものもみられるが、主柱穴や梁材などの主要部材は特定できていない。遺構の所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。(中野)

23号住居跡 S I 23

遺構(図56・57、写真37・268)

本遺構はI区西部のK・L-12グリッドに位置する。標高236.4mの平坦面に立地する。検出面は、L II b②である。検出当初は、L II a③を主体とする9mほどの大型の住居跡として調査を開始したが、調査が進むにつれて、L II a③を取り除くと一回り小さい長方形であることが判明した。重複する遺構は22号住居跡であり、本遺構のほうが古い。直接重複しないが、225号住居跡が下層に位置する。

堆積土は9層に区分した。ℓ 1はL II a③に対応する暗褐色砂質土、ℓ 2・3はL II b①に対応する褐色砂質土とにぶい黄褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。ℓ 4はにぶい黄褐色砂であり、これらも自然堆積土であるが北側に偏って分布している。ℓ 5~7は褐色砂質土、暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土である。焼土粒や炭化物粒も比較的多く含み、水平に堆積する土層であることなどからも人為堆積の可能性も考えられる。ℓ 7から床面の東側にかけて、炭化材や焼土の集積がみられる。ℓ 8・9は周壁などの崩落土である。

平面形は、おおむね長方形である。規模は6.2×5.4mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、残りの良い北壁で40cmである。西壁の一部は、上端の線が不明瞭であった。住居の方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して西に約40度傾く。床面は、L II b下面からL III上面にかけて構築しておりおおむね平坦で、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設は、カマドと地床炉、ピットである。カマドは、北壁中央からやや東側に寄って構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は、12層に区分した。ℓ 1・2はにぶい黄褐色土と砂質土で燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土と考えられる。ℓ 3~6は焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。ℓ 7・8は燃焼部に堆積した焼土粒炭化物を含む土である。ℓ 9は煙道内に自然流入した堆積土である。ℓ 10~12はL II bを主体とした袖の構築土である。ℓ 11は袖の芯材の石を固定するための人為堆積土である。

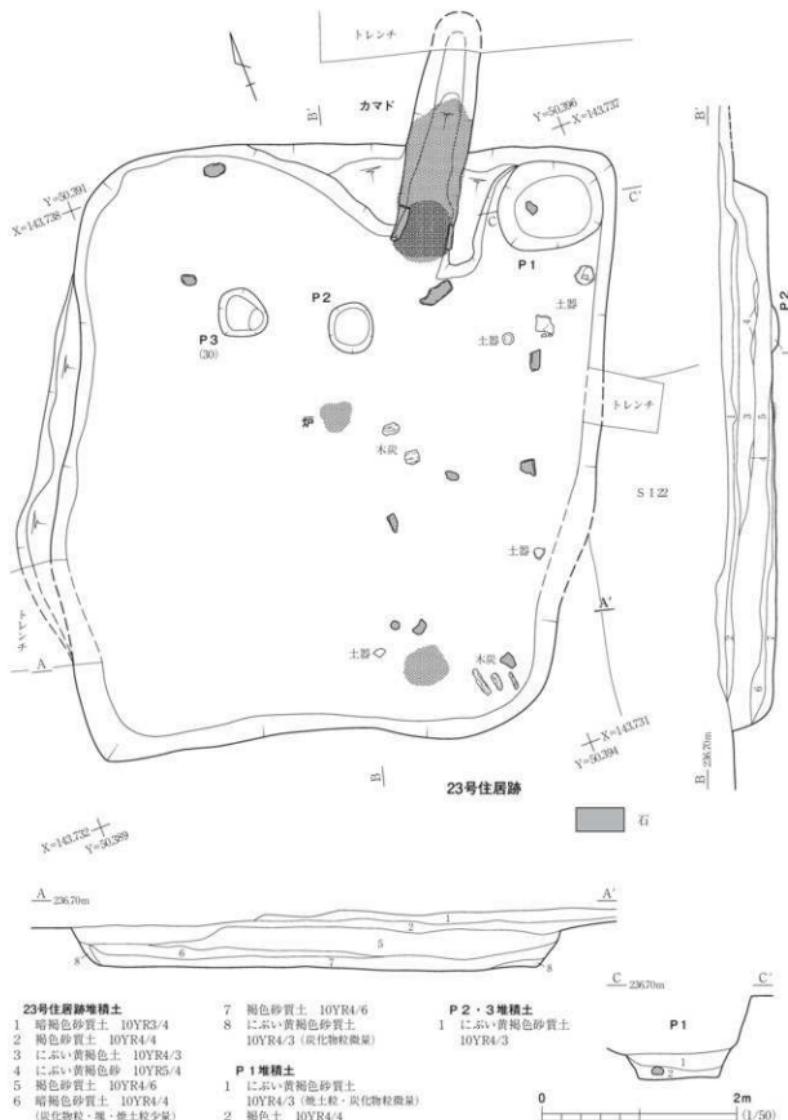


図56 23号住居跡 (1)

カマドの平面形は、煙道が住居の主軸に対してやや東側に5度ほど傾くのが特徴的である。カマドの規模は、土層観察用のトレンチで煙道の先端を壊してしまったが、推定長270cm、最大幅230cmである。袖は北壁に対して、10度西に傾くように住居内に張り出す。左右の袖内部には芯材となる30×13cmほどの角礫が据えられていた。規模は、左袖が全長105cm、幅136cm、高さ28cmである。右袖は、全長110cm、幅70cm、高さ18cmである。

燃焼部は、底面が煙道側へ高くなるように緩く傾斜している。底面は、直径46cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で3cmである。煙道は、袖同様に東壁に対して、10度東側へ傾くように住居跡の外側へ溝状に掘られている。規模は、遺存長100cm、幅66cmである。底面は、煙出しに向かって高くなるように緩く傾斜して掘りこまれている。断面形は、「U」字状を呈する。煙道の壁面は、燃焼部側が強く焼けており、長さ110cm、幅60cmにかけて焼土化している。

地床炉は、床面のはば中央で1箇所確認した。平面形は円形である。規模は直径20cmである。赤褐色に強く焼土化しており、焼土化した部分の厚さは2cmほどである。

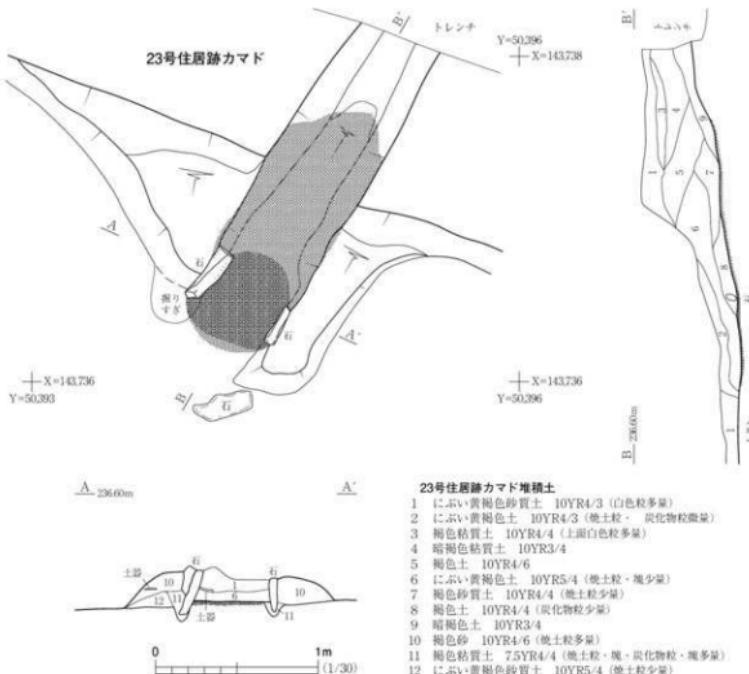


図57 23号住居跡（2）

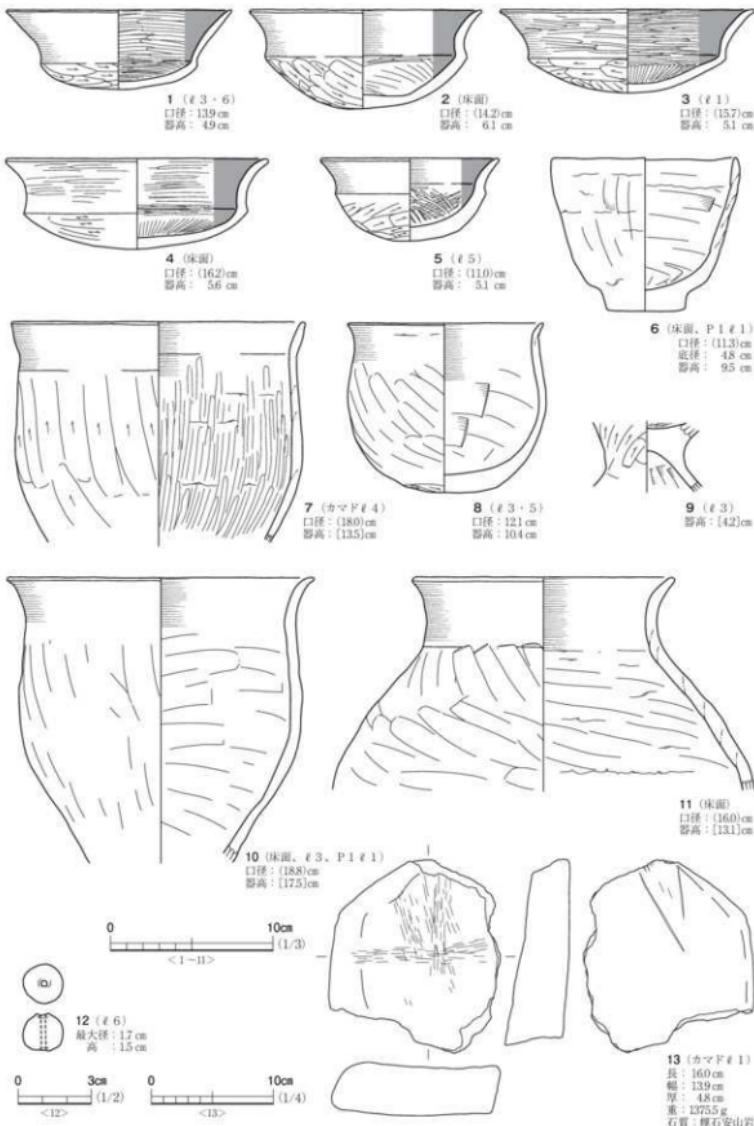


図58 23号住居跡出土遺物

ピットは3基確認した。平面形は、いずれも梢円形ないし円形である。P 1は、カマドの東側に位置し、貯蔵穴と考えている。直径は110cm、深さ28cmである。P 1の堆積土は、2層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 2は褐色土である。水平に堆積することから、人為的に埋めた土と考えている。P 2は、カマドの南側に位置し、直径48cm、深さ20cmである。P 3は、P 2の西側に位置し、直径52cm、深さ28cmである。P 2・3の機能は明らかでない。P 2・3の堆積土は、いずれもL II b粒を多く含むにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、北東隅の床面やカマド内堆積土、P 1堆積土から出土した。

遺物(図58、写真370)

遺物は、土師器202点、土製品1点、石製品1点が出土した。このうち土師器11点、土製品1点、石製品1点を図示した。

図58-1～5は杯である。口縁部が外反し、断面が「く」字状になる稜をもつ丸底の杯である。内面はいずれもミガキのち黒色処理を施す。

6・8は鉢である。6は口縁部が直線的に外傾し、底部が張り出す。8は口縁部が緩く外反し、丸底ぎみの鉢である。

7・10は、底部が欠損しているが壺である。11は壺である。11はやや胴部が張り出す。9は高杯の脚部片である。

12は土製の丸玉である。13は砥石である。平たい礫で、表面と裏面に線状の使用痕がみられる。

まとめ

本遺構は、北壁側にカマドをもつ、長方形の堅穴住居跡である。床面中央では、地床炉1箇所が検出された。堆積土下層や床面の一部に、炭化材や焼土がみられることから、焼失住居の可能性も考えられる。所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

24号住居跡 S I 24

遺構(図59、写真38・271)

本遺構は、I区西部のK-11グリッドに位置している。標高236.5m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b②である。重複する遺構は45号住居跡、2・3号溝跡である。本遺構が45号住居跡より新しく、2・3号溝跡より古い。

堆積土は6層に区分した。 ℓ 1はL II a③に対応する暗褐色砂質土、 ℓ 2はL II b①に対応する暗褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3はにぶい黄褐色土で、レンズ状に堆積していることから自然堆積土である。 ℓ 4は壁ぎわに三角状に堆積した暗褐色土の自然堆積土である。 ℓ 5は住居北部から北西隅に堆積する焼土粒や炭化物を含む土層である。遺物や礫を多く含む土層で、おそらく住居廃絶時にカマドを壊した土や礫を捨てた人為堆積土と考えている。 ℓ 6は焼土や炭化物を含む暗褐色土で、カマド周辺に堆積している土層である。

平面形は、東西に長い長方形である。規模は63×50mである。周壁は遺存状態の良い北壁側で

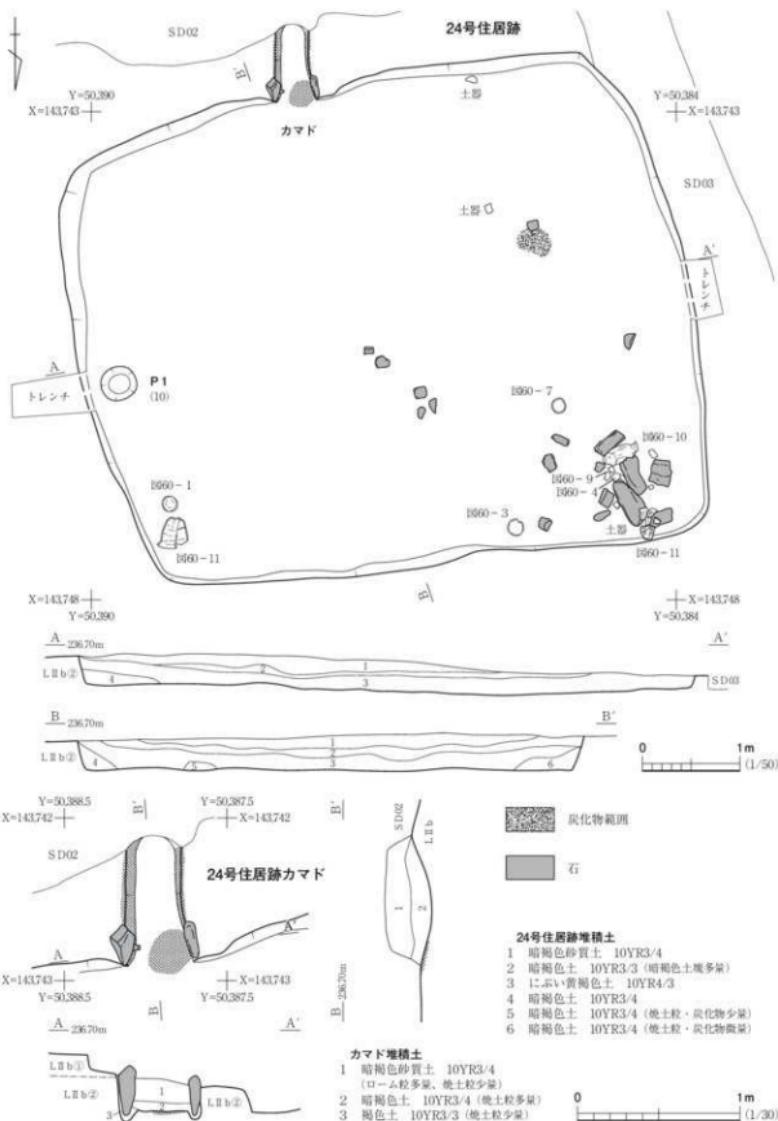


図59 24号住居跡

70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で26cmである。住居跡の方位は、残りの良い東壁を基準とするなら南に対して東に約5度傾く。床面は、L II b ③からL IIIにかけて構築しておりおむね平坦に作られ、全体的に硬く縮まっている。床面の規模は、6.1×4.9mである。床面中央よりやや南西側からは、30×20cmの範囲で炭化物粒の集積が確認された。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、南壁中央や東側に構築されている。遺存状態は悪く、燃焼部と煙道から構成される。燃焼部が周壁外へ出る形態のカマドである。堆積土は3層に区分した。 ℓ 1は暗褐色砂質土で燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は焼土粒や炭化物を多く含む暗褐色土である。 ℓ 3は褐色土で、袖の芯材の石を固定するための人が堆積土である。カマドの規模は、2号溝跡により煙道の先端を壊されているが、遺存長90cm、最大幅が53cmである。袖は検出していない。周壁から左右袖の接点には、左右それぞれに芯材となる30×10cmほどの角礫が据えられていた。燃焼部は、底面が2cmほど床面より低くなるように建んでいる。底面はあまり焼けておらず、直径28cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で1cmである。煙道は、長さ50cmにわたって壁面が焼土化している。壁面の焼土化範囲の厚さは2cmである。

ピットは、1基確認した。平面形は円形で、東壁側の中央部に位置する。規模は、直径36cm、深さ10cmである。堆積土は、L II b粒を多く含む褐色土である。

遺物は、床面の北東隅と北西隅付近の ℓ 5から比較的まとまって出土している。特に北西隅においては、10×20cmほどの規模で被熱を受けた碟や、図60-9・10の壺や1~4の杯が出土している。カマドの袖が失われていたのは、おそらく住居廃絶時にカマドをことごとく壊したものと推測され、住居跡の北壁側に堆積していた遺物や焼土や炭化物を含む ℓ 5は、カマドを破壊した際の碟や土器などを廃棄したものと考えている。11の瓶は、半分が北東隅から、もう半分が北西隅で出土している。割れ方も直線的に割れている。

遺物(図60、写真371)

遺物は、土師器が284点出土した。このうち11点を図示した。

図60-1~5は、土師器の杯である。口縁部が外反し、断面が「く」字になる稜をもつ丸底の杯である。2~4は内面黒色処理を施している。2・3は外面にミガキ調整を施す。5は底部にヘラで「十」字が線刻してある。6~8は鉢である。6は口縁部がやや外反し、平底である。8は口縁部が直立し、丸底である。

9・10は長胴形の壺である。外面にナデ調整、内面にヘラナデ調整を施す。11は、瓶である。外面にはハケメ調整、内面にはミガキ調整を施す。

まとめ

本遺構は、南壁中央にカマドをもつ、長方形の堅穴住居跡である。カマドを住居廃絶時に壊して、住居北側の東西隅に碟や遺物を廃棄しているものと推測している。所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

第3節 住居跡

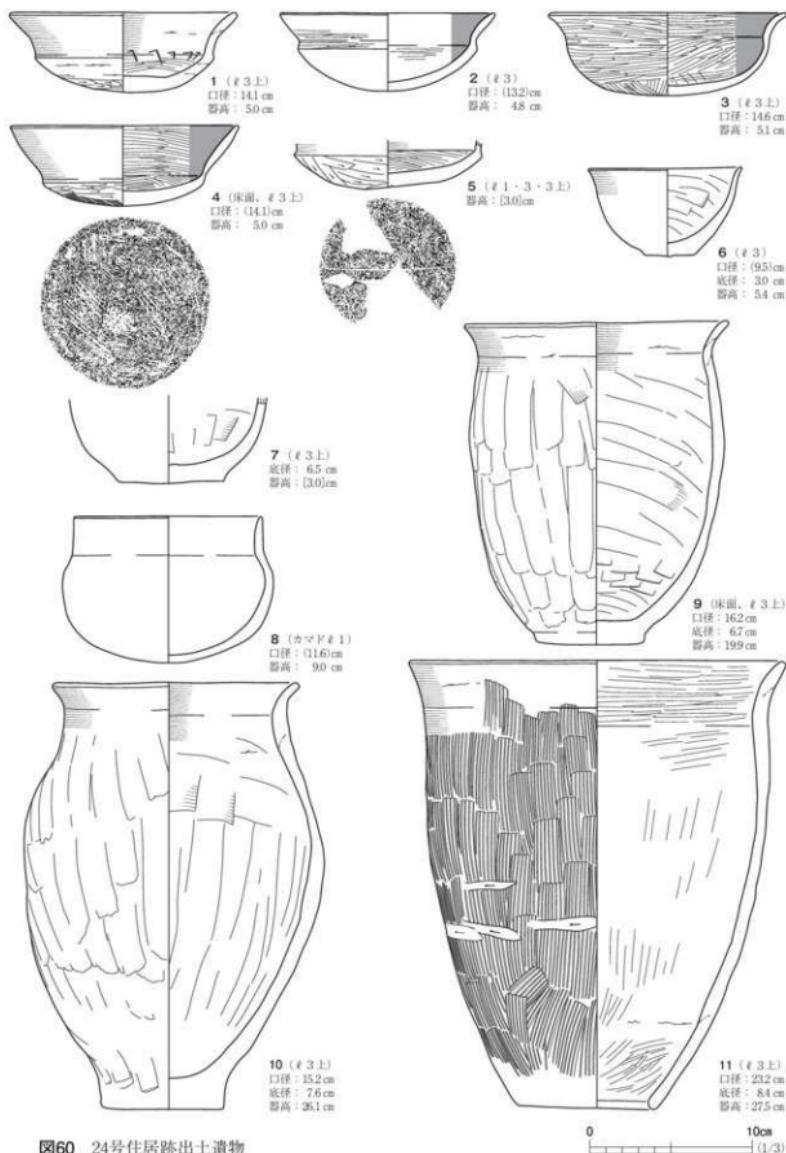


図60 24号住居跡出土遺物

26号住居跡 S I 26

遺構(図61・62、写真39・271)

本遺構は、I区西部のL-13・14グリッドに位置する。標高236.5mの平坦面に立地する。検出面はL II b上面である。1号建物跡の西側を検出した際に、一辺4mほどの範囲に広がる暗褐色土を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は29号住居跡で、本住居跡が新しい。

堆積土は、11層に区分した。 ℓ 1～4は暗褐色土で自然堆積土である。 ℓ 5は褐色土で、L II bを主体とした壁の崩落土である。自然堆積土と考えられる。 ℓ 6～11は貼床土である。

平面形は、東西に長い長方形である。規模は、4.8×40mである。周壁は、床面から直立ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、24cmである。方位は、東壁を基準にすると北に対して約5度東に傾く。床面は、貼床やL II bが踏み締まった状態で確認され、表面に多少の凹凸があるが、おおむね平坦な状態であった。貼床は、L II b粒や焼土粒を多く含む土層が交互に堆積しており、複数回にわたり、土を重ねて踏み固める行為を繰り返したものと推測している。床面から掘形底面までの深さは、14cmである。

貼床を掘り下げたところ床下ピットを8基検出した。床下ピットは、重複しており、P 4～7においては、P 6→P 7→P 4・5の順に掘削されている。床下ピットの堆積土は、土師器片や焼土粒を多く含む暗褐色土を主体とした人為堆積土である。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、南壁中央よりやや東側に構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は、8層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で自然堆積土と考えられる。 ℓ 2はにぶい黄褐色土で天井崩落土である。 ℓ 3～5は燃焼部から煙道にかけての堆積土で焼土粒を多く含む。 ℓ 6は煙道に堆積した暗褐色土の自然堆積土である。 ℓ 7・8はにぶい黄褐色土の堆積土で袖の構築土である。

カマドの規模は、全長280cm、最大幅が130cmである。袖は、南壁に直交するように住居内に張り出す形態である。左袖には、20×8cmの芯材とした礎が据えられていた。規模は、左袖が全長100cm、幅130cm、高さ23cmである。右袖の長さは全長102cm、幅54cm、高さ18cmである。燃焼部は、床面より5cmほど低く窪んでいる。底面は強く焼けており80×70cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは、燃焼部底面で2cmである。中央から西側に寄った位置には支脚と考えられる30×17cmの礎が据えられていた。煙道は、住居跡の外側へ溝状に掘られている。底面は、燃焼部側から徐々に浅くなる構造で、断面形は「U」字状を呈する。規模は、全長は190cm、幅は44cm、深さは22cmである。煙道の壁面も焼土化している。焼土化範囲の厚さは、断面では4cmである。

ピットは、3基確認した。平面形はいざれも楕円形ないし円形で、機能を特定できるものはなかった。P 1はカマドのすぐ東側に位置する。直径68cm、深さ20cmを測る。P 2は床面東部中央

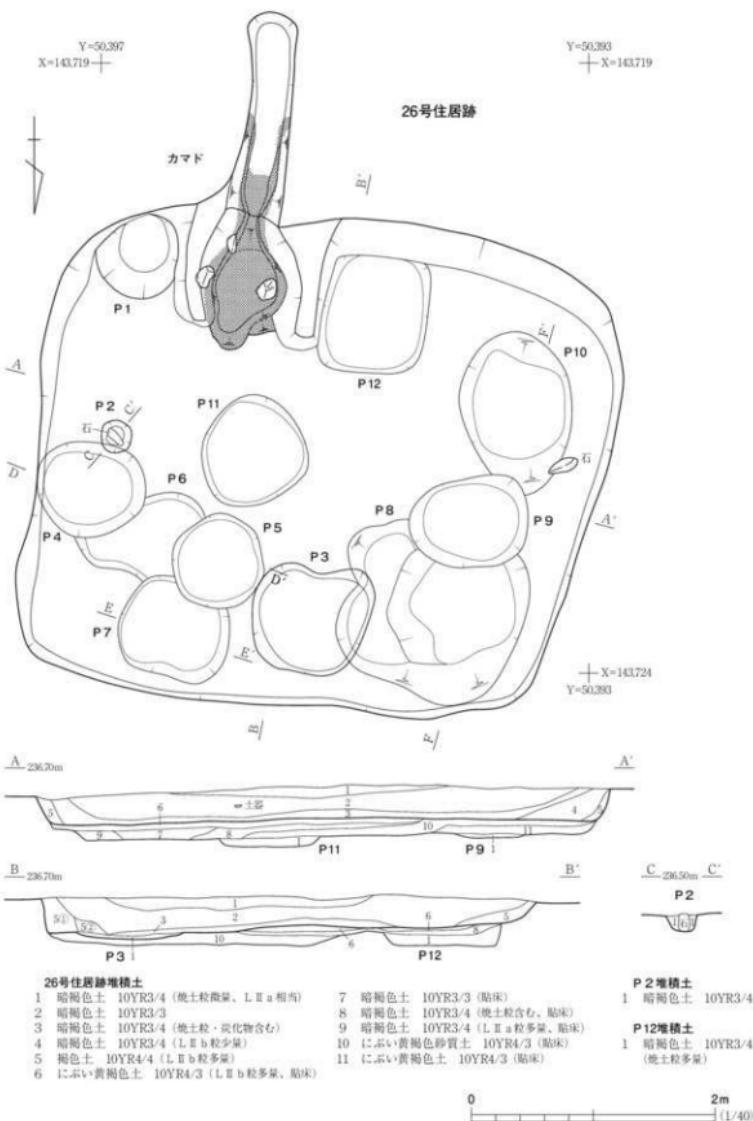


図61 26号住居跡（1）

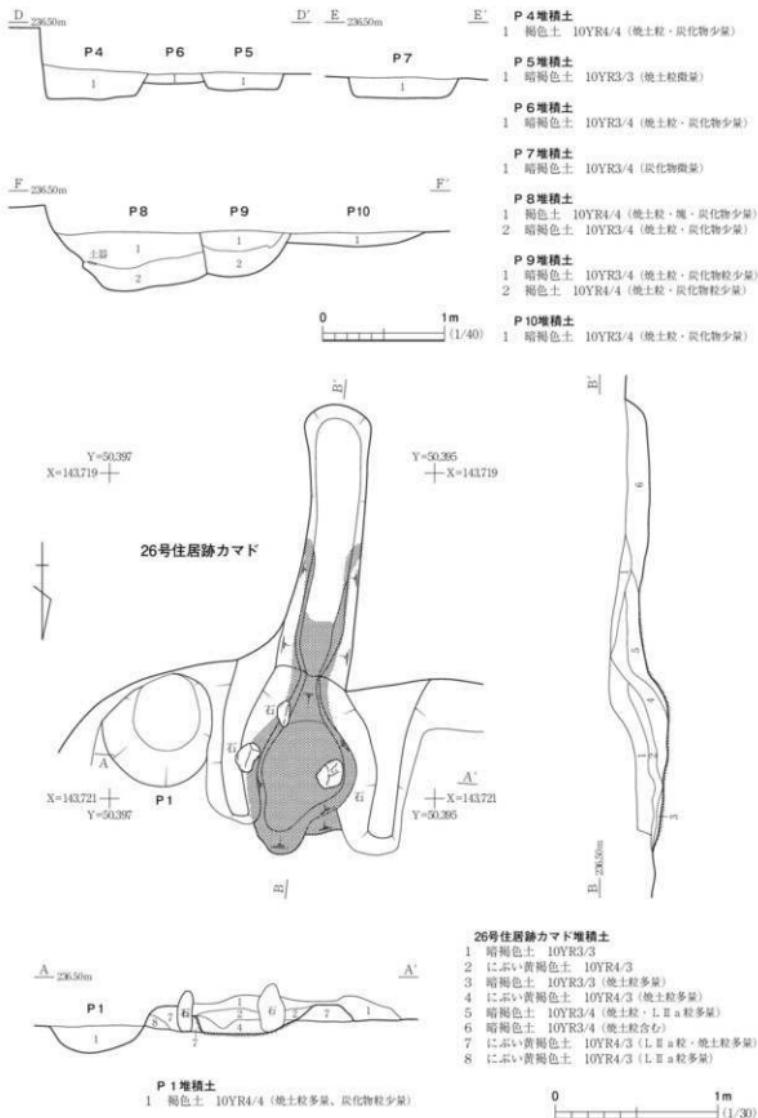


図62 26号居住跡 (2)

に位置し、直径24cm、深さ12cmを測る。ピットには角礫が1個据えられていた。P 3は床面北部中央に位置し、長軸100cm、深さ5cmを測る。ピットの堆積土はP 1が暗褐色土、P 2・3がL II b粒を多く含む暗褐色土である。

遺物は、堆積土や貼床構築などから散在して出土している。

遺 物 (図63、写真371)

本遺構からは、土師器605点、須恵器が2点出土している。このうち土師器6点を図示した。

図63-3は、内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。1・2・4は小型の甕である。このうち2はロクロ成形である。5はロクロナデを施す長胴甕である。6は非ロクロ成形の甕である。重複する29号住居跡の遺物が流れ込んだものと推測している。

ま と め

本遺構は、カマドを南壁にもつ4.8mの長方形の竪穴住居跡である。床下の構造が複雑で、床下ピットを複数回にわたって作り替えている。貼床は、L II b粒や焼土粒を多く含む土層が交互に堆

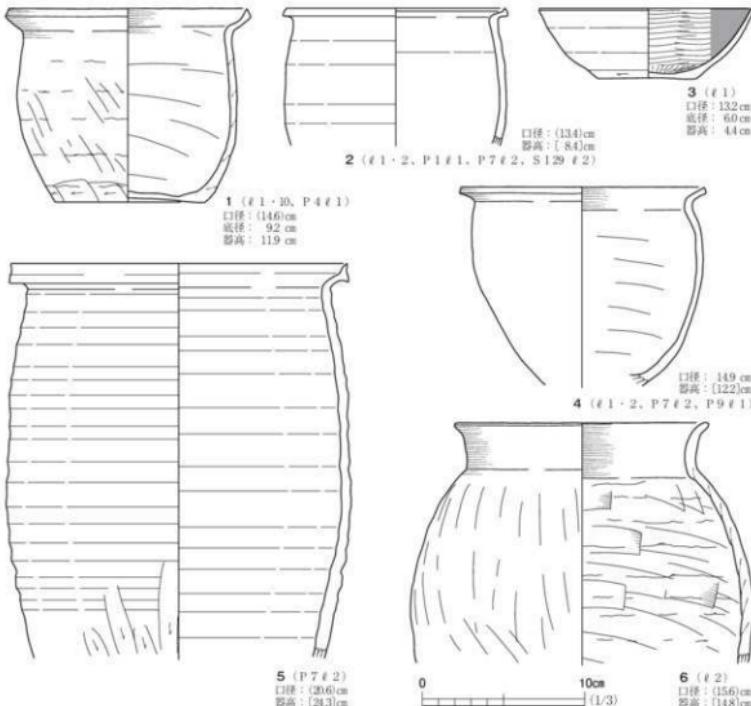


図63 26号住居跡出土遺物

積しており、土を重ねて踏み固める行為を繰り返したものと推測している。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えている。

(中野)

27号住居跡 S I 27

遺構(図64・65、写真40)

本遺構は、I区南部のM-15グリッドに位置する。標高236.5m付近の平坦面に立地する。検出面はL II bである。重複する遺構はない。表土掘削時に、方形に広がる暗褐色土の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は6層に区分した。 ℓ 1・2はL II a②に対応するにぶい黄褐色土でいずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3は暗褐色土でレンズ状に堆積していることから自然堆積土である。 ℓ 4は壁ぎわに三角状に堆積した暗褐色土の自然堆積土である。 ℓ 3～5は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土層で、自然堆積土と考えている。 ℓ 6は貼床土である。

平面形は、おおむね隅丸方形である。規模は、4.2×4.0mである。周壁は垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも残りの良い北壁で30cmである。住居の方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約10度傾く。床は、全面に貼床が形成されており、厚さは最大12cmとなっている。全体的に硬く締まっている。特にカマドの前面にかけて明瞭に硬化していた。床面の北東隅においては、100×65cm、厚さ5cmの範囲で焼土の集積を確認した。

住居内の施設は、カマドとピットである。

カマドは、東壁中央からやや南側に寄って作られている。燃焼部と左右の袖から構成され、煙道は遺存していない。カマドの堆積土は、5層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で、自然堆積土である。 ℓ 2は焼土粒や炭化物を多く含む褐色土である。 ℓ 3は袖の芯材の石を固定するための暗褐色土の人为堆積土である。 ℓ 4は暗褐色土、 ℓ 5はにぶい黄褐色土で、両層ともに燃焼部底面を作る際に貼られた人为堆積土である。カマドの規模は、全長100cm、最大幅が120cmである。袖は東壁に直交するように住居内に短く張り出す形態である。基礎部分は、L II bを逆「U」字状に掘り残していた。左右袖には、30×10cmの芯材とした細長い礫が据えられていた。袖の規模は、左袖が全長48cm、幅40cm、高さ40cmである。右袖は全長32cm、幅35cm、高さ40cmである。燃焼部は、一部掘りすぎてしまい北側が不明だが、現存で直径30cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で2cmである。また奥壁部分も焼土化しており、壁面の焼土化した部分の厚さは3cmである。

ピットは、4基確認した。平面形は、円形ないし梢円形である。 P 1はカマドのすぐ南側に位置し、貯蔵穴と考えられる。直径は120cm、深さ40cmである。堆積土は炭化物粒を多く含む暗褐色土である。 P 2はカマドの北側に位置し、直径26cm、深さ20cmである。 P 3は床面中央に位置し、直径28cm、深さ18cmである。 P 4は北壁側に位置し、直径60cm、深さ10cmである。 P 2～4の堆積土はいずれも炭化物を含む暗褐色土である。



図64 27号住居跡 (1)・出土遺物

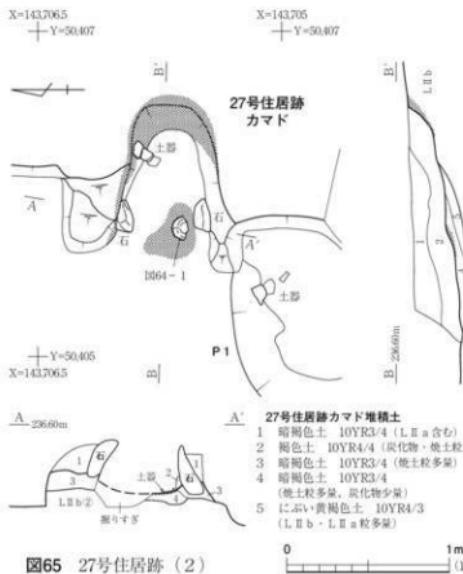


図65 27号住居跡（2）

27号住居跡（2）は、床面が非常に硬く踏み締まっていた。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

28号住居跡 S I 28

遺構 (図66・67、写真41・269)

本遺構は、I区南部のK・L-14・15グリッドに位置する。標高236.3mの平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。K-15グリッド周辺の遺構検出において、白色粒を多量に含む円形の暗褐色土の範囲と、方形の褐色土の範囲を検出した。このため2軒の住居跡と考えて調査を行った。しかし調査が進むにつれて、2軒と考えられた範囲は、L II a ③とL II b ①の堆積状況の違いであることが判明した。土層観察用畦を残し、堆積土の上部をやや掘り下げながら、検出すると6.0mほどの方形の範囲が確認され、1軒の住居跡であることが確定した。重複する遺構は、30号住居跡で、本遺構が古い。

堆積土は10層に区分した。 ℓ 1・2はL II a ③に、 ℓ 3はL II b ①に対応するそれぞれにぶい黄褐色粘質土で、いずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 4は暗褐色砂質土、 ℓ 5はにぶい黄褐色粘質土で、これらも僅ぎわに三角状に堆積した自然堆積土である。 ℓ 6～10は貼床土である。

平面形は、やや東西方向に長い方形である。規模は、6.5×6.2mである。周壁は、残りの良い北壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも残りの良い東壁で40cmである。方位は残りの

遺物は、カマド燃焼部底面から、図64-1の土師器の杯が正位の状態で出土した。

遺物 (図64、写真371)

遺物は土師器が259点、須恵器が1点出土した。このうち土師器3点を図示した。

図64-1は、内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。回転ヘラケズリによる再調整を施し、底面には静止糸切り痕がみられる。2・3は、ロクロ成形の甕である。2には、底部に回転糸切り痕がみられる。

まとめ

本遺構は、東壁中央やや南側にカマドをもつ、隅丸方形の竪穴住居跡である。

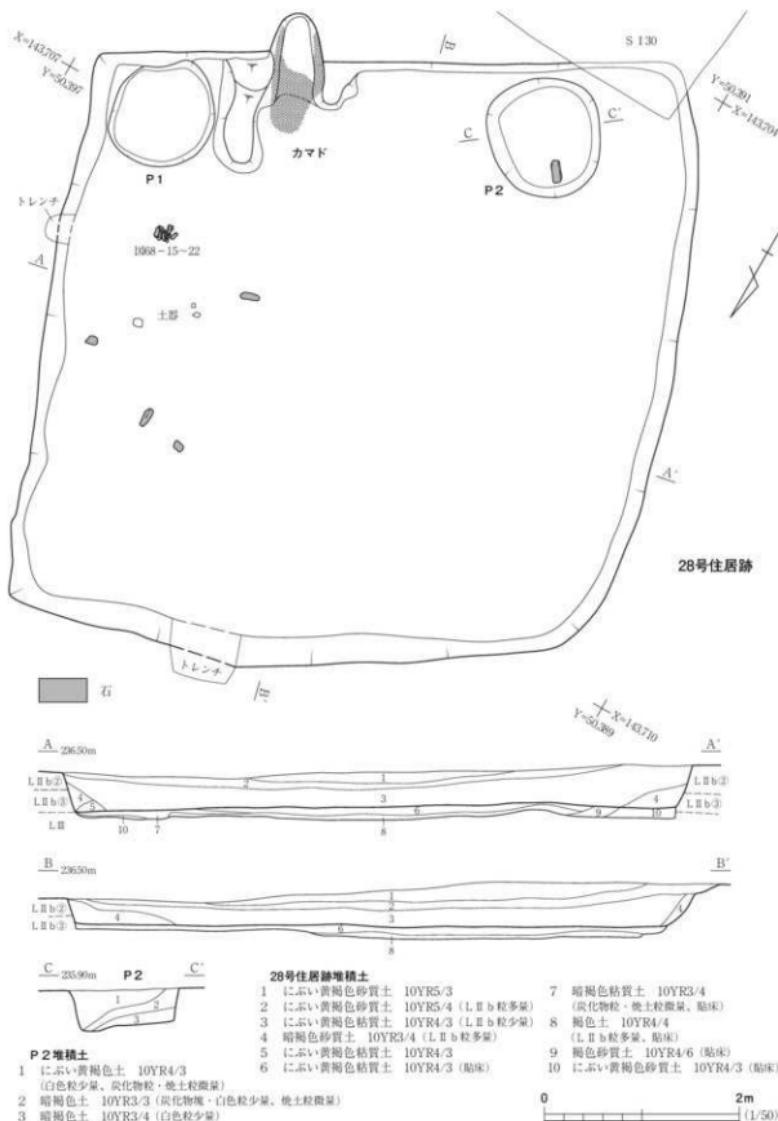


図66 28号住居跡 (1)

良い東壁を基準とするなら北に対して西に約20度傾く。床は、掘形底面であるL II b(3)からL III上面にかけて貼床を構築しており、おおむね平坦に作られ、全体的に硬く締まっている。貼床の厚さは、掘形底面から最大で15cmである。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、南壁中央から東に構築されている。残りが悪く、左の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は6層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色土で燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土である。 ℓ 2～4は燃焼部から煙道にかけて堆積した焼土粒や炭化物を含む土層である。 ℓ 5～7は袖の構築土である。カマドの規模は、全長170cm、最大幅が140cmである。袖は南壁に対して住居内に張り出している。規模は、左袖は全長125cm、幅58cm、高さ17cmである。右袖は全長50cm、幅45cm、高さ5cmである。

燃焼部は、周壁側に作られている。底面は平坦で床面と同じ高さに作られている。底面は強く焼けており 60×40 cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で3cmである。煙道は、住居跡から外に張り出さず、短い形態である。底面は、燃焼部側から20度の登り傾斜で掘り込まれており、断面は「U」字状を呈する。規模は、全長50cm、幅50cmである。煙道は壁面にかけても燃焼部側から長さ70cmの範囲にかけて焼土化している。焼土化した

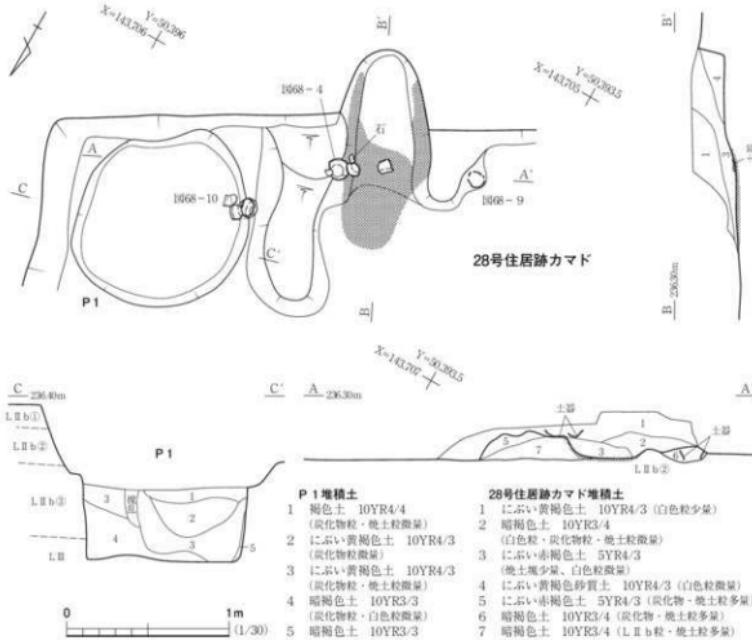


図67 28号住居跡（2）

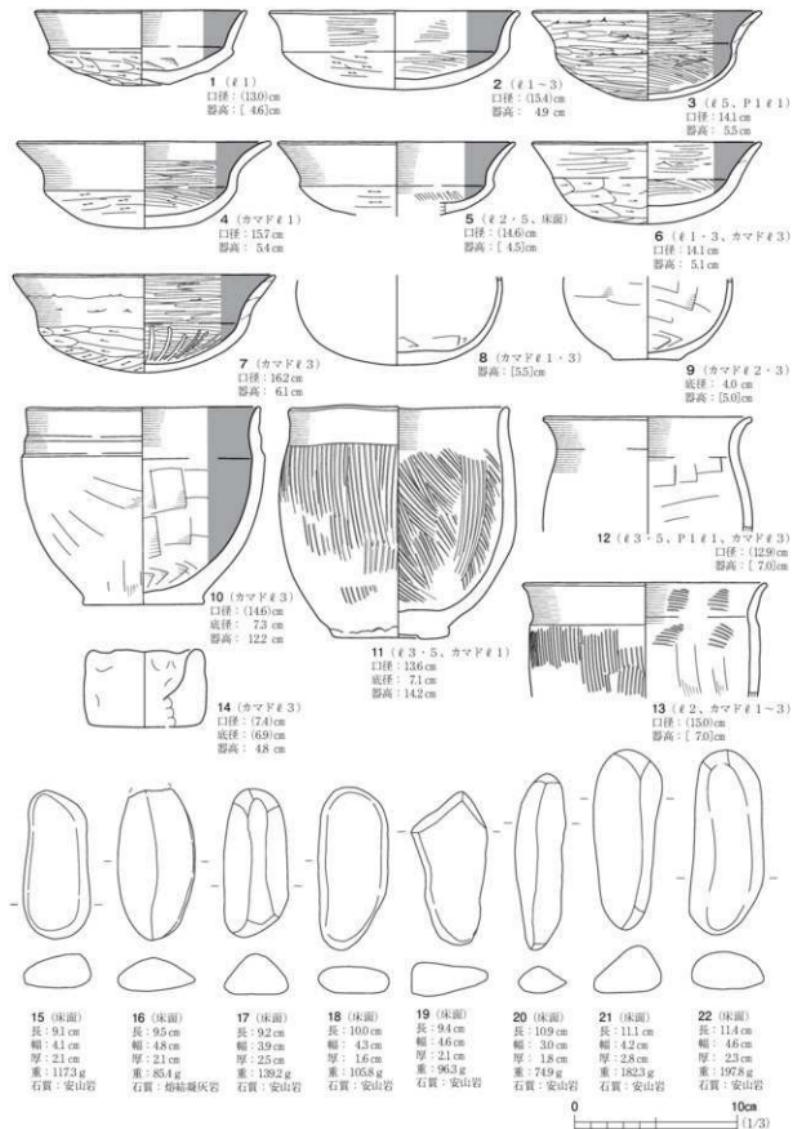


図68 28号住居跡出土遺物

部分の厚さは4cmである。

ピットは、2基確認した。平面形は、いずれも不整な円形である。P1はカマドの東側に位置し貯蔵穴と考えている。直径100cm、深さ46cmである。P1の堆積土は5層に区分した。 ℓ 1は褐色土、 ℓ 2・3はにぶい黄褐色土でいずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 4は暗褐色土で、人為的な埋土と考えている。5は暗褐色土である。P2はカマドの西側1.5mほどの南壁ぎわに位置する。直径115cm、深さ40cmである。P2の堆積土は3層に区分した。いずれもLIIb粒を多く含むにぶい黄褐色から暗褐色土で、自然堆積土である。

遺物は、カマド内堆積土からまとめて複数の土器が出土した。P1北側床面においては縞物石が8点まとめて出土している。

遺物(図68、写真372)

遺物は土器が502点、いわゆる縞物石と考えられる礫を含む自然礫が32点出土した。このうち土器14点、縞物石8点を図示した。

図68-1～7は土器の杯である。口縁部が外反し胴部中段から下半部に断面が「く」字になる移らしきは段をもつ丸底の杯である。2・3・6は口縁部外面にヘラミガキ調整を施す。いずれも内面黒色処理を施す。8・9は鉢の胴部から底部破片である。8は丸底、9は平底になる。

10～13は甕である。10は内面黒色処理を施す。10・11は平底で、11は内外面にハケメを施す。14は手づくね成形のミニチュア土器である。

15から22はいわゆる縞物石とされる礫である。使用痕は確認できないが、掲載した。いずれも細長い長楕円形で安山岩と熔結凝灰岩を用いている。大きさは、最大で長さ11.5cm、幅4.4cm、厚さ2.0cmであり、最小で長さ9.5cm、幅4.0cm、厚さ1.6cmである。重さは74.9～197.7gである。

まとめ

本遺構は、南壁東側にカマドをもつ6.5mの方形の竪穴住居跡である。P1北側床面からは、いわゆる縞物石が8点まとめて出土している。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

29号住居跡 S I 29

遺構(図69・70、写真42・268・269)

本遺構は、I区西部のK・L-13グリッドに位置する。標高236.4mの平坦面に立地する。検出面は、LIIb③である。重複する遺構は、26号住居跡で、本遺構が古い。遺構検出作業時に、26号住居跡の西側において、LIIa③を主体とする遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1はLIIa③に対応する暗褐色砂質土、 ℓ 2はLIIb①に対応する褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3は壁ぎわに三角状に堆積した、にぶい黄褐色土の自然堆積土である。 ℓ 4はLIIbを主体とする貼床土である。

平面形は長方形である。規模は、 5.4×5.0 mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で30cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約30度傾く。床面は、掘形底面である L II b ②から③の上面に、貼床を構築していた。おおむね平坦に作られており、全体的に硬く締まっている。貼床の厚さは、最大で14cmである。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、北壁中央よりや東側に構築されている。遺存状態は比較的良好く、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は、8層に区分した。

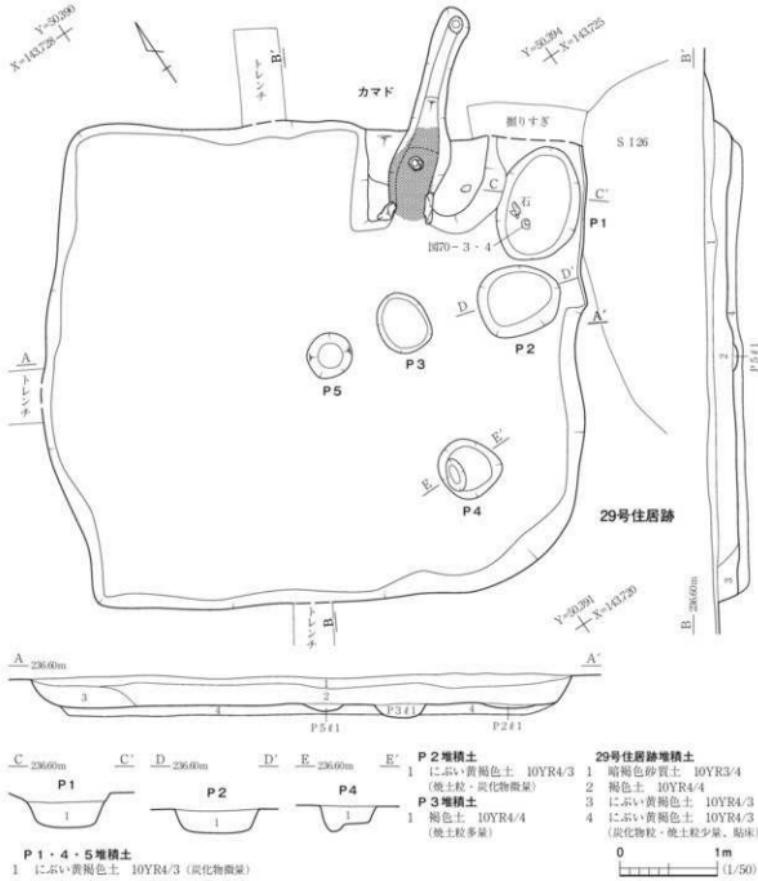


図69 29号住居跡（1）

ℓ 1はにぶい黄褐色土、 ℓ 2は褐色土で、燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土と考えている。 ℓ 3は焼土粒や炭化物を含む褐色土で、燃焼部から煙道にかけて堆積している。天井もしくは袖の崩落土と考えている。 ℓ 4は煙道に堆積する自然流入の暗褐色土である。 ℓ 5～7はにぶい黄褐色土やにぶい黄橙色土の人為堆積土で、L II bを主体とした袖の構築土である。 ℓ 8はにぶい黄褐色土で袖の芯材の石を固定するための人為堆積土である。平面形は、煙道が住居跡の北東壁に対してやや東側に15度ほど傾くのが特徴で、すぐ北側に位置する23号住居跡と共通する。

カマドの規模は、全長230cm、最大幅が156cmである。袖は北壁に対して15度西に傾いて住居内に張り出す。規模は、左袖が、全長100cm、幅56cm、高さ33cmである。右袖は、全長96cm、幅75cm、高さ25cmである。左右の袖内部には芯材となる30×15cmほどの角礫が据えられていた。

燃焼部は、床面より3cmほど高くなるように作られている。底面は、長軸85cm、短軸44cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で3cmである。燃焼部の中央よりやや煙道側には、長さ10cm、幅5cm、厚さ5cmの自然礫の支脚が据えられていた。

煙道の長さは150cm、幅35cmを測る。底面は、燃焼部側から緩く傾斜しながら浅くなっている。煙出しの先端は、ピット状に掘り込まれている。その規模は、直径15cm、深さ20cmである。

ピットは5基確認した。平面形はいずれも梢円形ないし円形である。P 1はカマドの東側に位置し貯蔵穴と考えている。規模は直径120cm、深さ30cmである。P 2はP 1の南側に位置する。規模は直径90cm、深さ20cmである。P 3はカマド焚口部の南側に位置する。規模は直径60cm、深さ15cmである。P 4は床面南東側の隅に位置する。規模は直径62cm、深さ26cmである。P 5は床面中央に位置する。規模は直径47cm、深さ10cmを測る。ピットの堆積土は、いずれも焼土粒や炭化物を含む褐色土ないしにぶい黄褐色土である。堆積状況からいずれも自然堆積と考えている。

遺物は、カマドの堆積土内やP 1底面などから出土した。図70-1の鉢は、カマドの支脚上に逆位で棄棄されていた。内外面に被熱痕や表面の荒れが認められないことから、カマドの使用後に、支脚に被せたものと考えている。P 1からは、3・4の杯が、3が上で4が下になるように、逆さまに伏せられて出土した。その他の遺物は、堆積土から出土した。

遺物(図70、写真372)

遺物は土器器が301点出土した。このうち土器器4点を図示した。

図70-1・2は鉢である。内面にヘラナデを施す。2は、底部に木葉痕がみられる。3・4は杯である。3は、口縁部が外反し、稜をもつ。4は、口縁部が直立する器形である。

まとめ

本遺構は、北壁に煙道主軸が東に傾く特徴のカマドをもつ竪穴住居跡である。北側に隣接する23号住居跡とカマドの構造や平面形に共通点が多い。カマドの支脚には、小型の甕を伏せた状態で被せていた。これはカマド廃棄時の祭祀に関連する行為と考えている。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

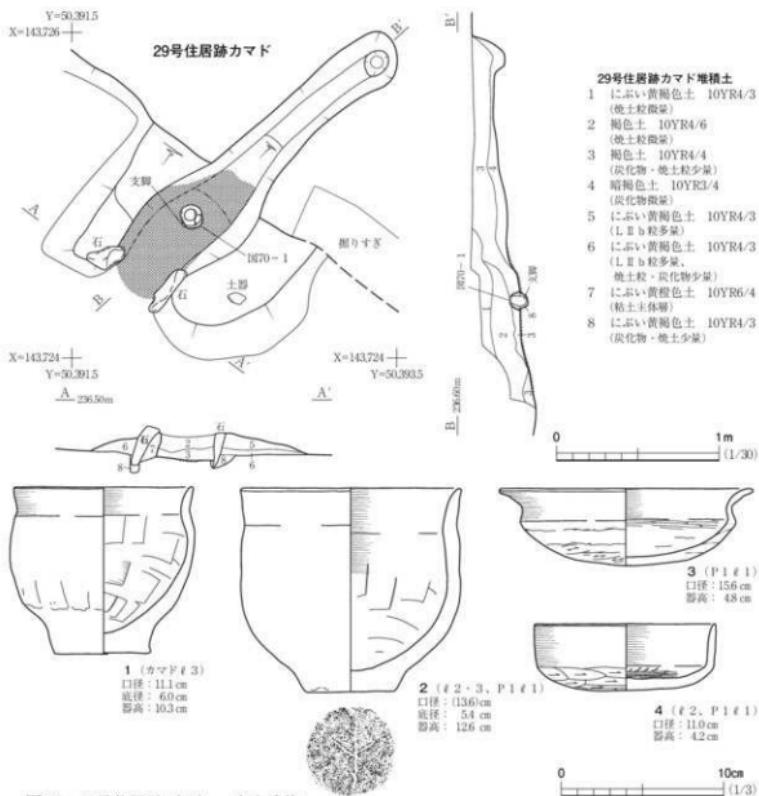


図70 29号住居跡（2）・出土遺物

30号住居跡 S I 30

遺構（図71、写真43・269）

本遺構は、I区東部のL-15グリッドに位置する。標高236.3mの平坦面に立地する。検出面は、L II b ①～②である。28号住居跡の南側を検出している際に、L II a ②を主体とする3m四方ほどの遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は28号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は、5層に区分した。ℓ 1～4は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土である。いずれも水平に堆積しており人為的に埋めた堆積土と考えている。ℓ 5は暗褐色土で、L II b ②～③を主体とする貼付土である。

平面形は、方形である。規模は $3.2 \times 30\text{ m}$ である。周壁は、遺存状態の良い北壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周壁は、堆積土と基盤層の境界が明確であり、同時期の住居跡の中では、残りが良い。壁の遺存高は、もっとも残りの良い東壁で 25 cm である。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら、北に対して東に 3 度傾く 。床面は、掘形底面であるL II b ②から③上面に貼床を構築している。貼床の上面はおおむね平坦で全体的に硬く締まっている。貼床の堆積土の厚さは、最大で 10 cm である。

住居内の施設は、カマドで、東壁中央より南側に構築されている。左右の袖と燃焼部から構成される。堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で燃焼部から煙道に堆積する人為堆積土である。

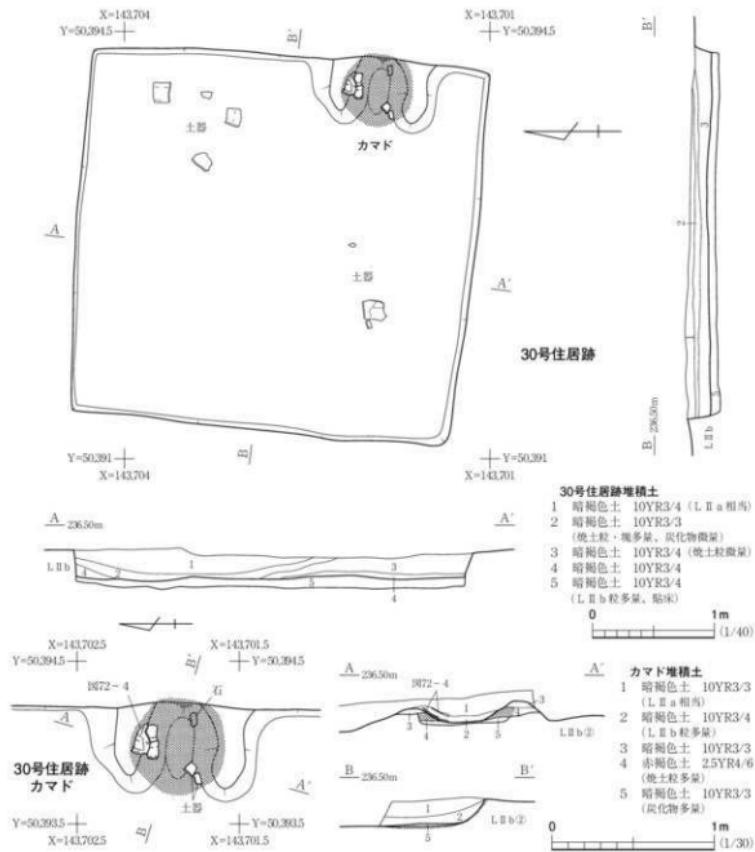


図71 30号住居跡

ℓ 2 は暗褐色土である。ℓ 3・4 は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土と赤褐色土で、L II b を主体とした袖の構築土である。カマド袖と燃焼部の作り方に特徴がある。まず、L II b を逆「U」字状に掘り残して袖の基礎を作り、燃焼部の部分を床面よりやや掘り深めて、その後に土を貼って燃焼部底面を作っている。その後に袖を作っているものと考えられる。カマドの規模は、全長60cm、最大幅が120cmである。袖は東壁に対して直交するように住居内に張り出す。規模は、左袖が全長60cm、幅50cm、高さ10cmである。右袖は全長60cm、幅45cm、高さ10cmである。燃焼部は、床面とほぼ同じ高さに作られている。底面は、直径58cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは、燃焼部底面で5cmである。煙道は、検出できなかったが、27号住居跡のように住居から外に張り出さないものを想定している。

遺物は、カマドの堆積土や ℓ 2 から床面にかけて散在して出土した。住居北側中央の貼床からは、鉄製の紡錘車が1点出土した。

遺物 (図72、写真373・450～452)

土師器128点、鉄製品1点が出土した。このうち土師器4点、鉄製品1点を図示した。

図72-1・2 は内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。いずれも回転ヘラケズリによる再調整を施す。1の底面には静止糸切り痕がみられる。体部外面に墨書きがあり、欠損のため全体の字形はわからないが、「田」と考えられる。3・4 は長胴形の壺である。

5は、鉄製の紡錘車である。紡茎の上部と紡輪が遺存していた。紡茎は主となる茎に耳かき状に先端部が折れ曲がった細い茎がつく形態である。紡茎の断面は、円形を呈する。紡輪は、円形の薄

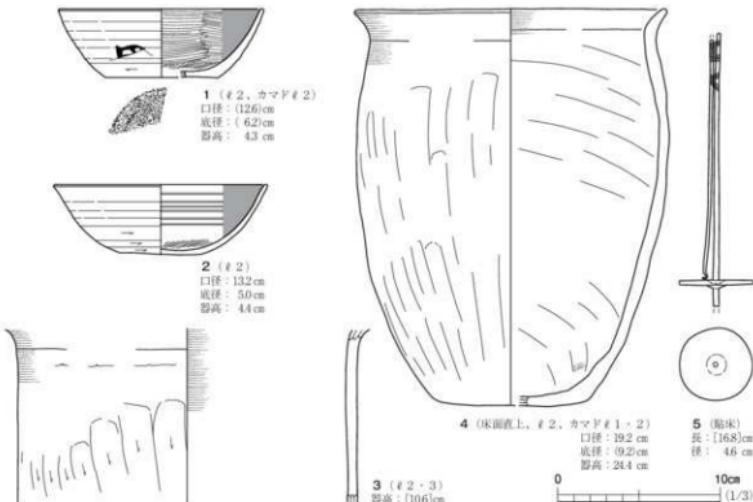


図72 30号住居跡出土遺物

い鉄板である。紡茎の上端部には糸がまかれた状態が銹化して遺存していた。

まとめ

本遺構は、3.2mの方形の堅穴住居跡である。東壁側にカマドをもつ。カマドは、L II bを掘り残してカマドの基礎を作つてから、袖や燃焼部を作つてゐることが分かった。また、遺構の堆積土の状況から、人為的に埋め戻されているものと考えている。また、貼床の掘形からは、鉄製の紡錘車が出土しており、紡茎には糸がまかれた状態が遺存していた。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

31号住居跡 S I 31

遺構(図73、写真44)

本遺構は、IV区北東部のJ・K-7・8グリッドに位置する。標高236.5mの平坦面に立地する。検出面はL II b上面である。L II a②を主体とする3mほどの遺構の範囲を確認し、住居跡として調査を行つた。重複する遺構はない。

堆積土は、2層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色土である。 ℓ 2は褐色土である。層厚が薄く、堆積過程は不明である。

平面形は方形である。規模は3.3×3.2mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で、垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で10cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら、北に対して東に11度傾く。床面はL II b①に構築しており、おおむね平坦で、全体的に硬く縮まつてゐる。貼床は確認できなかつた。

住居内の施設は、東壁中央よりやや南側で検出したカマドのみである。遺存状態は良くなく、右の袖と燃焼部から構成される。堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で、燃焼部に堆積する自然堆積土である。 ℓ 2は、焼土粒や炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。 ℓ 3は、L II bを主体とする袖構築土である。カマドは、地山を逆「U」字状に掘り残して、袖の基礎を作り出している。さらに、燃焼部の部分を床面よりやや掘り窪め、底面を構築してから、袖を作つてゐるものと考えられる。カマドの規模は、全長50cm、最大幅が75cmである。遺存している右袖の長さは、全長30cm、幅30cm、高さ12cmである。燃焼部は、ほとんど焼けていなかつた。煙道は検出されなかつた。

遺物は、カマドの堆積土や床面にかけて出土した。床面の南壁中央の壁ぎわから図73-2の杯が、逆位で出土した。

遺物(図73、写真373)

遺物は土師器が39点出土した。このうち土師器2点を図示した。

1は内面黒色処理を施した甕である。外面にロクロナデ、内面にミガキが施される。2はロクロ成形の杯である。底面を回転ヘラ切りのち手持ちヘラケズリで再調整している。口端部を一箇所打ち欠いている。油煙の付着がみられ、灯明皿として使用されたものと考えている。

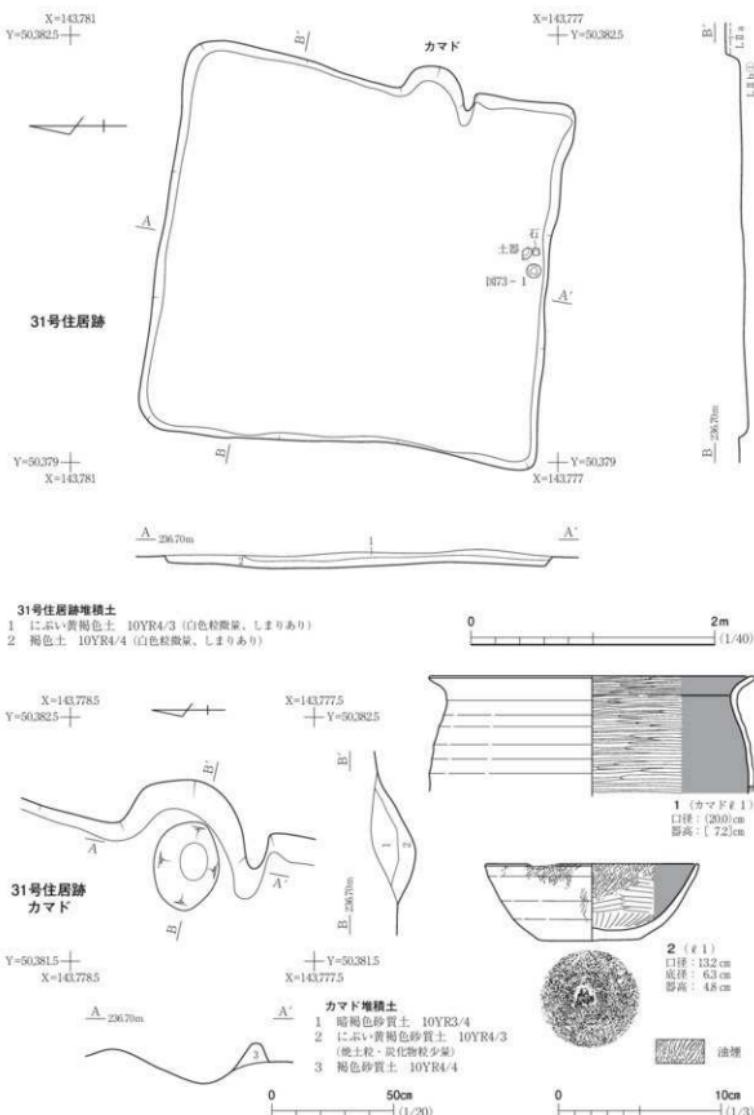


図73 31号住居跡・出土遺物

まとめ

本遺構は、東壁にカマドをもつ方形の竪穴住居跡である。灯明皿に使用された土師器の杯が壁ぎわから出土した。所属時期は出土遺物などから、平安時代、9世紀と考えられる。(中野)

32 a・b号住居跡 S I 32 a・b

遺構 (図74~76、写真45)

本遺構は、IV区北東部のJ-8グリッドに位置する。標高2365mの平坦面に立地する。検出面はL II a③である。31号住居跡の南側を検出している際に、暗褐色土を主体とする5.0×4.0mの長方形の遺構の範囲と、焼土の集積範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、41号住居跡と11号土坑で、41号住居跡より新しく11号土坑より古い。

本遺構は、カマドが3箇所確認されており、遺構の主軸関係から、別々の住居跡ではなく、建て替えを行っているものと考えている。建て替え後をa号、建て替え前をb号としてそれぞれ分けて記載する。新旧関係は最初にb号をつくり、南壁の拡張およびカマドの付け替えを行ってa号をつくったものと思われる。

堆積土は6層に区分した。ℓ 1~3は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土とぶい黄褐色砂質土である。水平に堆積していることから人為堆積土と考えている。ℓ 4~6はL II bを主体とする貼床の構築土である。

32 a号の平面形は長方形である。規模は5.4×4.3mである。周壁は遺存状態の良い南壁側でほぼ垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高はもっとも残りのよい東壁で30cmである。住居の方位は、ほぼ真北になっている。床面は、掘形底面であるL II b③からL III上面に貼床を構築している。貼床の上面は平坦で、全体的に硬く締まっている。厚さは最大で15cmである。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは東壁中央からやや南に寄って構築されている。遺存状態は良く、左右の袖と燃焼部、煙道で構成される。燃焼部の部分を床面よりやや掘り進め、底面を構築してから袖を作ったと考えられる。堆積土は12層に区分した。ℓ 1は褐色砂質土で自然堆積土、ℓ 2~6は燃焼部から煙道の堆積土である。ℓ 8~11は焼土粒や炭化物を含む褐色土から暗褐色の堆積土で、L II bを多く含む袖の構築土である。ℓ 12は芯材の石を固定するための土である。なお、右袖のすぐ西側の床面から直径50cmの範囲で炭化物粒の集積が確認できた。

カマドの規模は、全長230cm、最大幅が143cmである。袖は、東壁に直交するように住居内に張り出す。右袖には28×5cmの川原石が芯材として用いられていた。規模は、左袖が全長60cm、幅60cm、高さ26cmである。右袖は全長60cm、幅40cm、高さ28cmである。煙道は、周壁の外側に細長く溝状に張り出している。燃焼面より25cmほど高くなるように作られ、底面は煙出しに向かって平坦に掘り込まれている。規模は全長146cm、幅30cmである。煙出しピットは、煙道の先端をピット状に掘り込む。規模は直径33cm、深さ16cmである。燃焼部は床面と同じ高さに掘り込まれている。底面は強く焼けしており直径66cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲

の厚さは燃焼部底面で5cmである。

ピットは5基検出した。ピットの位置は、P1・2・4が、各隅に近い位置に作られている。P3は、カマドの前面より西側に位置する。P5は、カマドのすぐ南側に作られている。P5は、貯蔵穴と考えられるが、それ以外は機能を明確にできていない。ピットの規模は、P1は直径80cm、深さ25cmである。P2は、直径70cm、深さ7cmである。P3は、直径17cm、深さ20cmである。P4は直径65cm、深さ21cmである。P5は直径95cm、深さ32cmである。ピット堆積土は、暗褐色土もしくは砂質土を主体としており、おおむね自然堆積土と考えている。

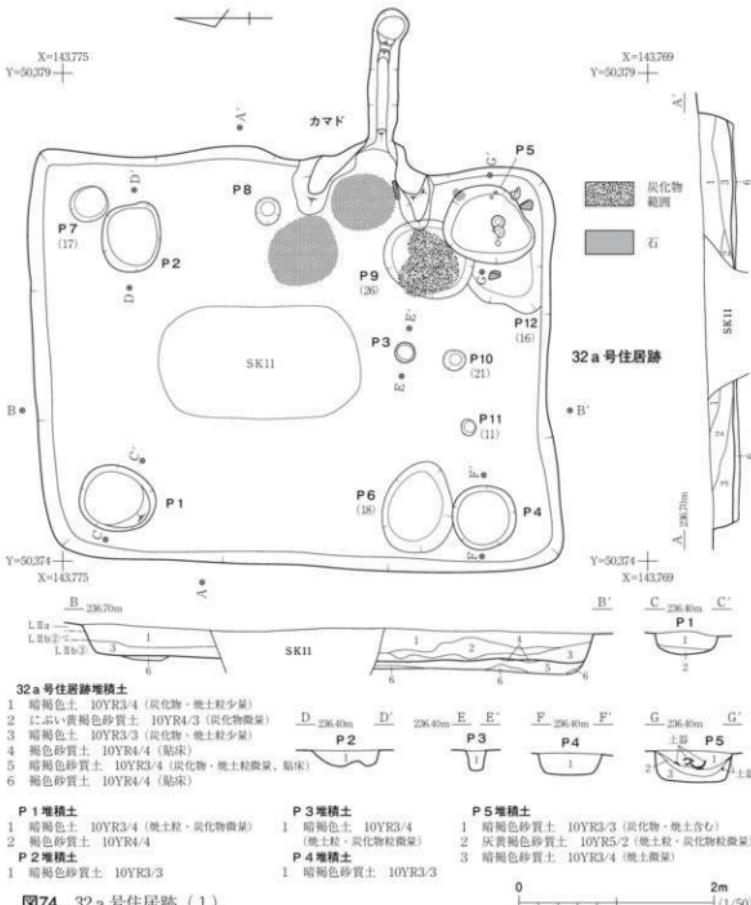


図74 32a号住居跡 (1)

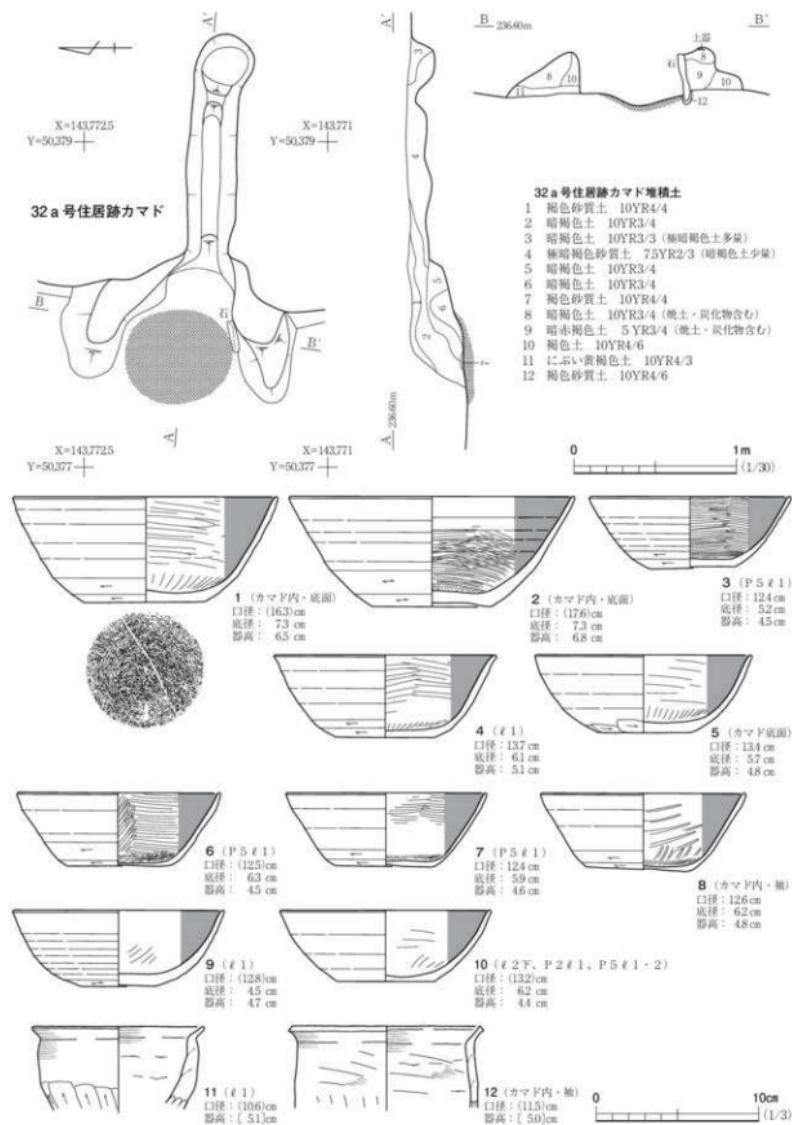


図75 32a号住居跡（2）・出土遺物

遺物は、カマド堆積土やP 5堆積土から比較的まとまって出土している。P 5からは、堆積土上部より土師器の杯が2点出土している。

32 b号の平面形は方形で、規模は4.3×4.1mと考えている。a号より小さく、南壁の位置はa号のP 6・9付近と推測している。

住居内の施設は、カマド2基である。遺存状況やa号のカマドの位置から、カマド2からカマド1へ作り替えられたものと思われる。

カマド1は東壁中央から南側に寄った位置に構築されている。遺存状態は良くなく、燃焼部の底面と煙道の一部を確認した。堆積土は3層に区分した。いずれも煙道に堆積した焼土粒が多く含む土層である。煙道は遺存長が114cm、幅63cmである。a号のカマドと同様に煙出しピットをもち、直径34cm、深さ20cmである。袖は、a号の住居によって壊されているが、燃焼部は、強く焼けており直径70cmの範囲にわたって、赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは底面から5cmほどである。

カマド2は北壁中央に構築されている。遺存状態は良くなく、燃焼部の底面と煙道の一部を確認した。堆積土は4層に区分した。 ℓ 1・2は煙道に堆積した焼土粒を含む褐色からにぶい黄褐色砂質土である。 ℓ 3・4は炭化物や焼土粒を含む暗褐色砂質土の燃焼部の掘形埋土である。

煙道は遺存長が76cm、幅80cmである。燃焼部は、a号の住居によって壊されているが、よく焼けており直径42cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で2cmである。

遺物(図75、写真373)

遺物は、土師器が471点、須恵器が8点出土した。すべてa号住居跡から出土しており、このうち土師器12点を図示した。

図75-1～10は土師器の杯である。ロクロ成形で、内面を入念にヘラミガキした後に、黒色処理を施している。1は底部に回転糸切りの痕跡がみられる。11は鉢である。外面の胴部下半に縦位のヘラケズリを施す。12は、輪積み成形の小型の甕である。

まとめ

本遺構は、5.4×4.3mの長方形の堅穴住居跡である。カマドが3基検出されている。この住居は、建て替えを行っており、建て替え後をa号、建て替え前をb号とした。b号は北側のカマド2から東側のカマド1へ作り替えを行い、さらに南側を拡張してa号へと作り変えているものと考えている。堆積土の状況から最終的には、住居の廃絶後に埋めたものと考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

33号住居跡 S I 33

遺構(図77・78、写真46・268)

本住居跡はII区のJ-20グリッドに位置する。標高235.5m付近に立地している。検出面はL II

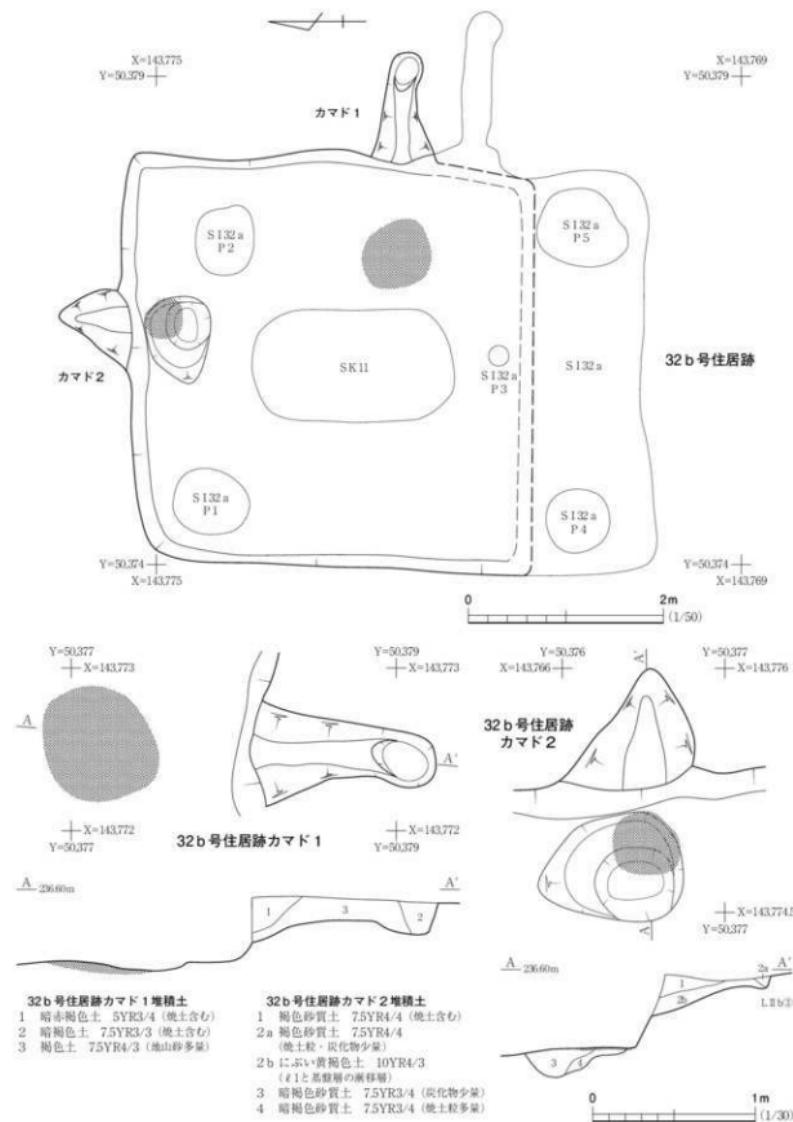


図76 32b号住居跡

bである。重複する遺構はなく、南側には15・16号建物跡が隣接する。

平面形は南北に長い長方形で、規模は5.0×3.8mである。方位は東壁で、北から13度東を示す。周壁は遺存状態の良い部分が50cmで、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼床が施され平坦である。

住居内堆積土は5層に分層した。 ℓ 1～2は暗褐色粘質土を基調とした土である。いずれも白色粒子が含まれる。 ℓ 3はL III由来の灰黄褐色粘質土で床面を覆っている。これらの層はいずれもレンズ状の堆積状態であることから自然堆積と考えられる。 ℓ 4は住居南壁中央部分にのみ堆積しており、焼土や炭が多量に含まれ、遺物も比較的多く出土したことから人為堆積と考えている。 ℓ 5は掘形を覆う縮まりのある土で、貼床と判断した。貼床下は洪水砂礫層となっている。

住居内の施設はカマドと貯蔵穴をそれぞれ1基確認した。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置し、煙道と燃焼部で構成される。袖はにぶい黄褐色粘質土で構築されている。左袖は長さ66cm、幅10cm、右袖は長さ54cm、幅20cm、高さはともに30cmほど遺存していた。

燃焼部は幅60cmで、底面には貼床は施されておらず、床下にみられた砂礫層となっている。中央の40×30cmの範囲と袖の内側が焼土化していた。煙道は、住居壁からの長さ160cm、幅35cmで、燃焼部側に緩く傾斜する。煙出しがピット状で、長軸38cm、短軸20cm、深さ20cmで、煙道底面より深くなっている。

カマド内堆積土は9層に分層した。 ℓ 1～3は住居内堆積土と共通する自然堆積土である。 ℓ 4は袖の構築土と同じにぶい黄褐色土であることや、多量の焼土塊が含まれることから、 ℓ 5とあわせてカマド天井の崩落土と考えられる。 ℓ 7はL II bに近い土質であることから、煙道天井部の崩落土と考えている。この層の下には、自然堆積土と考えられる ℓ 8・9が堆積していることから、煙道がある程度埋没したのちに天井部が崩落したと考えられる。

貯蔵穴はカマド南側に位置する。これをP 1とした。平面は梢円形で、規模は長軸80cm、短軸63cm、深さ28cmである。底面はL IVにつくられている。堆積土は7層に分層され、 ℓ 1～6はブロック状の堆積や、炭化物が混じることから、人為堆積と考える。 ℓ 7はL IVの砂や雲母粒が含まれることから、崩落土と考えられる。

遺物は住居の堆積土やカマドから出土している。カマド燃焼部からは図78-2・5の杯や6・7のミニチュア土器がまとめて出土している。いずれも二次的な焼成の痕跡は認められず、カマド天井崩落土より下から出土していることから、カマドの機能が停止した段階で、意図的に遺棄された可能性が高い。また3の杯は煙道の煙出し上面をふさぐような状態で、壺の底部片とともに正位で置かれていた。

遺物(図78、写真374)

本住居跡からは、土師器33点、須恵器1点が出土した。このうち7点を図示した。

1は土師器の蓋で、内外面とも丁寧なヘラミガキと黒色処理が施される。つまみを欠損する。

2・3は内面に黒色処理が施される土師器の杯である。底部は平底で、体部から口縁部にかけて

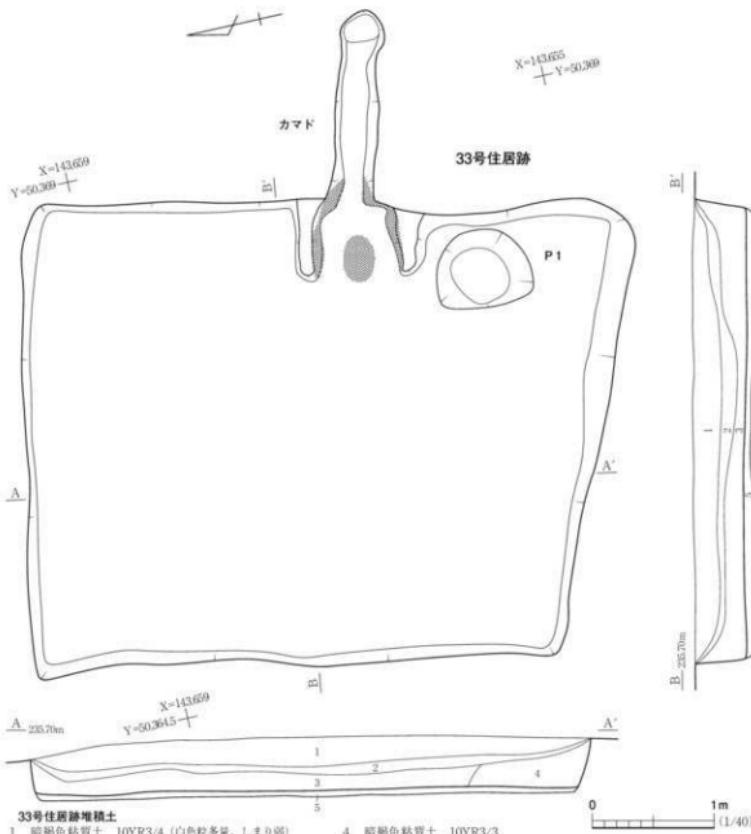


図77 33号住居跡（1）

内溝しながら立ち上がる。体部には段を有し、3は内面に稜が形成されている。

4は小型の壺の口縁部から体部にかけての破片である。

5は須恵器杯である。底部から外傾しながら立ち上がり口縁端部がわずかに外反する。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。6・7は手づくねのミニチュア土器である。

まとめ

本遺構は、南北5.0m、東西3.8mの方形の堅穴住居跡である。東壁にカマド、その脇に貯蔵穴がつくられている。カマド燃焼部には、土師器杯と須恵器杯とミニチュア土器が遺棄されていた。ま

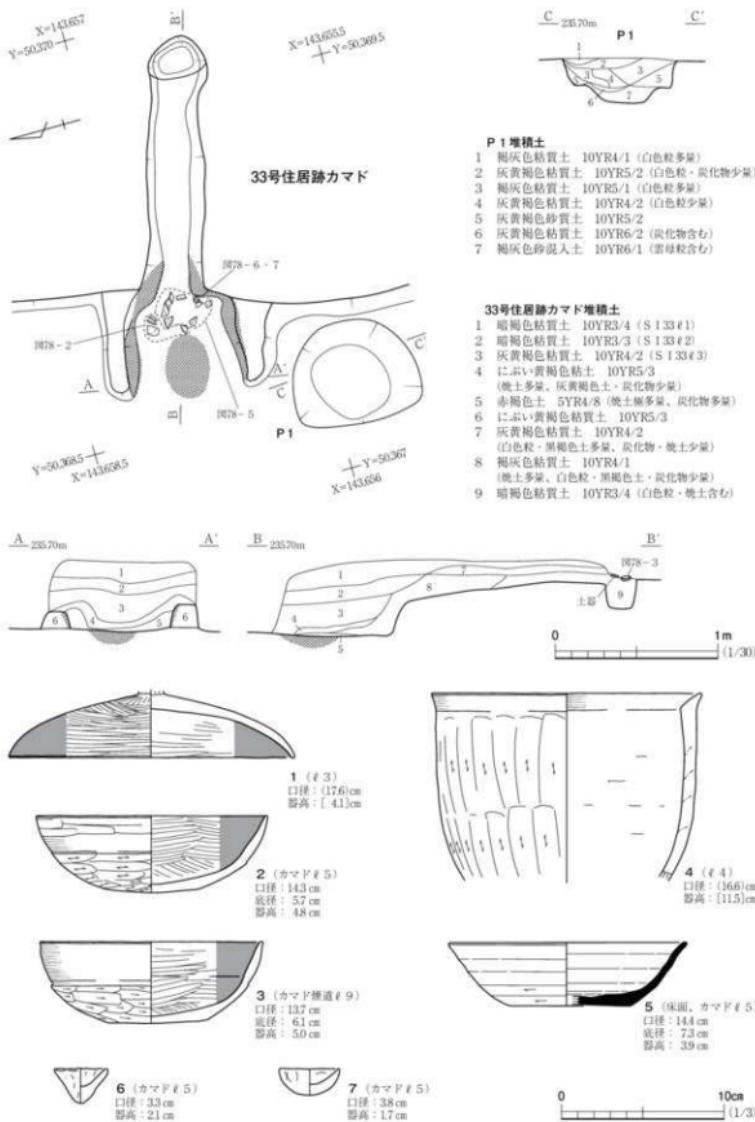


図78 33号住居跡（2）・出土遺物

た、煙出しをふさぐように土師器杯と甕の底部片が置かれており、これらはカマド廃絶時における何らかの祭祀行為を示していると思われる。カマドから出土した遺物の特徴から、奈良時代の遺構と考えている。

(神林)

34号住居跡 S I 34

遺構(図79、写真47)

本遺構は、II区中央部のK-18グリッドに位置する。標高236.0mの平坦面に立地する。検出層位は、L III bであるが、本来の検出面はL II a③と推測している。重複遺構はないが、本住居跡の北側から東側にかけて2号烟跡が位置する。遺存状態は良くなく、遺構の検出段階で床面が部分的に露出していた。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1・2は基本土層の観察用畔で確認したもので、白色粒子を多く含む黒褐色から暗褐色土の自然堆積土である。 ℓ 3は貼床の構築土である。

平面形は、長軸方向が南北の長方形である。規模は、3.8×3.4mである。周壁は遺存状態の良い東壁側で50度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で50cmである。方位は東壁が北から16度東を示す。床面は、ほぼ平坦で部分的に貼床がされている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、南壁中央からやや東寄りに位置する。カマドは燃焼部と煙道で構成され、袖は残っていない。カマド堆積土は、5層に区分した。 ℓ 1は住居内堆積土 ℓ 2に対応し、 ℓ 2・4は煙出しと煙道の流入土、 ℓ 3・5は天井部などの崩落土である。燃焼部は、住居外に張り出し、底面は焼土化していない。燃焼部からは河原石が出土していることから、カマドの構築材として利用されていたと考えている。燃焼部の幅は50cmである。

煙道は、溝状を呈する。規模は、幅15~20cmで、深さは15cmである。煙道先端の煙出しあは、平面形が不整橿円形のピット状である。規模は、長軸38cm、短軸34cm、深さ20cmである。

ピットは1基検出した。P 1はカマドに近接した位置にあることから、貯蔵穴と考えている。P 1の平面形は、隅丸長方形である。規模は、長軸70cm、短軸44cm、深さ30cmである。

遺物は、大半がカマド堆積土から出土した。

遺物(図79、写真374)

遺物は、土師器が26点、須恵器が3点出土した。そのうち土師器杯1点を図示した。

図79-1はロクロ成形の杯である。底部が欠損している。体部は外傾しながら立ち上り、器厚は薄い。外面調整は、口縁部から体部上半がロクロナデ、体部下半から底部が回転ヘラケズリである。内面は、単位の細い緻密なヘラミガキ調整が横方向になされ、黒色処理されている。

まとめ

本住居跡は、3.8mほどの長方形の竪穴住居跡である。南壁側にカマドをもつ構造である。遺構の所属時期は、出土土器の年代観から平安時代、9世紀と考えている。

(吉野・中野)



図79 34号住居跡・出土遺物

35号住居跡 S I 35

遺構(図80・81、写真48・49)

本遺構は、I区西部のK-12・13グリッドに位置している。標高236.4mの平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。23号住居跡の西側を検出している際にL II bにおいて、暗褐色土を主体とする一辺4.0mほどの方形に広がる遺構の範囲と、焼土の集積範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。直接重複する遺構はないが、下層に222号住居跡が位置する。23・29号住居跡が東側に近接する。

堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土、 ℓ 2は褐色土、 ℓ 3はL II b ①に対応する灰黄褐色土でいずれも自然堆積土である。 ℓ 4は壁ぎわに三角状に堆積しているにぶい黄褐色土である。

平面形は、東西にやや長い隅丸方形である。規模は4.0×3.8mである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で35cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約5度傾く。床面は、L II b ②から③にかけて構築しておりおむね平坦に作られ、全体的に硬く締まっている。貼床は確認できなかった。

住居内の施設は、カマドのみである。カマドは、南壁中央よりやや西側に構築されている。遺存状態は良くなく、左袖の一部と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は5層に区分した。 ℓ 1 a・1 b・2は灰黄褐色からにぶい黄褐色土で燃焼部から煙道に堆積する人為堆積土と考えられる。 ℓ 3・4は焼土粒や炭化物を含む黒褐色土からにぶい黄褐色土の堆積土で、カマド天井崩落土と考えられる。 ℓ 5はL II bを主体とした袖の構築土である。

カマドの規模は、全長125cm、最大幅75cmである。袖は残りが悪くL II b ②を掘り残した左袖の基部を検出した。袖と周壁の交点には、左袖には2個、右袖には1個が長方形の自然礫が据えられていた。石の規模は、左袖のものが長さ25cm、幅8cmと、長さ25cm、幅10cmで、左袖のものが長さ23cm、幅4cmである。左袖の規模は、全長35cm、幅30cm、高さ28cmである。

燃焼部は、周壁より住居の外側に位置する。燃焼部の底面は、床面より3cmほど高く作られており、煙出しにむかって緩く上がる。燃焼部底面は、強く焼けており、直径45cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で3cmである。燃焼部には長さ30cm、幅17cm、厚さ7cmの長方形の平たい礫が、落ち込んだ状態で出土した。カマドの天井部の石と考えている。煙道は主軸が南壁に対して西側に5度傾くように張り出す。断面形は「U」字状を呈する。煙道の規模は、長軸90cm、幅60cmである。

遺物は、カマドの堆積土や袖の上部、カマドの西側床面にかけて出土している。特にカマド燃焼部から煙道にかけては、カマドの天井部の崩落後に、2点の壺の中に入れた杯が入れ子状になって出土した。図81-3の壺の中には、1の杯が、4の小型壺の中からは、2の杯が出土している。カマドの北西床面には、1の瓶が伏せた状態で出土した。北西隅からやや北側の床面からは、2の壺が正位の状態で出土した。

第3節 住居跡

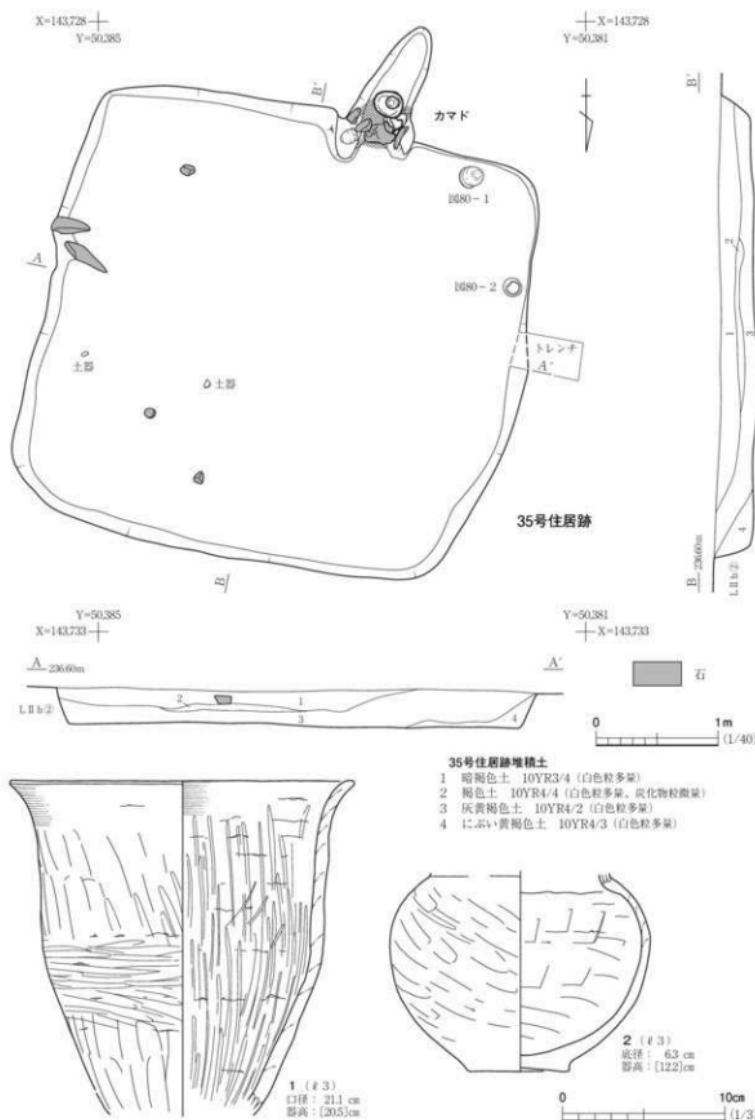


図80 35号住居跡・出土遺物（1）

遺物(図80・81、写真374)

遺物は、土師器が100点出土し、そのうち7点を図示した。

図80-1は瓶である。外面は縦位にナデを施した後に、胴部中段に横位にナデで調整している。

2は球胴形の鉢である。口縁部を欠損している。外面にナデ、内面にヘラナデ調整を施す。

図81-1・2は杯である。口縁部が外反し、中段に稜をもつ丸底の杯である。

3から5は壺である。3は口縁部が欠損し、底部から胴部中段まで遺存している。4・5は小型の壺である。外面にはナデ、内面にヘラナデ調整を施す。

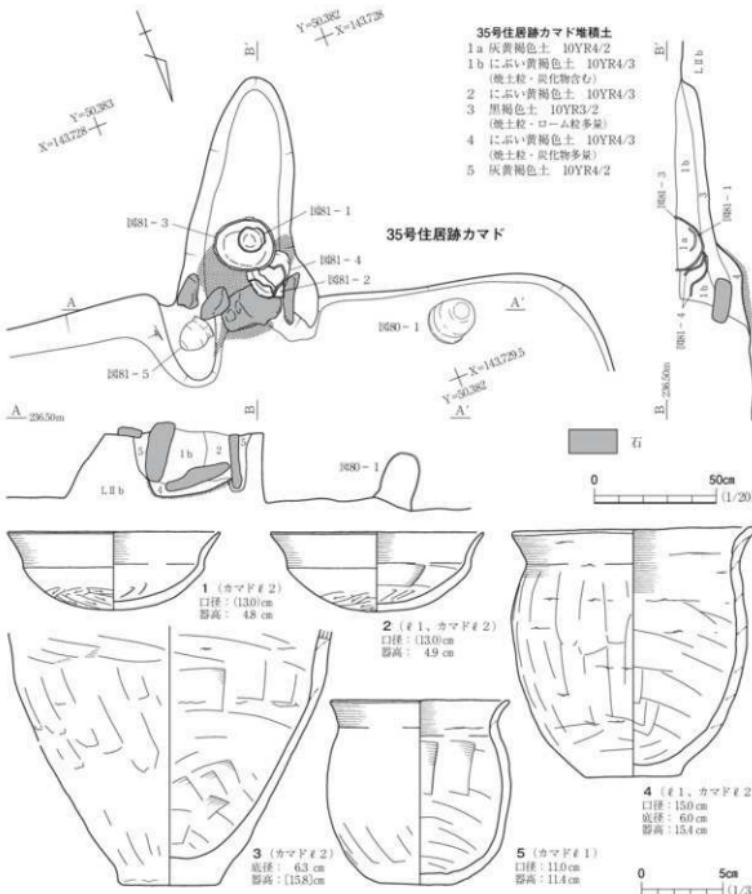


図81 35号住居跡・出土遺物(2)

まとめ

本遺構は、南壁側にカマドをもつ、4.0mの方形の竪穴住居跡である。住居廃絶後にカマド天井部を潰してできた窪みに、杯を入れた甕を2点遺棄している。カマドに伴う何らかの儀礼行為の可能性も考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。（中野）

37号住居跡 S I 37

遺構（図82、写真50）

本遺構は、IV区北部I・J-7・8グリッドに位置している。標高236.5mの平坦面に立地する。検出面は、L II b上面である。II区北部を検出している際に、L II a②を主体とする4mほどの遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は41号住居跡と3号溝跡で、本遺構が41号住居跡より新しく、3号溝跡より古い。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1・2は暗褐色土である。いずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積土と考えている。 ℓ 3はL II bを主体とする暗褐色土の貼床土である。貼床の厚さは、最大8cmで、床下の南壁ぎわからは4基の床下ピットが検出された。これらの床下ピットの規模は、20~58cm、深さ8~10cmである。堆積土は、L II b粒を多く含む暗褐色土である。

平面形は、長方形である。規模は、4.2×3.5mである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で50度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で20cmである。住居の方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して西に約15度傾く。床面は、掘形底面にあたるL II b②から③にかけて貼床を構築している。上面はおおむね平坦で、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、東壁と北壁で2基検出された。カマドの新旧関係は、東壁に最初に作られ、北壁に作り変えられている。ここでは、東壁側をカマド1、南壁側をカマド2とした。

カマド1は、遺存状態が良く、左右の袖と燃焼部、煙道で構成される。カマドは燃焼部を床面よりやや掘り窪め、底面を構築してから袖を作っていると考えられる。堆積土は、9層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土の燃焼部に堆積する自然堆積土である。 ℓ 2・4は焼土粒を多く含む天井崩落土と考えられる。 ℓ 3・5・6煙道の堆積土である。 ℓ 7~9はL II bを主体とした暗褐色土から灰黃褐色土の袖の構築土である。カマドの規模は、全長210cm、最大幅が124cmである。袖は北壁に直交するように住居内に張り出す。右袖には長さ37cm、幅15cmの芯材の石が据えられていた。袖の規模は、左袖が全長60cm、幅46cm、高さ20cmである。右袖は、全長36cm、幅27cm、高さ38cmである。燃焼部は床面と同じ高さに作られている。燃焼部底面は、強く焼けており直径60cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で5cmである。煙道は、周壁外に溝状に張り出す形態である。断面は「U」字状を呈し、底部は燃焼部から一段上がり、煙道端部にかけておおむね平坦に作られている。煙道の端部には15×2cmほどの平たい石が置かれていた。全体の規模は、煙道で全長160cm、最大幅50cmである。

カマド2は、燃焼部の底面と煙道の一部を検出した。カマドは、燃焼部を床面よりピット状に掘り窪めて底部を構築している。堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1は褐色土の煙道に堆積する土層である。 ℓ 2～4は焼土粒を含む、カマドの掘形を埋め戻した人為堆積土である。カマドの規模は、遺存長が106cm、最大幅が50cmである。煙道は、遺存長38cm、最大幅50cmである。燃焼部は、直径50cmほどのピット状に掘り込み、埋め戻して底面を作っている。底面は、あまり焼けていないが、直径16cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは、1cm未満である。

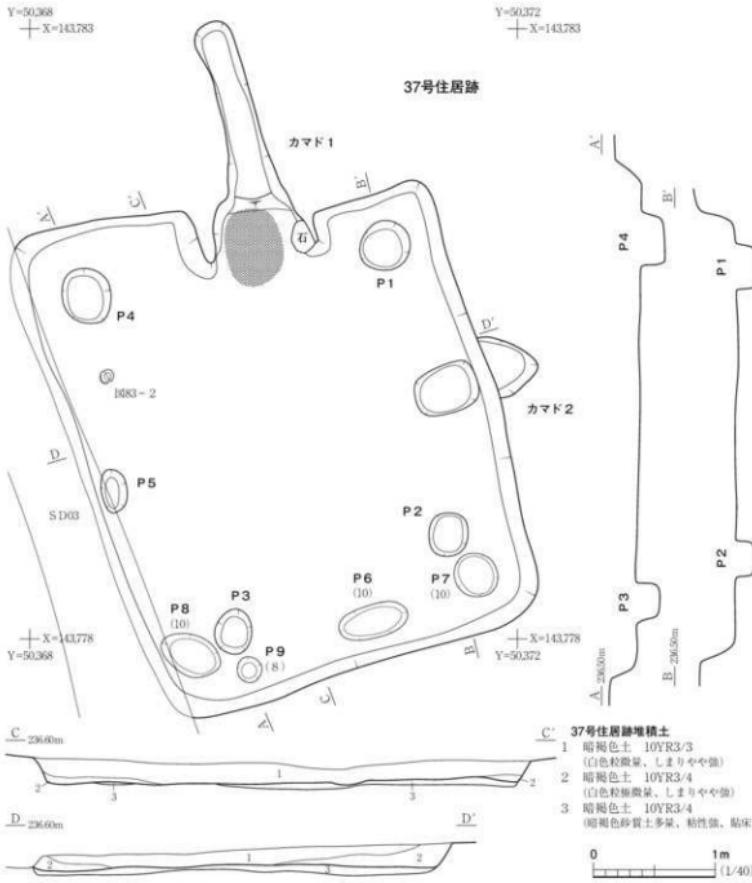


図82 37号住居跡（1）

ピットは5基検出した。住居隅や壁ぎわに位置する。平面形はいずれも円形または楕円形である。規模は直径36~42cm、深さは10~16cmである。堆積土はいずれも暗褐色土である。機能が判明しているものはない。

遺物は、カマドの燃焼部堆積土や床面にかけて出土した。

遺 物 (図83、写真375)

遺物は土師器が125点、須恵器2点、鉄製品1点が出土した。このうち土師器3点、鉄製品1点を図示した。

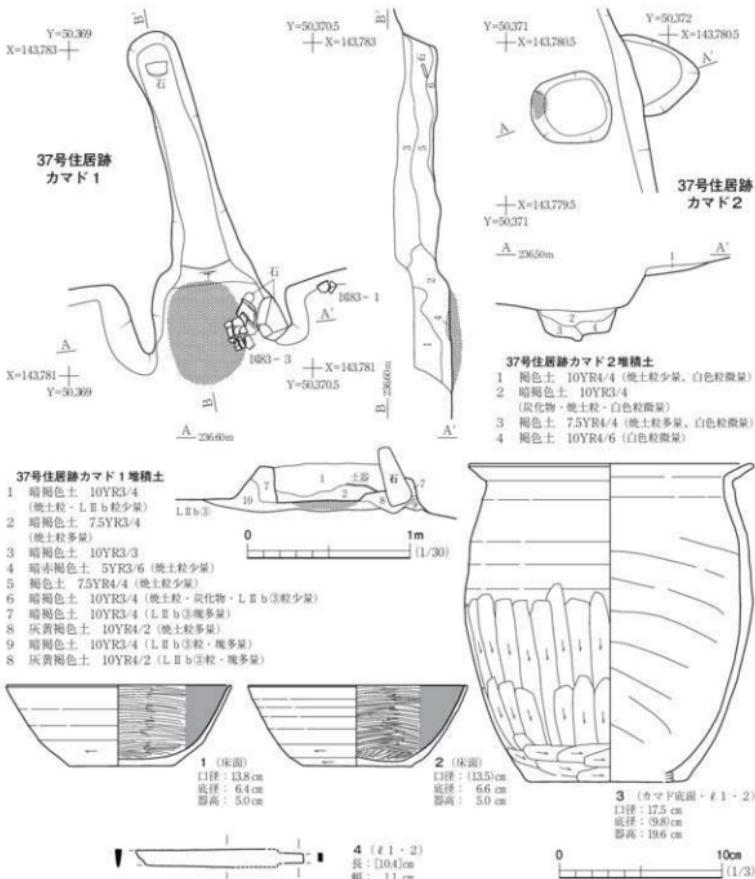


図83 37号住居跡（2）・出土遺物

図83-1・2はロクロ成形の杯である。内面は、入念にヘラミガキを施した後に黒色処理を施している。3は、カマド燃焼部から出土した長胴の壺である。ロクロナデのち胴部下半に縦位にヘラケズリを施し、底部は横位にヘラケズリで調整している。

4は鉄製の刀子である。刀身部の先端と茎の端部を欠損している。

まとめ

本遺構は、長方形の堅穴住居跡である。北壁中央と東壁中央にそれぞれカマドをもつ。最初に東側にカマドを構築した後に、北側に作り変えているものと考えられる。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

38号住居跡 S I 38

遺構 (図84・85、写真51・268)

本遺構は、IV区北東部のI・J-8・9グリッドに位置している。標高は236.3mの平坦面に立地する。検出面は、L II b上面である。3号溝跡の西側を検出した際に、方形に広がる暗褐色土の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複関係は49・51号住居跡と重複し、いずれよりも新しい。

堆積土は、18層に区分した。 ℓ 1～6は黒褐色、暗褐色、褐色の堆積土である。これらの土層はレンズ状に堆積していることから自然堆積土と考えている。 ℓ 7～18は、貼床構築土である。これらの土層は、L II b塊を多く含む暗褐色土や黒褐色土などが交互に堆積しており、貼床を入念に構築したものと考えられ、26号住居跡の床下構造に似ている。

平面形は、おおむね方形である。規模は4.7×4.6mである。床面は、貼床が硬く踏み締まった状態で確認された。表面に多少の凹凸があるが、おおむね平坦な状態であった。

貼床を掘り下げるとき床下ピットを13基検出した。P 1～4・6～8は円形ないし楕円形である。規模は、長軸80～150cm、深さは15～30cmである。P 9～13は円柱状である。いずれも直径20cmほどで、深さは、20～40cmである。堆積土は、L II b塊を多く含む暗褐色土などの人為堆積土である。これらのピットについて機能などは明らかにできなかった。床面から掘形底面までの深さは23cmである。周壁は、床面から50度の角度で立ち上がり、壁高はおおむね47cmを測る。方位は、残りの良い西壁を基準にすると真北に対して東に約5度傾く。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、東壁中央やや南寄りに構築されている。遺存状態は比較的よく左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は11層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で自然堆積土と考えられる。 ℓ 2はにぶい黄褐色土で天井崩落土である。 ℓ 3・4は燃焼部から煙道にかけて堆積し、焼土粒やL II bを含む土である。 ℓ 5は煙出しピットに堆積した極暗褐色土である。 ℓ 6～11は褐色土を主体とする土で、袖の構築土である。カマドの規模は、全長200cm、最大幅140cmである。袖は、東壁に直交するように住居内に張り出している。左右の袖には図86-7の破片を2つに割って、左右それぞれの袖の補強材として用いていた。袖の規模は、

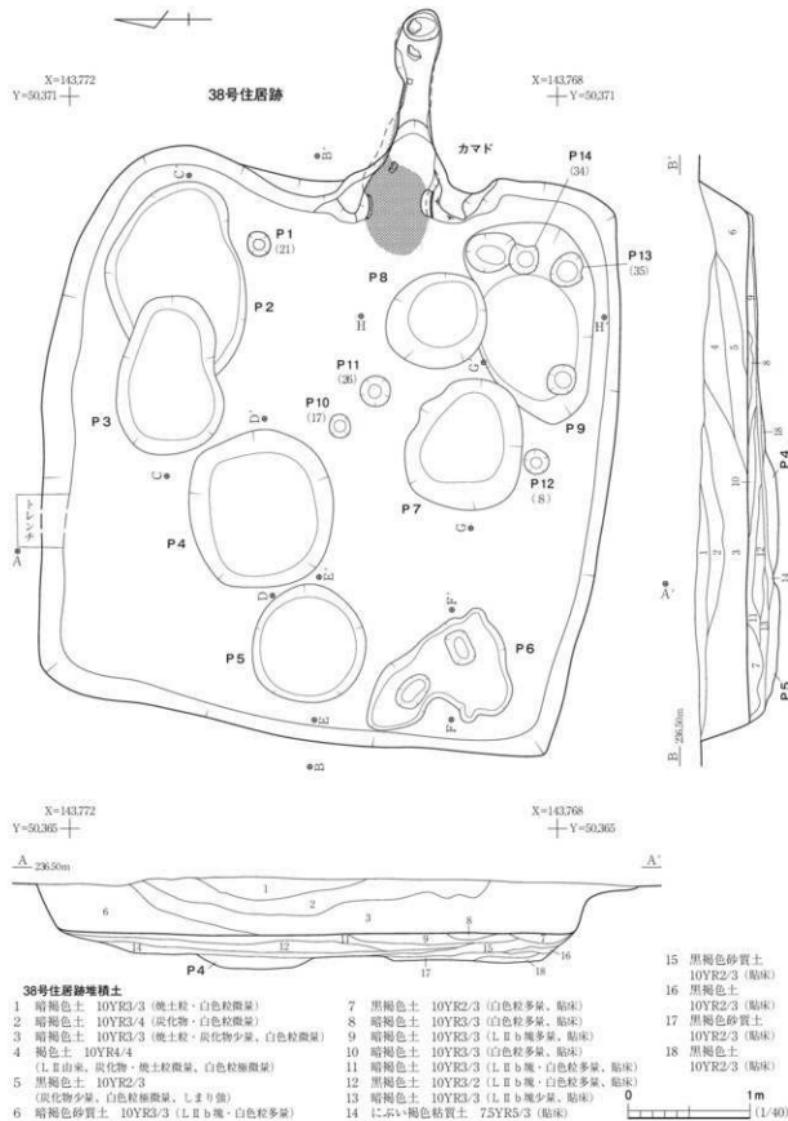


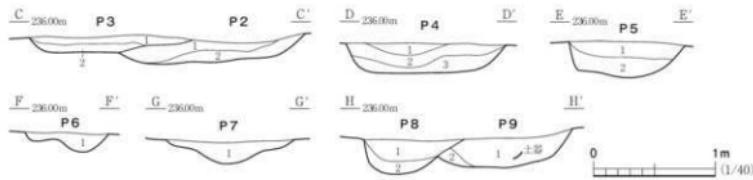
図84 38号住居跡（1）

左袖が全長40cm、幅40cm、高さ28cmである。右袖は、全長30cm、幅64cm、高さ28cmである。

燃焼部は、床面より5cmほど低く窪ませていた。底面は、80×53cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは12cm、煙道側の断面では5cmである。燃焼部の煙道側には、長さ20cm、幅8cmの川原石を用いた支脚が直立した状態で検出された。

煙道は、周壁の外側へ溝状に張り出す構造である。断面形は「U」字状を呈するが、一部壁面がオーバーハンプするところから、トンネル状に掘り込まれていたものと推測している。煙道の底面はおおむね平坦に掘りされていた。規模は、全長103cm、幅50cmである。煙道の先端には、煙出しのピットが作られている。規模は、直径30cm、深さ22cmである。

ピットは、カマド北側の床面でP1を検出した。平面形は円形で、規模は直径18cm、深さ15cm



P 2・8堆積土

- 1 褐褐色土 10YR3/4 (L II b ②較多量)
 - 2 棕色砂質土 10YR4/4
- P 3堆積土**
- 1 褐褐色土 10YR3/4
 - 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
(褐褐色土とL II b ②の混土)
- P 5堆積土**
- 1 褐褐色土 10YR3/3 (L II b ②較少量)

P 4堆積土

- 1 褐褐色土 10YR3/4
 - 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
 - 3 褐褐色土 10YR3/3 (L II b ②較少量)
- P 6堆積土**
- 1 褐褐色土 10YR3/3 (L II b ②較多量)
- P 7堆積土**
- 1 褐褐色土 10YR3/3 (L II b ②較少含む)

P 6堆積土

- 1 褐褐色土 10YR3/3 (L II b ②較含む)
- P 7堆積土**
- 1 褐褐色土 10YR3/3
(ローム粒少量、炭化物粒微量)
- P 9堆積土**
- 1 褐褐色砂質土 10YR3/4 (純土粒少量)
 - 2 棕色砂質土 10YR4/4

X=143.770
+ Y=50.372

X=143.7685
+ Y=50.372

38号住居跡カマド堆積土

- 1 褐褐色土 10YR3/4
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
(純土粒少量)
- 3 棕色土 75YR4/4
(純土粒少量、炭化物粒微量)
- 4 褐褐色土 75YR3/4
(L II b ②較少量)
- 5 混褐色土 75YR2/3
(L II b ③少量)
- 6 棕色土 10YR4/4
- 7 棕色土 10YR4/6
- 8 褐褐色土 10YR3/4
- 9 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 10 棕色土 10YR4/4
(純土粒多量)
- 11 棕色土 10YR4/4

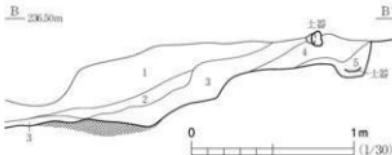
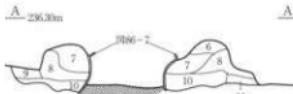
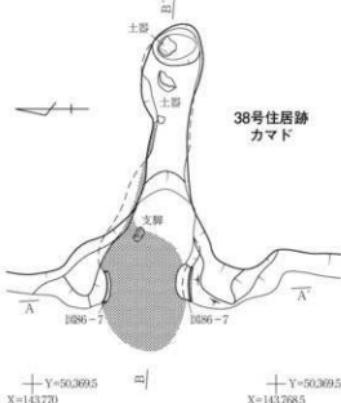


図85 38号住居跡（2）

である。機能は明らかにできなかった。

遺物は、カマド堆積土や貼床構築土などから散在して出土している。

遺 物 (図86、写真375)

遺物は、土師器386点、須恵器9点、石製品1点、鐵製品3点が出土し、12点を図示した。

図86-1～5は、内面に黒色処理を施したロクロ成形の土師器の杯である。1は底部外面に、2は底部と胴部下半外面に文字は明らかにできないが墨書きがみられる。6は、須恵器の長頸瓶の口縁部から頸部片である。7・8は土師器の壺である。

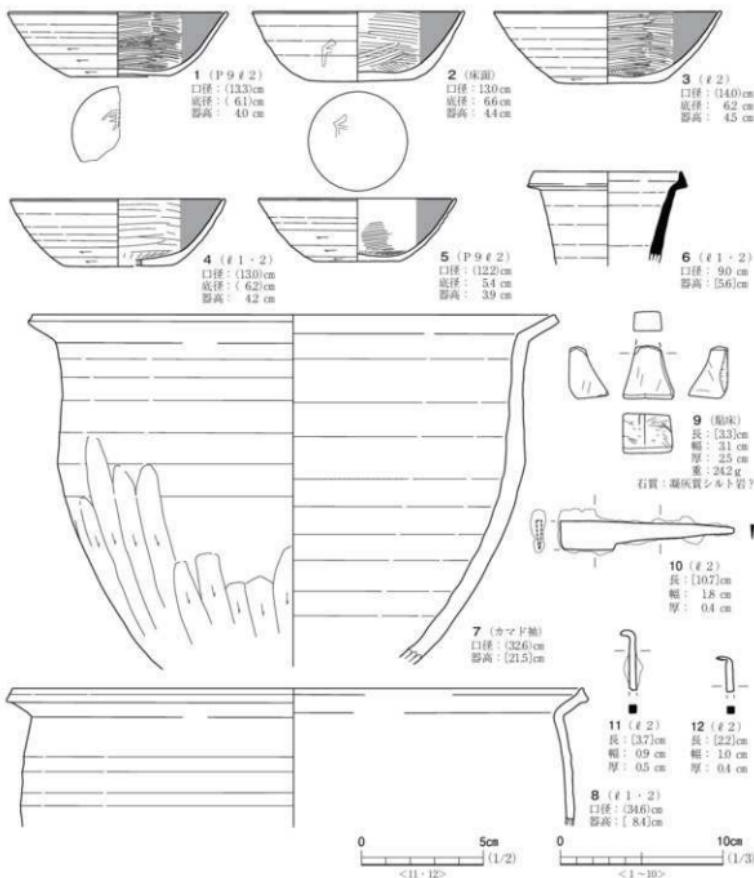


図86 38号住居跡出土遺物

9は砥石である。遺存率は50%ほどであるが、各面とも念入りに使用した痕跡が確認できる。10は鉄製の刀子である。刀身部の先端を欠損している。

11と12は鉄製の釘である。いずれも先端が欠損している。頭部は折り曲げられている。断面形は方形である。

まとめ

本遺構はカマドを東壁にもつ、4.7mの方形の堅穴住居跡である。カマドの袖に土師器壺の破片を補強材に用いていた。床下の構造も特殊で、複数回にわたりビットを掘り込んだ後に埋められている。床下も入念に土を固めて貼床を構築している。床面の強化を必要とした特殊な住居の可能性も考えられる。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えている。(中野)

39号住居跡 S I 39

遺構 (図87・88、写真52・53)

本遺構は、II区北西部のJ・K-16グリッドに位置する。標高は約236.0mの北側から南側へ下る緩斜面に立地する。検出面はL II a③からL II b上面である。検出時に方形に広がる暗褐色土の範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複関係は、6号溝跡と3号烟跡で本遺構が古い。直接の重複関係はないが、下層に143・145・146号土坑が位置する。

堆積土は6層に区分した。ℓ 1・3が自然堆積土、ℓ 2はℓ 3の堆積後に焼土や炭化物を投棄したと考えている。ℓ 4～6は貼床土で、焼土や炭化物が含まれている。

平面形は6号溝跡や3号烟跡によって部分的に壊されているが、遺存部分から推定して方形であったと考えている。規模は4.0×3.9m、壁の高さが30cmである。方位は西壁で北からおよそ16度東に傾く。壁は外傾ぎみに立ち上がる。床面は貼床が施されている。やや南側に傾斜し、貼床の厚さは最大25cmである。

貼床を剥がすと4基の床下ビットを検出した。P 2・3・5は楕円形、P 4は隅丸方形である。規模は長軸が40～90cm、深さ12～40cmである。堆積土は、暗褐色土を主体とする土で、人為堆積土と考えている。

住居内の施設はカマドとビットである。カマドは東壁中央のやや南寄りに位置し、燃焼部・袖・煙道で構成されている。カマド堆積土は10層に区分した。ℓ 1～4は煙道に堆積した流入土、ℓ 5～8はカマドの崩落土、ℓ 9・10は袖の構築土である。カマドの規模は燃焼部の幅で40cmを測る。奥行きは70cmを測る。底面は厚さ5cmほどが焼土化していた。煙道は溝状を呈し、南東側に向かってわずかに湾曲する。煙道の幅は15～20cmで、深さは20cmである。煙出しは煙道の先端とみられるが、平面形からは見分けがつかない。

ビットは1基検出した。P 1はカマドの南側に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は不整楕円形で、規模は90×80cm、深さが40cmである。堆積土はℓ 1が暗褐色土、ℓ 2が黒褐色土で、いずれも炭化物や焼土粒を含む。

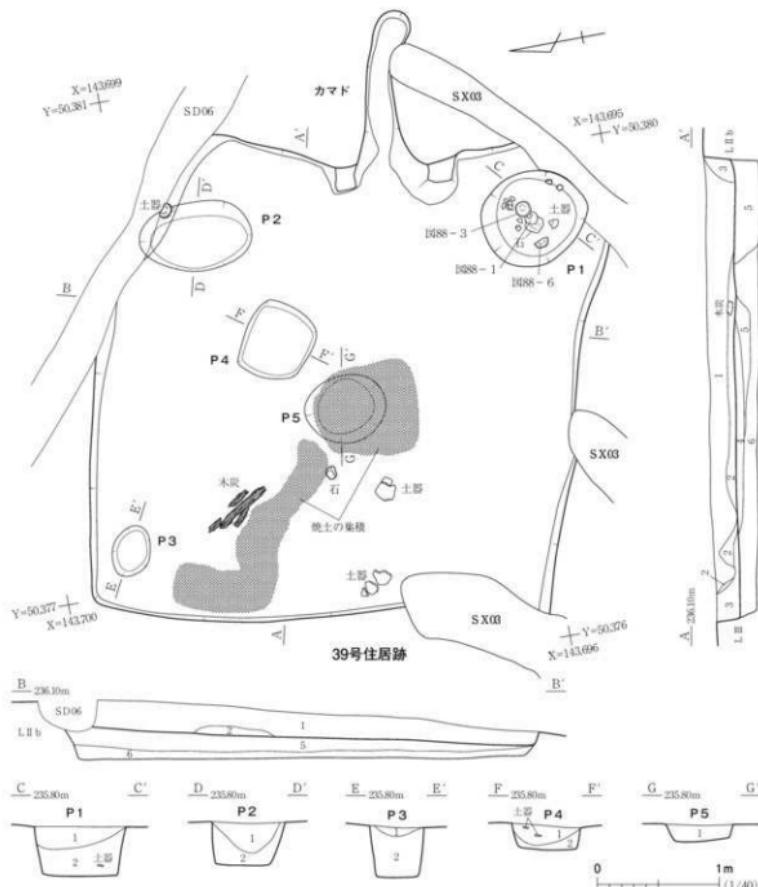


図87 39号住居跡（1）

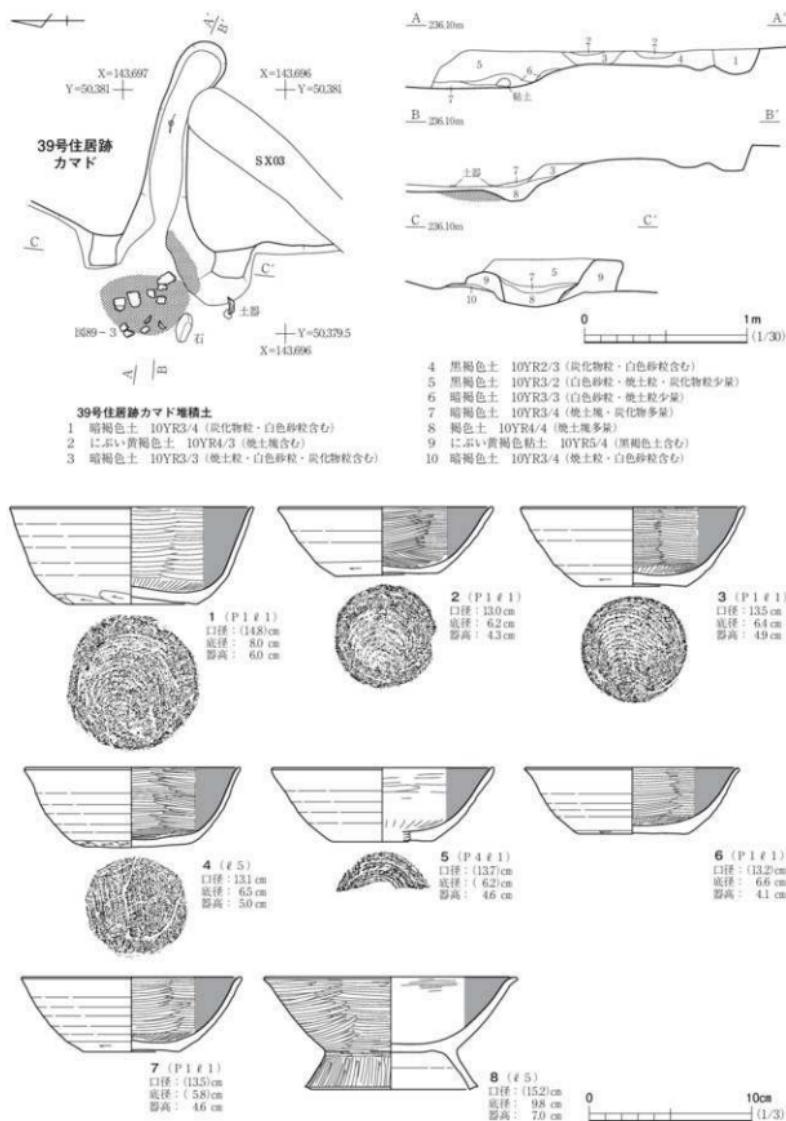


図88 39号住居跡（2）・出土遺物（1）

遺物は、住居内堆積土ℓ 1・2から多く出土した。P 1からは図88-1・3・6の杯が出土した。カマドの燃焼部からは、底面に須恵器壺の破片を敷いたような状態で出土している。被熱の痕跡はみられず、カマドを壊した後に、破片を遺棄したと考えている。

遺物 (図88・89、写真375・376)

遺物は、土師器が418点、須恵器が42点、石製品が1点、鉄製品1点が出土した。このうち12点を図示した。

図88-1～8は内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。1～5の底部には回転糸切痕が、4は糸切痕後に手持ちヘラケズリの再調整を施す。8は高台付杯である。ロクロナデ後、ヘラミガキがなされている。内面は黒色処理されているが、磨減が著しい。高台は高さがあり「ハ」字状に開き、底部貼り付けである。

図89-1はロクロ成形の壺である。胴部下半から底部にかけて欠損している。内外面ともにロクロナデがなされ、特に外面のロクロメが明瞭である。胎土には雲母が多く含まれている。

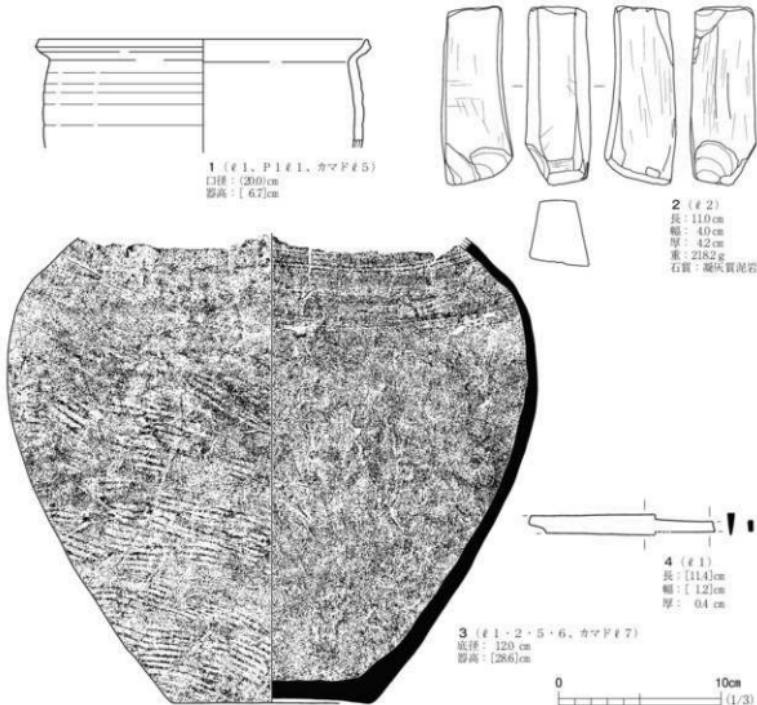


図89 39号住居跡出土遺物（2）

2は砥石である。4面にわたって使用されている。

3は須恵器甕で口縁部を欠損する。胴部は外面に平行タタキ、内面上部にナデ、下部に無文のアテ具痕が認められる。胴部外面に自然釉が付着し底部から胴下部にかけて窯体片が付着している。

4は鉄製の刀子片である。刃部先端と茎部端を欠損する。

まとめ

本遺構は、4.0m方形の堅穴住居跡である。調査区内の平安期の住居跡と比較するとほぼ平均的な大きさである。カマドの廃絶後に、須恵器甕の破片を敷くように遺棄するなどの特徴も見受けられた。所属時期は、出土土器の年代観から平安時代、9世紀と考えている。
(吉野・中野)

41 a・b号住居跡 S I 41 a・b

遺構(図90・91、写真54・55)

本遺構は、IV区北東部I・J-8グリッドに位置する。標高236.1m付近の平坦面に立地する。検出面は、L II a③である。IV区北東部を検出している際に、L II a②を主体とする5×4mほど の長方形の範囲と焼土の集積を2箇所確認したことから、住居跡として調査を行った。当初は1軒の住居跡として調査を行ったが、カマドが2箇所みられる点や土層図面などを再検討した結果、2軒の住居跡が重複しているものと判断した。重複する遺構は、32号住居跡、37号住居跡、3号溝跡で、いずれの遺構よりも本遺構が古い。ここでは新しい住居跡を41 a号住居跡、古いものを41 b号住居跡として記載した。

41 a号住居跡は、41 b号住居跡の南側と西側を埋め戻し、北側にカマドを作り変えているものと判断した。堆積土は3層に区分した。ℓ 1・2は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土の自然堆積土である。ℓ 3は貼床の土である。

平面形は東西に長い長方形である。規模は西側が不明確であるが、4.4×3.0mの大きさを推測している。周壁は、遺存状態の良い北壁側ではほぼ垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で28cmである。住居跡の方位は、残りの良い東壁を基準にすると傾きはなく真北を示す。床面は、L II b③上面に貼床を構築している。上面はおおむね平坦で、全体的に硬く締まっている。貼床の厚さは、最大で8cmである。

住居内の施設は、カマドのみである。カマドは北壁中央に構築されている。煙道の先端を37号住居跡に接されているが、比較的の残りは良く、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。カマドの堆積土は6層に区分した。ℓ 1・2は焼土粒やL II b粒を含む暗褐色土で、煙道に堆積する土である。ℓ 3・4は焼土粒を多く含む暗褐色土で、カマド天井や袖などの崩落土である。ℓ 5・6は暗褐色土で袖の構築土である。カマドの規模は、遺存長116cm、最大幅が110cmである。

袖は、北壁に直交するように住居内に張り出している。L II b②を掘り残して、基部を作り出し、その上にL II b粒を多く含む土で袖を構築している。規模は、左袖が全長70cm、幅35cm、高さ26cmである。右袖は全長40cm、幅36cm、高さ28cmである。燃焼部は、床面と同じ高さに作ら

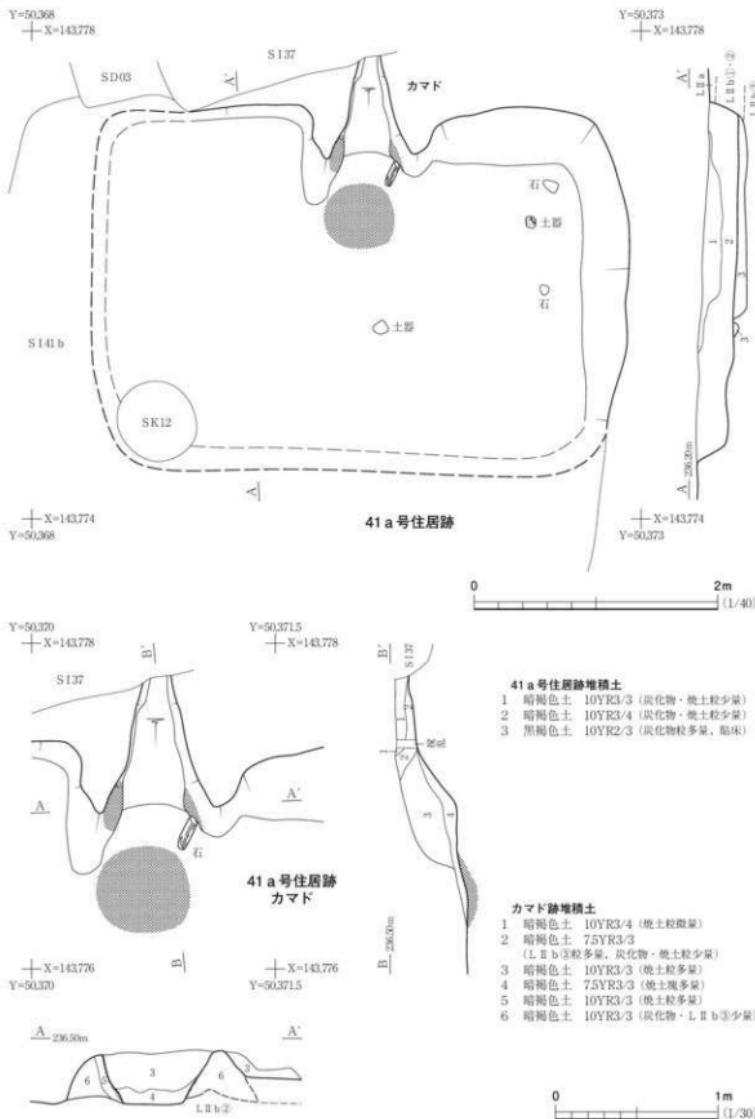


図90 41a号住居跡

れ、煙道側に向かって緩く傾斜している。底面は、直径50cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で5cmである。煙道は、断面形が「U」字状で、周壁の外へ溝状に張り出す。底面は燃焼部側から緩く傾斜し高くなっている。規模は、遺存長が70cm、幅40cmである。

41 b号住居跡は、東壁側にカマドをもつ住居跡である。堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1・2は焼土粒や炭化物を含む褐色から黒褐色土の堆積土であり、41 a号住居跡を構築する際に住居の一部を埋めた人為堆積土である。 ℓ 3・4も人為堆積の暗褐色土である。

平面形は東西に長い長方形である。規模は、5.4×4.4mである。周壁は遺存状態の良い北壁側でほぼ垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で40cmである。住居の方位は、41 a号住居跡と同じで、残りの良い東壁を基準にすると傾きはなく真北を示す。床面は、L II b③にかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、東壁中央やや南寄りの位置に構築されている。煙道の先端を32号住居跡に壊されている。カマドの構造は、燃焼部の底面と煙道から構成される。カマドの堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1・2は焼土やL II b粒を含む褐色土。 ℓ 3・4はにぶい赤褐色土や暗褐色土である。いずれも煙道に堆積しており人為堆積土と考えている。煙道の先端から燃焼部までの長さは200cm以上と考えられる。燃焼部は100×45cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で1cmである。煙道の規模は、遺存長150cm、幅52cmである。

ピットは、6基検出した。P 1～4は、平面形が楕円形で、P 5は不整形、P 6は円形である。規模は30～130cm、深さは10～15cmである。P 4は北東隅に位置し、貯蔵穴の可能性も考えられるが判然としない。他のピットも機能は不明である。ピットの堆積土は、L II b粒を含む灰黄褐色土と暗褐色土である。

遺物は、1軒の住居跡として取り上げてしまっているため、整理作業の段階で出土層位をもとに、41 a号のものと41 b号のものに分けている。図92-1～4は41 a号住居跡に対応する遺物である。主に床面東側やカマドの堆積土から出土している。5は41 b号住居跡のP 5の堆積土から出土している。

遺物(図92、写真376)

遺物は土器が251点、須恵器が4点出土した。このうち土器5点を図示した。

図92-1は長胴の甕である。2～5はロクロ成形の杯である。2～4は内面に入念なヘラミガキ調整後に内面黒色処理を施す。3・4は底部外面に手持ちヘラケズリが施される。3は底部に回転糸切り痕がみられる。5は高台付杯の底部破片である。外外面にミガキと黒色処理を施す。

まとめ

本遺構は、2軒の住居跡が重複しているものと考えられる。遺構の重複関係から、41 b号住居跡を埋め戻してから、41 a号住居跡に作り変えているものと考えられる。住居跡の方位が一致し

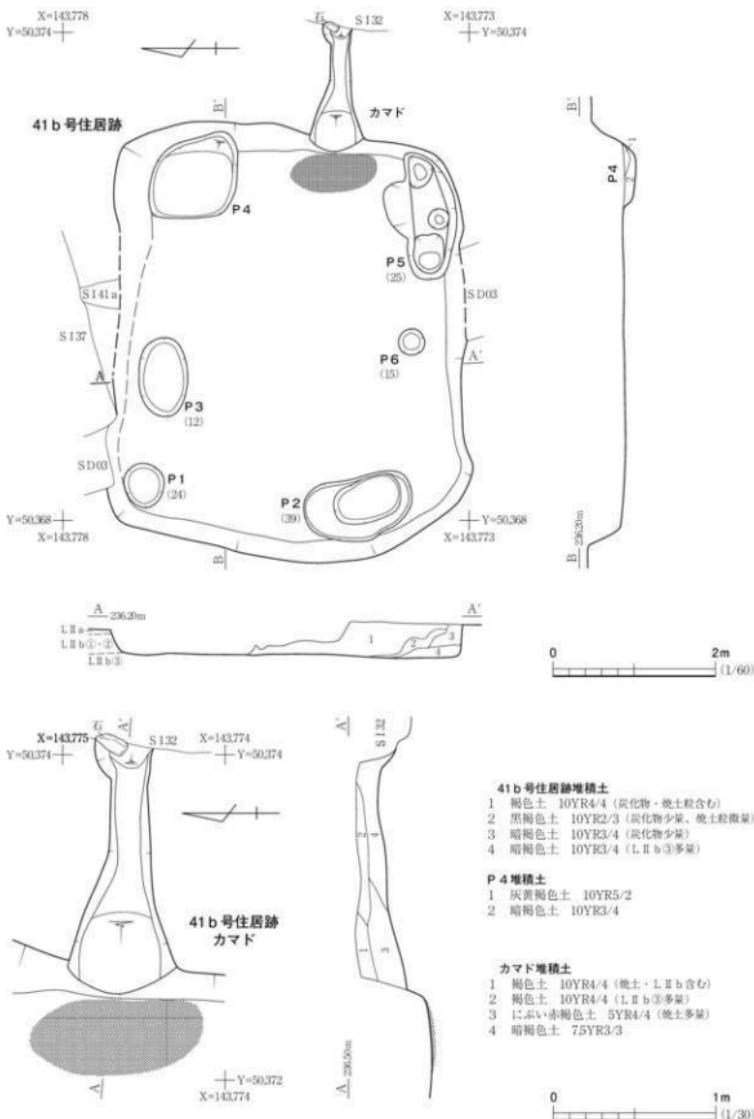


図91 41b号住居跡

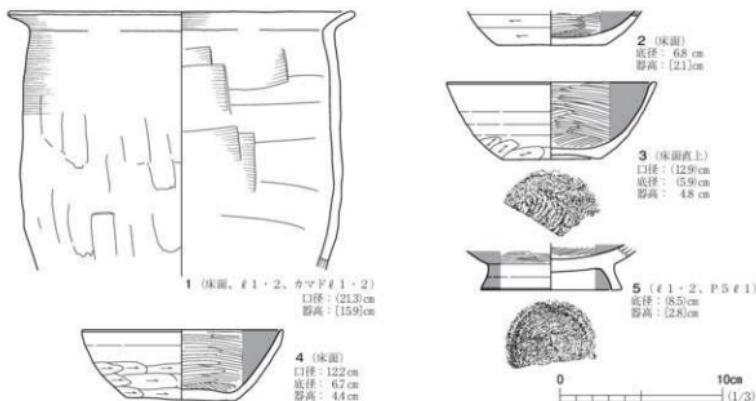


図92 41b号住居跡出土遺物

ている点や東および北壁が重複している点からもきわめて近い時期に建てられた住居跡と考えている。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。
(中野)

42号住居跡 S I 42

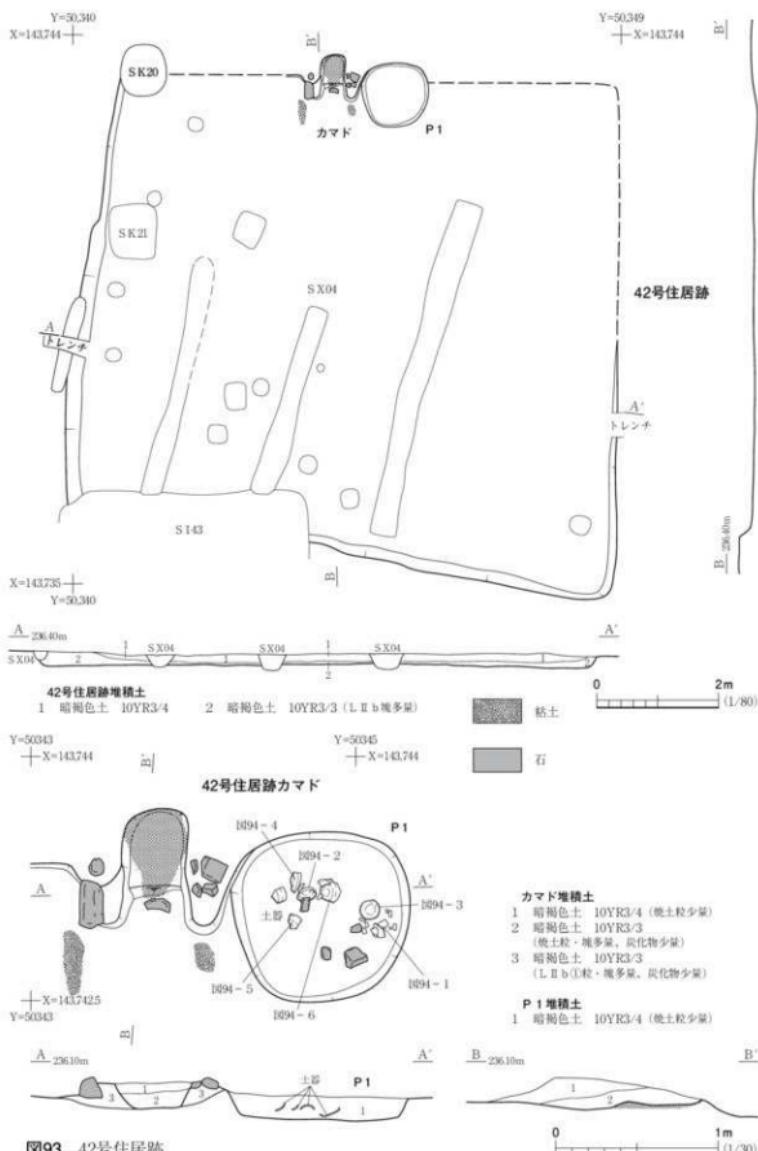
遺構(図93、写真56)

本遺構は、IV区西部のF・G-11・12グリッドに位置する。標高236.1m付近の平坦面に立地する。検出面はL II a ③～L II bである。43号住居跡の北側を検出している際に、7mほどに広がる暗褐色土の範囲と焼土の集積を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は43号住居跡と4号烟跡、20・21号土坑である。遺構の新旧関係は本遺構がいずれよりも古い。また近隣には南側に63号住居跡が位置する。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1・2は暗褐色の自然堆積土である。

平面形は北側の一部が壊されているが、おおむね方形と考えられる。規模は9.0×8.7mである。周壁は遺存状態の良い西壁で40度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で20cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら、北に対して東に約10度傾く。床面はL II b ②から③にかけて構築しておりおおむね平坦に作られている。全体的に硬く締まっている。貼床は確認できなかった。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは北壁中央から西側に寄った位置に構築されている。遺存状態は良くなく、左右の袖と燃焼部から構成される。燃焼部は住居壁の外側に位置するように作られている。燃焼部の部分を床面よりやや掘り窪め、底面を構築してから袖を作っているものと考えられる。堆積土は3層に区分した。 ℓ 1・2は暗褐色土で燃焼部から煙道に認められる人為堆積土である。 ℓ 3は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土で、L II bを主体とした袖の構築土であ



る。カマドの規模は、全長120cm、最大幅が87cmである。袖は住居内に張り出している。袖には左右それぞれ芯材の礫が設置されていた。左袖側には2個、右袖側には4個認められた。袖の規模は、左袖が全長40cm、幅30cm、高さ10cmである。右袖は全長50cm、幅32cm、高さ10cmである。左右の袖の前面には白色の粘土の集積が確認できた。袖の一部をなすものと考えられる。粘土集積の規模は左袖側が $40 \times 11 \times 2$ cm、右袖側が $15 \times 10 \times 2$ cmである。燃焼部は、床面より3cmほど低く作られている。底面は、直徑58cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で3cmである。

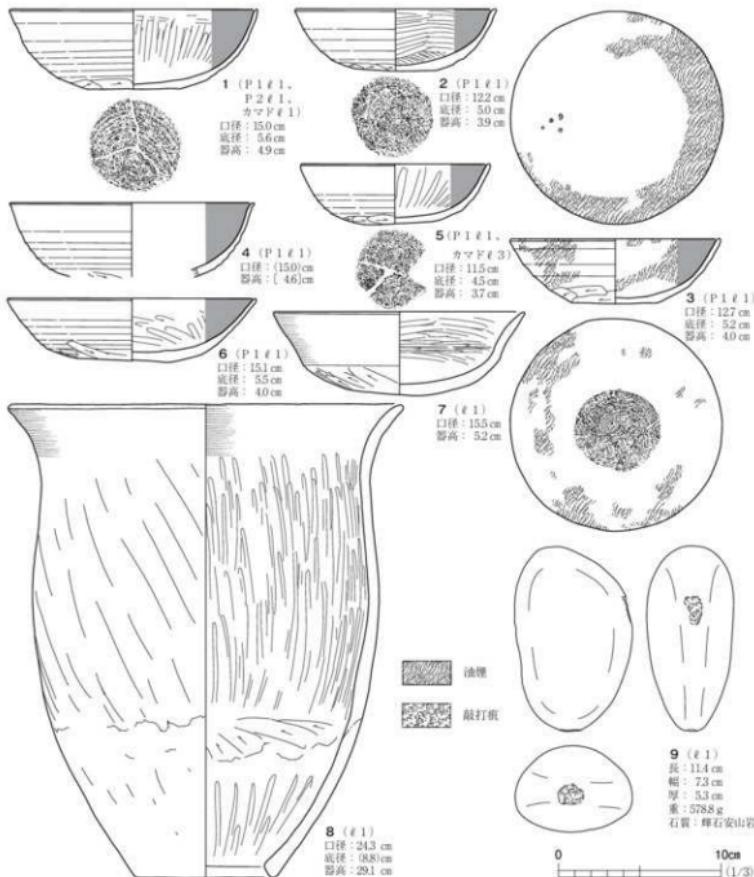


図94 42号住居跡出土遺物

遺物は、カマドの堆積土やP 1 堆積土よりまとまって出土している。

遺物 (図94、写真376)

遺物は土師器が353点、陶器1点、石器1点が出土した。このうち土師器8点、石器1点を図示した。図93-1~6は、ロクロ成形の杯で、内面をヘラミガキ後に内面黒色処理を施している。いずれもP 1 からの堆積土からまとめて出土している。1~3・5の底面には回転糸切り痕が確認できる。1は油煙の付着がみられる。

7は非ロクロ成形の杯である。口縁部が外反し、丸底で体部に緩い稜をもつ。8は、瓶である。

7と8については、直接住居跡に伴う遺物ではなく周辺からの流れ込みによる遺物と考えている。

9は敲石である。

なお、堆積土中より中世の貿易陶器が1点出土している。灰釉を施した小片で、器種などは不明だが、龍泉窯のものと考えている。

まとめ

本遺構は、北壁中央にカマドをもつ、9mの方形の竪穴住居跡である。カマドの東側からは貯蔵穴を検出した。当遺跡においては、平安時代の住居跡の中で最大である。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

43号住居跡 S I 43

遺構 (図95、写真57・268)

本跡はIV区中央部、F-K-15~22グリッドにみられる浅い窪み地形の北側に接する微高地、G-12グリッドに位置している。42・63号住居跡、4号畑跡と重複し、本住居がもっとも新しい。検出面は重複する竪穴住居跡の堆積土上面で、ℓ 1 の広がりとしてその存在を知ることができた。しかし、住居の範囲が確定できたのは、両住居跡の堆積土を約15cm掘り下げた段階である。ℓ 1は他の住居跡堆積土では確認できず、1号方形区画に堆積している黒色土に類似している。

本遺構の平面形は南北に比べ東西が長い隅丸長方形で、住居各壁はほぼ東西・南北を指す。規模は東西4.5m、南北3.9mで、検出面からの深さは45cmほどである。床は貼床で、床面はほぼ平坦である。周壁は60度ほどの斜度で立ち上がっている。

堆積土は5層に区分した。ℓ 5は壁溝の堆積土、ℓ 4が貼床土、ℓ 3は黄色・黄白色の粘質土塊を多量に含む。この粘質土は住居周辺には堆積が認められず、他の場所から持ち込まれた可能性が高い。単なる埋め戻し土か、土屋根などの施設に係る堆積土かは判断できなかった。周壁ぎわを除く床面上には最大1cmほどの厚さで木炭が堆積し、南東隅周辺では炭層内から骨片が出土した。堆積状態は、ℓ 3・4が人為堆積あるいはきわめて短時間の堆積、ℓ 1・2は自然堆積と考えている。

住居内の施設は東壁の南東隅寄りからカマド、カマド部分を除く壁ぎわから壁溝、住居南半部から8基のピットを検出した。カマドは東壁を大きく掘り込んで造られている。遺存状態は悪く、袖はほとんど残っていなかった。規模は燃焼部底面と考えられる焼土化範囲の西端から煙道先端部ま

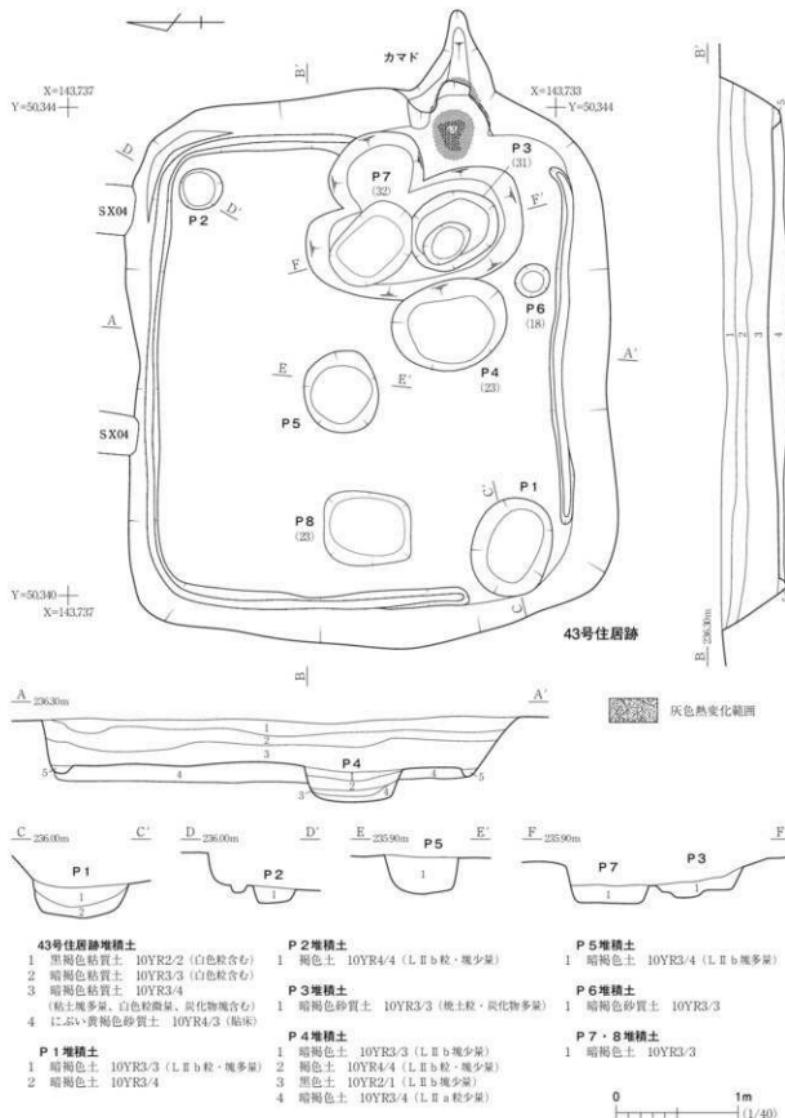


図95 43号住居跡 (1)

での長さ123cm、幅は70cmほどと考えている。燃焼部底面の焼土化範囲は住居内に25cmほど張り出し、規模は43×32cmである。煙道の平面形は鋭角三角形状をなし、住居外へ65cmほど延びている。底面は緩やかに傾斜している。

カマド堆積土は6層に区分した。 ℓ 4～6が本来のカマド堆積土で、いずれにも多量の焼土塊が含まれ、 ℓ 5・6ではより高い熱を受けたため黒色に変色した焼土塊が認められた。カマド内の焼土化は著しく、燃焼部底面では焼土の色調が中心から周辺に向かって灰色・橙色・赤色に変化し、側壁・奥壁部分では5cmほど赤く焼土化していた。

8基のピット中で床面から検出したものはP 1～6、貼床除去後に検出したものはP 7・8である。P 2は住居北東隅に、P 6は南壁の中央やや東寄りに位置し、それぞれ径35・30cm、深さ16cmである。その位置から、柱穴と考えられる。P 1は南西隅に位置する楕円形のピットで、大きさは65×80cm、深さ33cmである。堆積土 ℓ 2は自然堆積と考えられる土であることから貯蔵穴と考えている。P 3～5は大きさ60～90cm、深さ25cmほどの円形・楕円形のピットで、P 1を含めこれらの穴は ℓ 3で埋められている。P 3からは焼骨片が出土した。P 7・8は隅丸長方形の穴で、長軸75cm、深さ20～35cmほど、内部には暗色土が堆積していた。

遺物は、すべて破片が散在した状態で出土した。出土層位は自然堆積土と考えている ℓ 1と ℓ 2からの出土量が96点とその大半を占める。 ℓ 3から遺物は出土していない。

遺物(図96、写真377)

出土遺物は土師器と赤焼土器163点、石製品1点、鉄滓1点で、このうち赤焼土器3点、石製品1点を図示した。

図96-1～3はロクロを用いて作られた赤焼土器の杯または皿で、1の底面には回転式切り痕

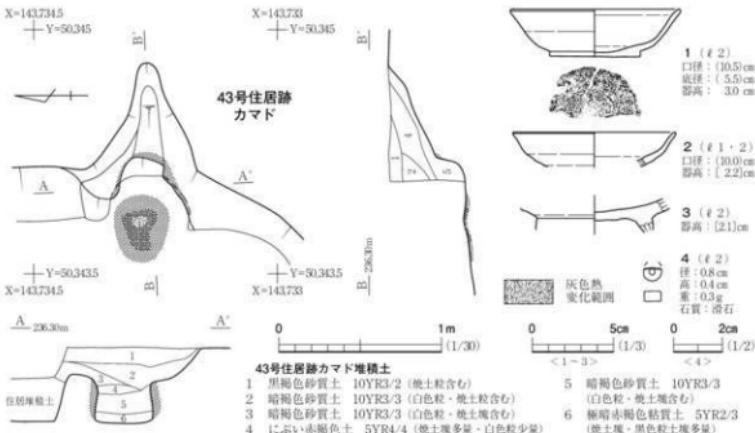


図96 43号居住跡(2)・出土遺物

が認められる。内外面ともに器面の調整はロクロナデ調整で、体部の厚さは4mmほどと薄い。2の胎土は砂粒を含まずきわめて均質で、質感は「かわらけ」に近い。これらに類似する破片を他に6点確認している。3は赤焼土器の高台の付く杯で、内外面ともロクロナデで調整され、内面に黒色処理は認められない。

4は滑石製の小玉で、中央に2mmほどの穴があけられている。

まとめ

本遺構は長方形基調の竪穴住居跡で、カマドは住居南東隅に寄った部分に位置し、壁を掘り込んで造られていた。時期は、直接本跡に伴う遺物がなく特定できないが、カマド煙道からロクロ成形の杯片が出土し、図96-1・2は赤焼土器であることから、平安時代でも10世紀の所産と考えている。高木遺跡で調査された住居跡の中では、もっとも新しい時期のものである。
(松 本)

44号住居跡 S I 44

遺構(図97、写真58)

本遺構は、II区南東部のP・Q-19・20グリッドに位置する。標高約236.0m付近の平坦面に立地する。検出面はL IV上面である。9号住居跡の調査中に、方形に広がる暗褐色土の範囲を確認した。重複関係は9号住居跡で、本遺構が古い。

堆積土は2層に区分した。いずれもにぶい黄褐色の砂質土である。層厚が薄く堆積過程は明らかにできなかった。

遺構の平面形は、南東部がやや張り出す不整形である。規模は南北が7.8m、東西が8.2mである。周壁は外傾ぎみに立ち上がり、壁高は最大で20cmである。方位は北西壁が北から58度東を示す。床面はL IVを掘り込んで構築しており、ほぼ平坦である。

住居内の施設は地床炉とピットである。地床炉は床面東端に位置し、9号住居跡P 2により上部を壊されている。平面形は楕円形で、規模は直径120cm、焼土化の厚さは3cmである。

ピットは3基確認した。P 1-3は、住居内の位置関係から柱穴と考えているが、柱痕跡はみられなかった。平面形はP 1・2が楕円形、P 3が円形である。規模はP 1・2の長軸が80~100cm、短軸が60~80cm、深さが56cmとなり、P 3が直径40cm、深さが40cmである。なお、9号住居跡のP 1の位置が本住居跡の柱穴として相応しい位置にある。このことから、本住居跡の柱穴を掘り直している可能性を考えている。

遺物(図97)

本住居跡からは土師器が84点出土し、その大半は①の出土である。そのうち3点を図示した。

図97-1は高杯か器台で、脚部が出土した。脚部は円錐台状で、内外面ともにハケメが施される。2は手づくね成形の小型土器である。指押さえの痕跡がみられる。3は高杯の杯部片である。

まとめ

本住居跡は、8.2×7.3mの大型の竪穴住居跡である。地床炉の位置が床面の南東隅にあるのが特



図97 44号住居跡・出土遺物

微的である。柱穴を3基確認しており、9号住居跡のP1の位置にもピットがあつた可能性も考えられ、その場合は4本の主柱穴を方形に配置する構造が推定される。所属時期は出土土器の年代観から古墳時代前期と考えている。

(吉野・中野)

45号住居跡 S I 45

遺構 (図98、写真59)

本遺構は、I区西部のK・L-11グリッドに位置する。周辺の標高は約236.4mである。検出面

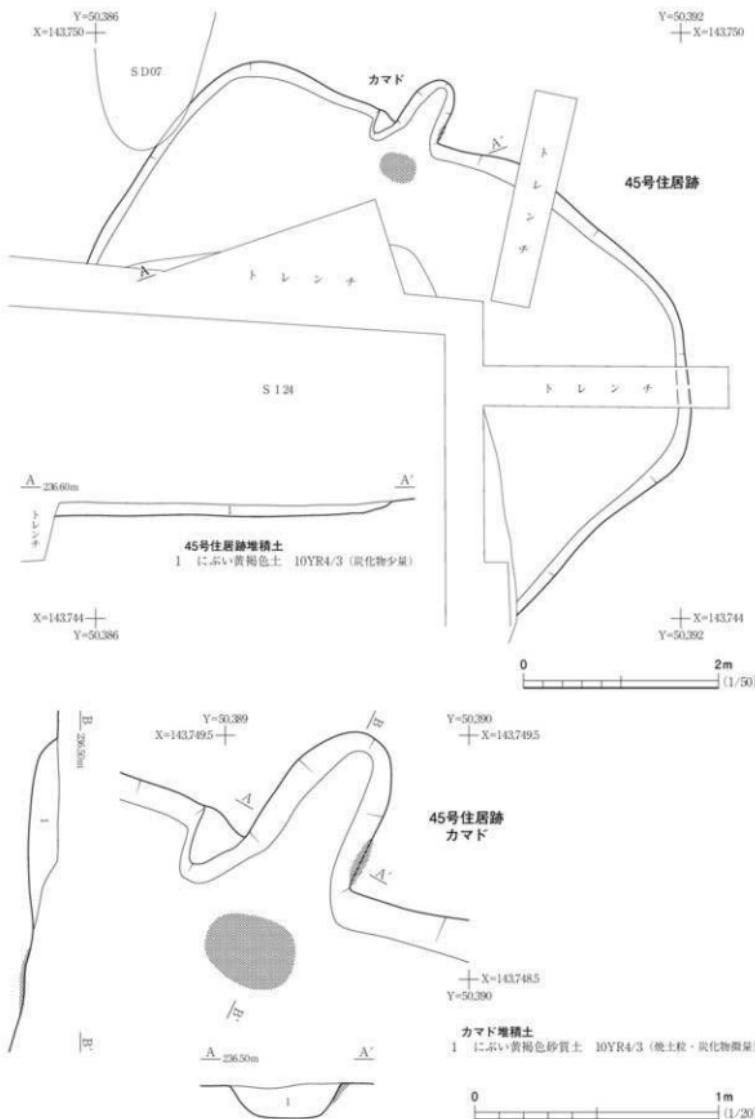


図98 45号住居跡

はL II b ②である。24号住居跡の北側において、長方形に広がる暗褐色土の範囲と焼土の集積を確認したため、住居跡として調査した。重複関係は24号住居跡と7号溝跡でいずれの遺構よりも本遺構が古い。

堆積土はにぶい黄褐色土の単層である。層厚が10cm程度であるため、堆積過程は不明である。

平面形は、24号住居跡によって南側の大部分を壊されているが、北側の遺存部分から、方形ないし長方形であったと考えている。規模は東西が6.0m、南北の遺存長が3.6mである。周壁は30度で緩く立ち上がる。壁の高さは最大で15cmである。方位は、西壁を基準とするなら東に約20度傾く。床面はL II b下面からL III上面にかけて構築しておりおおむね平坦に作られているが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設はカマドのみである。カマドは北壁中央よりやや西側に構築されている。遺存状態は悪く、左袖、燃焼部、煙道から構成される。堆積土はにぶい黄褐色砂質土の単層で、燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土と考えられる。カマドの規模は、推定長120cm、最大幅が90cmである。袖は、左袖が一部遺存していた。地山を掘り残して基部を作つており、規模は全長30cm、幅28cm、高さ10cmである。燃焼部はあまり焼けておらず、直径40cmの範囲にわたってわずかに赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは0.5cmである。煙道は、北壁に直交する形で周壁の外側に溝状に張り出す。断面形は「U」字状を呈し、底面は平坦である。東側壁面にも弱い焼土化範囲がみられた。規模は、全長60cm、幅48cmである。

遺物は、土師器が2点出土している。いずれも小片のため図示していない。おおむね古墳時代後期の壺の胴部片である。

まとめ

本遺構は、6.0mの竪穴住居跡である。北壁側にカマドが検出された。カマドの焼け方も弱いことから、短期間使用された住居跡の可能性がある。所属時期は、出土遺物が少なく、判断材料が乏しいが、検出面や遺構の重複関係などから古墳時代後期頃と考えられる。

(中野)

46号住居跡 S I 46

遺構(図99、写真60)

本住居跡は、II区とIII区にまたがるO-21グリッドに位置し、標高236.2mのほぼ平坦な場所に立地する。検出面はL IVである。基盤層であるL IVと遺構堆積土がいずれも暗褐色の砂質土で、平面形の確認には時間を要した。重複する遺構はない。

平面形は隅丸方形で、東壁の方向は北から6度東を示す。規模は東西が最大7.4m、南北が最大7.4mである。壁は南東隅付近がもっとも残りが良く20cmである。壁はいずれも70度ほどの急な角度で立ち上がる。床面は中央を除いた部分に貼床が施され、厚さは最大11cmである。中央は掘形底面を床面としている。いずれも平坦で水平である。

堆積土は残りが良くない。 ℓ 1は炭化物粒を微量含む暗褐色砂質土である。 ℓ 2は貼床の構築土

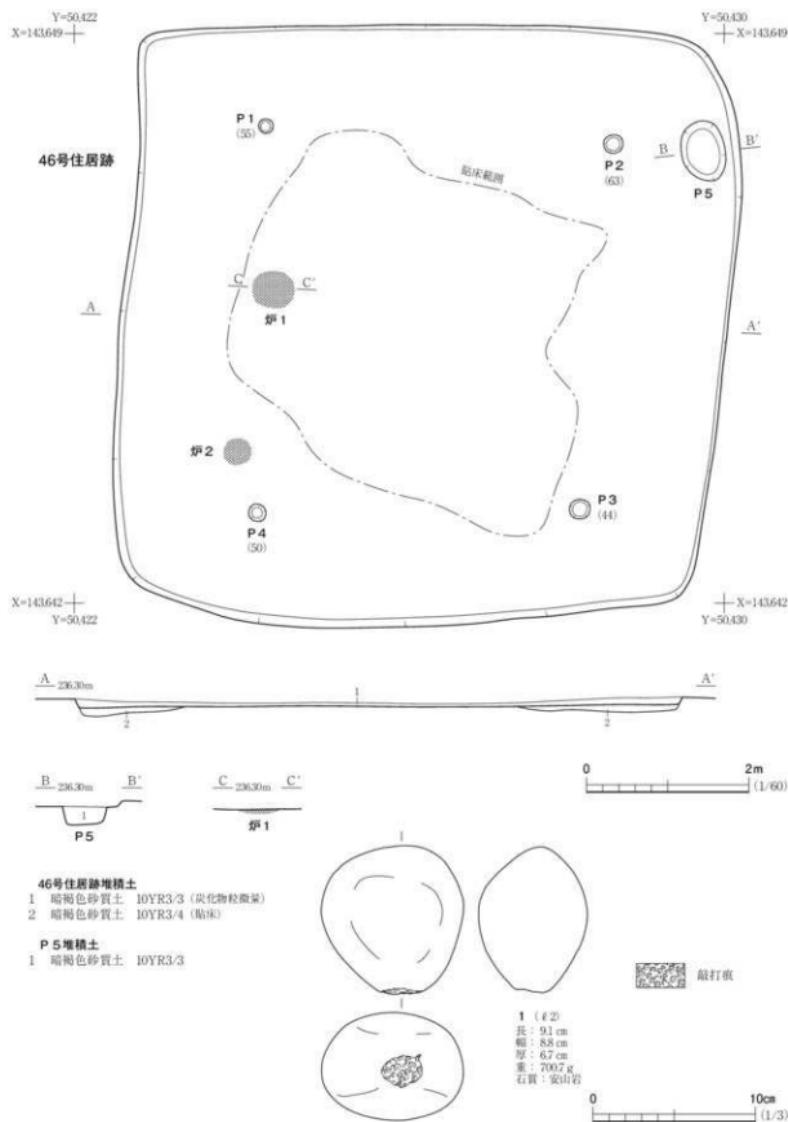


図99 46号住居跡・出土遺物

でLⅣ由來の暗褐色砂質土を用いている。

住居内の施設は、地床炉2箇所、柱穴4基、貯藏穴と考えられるピット1基が検出された。

地床炉は2箇所とも床面西部に位置し、これを炉1・2とした。炉1はP1・2間の中央やや北寄りに、炉2はP4から北西に約50cm離れた位置にある。炉1の平面形は東西にやや長い楕円形で、規模は東西50cm、南北43cm、深さ5cmまで焼土化していた。炉2の平面形はほぼ円形で、直径は32cmである。

柱穴は一間四方で、四隅の対角線上に位置する。これらを北西から時計回りにP1～4とした。柱間の間隔は、東西方向のP1・2間が4.3m、P3・4間が4.0m、南北方向のP1・4間が4.7m、P2・3間が4.5mで、南北方向が東西方向よりいずれもやや長い。いずれも暗褐色の砂質土が堆積し、柱痕跡は確認できなかった。床面からの深さは、P1からP4までそれぞれ55cm、63cm、44cm、50cmである。

貯藏穴と考えられるピットは、北東隅から南に約1mの壁ぎわに位置する。これをP5とした。貼床の上面から掘り込まれ、底面はLⅣに達する。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸75cm、短軸53cm、深さ22cmである。

床面出土の遺物はなく、堆積土、貼床、P5の堆積土に、土器片や礫石器が少量含まれていた。

遺物(図99)

本住居跡からは、堆積土とP5堆積土から土器片が10点、敲石が1点出土した。土器はいずれも古墳時代前期のものであるが、いずれも細片のため図示しなかった。

図99-1はこぶし大の自然礫の一箇所に敲き痕を有する敲石である。

まとめ

平面形が隅丸方形の住居跡で、比較的大型である。一間四方の4本柱で上屋を支える構造で、床面に2箇所の炉と1基の貯藏穴を有し、床面中央部を除き貼床が施される。床面から出土した遺物はないものの、堆積土出土の遺物がいずれも古墳時代前期のものであること、地床炉をもつこと、検出面から、古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

47号住居跡 S I 47

遺構(図100、写真61・268)

本遺構は、IV区南東部のH・I-13・14グリッドに位置する。標高235.6m付近の平坦面に立地し、検出面はLIIa③からLIIb上面である。検出時にLIIa②を主体とする暗褐色土と焼土集積の範囲を確認した。重複関係は、11号溝跡と重複し、本遺構が古い。

堆積土は、4層に区分した。ℓ1が暗褐色の自然堆積土、ℓ2は黒褐色土で焼土や炭化物を多く含む。ℓ3はにぶい黄褐色土である。床面中央から西側にかけて堆積している。おそらく火災住居と考えられるが炭化材や焼土の分布も限定的であることから、住居廃絶後に廃材などを焼却したものと考えている。ℓ4は壁ぎわの崩落土である。

平面形は南北にやや長い長方形である。規模は 4.5×4.0 mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している西壁で26cmである。住居の方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約30度傾く。床面は、L II b ②から③にかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設はカマドとピットである。カマドは東壁中央に構築されている。遺存状態は良く、袖、燃焼部、煙道から構成される。カマドの堆積土は5層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で燃焼部に認められる自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は焼土粒を含む土である。 ℓ 3は煙道に認められた自然堆積土である。 ℓ 4・5は袖および芯材の石を固定するための人が堆積土である。 ℓ 6は煙出しピットに堆積した暗褐色土である。

カマドの規模は、全長210cm、最大幅が156cmである。袖は東壁に直交するように住居内に張

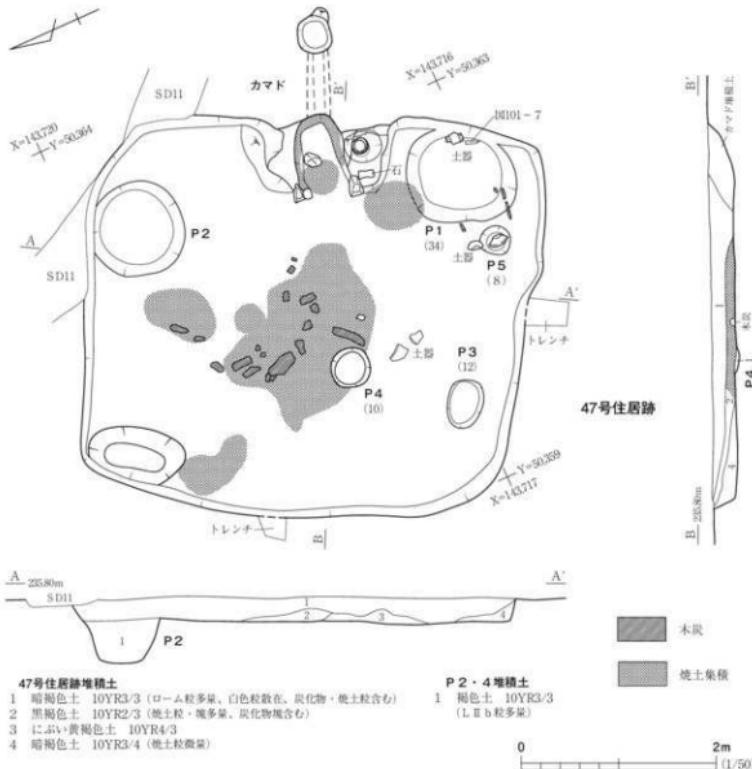


図100 47号住居跡（1）

第3節 住居跡

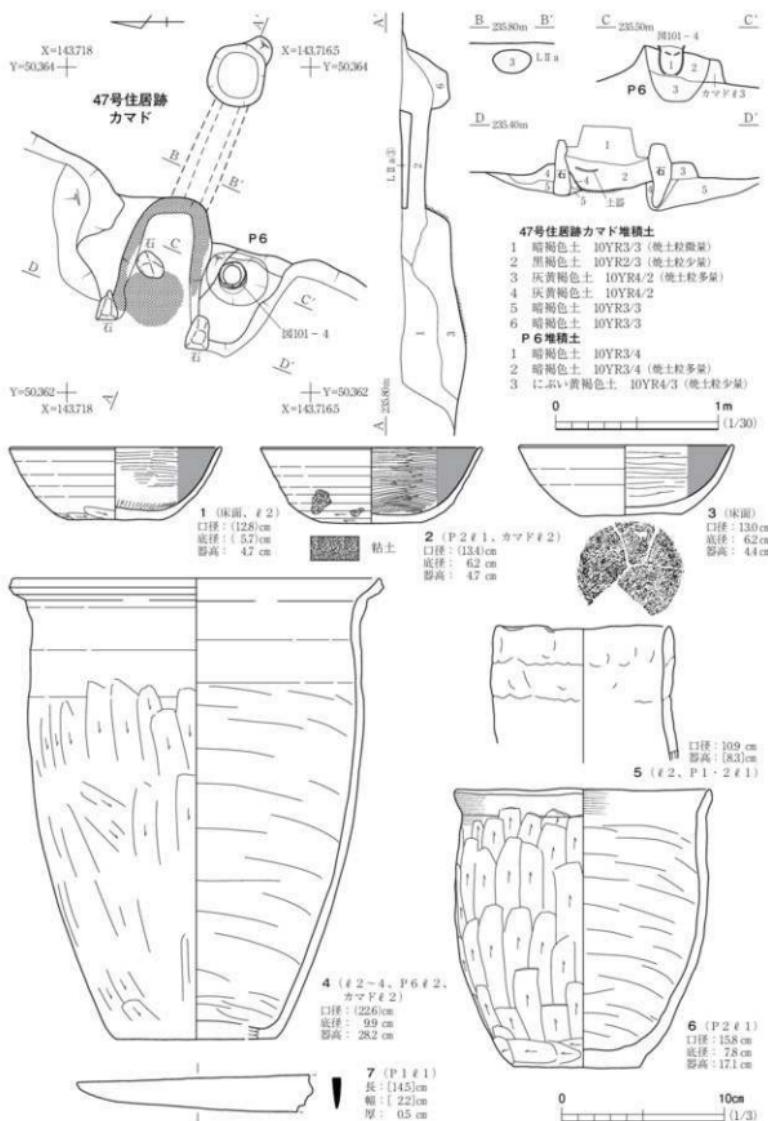


図101 47号住居跡(2)・出土遺物

り出す。規模は、右袖が全長74cm、幅62cm、高さ20cmである。左袖は全長68cm、幅65cm、高さ20cmである。左右の袖には、それぞれ長さ33cm、幅15cmほどの芯材の礫が据えられていた。芯材の石と石の間の幅は46cmである。右袖の奥壁側にはP 6が掘り込まれ甕が据えられていた。

燃焼部は、床面より5cmほど高くなるように作られている。底面は、直径33cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で1cmである。奥壁側の焼土化範囲の厚さは2cmである。煙道は、周壁に直交するように外側へ長く延びており、トンネル状に遺存していた。規模は、全長は120cm、煙道の直径は25cmである。煙道の先端では、煙出しピットを検出した。規模は、長軸40cm、深さ30cmである。

ピットは6基検出した。平面形は円形ないし楕円形である。P 1は南東隅に位置し貯蔵穴と考えられる。直径は110cm、深さ25cmである。堆積土はL II b粒を多く含む褐色土である。P 2~6は、長軸30~100cm、深さが10~40cmである。P 2は貯蔵穴の可能性も考えられるが、P 3~5の機能は特定できなかった。P 6は、右袖上部に掘り込まれており。堆積土には図101-6の土師器の小甕が据え付けられていた。カマドの袖に小甕を埋め込み、甕などを置く台の役割を果たしたものかもしれない。直径40cm、深さ30cmである。

遺物は、カマド堆積土やP 1~6堆積土、床面の南東隅から比較的まとまって出土した。

遺物（図101、写真377）

遺物は土師器174点、須恵器3点、鉄製品1点が出土した。このうち土師器6点と鉄製品1点を図示した。

図101-1~3はロクロ成形の杯である。内面ヘラミガキ調整を施した後に内面黒色処理を施している。2には、外面には焼けた粘土が付着する。3は底部に静止糸切りの痕跡がみられる。4は、ロクロ整形の長胴の甕である。5は、筒形土器である。6は小型の甕で、縱位方向にヘラケズリ調整を施す。

7は、刀子である。茎部を欠損する。

まとめ

本遺構は、4.5mほどの長方形の堅穴住居跡である。東壁中央にカマドをもち、カマド南側に貯蔵穴をもつ。カマドの袖には小型の甕が据え付けられていた。堆積土から床面にかけては、焼土の集積や炭化材が多く出土しており、火災住居と考えている。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

48号住居跡 S I 48

遺構（図102、写真63）

本遺構は、IV区南部のF・G-14・15グリッドに位置している。標高235.6m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b下面である。方形に広がる暗褐色土の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構はない。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は焼土粒や炭化物を少量含む暗褐色土、 ℓ 2はL II b粒を多く含む褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。

平面形はおおむね隅丸方形である。規模は2.6×2.6mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で12cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするならば北を示す。床面は、L II b ①に構築しており、おおむね平坦に作られ、全体的に硬く縮まっている。貼床は確認できなかった。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは東壁中央に構築されている。左右の袖と燃焼

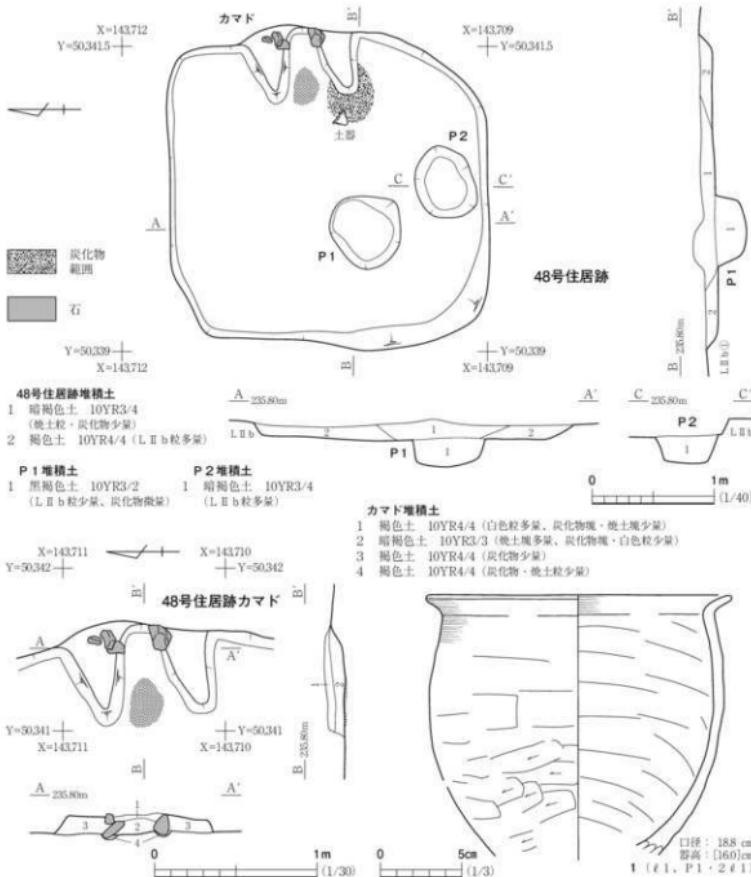


図102 48号住居跡・出土遺物

部から構成される。堆積土は4層に区分した。 ℓ 1・2は褐色・暗褐色で焼土粒を含む土で、自然堆積土と考えられる。 ℓ 3はL II bを主体とした袖の構築土である。 ℓ 4は袖の芯材の石を固定するための人为堆積土である。

カマドの規模は、全長70cm、最大幅が96cmを測る。袖は東壁に直交するように住居内に張り出す。左右の袖内部には芯材となる全長15~20cmほどの角礫が据えられていた。規模は、左袖が全長60cm、幅40cm、高さ11cmである。右袖は全長50cm、幅40cm、高さ10cmである。右袖周辺からは直径40cmほどの炭化物の集積範囲が確認された。燃焼部は直径25cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

ピットは床面中央やや南側で2基確認した。平面形はいずれも梢円形ないし円形である。規模は直径が60~62cm、深さが25~26cmである。機能などは明らかにできなかった。

遺物は、床面の南東隅付近やカマド内堆積土から出土している。

遺物(図102、写真377)

遺物は土師器が26点出土した。このうち土師器1点を図示した。

図102-1は土師器の甕である。外面胴部下半には、横位にヘラケズリを施す。

まとめ

本遺構は、東壁中央にカマドをもつ、2.6mほどの方形の堅穴住居跡である。カマドをもつ堅穴住居跡の中では調査区内でもっとも小型である。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。

(中野)

49号住居跡 S I 49

遺構(図103)

本遺構は、IV区北東部のI-8・9グリッドに位置しており、標高236.4m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b下面である。検出当初は38号住居跡として調査を進めていた。しかし西側および南側に不自然な張り出しを確認した。そこで土層の再確認をしたところ、別遺構が重複していることが明らかになり、南側の部分を49号住居跡として調査を行った。重複する遺構は38・51号住居跡で、38号住居跡より古く、51号住居跡より新しい。

堆積土は黒褐色土の單層で、堆積過程は不明である。

平面形は西壁と南壁の状態からおおむね長方形と推測している。規模は4.9×4.1mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している南壁で38cmである。方位は、残りの良い南壁を基準とするなら北に対して約5度東に傾く。床面はL II bにかけて構築しておりおおむね平坦に作られている。貼床と住居内の施設は確認できなかった。

遺物は主に堆積土から出土している。

遺物(図103、写真377)

遺物は土師器38点、須恵器4点、石製品1点が出土した。このうち須恵器1点と石製品1点を

図示した。

図103-1は、須恵器の壺の胴部片である。外面に平行タタキメを施す。2は大型の礫を使用した砥石である。表面に線状の使用痕が確認できる。

まとめ

本遺構は、 $4.9 \times 4.1\text{ m}$ ほどの長方形の堅穴住居跡である。38号住居跡に大きく壊されており、不明な点が多い。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。
(中野)

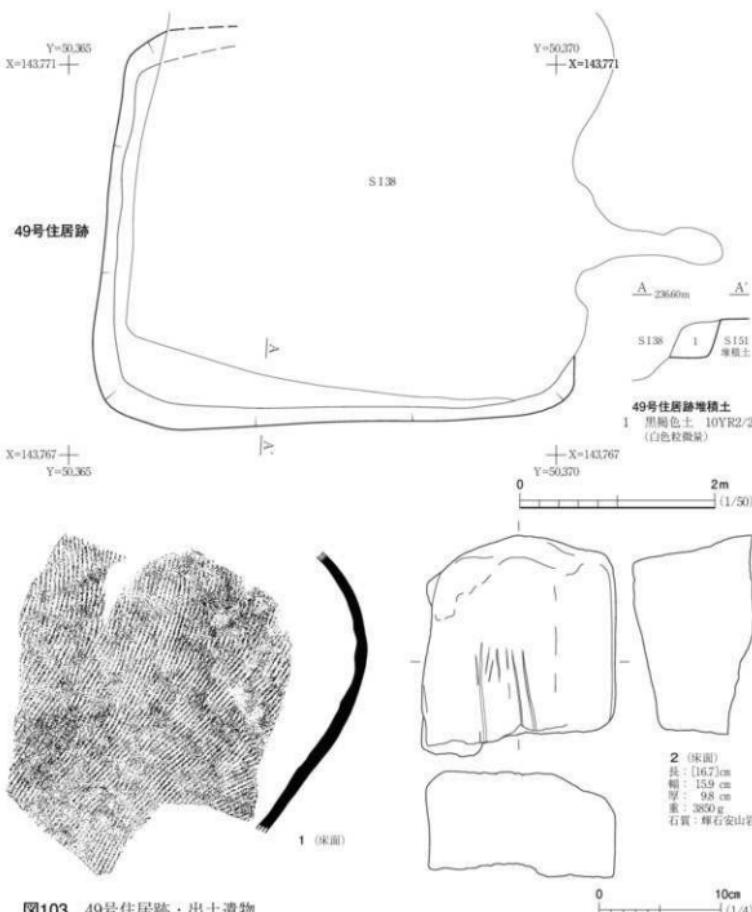


図103 49号住居跡・出土遺物

50号住居跡 S I 50

遺構（図104・105、写真64・65・271）

本遺構は、IV区中央部のH・I-10・11グリッドに位置する。標高235.8m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。検出当初はL II a ③を主体とする6mほどの住居跡として調査を行った。調査が進む中で、周壁側に設定した土層確認トレーナーにおいて土層観察を行ったところ、地山と捉えていた範囲も一部住居跡に含まれることがわかり、さらに外側へ遺構の範囲が広がることが明らかになった。最終的には、全長が9m以上の大型住居であることが明らかになった。重複する遺構は1号柱列跡であり、本遺構のほうが古い。

堆積土は、7層に区分した。 ℓ 1はL II a ③に対応する暗褐色砂質土、 ℓ 2はL II b ①に対応する褐色砂でいずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3は暗褐色粘質土、 ℓ 4はにぶい黄褐色砂で、これらも自然堆積土である。 ℓ 5・6は周壁側に三角状に堆積した自然堆積土である。 ℓ 7は住居の南東付近に偏在して堆積している土である。炭化物を含む黒褐色砂で炭化材が出土する。おそらくは住居廃絶後に火を焚いているものと推測している。

平面形は、おおむね方形である。規模は9.2×9.1mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で42cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して西に5度傾く。床面は、L II b ③からL III b 上面にかけて構築しており、おおむね平坦に作られている。踏み縮まりは弱く、微細な炭化物が散在していた。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは北壁中央に構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。カマドの平面形は、煙道が短く、カマドの袖が細長く住居内に張り出すのが特徴である。

カマドの堆積土は、11層に区分した。 ℓ 1・2は褐色砂質土で燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土である。 ℓ 3・4は焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。天井の石が上から崩落した状態で検出されていることから、住居の廃絶時に上から潰し、その窪みに土師器の壺や杯などを遺棄したものと考えている。 ℓ 5～9は、L II b ②を主体とした袖の構築土である。 ℓ 9からは、図106～15の小型の甌が横倒しの状態で出土した。芯材に用いたといつよりは何らかの祭祀行為のため埋められた可能性がある。 ℓ 11は床面より15cm掘り窪めた後に再び埋め戻した土層である。L II b ③を主体とする粘質の強いにぶい黄褐色土層で、カマドの底面を構築している。おそらく底面が砂質土のため補強しているものと考えられる。また、 ℓ 11を埋める際に袖芯材の石も設置している。

カマドの規模は、全長300cm、最大幅が180cmである。袖は、奥壁側でL II b ②を掘り残して基部を作っている。燃焼部側の袖は燃焼部の底面を掘り込み、燃焼部の底面を作つてから、袖の芯材の石を据えている。焚口を定めてからL II b 粒を主体とした堆積土を貼りつけて袖を作り出していると考えている。左右の袖内部にはそれぞれに芯材となる38×7cmほどの平たい礫が据えら

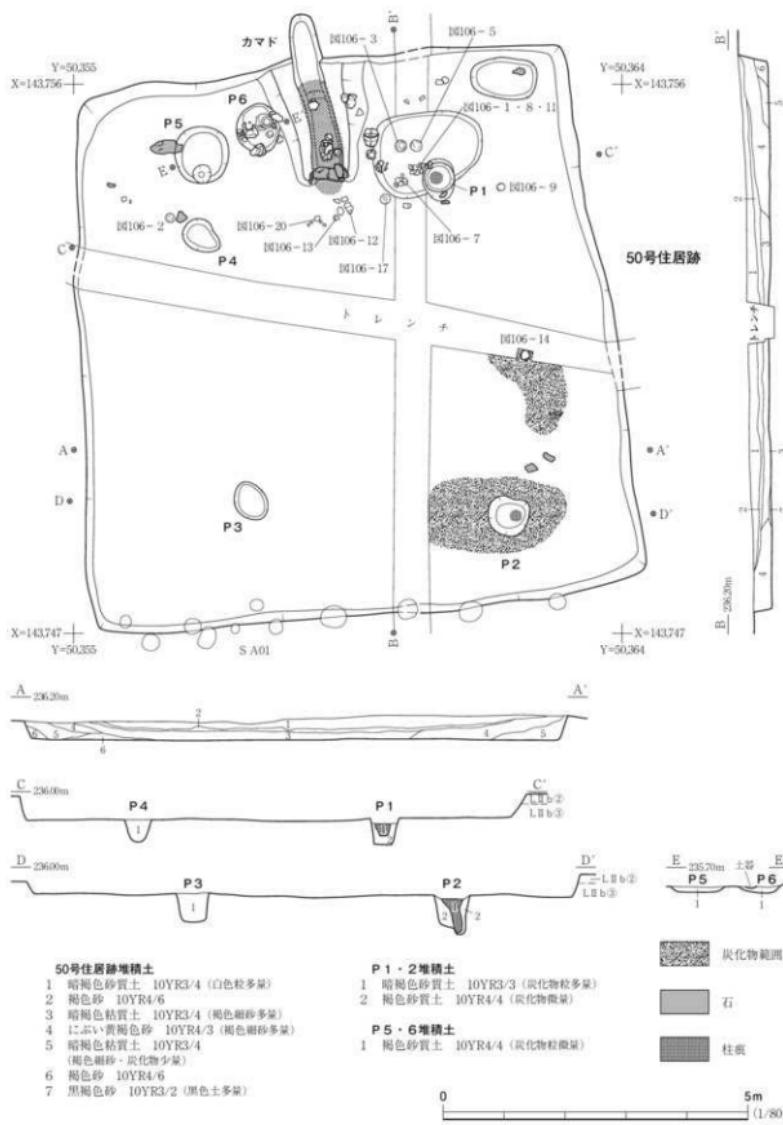


図104 50号住居跡 (1)

れていた。芯材の石と石の間の幅は54cmである。袖の規模は、左袖が全長200cm、幅68cm、高さ40cmである。右袖は全長192cm、幅77cm、高さ30cmである。燃焼部は床面と同じ高さに作られている。底面は、全長 190×54 cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で5cmである。煙道は、北壁に直交するように住居外に短く延びる。燃焼部より20cmほど高く掘り込まれており、底面は煙出しが高くなるように緩く傾斜する。断面形は「U」字状を呈する。規模は、全長80cm、幅50cm、深さは12cmである。

ピットは6基検出した。平面形はいずれも梢円形ないし円形である。P 1～4は、方形に位置し主柱穴と考えられる。P 1はカマドの東側に位置する。直径は65cm、深さ47cmである。P 2は床面南東部に位置する。直径は60cm、深さ62cmである。P 3は床面南西部に位置する。直径が50cm、深さ50cmである。P 4はカマドの南西部床面に位置する。直径は60cm、深さは40cmである。P 1・2からは柱痕跡を確認した。柱穴の堆積土は2層に区分した。ℓ 1は暗褐色砂質土で炭化物を含む。ℓ 2は埋土で褐色砂質土である。P 5はカマドの西側に位置し、直径90cm、深さ

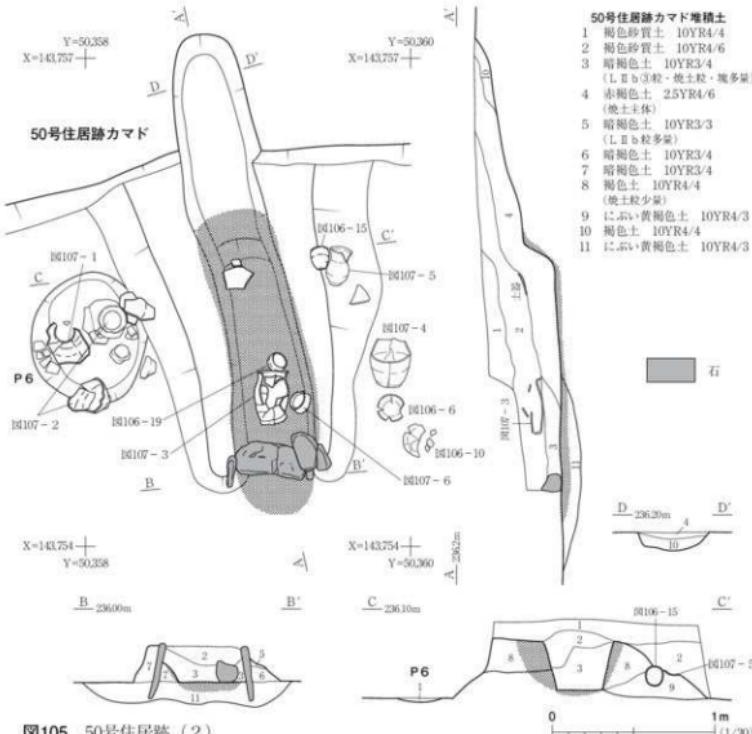


図105 50号住居跡 (2)

10cmである。P 6はカマドの西側に位置する。規模は直径80cm、深さ10cmである。P 5・6の堆積土は、炭化物粒を含む褐色砂質土の堆積土である。これらのピットの機能は不明である。この他にもP 1北側と住居の北東隅においても、窪みを検出しているが、深さが5cm未満であることからピットとしては扱わなかった。

遺物は、カマドを中心にして床面の西側やP 6の堆積土から多くの遺物が出土している。特にカマド燃焼部を潰した窪みや袖上部、カマドの前面の床面からは、土師器の壺や杯、高杯、壺などが出土した。またこれらの遺物とともに獸骨片も出土している。遺物は、おそらく住居廃絶時にまとめて遺棄したものと考えられる。床面中央東側では、図106-14の杯が逆位で出土した。周辺は炭化材や焼土粒などがみられることから、火を焚いて何らかの祭祀を行っている可能性も考えられる。

遺物(図106-107、写真377-380)

遺物は土師器491点、いわゆる福物石15点、骨片が出土した。このうち土師器26点を図示した。

図106-1~14は杯である。口縁部が外反し胴部に稜をもち底部は丸底である。胴部の稜は4・5以外はやや丸みを帯びている。いずれも内面にはヘラミガキの後、黒色処理を施す。12は口縁部が直立し、底部が突出し平底のものである。内面をヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。13は稜をもたず口縁部がやや内湾するものである。14は須恵器を模倣した杯である。内面はヘラミガキ、外面は口縁部をミガキ調整、胴部はケズリを施す。内面と外面の口縁部に黒色処理を施す。

15は壺である。16・17は、高杯である。17は、杯部の口縁部が外傾し、胴部中段に段をもつ。杯部と脚部の接合面は短く、脚部は「ハ」字状に開き中空になる。18~20は鉢である。18・19は底部が張り出し、胴部が丸みを帯びて膨らむ。18は頸部がやくびれ、19は内湾ぎみに立ち上がる。20は、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が丸みを帯びて膨らむ。底部は丸底状になる。内面にはヘラミガキ後に黒色処理を施す。

図107-1~3は丸みを帯びた長胴の壺である。2・3は底部がやや張り出す。外面にはヘラナデを施す。内面には、部分的に輪積み痕もみられる。4は壺形の壺である。内面には縱位方向に入念なミガキ調整を施す。5は長頸の壺である。口縁部が外反し口端部はやや外に張り出す。頸部は長く、器形の1/2ほどを占め、緩いカーブを描きながら開く。底部は平底を呈する。内外面ともにハケメ調整を施し、その後、ヘラミガキを加えている。

6は、小型の壺である。底面には、ヘラによる「十」字状の線刻がなされている。

まとめ

本遺構は、9.2mの方形の堅穴住居跡である。調査区内でも最大規模を持つ堅穴住居跡の一つである。北壁中央にカマドをもち、4本の主柱穴を確認した。床面中央部東側や南東側付近では、逆位に置かれた杯や焼土粒を含む炭化物の集積を確認しており、廃絶時に部分的に火を焚いているものと考えている。また、カマド周辺や床面北側からは多くの遺物が出土しており、該期の良好な一括資料である。所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

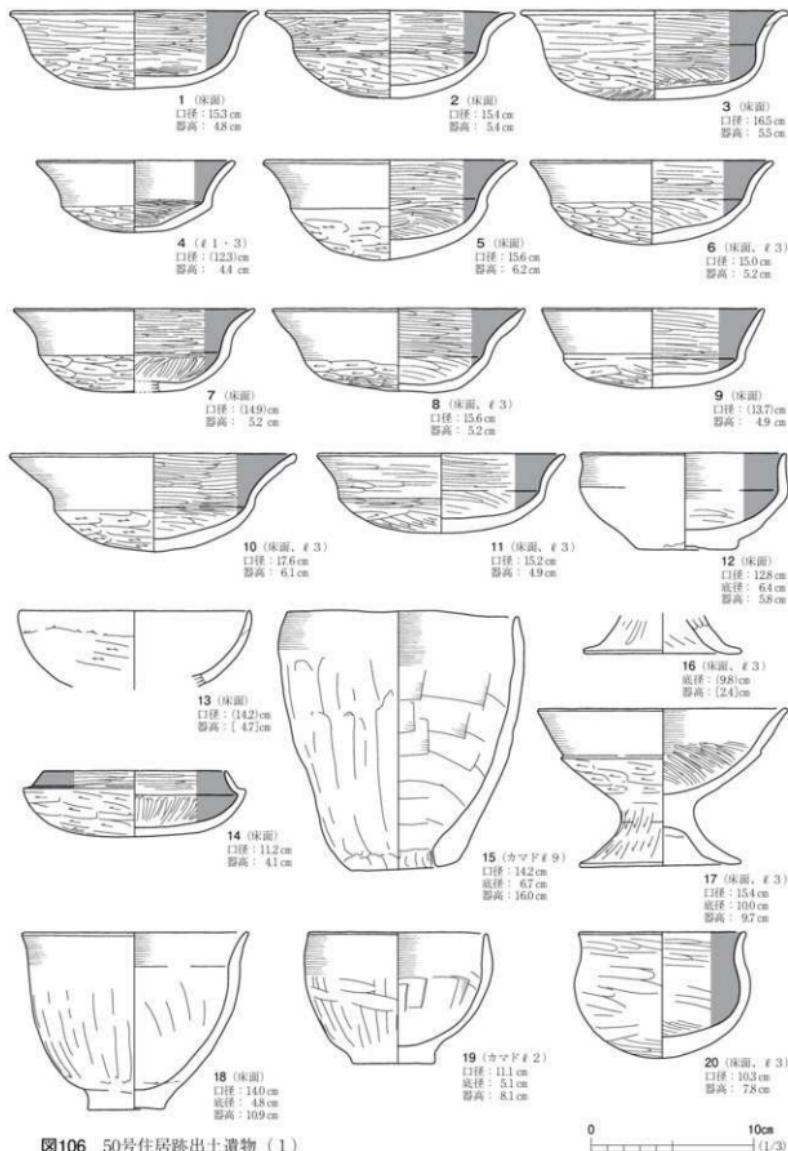


図106 50号住居跡出土遺物（1）

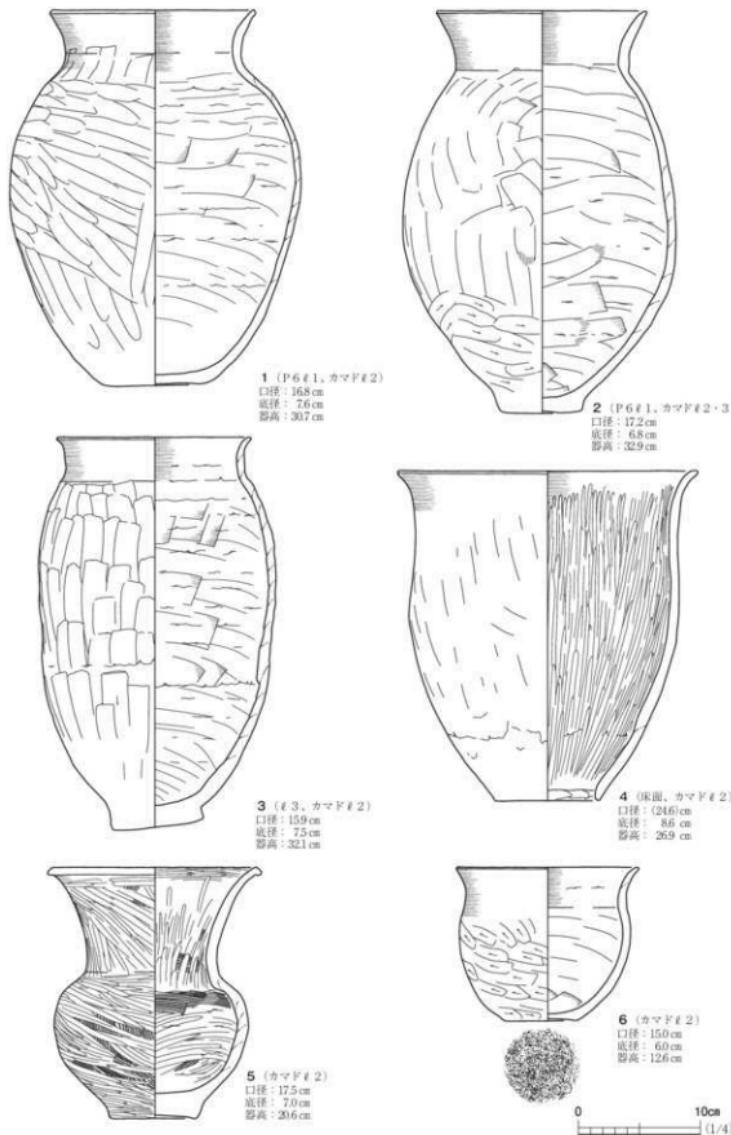


図107 50号住居跡出土遺物 (2)

51号住居跡 S I 51

遺構（図108・109、写真66・67）

本遺構は、IV区中央部のI・J-8・9グリッドに位置している。標高236.4m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b②である。38号住居跡の調査中に壁ぎわにおいて炭化物の集積を確認した。そのため、周辺の精査と土層観察用のトレンチにおいて土層観察を行ったところ、東側にカマドをもつ大型の住居跡であることが明らかになった。重複する遺構は38・49号住居跡、3号溝跡でありいずれの遺構よりも本遺構のほうが古い。

堆積土は、6層に区分した。 ℓ 1はL II a③に対応する暗褐色土、 ℓ 2・3はL II b①に対応する暗褐色から褐色でいずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3は褐色土、 ℓ 4は暗褐色土で、これらも自然堆積土である。 ℓ 4・5は周壁側に三角状に堆積した自然堆積土である。 ℓ 6は住居の床面東側やカマド北側に偏在して堆積している土層である。炭化物を含む暗褐色土で炭化材も多くはないが出土する。おそらくは住居廃絶後に部分的に火を焚いているものと推測している。

平面形は、東西に長い長方形である。規模は10.0×8.4mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で45cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して西に約20度傾く。床面は、掘形底面であるL IIIからL IV上面に構築しており、おおむね平坦に作られている。踏み締まりは弱く、微細な炭化物が散在していた。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは東壁中央に構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は9層に区分した。 ℓ 1は褐色土である。 ℓ 2暗褐色土で、燃焼部に堆積する天井崩落土と考えられ、天井に使われていた石が落ち込んだ状態で検出されていることから、住居廃絶時に潰しているものと考えられる。 ℓ 3・4は焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。 ℓ 5は焼土粒を多く含む煙道の堆積土である。 ℓ 6は暗褐色土で、 ℓ 7～9はL II b②を主体とした袖の構築土である。カマドの規模は、全長281cm、最大幅150cmである。袖は細長く住居内に張り出す形態である。袖は奥壁側はL II b②を掘り残して基部を作っている。

燃焼部側の袖は、芯材の石を据えて焚口を定めてからL II b粒を主体とした堆積土を貼りつけて袖を作り出している。焚口の部分には、25×6cmほどの芯材の石を2個設置し、その上に63×22×9cmの横石を置いていた。芯材の石と石の間の幅は48cmである。袖の規模は、左袖が全長150cm、幅80cm、高さ20cm、右袖は全長130cm、幅48cm、高さ20cmである。燃焼部は細長い長方形を呈し、底面は床面と同じ高さに作られている。底面はよく焼けており160×54cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で5cmである。燃焼部には土製支脚が据えられていた。

煙道は、北壁に直交するように住居外に短く延びる。底面は煙出しが高くなるように緩く傾斜

し、断面形は「U」字状を呈する。煙道は全長120cm、幅45cm、深さは20cmである。煙道先端は煙出しピットとなっている。規模は、直径70cm、深さ21cmである。

ピットは3基検出した。床面を20cmほど下げて柱穴の検出を試みたが、柱穴は確認できなかつた。ピットの平面形はいずれも楕円形ないし円形である。P 1・2は、カマドの南側に位置し、貯蔵穴と考えている。P 1の直径は165cm、深さ24cmである。P 2はP 1のすぐ南側に位置する。直径は110cm、深さ12cmである。P 2底面からは、4点の甕が横倒して潰れた状態で出土した。P 3は床面北東側に位置する。直径が40cm、深さ32cmである。ピットの堆積土は、いずれも褐色

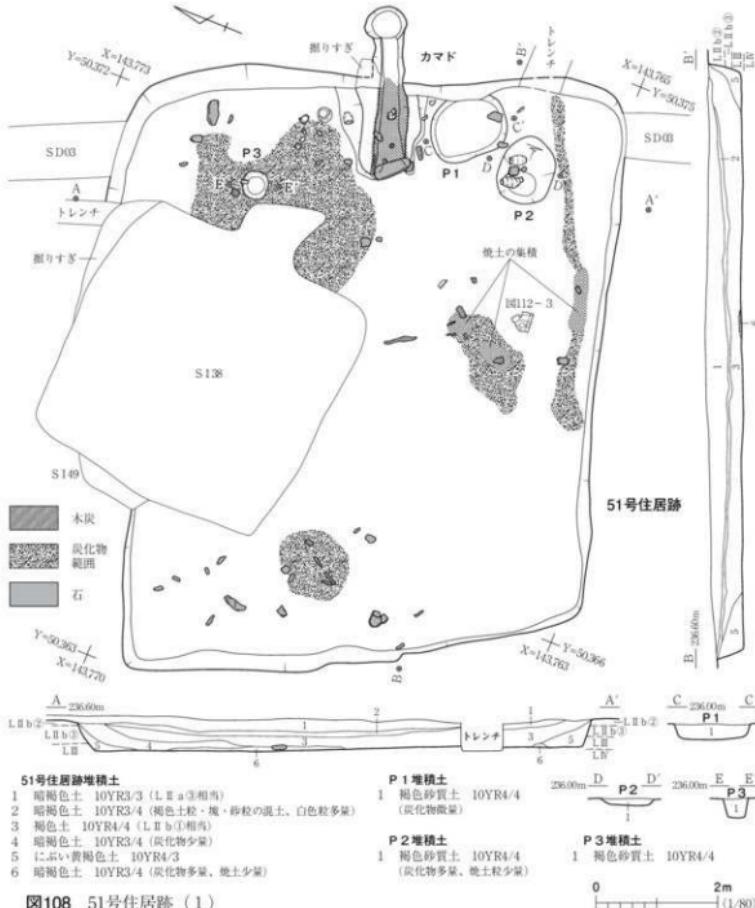


図108 51号住居跡（1）

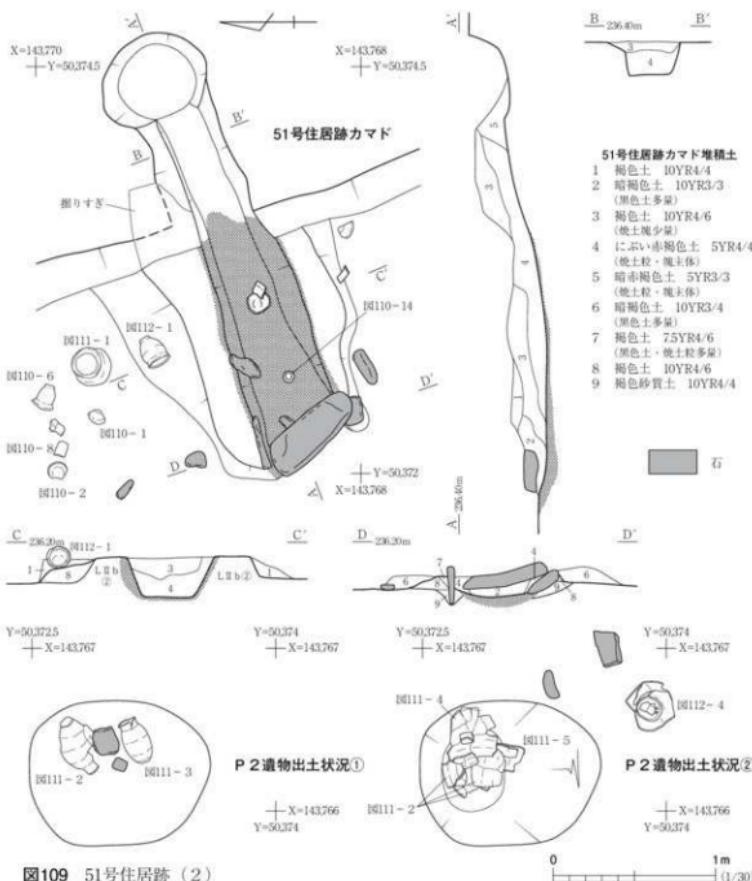


図109 51号住居跡（2）

砂質土で人為的に埋めた堆積土と考えている。

遺物は、カマド北側の床面やP 2 底面から多くの遺物が出土している。これらの遺物はおそらく、住居廃絶時にまとめて遺棄したものと考えられる。

遺物 (図110～112、写真380～382)

遺物は土師器607点、土製品2点、石製品3点、いわゆる編物石とされる礫を含む自然礫41点が出土した。このうち土師器14点、土製品2点、石製品3点を図示した。

図110-1～3は丸底の杯である。1・2は、口縁部が外反し、外面に稜を有する。3は、口縁部が外傾する。

第3節 住居跡

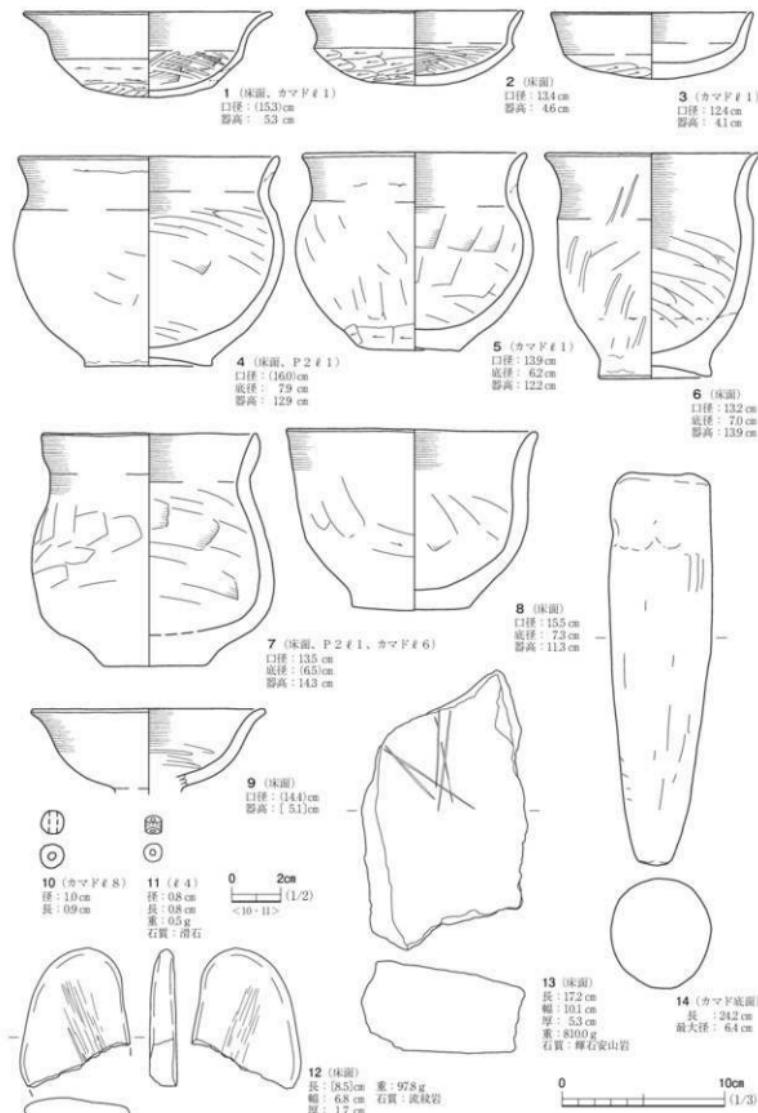


図110 51号住居跡出土遺物（1）

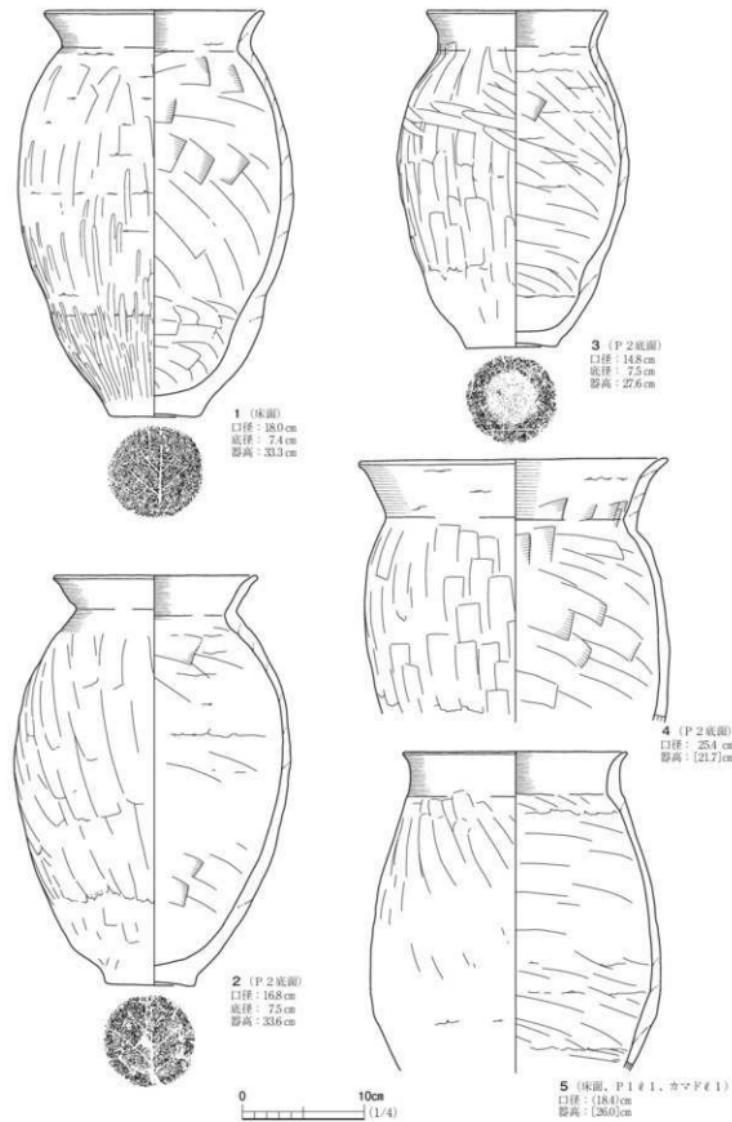


図111 51号住居跡出土遺物（2）

4～8は鉢である。9は高杯の杯部の破片である。10は土製の丸玉、11は滑石製の白玉である。12・13は砥石である。線状の使用痕がみられる。14は土製支脚である。断面が円形で、上部は平坦に作られ、先端部が細くなっている。カマドの燃焼面において突き刺さった状態で出土した。

図111-1～5は、長胴形の甕である。1は、カマドの北側で正位に直立した状態で出土している。1～3は、平底で、木葉痕が確認できる。外面は縦位方向にヘラナデを施し、1は胴部下半から底部にかけてヘラミガキ、3は胴部上半に横位にナデで再調整を施す。

図112-1・2は、やや小ぶりな甕である。外面にはヘラナデを施す。1は底部に横位方向にヘラミガキを加えている。3は甕形の甕である。

4は胴部がやや丸みを帯びて膨らむ球胴甕である。外面には胴部上半にはヘラミガキを加え、胴部下半にはヘラケズリが施される。

まとめ

本遺構は、10.0×8.2mの長方形の堅穴住居跡である。50号住居跡と同様に調査区内で最大規模

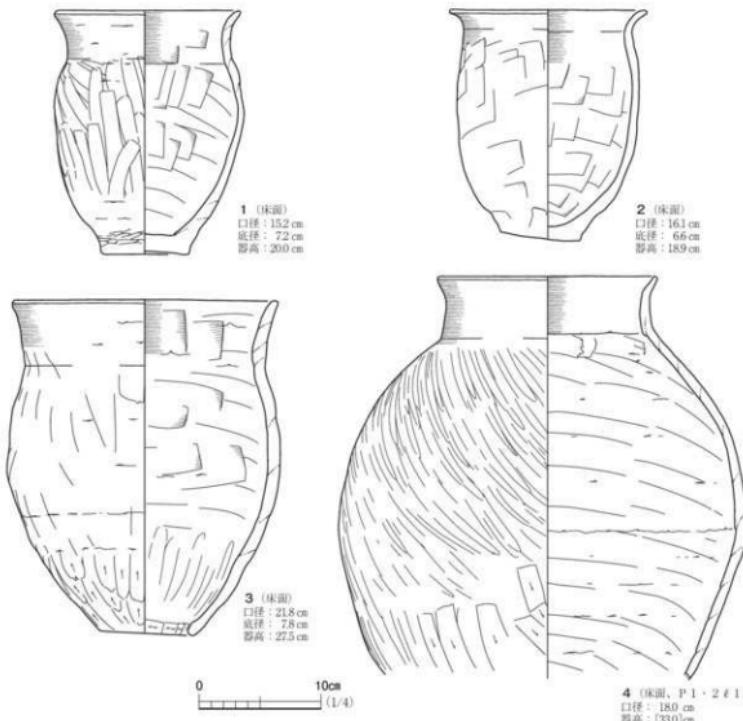


図112 51号住居跡出土遺物（3）

の堅穴住居跡である。東壁中央にカマドをもち、周辺から比較的まとまった遺物が出土している。
所属時期は出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

52号住居跡 S I 52

遺構(図113・114、写真68・69)

本遺構は、Ⅲ区西部のB・C-21グリッドに位置する。検出面はL II b上面である。標高235.6m付近に立地する。南東側に53号住居跡が、南側に54号住居跡が隣接している。

平面形は長方形で、規模は4.1×3.1mである。方位は西壁で北から40度西を示す。壁の遺存高は残りの良い部分が38cmほどで、床面より垂直に立ち上がる。床面はわずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。貼床が施されているが、部分的にL II bをそのまま床面としている部分もある。カマド前面には踏み締まりと思われる硬化面が形成されていた。

住居内堆積土は9層に分層した。ℓ 1～3は堅穴の大半を覆っている。堆積状態や、L II由來の小土塊が混入していることから、自然堆積土と考えられる。ℓ 4は炭化材層、ℓ 5は炭化材と焼土を含む層である。ℓ 6はカマドからの流入土で、これにも炭と焼土が含まれる。しかし厳密にはカマドからの流入土と、住居全体に堆積している炭・焼土の区別は難しい状況である。ℓ 7はℓ 5・6の下に薄く堆積し、床面を覆っている。堆積状態は、壁ぎわの三角堆積を示しており、自然堆積と思われる。ℓ 8・9はカマド袖である。ℓ 10は貼床の構築土で住居中央に認められ、上面は踏み締まりによって硬化している。ℓ 11は壁ぎわの浅い掘り込みが連続する掘形部分に認められた。

住居内の施設は、カマド1基とピットが2基確認された。カマドは南東壁中央に位置する。袖と燃焼部・煙道を確認した。焚口から煙道先端までの全長は210cm、幅は90cmほどである。右袖は黒褐色系の土で構築され、先端には袖石が置かれている。左袖は壊されており先端の袖石だけが残されていた。なお袖石は上半が折られている。また、燃焼部の中央にも石が立てられており、これは支脚として使用された石と考えられる。燃焼部・袖の内側・先端の袖石・支脚は被熱により赤変していた。

煙道は地山であるL II bをトンネル状に掘り込んでつくられている。先端部はピット状になり立ち上がりは直線的である。煙道は被熱によって赤黒く変色していた。煙道底面は、燃焼部から丸く立ち上がり、先端に向かって一定の傾斜で高くなり先端部分で平坦になる。先端部には偏平な礫が入っていた。

カマド内堆積土は16層に分層した。ℓ 1～3は住居内堆積土に対応する土である。ℓ 4～12は袖や燃焼部および煙道天井の構築土に由来する土である。このうちℓ 6は住居内のカマド流入土とほぼ同じ土である。ℓ 12は壊されていた左袖の遺存土であると考えられる。ℓ 13は煙道堆積土であり、先端の煙出しからの流入土である。ℓ 14は燃焼部中央に堆積し、縮まりがあることから支脚を固定する土と考えられる。ℓ 15・16は右袖の構築土で、粘質の土を積んで構築されている。

ℓ 4～12と土質が共通する。

P 1は住居西壁際に位置している。一辺25cmほどの隅丸方形である。底面は壁側から住居の中央に向かって傾いている。堆積土は1層で、焼土などを含む自然堆積土である。機能は特定し得ないが、堆積状況から住居廃絶時には開口していたと思われる。

P 2は南西隅に位置し、住居壁に沿って平面L字状に掘り込まれている。カマド脇という位置関係から貯蔵穴と思われる。底面は丸みをもち、立ち上がりは緩やかである。床面より最大13cmほどの浅い掘り込みであるが、底面および堆積土中からは、押しつぶされたような状態で土器が出土している。

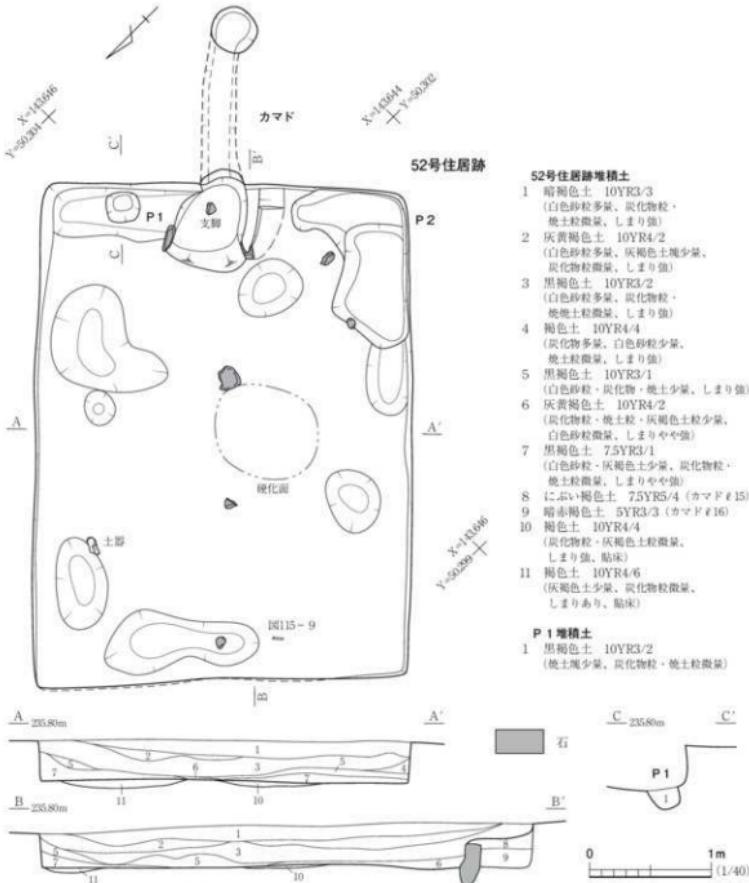


図113 52号住居跡（1）

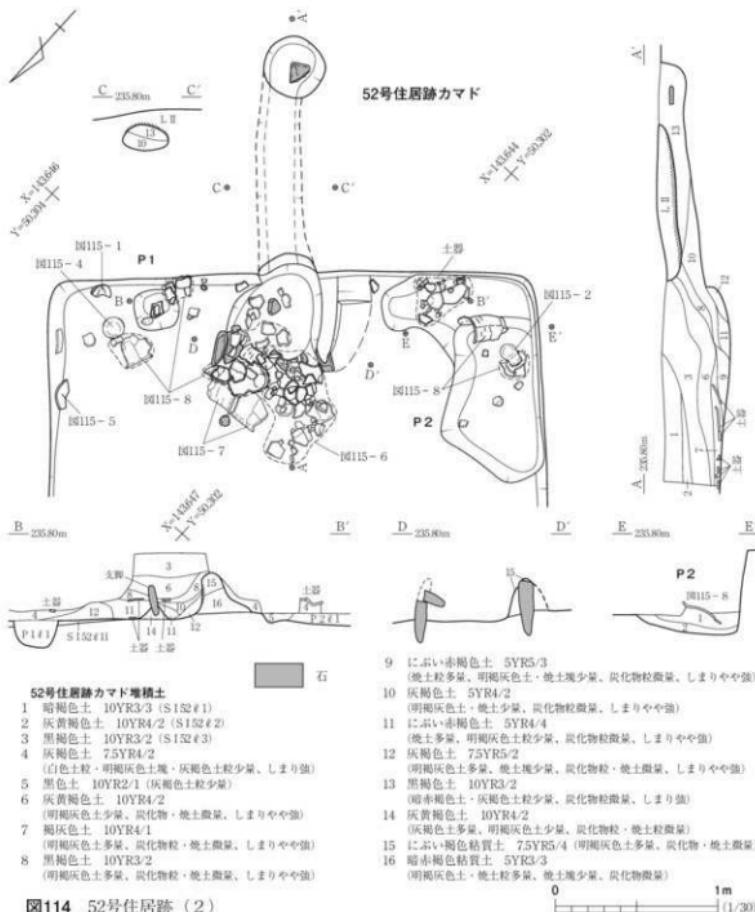


図114 52号住居跡（2）

遺物はカマド周辺よりまとまって出土した、多くは完形もしくは、その場でつぶれたような状態で出土している。壺ぎわの杯は、住居内に落ち込むような状態で出土しており、竪穴上端部に置かれていたものが、埋没過程において竪穴内に流入したものと思われる。東壁付近では須恵器片が壁に張り付いた状態で出土している。これらの遺物は住居廃絶時に遺棄されたものと思われる。

遺物 (図115、写真383)

本遺構からは、土師器224点、須恵器1点、鉄製品1点が出土している。このうち、土師器7点、須恵器1点、鉄製品1点を図示した。

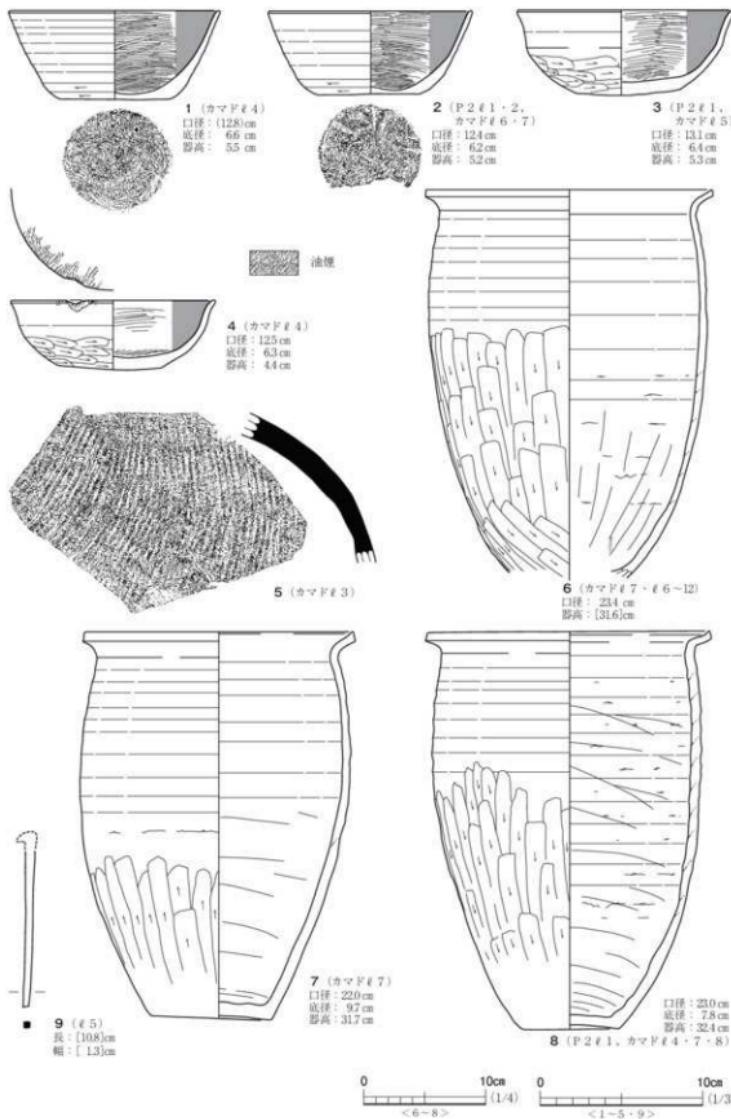


図115 52号住居跡出土遺物

図115-1~4はロクロ成形の土師器杯である。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。1・2の器形は底部から外傾しながら立ち上がる。切り離しは回転糸切りで、回転ヘラケズリによる再調整が施される。3・4は底部から内溝ぎみに立ち上がり、口縁部は外反しながら立ち上がる。体部には棱を有する。体部下半~底部にかけては手持ちヘラケズリが施される。4は口縁部が欠けた部分周辺にタール状の付着物が認められる。

5は須恵器甕の肩部の破片である。外面はタタキメが施される。

6~8は土師器の長胴甕である。外面の調整は、体部上半がロクロナデ、下半は縱方向のヘラケズリである。6・7の外面にはススが付着し、また6と8の外面には種子圧痕が認められた。

9は釘とみられる鉄製品である。

まとめ

本遺構は $4.1 \times 3.1\text{m}$ の、長方形の堅穴住居跡である。南東壁中央にカマドがつくられ、右脇には貯蔵穴が備わる。カマド周辺からは完形、または押しつぶされたような状態でまとまって土器が出土しており、住居廃絶時に遺棄していったものと思われる。出土遺物から平安時代、9世紀に機能したと思われる。

(谷中・神林)

53号住居跡 S I 53

遺構(図116・117、写真70)

本住居跡はⅢ区西部、C-21・22グリッドに位置する。検出面はL II b上面である。標高235.7m付近の平坦地に立地する。本遺構の北西に52号住居跡が、西に54号住居跡が隣接する。

平面形は方形で、規模は $3.6 \times 3.7\text{m}$ である。南東壁のカマドを主軸とした場合の方位は北から約20度西を示す。壁の高さはもともと残りの良い部分が40cmほどで、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。なお南東隅と南西隅の一部は調査時に掘り過ぎてしまっている。床面は貼床が施され、ほぼ平坦となっている。

住居内堆積土は9層に分層した。大きくは暗褐色土と、L II b由来の灰黄褐色または褐灰色の土に分けられる。 ℓ 1は暗褐色土であり、L II b由来の黄褐色土塊が含まれることや、多くの土師器小片が出土しており人為堆積土と考えられる。 ℓ 2~7はレンズ状堆積および壁ぎわの三角堆積を示しており、出土遺物もほとんど認められないことから、周辺からの流入土および壁などの崩落土と考えられる。 ℓ 8・9は水平に堆積し、硬くしまることから貼床と判断した。旧カマド(後述のカマド2)の燃焼部が存在したと考えられる南東隅では、 ℓ 8層中に焼土粒や粘土塊が多く認められたことから、カマドを壊した際の土が混ぜ込まれた可能性が考えられる。

住居内の施設は新旧のカマドが2基、貼床下からピットが3基確認された。新カマドをカマド1、旧カマドをカマド2とした。

カマド1は住居南東壁中央に位置し、燃焼部と煙道を確認した。焚口から煙道先端までの全長は約230cm、両袖を含めた幅は94cmである。袖は褐色土で構築されている。先端の内側には河原石

が立てられている。燃焼部は基盤砂質土を底面としている。袖内側・河原石・底面に赤変は認められなかった。煙道はL II bをトンネル状に掘り込んで造られている。住居壁からの長さ160cm、幅60cmの規模である。底面は比較的平坦で、煙出しがピット状になっているが、煙道と深さは変わらない。

カマド内堆積土は11層に分層した。 ℓ 1～3は住居内堆積土と共通する。 ℓ 4は袖構築土と共通し、多くの焼土塊が含まれることから天井崩落土と考えられる。

カマド2は東隅に位置する。煙道のみ検出した。壁からの長さ100cm、幅25cmで、基盤層であ

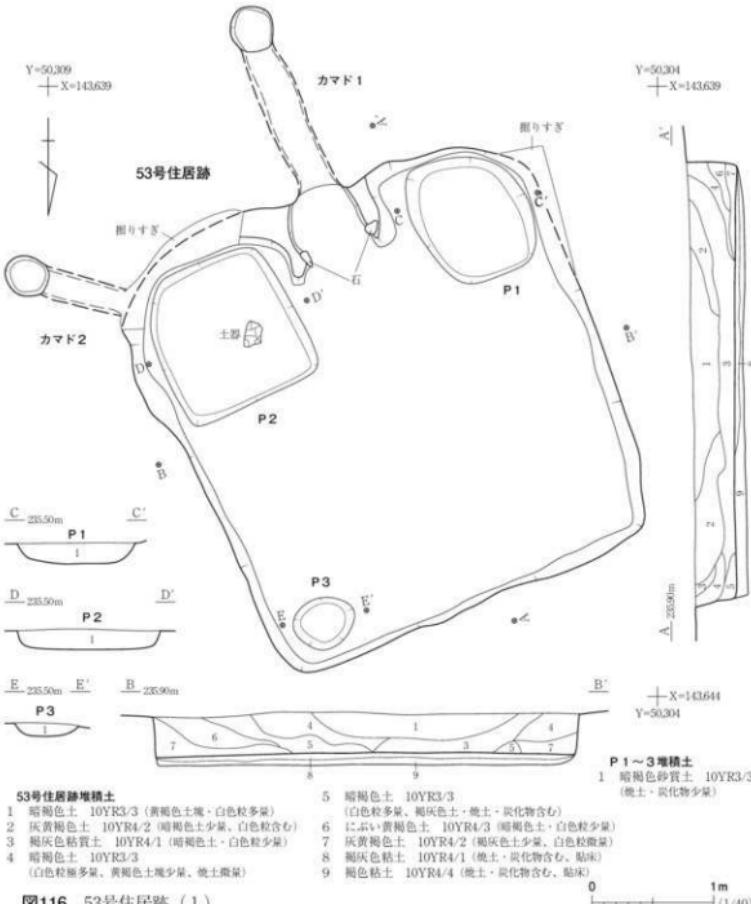


図116 53号住居跡（1）

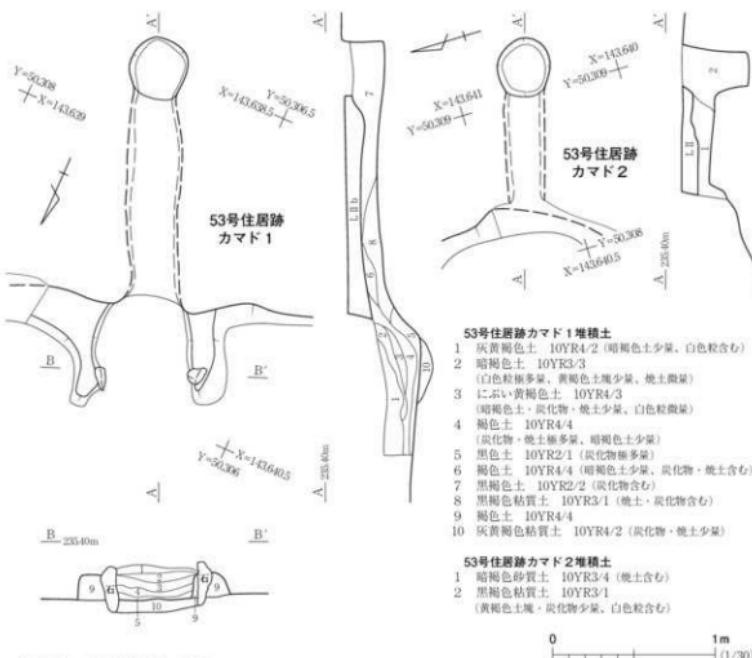


図117 53号住居跡（2）

るL II bをトンネル状に掘り込んで造られている。底面は先端に向かってわずかに下がり、先端部はピット状に深く掘り込まれている。堆積土は2層で、いずれも炭や焼土が混じる。

貼床下から検出されたP 1～3は住居の北東隅・南東隅・南西隅にそれぞれ位置する。貼床であるℓ 8を除去した段階で検出した。いずれも深さ20cm程度の浅い土坑で、ℓ 9を掘り込んでいる。堆積土は単層で、暗褐色の砂質で柔らかい土で埋められている。

遺物は、土師器202点、須恵器1点が出土した。内面黒色処理を施したロクロ土師器の杯の破片が含まれる。なお出土した土器の一部が、隣接する54号住居跡出土土器と接合している。

まとめ

小型の住居跡で、東隅から南東壁中央にカマドを作り替えている。住居に伴う遺物はほとんど認められなかった。しかしℓ 1より多量の土師器小片が出土し、隣接する54号住居跡の堆積土から出土した土器と接合した。おそらく53・54号住居跡の埋没後の窪地は、ほぼ同時期に捨て場として利用されたと考えられる。以上のことから本住居は54号住居跡と同時期に機能していたと考えられ、時期は平安時代を想定している。

（神林）

54号住居跡 S I 54

遺構 (図118・119、写真71)

本遺構は、Ⅲ区西部B・C-21グリッドに位置する。標高235.8mの平坦面に立地する。検出面はL II bで、重複する遺構はない。52号住居跡を検出している際に、南側のL II b上面においてL II aを主体とする4×3mほどの長方形の遺構範囲を確認し住居跡として調査を行った。

堆積土は7層に区分した。 ℓ 1は暗褐色砂質土、 ℓ 2はにぶい黄褐色土、 ℓ 3は暗褐色土、 ℓ 4はにぶい黄褐色土である。いずれの土層も水平に堆積しており、人為堆積土と考えている。また、 ℓ 4から床面にかけては、焼土粒の集積が5箇所確認できた。住居跡を埋める前に部分的に火を焚いたと考えられる。 ℓ 5～7はL II b粒を主体とする貼床土である。貼床の厚さは最大24cmである。

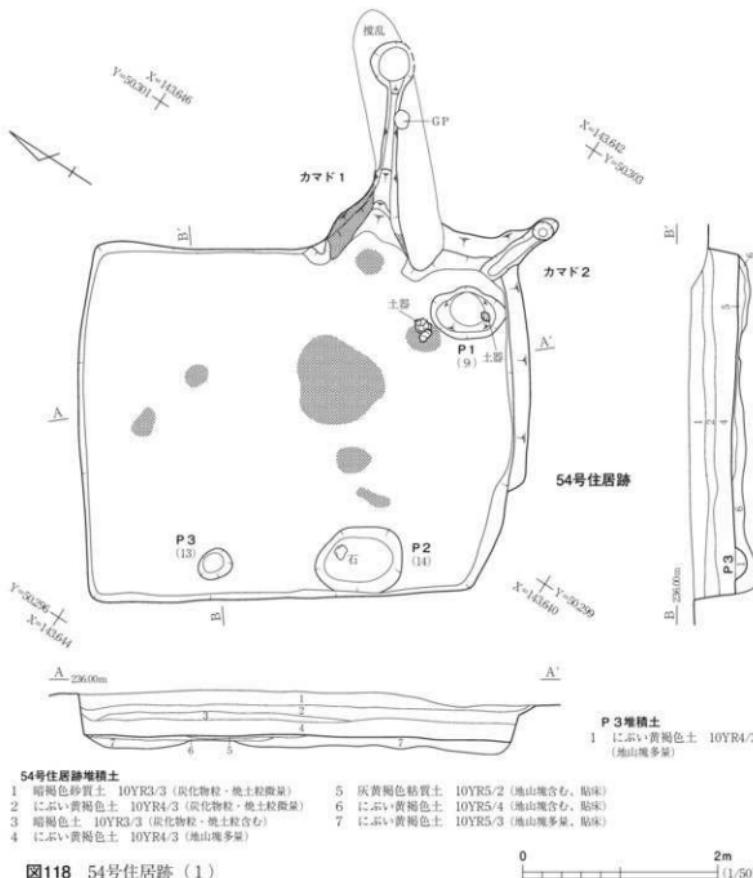
平面形は長方形である。規模は4.4×3.6mである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で80度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している西壁で45cmである。方位は残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約45度傾く。床面は、貼床をL II b②から③にかけて作られており、おおむね平坦に作られている。表面には微細な炭化物や焼土粒が散在し、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、北東壁側と東隅に2基確認された。おそらく東隅に最初に作られ、北東壁側に作り替えられている。ここでは、北東壁側をカマド1、東隅に位置するものをカマド2とした。

カマド1は遺存状態はあまり良くなく、左右の袖の一部と燃焼部、煙道から構成される。カマドは燃焼部を床面と同じ高さに掘り込み、底面を構築してから袖を作っているものと考えられる。袖は、部分的にしか残っていないが、L II bを掘り残して袖の基部を作り出していた。堆積土は、7層に区分した。 ℓ 1～3はにぶい黄褐色土の燃焼部に堆積する自然堆積土である。 ℓ 4・5は煙出しピットに堆積する土層である。 ℓ 6は焼土粒を主体とする壁面の崩落土である。 ℓ 7はにぶい黄褐色土で、天井崩落土である。カマド1の規模は、全長240cm、最大幅が146cmである。左袖の長さは、全長20cm、幅30cm、高さ20cmである。右袖の長さは、全長32cm、幅45cm、高さ28cmである。煙道は、全長126cm、最大幅20cmである。底部は燃焼面から一段上がり、煙道端部にかけておおむね平坦に作られている。煙道の先端部は煙出しピットがある。規模は、直径45cm、深さ14cmである。燃焼部は、直径30cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で2cmである。

カマド2は、燃焼部の底面と煙道の一部を検出した。堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1～3はいずれもにぶい黄褐色土で、煙道に堆積する土層である。おそらくカマドを作り換える際に埋めた人為堆積土である。カマド2の規模は、推定長が200cmである。煙道は、遺存長90cm、最大幅22cmである。燃焼部と考えられる地点では直径34cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で2cmである。

ピットは3基確認した。P 1は、東隅に位置する椭円形のピットで、貯蔵穴と考えられる。規



54号住居跡堆積土

- 1 期褐色土質土 10YR3/3 (炭化物粒・地土粒微量)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (炭化物粒・地土粒微量)
- 3 期褐色土 10YR3/3 (炭化物粒・地土粒含む)
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (地山塊多量)
- 5 灰黃褐色粘質土 10YR5/2 (地山塊含む、貼床)
- 6 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (地山塊含む、貼床)
- 7 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (地山塊多量、貼床)

図118 54号住居跡（1）

模は、 $75 \times 53\text{cm}$ 、深さ9cmである。堆積土はにぶい黄褐色土である。P 2・3は南西壁側に位置する楕円形のビットである。P 2は、規模が $90 \times 68\text{cm}$ 、深さ14cmである。堆積土は暗褐色土である。カマド2に対応する古い貯蔵穴かもしれない。P 3は、規模が $35 \times 28\text{cm}$ 、深さ10cmである。堆積土はにぶい黄褐色土である。機能は不明である。

遺物は、堆積土の①～④にかけてやや多く出土している。このうち、図120-9・15は、隣接する53号住居跡の堆積土出土の土器と接合している。

遺 物 (図120、写真384)

遺物は土器が192点、須恵器1点、鉄製品1点が出土した。このうち土器15点、鉄製品1点

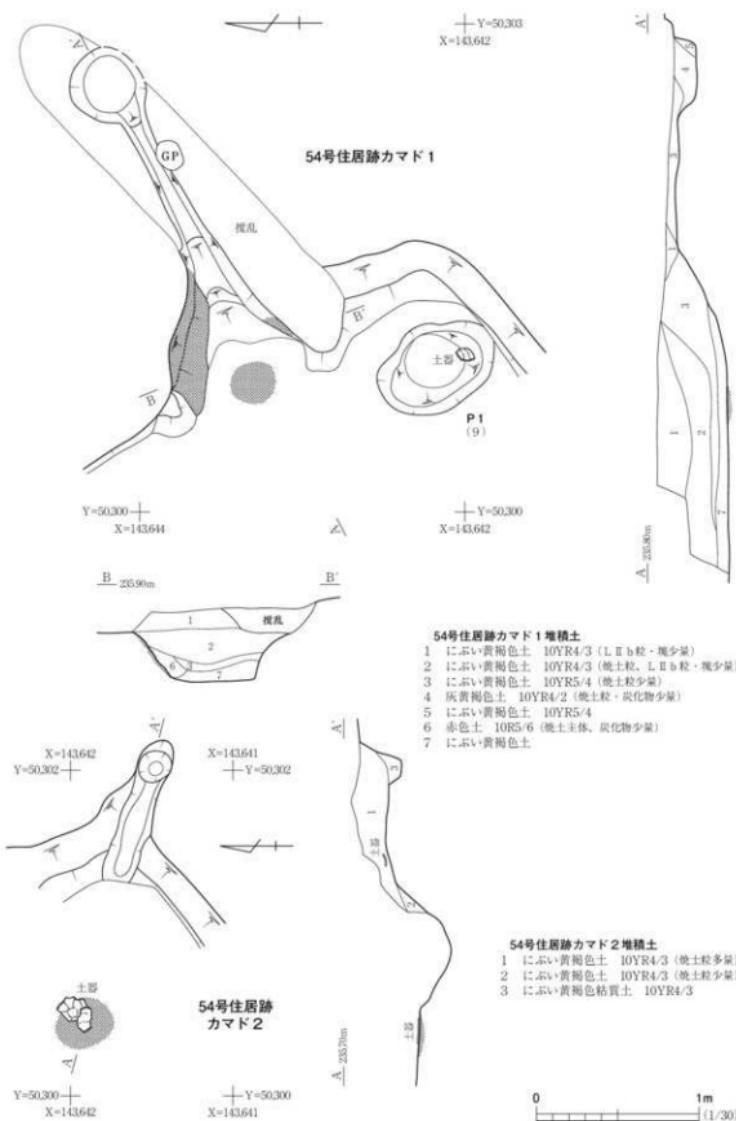


図119 54号住居跡（2）

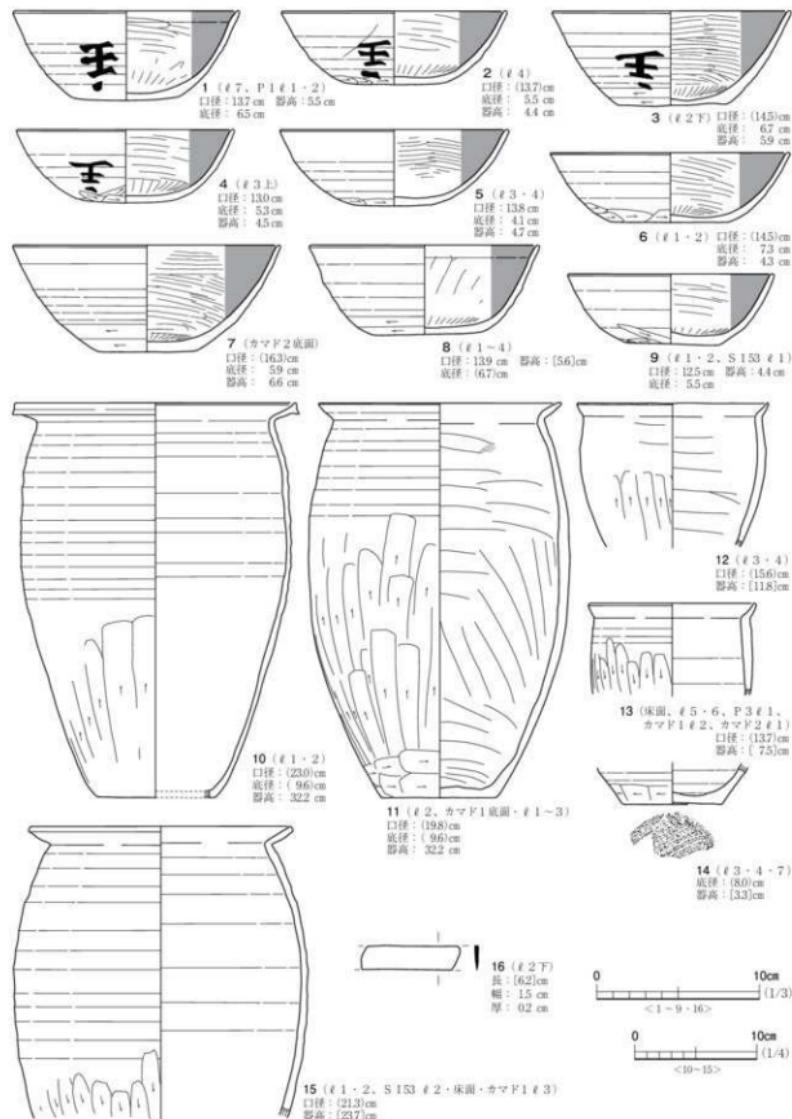


図120 54号住居跡出土遺物

を図示した。

図120-1～9はロクロ成形の杯である。内面は、入念にヘラミガキを施した後に黒色処理を施している。1～4には外面に「主」と書かれた墨書きがみられる。

10・11・15は、長胴の壺である。ロクロナデを施した後に、胴部下半を縦位にヘラケズリで調整している。11はさらに底部を横位にヘラケズリ調整している。

12～14は小型の壺である。14の底面には静止糸切り痕が残る。

16は刀子である。刀身部の一部が遺存している。

まとめ

本遺構は長方形の住居跡である。東隅と北東壁にカマドをもつ。最初に東隅にカマドを構築し、その後北東壁に作り変えていると考えられる。また住居は人為的に埋めており、堆積土中からは比較的まとまって土師器が出土した。土師器の杯には「主」の墨書きのあるものが4点出土した。遺構の所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。
(植松・中野)

55号住居跡 S I 55

遺構(図121、写真72)

本遺構は、IV区北部のH・I-8グリッドに位置する。標高236.3m付近の平坦面に立地する。検出面は、L II b下面である。8・9号建物跡を検出する際に、L II aを主体とする4mほどの遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、56号住居跡、4・8・9号建物跡であり、4号建物跡より新しく、それ以外の遺構よりは古い。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1はL II a②に対応する暗褐色土、 ℓ 2はL II b粒を多量に含む暗褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。平面形はおおむね方形である。規模は東側をトレチで壊されているが、4.5以上×4.1mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で垂直ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で27cmである。方位は、残りの良い南壁を基準とするなら、ほぼ真北を示す。床面は、掘形底面であるL II b下面に構築しており、平坦に作られ、全体的に硬く締まっている。

住居内の施設は、カマドを1基検出した。カマドは、北壁中央に作られている。遺存状態はよくないが、左右の袖と燃焼部、煙道の一部から構成される。堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1・2は褐色土で、燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土と考えられる。 ℓ 3は、焼土粒を多く含む袖の構築土である。

カマドの規模は、長さ140cm以上、最大幅が140cmである。袖は、壁から住居内に張り出す形態で、床面にそのまま土を貼って作られている。規模は、左袖が全長110cm、幅50cm、高さ14cmである。右袖は全長110cm、幅52cm、高さ12cmである。燃焼部は50×38cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で1cmである。

煙道は、大半が56号住居跡に破壊されている。断面形は「U」字状を呈し、北壁に直交するよう

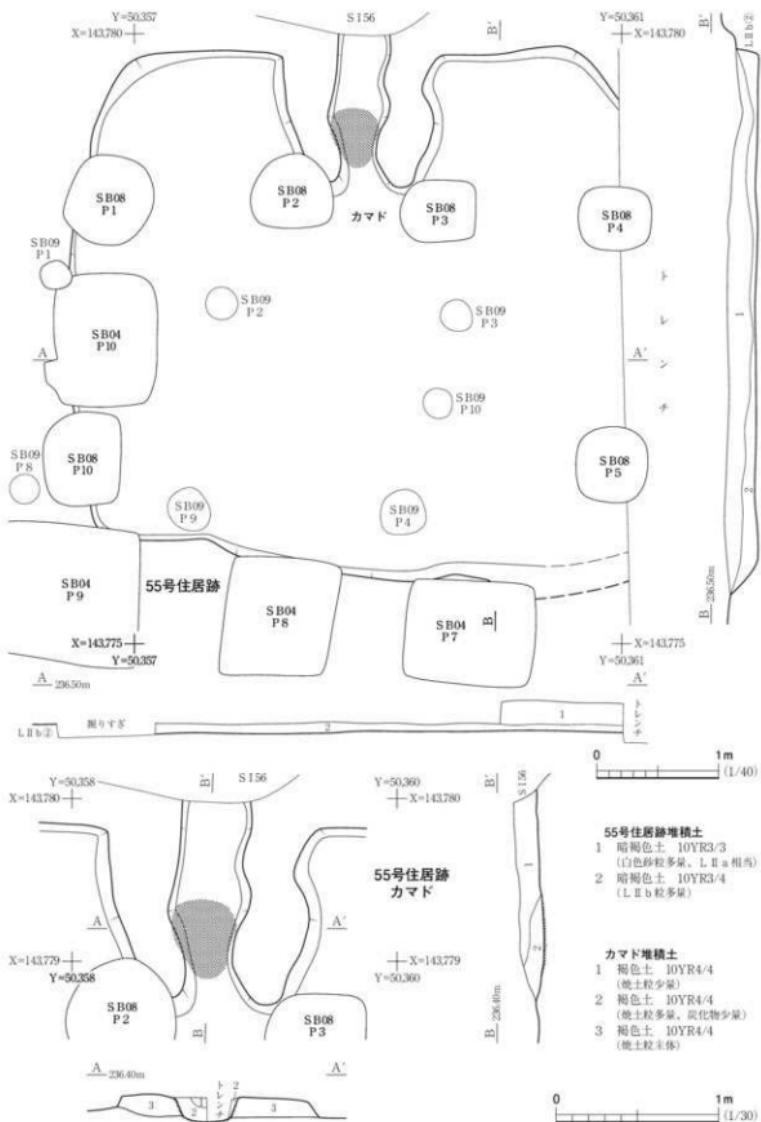


図121 55号居住跡

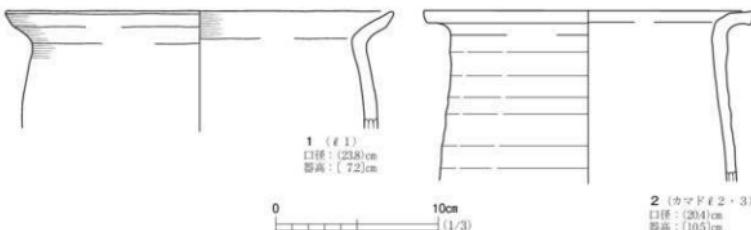


図122 55号住居跡出土遺物

に溝状に掘り込まれているものと推測される。規模は、遺存長20cm、幅41cmである。

遺物は、堆積土で散在するように、少量出土している。

遺 物 (図122)

遺物は土師器84点、須恵器1点が出土した。このうち土師器2点を図示した。

図122-1・2は、長胴壺の口縁部破片である。

ま と め

本遺構は、北壁側にカマドをもつ、方形の竪穴住居跡である。所属時期は、重複する遺構や出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

56号住居跡 S I 56

遺 構 (図123、写真73)

本遺構は、IV区北部のH-7グリッドに位置する。標高236.3m付近の平坦面に立地する。検出面は、L II b②である。55号住居跡を調査中に、カマドの煙道を破壊して広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は55号住居跡であり、本遺構のほうが新しい。

堆積土は5層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土、 ℓ 2はL II bを主体とする褐色砂質土である。いずれも遺物を多く含み水平に堆積していることから人為堆積土と考えている。 ℓ 3は焼土粒を含む暗褐色土で ℓ 1・2同様に人為堆積土と考えている。 ℓ 5・6は壁ぎわに堆積するいずれも褐色砂質土である。

平面形は隅丸長方形である。規模は28×23mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で40cmである。西壁から北壁においては、周壁の崩落が確認される。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約5度傾く。床面は、掘形底面であるL II b下面に作られており平坦である。床面中央では14×14mの範囲で硬化面が形成されていた。

住居内の施設は確認されなかった。

遺物は、床面中央から ℓ 1～3の堆積土に廃棄されたような状態で出土している。



図123 56号住居跡

遺物 (図124、写真385)

遺物は、土師器314点、須恵器10点、銅製品1点が出土した。このうち土師器12点、須恵器1点、銅製品1点を図示した。

図124-1～8は、ロクロ成形の杯である。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施す。1には「主」の墨書きがみられる。

9は小型の壺である。10～12は長胴形の壺である。11には胴部下半に焼けた粘土が付着している。

13は須恵器の壺である。14は銅製品である。断面が四角形で、両端が曲げられている。

まとめ

本遺構は、2.8mの小型の竪穴住居跡である。床面と堆積土から多くの遺物が出土した。堆積土の状況から遺物とともに埋めたと考えられる。住居内の施設が認められない、特殊な住居跡である。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

57号住居跡 S I 57

遺構 (図125、写真74)

本遺構は、IV区北部のH-8グリッドに位置している。標高236.3m付近の平坦面に立地する。検出面は、L II b ②である。G・H-7・8グリッドの検出時に、方形に広がる暗褐色土の範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構はないが、55号住居跡、4・8・9号建物跡が東側に接する。

第3節 住居跡

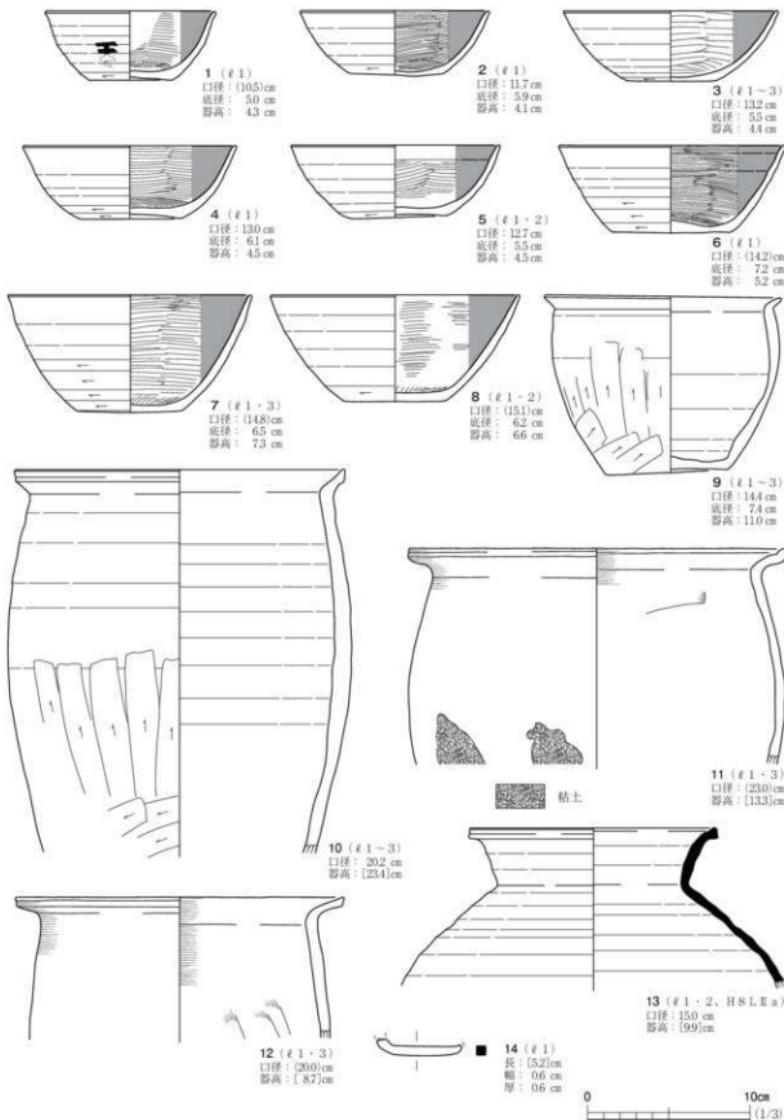


図124 56号住居跡出土遺物



図125 57号住居跡・出土遺物

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1・2は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土である。3・4は壁ぎわに堆積している暗褐色から褐色の堆積土である。いずれも自然堆積と考えられる。

平面形は隅丸方形である。規模は 2.5×2.2 mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で40度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で18cmである。住居の方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に3度傾く。床面は掘形底面であるL II b下面に構築しており、おおむね平坦に作られ、硬く締まっている。

住居内の施設は、確認されなかった。

遺物は ℓ 1～3の堆積土に散在した状態で出土している。

遺物 (図125、写真385)

遺物は土師器132点、須恵器2点が出土した。このうち土師器1点を図示した。

図125-1は内黒のロクロ成形杯の底部片である。底部に「成」の墨書がみられる。

まとめ

本遺構は、2.5mほどの小型の堅穴住居跡である。56号住居跡と共に、住居内の施設がないことから特殊な住居跡である。住居とは異なる機能が想定される。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

58号住居跡 S I 58

遺構 (図126、写真75)

本遺構は、IV区北部のH-9グリッドに位置する。標高236.1m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。検出当初は8mほどの遺構範囲であると認識したことから、1軒の住居跡と

して調査を行った。しかし、調査過程において、2軒の住居跡が重複していることが明らかになつたため、西側を58号住居跡、東側の住居跡を59号住居跡として扱つた。重複する遺構は、59号住居跡と48号土坑であり、59号住居跡より古く、48号土坑より新しい。

住居内堆積土は、5層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 2は褐色土である。いずれも遺物を多く含み水平に堆積していることから人為堆積土と考えている。 ℓ 3・4は焼土粒や炭化物を含むにぶい黄褐色土で ℓ 1・2同様に人為堆積土と考えている。

平面形は東側を59号住居跡によって壊されているが、おおむね方形もしくは長方形と考えている。規模は南北が4.5m、東西の遺存長が3.6mである。周壁は、遺存状態の良い西壁側で80度で

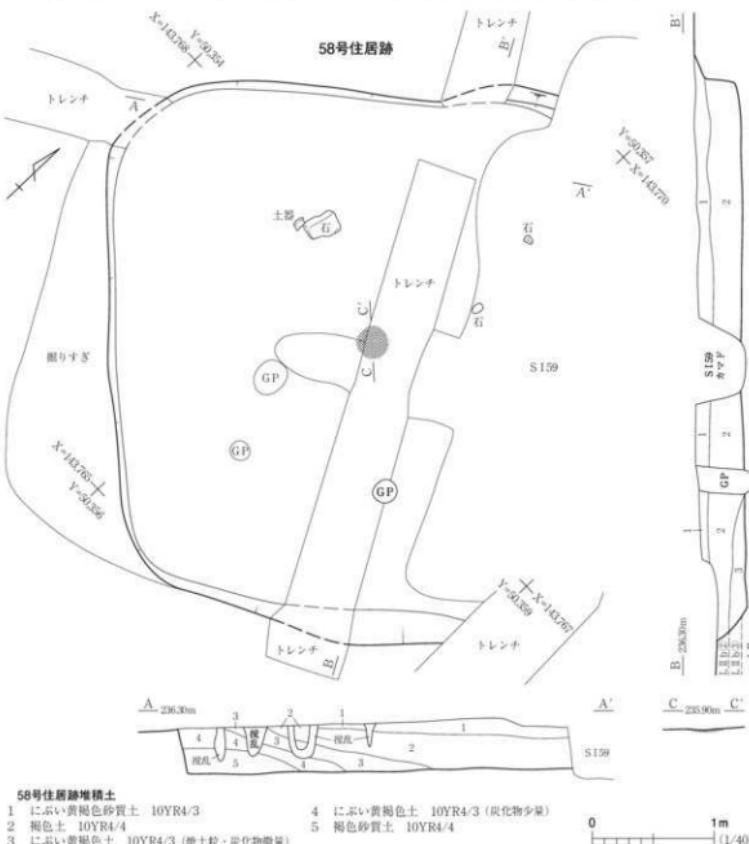


図126 58号住居跡

立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で37cmである。住居の方位は、残りの良い南西壁を基準とするなら北に対して西に約40度傾く。床面は掘形底面であるL III bに構築しており、おおむね平坦に作られ硬く縮まっている。

住居内の施設は、床面の中央に位置する地床炉である。上部を一部削り過ぎてしまったが、直径は25cmほどで赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で1cmである。

遺物は、図127-1~4が、ℓ 1からまとめて出土した。出土状況を図示できなかつたが、土器は、すべて正立しており、住居を埋める際に最上層に廃棄したものと考えている。それ以外の遺物は堆積土から散在して出土している。

遺物 (図127、写真385・386)

遺物は土器191点が出土した。このうち6点を図示した。

図127-1~3は、平底の小型の鉢である。1・3が口縁部がやや内傾する。2は口縁部が外反し、底部はやや突き出す。

4は口縁部が外反し、底部が丸底の杯である。内外面ともにヘラミガキ調整を加え、内面は黒色処理を施す。

5は高杯である。杯部の口縁部が外反し、胴部中段に稜をもつ。杯部と脚部の接合面は短く、脚部は「ハ」字状に開き中空になる。外面はヘラケズリ調整を加え、杯部内面はヘラミガキ調整後、内面黒色処理を施す。

6は、底部を欠損するが、長胴形の瓶である。外面には縦位に、内面は横位から斜位方向にハケメ調整を施す。

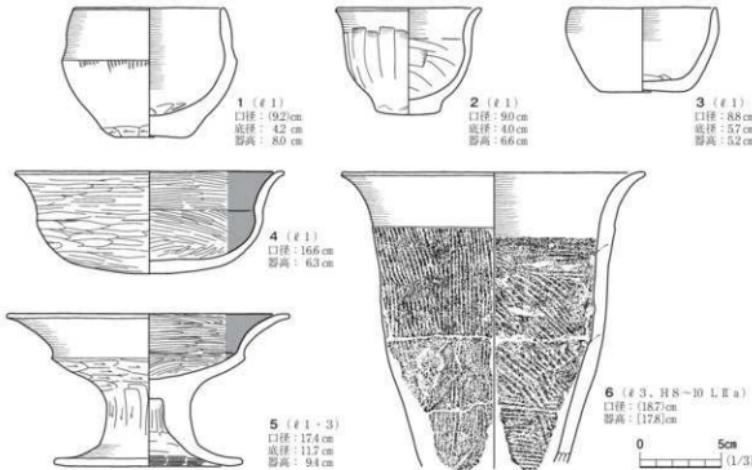


図127 58号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、4.5mの堅穴住居跡である。床面中央には地床炉1箇所が検出された。カマドが検出されなかつたが、59号住居跡に壊されているものと考えている。堆積土は人為堆積と考えられ、住居を廃絶時に埋めているものと考えている。その際に堆積土上部に1~4の土器を正立させて廃棄している。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

59号住居跡 S I 59

遺構(図128、写真76)

本遺構は、IV区北部のH・I-8・9グリッドに位置している。標高236.4m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b②である。重複する遺構は、58号住居跡であり、本遺構が新しい。

堆積土は3層に区分した。ℓ 1はL II a③に対応する白色粒子を多く含む黒褐色粘質土で自然堆積土である。ℓ 2は暗褐色土で、水平堆積であることから人為堆積土と考えている。ℓ 3はにぶい黄褐色土で壁ぎわに堆積する自然堆積土である。

平面形は長方形である。規模は5.4×4.9mである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で36cmである。住居の方位は、残りの良い北東壁を基準とするなら北に対して西に約30度傾く。床面は、L II b下面からL III b上面にかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは西南壁中央より南側に構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は5層に区分した。ℓ 1は暗褐色の自然堆積土である。ℓ 2は褐色砂質土、ℓ 3は焼土粒を多く含む暗褐色土で、いずれも燃焼部から煙道に堆積する焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。ℓ 4・5は暗褐色土で、カマドの袖の構築土である。

カマドの規模は、全長238cm、最大幅が85cmである。袖は、西壁に直交するように住居内に張り出す形態である。基部を掘り残さず、土を貼りつけて作り出している。左右の袖には、西壁と袖の交点のところに28×8cmほどの芯材の石を2個設置し、その上に大きさが55×16×9cmの細長い横石を置いていた。芯材の石と石の間の幅は29cmである。袖の規模は、左袖が全長68cm、幅38cm、高さ25cmである。右袖は全長64cm、幅32cm、高さ15cmである。燃焼部は、床面と同じ高さに作られている。底面は強く焼けており直径55cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で3cmである。燃焼部の焚口側には、支脚が据えられていた。支脚は18×8×5cmの自然礫を用いていた。煙道は、周壁に直交するように外へ細長く延びる形態である。断面形は「U」字状を呈し、底面は燃焼面より8cmほど高くなるように掘り込まれている。規模は、全長170cm、最大幅50cmである。煙出しには、土師器の杯が伏せられた状態で置かれていた。

ピットは1基確認した。P 1はカマドの南側に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は梢円形で

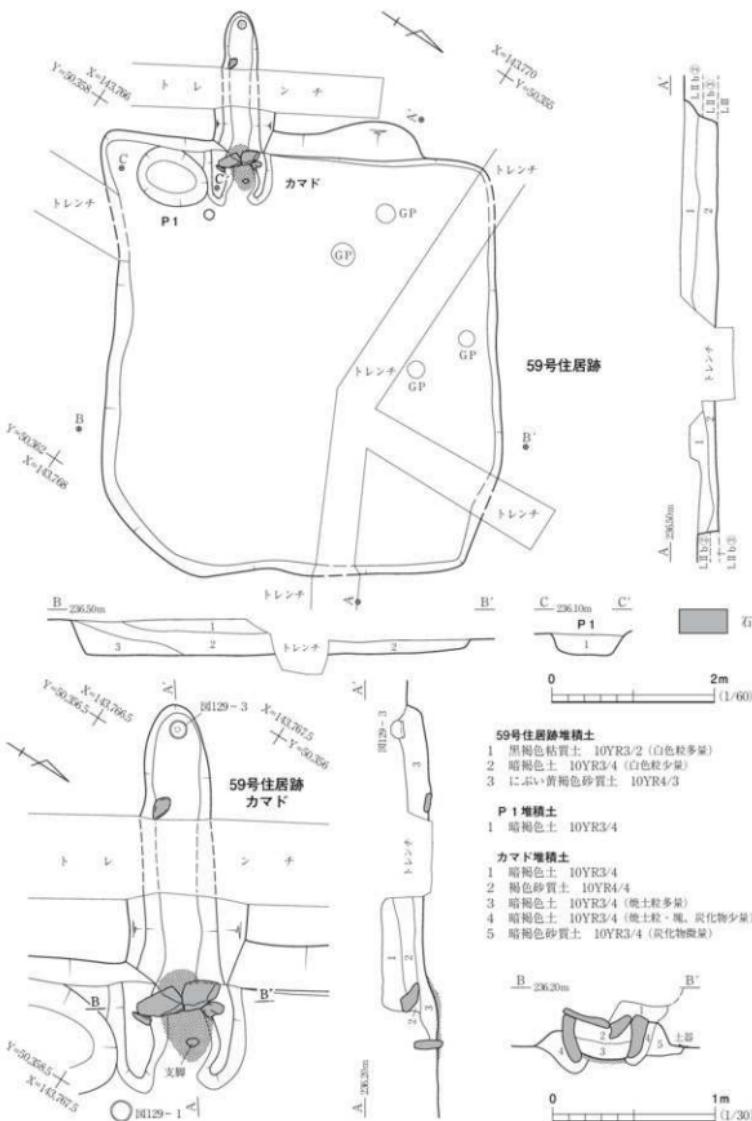


図128 59号住居跡

ある。規模は直径90cm、深さ25cmである。堆積土は暗褐色土である。

遺物は、カマドの左袖の前面から図129-1の杯が正位で出土している。3は、カマドの煙道の煙出しの部分に伏せた状態で出土した。堆積土からは、散発的に遺物が出土している。

遺 物 (図129、写真386)

遺物は、土師器が102点出土し、このうち3点を図示した。

図129-1は杯である。口縁部が外傾し、底部は丸底を呈する。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整を施す。

2・3小型の鉢である。2は口縁部から底部にかけての片である。3は口縁部が直立し頭部からやや張り出し、底部にかけて緩く膨らむ器形で、底部は丸底になる。2・3は底部外面をヘラケズリで調整している。

ま と め

本遺構は、 5.4×4.9 mほどの長方形の堅穴住居跡である。西壁側にカマドと貯蔵穴をもつ。所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。
(中野)

60号住居跡 S I 60

遺 構 (図130、写真77)

本遺構は、II区南部のM-22グリッドに位置する。標高235.7mの平坦面に立地する。検出面はL III bである。重複する遺構はないが、東側に12号溝跡が近接する。

遺構の堆積土は単層で、ℓ 1は焼土粒や炭化物を含む灰黄褐色土である。堆積過程は不明である。

平面形はおむね方形であるが、南東隅が張り出している。規模は 25×25 m、壁の高さが最大で10cmである。方位は西壁で北から30度東を示す。壁は外傾ぎみに立ち上る。床面についてはその大半を掘り下げてしまった。そのため土層断面での観察によると、床面はほぼ平坦

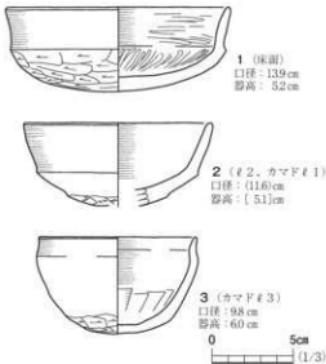


図129 59号住居跡出土遺物



図130 60号住居跡

であり、掘形底面である基盤層をそのまま利用している。

住居内の施設は認められなかった。南西隅の張り出し部が何らかの機能を果たしていたと考えることができるが、その根拠となる判断材料は得られなかった。

遺物は土師器が30点出土した。いずれも小片であり図示できる遺物はないが、器台片やハケメ調整を施した壺胴部片が多くを占める。いずれも古墳時代前期の所産で、新しい時期のものは認められない。

まとめ

本遺構は、2.5mの小型の竪穴住居跡である。住居内施設が未詳であるが形状などから住居跡として報告した。所属時期は、検出面がL III bである点や小片ながら、古墳時代前期以外の遺物がみあたらないことから、古墳時代前期頃を考えている。

(吉野・中野)

61号住居跡 S I 61

遺構(図131、写真78)

本遺構は、IV区北部のI-7・8グリッドに位置している。標高236.3m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。37号住居跡の写真的撮影時に、西側に広がる方形の遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構は、70号住居跡、3号溝跡であり、70号住居跡より新しく、3号溝跡より古い。

住居内の堆積土は3層に区分した。 ℓ 1・2は暗褐色土で、水平堆積であることから人為堆積土と考えている。 ℓ 3はにぶい黄褐色土で住居南側に偏在して堆積する。やや粒径の大きいL II b ②粒塊を主体としており、この堆積土も人為堆積と考えている。

平面形は、不整な隅丸方形である。規模は2.9×2.9mである。周壁は遺存状態の良い東壁側で80度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で32cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に3度傾く。床面は、掘形底面であるL II b ③からL III bに構築している。おおむね平坦に作られ、踏み締まりは強く、硬化範囲として確認できた。住居内の施設は検出できなかった。遺物は、堆積土や床面から散在して出土している。

遺物(図131)

遺物は、土師器24点、須恵器2点、鉄製品1点が出土した。このうち須恵器1点、鉄製品1点を図示した。

図131-1は須恵器で、高台が付いた杯の底部片とみられる。

2・3は鉄製品で、刀子である。接合しないが、同一個体の刀子と考えられる。2は刀身部、3は茎部である。

まとめ

本遺構は2.9mほどの小型の竪穴住居跡である。床面は踏み締まりで硬化している。56・57号住居跡と共に通点が多い。時期は出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

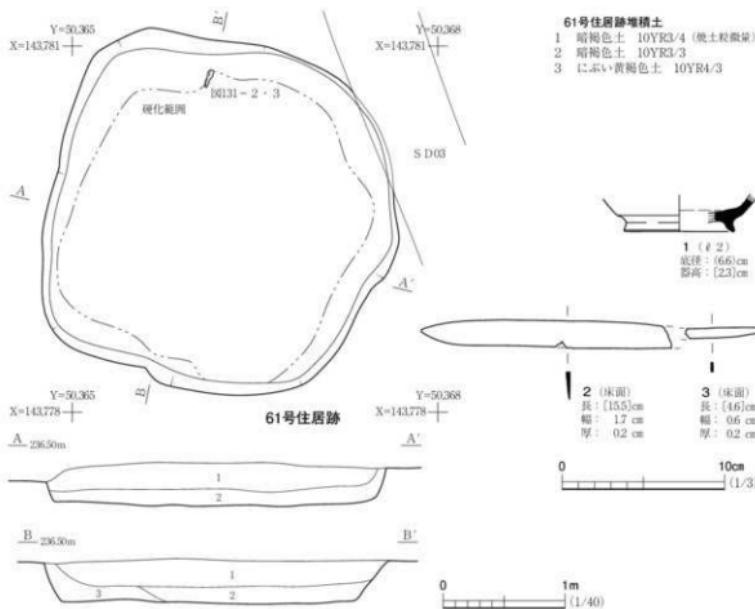


図131 61号住居跡・出土遺物

62号住居跡 S I 62

遺構 (図132、写真79)

本遺構は、IV区北西部のG・H-9・10グリッドに位置する。標高236.1m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。遺構の検出の際にグリッドに沿って土層観察用のトレンチを掘削中に、長方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、7号建物跡であり、本遺構が古い。

堆積土は暗褐色土の単層で、底部まで均一に堆積することから、人為的な堆積土と考えている。遺構の平面形は、不整な隅丸長方形である。規模は、4.1×1.9mである。周壁は遺存状態の良い東壁側で40度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で38cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に3度傾く。床面は、掘形底面のL II b ③からL III bに構築しておりおおむね平坦に作られ硬く締まっている。住居内の施設は認められなかった。

遺物は、床面北部から図132-1の土師器の杯が正位で出土している。

遺物 (図132、写真386)

遺物は土師器が8点出土した。このうち土師器の杯1点を図132-1に示した。

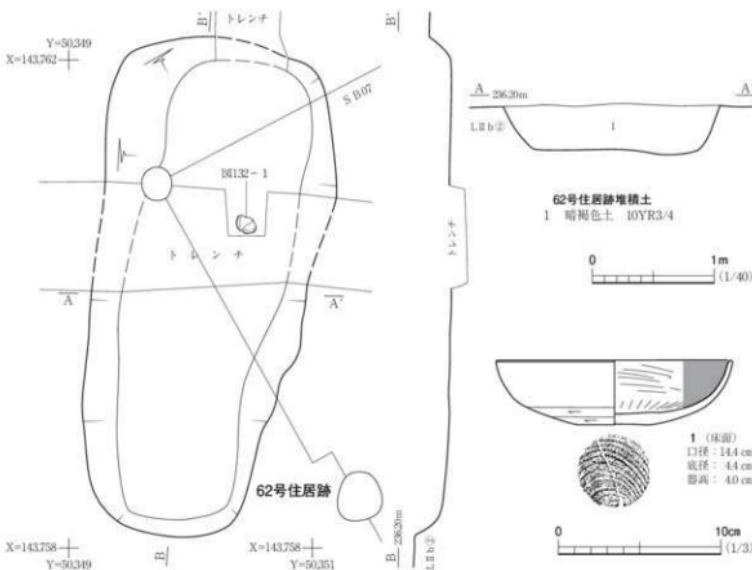


図132 62号住居跡・出土遺物

浅い楕形で、内面はヘラミガキ後に黒色処理、外面は回転ヘラケズリを施す。底部は平底で、糸切り痕がみられる。

まとめ

本遺構は、4.1×1.9mの長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設がないことから、土坑の可能性も否定できないが、硬化した床面の構造から住居跡として扱った。IV区北側で検出されている56・57・61号住居跡と同様に特殊である。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。

(中野)

63号住居跡 S I 63

遺構 (図133～135、写真80・81)

本遺構は、IV区南西部のF・G-12・13グリッドに位置する。標高236.0m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。検出当初は、L II a ③を主体とする南北14m、東西16mほどの長方形の範囲を確認したことから、大型の住居跡として調査を行った。住居跡の範囲があまりに大きいため、土層観察用畦とトレンチを設定し、明確な遺構の範囲が出るまで、L II a ③からL II b ①を下げながら調査を行った。その過程で、北側に2基のカマドをもつ、一辺が10m前後の大型住居であることが明らかになった。重複する遺構は、43・175・177・180号住居跡、2号溝跡であ

る。本遺構が43号住居跡、2号溝跡より古く、175・177・180号住居跡よりは新しい。

住居内の堆積土は6層に区分した。 ℓ 1はL II a③に対応する暗褐色土、 ℓ 2はL II b①に対応する暗褐色土でいずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 3はにぶい黄褐色土、 ℓ 4は褐色土でこれらも自然堆積土である。 ℓ 5は周壁側に三角状に堆積した自然堆積土である。 ℓ 6は周溝に堆積した褐色土である。

平面形はやや南北に長い方形である。規模は10.6 × 9.8mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で45cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して西に約20度傾く。床面はL III b上面にかけて構築しており、平坦に作られている。踏み締まりは弱く、微細な炭化物が散在していた。床面東側中央には、直径20cm、厚さ2cmほどの焼土の集積がみられた。地床炉ではなく、焼土が床面に二次的に堆積しているものと判断している。

住居内の施設はカマド、石敷き施設、ピット、周溝である。

カマドは、北壁中央で2基検出した。検出当初は2基同時並存のカマドの可能性も考えたが、東側のカマドが機能した後に西側に作り替えていることが判明した。ここでは、西側をカマド1、東側をカマド2として取り扱った。カマドは作り方や形態に特徴がある。まず、作り方においては、煙道を住居外に溝状に掘り込む。そして袖と燃焼部を作る前に、床面に240 × 200 × 28cmの土坑状の掘り込みを作る。さらにその土坑状の掘り込みを粘性のやや強い土と掘形の排土を混ぜたもので、埋め戻してからカマド2の袖と燃焼部を作っている。

カマド2は、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。カマドの平面形は、煙道がやや長く、カマドの袖が細長く住居内に張り出す構造である。堆積土は、11層に区分した。 ℓ 1・2は褐色土からにぶい黄褐色土で燃焼部から煙道に堆積する焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。カマド2に作り変える際に、カマド1を潰しているものと考えられ、その部分はマウンド状に残していたと推測している。 ℓ 4～7はL II b②粒を主体とした袖の構築土である。 ℓ 9～11は、褐色からにぶい黄褐色のカマド掘形の埋土である。カマドの規模は、全長350cm、最大幅が120cmである。左袖の長さは全長204cm、幅38cm、高さ18cmである。右袖の長さは全長193cm、幅32cm、高さ20cmである。燃焼部は192 × 62cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で5cmである。煙道は、底面が燃焼部と煙道の境目に段を持たず、住居の外側に行くにつれて緩く上るように傾斜をしている。壁や底面に焼土化は認められない。規模は、全長165cm、幅42cmである。

カマド1は左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。カマドの平面形においては、カマド2より煙道が短く、カマドの袖が細長く住居内に張り出す形態である。堆積土は6層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土で燃焼部から煙道に堆積する自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は焼土粒や炭化物を含むにぶい赤褐色土で天井崩落土である。 ℓ 3・4は煙道に堆積した暗赤褐色土から褐色土の自然堆積土である。 ℓ 5・6はL II bを主体とした袖の構築土である。カマドの規模は、全長310cm、最大幅が

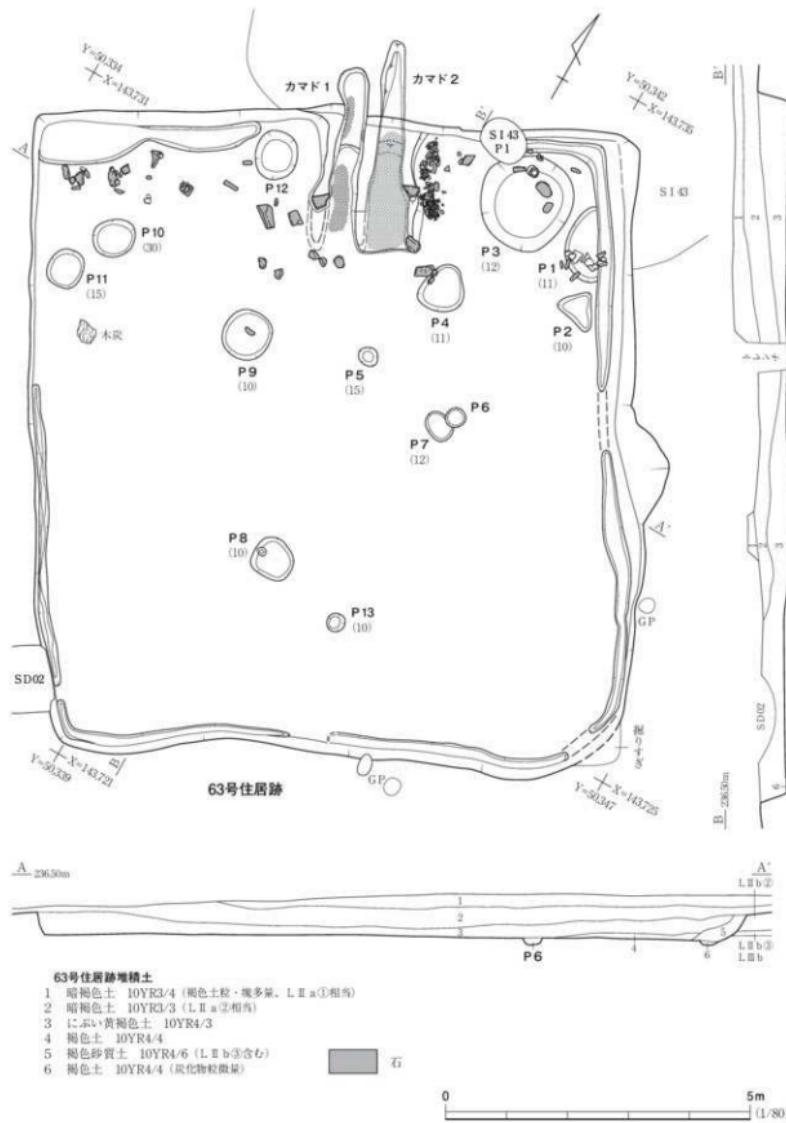


図133 63号住居跡（1）

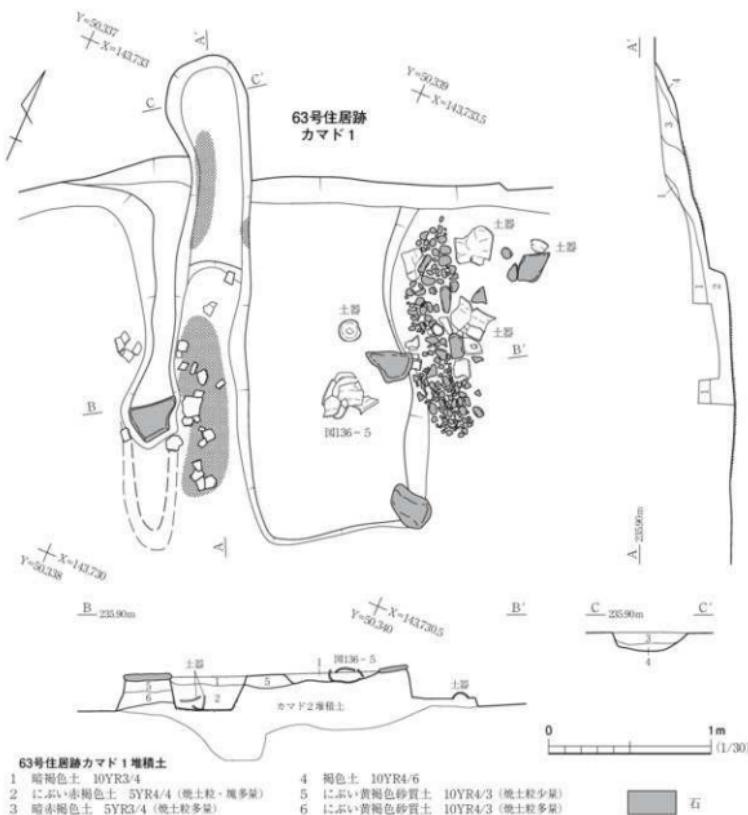


図134 63号住居跡（2）

190cmである。左袖の長さは先端を掘り過ぎてしまったが、推定長216cm、幅50cm、高さ24cmである。左袖には芯材であろうか、 $30 \times 22 \times 5$ cmほどの平たい台形状の礫が据えられていた。右袖の長さは全長210cm、幅48cm、高さ22cmである。右袖は、基壇の一部に土を盛って袖を作り直している。燃焼部は強く焼けていないが、 100×30 cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは、燃焼部底面で1cmである。煙道は、燃焼部より段が形成され、10cmほど高くなる。底面は、住居の外側に行くにつれて緩く上がる傾斜をしている。西壁や底面の一部は、 $70 \times 10 \times 2$ cmの範囲が焼土化している。煙道の規模は、全長120cm、幅50cmである。

なおカマド1の右袖より東側に、カマド2を壊してできた、棚状のマウンドが確認できた。おそらくカマド1機能時には棚のような施設として使用していたと思われる。規模は全長200cm、幅

70cm、高さが20cmである。上面には図136-1の土師器の壺が横倒しの状態で、土師器の杯が伏せた状態で置かれていた。

石敷き施設は、カマド2の東側床面より検出された。礫は、2~20cmほどの川原石を南北130cm、東西40cmの範囲に楕円形状に敷き詰めていた。床面より8cmほど高くなるように作られ、礫の面は平坦に揃えて敷かれていた。礫を固定していた堆積土は粘質のある褐色土で、カマド2の下部構造を作った後に右袖とともに敷かれたものと考えている。施設からは、図136-3の壺や土製管玉などが出土している。

ピットは12基確認した。平面形はいずれも楕円形ないし円形である。規模は直径30~160cm、深さは10~35cmである。いずれも浅いピットでいずれも明確に機能を明らかにすることはできなかった。P 3・4・12などはカマド脇という位置関係から、貯蔵穴、または土器据え穴の可能性も考えられる。またP 4・9・8などは柱穴の可能性も考えられる。堆積土はいずれも炭化物や焼土粒を含む褐色土である。

周溝は、北東隅から東壁側、南壁側、西壁南側から検出されている。東壁中央や南壁中央では所々で途切れる部分がある。周溝の規模は、最大幅が38cm、深さが12cmである。

遺物は、カマドを中心に石敷き施設やP 1・3堆積土から比較的まとまって出土している。また、カマド西側においては、土師器片とともに10~40cmほどの焼けた自然礫が30個ほど出土しており、カマドを壊した際に出た礫や編物石を西側に廻棄したものと考えている。

遺物(図135~137、写真386~388)

遺物は、土師器844点、須恵器1点、弥生土器1点、土製品1点、石器2点、石製品1点、編物石の可能性がある自然石33点が出土した。このうち土師器19点、弥生土器1点、土製品1点、石製品1点、石器2点を図示した。

図135-1~6、図136-11は杯である。1~5は、口縁部が外反し、丸底を呈する。胴部の稜・段は、4・5以外ではやや丸みを帯びている。いずれも内面には、ヘラミガキ調整をしてから黒色処理を施す。6は頸部の屈曲が弱く、口縁部がやや直線的に外反する。図136-11は口縁部が外反する杯である。内外面はヘラミガキを施す。

図136-1~3・5・6・8は長胴形の壺である。1は内外面にハケメ調整を施す。6は底部が平底で、外面の胴部上半にハケメ調整を施す。2は底部が平底で、内面にヘラナデを施す。5は内面にヘラナデ、外面に縦位にヘラミガキを加える。

4は肩部のやや張った球胴形の鉢である。7は、壺形の瓶である。

9・10・13は鉢である。9・10は外面にナデを施す。10は内面にヘラミガキ調整を施す。13は外面にミガキ調整を施し、底部はケズリで調整する。内面はミガキ調整後に黒色処理を施す。

12は、高杯の杯部から脚部の接合面の破片である。内面にヘラミガキを施す。外面には、杯部と脚部の境目に隆帯が巡る。

16は弥生土器である。斜位方向に地文を施す。14は黒色処理を施した、土製の管玉である。

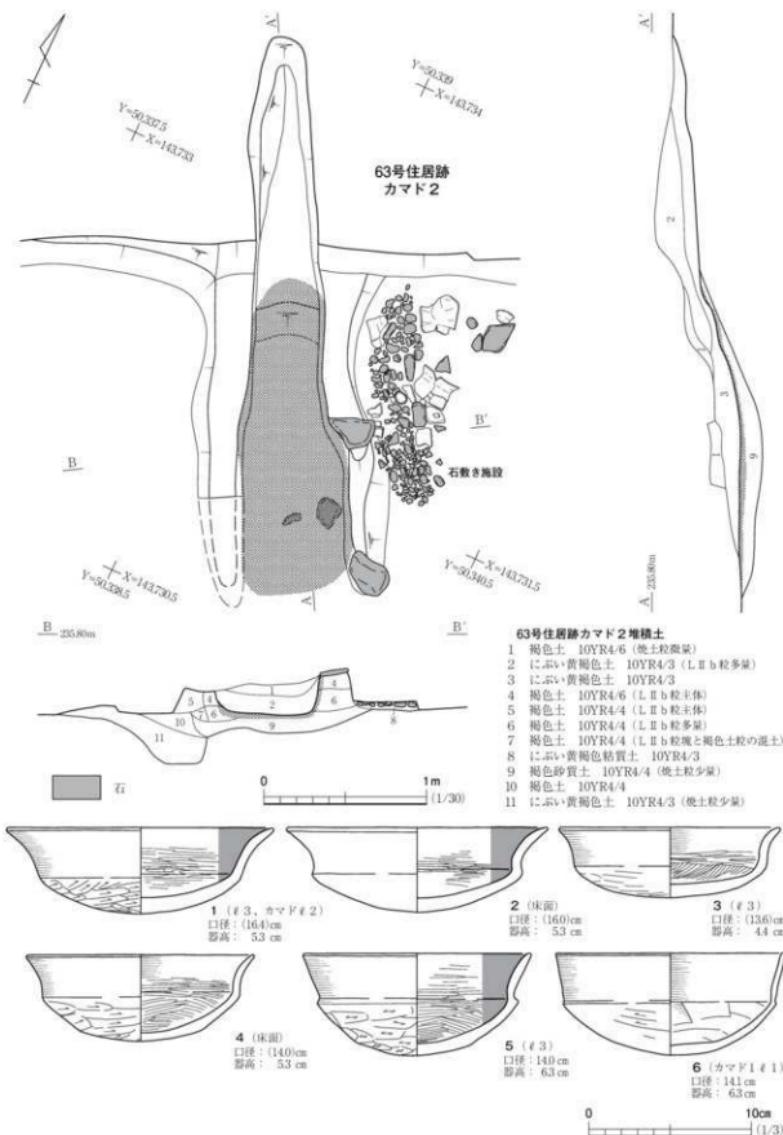


図135 63号住居跡（3）・出土遺物（1）

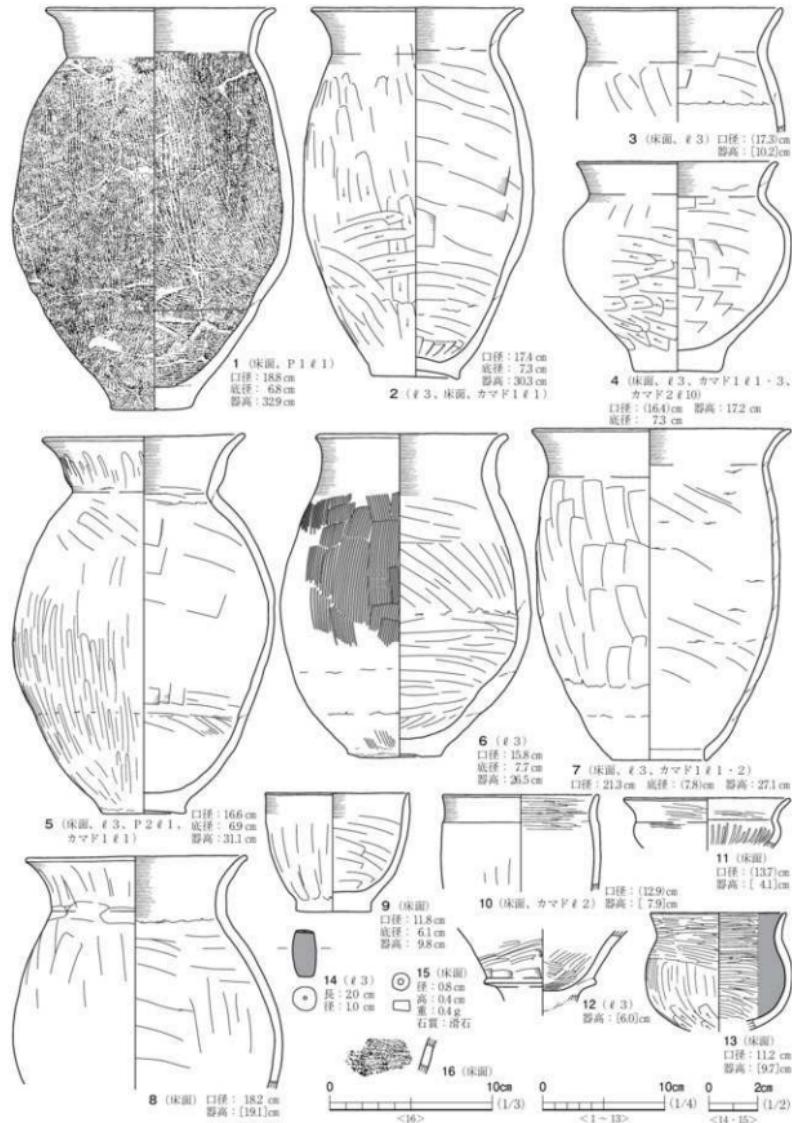


図136 63号住居跡出土遺物（2）

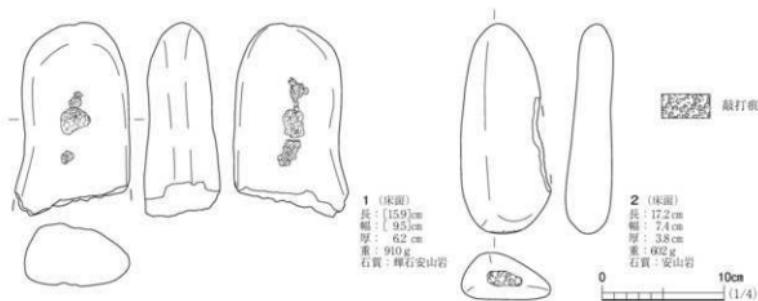


図137 63号住居跡出土遺物（3）

15は滑石製の白玉である。

図137-1は凹石、2は敲石である。1は表裏に敲打痕が確認できる。2は側面に1箇所敲打痕が確認できる。

まとめ

本遺構は、10.6×9.8 mの方形の竪穴住居跡である。調査区内で最大の竪穴住居跡である。北壁中央にカマド2基をもち、東側のカマド2を壊して西側のカマド1を作り替えており、その際は古いカマドの部分を棚のように残して使用していたものと考えている。カマドの東側には石敷き施設が確認される。土製管玉などが出土しており、何らかの祭祀行為に用いた可能性も考えられる。所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。
(中野)

64号住居跡 S I 64

遺構 (図138、写真82)

本遺構は、IV区西部のG-10・11グリッドに位置している。標高236.9 m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。G-10・11グリッドの検出時において、方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。157号土坑と重複し本遺構が古い。

堆積土は7層に区分した。ℓ 1はL II a ③に対応する白色粒子を多く含む黒褐色砂質土で自然堆積土である。ℓ 2は暗褐色土で自然堆積土と考えている。ℓ 3~5は褐色及びぶい黄褐色土で、水平に堆積していることから人為堆積土と考えている。ℓ 6は壁ぎわに自然堆積している褐色砂質土である。ℓ 7は焼土粒や炭化物を含むぶい黄褐色土である。遺物が出土し、当初カマドの堆積土と考えていたが、焼土面などは確認できなかった。東壁中央に偏在して堆積している。

遺構の平面形はおおむね隅丸方形である。規模は5.6×4.9 mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で38 cmである。住居の方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に約20度傾く。床面は掘形底面であるL II b ③からL III b に構築しており、おおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

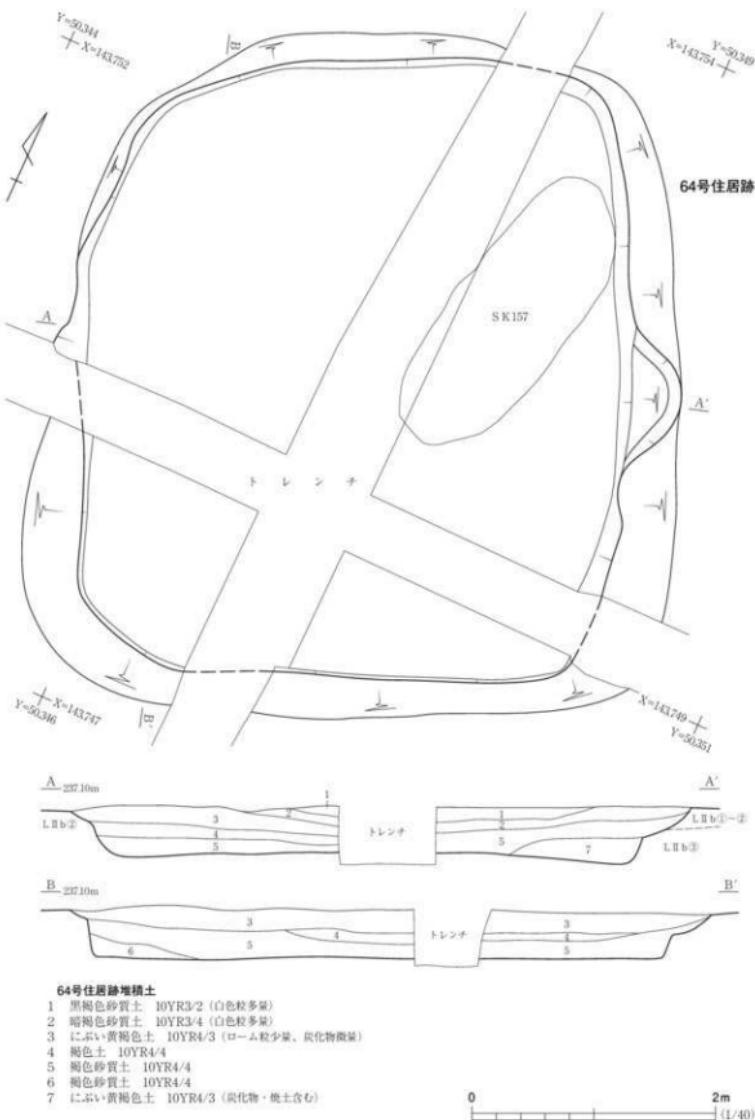


図138 64号住居跡

住居内の施設は確認されなかったが、東壁中央に東西40cm、幅110cmの張り出し部が確認できる。焼土を含む ℓ 7が堆積する範囲と重なることから、カマドの存在も検討し調査したが、焼土面や祐などのカマドの痕跡は確認できなかった。

遺物は、土師器が17点出土した。すべて ℓ 7からの出土である。いずれも小片であり図示できる遺物はないが、古墳時代後期の甕が主体を占める。

まとめ

本遺構は、5.0×4.7mの隅丸方形の竪穴住居跡である。東壁中央には張り出しが確認できたが、カマドや貯蔵穴などは検出できなかった。また、住居は堆積土の状況から一部埋められているものと考えられる。所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。(中野)

65号住居跡 S I 65

遺構 (図139・140、写真83)

本住居跡は、V区中央部の、S・T-19グリッドのL II bで検出された。標高236.7mの平坦な場所である。他の遺構との重複はないが、搅乱によって西側の一部が壊されている。北東には139号住居跡と36号土坑が、南西には149号住居跡が位置する。L II b上面で、方形に広がる暗褐色土の範囲が確認されたことから、住居跡として調査した。

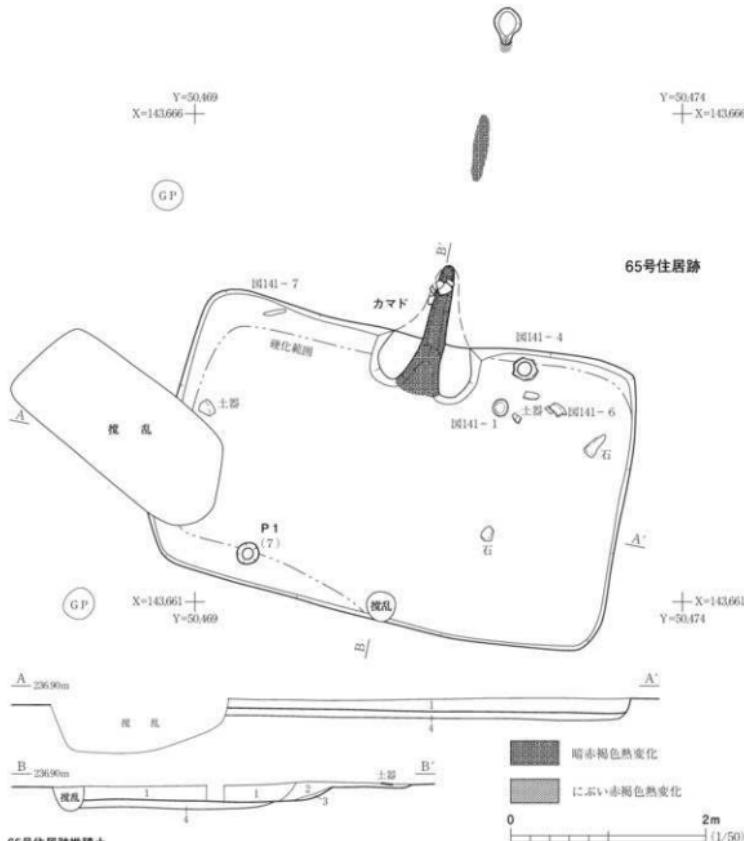
平面形は東西に長い長方形で、規模は4.8×3.0mである。東辺は北から10度東に傾く。壁は高さが最大15cmほど遺存していた。壁は約80度の角度で立ち上がる。床面は水平で平坦である。住居内の堆積土は暗褐色粘質土の1層で、褐色粘質土を斑状に多く含む。

住居内の施設は、カマドが南壁のほぼ中央に付設されていた。両袖と焼土面、煙道とその延長線上の煙出しピットからなる。両袖はにぶい黄褐色粘土で構築され、天井は崩落していた。煙道の両側には掘形が確認できた。焼土化した部分は、燃焼部の底面、両袖の内側、煙道に及び、煙出しピットの一部にもみられた。焼土面は燃焼部と煙道のうちカマドから約40cmの範囲が特に強く焼土化していた。焼土化した範囲は7cmの深さにまで及んでいた。規模は、両袖の幅が最大112cm、先端から壁までが60cm、袖の基底部幅が最大で48cm、床面からの遺存高が最大16cm、煙道の規模は、長さ1.3m、幅32cm、深さは最大で8cmである。煙出しピットは、煙道の先端から測ると2.3m、北壁から測ると3.1m離れている。煙道と煙出しピットの間の部分には掘りこみは検出されなかったが、長さ69cm、幅17cmの焼土化した範囲が検出された。

床面からは柱穴や貯蔵穴などは検出されなかった。北壁ぎわの西壁に寄った位置からは直径27cm、深さ7cmのピットが検出された。これをP 1とした。性格は不明である。

貼床は床面のほぼ全面に褐色砂質土塊を多量に含む暗褐色土で10cmほどの厚さで貼られていた。

遺物は住居跡の北東部の床面と、そこからやや浮いた状態で、土師器の杯・甕や、須恵器の蓋が出土している。また北西隅付近で須恵器大甕の破片が出土した。その他、堆積土中やカマド内、煙道の堆積土と掘形から土器片が出土している。



65号住居跡堆積土

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色粘質土 10YR3/4 (褐色粘質土斑状に多量、炭化物少量) | 3 灰褐色粘質土 7.5YR4/2 (純土塊多量) |
| 2 斯褐色粘質土 10YR3/4 (淡土・灰化物少量、カマド崩落土) | 4 暗褐色土 10YR3/4 (褐色砂質土塊多量、炭化物微量、貼床) |

図139 65号住居跡（1）

遺 物 (図141、写真388・389・448)

本住居跡からは、土師器49点、須恵器13点、鉄製品1点が出土した。このうち、土師器4点、須恵器3点、鉄製品1点を図示した。

図141-1～3は、土師器の杯である。このうち1・2は、浅い器形で外面に段を有し、内面には棱をもたない。1は丸底、2は平底である。外面は、口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリ、内面はミガキののち黒色処理を施す。3は、身の深い椀形の杯である。底部付近は遺存しない。内外面に丁寧なミガキを施し、内面には黒色処理を施す。

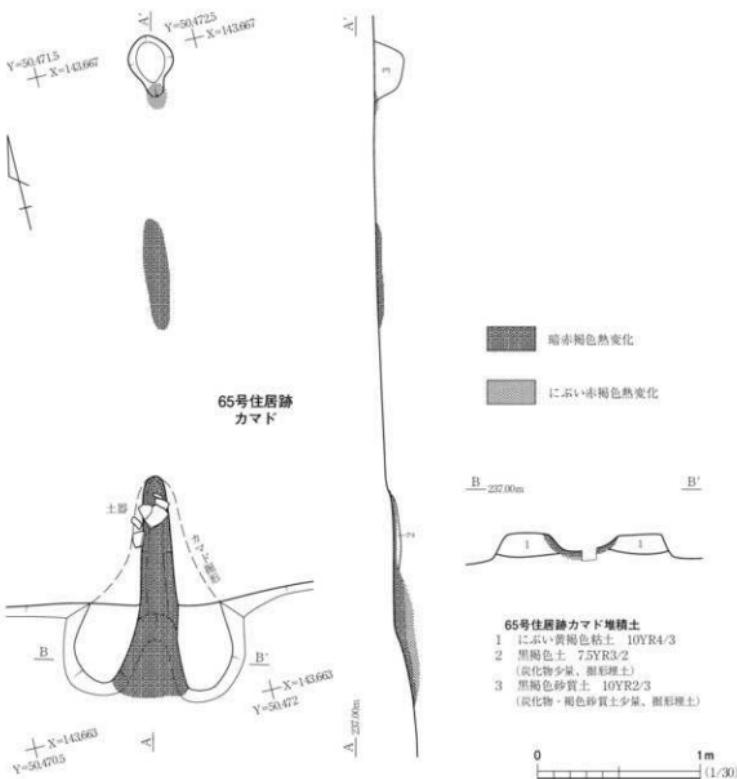


図140 65号住居跡（2）

4は、土師器の壺である。外傾する口縁部と体部上半が遺存する長胴壺である。体部外面に最大1mmほどの厚さで塗布・焼成された泥土が斑状に残る。

5は、須恵器壺である。体部外面に平行タタキメ、同内面に無文のアテ具痕、口縁部外面にはロクロナデが認められるが、内面は判然としない。色調は橙色である。

6は、須恵器壺である。ロクロ引き沈線が5条巡り、濃緑色から黄橙色の自然釉が流下する。

7は、須恵器壺の体部片で、外面に平行タタキメが施される。

8は、鉄製の鑓と思われる。把の上端は先細り、断面は方形で刃部に向かってやや幅を広げながら両刃の刃部に至る。把の中ほど1箇所に左右にそれぞれ台形に突出する拡幅部をもつ。

まとめ

平面形が長方形で、北壁にカマドをもつ竪穴住居跡である。煙道が長いことが特徴的である。柱

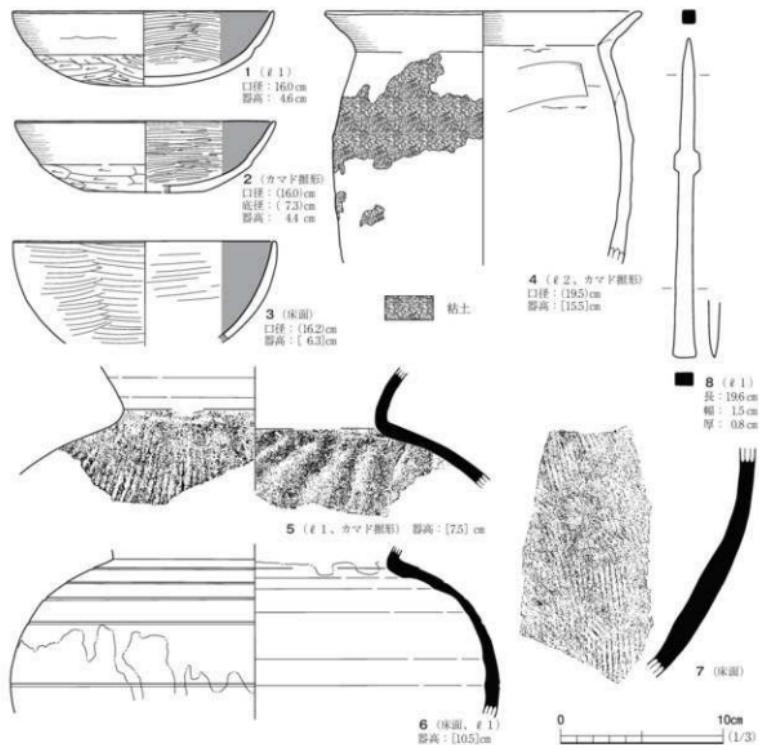


図141 65号住居跡出土遺物

穴や貯蔵穴などは検出されなかった。

本住居跡の年代は、出土遺物から奈良時代、8世紀に位置づけられる。

(青山)

66号住居跡 S I 66

遺構 (図142・143、写真84・269)

本住居跡はⅢ区西部のB-20グリッドに位置する。検出面はL II bである。標高は239.9 m付近に立地する。北側には41号土坑が隣接する。

平面形は長方形で、規模は南北4.5 m、東西3.5 mである。方位は北東壁で北から40度西を示す。壁の遺存高は残りの良い部分で40 cmほどである。壁は床面より急斜度で立ち上がる。床面は貼床が施され平坦であるが、壁ぎわではL II bをそのまま床面とする部分が認められた。

住居内堆積土は9層に分層される。黒褐色・暗褐色の土が大半をしめる。ℓ 1～3およびℓ 6

は、レンズ状の堆積および壁ぎわの三角堆積を示しており、自然堆積と考えられる。ℓ 4・5は炭化物や焼土粒が非常に多く含まれており、壁ぎわの一部にしか認められないことから、廃絶後の埋没過程で投げ込まれるなどした人為堆積土と考えられる。ℓ 7は住居南壁に接して堆積しており、L II bと大差がないことから、当初この部分が住居の壁と認識していた。しかしL II bと異なり黒褐色土塊や炭がわずかに混入していることや、層中に土師器小片が含まれており、人為的に埋めた土と考えている。ただし上面は平坦でなかったことから、いわゆる「棚状施設」と呼称されるものではないと考えている。ℓ 8はしまりがあり、水平に堆積することから貼床と判断した。カマド前面では踏み締まりによる硬化面が認められた。

住居内の施設はカマド1基と、ピット6基を確認した。カマドは住居南西壁に位置する。燃焼部と煙道を確認した。焚口から煙道先端までの全長は180cm、両袖を含めた幅は110cmである。袖はぶい黄褐色粘土で構築されており、右袖内側に偏平な石が立てられていた。

燃焼部は両袖間65cmで、床面からわずかに下がる。袖石・袖内側・煙道入口部分に被熱赤変が認められたが、底面に関しては認められなかった。煙道は壁からの長さ110cm、幅45cm。先端はピット状に掘り込まれ、やや深くなっている。カマド堆積土は12層に分層した。このうち、ℓ 4層が燃焼部天井崩落土、ℓ 10-12は袖および燃焼部の構築土である。

ピットはP 1-6を確認した。このうちP 1-3は貼床上面で検出され、P 4-6は貼床を除去した段階で検出した。いずれも平面形は楕円形で、深さは10-20cmほどの浅い掘り込みである。いずれも堆積土は1層で、掘形底面や床面と水平になるように、炭化物や焼土粒が混じる粘質土で埋められている。土質は貼床の土と非常に近似しており、床の構築に関するものと推定されるが詳細は不明である。

遺物はカマド周辺から多く出土しているが、大半が小片である。完形で出土した図142-1の土師器杯は、カマド左側の竪穴上端部から竪穴内部に転落したような状態で出土した。竪穴上端部分に土器などを置く空間が存在し、そこに置かれていたものが埋没段階で流入したものと思われる。

遺物(図142、写真389)

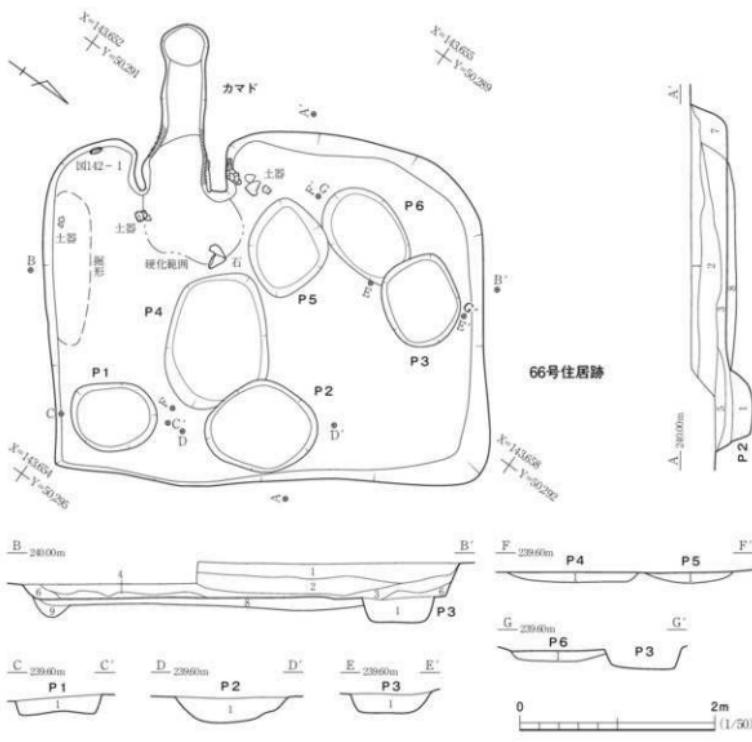
本住居跡からは、土師器134点、須恵器1点が出土した。図示した遺物は2点である。

図142-1は土師器の杯である。器面の荒れが著しいが、外面はロクロナデ、内面はヘラミガキと黑色処理が施される。器形は底部から外傾して立ち上がる。

2は筒形土器の口縁部から体部片である。輪積み痕が認められ胎土に海綿骨針が含まれている。

まとめ

本遺構は、4.5×3.5mの方形の竪穴住居跡である。カマドを南西壁に有する。カマド脇から完形の土師器杯が住居内に転落するような状態で出土しており、カマド脇の竪穴上端部に土器などを置く空間が存在した可能性が考えられる。柱穴は確認されなかったが、床面または床下に楕円形の浅いピットが多く確認された。貼床に近似した土で埋められていることから、床の構築に関するものと考えられる。出土遺物は少ないが、平安時代、9世紀頃の住居跡と想定している。(神林)



66号住居跡堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (褐色土層・白色粒少)
 - 2 黃褐色土 10YR3/4 (褐褐色土・白色少・黃土微量)
 - 3 にぶい 黄褐色粘質土 10YR4/3 (炭化物・燒土微量)
 - 4 にぶい 黄褐色粘質土 10YR4/3 (炭化物・燒土極多)
 - 5 黑褐色土 10YR3/1 (褐褐色土塊・炭化物・燒土含む)
 - 6 黑褐色土 10YR2/2 (褐褐色土塊)
 - 7 黃褐色粘質土 10YR5/4 (褐褐色土・白色粒・炭化物少)
 - 8 褐色粘土 10YR4/1 (炭化物・燒土少・粘土)
 - 9 黄褐色粘土 10YR4/1 (にぶい 黄褐色土・炭化物・燒土含む・粘土)

P 1~3 堆積土

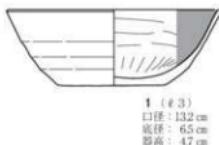
- 1 暗灰色粘質土 10YR4/1
(にじい、黄褐色土塊・炭化物・燒土含む)

P 4 · 5 地籍士

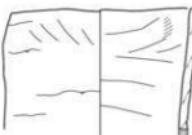
- 1 暗灰色粘質土 10YR5/1
(鐵土塊・鐵化物含量、灰黃褐色土塊含石)

P 6号槽土

- 1 灰黃褐色粘質土 10YR4/2 (氧化物・鐵土少量)



1 (#3)
口径：13.2 cm
底径：6.5 cm
器高：4.7 cm



2 (t 3)

圖142 66号住居跡(1)：出土遺物

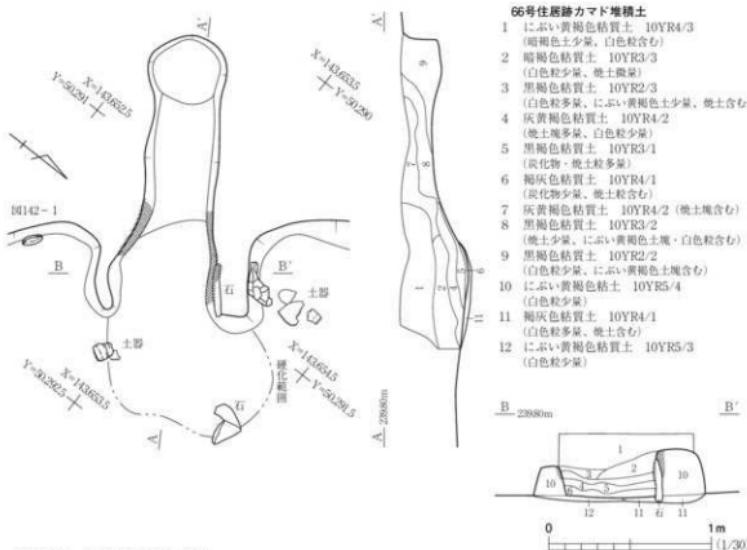


図143 66号住居跡（2）

67号住居跡 S I 67

遺構 (図144・145、写真85)

本遺構はIV区北部のI・J - 6・7グリッドに位置している。標高236.4m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ③である。重複する遺構は45号土坑であり、本遺構が新しい。

堆積土は6層に区分した。ℓ 1・2は暗褐色土で自然堆積土である。ℓ 3は褐色砂質土、ℓ 4はにぶい黄褐色砂で、いずれも壁ぎわに堆積する自然堆積土である。ℓ 5・6はL II b ②粒を多く含む貼床構築土である。

平面形は隅丸長方形である。規模は4.0×3.7mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している西壁で40cmである。住居の方位は、残りの良い東壁を基準とするならば真北を指す。床面は、貼床をL II b下面からL III b上面にかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは東壁中央より南側に構築されている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は8層に区分した。ℓ 1は暗褐色土の自然堆積土である。ℓ 2は褐色土、ℓ 3は焼土粒を多く含む暗褐色土で、いずれも燃焼部から煙道に堆積する焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。ℓ 4は煙出しピットに堆積する暗褐色土である。ℓ 5・6は暗褐色土、ℓ 7・8はにぶい黄褐色砂質土で袖やカマド底面の構築土である。

カマドの規模は、全長240cm、最大幅が140cmである。袖は、東壁に直交するように張り出す形態で、L II b ②を主体とする土を貼って作り出している。規模は、左袖が全長60cm、幅70cm、高さ18cmである。右袖は、全長70cm、幅46cm、高さ28cmである。燃焼部は、床面と同じ高さに作られている。底面は52×33cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で1cmである。

煙道は、周壁に直交するように外に溝状に延びる。断面は「U」字状に掘り込まれており、底面は燃焼部側から煙出部にかけて緩く傾斜している。規模は、全長160cm、最大幅43cmである。煙道先端から40cmほど東側では、煙出しピットを検出した。平面形は円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径38cm、深さ10cmである。

ピットは3基検出した。P 1はカマドの南側に位置し、貯藏穴と考えている。平面形は円形である。規模は直径74cm、深さ20cmである。堆積土は褐色砂質土である。P 2は床面中央に位置するピットである。規模は直径30cm、深さ8cmである。機能は不明である。

P 3は床面東北隅に位置する。平面形は梢円形である。規模は100×84cm、深さ33cmである。

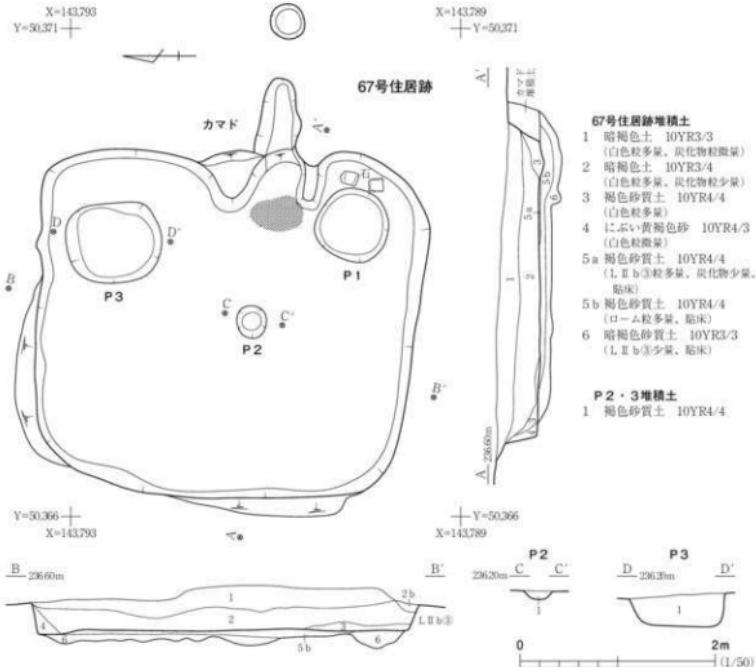


図144 67号住居跡（1）

P 1と共に通する形状などから貯蔵穴の可能性もある。遺物は、住居内の堆積土やカマド周辺から散在して出土している。

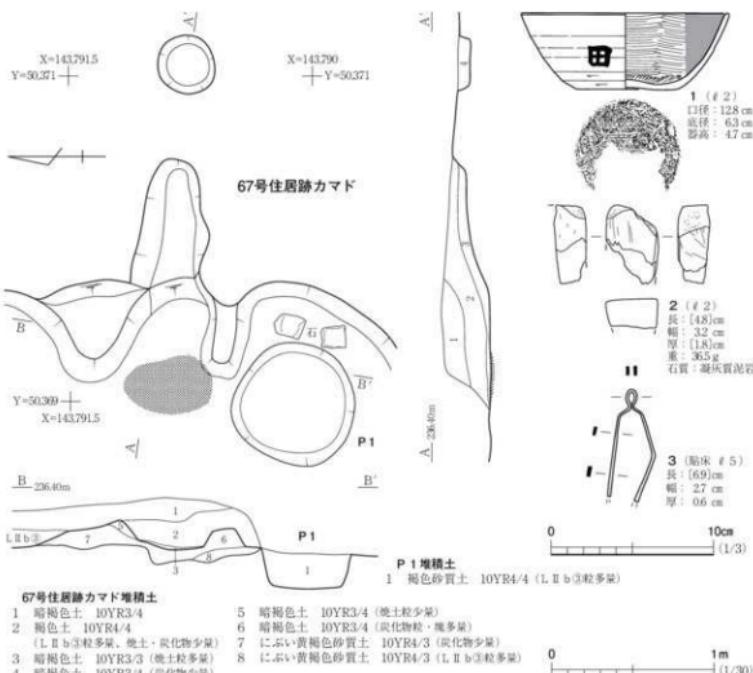
遺物 (図145)

遺物は、土師器225点、須恵器3点、石製品1点、鐵製品1点が出土した。このうち、土師器1点、石製品1点、鐵製品1点を図示した。

図145-1は墨書きもつ、ロクロ成形の杯である。内面をミガキ調整後に黒色処理を施す。胸部には「田」の墨書きがみられる。2は砥石である。3は毛抜き形の鐵製品である。断面が四角い鉄棒を折り曲げて、曲げた部分を環状に押し曲げ、つまみとしている。

まとめ

本遺構は、 $4.0 \times 3.7\text{m}$ の隅丸方形の堅穴住居跡である。東壁にカマドをもつ。図145-1の土師器杯には「田」と書かれた墨書きがみられた。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。
(中野)



68号住居跡 S I 68

遺構 (図146、写真86)

本遺構は、IV区北部のH-7・8グリッドに位置する。標高236.1m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、4号建物跡で、本遺構が古い。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は炭化物を少量含む褐色粘質土、 ℓ 2は黄褐色砂質土で、いずれも自然堆積土と考えている。 ℓ 2の北側では、焼土の集積を確認した。別遺構の炉とも考えたが、二次的に堆積した焼土集積として扱った。平面形は、北側を失っているが、隅丸方形、もしくは橢円形と考えている。

規模は東西が5.0m、南北の遺存長が4.1mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で10cmである。方位は、西壁を基準とするなら

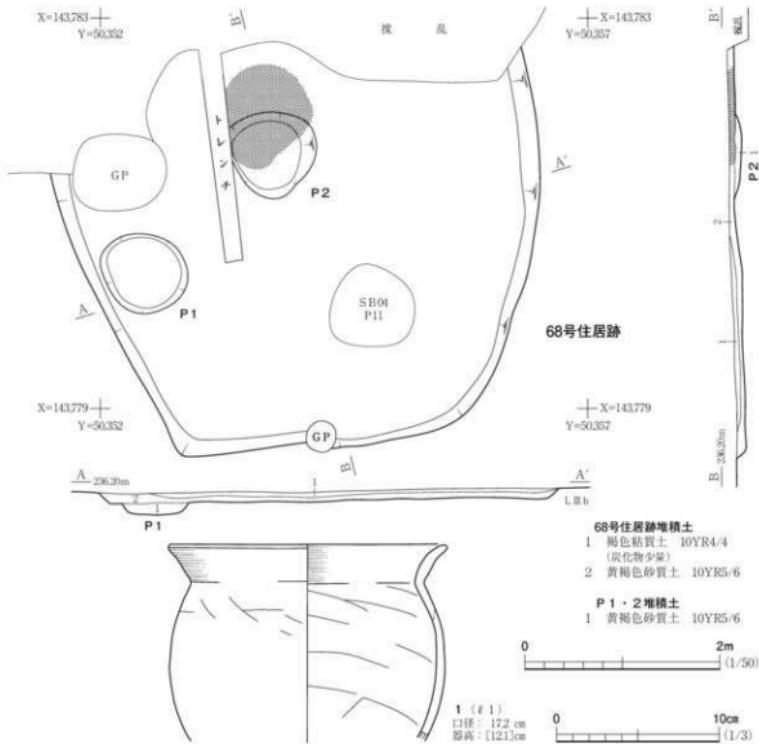


図146 68号住居跡・出土遺物

北に対して西に約20度傾く。床面は、L IVに構築しておりおおむね平坦に作られ踏み締まりは弱い。床面の規模は、4.6×4.0mである。

住居内の施設はピット2基である。P 1は床面西部に位置している。平面形は円形である。規模は、直径80cm、深さ10cmである。堆積土は、黄褐色砂質土である。P 2は床面中央からやや北側に位置する。平面形は楕円形である。規模は直径90cm、深さ10cmである。堆積土は黄褐色砂質土である。ピットは浅いものの、貯蔵穴と考えている。

遺物は、堆積土から破片が散在して出土している。

遺物（図146）

遺物は土師器が36点出土した。このうち土師器1点を図示した。

図146-1は、球胴形の甕である。外面にナデ、内面にヘラナデ調整を施す。

まとめ

本遺構は、北側を失っているが、5.0mほどの堅穴住居跡である。床面からは、貯蔵穴を検出した。所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

（中野）

69号住居跡 S I 69

遺構（図147、写真87・88・269）

本遺構は、IV区北部のG-7グリッドに位置する。標高236.2m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b②である。重複する遺構はない。

堆積土は2層に区分した。ℓ 1は焼土粒や炭化物含む暗褐色土で自然堆積土である。ℓ 2は炭化物を多く含む褐色砂質土で壁ぎわに堆積する自然堆積土である。

平面形は長方形である。規模は、5.9×4.6mである。周壁は遺存状態の良い西壁側で50度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で36cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約15度傾く。床面は、L III bに構築しておりおおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは東壁中央に構築されている。遺存状態はよくなく、左袖と右袖の基部、燃焼部、煙道から構成される。堆積土は4層に区分した。ℓ 1は暗褐色の自然堆積土である。ℓ 2・3は褐色土と褐色砂質土、ℓ 4は褐色土で袖の構築土である。カマドの規模は、全長186cm、最大幅が180cmである。

袖は東壁に直交するように住居内に張り出す形態で、左袖が遺存していた。左袖の長さは、全長84cm、幅91cm、高さ25cmである。右袖は、L II b②を掘り残した基部が遺存していた。規模は、全長38cm、幅42cm、高さ15cmである。燃焼部は、焼土粒が散在するが、ほとんど焼けておらず、中央に自然石の支脚が据えられていた。支脚の石は20×15cmほどの角礫である。支脚には、石に沿う形で、図147-2の鐵模倣の土製品が出土している。土製品は先端を底面側に刺した状態で出土した。煙道は住居の外に溝状に張り出す形態である。煙道の北側壁面は52×12cmにかけて

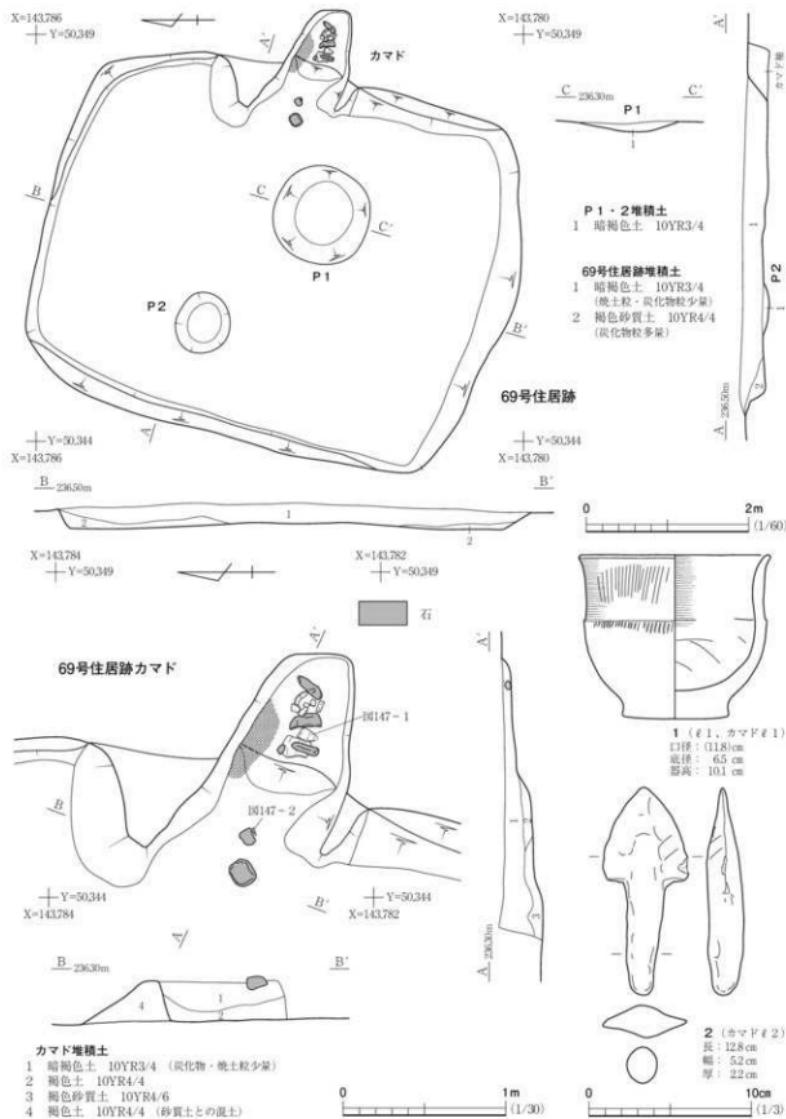


図147 69号住居跡・出土遺物

被熱によって赤褐色に焼土化している。断面形は「U」字状を呈し、底面は燃焼部側から10cmほど上がり、緩く傾斜する。規模は、全長90cm、最大幅80cmである。

ピットは2基確認した。P 1はカマドの西側の床面に位置する。平面形は楕円形で底面はすり鉢状を呈する。規模は直径120cm、深さ10cmである。P 2は床面西側に位置する。P 1と形状は共通する。規模は直径72cm、深さ10cmである。ピット2基の堆積土はいずれも暗褐色土である。機能は明らかにできなかった。

遺物は、前述の土製品の他、カマド煙道の底面からは焼けた10~20cmほどの礫が4個と図147-1の土師器鉢が出土している。

遺物（図147、写真389）

遺物は、土師器62点、土製品1点が出土した。このうち土師器1点、土製品1点を図示した。

図147-1は土師器鉢である。外面にはハケメ調整が施される。2は有茎式鉄鎌を模倣した土製品である。根の形状は、三角形をなし、断面形は菱型を呈する。茎はやや長く断面形は楕円形である。茎と根は直角に接する。比較的実物に忠実に作られている。

まとめ

本遺構は、東壁側にカマドをもつ、5.9×4.6mほどの長方形の堅穴住居跡である。カマドの燃焼部からは、有茎鉄鎌を模倣したと思われる土製品が出土している。土製品は根の先端を底面側に刺した状態で出土しており、何らかの祭祀行為にともなって突き刺したと考えている。また、カマドの燃焼部もあまり焼けていないのも特徴的である。所属時期は、出土遺物などから、古墳時代後期と考えられる。

（中野）

70号住居跡 S I 70

遺構（図148、写真89）

本遺構は、IV区北部のI-7・8グリッドに位置する。標高236.2m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b②である。61号住居跡の西側を検出している際に、5.0mほどの方形の遺構の範囲を検出したことから、住居跡として調査した。重複遺構は、61・77号住居跡、4号建物跡である。61号住居跡と4号建物跡より古く、77号住居跡より新しい。

堆積土は褐色土の単層で堆積過程は不明である。

平面形は不整な隅丸方形である。規模は5.2×5.0mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で50度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で18cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に約5度傾く。床面は、L III b~IVにかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設はカマドである。カマドは西壁中央に構築されている。遺存状態はよくなく、煙道の一部が遺存していた。堆積土は褐色砂質土の単層である。カマドの規模は、遺存長100cm、最大幅が90cmである。煙道は、住居跡の外側に溝状に張り出す。煙道の壁面は、焼け方が弱いが被熱

によって暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で1cmである。燃焼部は炭化物粒が散在する。

遺物は土師器が1点カマドから出土したが、小片のため図示しなかった。小片は古墳時代後期の壺の胴部片である。

まとめ

本遺構は、西壁中央にカマドをもつ、隅丸方形の竪穴住居跡である。カマドの燃焼部はあまり焼けておらず、使用頻度が低かったものと推測している。カマドの状況や堆積土からほとんど遺物が

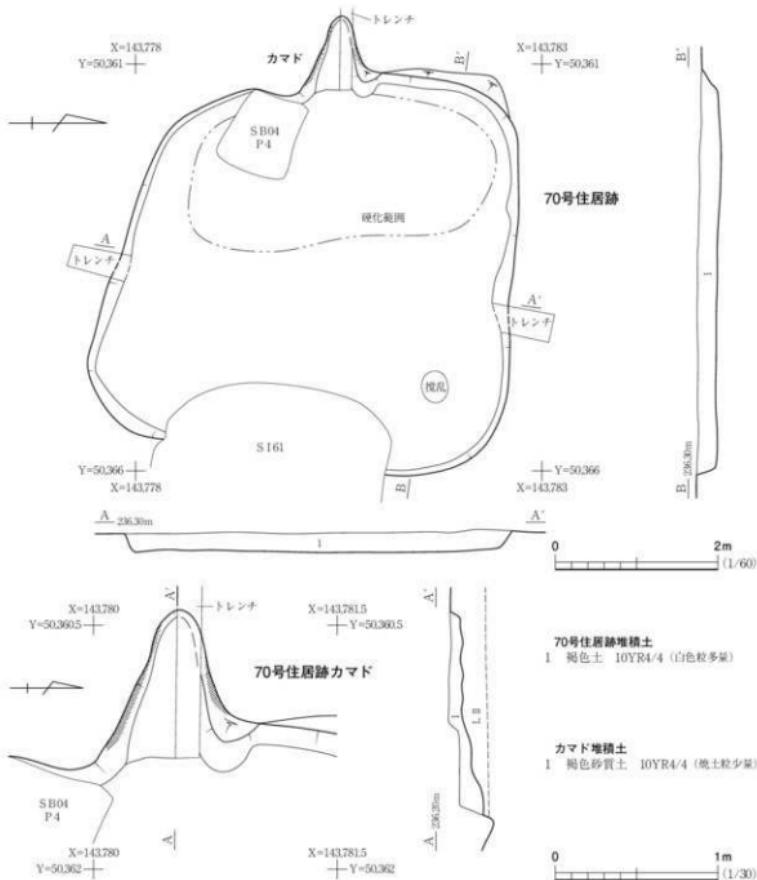


図148 70号住居跡

出土しない点は、69号住居跡に似ている。所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

71号住居跡 S I 71

遺構 (図149、写真90)

本遺構は、I・IV区塊のJ-11・12グリッドに位置する。標高236.0m付近の平坦面に立地する。検出面はL II a ③である。重複する遺構は5号烟跡であり、本遺構が古い。

堆積土は単層で、ℓ 1はL II a ②に対応する暗褐色土である。

遺構平面形は隅丸方形である。規模は4.1×3.7mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で40度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で10cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に約20度傾く。床面は凹凸が多く踏み締まりは弱い。

住居内の施設は検出できなかった。

遺物は、床面の北東隅から土師器の杯が伏せた状態で出土している。

遺物 (図149、写真389)

遺物は土師器が9点出土した。このうち1点を図示した。

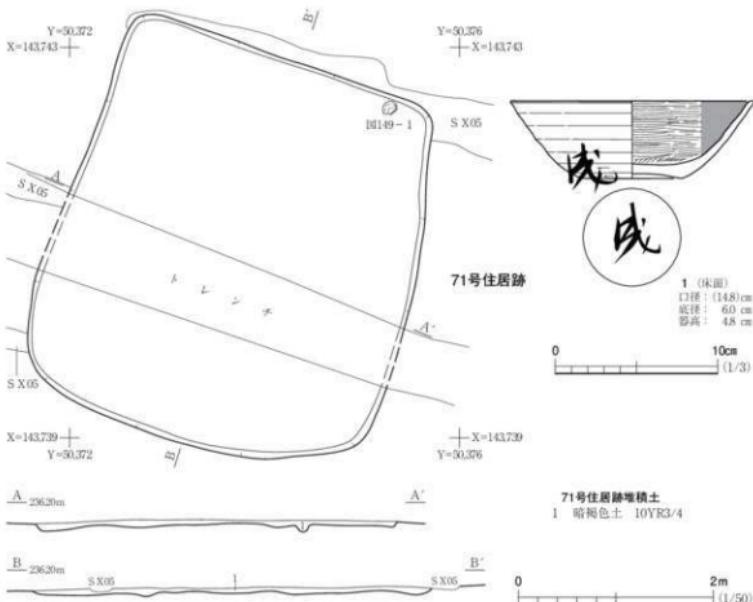


図149 71号住居跡・出土遺物

図149-1は、内面黒色処理を施したロクロ成形の杯である。胴部下半と底部の2か所には、「成」の墨書が確認できる。

まとめ

本遺構は $4.1 \times 3.7\text{m}$ ほどの隅丸方形の竪穴住居跡である。住居内の施設をもたない点が特徴的で、56・57号住居跡と共に通する。床面北東隅からは「成」と墨書のある土師器の杯が伏せた状態で出土した。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀と考えられる。
(中野)

72号住居跡 S I 72

遺構(図150、写真91)

本遺構は、IV区東部のI-11・12グリッドに位置する。標高235.9m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②である。重複する遺構は46号土坑で本遺構が古い。検出時は、焼土粒と炭化物を含む方形の範囲を明確に確認していたが、周壁の大部分を掘り過ぎている。

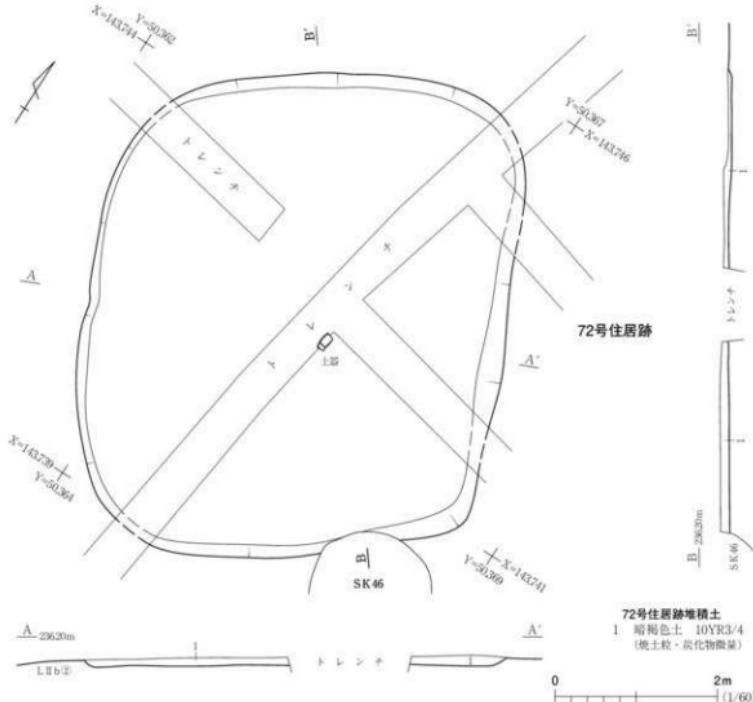


図150 72号住居跡

堆積土は単層である。ℓ 1 は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形はおおむね隅丸方形である。規模は $5.9 \times 5.2\text{m}$ である。周壁は、遺存状態の良い南壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で12cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して西に約30度傾く。床面は、L IV上面に構築しておりおおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は確認できなかった。

遺物は土師器が64点出土した。図示していないが、すべて同一個体である土師器の球胴形の甕が出土しており、時期は古墳時代後期の所産である。

まとめ

本遺構は、5.9mの方形の堅穴住居跡である。住居内の施設などは確認できなかったが、平面形や床面の状況などから住居跡として扱った。所属時期は、遺構検出面や出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。

(中野)

73号住居跡 S I 73

遺構 (図151・152、写真92・93)

本跡は調査区南西側、F～K-15～22グリッドにみられる浅い窪み地形の南側に接する微高地、Ⅲ区南部のE・F-25・26グリッドに位置する。周辺には多くの遺構が密集し、10mほどの範囲内に古墳時代の73・80・96号住居跡、中世の28号建物跡と多数のピットなどが造られている。20号烟跡と重複し、本住居が古い。本跡はL II b ①の上面で暗褐色土の広がりとして周辺と区分できたが、住居の範囲を確定できたのはこの下に堆積するL II b ②上面である。

平面形は整った方形で、カマドの造られている住居北西壁の真北に対する傾きはほぼ45度東を示す。規模は一辻7.9m、L II b ②上面からの深さはもっとも残りの良い東隅で40cmである。床は掘り込んだ面をそのまま使用し、貼床は認められない。床面はほぼ平坦で、側壁は急斜度で立ち上がっている。

堆積土は6層に区分した。堆積状態については、周壁ぎわが高いレンズ状の堆積が認められるところから、自然堆積と判断した。ℓ 3とℓ 4の層離面は凸凹が著しい。

住居施設は北西壁の中央、やや北に寄った位置にカマドが、西隅からは集石が検出されている。カマドは床面を周辺より10cmほど高く掘り残した上に作られている。形態はほぼ同時期と考えられる他の住居跡に造られるカマドと共通し、長大で袖は大きく住居内に張り出す。規模は焚口から煙道先端部まで355cm、両袖を含む幅は145cmで、袖は住居内に160cmほど張り出している。燃焼部の幅は35cm、長さは燃焼部と煙道の区分が明確ではないが、底面の傾斜から110cmほど、燃焼部底面は現状で床面より5cmほど高い。燃焼部底面の焼土化は弱く、カマド堆積土の中にも焼土塊の堆積は少ない。袖の先端部には、20×30cmほどの偏平な河原石が据えられていた、袖の構築土であるℓ 5は、基盤のにぶい黄褐色土に近似している。

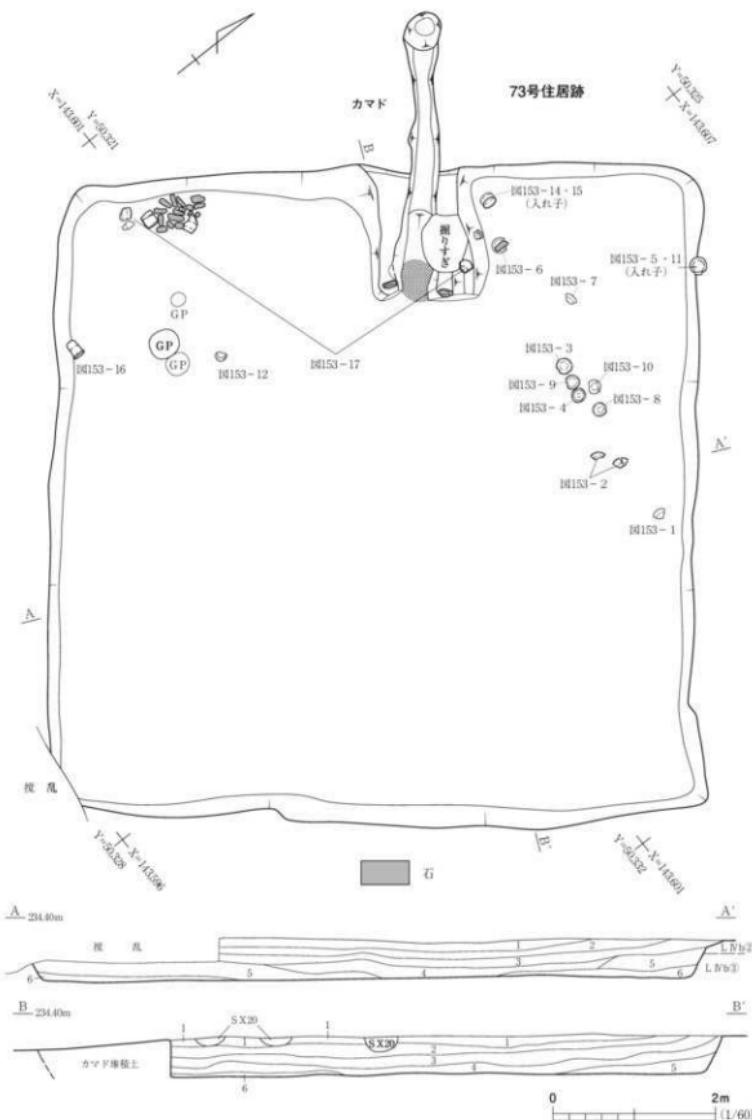
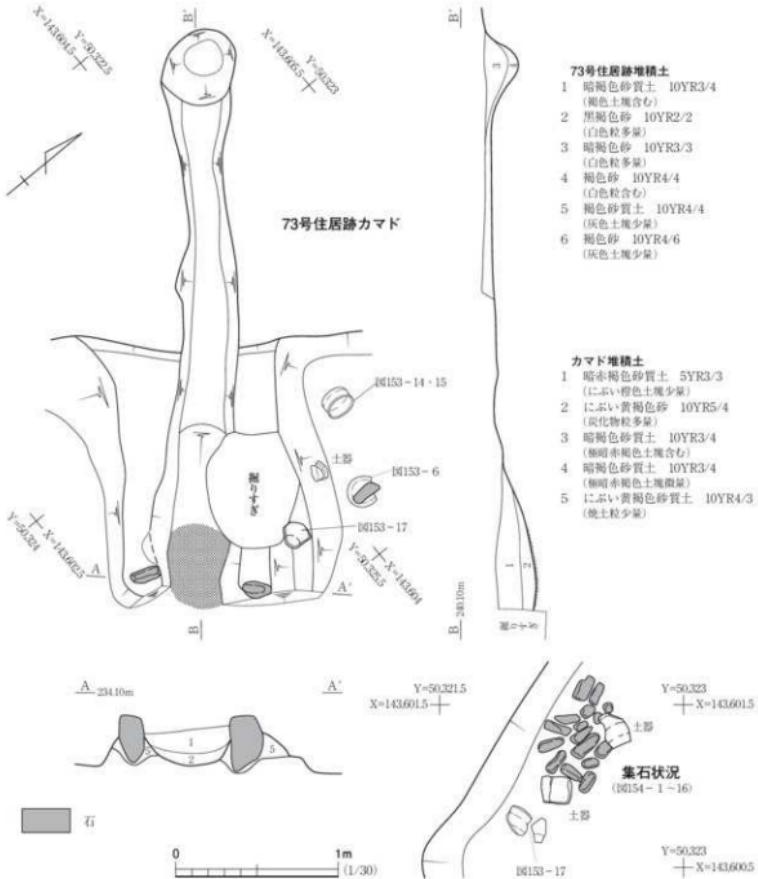


図151 73号住居跡 (1)

集石は長楕円形状の河原石16点で構成され、大きさは幅5~7cm、長さ13~19cmほど、各河原石の平坦な面をほぼ揃えて並べられていた。その範囲は50×60cmほどで、床面から3cmほど浮いた部分に集められている。個々の石には摩耗や剥落などの使用痕跡は認められないが、形状と大きさはほぼ一定し、わざわざこの形態・大きさの石を選んで使っていることがうかがわれる。住居跡に伴う柱穴は確認できなかった。

土器は、ほぼ完形に近い状態で出土したものも多いが、その大半は床面から数cm浮いた部分から出土し、床面から出土したものは認められない。出土位置は住居中央やや北東壁に寄った部分か



ら図153-3・4・8~10の杯が集中して、カマド右袖脇からは14・15が入れ子状態で、北東隅付近の検出面からは5・12が重なって出土している。17は北西隅付近の集石から出土した口縁部と、カマド右袖上から出土した底部が接合した。

遺物(図153・154、写真390・391)

住居内からは図153・154に示す遺物の他、土師器150点が出土した。この中でハケメが認められる土師器壺の破片は22点である。

図153-1~12は土師器の杯である。底部が丸底で、口縁部が大きく外反して開き、胸部と口縁部の境には内外面に強い稜が認められる。底部は深いものと浅いもの、その中间のものが認められる。2は6.2cmと深く、6は5.2cmと浅い。器面の調整は、内面がヘラミガキのち黒色処理、外面は口縁部がヨコナデやヘラミガキ、底面がヘラケズリされるものが多い。1・7の内面には黒色処理はみられず、7ではヘラミガキではなくヘラナデで調整されている。5の底部外面はアバタ状に剥落しているが、一部にヘラミガキ痕が認められる。2の内面、口縁部から下に0.3~1.3cmほどの部分にもアバタ状の器面剥落がみられる。12はいわゆる有段丸底の杯である。口縁部と内面にヘラミガキを施し、内面に黒色処理を施す。1の底面には「×」の線刻がある。

13は高杯の脚部、14・15は入れ子状態で出土した鉢である。14・15の器形は類似し、体部は丸味を有し、口縁部はほぼ直立する。14の厚さは4~5mm、15の厚さは6mmほどである。14の器面調整は内面がヘラナデ、外面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリである。器面調整は丁寧で、器面に光沢があり、内外面とも赤く発色している。15の器面調整は口縁部外面がヘラナデ、体部外面はヘラケズリ、同内面はヘラミガキである。

16は口縁部が短く外反して開く小型の壺である。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面はナデ、同内面はヘラナデである。口縁部直下には丸棒状の工具で付けられた、×状の文様と、ヘラの先端で抉り取ったような刺突が認められる。17は体部がラグビーボール状をなし、口縁部は外傾して開く。器面調整は口縁部外面がヨコナデ、体部外面にはハケメが認められる。18は小型の手捏ね土器である。

図154-1~16は集石に置かれていた石である。形と大きさ、重さがおおむねそろう。いずれにも加工痕や使用痕はみられない。

まとめ

本住居は一辺8mほどの大型の竪穴住居跡で、調査区南西部では中心をなす住居である。カマドは長さが3.5mにも及ぶ長大なものであるが、側壁や底面の焼土化は弱かった。柱穴や貯蔵穴は検出できなかった。住居の北西隅には一定の形状・大きさの石を敷いて、小規模な集石が作られている。この集石は床面から若干浮いた部分に作られていることから、住居廃絶直後または廃絶に伴って作られたものであろう。本住居の機能時期については出土土器の様相からから、古墳時代後期と考えている。

(松本)

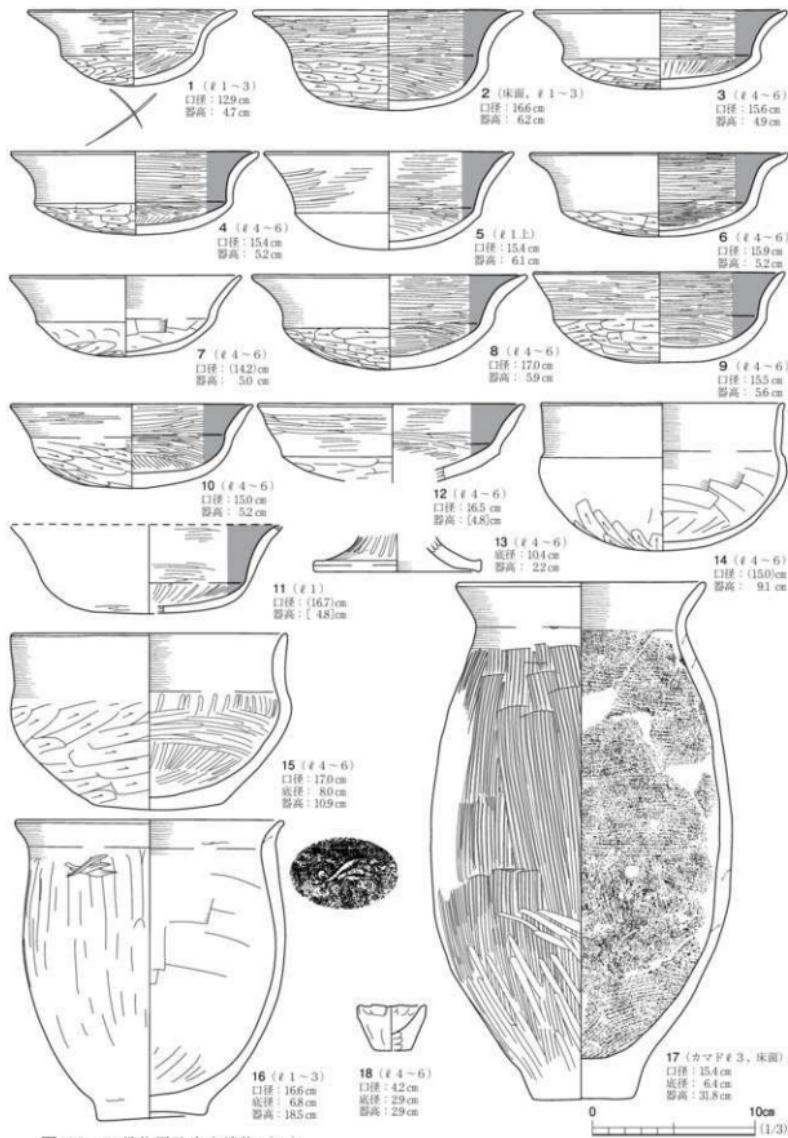


図153 73号住居跡出土遺物（1）

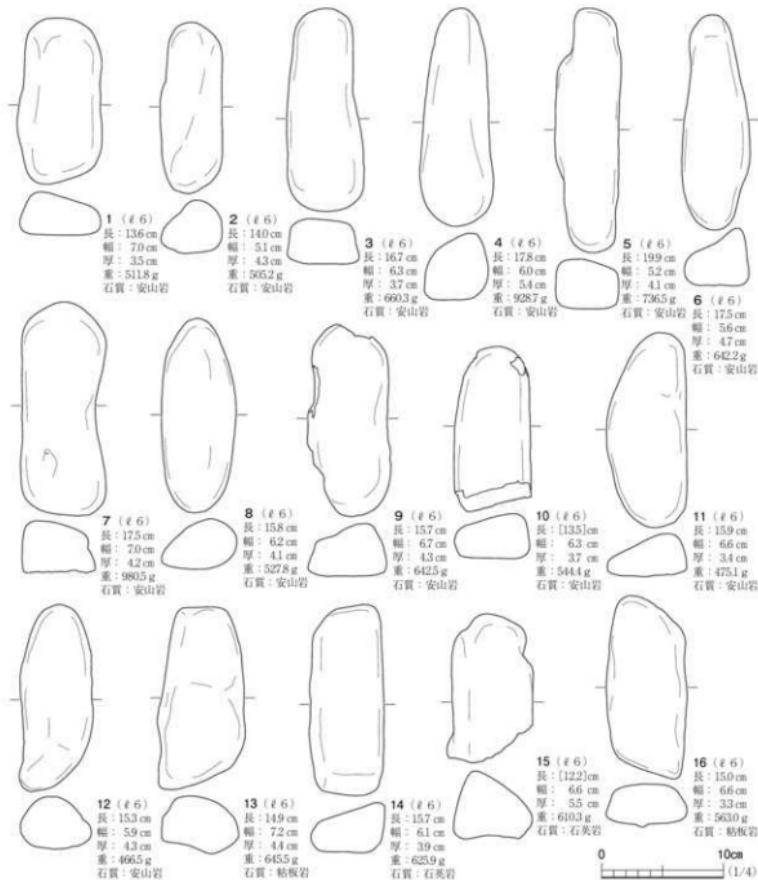


図154 73号住居跡出土遺物（2）

74号住居跡 S I 74

遺構（図155、写真94）

本遺構は、Ⅲ区東南部のF・G-23・24グリッドに位置する。標高235.8m付近の緩斜面に立地する。検出面はL II b②である。重複する遺構は25・30・33号建物跡、24号烟跡であり、本遺構が古い。掘立柱建物跡を検出時に、9mほどの方形の遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査を行った。複数の遺構が重複していることも考えられたが、土層観察の結果1軒の住居跡とし

て扱った。

堆積土は3層に区分した。 $\ell 1$ はL II a③に対応する白色粒子を多く含む灰黄褐色土で自然堆積土である。 $\ell 2$ ・ 3 は黒褐色土と暗褐色土で、自然堆積土と考えている。

平面形は南辺がやや長い台形を呈する。規模は9.2×8.6mである。周壁は遺存状態の良い西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で24cmである。方位は、残りの良い北西壁を基準とするなら北に対して西に約55度傾く。床面は、L II b③下面からL III b上面にかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。微細な炭化物粒が散在していた。

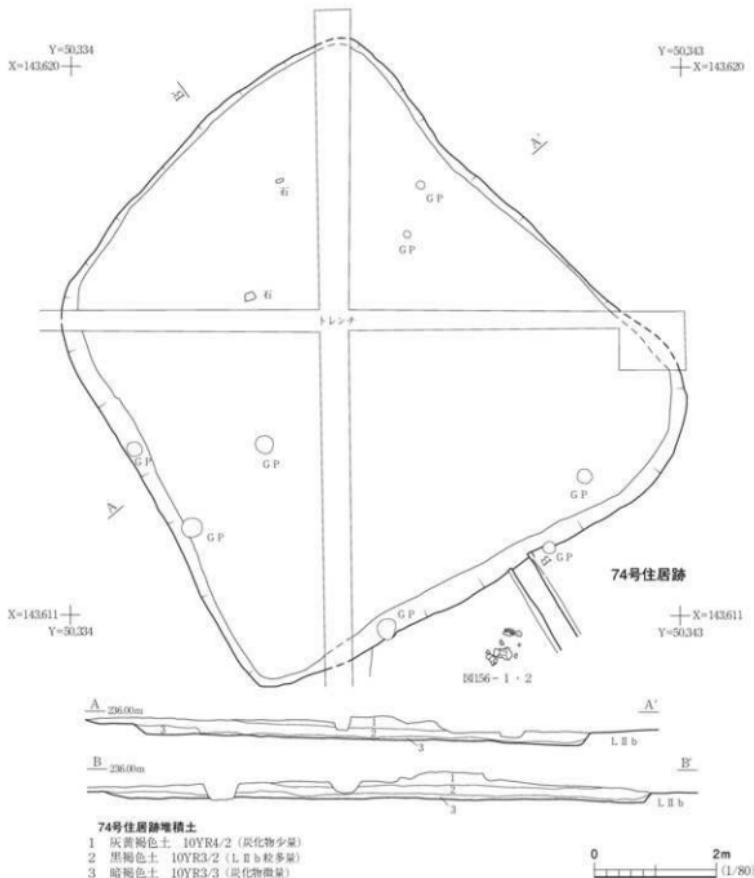


図155 74号住居跡

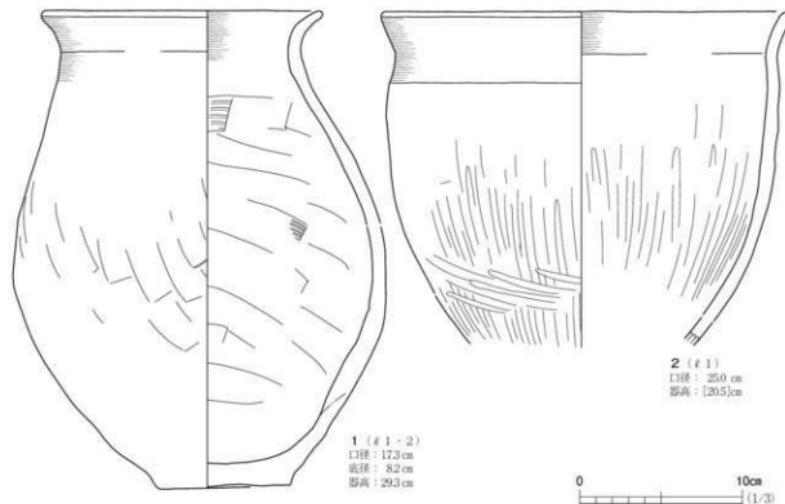


図156 74号住居跡出土遺物

住居内の施設は確認できなかった。

遺物は、住居南部の堆積土上部から住居外にかけて土器が数点まとまって出土した。

遺 物 (図156、写真391)

遺物は土師器255点、須恵器3点が出土した。このうち土師器2点を図示した。

1は、長胴形の壺である。胴部の中ほどより下側がふくらむ器形で、口縁部は緩やかに外反する。全体的にやや歪んでいる。内外面にヘラナデを施す。2は底部を欠損しているが、斐形の瓶である。内外面にヘラミガキを施す。

ま と め

本遺構は9.2mの大型の堅穴住居跡である。平面形は台形を呈する。住居内の施設もない住居跡である。所属時期は検出面や出土遺物から古墳時代後期と考えられる。 (中野)

75号住居跡 S I 75

遺 構 (図157、写真95)

本遺構はV区のU-18グリッドに位置する。標高237.0 m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。検出時に、方形に広がる褐色土の範囲と焼土の集積を確認し、住居跡として調査した。遺存状態が悪く西側を搅乱で失っている。重複する遺構は136号住居跡であり本遺構が新しい。

堆積土は単層で炭化物と焼土粒を含む褐色砂質土である。堆積過程は、自然堆積と考えている。

平面形は隅丸方形と推定している。規模は南北が4.3 m、東西の遺存長が3.8 mである。周壁は

遺存状態の良い東壁側で40度で立ち上がる。壁高はもっとも遺存している北壁で12cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に約10度傾く。床面は、L IVに構築している。おおむね平坦に作られており、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は床面中央からやや南東側に位置する。平面形は円形である。燃焼部は、直径60cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。炉は、床面より5cmほど炉床が高くなっている。焼土化した部分の厚さは6cmである。

ピットは1基確認した。P 1はカマドの北東隅に位置し貯蔵穴と考えている。平面形は梢円形である。規模は90×75cm、深さ40cmである。堆積土は褐色砂質土である。

遺物は、P 1の検出面や壁ぎわの床面から出土している。

遺物(図157)

遺物は土師器が11点出土した。このうち土師器1点を図示した。

図157-1は壺の胴部から底部にかけて遺存する。外面にミガキ調整を施し、赤彩を施す。

まとめ

本遺構は、4.5mほどの隅丸方形の堅穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴をもつ。所属時期は、遺構の検出面や出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。
(中野)

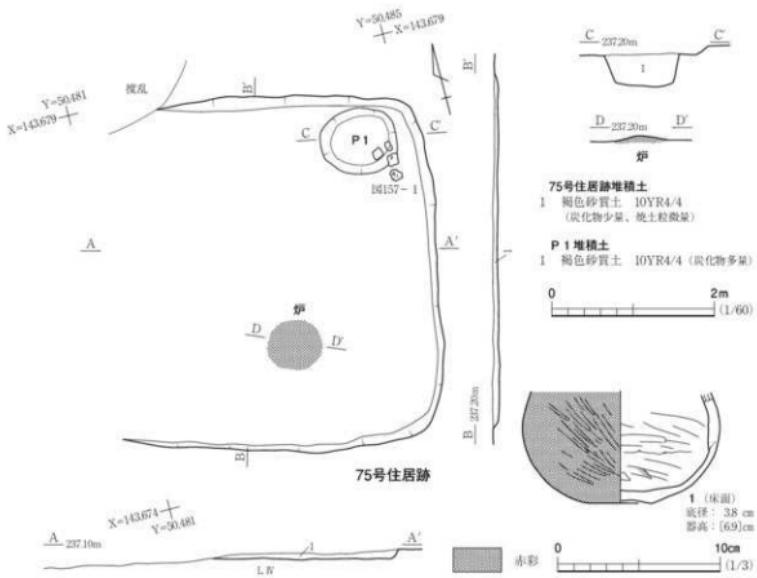


図157 75号居住跡・出土遺物

76号住居跡 S I 76

遺構 (図158、写真96・97)

本遺構は、IV区北部のT-15グリッドに位置する。標高236.9m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複遺構は、141号住居跡で本遺構が新しい。平成27年度調査の際に擾乱の断面に周壁の立ち上がりと焼土や炭化材の集積を確認したことから、住居跡として調査した。

住居内の堆積土は4層に区分した。 ℓ 1はLIIIbに対応する褐色砂質土、 ℓ 2は細かい縞状を呈するにぶい黄褐色砂質土で、自然堆積土である。 ℓ 3は床面直上に堆積する炭化物を多く含む暗褐色砂質土で、人為堆積土と考えられる。 ℓ 3から床面にかけては焼土と炭化材が多く出土している。これらの焼土や炭化材は ℓ 4が堆積した後に形成されることから、住居廃絶のすぐ後に主要な柱や梁を除いた材などを焼却したものと考えている。炭化材の遺存状態などから建物の上屋などを復元できる材は確認できていない。 ℓ 4は暗褐色砂質土で壁ぎわに堆積する自然堆積土である。

平面形はおむね方形である。規模は4.2×4.0mである。周壁は遺存状態の良い南壁側では直立ぎみに立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で65cmである。方位は、残りの良い

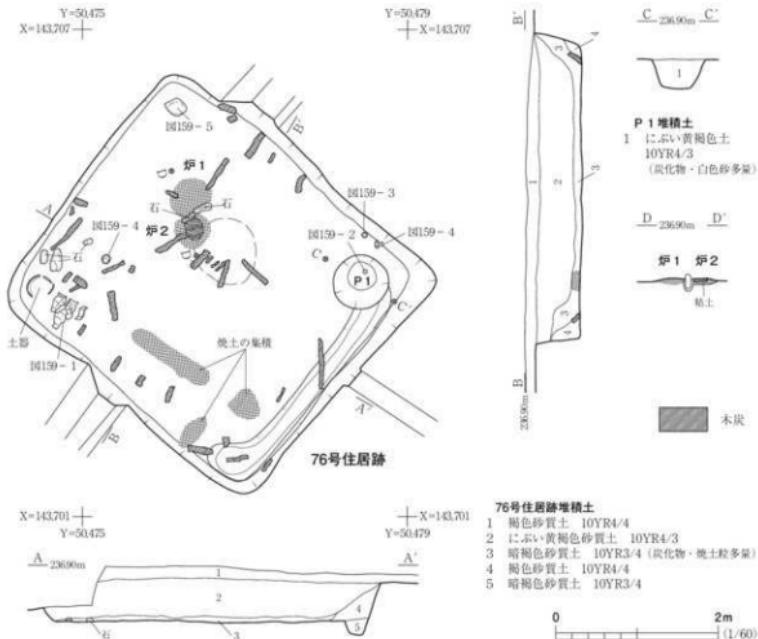


図158 76号住居跡

東壁を基準とするなら北に対して東に約45度傾く。床面は、LIV下面に構築しておりおおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、地床炉とピット、周溝である。地床炉は床面中央よりやや北側に2箇所検出した。北側の炉1が、南側の炉2を壊していることから、炉2が古く、炉1が新しい。炉1の平面形は楕円形を呈する。炉の東側の縁には、 $20 \times 15 \times 8$ cmほどの細長い礫が2個並べて据えている。底面は 53×45 cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは6cmである。炉2の平面形は円形である。炉の中央底面には直径20cmの範囲に粘土が貼られていた。炉

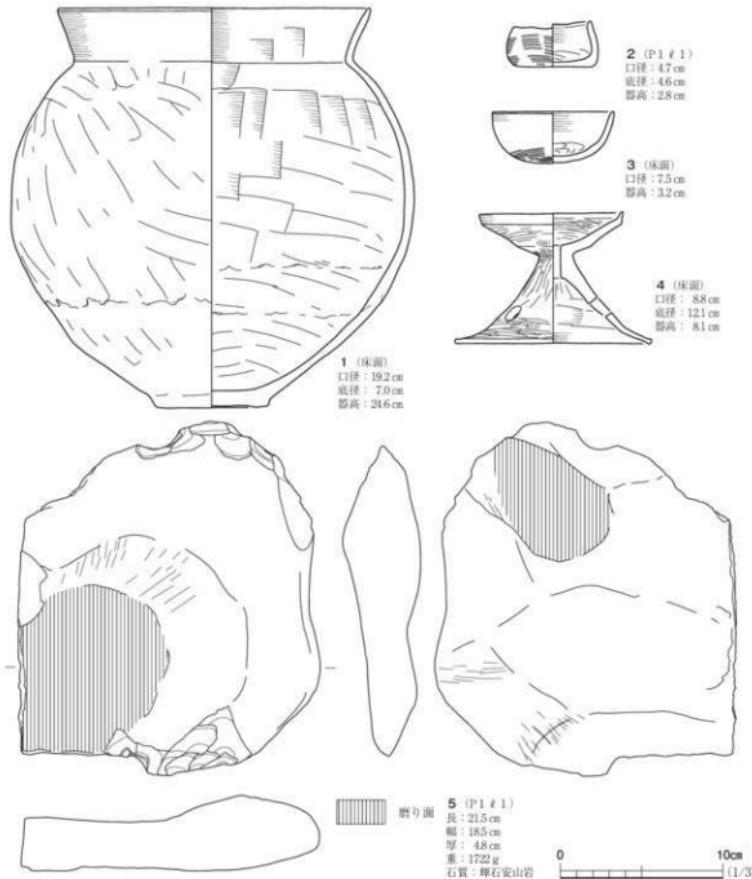


図159 76号住居跡出土遺物

床は直径40cmの範囲にわたって赤褐色から橙色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは4cmである。

ピットは1基確認した。P 1は住居跡の北東隅に位置し貯蔵穴と考えている。平面形は円形である。規模は直径65cm、深さ38cmである。堆積土はにぶい黄褐色土である。底面からは図159-2の小型土器が正立した状態で出土した。

周溝は東壁側で検出している。規模は、全長35m、最大幅33cm、深さ最大で18cmである。

遺物は、住居南西隅の床面からは砾とともに図159-1の甕が出土している。またP 1北側の床面からは、4の器台と3の鉢が出土している。

遺物(図159、写真392)

遺物は土師器109点、石器1点が出土した。このうち土師器4点、石器1点を図示した。

図159-1は球胴形の甕である。平底で、口縁部は「く」字に外傾する。外面にナデ、内面にヘラナデを施す。2は鉢である。口縁部は直立し、やや内側にすぼまる。内面ナデ、外面にはハケメ調整を施す。3は丸底の鉢である。底部外面にはハケメ調整を施す。4は器台である。「八」字状の脚部をもつもので、外面をハケメ調整後にミガキ調整を施す。5は磨石である。表面には使用痕が確認できる。

まとめ

本遺構は、4.2mほどの方形の堅穴住居跡である。堆積土の状況から火災住居と考えられる。住居内の施設は、地床炉が2箇所と貯蔵穴が検出された。2つの炉は、炉1が炉2を壊して作り替えていた。炉2東側の縁には細長い砾が2個並べて据えられていた。所属時期は、出土遺物や検出面などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

77号住居跡 S I 77

遺構(図160、写真98)

本遺構は、IV区北部のI-7グリッドに位置する。標高236.2m付近の平坦面に立地する。検出面はL III bである。重複する遺構は、70号住居跡であり本遺構が古い。70号住居跡の調査中に、4.0mほどの遺構の広がりを確認したため、住居跡として調査を行った。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は褐色砂質土で自然堆積土である。 ℓ 2はピット堆積土で褐色砂質土である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は南側を70号住居跡に壊されているが、北側の周壁の状況から隅丸方形ないし隅丸長方形と推測される。規模は東西が4.7m、南北の遺存長が3.7mである。周壁は遺存状態の良い北壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は残りの良い北壁で16cmである。方位は東壁を基準とするなら北に対して東に3度傾く。床面はL IV上面に構築しており平坦に作られ、踏み縮まりは弱い。

住居内の施設はピットを4基確認した。ピットはいずれも床面中央から北側にかけて位置する。平面形は円形ないし稍円形である。規模は、30~170cm、深さは12~18cmである。いずれのピッ

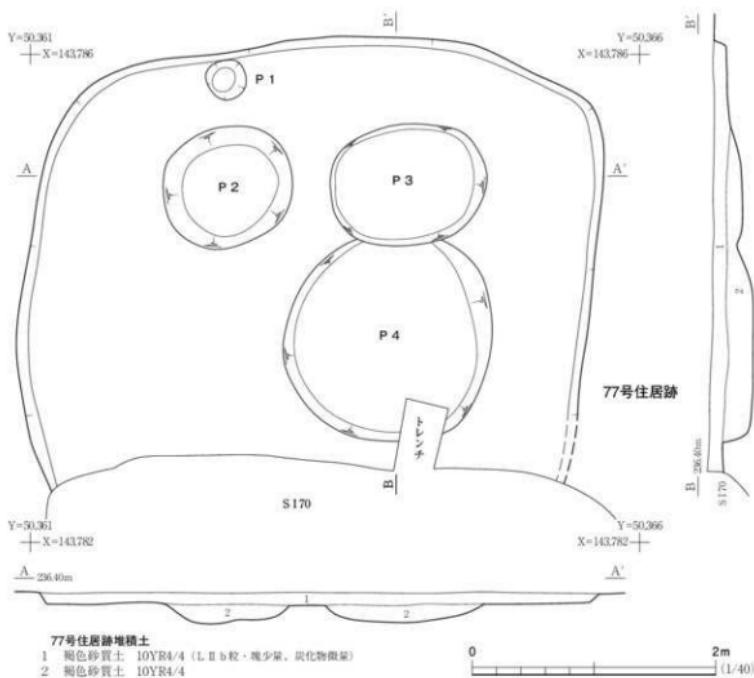


図160 77号住居跡

トも機能や性格は不明である。

遺物は土器片が1点出土した。

まとめ

本遺構は、4.7mの隅丸方形ないし隅丸長方形の堅穴住居跡である。浅いピット以外に住居内の施設は検出されていない。きわめて遺物も少ないとから不明な点が多い。所属時期は、遺構の重複関係から古墳時代後期より古いことは確実である。周辺に位置する68号住居跡と共に点もみられることから、古墳時代前期頃と推測している。

(中野)

78号住居跡 S I78

遺構 (図161、写真99)

本遺構は、I区南西部のJ-15・16グリッドに位置する。この場所は南西側に下る緩斜面にあたり、標高は236.2m前後である。検出層位はL II bである。重複関係は本住居跡が47号土坑より新しく、6号溝跡、3号畠跡より古い。堆積土は2層いずれの層にも炭化物が含まれていた。



図161 78号住居跡

本住居跡は北半分しか遺存していなかったが、平面形は方形ないし長方形と考えている。規模は、東西の遺存長が7.0mである。壁の高さが50cmである。壁は外傾ぎに立ち上がる。床面はやや凹凸がみられる。方位は、東壁が北から8度西に傾く。

遺物は、弥生土器10点、土師器が42点、須恵器1点が出土したが、小片で図示できなかった。

まとめ

本遺構は住居内の施設については未詳であるが、規模からみて住居跡であると判断した。遺構の所属時期は、遺物が破片であるため明確ではないが奈良時代頃と考えている。 (吉野)

79号住居跡 S I 79

遺構 (図162、写真100)

本遺構は、IV区西部のE-12・13グリッドに位置する。標高235.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②～L III bである。63号住居跡西側の検出中に、7.0mほどの範囲に広がる遺構を確認したことから住居跡として調査を行った。当初は、1軒の住居跡として調査を行ったため、重複する172号住居跡の範囲の一部を掘り込んでしまい、周壁の南側を掘りすぎてしまった。重複する遺構は、172号住居跡であり、本遺構が新しい。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は灰黄褐色土、 ℓ 2は暗褐色土で、自然堆積土と考えている。

平面形は方形である。規模は4.7×4.6mである。周壁は遺存状態の良い西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で25cmである。住居の方位は、残りの良い西壁を

基準とするなら北に対して西に約10度傾く。床面は、LⅢからLⅣ上面にかけて構築しておりおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設はカマドとピットである。カマドは西壁中央からやや南側に構築され、遺存状態は悪く、左右の袖基部と燃焼部、煙道となる。堆積土は2層からなる。 ℓ 1は焼土粒を多く含むにぶい黄褐色土、 ℓ 2はにぶい黄褐色粘質土でいずれも燃焼部から煙道に堆積する天井崩落土である。

カマドの規模は、全長90cm、最大幅が110cmである。袖は、地山を掘り残して作り出した基部が遺存していた。規模は、左袖が全長38cm、幅40cm、高さ15cmである。右袖が全長40cm、幅46cm、高さ15cmである。煙道は周壁外側に直交するように短く張り出す形態である。断面形は

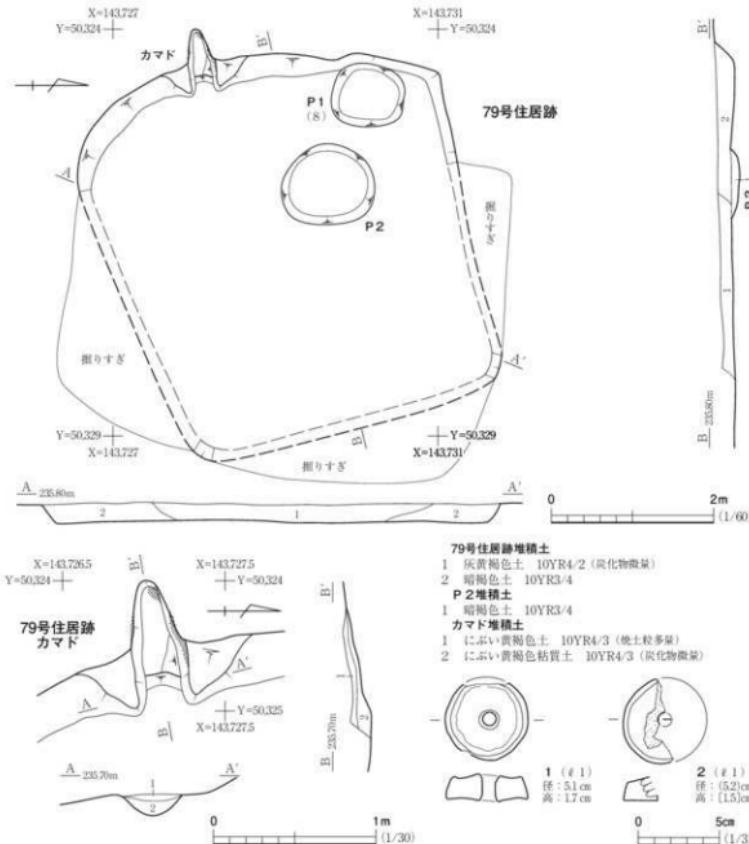


図162 79号住居跡・出土遺物

「U」字状を呈し、底面は緩く煙出しが高くなるように傾斜する。周壁の一部が焼土化しており、焼土化した部分の厚さは1cmである。規模は、全長40cm、最大幅30cmである。燃焼部はほとんど焼けておらず、焼土化はみられない。

ピットは2基確認した。平面形はいずれも楕円形で、底面がすり鉢状を呈する浅いピットである。機能は不明である。P 1はカマドの北側に位置する。規模は、直径90cm、深さ10cmである。P 2はカマドの北東床面に位置する。平面形は円形である。規模は直径115cm、深さ10cmである。ピットの堆積土はいずれも暗褐色土である。

遺物(図162、写真392)

遺物は土製品が2点出土した。いずれも堆積土中から細かく割れた状態で出土している。

図162-1・2は土製紡錘車である。1は完形品、2は半分が遺存していた。

まとめ

本遺構は4.7mほどの方形の堅穴住居跡である。西壁に規模の小さいカマドをもつ。ほとんど遺物が出土していない点や、カマドがあまり焼けていない点が特徴的で、69・70号住居跡などと共に通点が多い。所属時期は、遺構の検出面や出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。(中野)

80号住居跡 S I 80

遺構(図163・164、写真101・268)

本遺構は、Ⅲ区南部のD-25・26グリッドに位置する。標高235.9m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②・③である。77号土坑を調査時に、50mほどの範囲に広がる暗褐色土と焼土集積を確認したことから住居跡として調査を行った。重複する遺構は29号建物跡、77号土坑であり、本遺構が古い。住居内の堆積土は7層に区分した。 ℓ 1はL II a ③に対応する白色粒子が多く含む暗褐色砂質土で自然堆積土である。 ℓ 2～5は暗褐色土の自然堆積土である。 ℓ 6・7は暗褐色土で壁ぎわに堆積する自然堆積土である。 ℓ 8はL II b粒を主体とした貼床の構築土である。

平面形は方形である。規模は5.8×5.5mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は最大で45cmである。主軸方位は、西壁を基準とするなら北に対して東に45度傾く。床面は、中央の2.0×2.0mの範囲では貼床が検出された。掘形底面からの厚さは8cmである。それ以外はL II b下面からL III b上面をそのまま床としている。おおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは北壁中央に作られている。遺存状態は比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。堆積土は5層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色の燃焼部から煙道に堆積した自然堆積土である。 ℓ 2は焼土粒を多く含む褐色砂質土で、いずれも燃焼部から煙道に堆積する焼土粒や炭化物を含む天井崩落土である。 ℓ 3～5はにぶい黄褐色土の袖構築土である。

カマドの規模は、全長147cm、最大幅が210cmである。袖は、北壁に直交するように住居内に

張り出す形態である。左右の袖には、焚口のところに $50 \times 10\text{cm}$ ほど細長い自然礫を 2 個、芯材として据えていた。また左袖の上には $50 \times 25 \times 8\text{cm}$ の平たい川原石が置かれており、おそらくこの石で焚口部の袖石の上に置いて天井材としていたものと推測している。焚口の幅は 30cm である。袖の規模は、左袖が全長 105cm 、幅 107cm 、高さ 42cm である。右袖は全長 100cm 、幅 90cm 、高さ 42cm である。煙道は、短く溝状に住居外に張り出し、煙出しがやや西側に曲がる形態である。断面は「U」字状を呈し、底面は平坦で、煙出しに向かって緩く傾斜している。規模は、全長 60cm 、幅 70cm である。

燃焼部は、床面よりやや低く作られている。底面は煙出しに向かって緩く傾斜している。底面は

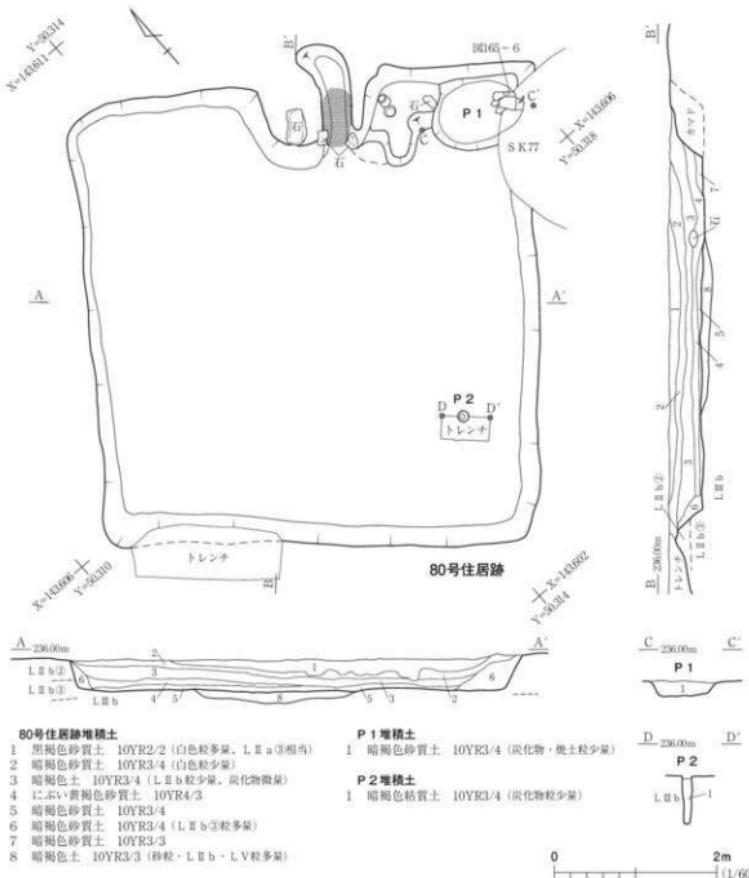


図163 80号住居跡（1）

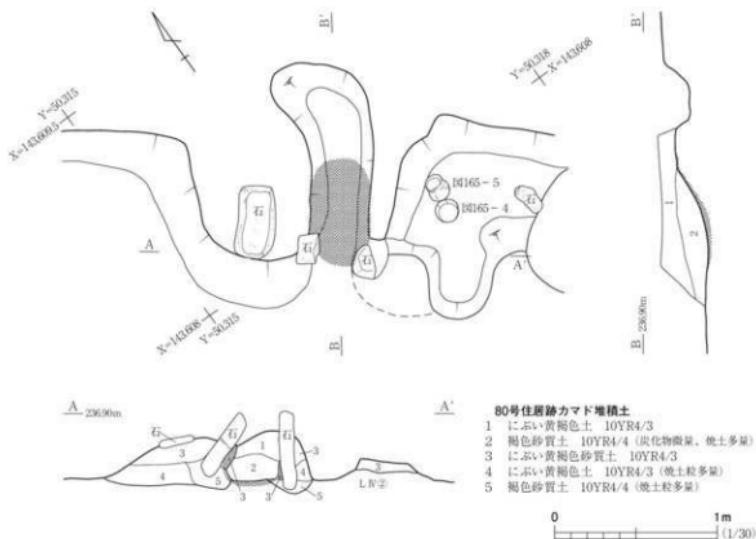


図164 80号住居跡（2）

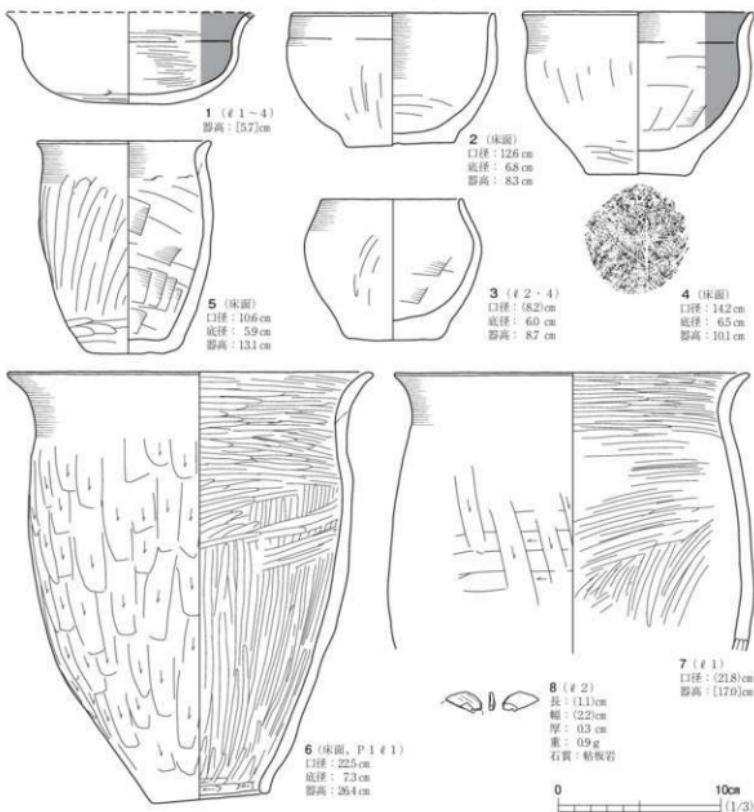
64 × 36 cm の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で 3 cm である。カマドの右袖から P 1 の間には、100 × 90 cm、高さ 20 cm ほどの棚状の施設を検出した。検出当初はカマドの右袖の一部と考えていたが、断ち割りを入れたところ L IV を掘り残して基部を作り出しその上に土を貼っていることから、カマドとは別の棚状の施設と考えている。施設の上面は平坦に作られており、図165-1・4 の土師器が正立して出土した。

ピットは 2 基確認した。P 1 はカマドの南側に位置し貯蔵穴と考えている。平面形は橢円形である。規模は直径 90 cm、深さ 25 cm である。堆積土は暗褐色土である。P 2 は、南東側床面より検出した。円形のピットで、断面が円柱状を呈する。規模は、直径 12 cm、深さ 58 cm である。堆積土は炭化物を含む暗褐色土である。調査では、半裁するのが困難であるため、平面図を作成してから、土層確認トレンチを設けて、断面を確認した。形状や規模などから、細い杭などを打ち込んでいた可能性も考えられる。遺物は、カマドの右袖の棚状施設から、1 の杯と 3 の鉢が正立して出土している。また、P 1 底面から堆積土にかけて 6・7 などの瓶が出土している。それ以外は、堆積土の中層から下層にかけて散在して出土した。

遺物 (図165、写真392)

遺物は土師器が 51 点、石製品 1 点が出土した。このうち土師器 7 点、石製品 1 点を図示した。

図165-1 は、口縁部が外反する丸底の土師器の杯である。脇部が丸みを持ちながらやや膨らむ。内面はヘラミガキ後に黒色処理を施す。



2～4は、土師器の鉢である。2は口縁部が直立し、3は内側に直線的に内傾する。4は頭部からやや外反する。いずれも内面にヘラナデ調整を施す。3は内面に黒色処理を施し、底部には木葉痕が見られる。

5は、土師器の小型の甕である。6・7は、土師器の変形の瓶である。6は外面を縱位にヘラケズリを施す。内面は入念にヘラミガキを施す。7は胴部下半から底部を欠損する。

8は、石製模造品の有孔円板の欠損品である。

まとめ

本遺構は北壁側にカマドと貯蔵穴を持つ、5.8mほどの方形の竪穴住居跡である。右袖とP 1の間に棚状の施設が検出された。所属時期は出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。(中野)

81号住居跡 S I 81

遺構（図166、写真102）

本遺構は、V区のW・X-17・18グリッドに位置しており、標高237.0m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ①～②である。平成27年度の調査時に行った確認調査のトレンチ北壁側に住居跡らしき周壁を確認し、平成28年度調査において、トレンチ北側を拡張して改めて精査したところ4.0mほどの方形の住居跡であることが判明し、調査を行った。重複する遺構は、82号住居跡であり、本遺構が新しい。

堆積土は5層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土、 ℓ 2は黒褐色土で、レンズ状に堆積することから自然堆積土と考えている。 ℓ 3はぶい黄褐色土で塗ぎわに堆積する自然堆積土である。 ℓ 4・5は焼土粒やL II b粒を多く含む貼床の堆積土である。貼床は床面からの厚さが最大で20cmである。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は、4.6×4.2mである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している南壁で20cmである。主軸方位は、西壁を基準とするなら北に対して西に30度傾く。床面は、貼床をL II b下面からL III b上面にかけて構築している。おおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。床面の規模は、4.3×4.1mである。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは新旧2基検出されている。東壁中央に構築されているカマド1と、その北側に作られているものをカマド2とした。

カマド1は、遺存状態が比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。堆積土は12層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土、 ℓ 2は灰黄褐色砂質土でいずれも自然堆積土である。 ℓ 3は焼土粒を多く含むぶい黄褐色土で、燃焼部に堆積する天井崩落土である。 ℓ 4は煙出しピットに堆積した暗褐色土である。 ℓ 5・6は煙道に堆積した暗褐色及びぶい黄褐色の天井崩落土である。 ℓ 6～11はL II b粒を多く含む袖の構築土である。 ℓ 12はカマドの掘形の埋土である。カマドの規模は、全長240cm、最大幅が93cmである。袖は、東壁に直交するように住居内に張り出す形態である。袖には芯材とした礫が2個使われている。右袖の石は長方形の細長い花崗岩の礫で18×11×4cmである。左袖の石は15×12cmほどの角礫である。袖の規模は、左袖が全長83cm、幅52cm、高さ25cmである。右袖は全長104cm、幅54cm、高さ25cmである。

燃焼部は、床面と同じ高さに作られている。底面は55×44cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で1cmである。

煙道は溝状に周壁に直交するように外側へ張り出す形態である。煙道の底面は、燃焼面側から煙出しピットにかけて、住居外に行くにつれて、わずかに高くなるように緩く傾斜している。煙道の規模は、全長140cm、最大幅50cmである。煙道の先端では煙出しピットが検出された。規模は直径50cm、深さ28cmである。

カマド2は、燃焼部と煙道が検出された。堆積土は3層に区分した。 ℓ 1は炭化物を含む暗褐色土である。 ℓ 2は燃焼部に堆積する焼土粒を多く含む暗褐色砂質土である。 ℓ 3は煙道に堆積し炭

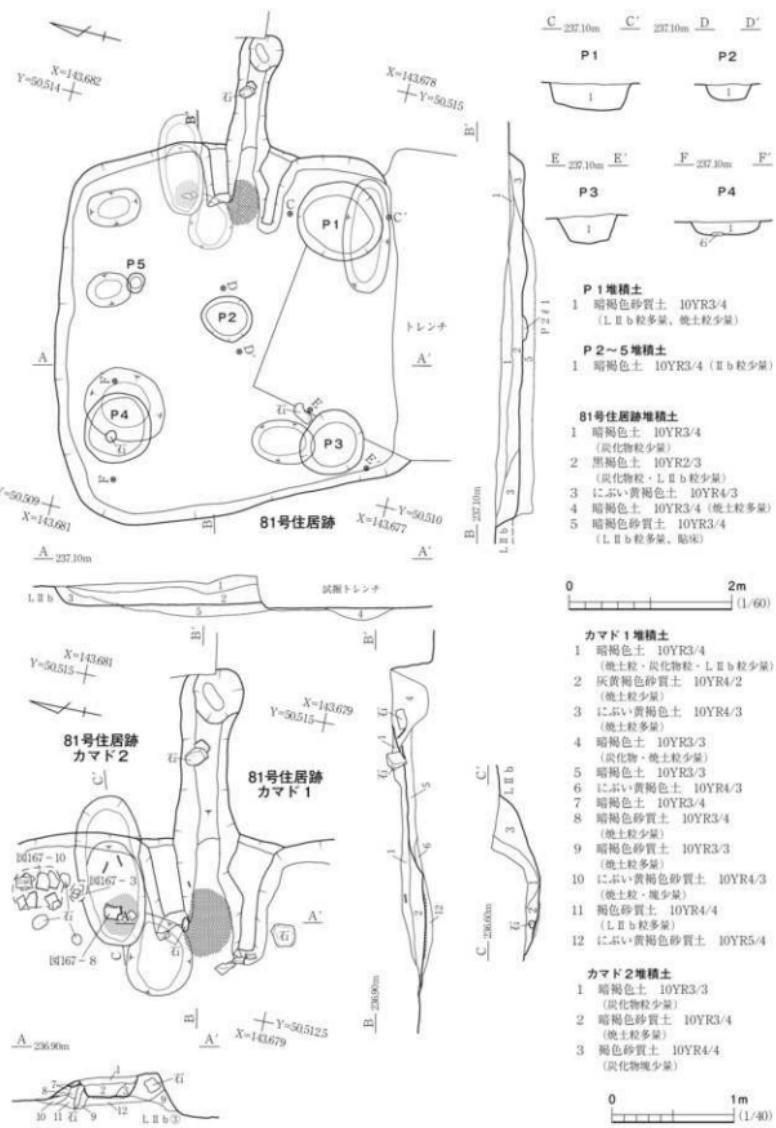


図166 81号住居跡

化物を含む褐色土である。いずれの堆積土もカマドを壊して埋めた人為堆積土である。カマドの規模は、全長123cm、最大幅が53cmである。

燃焼部は、床面より5cm低くなるように作られている。底面は33×28cmの範囲で暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で1cmである。

煙道は周壁に直交するように短く外側へ張り出す形態である。煙道の底面は、燃焼面側から45度の角度で住居外に行くにつれて、高くなるように傾斜している。煙道の規模は、全長40cm、最大幅53cmである。

ピットは5基確認した。P1はカマドの南側に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面は比較的平坦に掘り込まれている。規模は105×95cm、深さ32cmである。P2は床面のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形で、規模は直径65cm、深さ18cmである。P3は南西隅に位置する。平面形は楕円形で85×75cm、深さ34cmである。P4は床面の北西隅に位置し、平面形は円形である。規模は直径85cm、深さ15cmである。底面に14cmほどの円窪が置かれていた。P5は床面北部に位置する。規模は直径25cm、深さ12cmである。P2～5の機能は不明である。ピットの堆積土は暗褐色土で焼土粒やLIIb粒を含む。

貼床を取り除くとピットが5基検出された。ピットは、住居跡の壁ぎわや隅付近で検出している。平面形は主に楕円形である。規模は55～135cm、深さは5～12cmである。堆積土は、LIIb②を多く含む暗褐色砂質土である。

遺物は、カマドの北側の堆積土下部から床面にかけて図167-10の瓶や7～9の甕の破片が散在して出土している。それ以外はカマドの堆積土から比較的まとまって出土している。

遺物(図167、写真393)

遺物は土師器が566点、須恵器6点が出土した。このうち土師器10点を図示した。

図167-1・2は、内面黒色処理を施したロクロ成形の土師器の杯である。2は底部を焼成後に穿孔している。

3～6は土師器の筒形土器である。いずれも口縁部から胴部中位まで遺存している。輪積み痕を残し、胎土内には針状物質が含まれる。

7～9はロクロ成形の土師器の甕である。7・8は口端部がつまみ上がる。

10はロクロ成形の土師器の瓶である。体部に把手が付く。口縁部から底部にむけてすぼまり、胴部中ほどには、棒状の粘土塊を上向きに2個一対になるように取り付けている。底部は外側に張出し、底面が水平になる。底部付近の内面には盲孔の受けを穿つ。

まとめ

本遺構は、隅丸方形の竪穴住居跡である。東壁からは2基のカマドと貯蔵穴が検出された。カマドは、南側へ作り替えている。住居内の堆積土からは、把手付の瓶が出土した。所属時期は、遺構の検出面や出土遺物などから平安時代の9世紀頃と考えられる。

(中野)

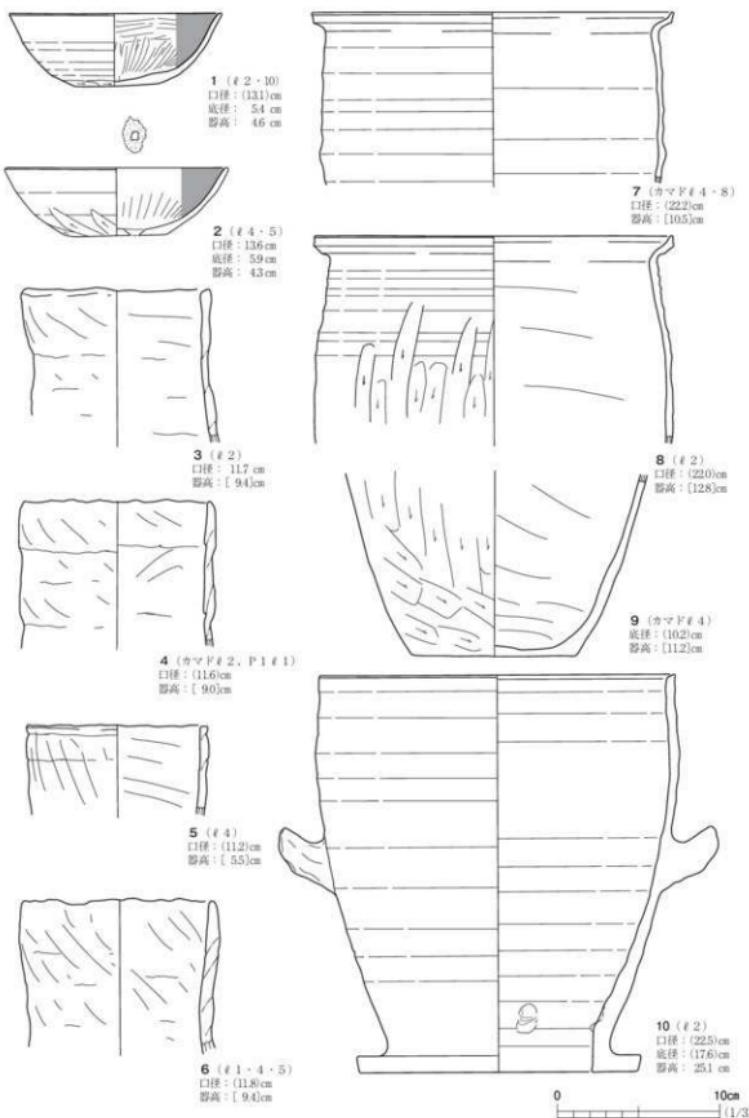


図167 81号住居跡出土遺物

82号住居跡 S I 82

遺構 (図168、写真103・104)

本遺構は、V区北部のX-17・18グリッドに位置する。標高238.2m付近の平坦面に立地する。検出面はL II a ③である。重複する遺構は、81・83号住居跡であり、いずれの遺構より本遺構が古い。東側はすでに工事によって掘削されており、西側の一部のみを検出した。

堆積土は3層に区分した。ℓ 1・2は黒褐色土で自然堆積土である。ℓ 3は暗褐色土で、これも自然堆積土と考えている。

平面形は、方形ないし長方形と推測している。規模は遺存長で3.0mである。方位は西壁で北から56度東を示す。周壁は遺存状態の良い南壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で36cmである。床面は、掘形底面であるL II b ②に構築しており、おおむね平坦に作られ、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は一切確認されなかった。

遺物は土器師が13点出土した。いずれも小片で図示していないが、ロクロ成形の内面黒色処理を施した杯やロクロ成形の甕の胴部片が主体を占める。いずれも平安時代の所産である。

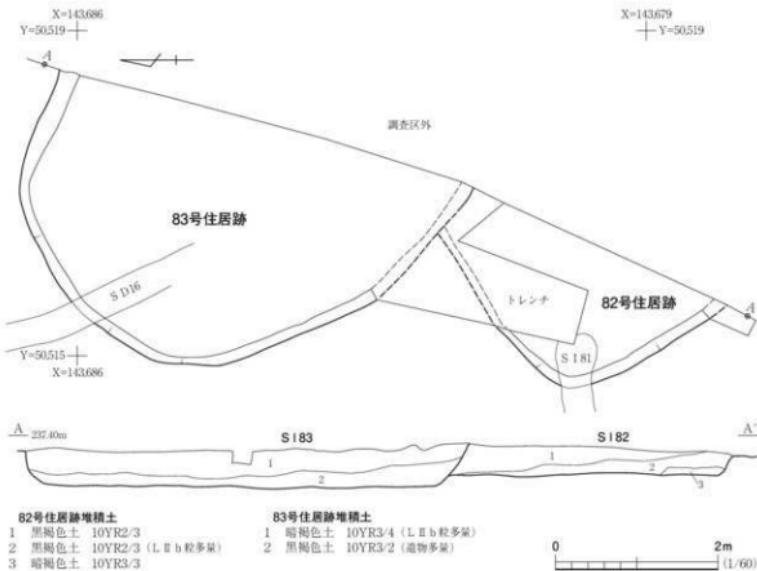


図168 82・83号住居跡

まとめ

本遺構は、方形ないし長方形の堅穴住居跡である。西側の一部分のみが検出され、不明な点が多い。遺構の所属時期は、重複関係や出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。(中野)

83号住居跡 S I 83

遺構 (図168、写真104)

本遺構は、V区北部のX-17・18グリッドに位置する。標高238.2m付近の平坦面に立地する。検出面はL II a③である。重複する遺構は82号住居跡、16号溝跡であり、16号溝跡より古く、82号住居跡より新しい。東側はすでに工事によって掘削されており、西側の一部のみを検出した。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は暗褐色土、 ℓ 2は黒褐色土で、いずれも自然堆積土と考えている。平面形は方形ないし長方形と推測している。規模は遺存長で4.5mである。周壁は遺存状態の良い南壁で50度で立ち上がる。壁の遺存高は北壁で50cmである。床面は掘形底面であるL II b②に構築し、おおむね平坦に作られ踏み締まりは弱い。住居内の施設は確認されなかった。

遺物 (図169、写真393)

遺物は須恵器が141点出土した。すべて同一個体であり、焼きが悪く一見土師器のような外見である。図169-1・2はやや長胴になる甕である。1は胴部上半から底部、2は頭部片である。外

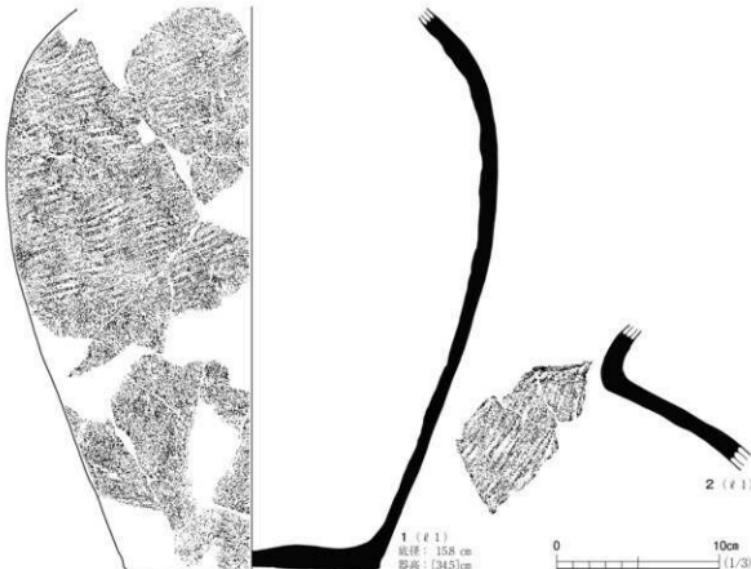


図169 83号住居跡出土遺物

面にはタタキ目の痕跡が確認できる。

まとめ

本遺構は、規模が4.5m以上の方形ないし長方形の堅穴住居跡である。西側の一部分のみが遺存しているにすぎず、不明な点が多い。遺構からは焼成不良の須恵器の甕が出土した。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。(中野)

84号住居跡 S I 84

遺構 (図170、写真105)

本遺構は、V区のX-17グリッドに位置する。標高236.3m付近の南から北へ下る緩斜面に立地する。検出面はL II a③である。15号土坑を調査した際に壁面に遺構の周壁を確認し、住居跡として調査した。重複する遺構は15・21号溝跡で、15号溝跡より古く、21号溝跡より新しい。

堆積土は9層に区分した。ℓ 1は灰黄褐色土、ℓ 2は黒褐色土で、レンズ状に堆積することから自然堆積土と考えている。ℓ 3はL II b粒を多く含む暗褐色土である。北壁側カマドの西側に堆積している。ℓ 4~7は壁ぎわに三角状に自然堆積した暗褐色土である。ℓ 8は貼床の構築土である。

平面形は長方形である。規模は5.0×3.9mである。周壁は遺存状態の良い西壁で70度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している東壁で40cmである。主軸方位は、東壁を基準とするなら北に対して西に15度傾く。床面は、貼床をL II b下面からL III上面にかけて構築しておりおおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは、遺存状態が比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。カマド内堆積土は12層に区分した。ℓ 1は暗褐色土、ℓ 2は灰黄褐色砂質土でいずれも自然堆積土である。ℓ 3は焼土粒を多く含むにぶい黄褐色土で、燃焼部に堆積する天井崩落土である。ℓ 4は煙出しピットに堆積した暗褐色土である。ℓ 5・6は煙道に堆積した暗褐色からにぶい黄褐色の天井崩落土である。ℓ 6~11はL II b粒を多く含む袖の構築土である。ℓ 12はカマドの掘形の埋土である。

カマドの規模は、全長240cm、最大幅が150cmである。袖は、周壁に直交するように住居内に張り出す形態である。左袖には芯材とした礫が1個使われている。礫は長方形の細長い花崗岩で18×11×4cmである。規模は、左袖が全長83cm、幅52cm、高さ25cmである。右袖は全長104cm、幅54cm、高さ25cmである。

煙道は、周壁の外に溝状に長く延びる形態である。先端には煙出しピットが存在する。断面は「U」字状を呈し、底面は燃焼面側から煙出しピットにかけて緩く傾斜している。規模は、全長140cm、最大幅50cmである。煙出しピットの規模は、直径50cm、深さ28cmである。

燃焼部は、床面よりやや高くなるように作られている。底面は55×44cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で1cmである。

ピットはカマドの東側で1基検出した。形態や規模などから貯蔵穴と考えている。平面形は精円

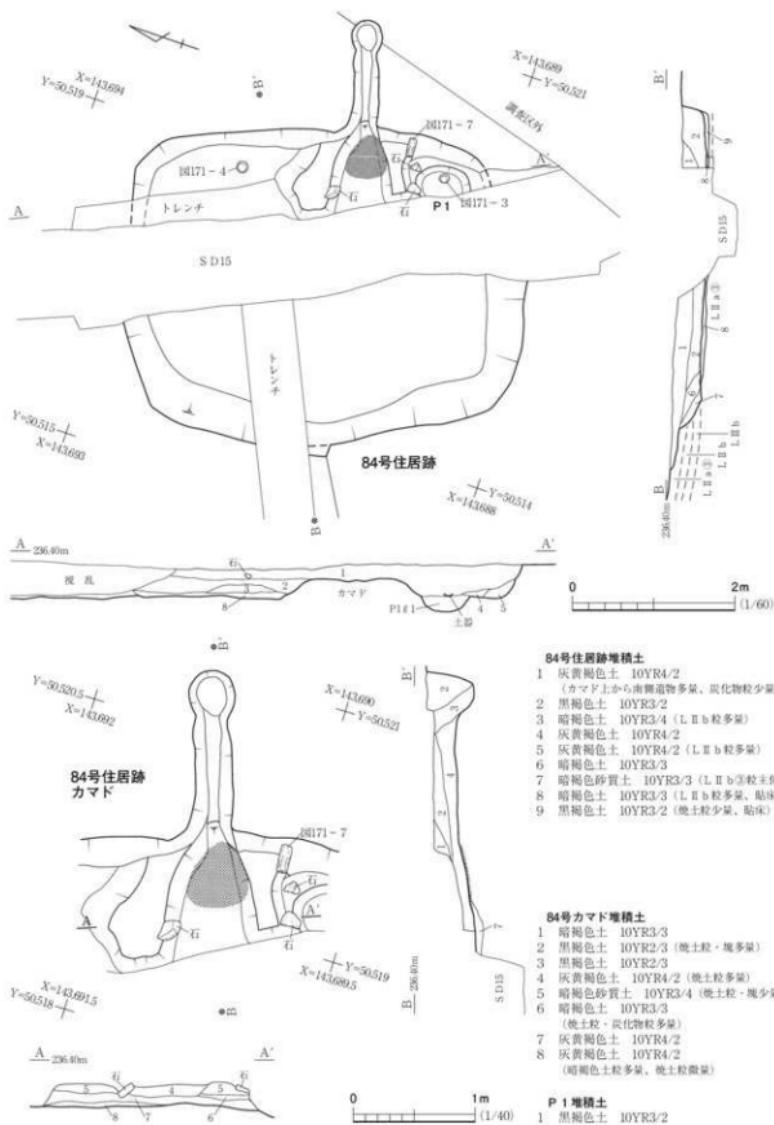


図170 84号住居跡

形で、底面は比較的平坦である。底面からは、図171-3の杯が正立した状態で出土した。規模は長軸65cm、深さ16cmである。堆積土は黒褐色土でL II b粒を含む。

遺物は、カマドの西側の床面やP 1 底面や堆積土、カマド堆積土にかけて出土している。カマド右袖の上部からは土製支脚が出土した。

遺物 (図171、写真393・394)

遺物は土師器148点、須恵器1点、土製品1点、不明鉄製品1点が出土した。このうち土師器6点を図示した。

図171-1～4は、土師器の杯である。ロクロ成形で内面に黒色処理を施す。1・3には油煙の付着がみられる。3の底部には回転糸切痕がみられる。

5は、土師器の筒形土器である。外面に輪積み痕を残し、内外面にナデを施す。

6は長胴形の土師器の甕である。口縁部から胴部上半が遺存する。口縁部は外傾し、単部を面取りする。体部外面にはナデが施される。

7は、土製支脚である。円柱形で中空となっている。

まとめ

本遺構は、5.0×3.9mの長方形の堅穴住居跡である。東壁にカマドと貯蔵穴をもつ。カマドから円柱状をなす土製の支脚が出土した。所属時期は、出土遺物などから平安時代、9世紀頃と考えられる。

(中野)

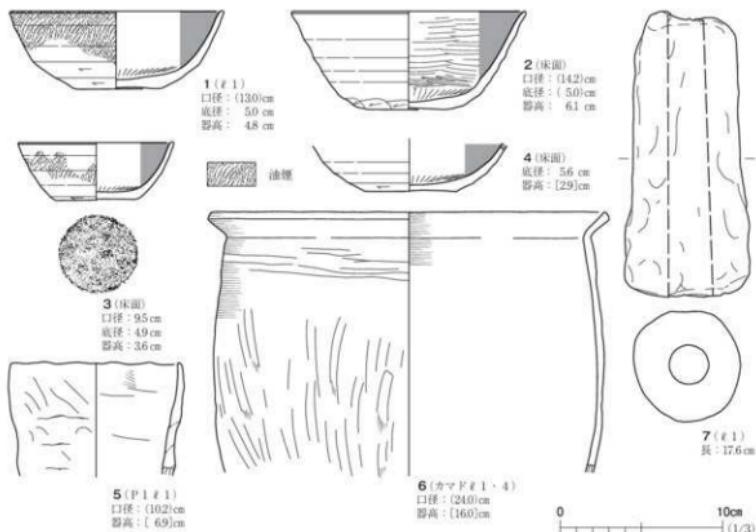


図171 84号住居跡出土遺物

85号住居跡 S I 85

遺構 (図172、写真106)

本遺構は、IV区北部のU・V-19グリッドに位置する。標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はL II b ②～L III aである。重複する遺構は、17号建物跡と52号土坑であり、本遺構がもっとも古い。

堆積土は単層で、炭化物・焼土粒を含む暗褐色砂質土である。堆積過程は不明である。

平面形は円形である。規模は4.5×4.0mである。周壁は遺存状態の良い南壁で20度で緩く立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で15cmである。床面は、掘形底面であるL II b下面からL III aに構築しており、おおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。

住居内の施設はピット1基である。床面北東側に位置する。平面形は円形である。規模は直径35cm、深さ18cmである。堆積土は暗褐色土である。柱痕などは確認できなかった。

遺物は、土師器杯の破片が、P 1の下面から出土している。

遺物 (図172)

遺物は土師器が10点出土した。このうち土師器1点を図示した。

図172-1は丸底の杯である。口縁部が頭部から短く外反する器形である。磨滅しており、調整などは不鮮明であるが、器形の特徴から古墳時代中期の所産と思われる。

まとめ

本遺構は円形の竪穴住居跡である。床面が硬化しているが住居内の施設はピット1基のみで、平

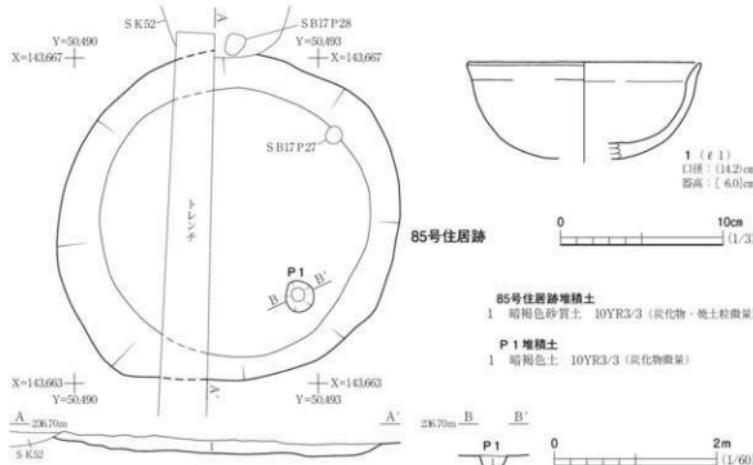


図172 85号住居跡・出土遺物

面形も含めて異質な住居跡である。出土遺物は丸底の杯で、古墳時代中期の所産と考えられ、本遺跡においては唯一の資料である。所属時期は出土遺物から古墳時代中期頃と考えられる。(中野)

86号住居跡 S I 86

遺構 (図173、写真107)

本住居跡は調査区南部、II区のH・I-23グリッド、L II bで検出された。標高235.9mの平坦な場所である。125号住居跡、56・79号土坑と重複し、56・79号土坑より古く、125号住居跡より新しい。

平面形は東西に長い長方形で、西辺に2箇所と南辺の中央に1箇所の張り出しをもつ。規模は3.5×2.7mで、東壁は北から9度東に傾く。壁の高さはもっとも残りのよい部分が30cmで、いずれも65~75度の急な角度で立ち上がる。床面は掘形底面をそのままとしている。ほぼ水平で、北西部が15cmほどの急な段差をもって一段深く掘り下げられている。

堆積土は4層からなる。 ℓ 1は最上部に堆積する暗褐色土、 ℓ 2は本遺構の堆積土の大部分を占める黒褐色土、 ℓ 3は壁ぎわに部分的に堆積する褐色土で、 ℓ 1・2には搅拌された棒名-二ツ岳テフラ(Hr - FP)と考えられる白色の火山灰が少量含まれていた。 ℓ 4は床面中央部に堆積する炭化物をきわめて多く含む黒褐色土層である。この層が堆積する範囲は南北77cmで、東西の範囲はピットによって壊されて明らかでない。投棄などによる人為堆積物と考えられる。

西辺にある2箇所の張り出しが平面形がいすれも隅丸の方形で、西辺の北端と南端に位置する。北端のものは最大23cm、南端のものは最大61cm西側に張り出す。いすれも検出面からの深さが6~10cm、底面は平坦で床面より20cmほど高い。南辺の張り出しが平面形が隅丸の方形で、南壁の中央からやや西寄りに位置し、幅40cm、長さ33cmで、底面は床面より10cm高く平坦で、床面との境はスロープになっている。

住居内の施設は、柱穴2基、性格不明のピット2基が検出された。2基の柱穴は東西に並び、柱間の長さは1.2mである。これをP 3・4とした。床面からの深さは、P 3が39cm、P 4が33cmで、いすれも柱痕跡は確認されなかった。

性格不明の2基のピットは、1基が北壁ぎわのやや西寄りの位置、もう1基が床面中央部のやや南西寄りに位置する。これらをそれぞれP 1・2とした。P 1の平面形は東西に長いやや不整な楕円形で、規模は東西150cm、南北75cm、床面からの深さ22cmである。P 2は南北に長いやや不整な楕円形で、規模は152cm、東西69cmである。P 1は北壁の一部を壊していること、P 2は床面直上に堆積する炭化物層(ℓ 4)と重複しその上面から掘り込まれていることから、いすれも住居が廃絶し埋没が始まる前に掘り込まれたものと考えられる。

遺物は堆積土中から土師器片14点、床面から須恵器瓶類の体部小片が1点出土している。堆積土中から出土した遺物の中には内黒のロクロ土師器の小片が含まれる。いすれも平安時代の9世紀に位置づけられるものである。

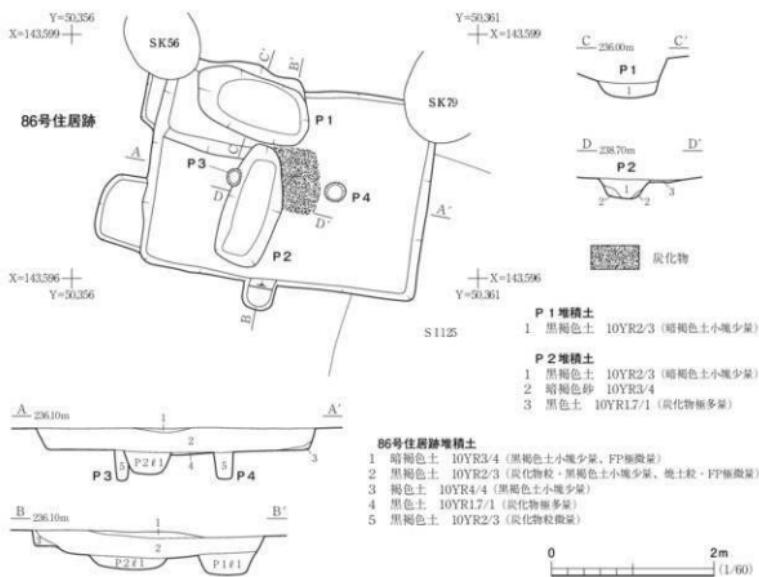


図173 86号住居跡

まとめ

平面形が東西に長い長方形で、東西に並ぶ2本の柱によって上屋を支える構造の竪穴である。カマドや炉をもたない。住居跡として報告したが、前述のようにやや特異な構造で、厳密にいえば住居として機能していたことの根拠に乏しい。年代は、本遺構によって壊されているI25号住居跡が奈良時代の8世紀後葉に位置づけられること、床面や堆積土から出土した土器の小片で時期の判明するものがいざれも9世紀のものであることから、本住居跡は平安時代、9世紀に位置づけられる。

(青山)

87号住居跡 S I 87

遺構 (図174・175、写真108・109・271)

本住居跡は、V区、調査区東部のT・U-21グリッド他のL II bで検出された。標高236.4mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。北に23号建物跡、東に17号溝跡と19号建物跡が位置する。本住居跡と直接重複しないものの、下層には41号煙跡が位置する。

L II b上面で遺構検出を行ったところ、方形に広がる暗褐色土と褐色粘質土の範囲と、東辺中央から東に延びる煙道、北辺からやや離れて焼土粒を多く含んだ円形のピットの範囲を検出し、住居跡と認識して調査を行った。単純にいえば、本住居跡は黒に黄色で検出された。

平面形は方形で、規模は、 $6.2 \times 6.2\text{m}$ である。東辺は北から18度東に傾く。西壁の残りがもっともよく70cmの高さが、東壁の残りがもっとも悪く45cmの高さがそれぞれ遺存していた。壁は四方とも下半が80度ほどの急角度でたちあがるもの、上半は50度前後の傾斜をもつ。西壁と南壁の下半は被熱により赤変していた。床面には貼床が施されている。一部は掘形底面であるL II bをそのまま床面としているが、いずれも水平かつ平坦で、上面は踏み縮まりによって比較的強くしまっていた。

堆積土は5層からなる。上層からℓ 1 a、ℓ 1 b、ℓ 2、ℓ 3、ℓ 4とした。ℓ 1 a・bは褐色とにぶい黄褐色の粘質土で、両層の境は上下に入り組みレンズ状をなさない。これらの層からは遺物はごくわずかしか出土しなかった。色調と土質などの特徴から、これらの層は本住居跡の上屋を覆っていた土屋根や壁が落ちこんだものと思われる。ℓ 2・3は、いずれも黒褐色の粘質土で、炭化物と焼土粒がℓ 2には少量、ℓ 3には多量に含まれていた。また、床面からは多量の炭化材が出土した。これらのことから、本住居跡は火を受けたものの、その際には上屋は崩落せず、まずℓ 3が、次いでℓ 2が堆積し、その後に上屋とその上に載せられていた土屋根が崩落したものと考えられる。ℓ 4は貼床である。貼床は、範囲、深さとも不規則で、粘土の小塊、焼土塊、炭化物粒を含む褐色の粘質土を用いて貼られていた。掘形底面を床面とするのは一部で、貼床の上面は比較的強く縮まっていた。

住居内の施設は、カマド2基、柱穴4基、性格不明のピット1基が確認された。カマドは東壁に付設されていた。両袖と煙道、煙出しピットからなる。北壁からは北に延びる煙道と床面に焼土面のみが検出され、両袖は検出されなかった。このことから、本住居跡のカマドは北壁から東壁に作り替えられたと考えられる。袖が遺存していた新しいものをカマド1、古い方をカマド2とした。

カマド1は、東壁の中央のやや南寄りに位置し、規模は両袖先端の幅が102cm、先端から壁までが65cm、袖の基底部幅が最大で37cm、最小22cm、袖の遺存高が40cmである。両袖の先端に $25 \times 15 \times 10\text{cm}$ ほどの角の丸い直方体形に切り出した凝灰岩を立位に据えて焚口としていた。両袖は、焼土粒をごく少量含む褐色土で構築されており、天井部はすでに崩落していた。焼土面は、両袖先端を結ぶ線からやや外側、左袖寄りの床面に位置し、直径33cmの円形である。両袖の内面も被熱により強く焼土化していた。

カマド1の煙道は東壁に対して直角方向に延び、長さ155cm、幅は最大60cm、最小33cmである。煙出しピットは煙道の先端に前後2箇所が掘り込まれていた。煙道が延長された可能性がある。

カマド1燃焼部の堆積土は3層からなり、最上層に白色粒を微量含んだ黒褐色土、中下層にカマドの天井崩落土である焼土粒と炭化物粒を多く含んだ暗褐色土が堆積していた。

カマド2は、北壁のほぼ中央に位置していたことが、煙道の位置などから推定される。上述したように両袖は遺存せず、床面には直径38cmの円形の焼土面が遺存していた。

カマド2の煙道は北壁に対して直角方向に延び、長さ167cm、幅は最大で49cm、最小で39cmである。煙出しピットは煙道の先端に1箇所掘り込まれていた。

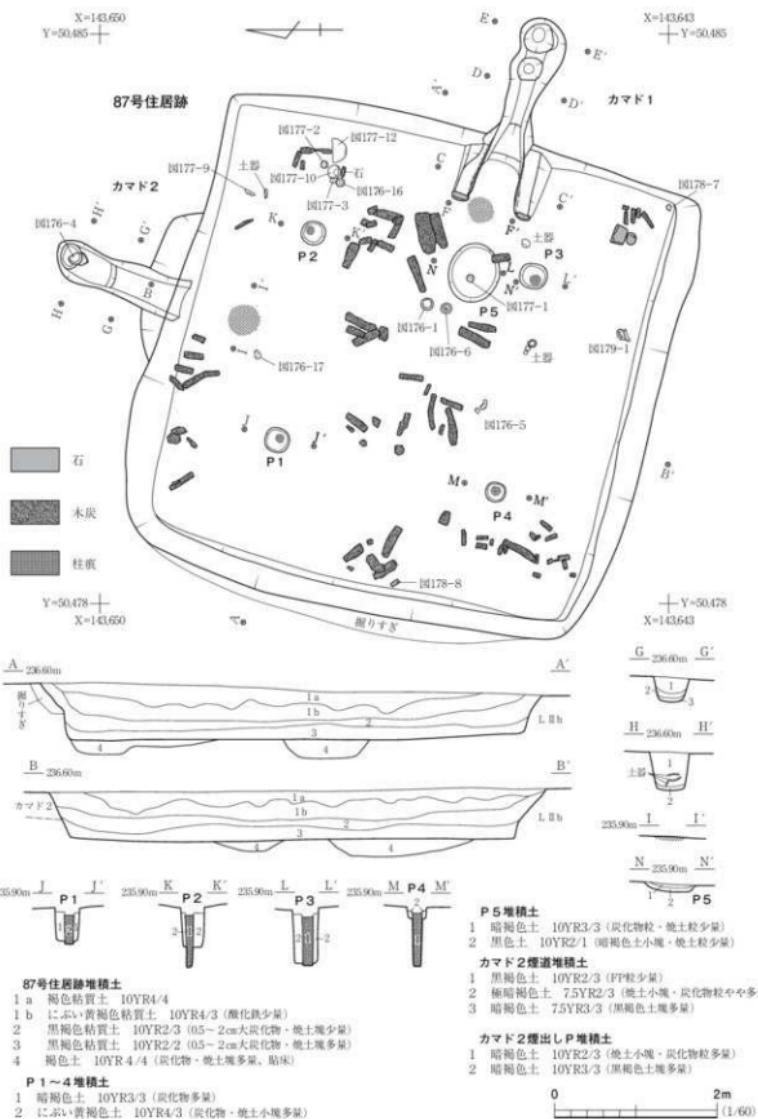


図174 87号住居跡（1）

4基の柱穴は一間四方に配置され、いずれも柱痕跡を残す。これらを北西のものから時計回りにP 1～4とした。柱痕跡間の距離は、北辺から時計回りに2.6m、2.8m、2.7m、2.7mである。床面から柱痕跡の底面までの深さは、P 1から時計回りに46cm、76cm、73cm、73cmである。

カマド1の前面で検出された性格不明のピットをP 5とした。平面形は楕円形で、長径74cm、短径62cm、深さ9cmの規模をもつ。貼床の上面を掘り込んでおり、このP 5の堆積土の上面に炭化物が出土したことから廃絶時には埋められていたと考えられる。

床面とℓ 2・3からは上述した炭化材の他に、きわめて多くの遺物が出土した。出土状況から、床面に土器などが置かれた状態で火を受けたものと考えられる。その他、カマド1の煙出しピット、カマド2の煙出しピット、貼床の埋土から土器が出土している。

カマド1の前面には袖の先端から10～14m離れた位置に3点の杯が口縁部を下にした状態で出土した。西壁ぎわの床面では砥石が1点出土した。床面から出土したその他の土器はいずれも破片の状態でℓ 2・3から出土した破片と接合したものも少なくない。

北東隅から1.2mほど南の床面の東壁から25cmほど離れた位置からは、大型の鉢形の杯を含む5点の杯とこぶし大の石がまとまって出土した。注意されたのは、大型の鉢形の杯が横倒しの状態で床面にあったことである。この点がやや不自然に感じられたため、試しにこの鉢形杯を横倒しに置いてみたところ、底部の重みと鉢形の器形のためどうしても正位の状態に戻ってしまうことがわかった。のことから、この大型の鉢形杯が埋没したときには内部を何かしらのものによって押さえられた、もしくは支えられた状態であり、そのため横倒しの状態を保っていたと考えられる。

南東隅の床面からは、隅にうずまるように台付甕の台部のみが出土した。この土器のみ他の遺物と時期が異なるものである。

この他、ℓ 2・3から破碎した状態の焼成粘土塊が大小あわせて26点出土した。これらは、破断面ではない部分が平坦に整えられていること、平坦な面の一部に塗布された化粧土のようなものが遺存していること、スサを混ぜ込んだ痕跡があること、破断面の一部に木製か竹製の骨組みで木舞と思われるものの圧痕が観察できることから、土壁の断片と考えられる。ただし、壁が立っていたことを示す壁柱穴などが検出されず、本住居跡の四隅に壁が存在した積極的な根拠は見出せない。これらのことから、住居内的一部に施されていた土壁が火災の際に熱を受け焼成されたのではないかと考へられる。焼成粘土塊、もとい土壁片の出土状況からは、それがどこに施されていたかについては明らかにできなかった。また、これらを土壁と考えてよければ、火をうけて被熱・焼成されずに粘土の状態を保った部分もあった可能性があるが、これらが土壁片だと認識されたのは整理途上のことで、発掘現場ではそれに気づくことができなかつた。あるいは、本住居跡の堆積土の上部にあって崩落した土屋根と解釈したℓ 1 a・bには、崩落した土壁の構築土が含まれているのかもしれない。

遺物（図176～179、写真394・395・442・443）

本住居跡からは、土師器608点、須恵器60点、砥石1点、鉄製品1点が出土した。このうち、土

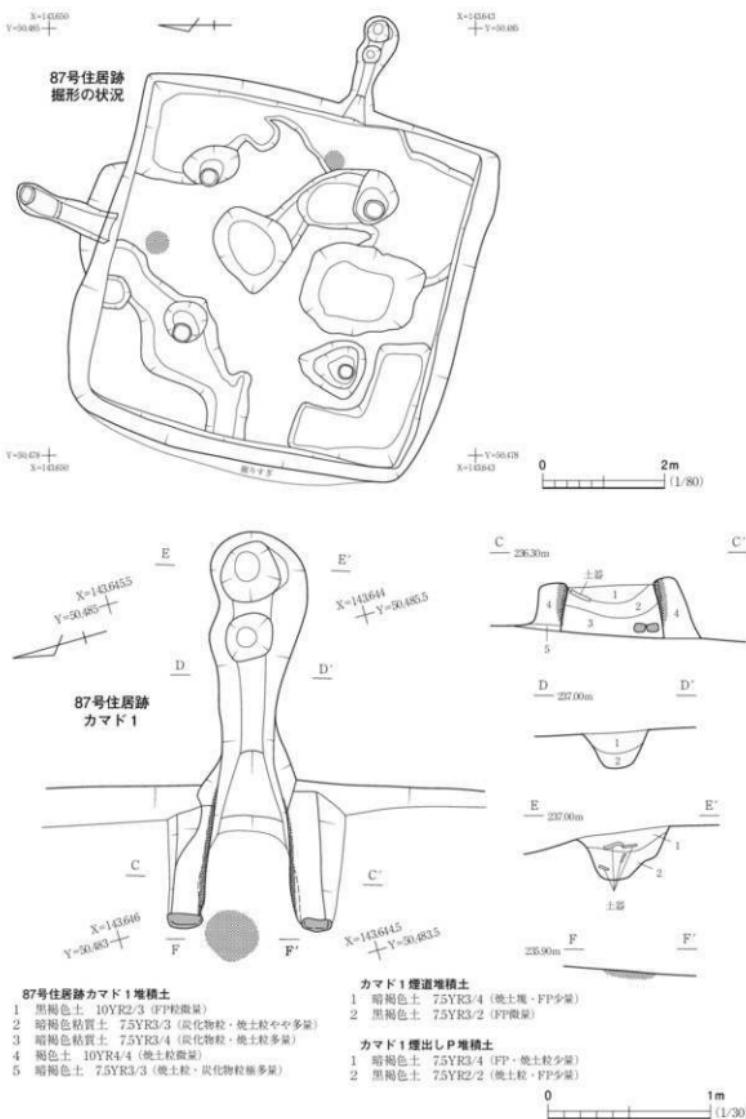


図175 87号住居跡（2）

師器36点、須恵器3点、石製品1点を図示した。この他、上述の土墻片が出土している。

図176-1~17、図177-1~12は土師器の杯である。

このうち、図176-1~9は、口径に対して器高の低い全体として浅い器形で、口径15~17cm、器高4~5cmの範囲におおむね収まること、口縁部と体部の境の外面に段を巡らせるが内面には明瞭な稜をもたないものが多いこと、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にはヘラミガキのち黒色処理を施すことなどの点で、成形と調整が共通する。口縁部外面の一部に輪積み痕を残すものも散見される。底部は、1~5が丸底、7~9が平底で、6は木葉痕を残す円板形の底部をもち、外面の段より下は無調整で、成形時の状態をとどめている。

10・11は外面に段をもたず、底部と体部の境に緩やかな稜を有することの他は、上述の杯と同様の特徴をもつ。

12~17、図177-1~4は、浅い椀形で、内外面に段や稜をもたず、口径10~12cm、器高4cm前後と小型で、内外面全体に横方向のミガキ調整を丁寧に施す杯である。底部は、14が丸底である他はいずれも平底で、底面にもミガキ調整を施す。図176-12は黒色処理をみないが、本住居跡が火を受けたことによる被熱のため黒色処理が失われた可能性がある。13・14は内面にのみ、それ以外は内外面に黒色処理を施す。

図177-5・6は、口径14cmほど、器高6cmほどと大振りな以外、上述の小型の杯と同様の特徴をもつ。6の体部外面には胎土中に含まれていた稻穂がはぜたことによる器面の剥落がある。

7~10は、平底もしくはわずかな凸面をなす平底をもつ鉢形の杯で、口径15~17cmほど、器高5~8cmほど、底径7~8cmほどである。8の外面と底面が丁寧なヘラケズリによって調整される他は、内外面と底面を丁寧にヘラミガキ調整し、7・8・10は内面のみ、9は内外面に黒色処理を施す。10は内面の黒色処理が二次被熱のためかほとんど失われており、本来は外面にも黒色処理が施されていた可能性がある。8の底面には、胎土中に含まれていた稻穂がはぜたことによる器面の剥落がある。

11は大型の杯である。浅い椀形で、底部は欠損により判然としないが平底らしい。内外面ともヘラミガキ調整を施し、内面には黒色処理が施される。

12は大型の鉢形の杯である。平底と内湾する口縁部をもつ。内外面をヘラミガキで調整し、底面はミガキ調整以前のヘラケズリが観察される。二次被熱のためか黒色処理がほとんど失われて判然としないが、本来は内外面に黒色処理が施されていた可能性がある。底部と体部の境をなす稜のあたりには、内面からの一撃による焼成後の穿孔がある。傍で出土した石による穿孔だろうか。

13・14は、小型の壺である。体部から口縁部にかけての破片が出土した。口縁部はいずれも強く外傾する。14の体部外面に被熱により赤変劣化した部分がある。

図178-1~4は大型の壺である。1・2は口縁部から体部上半の一部からの復元である。長胴で、外傾する口縁部をもつ。いずれも外面に塗布・焼成された泥土が斑状に残る。

3は、やや下ぶくれの長胴壺で、口縁部を失す。平底には木葉痕を付す。外面には塗布・焼

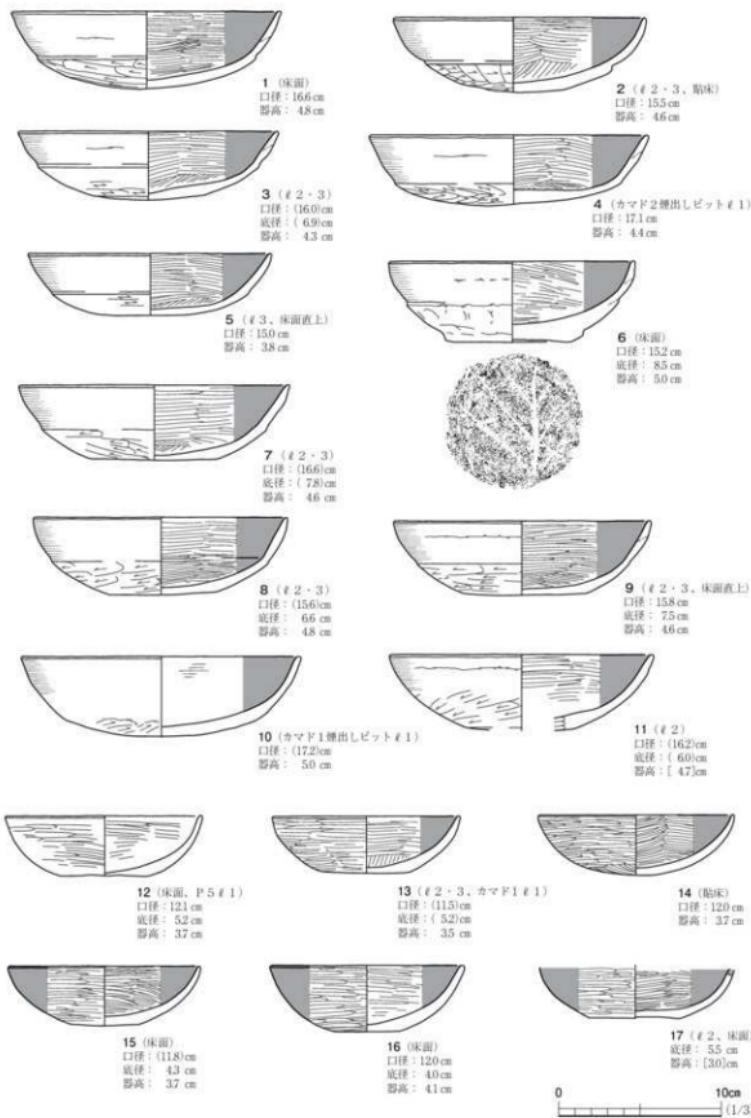


図176 87号住居跡出土遺物 (1)

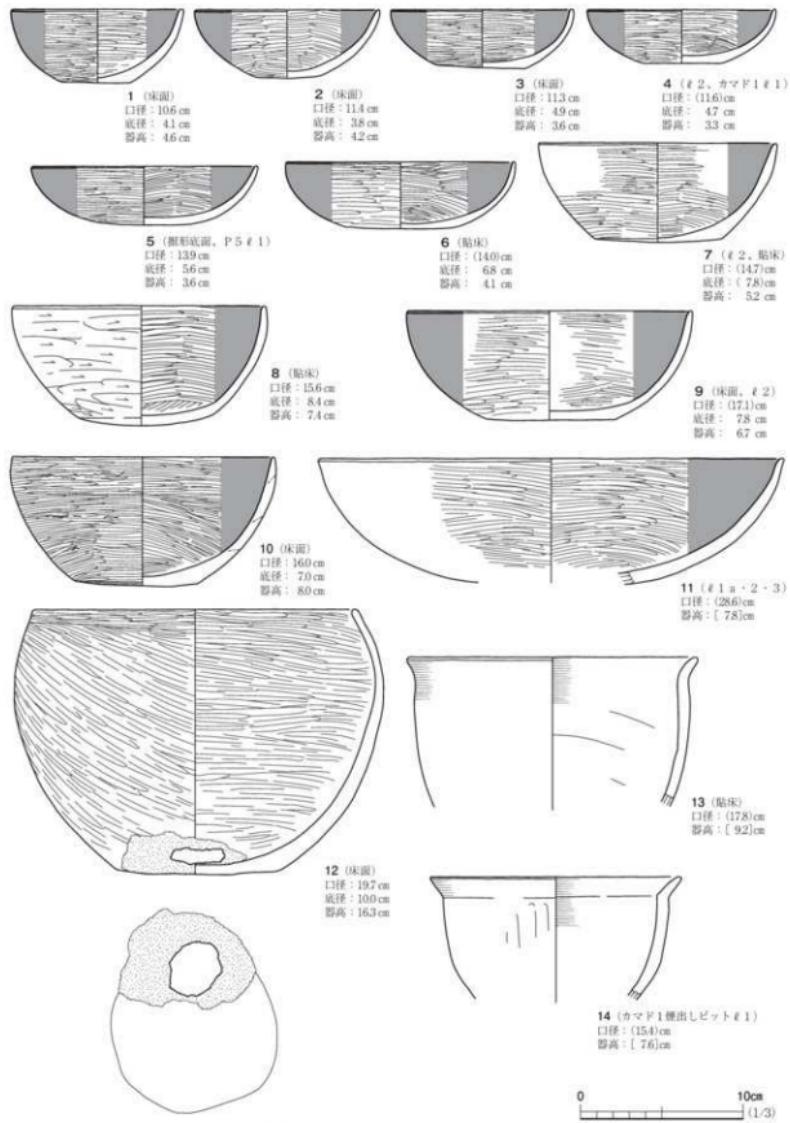


図177 87号住居跡出土遺物 (2)

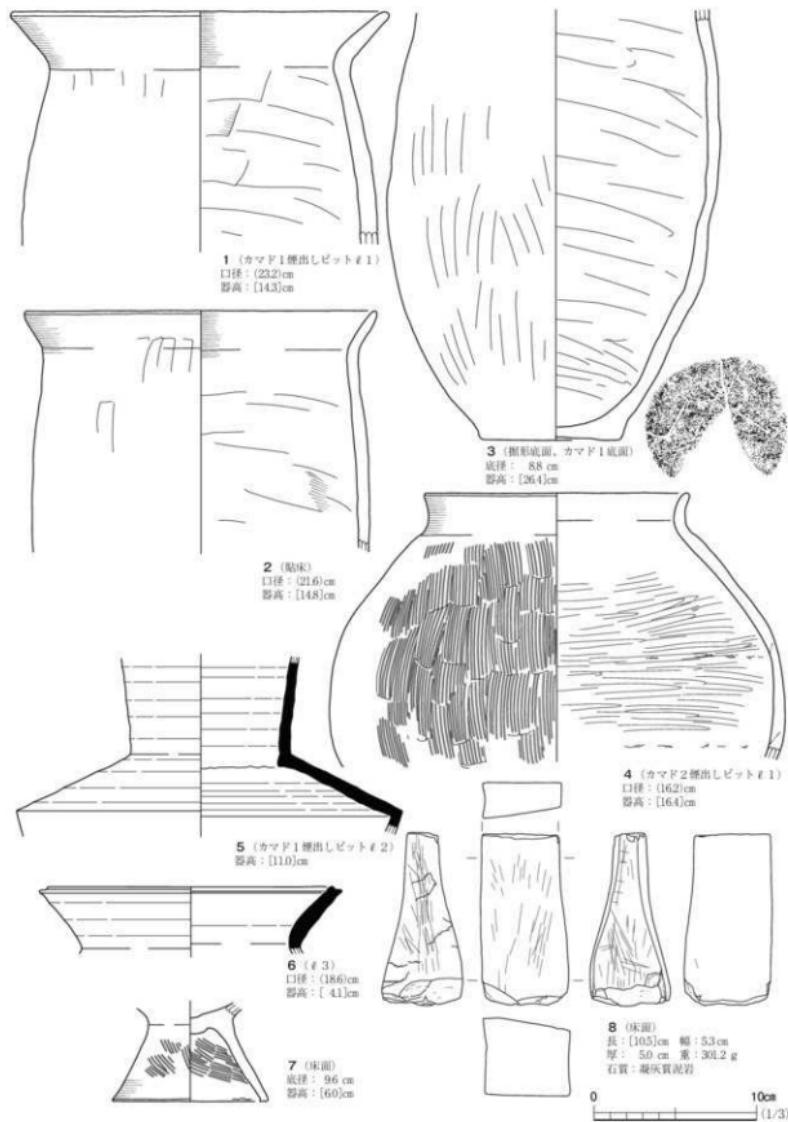


図178 87号住居跡出土遺物 (3)

成された泥土がほぼ全面にみられる。

4は体部上半と口縁部の一部が遺存するのみだが、体部の中ほどに最大径をもつ球洞に、短くやや外反する口縁部が付く器形に復元される。体部外面にはハケメが、同内面には横方向のヘラミガキが施される。

5は須恵器の壺である。明瞭な稜をもって屈曲する肩部、直線的に内傾する体部上半、ほぼ直立する筒形の頸部をもつ。口縁部と肩部の稜線以下を欠失する。外面にロクロナデが比較的明瞭に観察され、体部上半の外面には白色の自然釉が細かい斑状にかかる。

図178-6と図179-1は、須恵器の壺である。図178-6は外傾する口縁部の約半分のみが出土した。口縁端部に狭い水平な受け状の平坦面を巡らす。内面の口縁端部直下には沈線様の凹線が1条めぐる。図179-1は、肩の張る球形の体部と外傾する口縁部をもち、体部外面に平行タタキメ、内面にアテ具痕が観察される。アテ具痕には不明瞭だが間隔の狭い同心円文が施されているようである。口縁部内面にはロクロメが観察される。

図178-7は、土師器の台付壺の台部で、内面の天井部が偏平な半球形に突出する。

8は砥石である。表裏と両側を砥面とし、下面是粗削の凹凸を残し、上面は破断している。主に表裏面が砥面として使用され、上部に行くにしたがって砥ぎ減りのため厚さを減じる。上面の破断面は整形され、一部分が砥石として使用されている。両側面は浅い匙面をなし、多くの細い線状の溝が刻まれている。

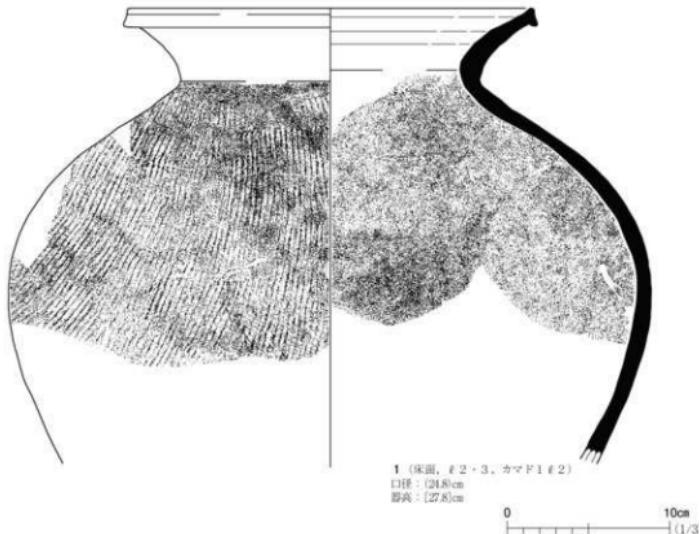


図179 87号住居跡出土遺物（4）

写真442・443は土壁片と考えられる焼成粘土塊である。詳細は遺構の事実記載に記したので繰り返さない。

まとめ

中型の堅穴住居跡で、一間四方の4本柱で上屋を支える構造である。北壁から東壁にカマドを作り替えている。掘形と柱穴が深く、カマドや貼床など住居内の施設が非常に丁寧に造られ、土壁、土屋根をもっていたと考えられるなど、本遺跡で検出された同時期の他の住居跡と比較してとりわけ特別でしっかりとした造りをもつ。出土した土器に、同型同大の杯が多数含まれることも注意される。廃絶時には火を受け、床面から出土した土器のうちの1点、大型の鉢形の杯に焼成後の穿孔があるなど、廃絶の状況にもやや特殊な様相がある。本住居跡の居住者像までは推測しないが、廃絶に際して土器の底部を打ち欠いて穿孔する儀礼・祭祀が行われ、多数の土器を残したまま、故意に火が放たれたと考えられる。

本住居跡の年代は、出土した土器の特徴から奈良時代、8世紀に位置づけられる。(青山)

88号住居跡 S I 88

遺構(図180、写真110・271)

本住居跡は、I区東部のR-13・14グリッドのLIVで検出された。標高235.6～235.8mの東に向かってきわめて緩やかに下る場所にある。烟跡である57号烟跡と重複し、これより古い。北側に89号住居跡、南側に90号住居跡が位置する。

平面形は南北にやや長い隅丸長方形で、規模は、7.3×8.1mである。東辺は北から34度西に傾く。西壁の残りがもっともよい場所で41cmの高さが、東壁の残りがもっとも悪い場所で23cmの高さがそれぞれ遺存していた。壁は四方とも下半が比較的急な角度で立ち上がるものの上部に行くにつれて傾斜が緩やかになる。本住居跡が掘り込まれているLIVが砂質土であるため崩落したものと思われる。床面は東壁に沿って、長さ4.4m、幅1.3mの範囲にのみ貼床が施されていた。全体的に水平で平坦である。

堆積土は3層からなる。 ℓ 1は暗褐色の砂質土で、炭化物粒を微量含んでいた。 ℓ 2は壁ぎわにのみ堆積する褐色の砂質土で、壁の崩落土である。 ℓ 3は貼床の構築土である。

住居内の施設は柱穴4基、地床炉2箇所、貯蔵穴と考えられるピット1基を検出した。4基の柱穴は、四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置され、いずれも柱痕跡は確認されなかった。これらを北西から時計回りにP1～4とした。柱間の距離は、北辺から時計回りに3.5m、4.2m、3.2m、4.2m、床面からの深さは、P1から時計回りに60cm、62cm、47cm、54cmである。

2箇所の地床炉はP1とP2を結ぶ線のやや内側に位置する焼土面として検出された。これらを炉1・2とした。炉1はP1から60cm離れ、平面形は円形で直径45cmである。炉2はP1から155cm離れた柱間のほぼ中間に位置する。平面形は東西にやや長い梢円形で最大部分で56cmである。炉2の東部には細長い2個の自然石が焼土化した部分の外縁に沿うように置かれていた。

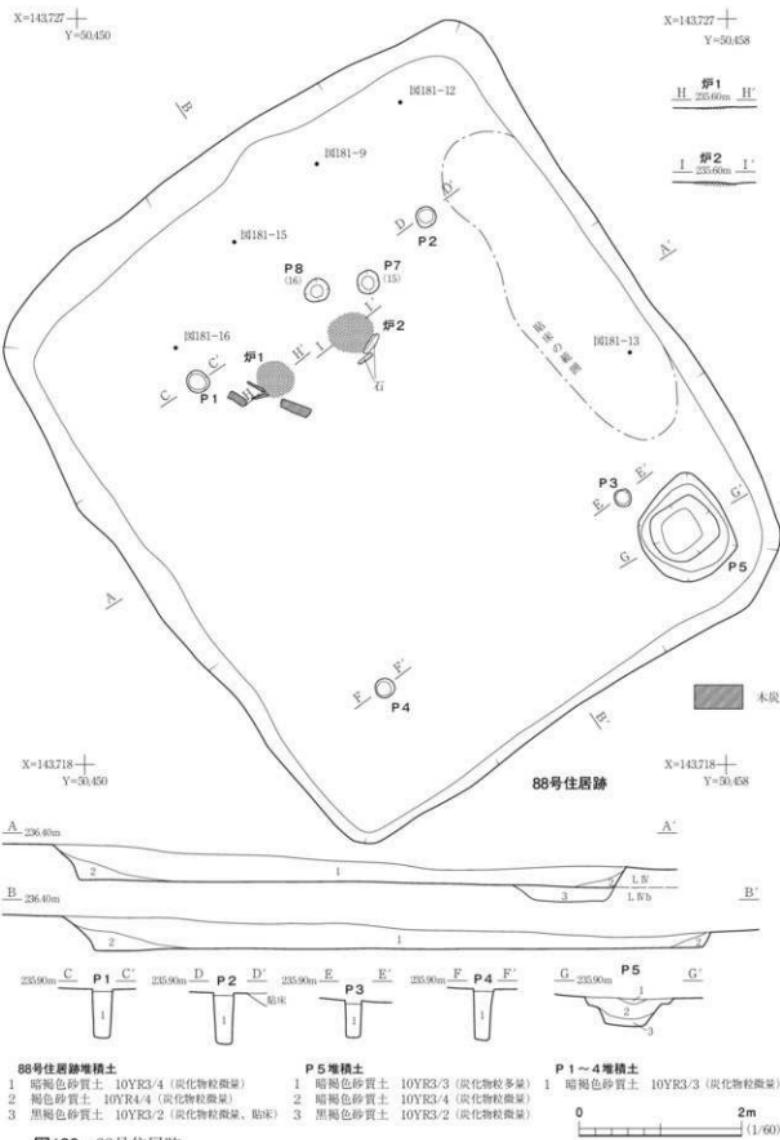


図180 88号住居跡

貯蔵穴と考えられるピットは南東隅で検出された。これをP5とした。平面形はやいびつな隅丸の方形で、規模は東西111cm、南北128cm、深さ34cmである。床面から7~10cm掘り下げた高さに幅7~20cmの平坦面を造らせている。

床面からは4点の土器が出土した。これらは北壁からやや離れた位置に3点、東壁からやや離れた位置に1点あり、この他、P1の北側の床面で敲石1点が出土した。堆積土中からも完形に近い多くの土器が出土した。これらは、住居跡の埋没過程で流入あるいは投棄されたものと思われる。この他、炉1付近で床面からやや浮いた状態で炭化材が出土した。

遺物(図181、写真396)

本住居跡からは、土師器405点、石製品1点が、床面と堆積土中から出土した。このうち、土師器15点、石製品1点を図示した。

図181-1~3は土師器の鉢である。輪台状の平底で、ほぼ直立する口縁部をもつ。頸部外面には粘土紐の積み上げ痕を残して段を作る。体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。

4は、土師器の鉢である。体部の上部を内湾させ、上端をつまみ出して無頭の口縁部とし、小さな平底をケズリ調整によって作り出す。底部付近を除いた外面に赤彩を施す。

5・6は、土師器の鉢である。つぶれた球形の体部の底部にケズリ調整によって平底を作り、外傾する口縁部を載せる。5は頸部外面に粘土紐の積み上げ痕を残した段を有する。

7は、台付きの鉢である。半球形の体部、外傾する口縁部、直線的に聞く台部をもつ。頸部外面には粘土紐の積み上げ痕を残した段を有する。

8は、土師器の小型の壺である。平底で、つぶれた球形の体部に外反する口縁部をもつ。底部付近はヘラケズリ調整によって整形されている。

9は、土師器の壺である。下ぶくれの体部に、ヘラケズリによって整形された平底をもつ。口縁部を欠損する。外面をナデ、内面をヘラナデによって調整する。

10は土師器の壺である。やや凹面をなす平底とつぶれた球形の体部をもつ。体部上半より上部を欠失する。底部付近をヘラケズリ、体部外面をハケメののちナデ、内面をヘラナデ調整する。

11は、土師器の複合口縁壺の口縁部の小片である。複合部の外面に棒状浮文を1本付し、その他に1本分の剥離痕が遺存する。

12は、土師器の壺である。比較的小さな平底で、張りのある体部、外反する口縁部をもつ。内外面ともナデ調整が施されている。

13は、土師器の壺である。張りのある球形の体部と、緩やかに外反する口縁部をもつ。体部下半を欠失する。外面は口縁部下半から体部をハケメ調整し、体部の一部にナデを加える。内面はヘラナデ調整である。体部は二次被熱のためやや赤変劣化し、外面の一部に薄い炭化物が付く。

14は、土師器の有孔鉢である。一孔を穿った円板形の底部と半球形の体部、やや外傾する口縁部をもつ。口縁部の外面には粘土紐の積み上げ痕を残して段を作る。体部内外面をナデたのち、口縁部内外面にのみハケメを加える。

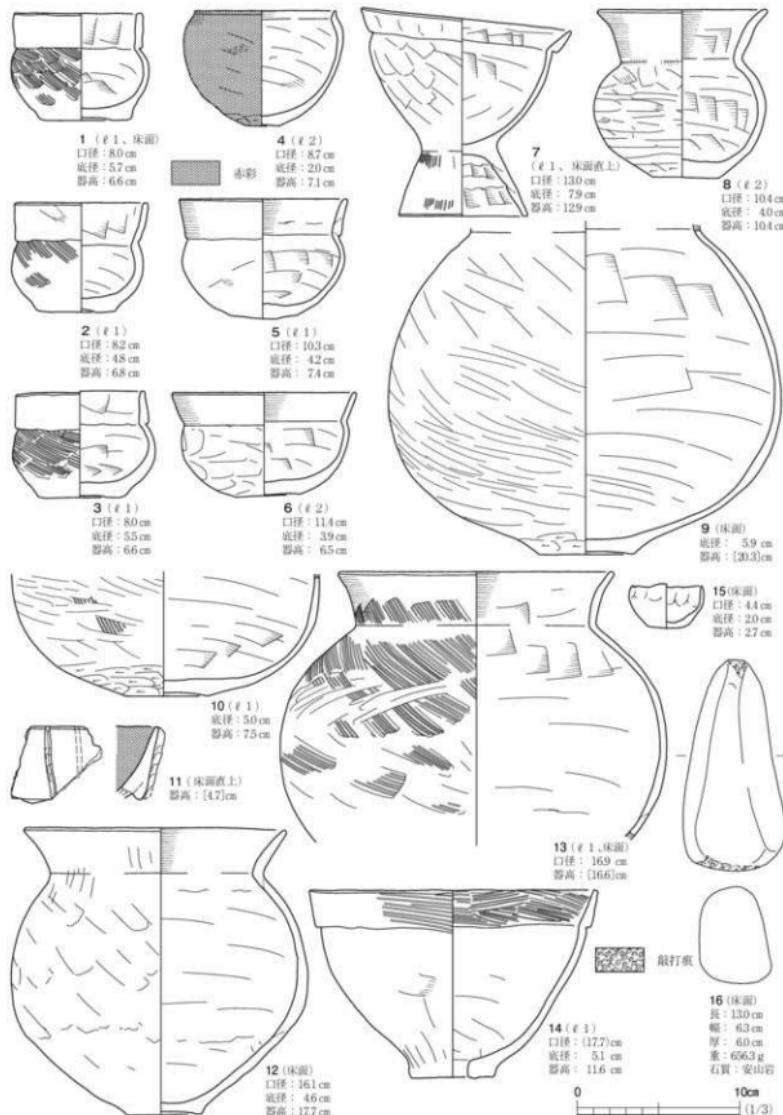


図181 88号住居跡出土遺物

15は、鉢を模したミニチュアである。内外面の口縁部に指頭圧痕がめぐる。

16は、敲石である。やや細長い自然礫の上下端に敲き痕がみられる。

まとめ

比較的大型で長方形の平面形をもち、一間四方の柱で上屋を支える構造の堅穴住居跡である。2箇所の地床炉のうち1箇所には2個の細長い自然石が横倒しの状態で置かれていた。床面と堆積土中から比較的多くの土器が出土した。その特徴から古墳時代前期に位置づけられる。(青山)

89号住居跡 S I 89

遺構(図182、写真111)

本住居跡は、I区東部のR-12・13グリッドに位置する。検出面はLIVである。標高235.9mの平坦な場所に立地する。遺構検出時に、方形に広がる暗褐色土の範囲を検出したことから、遺構と認識し住居跡として調査を行った。重複する遺構はない。南側には88号住居跡、西側には194号住居跡と57号畠跡が位置する。

平面形は東西がわずかに長い隅丸方形で、規模は、3.9×3.7mである。西辺は北から17度東に傾く。壁は、東壁の残りがもっともよい場所で24cmの高さが、南壁の残りがもっとも悪い場所で15cmの高さがそれぞれ遺存していた。壁は四方とも70度ほどの比較的急な角度で立ち上がる。床は、掘形底面をそのまま床面としており、水平かつ平坦である。

堆積土はレンズ状に自然堆積する2層からなる。上層からℓ1、ℓ2とした。いずれも暗褐色の

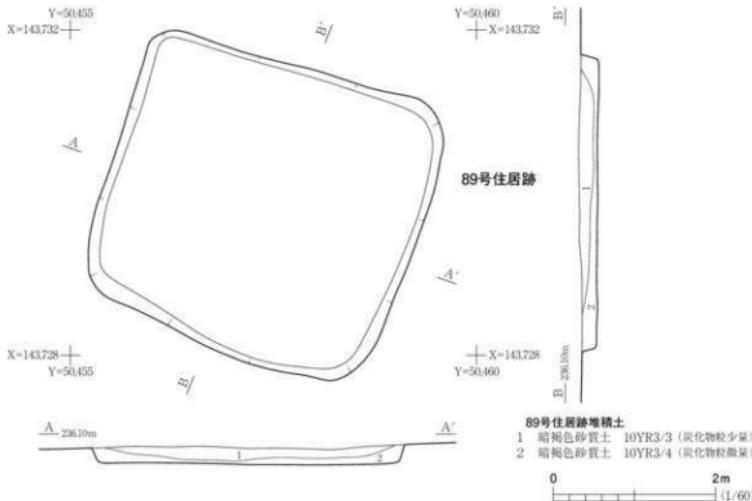


図182 89号住居跡

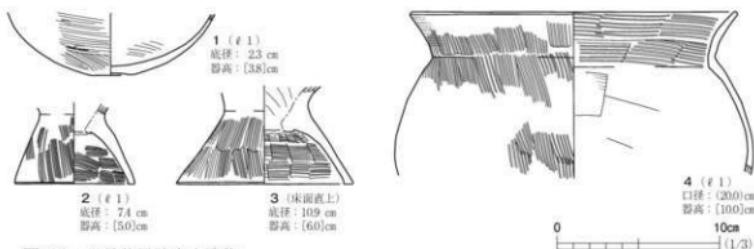


図183 89号住居跡出土遺物

砂質土で、炭化物粒をそれぞれ微量と少量含んでいた。

住居内からは、柱穴、地床炉、貯藏穴などの施設は検出されなかった。

遺物は、住居跡の中央付近、床面の直上から台付壺の台部1点が出土した他、堆積土中から比較的多くの土器片が出土した。堆積過程において周辺から流れ込んだか、廃棄されたと思われる。

遺物 (図183、写真396)

本住居跡からは、土師器217点が出土した。このうち4点を図示した。

図183-1は、土師器の鉢か壺である。凹み底の底部から体部下半が遺存する。器壁が薄く、丁寧な作りである。外面はミガキ調整で、ミガキの下にハケメがわずかに観察できる。内面はミガキ調整だが、単位がわかりづらい。

2・3は土師器の台付壺で、いずれも台部のみが遺存する。いずれも体部がはずれ、筒抜けの台部の天井には剥離面が観察される。いずれも内外面にハケメ調整が施される。

4は、土師器の壺である。球形の体部に「く」字に緩やかに外反する口縁部が付く。口縁部は、外面に縦方向の、内面に横方向のハケメを施したのち、ヨコナデを施す。体部外面にはハケメ、同内面にはヘラナデが施されている。

まとめ

小型の竪穴住居跡で、柱穴、地床炉、貯藏穴などの施設をもたない。床面と堆積土中から比較的多くの土器が出土したもの、いずれも破片の状態であった。出土した土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

90号住居跡 S I 90

遺構 (図184、写真112・266)

本住居跡は、I区のQ・R-14グリッドに位置する。検出面はLIVで、方形に広がる暗褐色土の範囲として検出された。標高236.1mの平坦な場所である。18号住居跡と重複し、これより古い。北側には88号住居跡、57号烟跡、南側には4・5号住居跡が位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は、東西、南北とも最大4.0mである。西辺は北から43度東を示す。壁は残りがもっともよい場所で45cmの高さが、南壁の残りがもっとも悪い場所で29cmの高さがそ

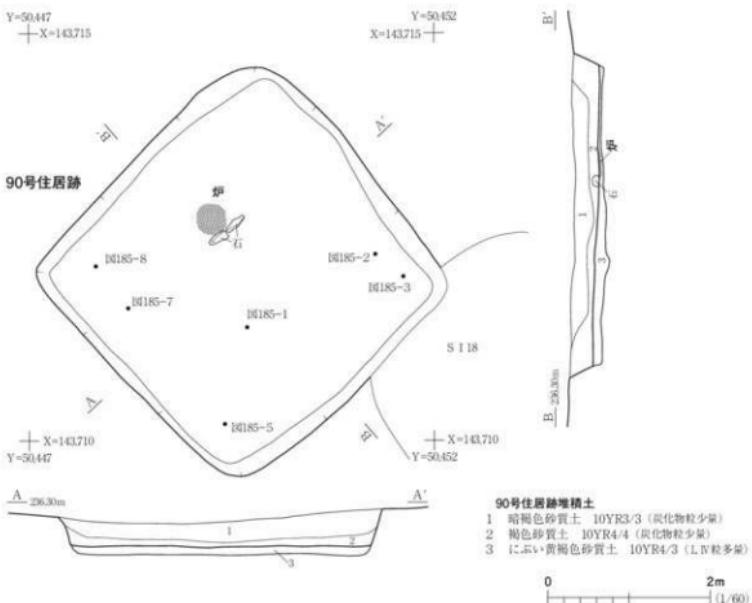


図184 90号住居跡

それぞれ遺存していた。壁は四方とも下半が比較的急な角度で立ち上がるものの、一部は上半の崩落によって傾斜が緩やかであった。床面には、全面に貼床が施されていた。貼床は15cmほどの厚さで、床面は水平かつ平坦である。

堆積土は3層からなる。ℓ 1は暗褐色の砂質土で、ℓ 2は壁ぎわにむかうにしたがい層厚を増す褐色の砂質土である。いずれも堆積状況から自然堆積土とみられる。ℓ 3は貼床である。

住居内の施設は、地床炉1箇所が検出された。柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

地床炉は、床面中央部のやや北壁寄りに位置する直径40cmほどの円形の焼土面である。地床炉のすぐ南東脇には、細長い2個の自然石が長軸方向をほぼ一直線にそろえた状態で焼土化した部分の外縁に沿うように置かれていた。

遺物は、床面と床面直上から6点の完形の土器が出土した。これらは本住居に伴う一括資料である。位置は、北西隅の壁にもたれかかるように台付壺が、西壁からやや離れた位置に小型の壺が、南西隅付近に壺が、床面中央部のやや南寄りに高杯が、南東隅付近に結合器台と器台がそれぞれ出土した。この他、堆積土中から土器片が出土した。

遺物 (図185、写真397)

本住居跡からは、床面と堆積土中あわせて97点の土器が出土した。このうち8点を図示した。

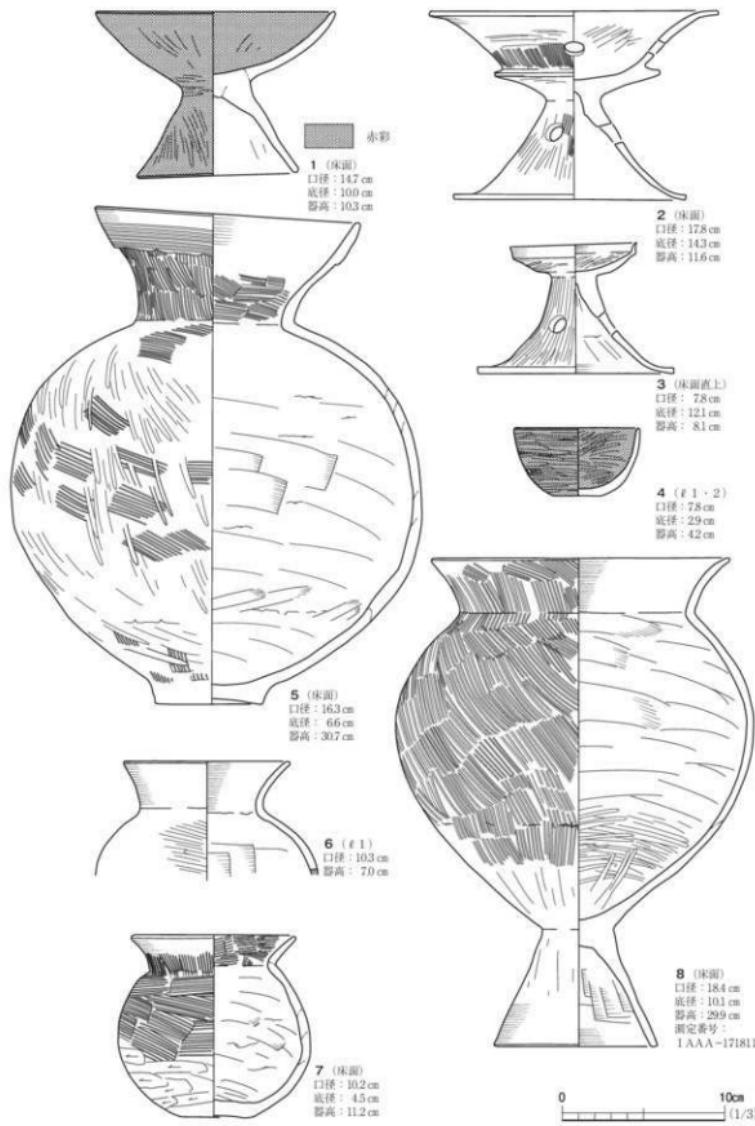


図185 90号住居跡出土遺物

図185-1は高杯である。浅い椀形の杯部と「八」字に開く脚部をもつ。杯部内外面と脚部外面には単位は不明瞭だがミガキと思われる丁寧な調整と赤彩が施される。

2は、結合器台である。脚部は「八」字に開き、受け部とその上に鉢形を載せた形を造る。口縁部は長く外反し、口縁部径は脚部口径を凌駕する。脚部には3方向の、口縁部には4方向の円窓が穿たれる。脚部と口縁の端部は面取りされ、受け部端は丸く収められる。外面には目の細かいハケメのちミガキが、口縁部内面には単位が不明瞭なミガキとナデが丁寧に施される。

3は、器台である。「八」字に開く脚部と浅い受け部をもつ。脚端部は面取りされ、口縁端部は上方につまみ出される。脚部には3方向に円窓が穿たれる。受け部の内外面と脚部外面にはミガキ調整が施される。

4は、鉢である。削り出された小さな平底、椀形の体部、無頭の口頭部をもつ。ハケメのちにミガキが施され、内外面ともにうすく赤彩が施される。

5は、大型の壺である。底面が凹面をなす平底と、球形の体部、外面側に肥厚する複合口縁をもつ。口頭部の内外面にハケメ、体部外面にハケメのちミガキ、体部内面にヘラナデとナデを施す。外面のごく一部に黒色の付着物が薄く斑状にみられる。

6は、素口縁の小型の壺である。体部上半と口縁部が遺存する。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にミガキ、体部内面にヘラナデが施される。

7は、小型の壺である。短く外傾する口縁部と球形の体部、やや小さな平底をもつ。口部内外面と体部上半にハケメ、体部下半にケズリ、体部内面にヘラナデを施す。

8は、台付壺である。緩やかに外反する「く」字口縁、最大径を上半に有する球形の体部、円錐台形の台部をもつ。外面には口縁部から体部にかけてハケメ調整が右肩下がりに施される。内面には、口縁部にヨコナデ、体部にはヨコナデを施したのち、底部付近にミガキを施す。内外面に炭化物が付着しており、これについてサンプルを採取して¹⁴C年代測定を実施した(付章第3節参照)。

まとめ

小型の竪穴住居跡で、2個の細長い自然石を置いた地床炉をもつ。柱穴や貯蔵穴は検出されなかった。床面から多くの土器が出土し、その特徴から古墳時代前期に位置づけられる。(青山)

91号住居跡 S I 91

遺構(図186、写真113)

本住居跡は、V区東部のT-13グリッドに位置する。標高236.3mの平坦な場所に立地する。検出面はL IVである。検出時に方形に広がる暗褐色土の範囲を確認し、住居跡として調査を行った。他の遺構との重複はないものの、東部を攪乱によって大きく壊されている。西側に190号住居跡が、南西側に15・16号住居跡が位置する。

攪乱で壊されているため全形は不明であるが、平面形は方形を基調とする。規模は、南北が最大4.4m、東西はもっとも残りのよいところで3.1mが遺存する。方位は、完全に遺存していた西辺で

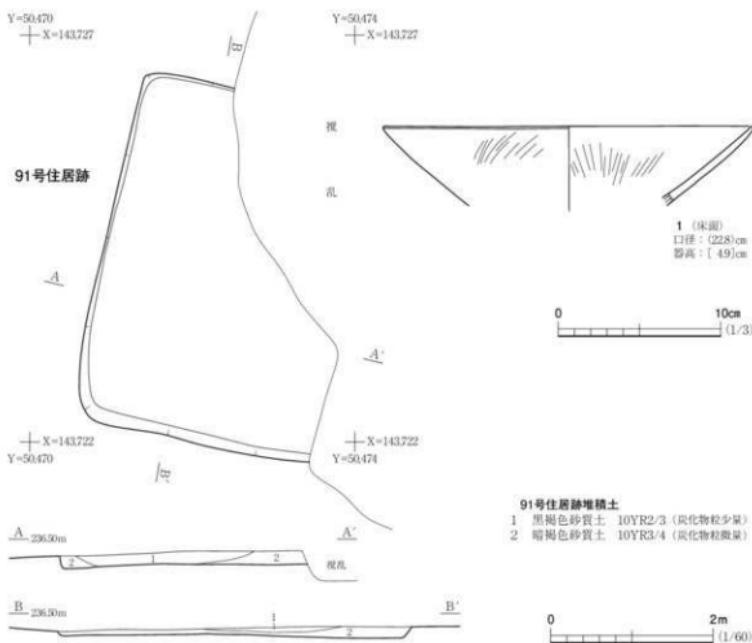


図186 91号住居跡・出土遺物

北から13度東に傾く。

壁は残りがもっともよい南西隅で15cm、北壁の残りがもっとも悪い場所で3cmの高さで遺存していた。壁の立ち上がりが観察できたのは西壁と南壁のみで、西壁は急な角度で、南壁はこれよりもやや緩やかな角度で立ち上がる。床面は掘形底面であるLIVをそのまま床面としていた。踏み締まりなどは確認されないが、水平かつ平坦である。

堆積土は2層からなる。上層からℓ1、ℓ2とした。ℓ1は黒褐色の砂質土で、ℓ2は壁ぎわにむかうにしたがい層厚を増す暗褐色の砂質土である。レンズ状に堆積しているようにも観察されることから自然堆積土と思われる。

床面から、柱穴、地床炉、貯蔵穴などは検出されなかった。

遺物は、遺構の残りが悪いこともあって非常に少なく、床面と堆積土中から少量の土器片が散在して出土した。

遺物 (図186)

本住居跡からは、土師器36点が出土した。このうち1点を図示した。

図186-1は高杯である。出土したのは杯部の一部のみで、脚部は欠失している。杯部上半から

口縁部まで直線的に外傾し、内外面ともミガキ調整が施されている。

まとめ

小型の堅穴住居跡で、柱穴、地床炉、貯蔵穴などは検出されなかった。出土した土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。(青山)

92号住居跡 S I 92

遺構 (図187、写真114)

本遺構は、I区北東部のV-13・14グリッドに位置する。標高236.6m付近の南から北に下る緩斜面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構はない。

堆積土は3層に区分した。ℓ1は褐色砂質土、ℓ2はにぶい黄褐色砂質土で、ℓ3は周溝内に堆積した炭化物を多く含む褐色砂質土で、いずれも自然堆積土と考えている。

平面形は長方形と考えている。規模は4.5×3.5mである。周壁は、遺存状態の良い北東壁側で直立ぎみに立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北東壁で20cmである。方位は、北東壁を基準とするなら北に対して東に40度傾く。床面は、掘形底面であるLIVをそのまま利用して

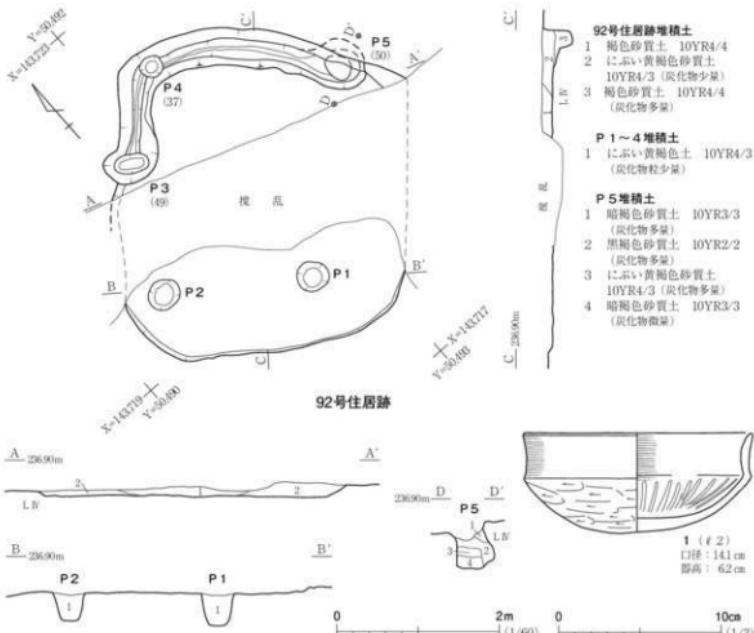


図187 92号住居跡・出土遺物

いる。おおむね平坦に作られている。遺存状態の良い北側は硬く締まっている。

住居内の施設はピットと周溝である。周溝は北西壁の北隅付近から北東壁にかけて検出した。規模は北東壁側が全長3.05m、北西壁側で1.6mである。最大幅は50cm、深さが20cmである。

ピットは5基検出した。P1・2は床面南部の東西で検出した。いずれも円形のピットで、規模は直径40cm、深さは35~38cmである。これらのピットは主柱穴と考えている。P1・2の堆積土はにぶい黄褐色砂質土である。また、周溝底面にはピットが穿たれており、北西壁側の周溝南端部をP3、北西壁側の西端に位置するものをP4、東端のものをP5とした。P3は平面形が梢円形で北西壁側へ張り出す。規模は長軸75cm、深さ48cmである。P4は長軸が25cm、深さが38cmである。P3・4の堆積土はにぶい黄褐色土である。P5は平面形が梢円形で北東側が大きくオーバーハングする。規模は長軸が60cm、深さは40cmである。P5の堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は、炭化物を微量含む暗褐色砂質土で、自然堆積土と考えている。 ℓ 2は、炭化物を多く含む黒褐色砂質土で、柱痕跡と考えている。 ℓ 3・4は、にぶい黄褐色差質土と暗褐色砂質土で、水平に堆積しており人為堆積と考えている。

遺物は、堆積土から散在して出土している。

遺物（図187、写真398）

遺物は、土師器が15点出土した。このうち1点を図示した。

図187-1は西側の検出面付近から伏せた状態で出土した。丸底で口縁部が直立する杯である。外面胴部下半はヘラケズリを施す。この杯は、住居跡に伴う遺物とは考えていない。それ以外は、いずれもハケメ調整を施す甕の小片である。

まとめ

本遺構は、4.5×3.5mの長方形の堅穴住居跡である。搅乱で壊されており、残りが悪いが、主柱穴や西壁の隅から北壁側にかけて周壁を検出した。所属時期は、遺構検出面から古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

93号住居跡 S I 93

遺構（図188、写真115・266・269）

本遺構は、V区北部のU-15グリッドに位置する。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。U・V-15グリッド周辺を検出している際に、4.0m程の炭化物を含む褐色土が方形に広がる範囲を検出したことから、遺構として認識し、住居跡として調査した。重複する遺構は、104号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は3層に区分した。 ℓ 1は褐色砂質土、 ℓ 2は褐色土で自然堆積土と考えている。 ℓ 3は炭化物粒と焼土粒を多く含む暗褐色砂質土である。他の堆積土に比べ、締まりのない土質の堆積土である。床面の直上に10~15cmの厚さで水平に堆積していることから、埋め戻しなどの人為堆積土と考えられる。

平面形は、おむね方形と考えている。規模は 4.5×4.0 mである。周壁は、遺存状態の良い西壁側で80度で立ち上がる。壁高は、もっとも遺存している北壁で30cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東におよそ20度傾く。床面はLIVにかけて構築しており、踏み縮まりはみられない。

住居内の施設は、地床炉とピットを1基ずつ検出した。地床炉は、床面のほぼ中央から西に寄った位置で1箇所確認した。炉の東側縁辺部には、 $18 \times 10 \times 10$ cmの角礫を2個据え付けている。炉の燃焼部は床面の高さより7cmほど高くなっている。炉の規模は 54×48 cmほどで暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは8cmである。

ピットは、南東隅で1基検出した。P1は平面形が楕円形を呈する。規模は 105×87 cm、深さ30cmである。堆積土は4層に区分した。ℓ1・2はにぶい黄褐色から灰黄褐色の砂質土であり、住居跡の堆積土に近い土質である。このことから住居廃絶時には開口していたものと判断している。ℓ3は褐色砂質土で人為的に埋めた土と考えている。ℓ4はやや粘質の灰黄褐色土であり、底面に貼りつけて補強しているものと考えている。

遺物は、やや特異な出土状況が確認された。図示した図189-10を除きすべてℓ3の上面から出土している。1・2は南側の中央から、3は北西隅よりやや南側で出土している。4は南壁中央、

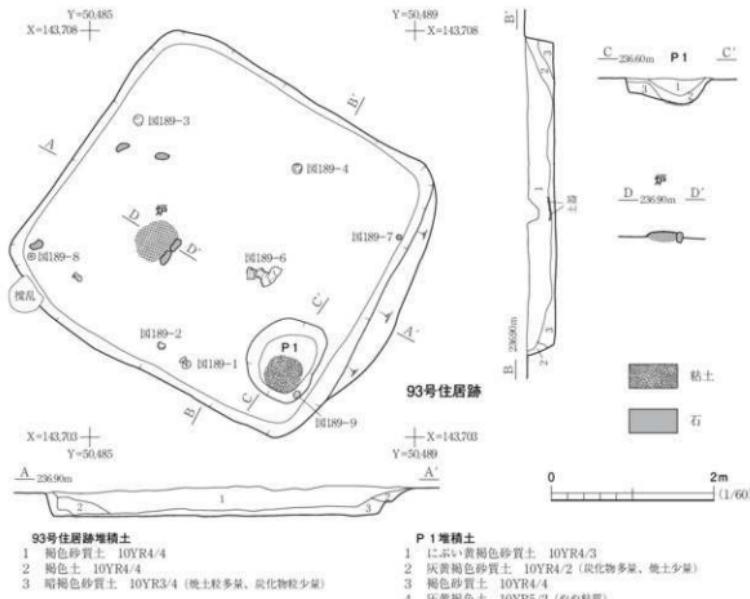


図188 93号住居跡

5は床面中央より東側、6は南東隅で出土した。7は北東隅より南側、8は南西隅で出土した。これらの遺物は、住居隅付近に置かれたような特異な出土状態を示している。住居の廃絶時に一部を埋めて、その上面で何らかの行為が行われた可能性が考えられる。

遺物 (図189、写真398)

遺物は土器器が68点出土した。このうち土器器8点を図示した。

図189-1は器台である。受け部と「ハ」字状の脚部をもつもので、外面をハケメ調整後にナデとミガキ調整を施す。外面には赤彩を施す。

2・3は鉢である。2は、口縁部が直立し、口縁部の内外面にヨコナデ、外面の底部付近にケズリ、内面にヘラナデを施す。3は、頸部から口縁部がやや屈曲しながら外反する。口縁部の内外面にヨコナデ、外面の底部付近にケズリ、内面にヘラナデを施す。

4・5は小型の壺である。4は平底とやや偏平な体部、外傾する口縁部をもつ。内面の器壁に赤色顔料が分厚く付着しており、蛍光X線分析によりベンガラであることが判明した。口縁部を一箇所意図的に打ち欠いており、その破断面にも赤色顔料が付着する。ナデ調整後に赤彩を施す。5は内外面にハケメ調整を施す。

6は複合口縁の壺で、口縁部から胴部上半が遺存する。外面と口縁部内面にハケメ調整を施す。

7~10は手づくね成形の小型土器で、いずれも鉢を表現していると考えている。

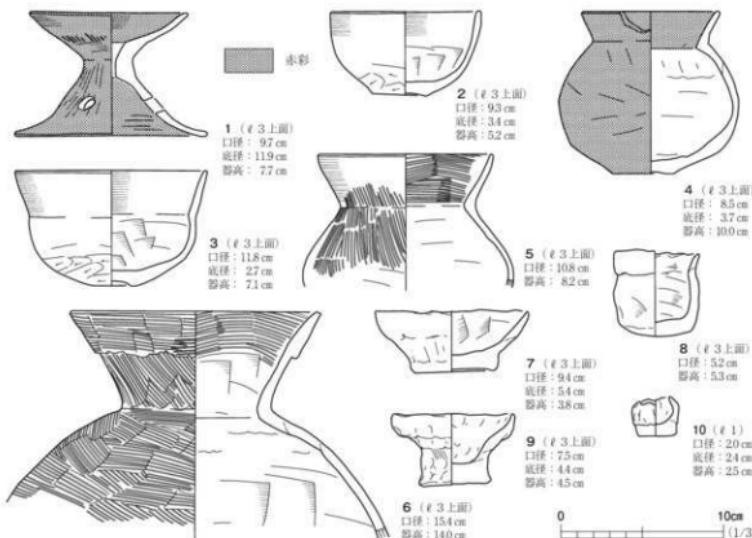


図189 93号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、4.5mほどの方形の竪穴住居跡である。床面からは東縁に石をもつ地床炉1箇所と貯蔵穴が検出された。堆積土のℓ3上面からは、複数の完形遺物が出土している。これらの遺物は、住居跡の隅付近や周壁側に置かれており、特異な出土状況である。推測の域を出ないが、廃絶時に行われた何らかの祭祀に用いられた可能性を考えている。所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

94号住居跡 S I 94

遺構(図190、写真116)

本遺構は、V区北部のT・U-15・16グリッドに位置している。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。遺構の集中区のLIV上面を検出している際に、焼土粒や炭化物が散在する80mほどの遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、105・106・107・108・113・117・128・138・141号住居跡である。本遺構が105・113・117号住居跡より古く、106・107・108・128・138・141号住居跡より新しい。

堆積土は4層に区分した。ℓ1はさらにa・bに分けた。ℓ1aは焼土粒・炭化物が多く含む暗褐色砂質土で、住居跡の北側に主に堆積していた。ℓ1bはにぶい黄褐色砂質土で、東側から南東側に堆積していた。これらの土層からは、焼土や炭化物とともに土製品や土師器の鉢などが出土しており、人為堆積土と考えている。ℓ2は、褐色砂質土である。均質に堆積することから、この土層も人為的な堆積土と考えている。ℓ3は暗褐色砂質土で、壁面の崩落土と考えている。

平面形はおむね方形と考えている。規模は8.2×7.5mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で80度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で22cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に30度傾く。床面は、掘形底面であるLIVをそのまま利用している。踏み縮まりは弱くやや凹凸が認められる。

住居内の施設は、焼土とピットである。焼土は、床面のほぼ中央からやや北側に寄った位置で1箇所確認した。炉の可能性が高いが、焼け方が弱い。規模は、直径45cm、厚さ5mm未満である。

ピットは北西隅で1基検出した。貯蔵穴と考えている。平面形は円形である。規模は直径167cm、深さ95cmである。堆積土は6層に区分した。ℓ1は暗褐色砂質土、ℓ2はにぶい黄褐色砂質土、ℓ3は褐色砂質土で自然堆積土と考えている。ℓ4は暗褐色砂質土、ℓ6は褐色砂質土で、人為的に埋めた土と考えている。ℓ5はにぶい黄褐色砂質土で壁の崩落土である。

遺物は、図191-1が床面北東側から出土し、それ以外はℓ1aから出土した。

遺物(図191、写真398)

遺物は土師器129点、土製品2点が出土した。このうち土師器4点、土製品2点を図示した。

図191-1は、高杯である。外面と杯部の内面にミガキ調整と赤彩が施されている。

2・3は土師器の鉢である。2は外傾する口縁部とやや偏平な球形の体部と平底をもつ。3は体

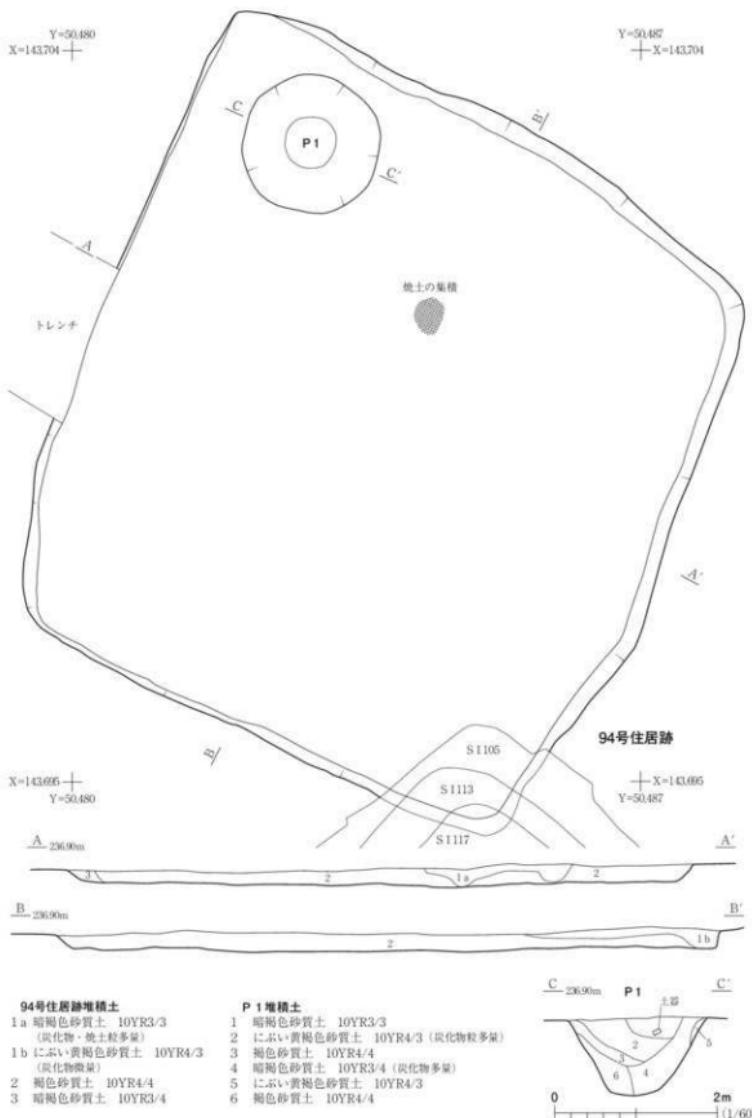


図190 94号住居跡



図191 94号住居跡出土遺物

部下半が遺存する。

4は土師器の台付甕の台部片である。台部の外面にハケメを施し、内面にナデを施す。

5は土製の丸玉である。6は側面に双孔をもつ土製品である。鼓のような形態で、中央がすぼまる。断面形は円形である。

まとめ

本遺構は、8.2mほどの方形の堅穴住居跡である。遺構集中区の中では大型の住居跡である。床面からは、焼土と貯藏穴を検出した。堆積土からは、土玉と鼓状の性格不明土製品が出土した。所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

95号住居跡 S I 95

遺構 (図192、写真117)

本遺構は、V区北部のT・U-14・15グリッドに位置する。標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構はない。堆積土は焼土粒と炭化物を含む褐色砂質土の単層である。層厚が薄く堆積過程は不明である。

平面形は、西側の全部を擾乱で失っているが、隅丸長方形と考えている。規模は、東西の遺存長が5.4m、南北が5.1mである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で12cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して西に20度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用している。床面のはば中央部分には、踏み締まりの範囲が確認された。

住居内の施設はピットである。東壁側中央にP1、南壁側の東と西にそれぞれP2・3を検出した。ピットの平面形はおおむね円形である。断面形は円柱状を呈する。規模は18~28cm、深さ10~18cmである。堆積土は褐色砂質土である。柱痕跡などは確認できなかった。

遺物は甕の小片が2点出土した。図示していないが古墳時代前期の所産と考えている。

まとめ

本遺構は遺存長5.4mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。床面からピットが検出された。所属時期は、出土遺物も乏しく判断に迷うが、検出面などから古墳時代前期以前と考えている。(中野)

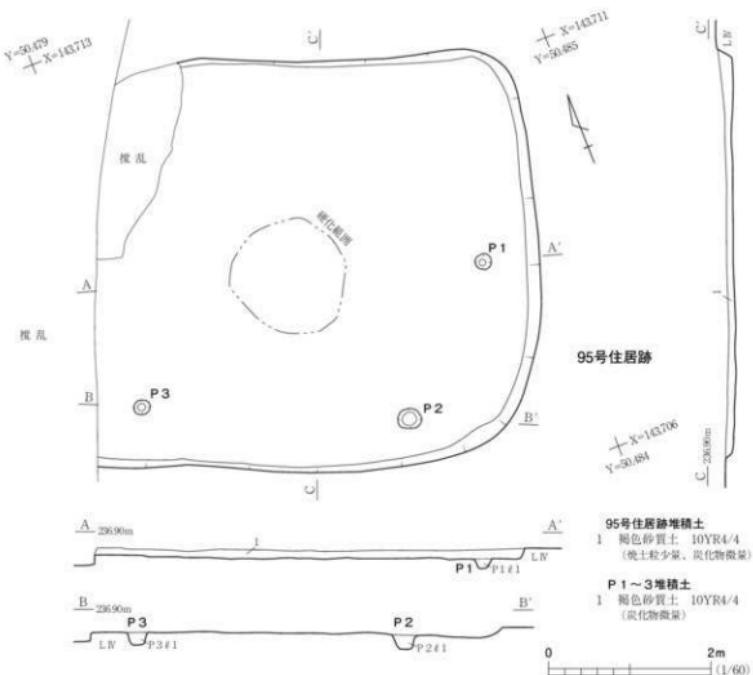


図192 95号住居跡

96号住居跡 S I 96

遺構(図193、写真118)

本遺構は、Ⅲ区南部のD・E-23・24グリッドに位置する。標高236.1m付近の、南側から北側に下る緩斜面に立地する。検出面はL II b②である。検出時にL II a③を主体とする7.0mほどの楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。当初は主軸など不明なことから「十」字状にトレチを設定し掘削して調査を行った。重複する遺構は、12・13・27・31号建物跡、19号溝跡、21号烟跡であり、いずれの遺構よりも本遺構が古い。

堆積土は6層に区分した。 ℓ 1は褐色土、 ℓ 2は黒褐色土、 ℓ 3はL II b①に対応する灰黄褐色砂質土、 ℓ 4はにぶい黄褐色土で、いずれもレンズ状に堆積することから自然堆積土と考えている。 ℓ 5・6はで釐ぎわに三角状に堆積する自然堆積土である。

平面形は、おむね方形である。規模は8.3×7.8mである。周壁は遺存状態の良い南壁側で50度で立ち上がる。壁の遺存高は、南壁で55cmである。主軸方位は、西壁を基準とするなら北に対

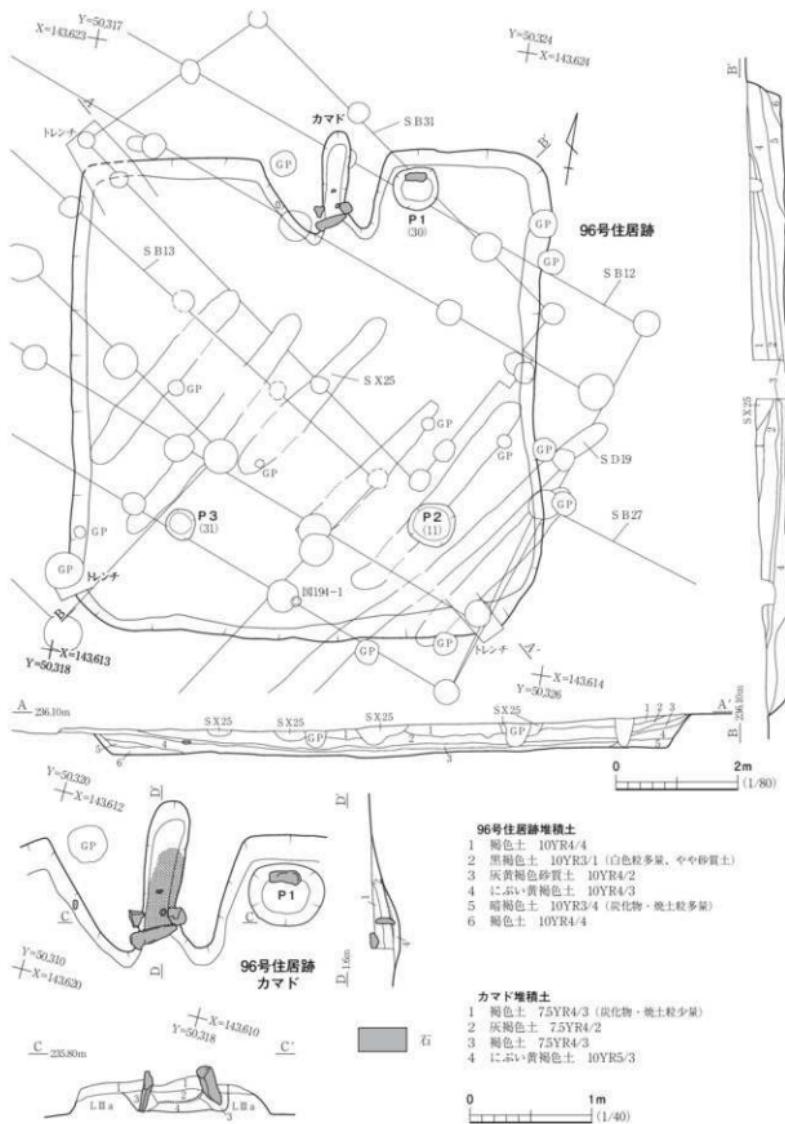


図193 96号住居跡

して西に5度傾く。床面は掘形底面であるL II b下面からL III aをそのまま床面としている。おおむね平坦だが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、カマドとピットである。カマドは北壁中央に構築されている。遺存状態が比較的よく、左右の袖と燃焼部、煙道から構成される。カマド堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は褐色土で自然堆積土である。 ℓ 2は灰褐色土で、燃焼部から煙道にかけて堆積した自然堆積土である。 ℓ 3はL II b②を主体とする褐色土で、袖石を固定するための土である。 ℓ 4は燃焼部底面に堆積するL II b②を主体としたにぶい黄褐色土である。

カマドの規模は、全長185cm、最大幅が210cmである。袖は、L III aを掘り残して基部を作り出している。周壁に直交するように床面に張り出す形態である。焚口側には芯材の石を2個据えている。右袖の石は、長方形の細長い花崗岩の礫で長軸37cm、幅13cm、厚さ8cmである。左袖の石は、長軸34cm、幅9cm、厚さ5cmである。やや上部が内向きになるように据えられていた。焚口の幅は32cmである。焚口部には、長軸52cm、幅20cm、厚さ9cmの細長い礫が置かれていた。この石はカマドの天井部に置かれていた石が落ち込んだものである。袖の規模は、左袖が全長153cm、幅110cm、高さ32cmである。右袖は、全長145cm、幅70cm、高さ30cmである。

燃焼部は、床面よりやや低く作られている。底面は、長軸100cm、幅32cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは燃焼部底面で2cmである。燃焼部中央には、支脚と思われる細長い石が据えられていた。支脚の石は、長軸20cm、幅7cmである。煙道は、短く周壁の外側に張り出す形態である。断面形は緩い「U」字状を呈し、底面は燃焼部側から煙出し側が高くなるように緩く傾斜している。規模は、全長50cm、最大幅42cmである。

ピットは、3基検出した。P 1はカマドの東側に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面は比較的平坦に掘り込まれている。底面からは、 $33 \times 15 \times 7$ cmの花崗岩の焼けた礫が出土した。焼けてもろくなっていることから、カマドの天井材の石と考えている。ピットの規模は、83×70cm、深さ30cmである。P 2・3は床面のはば南側の周壁より北側に位置する。平面形は円形で、P 2の規模は、直径80cm、深さ11cmである。P 3の規模は、直径45cm、深さ31cmである。ピットの堆積土はいずれも炭化物を少量含む暗褐色土で、柱痕跡などは確認されなかった。機能については、位置関係から柱穴と考えている。

比較的大型の住居跡だが規模に比して遺物は少ない。遺物は、南壁側の中央付近の ℓ 4から、図194-1の杯が正立して出土した。それ以外は、カマド周辺や堆積土からまばらに出土した。



図194 96号住居跡出土遺物

遺物 (図194、写真398)

遺物は土器が45点出土した。このうち2点を図示した。

図194-1・2は口縁部が外反する丸底の杯である。磨滅しており、調整が観察しにくいが、いずれも外面にヘラミガキを施す。内面には、ヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。

まとめ

本遺構は8.3mの大型堅穴住居跡である。北壁にカマドと貯蔵穴をもつ。床面南側では柱穴と考えられるピットも検出された。Ⅲ区の古墳時代後期の住居跡では最大であるが、遺構の規模に比して、出土遺物が少なかった。所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。(中野)

97号住居跡 S I 97

遺構 (図195、写真119)

本住居跡は、V区南部の、P・Q-24グリッドのL II bで検出された。標高236.7mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。北側のL IVからは148号住居跡と95号土坑が検出されている。検出時に、方形に広がる暗褐色土の範囲と、その東辺中央部に焼土が認められたことから、東壁にカマドを有する住居跡であると認識された。

平面形は方形で、規模は、東西、南北とも最大5.1mの正方形である。西辺は北から9度東に傾く。壁は南北隅の残りがもっともよく高さ27cm、その他はおおむね20cmほどが遺存していた。四方の壁とも75度ほどの急な角度をもって立ち上がる。床面には、周縁部に最大12cmの厚さで貼床が施されている。上面は水平で平坦である。

堆積土は4層からなる。 ℓ 1-3はレンズ状に堆積し、いずれも暗褐色土である。 ℓ 2にはやや多くの、 ℓ 3には少量の炭化物粒を含んでいた。 ℓ 4は貼床である。

カマドは東壁のほぼ中央に付設されていた。両袖と焼土面が検出され、煙道は検出されなかつた。規模は、両袖の幅が最大112cm、先端から壁までが73cm、袖の基底部幅が最大で30cm、床面からの遺存高が最大19cmである。両袖はにぶい黄褐色砂質土で構築され、天井は崩落していた。焼土面は直径約45cmの円形で、両袖先端を結ぶ線の内側、両袖のほぼ中央に位置する。焼土面は中央部が特に強く焼土化していた。焼土化した範囲は8cmの深さに及ぶことを、断ち割りの断面によって確認した。

床面からは4基の柱穴が検出された。これらは四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置され、いずれも柱痕跡は確認されなかつた。これらを北西隅から時計回りにP 1-4とした。柱間の距離は、北辺から時計回りに2.6m、2.5m、2.3m、2.4mで、住居跡の平面形と同様にはほぼ正方形を描く。床面から柱穴の底面までの深さは、P 1から時計回りに66cm、55cm、55cm、53cmである。

床面と住居内の堆積土、カマドの堆積土からは、土器が破片の状態で出土した。完形品はない。カマドの前面、P 2・3間の床面からは、炭化材がまとめて出土した。住居内の他の場所からは炭化材は出土しておらず、本住居跡はカマド付近にのみ部分的に火を受けた可能性が考えられる。

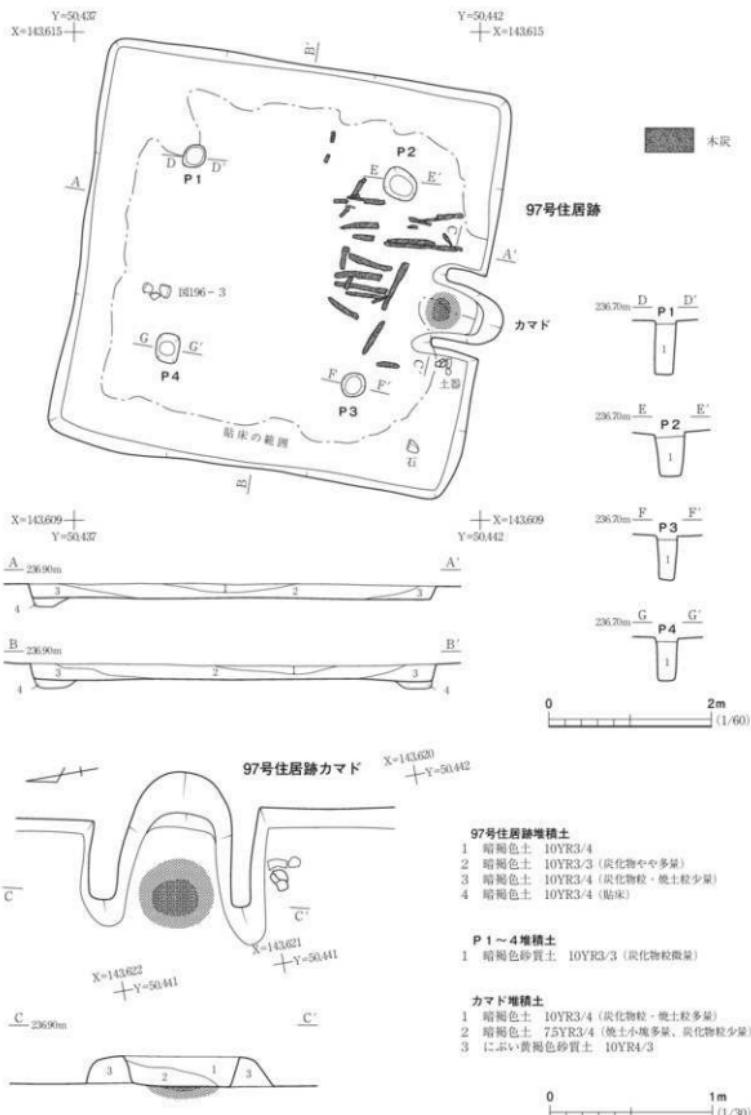


図195 97号住居跡

この他、カマド内の堆積土から、大小に破碎した状態の焼成粘土塊が22点出土した。これらには、スサの痕跡と木舞(木製か竹製の骨組み)と思われるものの圧痕が破断面の一部に観察できる。すべてカマド内から出土していることから、スサ入り粘土を用いてカマド周辺に施された何らかの施設が焼成され、その破碎したものがカマド内に落ちこんだ可能性が考えられる。

遺物(図196、写真398・444)

本住居跡からは、土師器72点、須恵器15点、土製品が22点出土した。このうち土師器3点、須恵器1点を図示した。

図196-1は、土師器の杯である。口縁部から体部にかけての一部が出土した。椀形で、外面にヘラケズリ、内面にミガキのち黒色処理を施す。口縁部外面には輪積み痕を残す。

2は須恵器の杯である。底部付近が遺存する。平底でロクロナデのち回転ヘラケズリを施す。

3は、土師器の大型の鉢である。やや凸面をなす平底、急な角度でやや湾曲して立ち上がる体部、短く外傾する口縁部をもつ。内外面ともミガキ調整が施され、内面には黒色処理が施される。内面の体部上半に、はぜによる剥離が広範囲にみられる。

4は、土師器の甕である。口縁部から体部の上半にかけての一部が遺存する。長胴で口縁部は浅い角度に開く。体部外面に綫方向のハケメ、内面にヘラナデ、口縁部の内外面にヨコナデを施す。体部外面の一部には塗布・焼成された泥土が斑状に残る。

写真444は焼成粘土塊である。断面に木舞とスサを混ぜ込んだ痕跡があり、表面は曲面をなす。

まとめ

中型で、一間四方の4本柱で上屋を支える構造の堅穴住居跡である。東壁にカマドを有する。廃絶時に火を受けたと考えられる。カマド内から焼成されたスサ入りの粘土塊が破片の状態で多数出

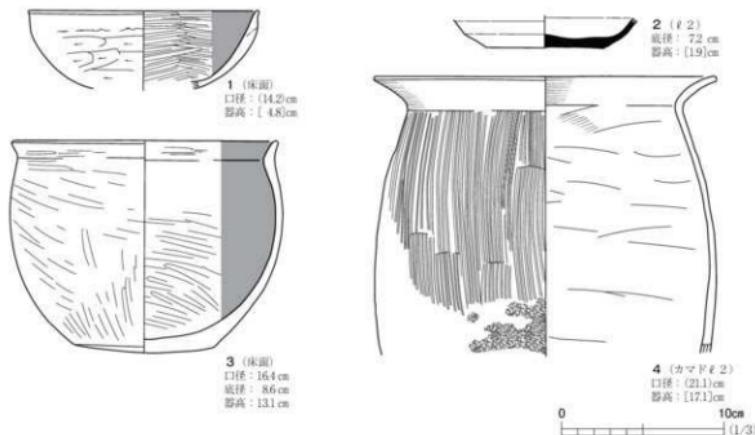


図196 97号住居跡出土遺物

土したことから、カマド周辺にこれを用いた何らかの施設の存在が想定される。本住居跡の年代は、出土遺物から奈良時代、8世紀に位置づけられる。

(青山)

98 a・b号住居跡 S I 98 a・b

遺構(図197、写真120・121)

本遺構は、V区北部のU・V-16グリッドに位置する。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。調査開始当初は、1軒の住居跡として調査を行ったが、炉が堆積土の上下で2箇所検出された。調査段階では、2軒の住居跡が重複しているのか、建て替えなのか不明確だったため、上面の炉が検出された住居跡を98 a号住居跡に、下面で炉が検出された住居跡を98 b号住居跡とした。その後の精査で、98 b号住居跡を埋め戻し、規模を縮小して98 a号住居跡に建て替えているものと判明した。重複遺構は、127号住居跡で本遺構が新しい。

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は灰黄褐色砂質土で自然堆積土である。 ℓ 2は焼土粒と炭化物を多く含む暗褐色砂質土、 ℓ 3は褐色砂質土である。 ℓ 4は炭化物と焼土粒を多く含む暗褐色砂質土である。周壁北側と西側に堆積した土で、埋めて住居を縮小している人為堆積土である。 ℓ 2~4は98 b号住居跡から98 a号住居跡に建て替えた際の堆積土である。

98 a号住居跡の平面形は、おおむね方形と考えている。規模は38×35mである。周壁は西壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で10cmである。方位は西壁を基準とするなら、北に対して西に45度傾く。床面は98 b号住居跡を埋めて構築されており、硬く締まっている。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は床面のほぼ中央で1箇所検出した。平面形は、梢円形で、炉床には5cmほど厚さの白色粘土を貼っており、その上面が火床となっていた。炉の規模は55×50cmほどで橙色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは底面で5cmである。ピットは、南東壁側中央で1基検出した。P1は平面形が東西に長い梢円形を呈し、底面は平坦に掘り込まれている。機能は、貯蔵穴と考えている。規模は125×105cm、深さ46cmである。堆積土は3層に区分した。 ℓ 1は炭化物を多く含む暗褐色砂質土である。 ℓ 2・3は褐色砂質土であり、3層とも人為的な堆積層である。

98 b号住居跡の平面形は方形である。規模は4.0×3.9mである。周壁は東壁側で80度で立ち上がる。壁の遺存高は北壁で20cmである。方位は98 a号住居跡とはほぼ同じである。床面は、掘形底面であるLIVをそのまま利用しており、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面のほぼ中央からやや北西側で1箇所検出した。平面形は円形である。規模は、直径60cmほどで、暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で5cmである。

ピットは4基検出した。いずれも平面形が梢円形ないし円形で、底面は平坦に掘り込まれている。機能は、貯蔵穴なども考えられるが、明らかにできなかった。P2は南西壁側の中央に位置する。規模は140×65cm、深さ35cmである。P3は北西壁中央よりやや南に位置する。規模は115

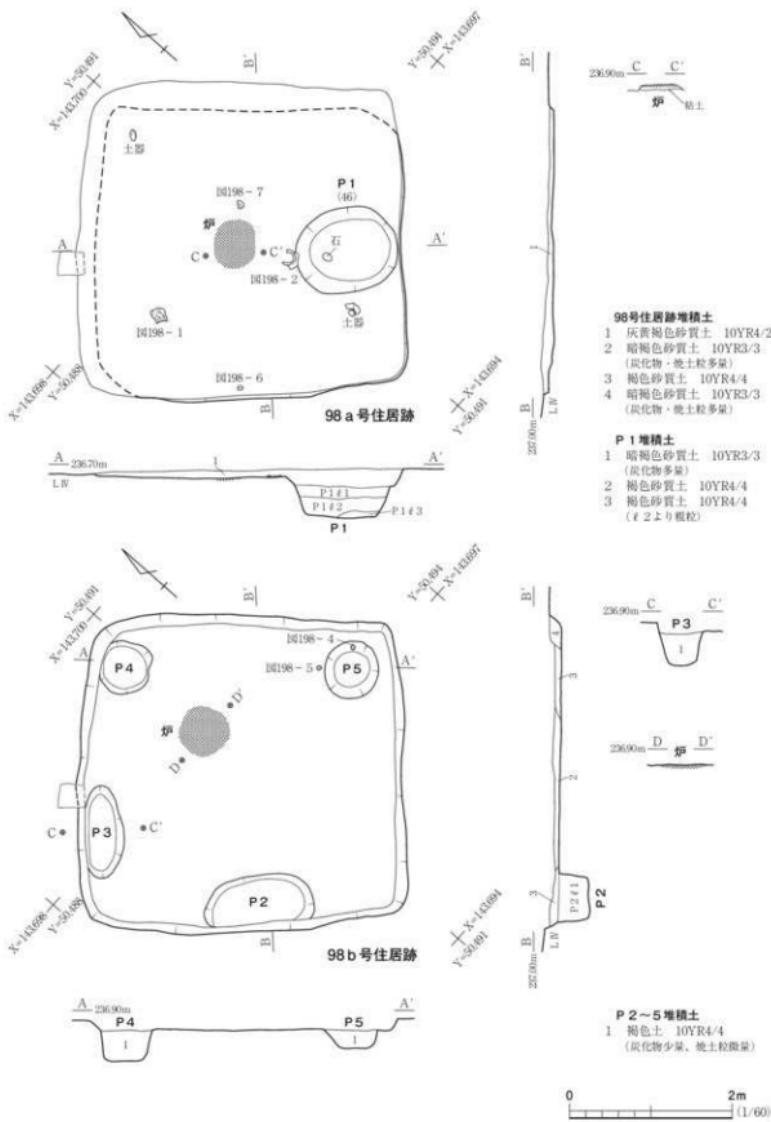


図197 98 a・b号住居跡

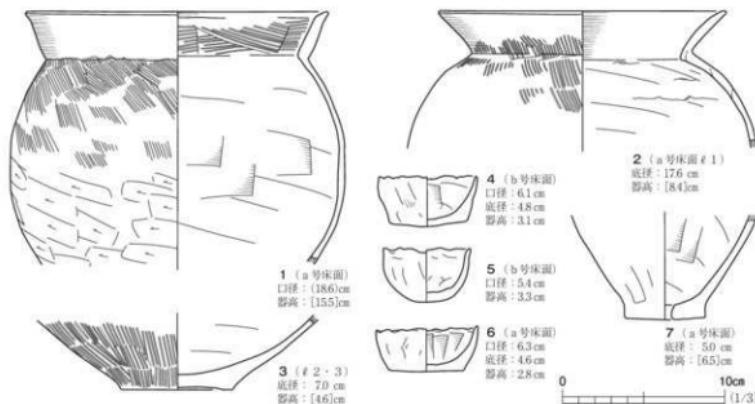


図198 98a・b号住居跡出土遺物

×46cm、深さ40cmである。P 4は北隅に位置する。規模は75×65cm、深さ28cmである。P 5は東隅位置する。規模は直径65cm、深さ20cmである。堆積土は炭化物焼土粒を含む褐色土で、人為的な堆積土である。

遺物は、98 b号住居跡のP 5周辺の床面から、図198-4・5が出土している。98 a号住居跡は、炉の周辺や住居隅付近の床面から出土している。

遺 物 (図198、写真398)

遺物は土師器が73点出土した。このうち土師器7点を図示した。図示した遺物は、4・5が98 b号住居跡出土で、それ以外は98 a号住居跡に伴うものである。

図198-1～3は球胴形を呈する壺である。1・2は口縁部から胴部上半が遺存している。1は胴部にハケメ調整後に胴部下半にケズリ調整を施す。3はハケメ調整を施した、上げ底ぎみの平底の底部片で、底面に木葉痕がある。4～6は手づくねの小型土器である。いずれも鉢を表現しているものと思われ、4・6は平底、5は丸底である。7は単孔の有孔鉢の底部片である。

ま と め

本遺構は、4.0mほどの方形の堅穴住居跡である。建て替えを行っており、98 b号住居跡の北側と西側を埋めて縮小し、98 a号住居跡に作り変えている。98 a号住居跡の地床炉には、粘土を貼つて火床としていた。所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

99号住居跡 S I 99

遺 構 (図199、写真122)

本遺構は、V区北部のV-15グリッドに位置する。標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。93号住居跡の東側を検出した際に、20mほどの隅丸方形の範囲を検出した。規

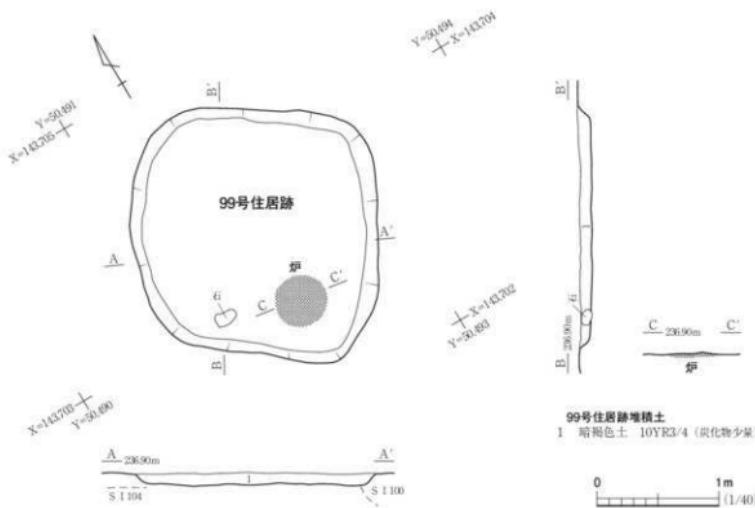


図199 99号住居跡

模が小型であることから、土坑とも考えたが、炉が検出され床面が形成されていることから、住居跡として調査した。重複遺構は、100・102・103・104号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は炭化物を少量含む暗褐色土の単層である。堆積過程は層厚が薄いため不明である。

平面形は隅丸方形である。規模は $2.0 \times 2.0\text{m}$ である。周壁は45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は北東壁で12cmである。方位は、南東壁を基準とするなら北に対して東に45度傾く。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。おむね平坦かつ水平に作られている。

住居内の施設は地床炉1箇所である。地床炉は床面南隅からやや内側に寄った位置に作られている。平面形は円形を呈する。底面は直径42cmの範囲にわたって暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは2cmである。

遺物は、遺構内から出土しなかった。

まとめ

本遺構は、2.0mの隅丸方形の堅穴住居跡である。本遺跡において、もっとも小型の堅穴住居跡である。床面からは地床炉が1箇所検出された。所属時期は、時期を示す遺物が出土しなかったが、検出面などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

100号住居跡 S I 100

遺構 (図200、写真123)

本遺構は、V区北部のV-15・16グリッドに位置する。標高236.8m付近の平坦面に立地する。

検出面はLⅣである。99号住居跡の東側を検出している際に、方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複遺構は、99・102・103・118・126・127号住居跡である。本遺構が99号住居跡より古く、それ以外の住居跡より新しい。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は褐色の砂質土である。 ℓ 2は細かい縞状を呈する暗褐色砂質土で、焼土粒と炭化物を多く含んでおり、いずれも不自然に水平に堆積することから、人為堆積土と考えられる。

平面形はおおむね隅丸長方形である。規模は $5.7 \times 5.1\text{m}$ である。周壁は南壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で35cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に20度傾く。床面はLⅣ下面に構築しており、平坦に作られ硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、地床炉1箇所とピット3基を確認した。

地床炉は床面中央よりやや西側に1箇所検出した。平面形は円形を呈する。炉の上面は強く焼

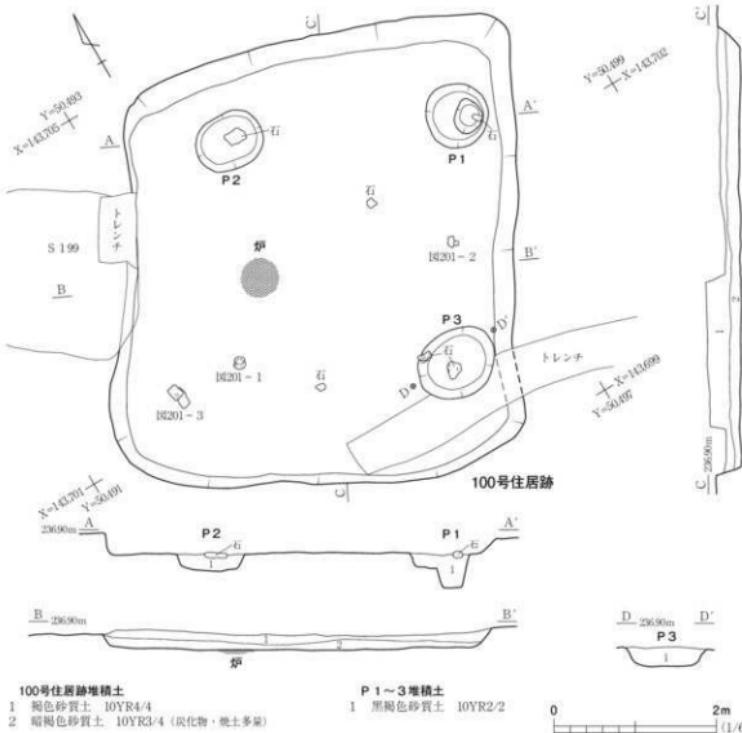


図200 100号住居跡

けており、直径47cmの範囲にわたってにぶい赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは2cmほどである。

ピットは3基検出した。機能は、P2・3は貯蔵穴と考えている。P1は不明である。

P1は住居跡の北東隅に位置する。平面形は円形である。底面の東側では40×35cmほどがピット状に掘り込まれていた。規模は直径78cm、深さ40cmである。堆積土は黒褐色砂質土である。P2は北西隅に位置する。平面形は楕円形である。底面は平坦に掘り込まれていた。ピットの検出面からは、25×18×7cmほどの平たい石が出土した。規模は85×60cm、深さ20cmである。P3は南東隅に位置する。平面形はおむね円形である。底面は平坦に掘り込まれている。検出面からは20cmほどの平たい石が2個出土した。規模は85×82cm、深さ22cmである。ピットの堆積土は、いずれも炭化物を含む黒褐色砂質土である。

遺物は、ℓ2から床面の南西隅付近や東壁側の中央から図201-1～3が出土している。ℓ2で住居跡を埋めた際に、遺物を廃棄したものと思われる。

遺物(図201、写真399)

遺物は、土師器225点、弥生土器1点が出土した。このうち土師器4点を図示した。

図200-1はほぼ完形の土師器の鉢である。平底で、やや偏平な球形の体部、外傾する口縁部をもつ。外面にはハケメ調整、内面にはヘラナデが施される。

2～4は土師器の壺である。2は胴部下半がやや丸みを帯びて膨れ、底部が突き出す器形である。3の壺は内外面にハケメ調整を施す。4は口縁部片で角張った口縁端部には連続的に刻みが施される。

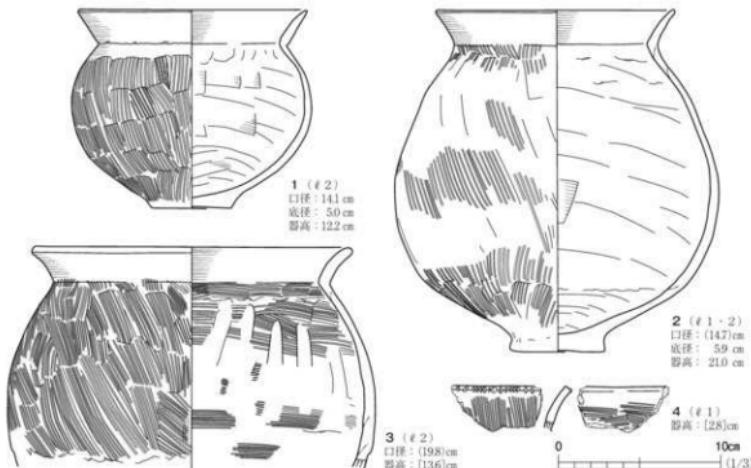


図201 100号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、5.7mほどの隅丸長方形の堅穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴が検出された。住居跡は、堆積土の状況から廃絶後に遺物などとともに埋められたものと考えられる。所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

101号住居跡 S I 101

遺構 (図202、写真124)

本遺構は、V区北部のV-15グリッドに位置する。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。100号住居跡の北側を検出している際に、3.0mほどの範囲に炭化物や焼土を含む褐色土が広がるのを確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構はないが、すぐ南側に100・103号住居跡が近接する。

堆積土は1層のみである。 ℓ 1は焼土粒と炭化物を少量含む褐色砂質土で、基盤層に近似していることから自然堆積の可能性が高いが、層厚が薄いため詳細については不明である。

平面形は、北壁と南壁の中央がやや外側に張る、胴張りぎみの隅丸長方形である。平面の規模は3.5×3.2mである。周壁は東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、残りの良い東壁で21cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に30度傾く。床面は、掘形底面である

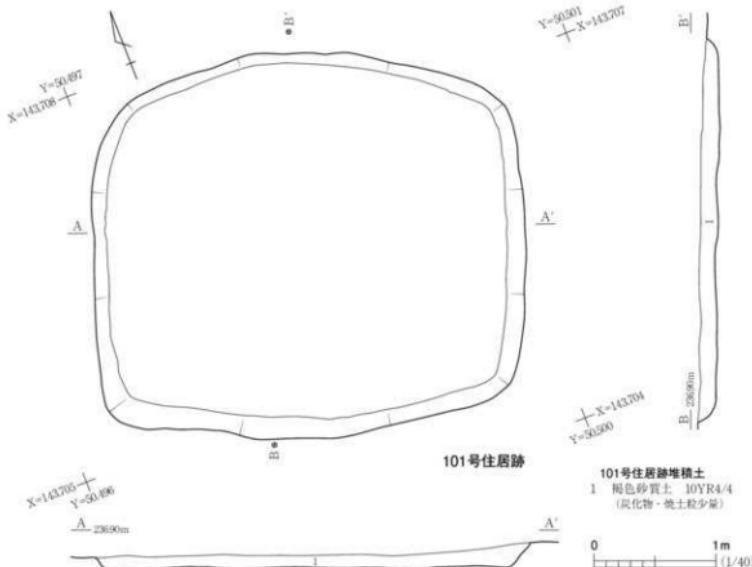


図202 101号住居跡

L IV下面をそのまま利用している。おおむね平坦かつ水平に作られている。表面には微細な炭化物が散っているが、全体的に踏み締まりは弱い。

住居内の施設は確認されなかった。遺物も出土していない。

まとめ

本遺構は 3.5×3.2 mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。住居内の施設もなく、遺物も出土していないことから不明な点が多い。所属時期は検出面から古墳時代前期頃と考えられる。(中野)

102号住居跡 S I 102

遺構 (図203、写真125)

本遺構は、V区北部のV-15グリッドに位置し、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。100号住居跡を調査している際に、南西隅付近で、長方形に広がる褐色土の範囲を検出した。その後、100号住居跡の周壁において遺構であることを確認したことから、住居跡として調査した。重複遺構は、99・100・104・127号住居跡である。本遺構が100・104・127号住居跡より新しく、99号住居跡より古い。

堆積土は、炭化物を微量含む褐色砂質土の単層である。堆積過程は層厚が薄いため不明である。平面形は、東側の大半を他遺構に埋されており不明確であるが、方形ないし長方形と考えている。規模は、南北が 2.3 m、東西の遺存長が 1.4 mである。周壁は西壁側では60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は西壁で 21 cmである。方位は、西壁を基準とするなら、北に対して西に5度傾く。床面は、L IV下面をそのまま利用しており、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、南西隅でピットを1基検出し、位置から貯蔵穴と考えている。平面形は円形

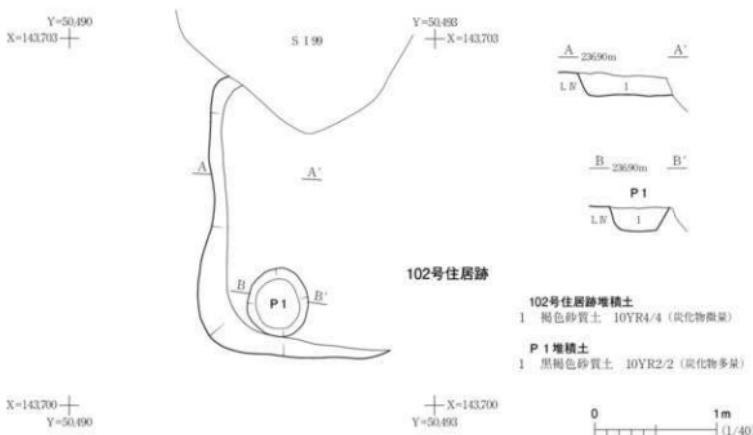


図203 102号住居跡

で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は直径53cm、深さは20cmである。堆積土は炭化物を多く含む黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は、南北長が23mの竪穴住居跡である。東側を他遺構に壊されており、遺存状態が悪く、遺物も出土していないことから不明な点が多い。所属時期は、検出面や重複関係などから古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

103号住居跡 S I 103

遺構 (図204、写真126)

本遺構は、V区北部のV-15グリッドに位置している。標高236.8mの平坦面に立地する。検出面はLIVである。100号住居跡を調査中に北東隅で、長方形に広がる遺構の範囲を検出した。周壁においても本遺構の立ち上がりを確認したことから、住居跡として調査した。重複遺構は、100・118・126号住居跡である。本遺構が126号住居跡より新しく、100号住居跡より古い。118号住居跡との重複関係は、堆積土の切り合い関係が確認できなかったため不明である。

堆積土は、炭化物を微量含む褐色砂質土である。堆積過程は、層厚が薄いため不明である。平面形は、南側を100号住居跡に壊されているが、東壁側や北西隅の状況などから長方形と考えている。規模は3.9×2.6mである。周壁は残りの良い北壁側で、60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は北壁中央で25cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に30度傾く。床面は、掘形底面であるLIV下面をそのまま利用している。おおむね平坦に作られており踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、北西隅でピット1基を検出した。位置関係などから貯蔵穴と考えている。平面形は円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径51cm、深さは22cmである。堆積土



図204 103号住居跡・出土遺物

は、炭化物を多く含む黒褐色砂質土である。

遺物 (図204、写真437)

遺物は、弥生土器片1点が出土した。図204-1は、撲糸地文の破片である。

まとめ

本遺構は、3.9mの長方形の堅穴住居跡である。北西隅に貯蔵穴が位置する。堆積土からは弥生土器が出土している。所属時期は、重複関係などから、弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

104号住居跡 S I 104

遺構 (図205、写真127)

本遺構は、V区北部のU・V-15グリッドに位置している。標高236.8mの平坦面に立地する。検出面はLIVである。93号住居跡の調査中に、不整形に広がる褐色土の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複遺構は、93・99・100・102号住居跡、86号土坑である。本遺構がいずれの遺構よりも古い。

堆積土は、LIV粒を多量に含み、炭化物を微量含む褐色土の単層である。堆積過程は、層厚が薄いため不明である。



図205 104号住居跡

平面形は、他の遺構に壊されているが、長方形と考えている。規模は $5.2 \times 4.5\text{m}$ である。周壁は北壁側で、45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁中央で15cmである。方位は、北壁を基準とするなら北に対して東に40度傾く。床面は掘形底面であるLIV下面をそのまま利用している。おおむね平坦だが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は北東隅でピットを1基検出した。位置関係などから貯蔵穴と考えている。平面形は円形で、底面はすり鉢状を呈する。規模は、直径65cm、深さは12cmである。堆積土は、炭化物を少量含む暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は $5.2 \times 4.5\text{m}$ の長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴が北西隅に位置する。複数の遺構と重複しており重複関係からは、周辺に位置する遺構の中でもっとも古い住居跡の1つであるといえる。時期は遺物が出土していないことから難しいが、重複関係などから弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えている。

(中野)

105号住居跡 S I 105

遺構(図206、写真128・129)

本遺構は、V区北部のU-16・17グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、94・108・109・113・114・117号住居跡であり、重複する遺構群の中では本遺構がもっとも新しい。

堆積土は2層に区分した。 $\ell 1$ は炭化物を多く含む、にぶい黄褐色砂質土である。床面まで均一に堆積し、一部縞状になっている。堆積土下部から床面にかけて焼土粒や炭化材・礫が出土する。おそらく、廃絶時に床面の一部で火を焚いて、その後に埋めた土と考えられる。 $\ell 2$ は、炭化物を多量に含む暗褐色砂質土である。西壁側と東壁側の壁ぎわにのみ偏って堆積する。

平面形は、おおむね方形と考えている。規模は $6.0 \times 5.5\text{m}$ である。周壁は、遺存状態の良い北壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で36cmである。住居の方位は、残りの良い南西壁を基準とするなら北に対して西に40度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用している。平坦かつ水平に作られているが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉1箇所とピット1基である。

地床炉は、床面中央から北にわずかに寄って位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸47cm、短軸38cmほどで暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは2cmである。

ピットは、西隅で1基検出した。P1は、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸88cm、短軸82cm、深さ18cmである。堆積土は炭化物を少量含む暗褐色砂質土である。ピットの堆積土は住居跡の堆積土に近いことから、住居廃絶時には開口していたものと判断した。

遺物は、すべて $\ell 1$ 下部から床面にかけて出土している。出土位置は、図207-2・4が北隅の床面から、5・12は炉の西側の $\ell 2$ 下部から床面にかけて出土した。1・6・8は炉の南側から

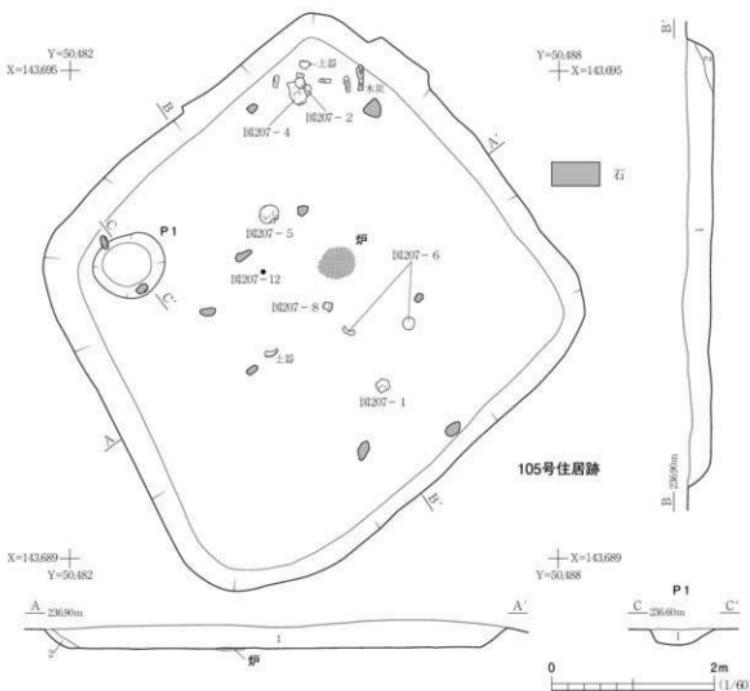


図206 105号住居跡

東側の床面から出土している。

遺物 (図207、写真399・400・435)

遺物は、土師器244点、弥生土器3点、石製品1点が出土した。このうち土師器8点、石製品1点を図示した。

図207-1～3は土師器の鉢である。1は底部がやや上げ底状で、底部が非常に薄く作られている。外面にはハケメ調整、内面にはヘラナデとヘラケズリを施す。2は、平底で、やや偏平な体部、外傾する口縁部をもつ。外面にヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。3はやや口縁部が外反する丸底の鉢である。内面にはヘラミガキを施し、外面にはナデを施す。外面には一箇所擦痕が見られる。

4・5は土師器の複合口縁の壺である。4は比較的小型の壺で、底部が上げ底ぎみで、外側に飛び出した形態である。5は器形の歪みが強い。出土時に内部に溜まっていた堆積土を水洗いしたと

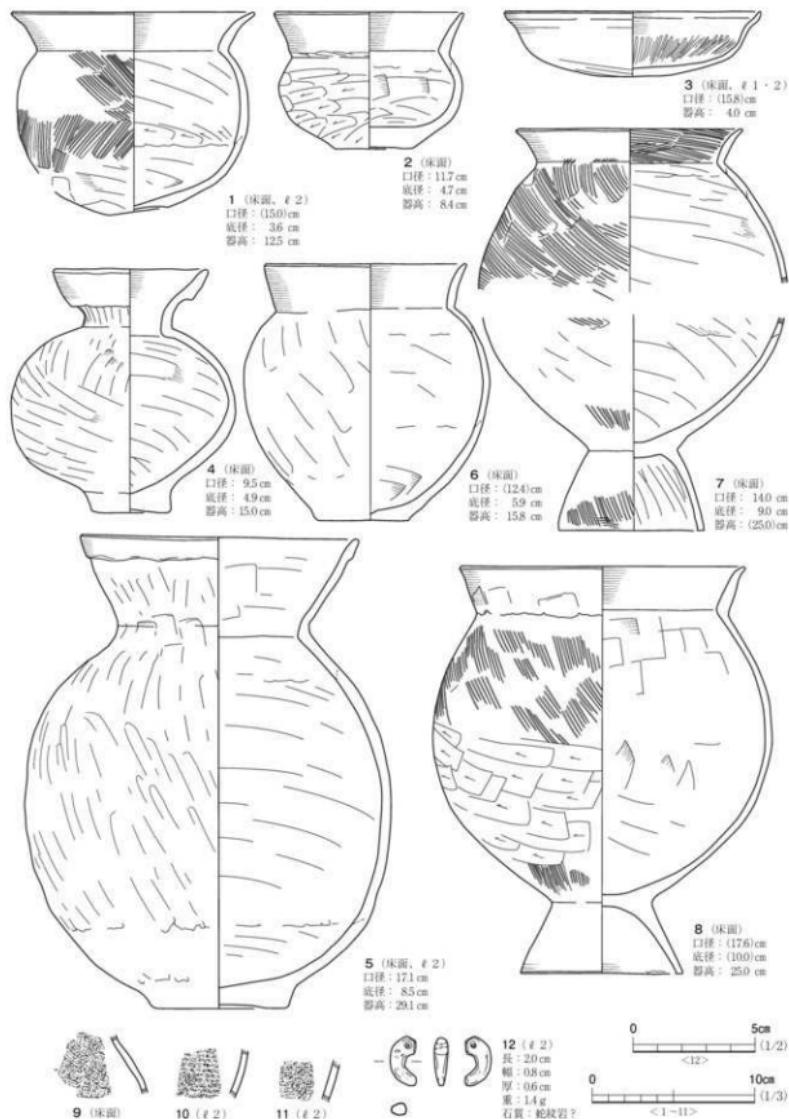


図207 105号住居跡出土遺物

ころ焼米が10点ほど出土した。6は球胴形の甕である。

7・8は土師器の台付甕である。いずれも、台部の上に球形の体部がのり、「く」字に外傾する口縁部をもつ。外面にハケメ調整を施した後に胴部下半をヘラケズリで調整している。

9~11は、弥生土器の壺の地文のみの胴部片である。弥生土器はいずれも遺構外から流れ込んだものと考えている。

12は石製品で蛇紋岩製の勾玉である。

まとめ

本遺構は、 6.0×5.5 mほどのおおむね方形の堅穴住居跡である。床面中央付近には地床炉1箇所が検出された。遺構の重複関係から、遺構が集中するこの区域ではもっとも新しい住居跡の一つと考えられる。床面上に堆積するℓ1下面からは、複数点の土器や蛇紋岩製と思われる勾玉が出土している。また、床面中央から出土した壺の堆積土からは、焼米が出土した。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

106号住居跡 S I 106

遺構(図208、写真130)

本遺構は、V区北部のU-15・16グリッドに位置している。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は94号住居跡で本遺構が古い。

堆積土は、2層に区分した。ℓ1は炭化物が多く含む褐色砂質土である。ℓ2は炭化物が多く含む暗褐色砂質土である。堆積過程は、94号住居跡に壊されており、不明確な部分が多い。しかしいずれの層にも炭化物が多く含まれていることから、人為的に埋められていると考えている。

遺構の平面形は、方形である。規模は、 3.9×3.7 mである。周壁は、残りの良い東壁側では60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で38cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に5度傾く。床面は、LIV下面に構築しており、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットが1基である。ピットは、北壁側の床面中央に位置する。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。規模は、直径56cm、深さは10cmである。堆積土は炭化物が多く含む灰黄褐色土である。

遺物は、床面の北東隅付近から堆積土下部にかけて、土師器2点がまとまって出土した。

遺物(図208、写真400)

遺物は、土師器が9点出土し、そのうち2点を図示した。

図208-1は高杯である。杯部が逆「ハ」字状の器形である。脚部を欠損する。内面には入念なヘラミガキを施す。2は甕の口縁部から胴部下半にかけて遺存している。

まとめ

本遺構は、3.9mの方形の堅穴住居跡である。北壁の床面中央に貯蔵穴が位置する。所属時期は、検出面や遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

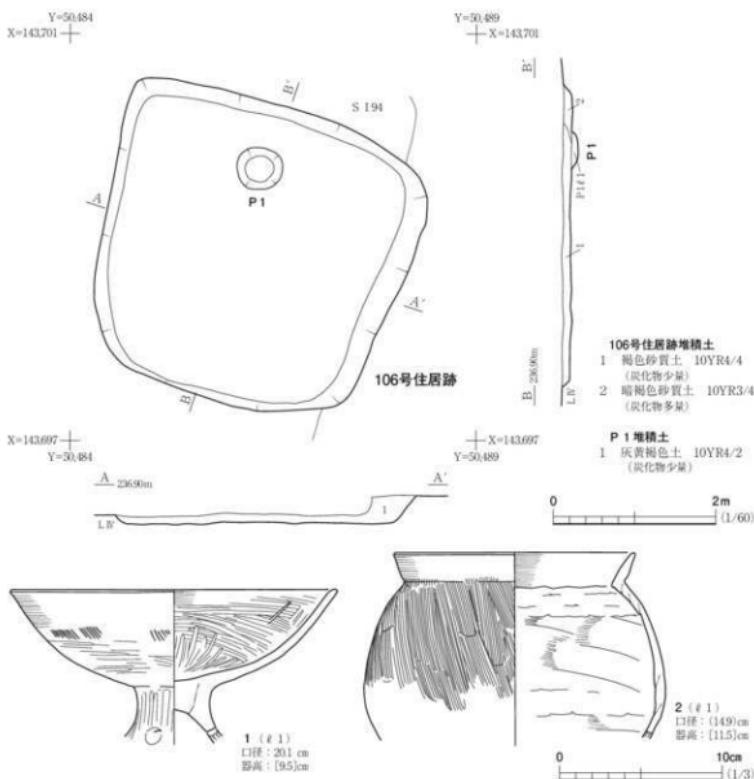


図208 106号住居跡・出土遺物

107号住居跡 S I 107

遺構 (図209、写真131)

本遺構は、V区北部のU-15・16グリッドに位置している。標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は94・128・138・141号住居跡である。新旧関係は、94号住居跡より古く、128・138・141号住居跡より新しい。

堆積土は、炭化物を少量含む暗褐色砂質土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形はおおむね隅丸方形である。規模は4.3×4.1mである。周壁は残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で15cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に13度傾く。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。おおむね平

坦であるが、一部傾斜している部分がある。踏み締まりは弱く、硬化面も認められない。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央から北に寄った位置で1箇所検出した。炉の燃焼部は床面の高さより5cmほど高くなっている。炉の規模は、90×80cmで暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは、3cmである。

ピットは2基検出した。P1は、北東隅の床面に位置し、貯蔵穴と考えている。規模は、直径60cm、深さ16cmである。堆積土は炭化物を多く含む灰黄褐色土である。P2は、南東隅に位置する。規模は直径45cm、深さ15cmであるが、機能は不明である。

遺物(図209)

遺物は土師器26点、弥生土器3点が出土し、このうち弥生土器2点を図示した。

図209-1・2は口縁部片で、山形突起がつく。口縁部には沈線で弧線を描き、肥厚部下端には刻みが連続的に施文される。周辺の造構から入り込んだと推測している。土師器はいずれも小片であり図示していないが、ハケメ調整を施した甕の胴部片が多く、古墳時代前期の所産である。

まとめ

本遺構は、4.3mの隅丸方形の堅穴住居跡である。床面中央の北壁側に地床炉をもつ。所属時期



図209 107号住居跡・出土遺物

は、検出面や遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

108号住居跡 S I 108

遺構 (図210、写真132)

本遺構は、V区北部のT・U・16グリッドに位置しており、標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、94・105・112・113・129・130・137・138・140・189号住居跡、137・138号土坑である。重複関係は、本遺構が105・112号住居跡より古く、それ以外の住居跡より新しい。

堆積土は、炭化物を多く含み焼土粒を微量含む、にぶい黄褐色砂質土の単層である。堆積過程

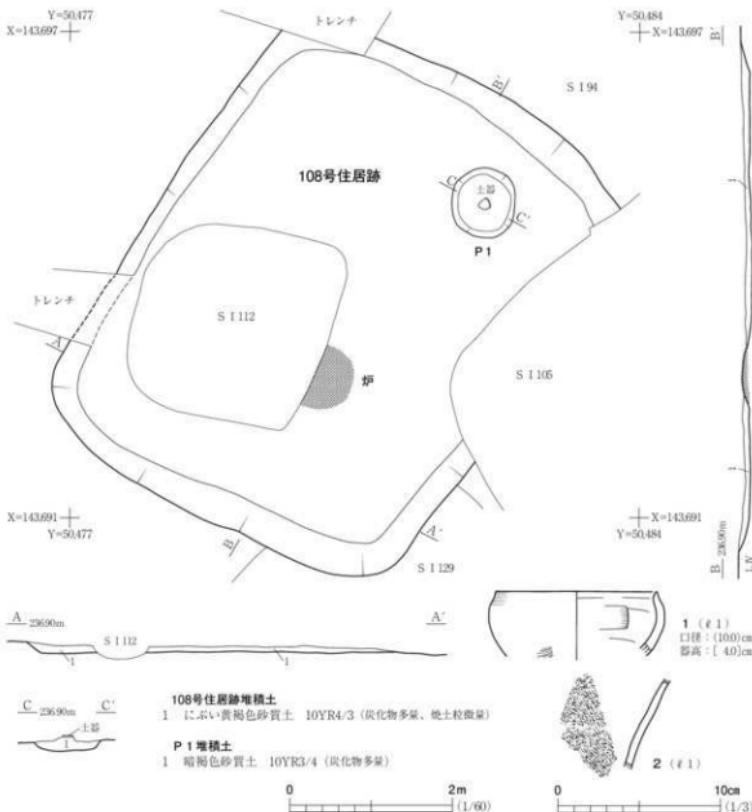


図210 108号住居跡・出土遺物

は、層厚が薄いため不明である。

平面形は隅丸長方形で、規模は $6.3 \times 5.0\text{m}$ である。周壁は遺存状態の良い南壁側で20度で立ち上がる。壁の高さはもっとも残りの良い北壁で10cmである。方位は残りの良い西壁を基準とするなら北から東に30度傾く。床面はL IV下面に構築しており、おおむね平坦で、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面中央からやや南側に寄った位置で1箇所検出した。炉の平面形は、西側を112号住居跡に壊されているが、円形と推測している。炉は床面より8cmほど高く作られている。炉の底面は、直径78cmの範囲で、にぶい赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは6cmである。

ピットは1基確認した。P 1は北東隅よりやや西側に作られており、貯蔵穴と考えている。平面形は円形である。規模は直径84cm、深さ17cmである。堆積土は暗褐色砂質土である。

遺物は西側のℓ 1から散在して出土した。弥生土器は混入したものである。

遺 物 (図210)

遺物は土師器2点、弥生土器12点が出土した。このうち土師器1点、弥生土器1点を図示した。図210-1は、土師器の鉢の口縁部片である。2は撫糸を地文とする弥生土器の胴部片である。

ま と め

本遺構は、 $6.3 \times 5.0\text{m}$ の隅丸長方形の堅穴住居跡である。地床炉1箇所と貯蔵穴と考えられるピットが検出された。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。(中野)

109号住居跡 S I 109

遺 構 (図211、写真133)

本遺構は、V区北部のU・V-16・17グリッドに位置している。標高236.8m付近の平坦面上に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、105・113・114号住居跡である。重複関係は、105・113号住居跡より本遺構が古く、114号住居跡より新しい。

堆積土は、5層に区分した。ℓ 1は暗褐色砂質土で、ℓ 2はにぶい黄褐色砂質土、ℓ 3・4は褐色砂質土でいずれもレンズ状に堆積している。ℓ 5は壁ぎわに三角堆積を示すにぶい黄褐色砂質土である。いずれの層も自然堆積土と考えている。

平面形は隅丸長方形である。規模は $7.5 \times 5.7\text{m}$ である。周壁は残りの良い東壁側では50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で40cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対し東に20度傾く。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。部分的に凹凸があるが、おおむね平坦に作られており踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットが1基である。ピットは、東壁側の床面中央に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は梢円形で、規模は長軸80cm、短軸75cm、深さ15cmである。堆積土は炭化物を少量含むにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、堆積土上部から散発的に出土しており、周囲からの流れ込みと考えている。

遺物(図211)

遺物は、土師器40点、弥生土器20点が出土した。そのうち弥生土器4点を図示した。

図211-1~4は、弥生土器の胸部破片である。1・2は同一個体で撫糸地文、3・4は同一個体で、附加縄文を地文とする。

まとめ

本遺構は、7.5×5.0mの隅丸方形の竪穴住居跡である。東壁側中央に貯蔵穴が位置する。所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

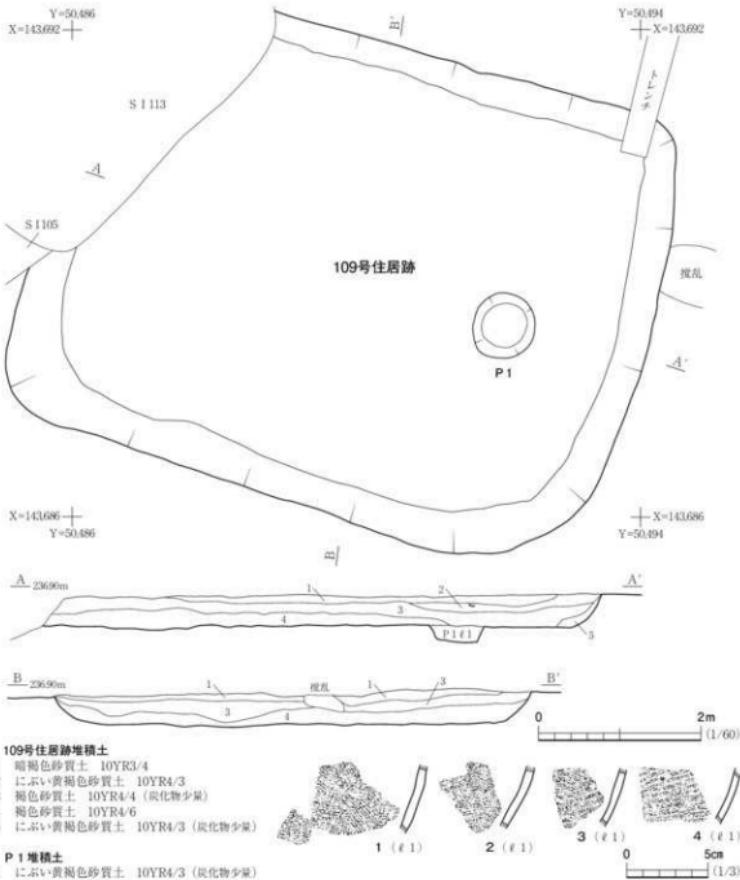


図211 109号住居跡・出土遺物

110号住居跡 S I 110

遺構 (図212、写真134)

本遺構は、V区北部のV-16グリッドに位置している。標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、126・127号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は、5層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 2は褐色砂質土、 ℓ 3はにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 4は暗褐色土である。これらはいずれも水平に堆積しており、人為堆積土と考えている。 ℓ 5は床面を覆っており、粗粒の褐色砂質土で基盤層に近似している。周辺からの流入土または壁面の崩落土と考えている。

平面形は、おおむね隅丸方形である。規模は、5.4×4.8mである。周壁は、残りの良い東壁側では80度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で40cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に10度傾く。床面は、L IV下面に構築しており、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

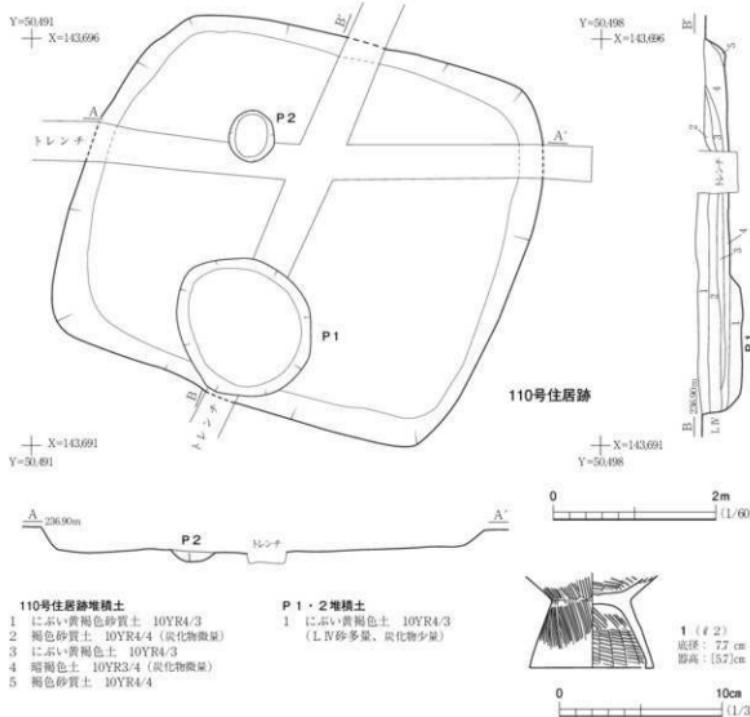


図212 110号住居跡・出土遺物

住居内の施設は、ピット2基である。P1は、南壁側の床面中央に位置する。平面形は楕円形で貯蔵穴と考えている。規模は、長軸185cm、短軸165cm、深さ17cmである。P2は、床面中央よりやや北西側に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ13cmである。ピットの堆積土は、LIV②粒を多量に含み、炭化物を少量含むにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、堆積土上層から散発的に出土しており、周間からの流れ込みと考えている。

遺物（図212）

遺物は、土師器85点が出土し、1点を図示した。図212-1は台付壺の台部片である。

まとめ

本遺構は、5.4mの隅丸方形の堅穴住居跡である。南壁中央に貯蔵穴と、床面中央に性格不明のピットが位置している。堆積土の状況からは、堅穴の埋没が始まった段階で、人為的に埋めていると思われる。所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。（中野）

111号住居跡 S I 111

遺構（図213、写真135）

本遺構は、V区北部のT-15・16グリッドに位置しており、標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、116号住居跡と138号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は、5層に区分した。 ℓ 1は褐色砂質土、 ℓ 2はにぶい黄褐色砂質土で、いずれもLIIIb②に対応する。 ℓ 3は褐色砂質土、 ℓ 4は焼土粒と炭化物を少量含む暗褐色砂質土である。これらは中央にレンズ状に堆積している。 ℓ 5は壁側に堆積した褐色砂質土で、壁面の崩落土である。堆積状況からいずれも自然堆積土と思われる。

遺構の平面形は、西側を搅乱で失っているが、おむね隅丸長方形である。規模は南北で60mである。周壁は遺存状態の良い東壁側では45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で20cmである。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に30度傾く。床面は、掘形底面のLIV下面をそのまま利用しており、おむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉1箇所とピット1基である。

地床炉は、床面中央からやや東側に寄った位置で1基検出した。炉の平面形は楕円形である。炉の上面はあまり焼けていない。規模は長軸48cm、短軸42cmの範囲で、暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

ピットは南西壁付近で1基確認し、貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は長軸68cm、短軸60cm、深さ23cmである。堆積土は暗褐色砂質土である。

遺物は、住居跡中央の ℓ 1下部において、土師器がまとまって正位で出土している。何らかの理由で廃棄されたものと考えている。

遺物（図213、写真400）

遺物は、土師器16点が出土した。このうち土師器3点を図示した。

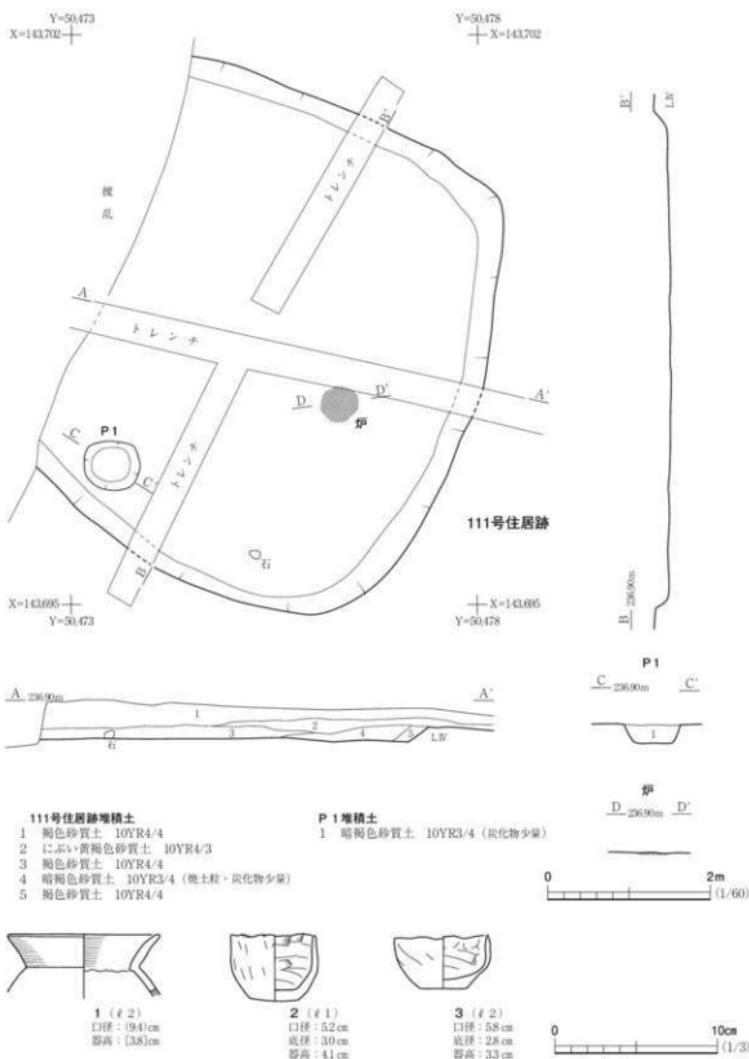


図213 111号住居跡・出土遺物

図213-1は、土師器の鉢の口縁部片である。2・3は手づくねの小型土器である。

まとめ

本遺構は、6.0mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。地床炉1箇所と貯蔵穴と考えられるピットが検出された。ℓ1から小型土器がまとめて出土した。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。
(中野)

112号住居跡 S I 112

遺構 (図214、写真136)

本遺構は、V区北部のT・U-16グリッドに位置している。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は108・130・140号住居跡、138号土坑で本遺構が新しい。

堆積土は、2層に区分した。ℓ1は、炭化物を多く含む暗褐色土である。ℓ2はにぶい黄褐色砂質土である。いずれも自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は、2.4×2.3mである。周壁は、残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で20cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に20度傾く。床面は、140号住居跡の堆積土上に構築され、平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピット2基である。P1は、南東隅に位置する。位置などから貯蔵穴と考えている。規模は、直径60cm、深さ16cmである。堆積土は炭化物を多く含むにぶい黄褐色砂質土である。P2は、北西隅よりやや東に位置する。規模は直径45cm、深さ15cmである。堆積土に焼土粒を含み、検出の際に赤褐色に見えていた。そのため炉とも考え、断ち割りを入れたが判然とせず、堆積土に焼土が含まれるピットとして扱った。

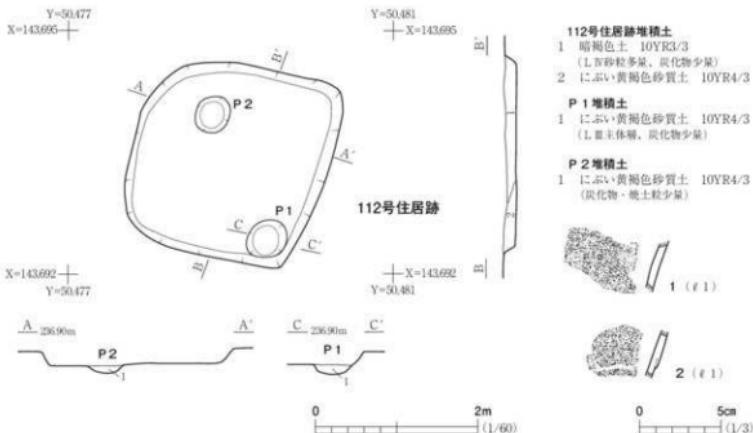


図214 112号住居跡・出土遺物

遺物(図214)

遺物は、弥生土器が4点出土し、そのうち2点を図示した。図214-1・2は撫糸地文の胴部破片である。これらの遺物は住居外から流入したものと考えている。

まとめ

本遺構は、2.4mの隅丸方形の堅穴住居跡である。99号住居とともに調査区内で確認された住居跡の中でもっとも小さい住居跡である。所属時期は、検出面や他遺構との重複関係などから古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

113号住居跡 S I 113

遺構(図215、写真137)

本遺構は、V区北部のU-16・17グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は94・105・108・109・114・117号住居跡である。他遺構との重複関係は、105号住居跡より古く、それ以外の遺構よりは新しい。

堆積土は、2層に区分した。 ℓ 1は炭化物を多く含む、暗褐色砂質土である。住居跡の壁ぎわなどで部分的に堆積している。 ℓ 2は、焼土粒と炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。いずれも人為的な堆積土と考えられる。

平面形は、長方形である。規模は5.3×4.3mである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で42cmである。方位は、残りの良い南西壁を基準とするなら北に対して西に50度傾く。床面は掘形底面のLIV下面や117号住居跡の堆積土を利用して構築しており、中央部には硬い踏み締まりが確認された。

住居内の施設は、地床炉1箇所とピット1基である。地床炉は、北隅よりやや南側に位置する。平面形は、楕円形である。規模は長軸55cm、短軸50cmで暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

ピットは、北東隅で1基検出した。P1は、平面形が楕円形で、規模は長軸100cm、短軸80cm、深さ38cmである。堆積土は3層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 2は灰黄褐色砂質土、 ℓ 3は褐色砂質土である。これらはピットを埋めた際の人為的な堆積土である。 ℓ 3から底面にかけて、長さ40cm、幅30cmほどの粘土の塊が出土した。

遺物は、P1の北側床面より器台が出土している。それ以外は、小破片が堆積土から散在して出土している。

遺物(図215、写真400)

遺物は土師器49点、弥生土器1点が出土した。このうち土師器1点と弥生土器1点を図示した。図215-1は、土師器の器台である。完形である。受部が直線的に開き、脚部は「八」字に開く。外面は丁寧にミガキ調整を施す。内面にはヘラナデを施す。

2は撫糸を地文とする弥生土器の体部片である。

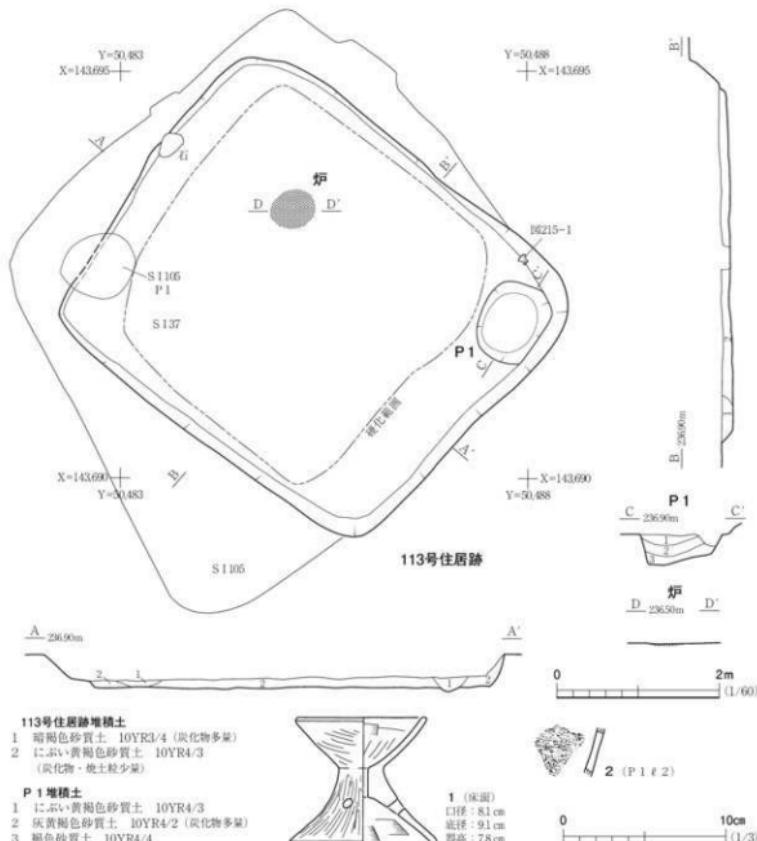


図215 113号住居跡・出土遺物

まとめ

本遺構は、 $5.3 \times 4.3\text{ m}$ の長方形の竪穴住居跡である。床面中央には地床炉1箇所、北東隅からは貯蔵穴が検出された。遺構の所属時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。(中野)

114号住居跡 S I 114

遺構 (図216、写真138)

本遺構は、V区北部のU-17グリッドに位置している。標高236.6mの平坦面に立地する。検出面はLIVである。105号住居跡を検出する際に、南側に暗褐色土が広がる範囲を確認したことか

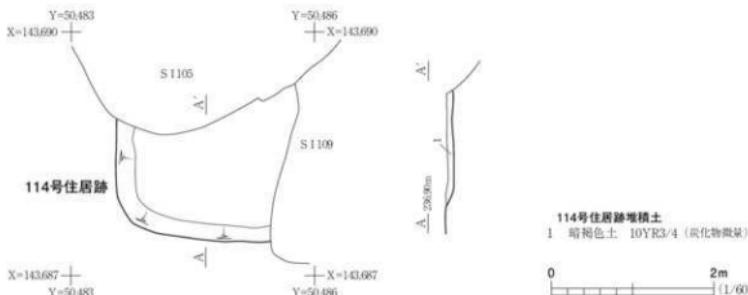


図216 114号住居跡

ら住居跡として調査した。重複する遺構は、105・109・113・117号住居跡である。重複関係は、105・109号住居跡より古く、113・117号住居跡との新旧関係は不明である。

堆積土は、炭化物を微量含む暗褐色土の単層である。堆積過程は、層厚が薄いため不明である。

遺構の平面形は、北側を105号住居跡に、東側を109号住居跡に壊されており、確定できないが、方形ないし長方形と考えている。規模は遺存長が20mである。周壁は残りの良い南壁側で、30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁中央で8cmである。方位は、西壁を基準とするなら北に対して東に2度傾く。床面は、掘形底面であるLIV下面をそのまま利用している。おおむね平坦かつ水平であるが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、検出されておらず、遺物も出土していない。

まとめ

本遺構は、遺構の重複が激しく、遺存状態が悪く不明な点が多いが、方形ないし長方形の住居跡と考えている。遺構の所属時期は、遺物は出土していないものの、重複関係などから弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

115号住居跡 S I 115

遺構 (図217、写真139)

本遺構は、V区北部のT-16グリッドに位置しており、標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。平成27年度調査の際に設定した土層確認用トレンチにおいて、複数の遺物が出土していたことから、遺構の存在が推定された。そのため平成28年度調査時に周辺を精査した結果、5mほどの範囲に広がる暗褐色土を確認したため、住居跡として調査を行った。

重複する遺構は、130・140・193号住居跡である。本遺構がいずれの住居跡よりも新しい。

堆積土は、炭化物を多く含む、暗褐色土の単層である。トレンチによって失われた部分もあるが、床面まで均質的に堆積していることから、人為的に埋めた土と考えている。

遺構の平面形は、おおむね隅丸長方形である。規模は5.0m以上×4.3mである。方位は東壁で北

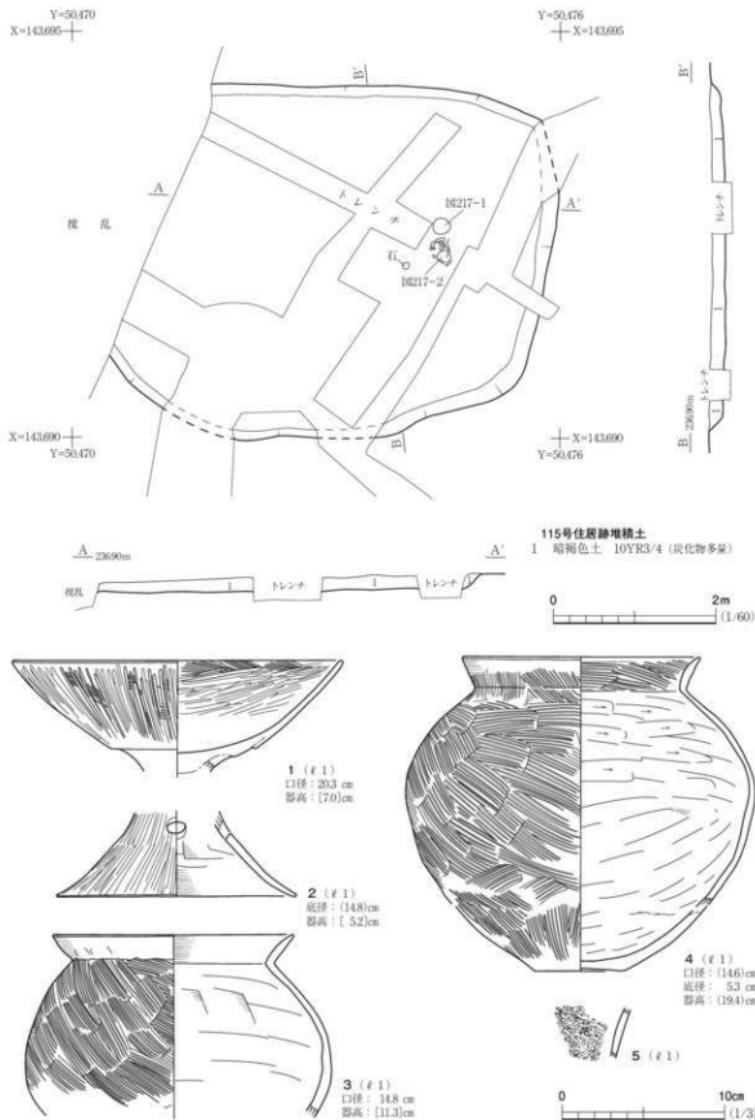


図217 115号住居跡・出土遺物

から10度東を示す。周壁は遺存状態の良い東壁側では45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で20cmである。床面は、130号住居跡の堆積土を掘り込んで構築している。おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、確認されなかった。

遺物は、住居中央東側、ℓ 1から窓が2点出土している。図217-2は逆位で、3は横倒しの状態で出土しており、住居跡を埋める際に廃棄されたものと考えている。

遺 物 (図217、写真400)

遺物は土師器153点、弥生土器8点が出土し、このうち土師器3点、弥生土器1点を図示した。

図217-1は杯部が外傾する高杯である。杯部下半に棱をもつ。ハケメの後にミガキを施す。2は裾が「八」字に開く高杯の脚部である。外面がミガキ調整される。3・4は球胴形の壺である。5は弥生土器の附加縄文を施す胴部片である。弥生土器は他遺構から混入したものと思われる。

ま と め

本遺構は、5.0m以上×4.3mの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は確認されなかつた。堆積土の状況から埋められているものと考えている。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

116号住居跡 S I 116

遺 構 (図218、写真140・271)

本遺構は、V区北部のT-15・16グリッドに位置しており、標高2365m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。111号住居跡の床面を精査している際に、北東隅から南側にかけて、3m前後の範囲に広がるにぶい黄褐色土を検出したことから、別の住居跡として調査した。

重複する遺構は、111・138・141号住居跡である。重複関係は、本遺構が111号住居跡より古く、それ以外の住居跡より新しい。

堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。堆積過程は、床面まで均質的に堆積していることから人為堆積土と考えている。

遺構の平面形はおおむね隅丸長方形で、規模は3.6×3.1mである。方位は西壁で北から25度東を示す。周壁は遺存状態の良い西壁側では30度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で10cmである。床面は138号住居跡の堆積土を掘り込んで構築している。おおむね平坦かつ水平に作られているが、踏み締まりは弱く、硬化面は確認されなかつた。

住居内の施設は一切検出されなかつた。しかし、床面南東隅付近からは、直径8mmほどの管状の植物が炭化した状態で出土した。炭化材は残りが悪く、すべては検出できなかつたが、10個ほど遺存していた。管状の炭化材は、壁に沿うように列状に並んでいるものと考えられ、住居壁の構築材の一部であると判断した。壁ぎわに細い竹などで簾状のものを作り、それを壁ぎわに沿わせて立てて用いていたものと推測している。

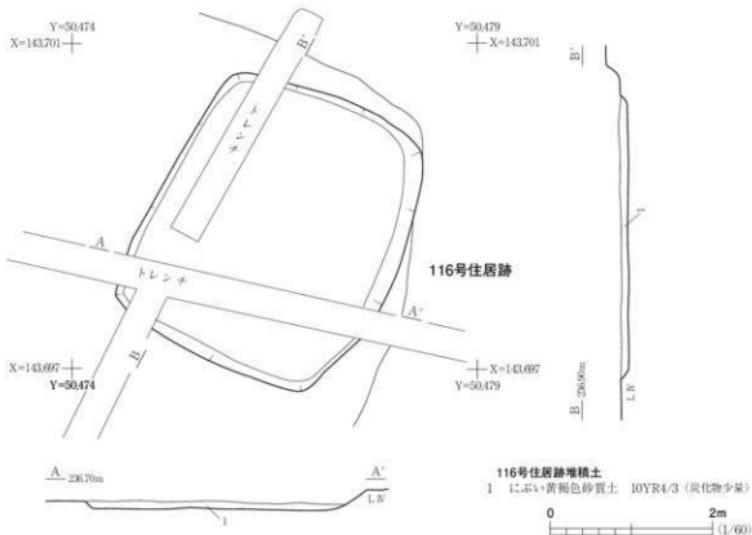


図218 116号住居跡

遺物は、遺構内から出土しなかった。

まとめ

本遺構は、 3.6×3.1 mの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は検出できなかったが、南東壁ぎわから管状の炭化材が列状に出土しており、壁を補強するのに竹などを簾状にして、壁ぎわを補強していたものと推測している。遺構の所属時期は、出土遺物がないため、判断に迷うが、遺構の重複関係などから古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

117号住居跡 S I 117

遺構 (図219、写真141)

本遺構は、V区北部のU-16・17グリッドに位置しており、標高236.7 m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、94・105・108・109・113・114・117号住居跡である。重複関係は、105・113号住居跡より古く、それ以外の遺構よりは新しい。113号住居跡の床面精査の際に、一回り小さく方形に広がる遺構の範囲を確認し、住居跡として調査した。

堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1は炭化物を多く含む暗褐色砂質土である。 ℓ 2は、周溝に堆積する、炭化物を多量に含み、焼土粒を少量含む暗褐色砂質土である。 ℓ 3も周溝に堆積したにぶい黄褐色砂質土である。いずれの堆積土も人為的な堆積土と考えられる。

平面形は、長方形である。規模は 4.4×3.9 mである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で70度で

立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で13cmである。方位は、113号住居跡とはほぼ同じで、残りの良い北西壁を基準とするなら北に対して西に50度傾く。床面は掘形底面であるL IV下面をそのまま利用しており、踏み締まりは弱い。

住居内の施設はピットと周溝である。ピットは北側で2基並列するように検出した。どちらも貯蔵穴の機能を考えている。P 1は北隅に位置し、平面形が不整な円形を呈する。直径120cm、深さ28cmである。堆積土は2層に区分した。①はにぶい黄褐色砂質土、②は褐色砂質土である。これらは人為的に埋めた土である。P 2は東隅に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸125cm、短軸118cm、深さ22cmである。堆積土は褐色砂質土の単層で、人為的に埋めた土である。

周溝は、北西壁側から北東壁、南東壁にかけて巡っている。北西壁の隅では周溝の端部が住居の内側に膨らむ。周溝の断面形は、V字状となっている。規模は、北西壁側が長軸3.0m、最大幅52cm、深さ20cmである。北東壁側は長軸3.3m、最大幅25cm、深さ15cmである。南東壁側は、長

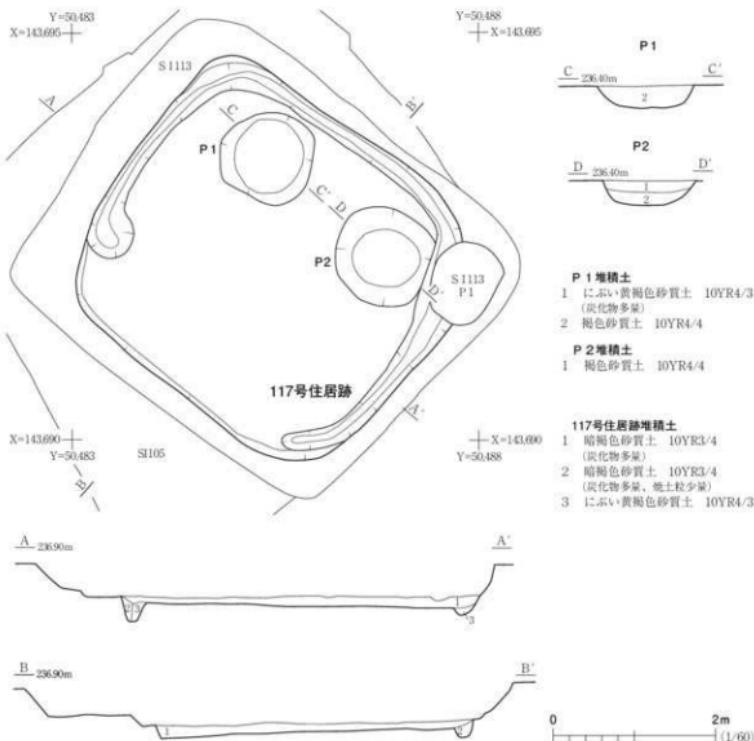


図219 117号住居跡

軸3.5m、最大幅50cm、深さ8cmである。

遺物は、土器が30点出土した。小片のため図示していないが、器台片や壺などの小片が堆積土やピット内から少量出土している。いずれも古墳時代前期のものである。

まとめ

本遺構は、4.4×3.9mの長方形の堅穴住居跡である。貯蔵穴が2基と南壁側以外からは周溝も検出された。113号住居跡と重複し、主軸方位や住居の平面形に共通点が多いことから、近い時期に建てられたか、建て替えの可能性と考えている。遺構の所属時期は、遺構の重複関係や出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

118号住居跡 S I 118

遺構 (図220、写真142)

本遺構は、V区北部のV-15・16グリッドに位置しており、標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。100号住居跡の完掘写真撮影のための遺構精査で、床面中央に4×3mほどの遺構範囲を確認したことから住居跡として調査を行った。重複する遺構は、100・102・103・126・127号住居跡である。本遺構が100号住居跡より古く、それ以外の住居跡との重複関係は明確にできなかった。

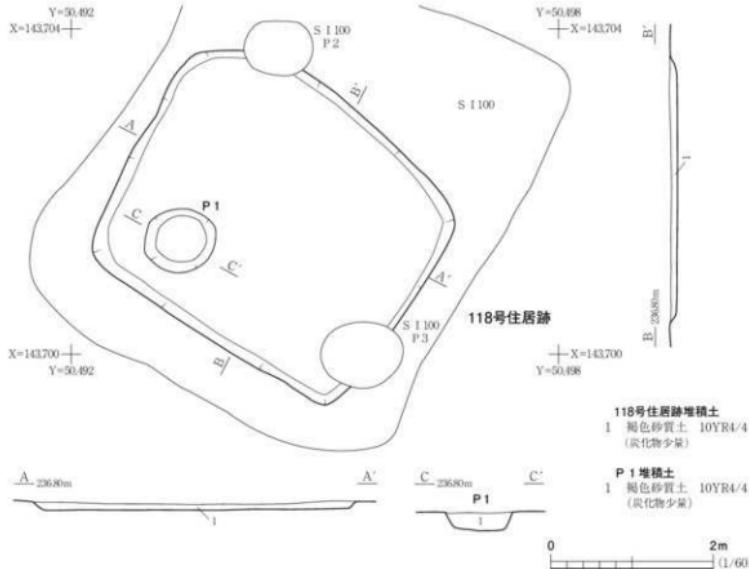


図220 118号住居跡

堆積土は、炭化物を含む褐色砂質土で、床面まで均質に堆積することから、人為堆積土と考えられる。

遺構の平面形は長方形である。規模は $3.9 \times 3.4\text{m}$ である。周壁は遺存状態の良い南壁側では45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している北壁で8cmである。方位は、100号住居跡とほぼ同じで、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に20度傾く。床面は、L IV下部に構築しており、おむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は貯蔵穴と思われるピット1基である。南西隅付近に位置し、規模は直径84cm、深さ20cmで、底面は平坦に掘り込まれている。堆積土は炭化物を含む褐色砂質土である。

遺物は、土師器が3点出土した。図示していないが、いずれも壺の胴部片である。

まとめ

本遺構は、 $3.9 \times 3.4\text{m}$ ほどの長方形の堅穴住居跡である。ピットが1基検出された。重複する100号住居跡と方位をほぼ同じにしている。住居跡は、堆積土の状況から廃絶後に埋めているものと考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。
(中野)

119号住居跡 S I 119

遺構 (図221、写真143)

本遺構は、V区北部のU・V-14・15グリッドに位置しており、標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、位置的に104号住居跡と重複するが、確認調査のトレンチが被っていたため明確にできなかった。85号土坑の検出の際に、溝らしき範囲を確認し、精査した結果、住居跡と判明した。遺存状態は悪く、周溝とピットのみが検出された。

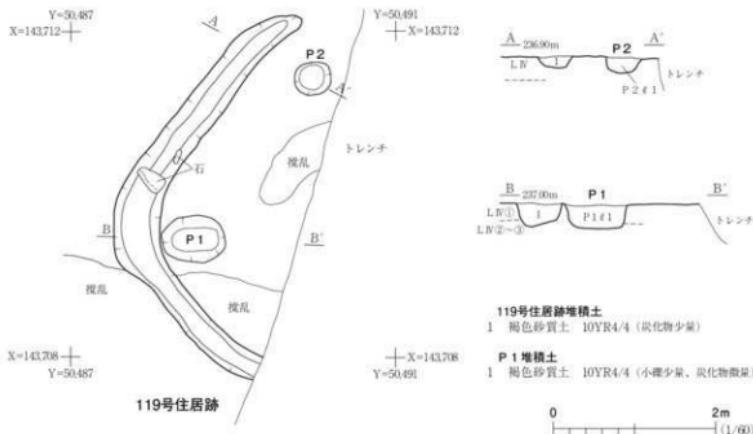


図221 119号住居跡

堆積土は、炭化物を少量含む褐色砂質土の単層である。周溝に堆積しており、堆積過程は明らかにできなかった。

平面形は、西側の一部のみの検出で不明確な点が多いが、方形ないし長方形と考えている。規模はもっとも残りがよい部分で3.7mである。方位は、残りの良い西側の周溝上端を基準とするなら北に対して東に30度傾く。床面はL IV下面に構築しており、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットと周溝である。ピットは、2基検出した。P 1は、南西隅に位置し、平面形が橢円形を呈する。規模は80×57cm、深さ28cmである。P 2は北西隅に位置する。平面形は円形を呈する。規模は直径44cm、深さ19cmである。ピットの堆積土は、褐色砂質土の単層で、小礫と炭化物を含む。ピットの機能は不明である。

周溝は、南壁側から西壁にかけて巡っている。周溝の断面形は、「U」字状に掘り込まれている。規模は、南壁側の遺存長が2.5m、最大幅が30cm、深さが最大で20cmである。西壁側は長軸が3.6m、最大幅が50cm、深さが最大で28cmである。

遺物は、土師器が5点出土した。図示していないが、壺などの小片が周溝堆積土から少量出土している。いずれも古墳時代前期のものである。

まとめ

本遺構は、3.7mの方形ないし長方形の堅穴住居跡である。ピット2基と周溝が検出された。遺構の所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。(中野)

120号住居跡 S I 120

遺構 (図222、写真144・266)

本住居跡は、V区のP・Q-20・21グリッドで、褐色土の範囲として検出された。標高236.2mの平坦な場所である。検出面はL IVである。123号住居跡と本住居跡の南西隅がわずかに重複するが、前後関係は明らかにできなかった。北に9・44号住居跡、東に28号烟跡が隣接する。検出の当初、9・44号住居跡と近接する北辺の大部分は遺構の範囲がはっきりせず、土層観察用畦を残しながら、検出面からさらに10cmほど掘り下げて検出を行った。

平面形は東西に長い隅丸長方形で、規模は東西7.4m、南北6.2mである。西辺は北から39度西に傾く。壁は南側でもっとも残りがよく最大で42cmが、北西隅のもっとも残りの悪い部分で25cmが遺存していた。壁は、東西が50~60度の比較的緩やかな角度で、南北が70~80度の比較的急な角度で立ち上がる。床面は中央部を除いて貼床が施されており、水平で平坦である。

掘形の底面は緩やかな凹凸があり、最大で15cmの厚さをもつ。床面中央部は掘形の底面をそのまま床面としていた。

堆積土は、レンズ状に自然堆積する3層と、貼床の構築土からなる。 ℓ 1は褐色砂質土、 ℓ 2は暗褐色砂質土、 ℓ 3は黒褐色砂質土である。 ℓ 3は南壁ぎわに堆積する層で、炭化物粒と焼土塊をやや多く含んでいた。 ℓ 4は褐色砂質土で、貼床である。

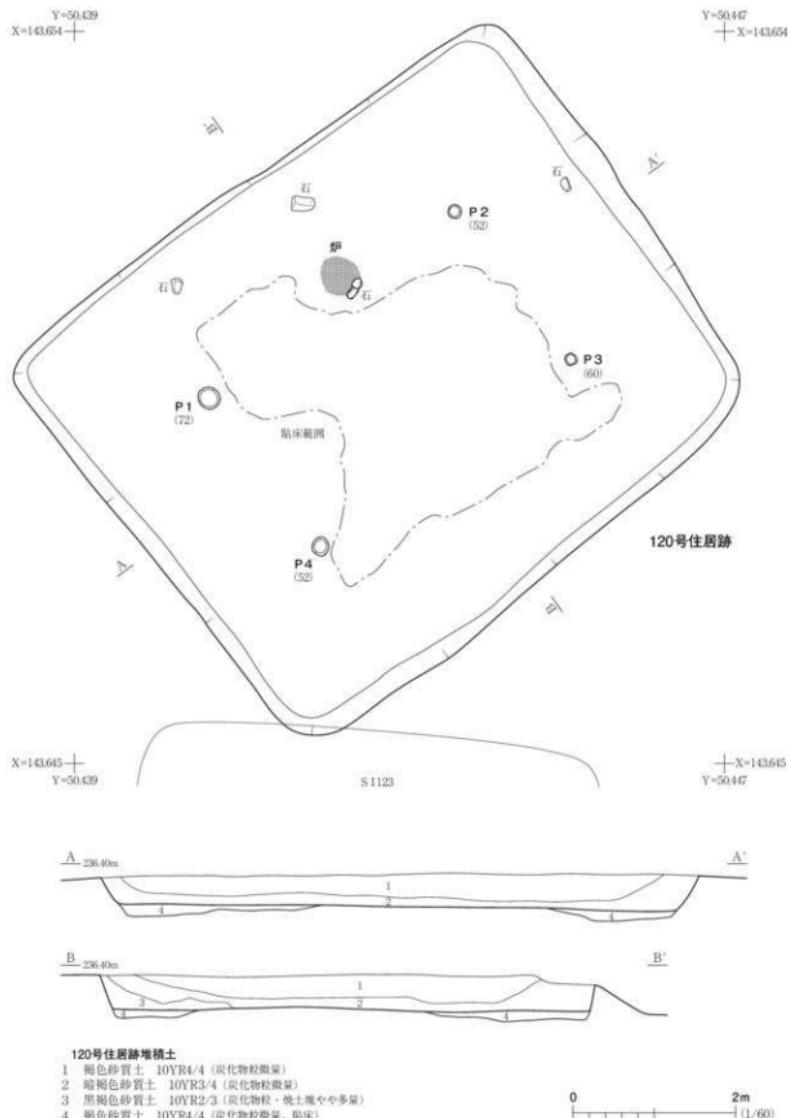


図222 120号住居跡

住居内の施設は、地床炉1箇所、柱穴4基が検出された。地床炉は、床面中央から北に寄ったP1・2のはば中間、両ピットを結んだ線のやや外側に位置する焼土面として検出された。平面形は楕円形で、もっとも長い部分で55cmを測る。地床炉のすぐ脇には2個の自然石が焼土化した部分の外縁に沿うように置かれていた。

4基の柱穴は四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置され、いずれも柱痕跡は確認されなかった。これらを北西隅から時計回りにP1～4とした。

4基の柱穴を結ぶ線は本住居跡の平面形に相似して東西方向に長く、柱穴の距離は北辺から時計回りに、38m、23m、38m、23mである。床面からの深さは、P1が72cmである。その他の柱穴については底面まで確認できなかった。

地床面からは、3個の自然礫が、地床炉におかれた礫とは別に出土した。

遺物は堆積土と貼床から出土している。堆積土には少量の土器が含まれ、ℓ1から完形の土師器が3点、土師器と弥生土器の破片が少量出土した。この他、貼床から土師器高杯の杯部が破片の状態で出土した。

遺物 (図223、写真401・435・436)

本住居跡からは、土師器23点、弥生土器13点が出土し、土師器4点、弥生土器3点を図示した。

図223-1は、土師器の高杯である。脚部を欠失する。ややつぶれた半球形の体部に長く緩やかに内面側に湾曲する口縁部をもつ。両者の境は、外面にわずかなくびれを、内面には明瞭な稜を作る。口縁部の高さは体部の高さをやや凌駕する。内外面ともミガキ調整が施される。

2は、土師器の鉢である。円板形の底部と楔形の体部、無頸の口縁部をもつ。外面にハケメ調整、内面にヘラナデ調整を施す。

3は、土師器の小型の鉢である。平底とつぶれた球形の体部、短く外傾する口縁部をもつ。口縁部は、輪積み痕を外面側に肥厚させた段が巡る。4は、鉢を模したミニチュアである。

5～7は、弥生土器で、いずれも破片である。5は波状口縁で、波頂部にヘラ状工具による刻み

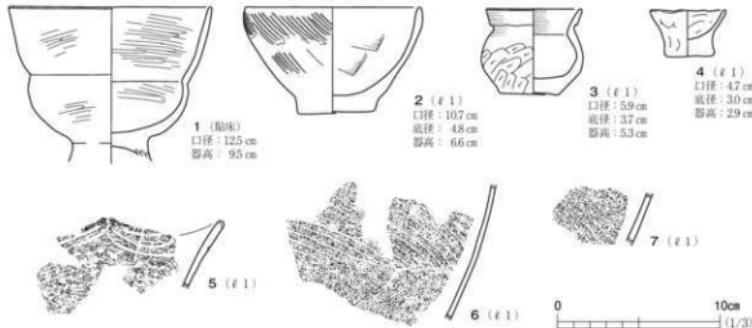


図223 120号住居跡出土遺物

を入れ二山に作る。結節のある撫糸を地文とし、波頂部を起点とする沈線を口縁部に沿って左右にそれぞれ2条と3条引き弧線文とする。沈線直下には竹管による刺突列が3列巡る。

6・7は同一個体で、羽状の撫糸を施し、外面に炭化物が付着する。

まとめ

平面形が隅丸長方形の比較的大型の住居跡で、一間四方の4本柱で上屋を支える構造である。2個の自然石を置いた地床炉をもつ。出土土器には弥生時代終末期と古墳時代前期の両者が含まれるが、住居跡の構造などの特徴から、古墳時代前期に位置づけられる。
(青山)

121号住居跡 S I 121

遺構(図224、写真145・146・266)

本住居跡は、V区中央部のR・S-21グリッドのLIVで、褐色土の範囲として検出された。標高236.3mの平坦な場所である。本住居跡の南西部が122号住居跡と、北西部が157号住居跡と、北東部が104号土坑と重複し、本住居跡がもっとも新しい。南側には101号土坑が隣接する。

平面形は東西にやや長い隅丸長方形で、規模は、5.3×4.8mである。東辺は北から35度東に傾く。壁は最大で26cm、最小で17cmの高さで遺存していた。壁の立ち上がりは四周とも約60度である。床面の全面に貼床が施され、最大10cmの厚さをもつ。床面は水平で平坦である。掘形の底面はやや凹凸がみられた。

堆積土は3層からなる。ℓ1はにぶい黄褐色砂質土、ℓ2は黒褐色砂質土で、炭化物粒を多く含む。いずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積土と思われる。床面から炭化材が出土したことからも、廃絶時に火を受けたと考えられる。ℓ3は貼床である。

住居内の施設は、地床炉1箇所、柱穴4基、貯蔵穴と考えられるピット1基が検出された。

地床炉は、床面中央から西に寄ったP1・4のはば中間、両ピットを結ぶ線のやや内側に位置する焼土面として検出された。平面形は梢円形で、もっとも長い部分で58cmを測る。地床炉の東端には、1個の長く偏平な自然石が焼土化した部分の縁に沿うように置かれていた。

4基の柱穴は、四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置される。いずれも柱痕跡は確認されなかつた。これらを北西隅から時計回りにP1～4とした。4基の柱穴を結ぶ線は本住居跡の平面形と相似して東西方向に長く、柱穴間の距離は北辺から時計回りに、2.5m、2.0m、2.4m、2.0mである。

貯蔵穴と考えられるピットは、東壁ぎわの中央やや北寄りに位置する。これをP5とした。平面形は壁に沿う方向に長い梢円形で、規模は最大108cm、最小54cm、床面からの深さ23cmである。

床面から出土した炭化材は北と西の壁ぎわ付近、柱穴と壁の間に多く、壁に密着し立った状態で出土した径5cmほどの炭化材もあった。次いで東と南の壁ぎわに多く散在し、床面中央部からは出土しなかつた。

遺物は、床面から一部を欠損した状態や破片の状態の土師器が4点、凹石1点が出土した他、5個の自然礫が出土した。その他、堆積土と貼床層から土器片が少量出土した。

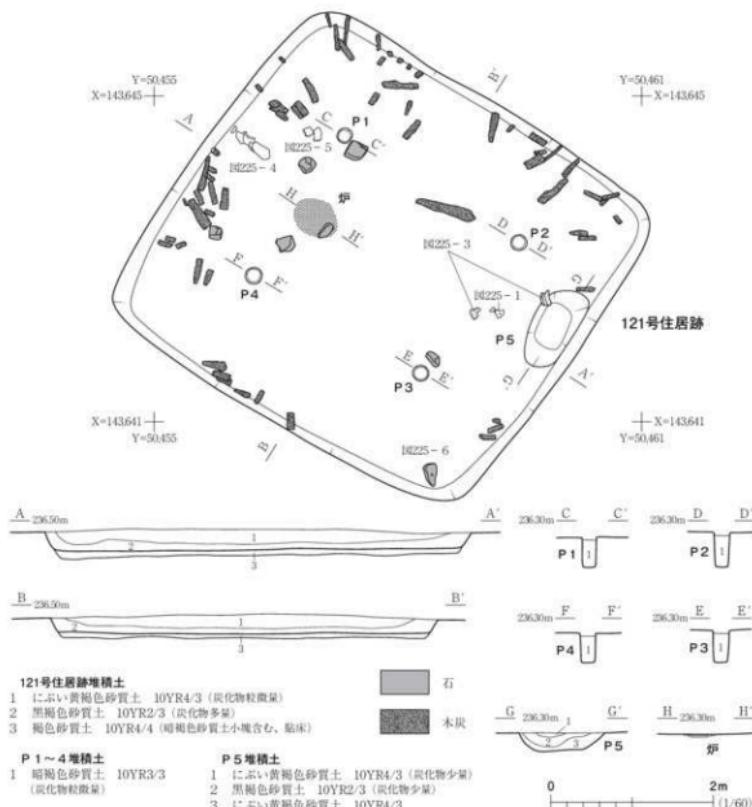


図224 121号住居跡

遺物 (図225、写真401)

遺物は、土師器117点、礫石器が2点が出土し、うち、土師器5点、礫石器2点を図示した。

図225-1は、土師器の器台である。「八」字に広がる脚部と下端に稜をもつ受け部をもつ。脚部には3方向に円窓を穿つ。外面にミガキ、受け部内面にヨコナデ、脚部内面にヘラナデを施す。

2は、土師器の鉢である。円板形の底部、張りのある体部、短く外傾する口縁部をもつ。口縁部下端には輪積みした粘土紐の接合痕を外面に残した段を巡らせる。

3は、土師器の壺である。口縁部と体部の上部が遺存する。複合口縁で、口頭部は直線的に外傾する。頭部外面には複合部を張り付ける以前に施されたハケメがわずかに観察されるが、ナデ消されている。

4は、土師器の甕である。口縁部と体部上半の一部が遺存する。緩やかに外反する「く」字口縁と球形の体部をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にきわめて細かいハケメ、体部内面にナデを施す。

5は、土師器の有孔鉢である。一孔を穿ったやや厚みのある底部から直線的に外傾する体部上端を素口縁とする。器面全体に二次被熱による赤変劣化がみられる。

6・7は凹石である。6は、自然礫の平坦な一面の中央部に敲打による直径2.5cmほどの凹みと擦痕を有する。擦痕の周辺は平滑で、砥石としても使用されたものと考えられる。表面の大部分が被熱により色調が赤変している。7は、厚さ4~5cmほどの板状の自然礫の平坦な一面に敲打による直径3cmほどの凹みを有する。礫はこの凹みを切って壊れているので、破損したものと考えられる。

まとめ

平面形が隅丸長方形の竪穴住居跡で、一間四方の4本柱で上屋を支える構造である。廃絶時に火を受けたと思われる。自然石1個を置いた地床炉をもつ。出土土器の特徴から、古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

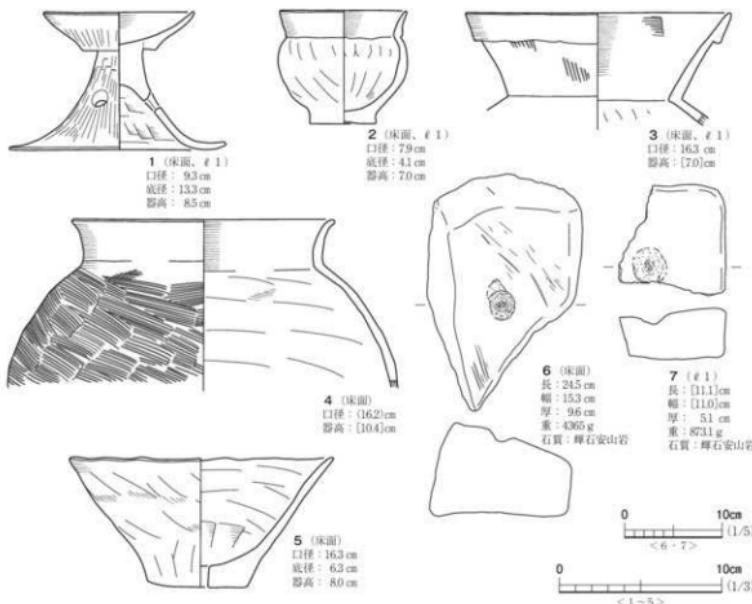


図225 121号住居跡出土遺物

122号住居跡 S I 122

遺構(図226、写真147)

本住居跡は、V区のR-21・22グリッドのLIVで検出された。標高236.4mの平坦な場所である。本住居跡の北東部が121号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。西に28号烟跡、123号住居跡が位置する。重複する121号住居跡の壁出しの際、LIVとは異なる遺構堆積土らしき土層断面が検出されたため、あらためて遺構検出作業を行い、褐色砂質土が方形に広がる範囲を確認した。

平面形は南北にやや長いややいびつな隅丸方形で、規模は、東西が6.2m、南北が6.5mである。東西辺が北から8~10度東に傾く。壁は最大で18cm、最小で13cmの高さが遺存していた。壁の立ち上がりは四周とも55度前後の比較的緩やかな角度であった。床面は中央を除いて貼床が施されている。掘形の底面には緩やかな凹凸があり、貼床の厚さは最大12cmである。中央は掘形底面をそのまま床としている。床面は水平で平坦である。

堆積土は、4層からなる。 ℓ 1は褐色砂質土、 ℓ 2は暗褐色砂質土、 ℓ 3は壁ぎわに堆積するにぶい黄褐色砂質土である。いずれもレンズ状に堆積する自然堆積土である。 ℓ 4は褐色の砂質土で、貼床である。

床面からは、地床炉10箇所、柱穴4基が検出された。10箇所の地床炉は、すべて4基の柱穴を結んだ線の内側に位置する。これらを、炉1~10とした。P1・2を結ぶ線のほぼ中央や内側に位置する炉1がもっとも強く被熱赤変していた。この炉の平面形は東西にわずかに長い楕円形で、規模は大部分で48cmである。炉の中央部は硬化してやや盛り上がり、深さ8cmまで焼土化した範囲が及ぶことを断ち割りによって確認した。

P1・4を結ぶ線のほぼ中央や内側に位置する炉3は、本住居跡でもっとも大きい地床炉である。平面形は東西に長い楕円形で、規模は大部分で56cm、深さ5cmまで焼土化した範囲が及ぶ。この他の炉の位置や規模に規則性はないが、前述のようにいずれも柱穴を結んだ線の内側、床面の中央部に位置する。また、10箇所中1箇所を除くいずれもが、貼床が貼られた部分ではなく、掘形底面を床面とする部分に位置する。

4基の柱穴は四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置され、いずれも柱痕跡は確認されなかった。これらを北西隅から時計回りにP1~4とした。4基の柱穴を結ぶ線は方形で、柱穴間の距離は北辺から時計回りに、3.2m、2.9m、3.0m、2.9mである。柱穴の掘り込みは床面下層の砂礫層上面に達したところで止まり、概して浅く、深さはP1から時計回りに、27cm、28cm、24cm、37cmである。

床面からは少量の炭化材が出土した。量的には少なく、堆積土中にも炭化物が多く含まれていなかったため、火を被った可能性は低いと考えられる。これらの炭化材の由来については、調査では得ることができなかつた。

床面から完形の土器は出土せず、一部を欠損した状態の土師器壺が西壁ぎわの床面で1点、砥石が床面の東部で1点出土した。その他、堆積土、床面、貼床から少量の土器片が出土した。

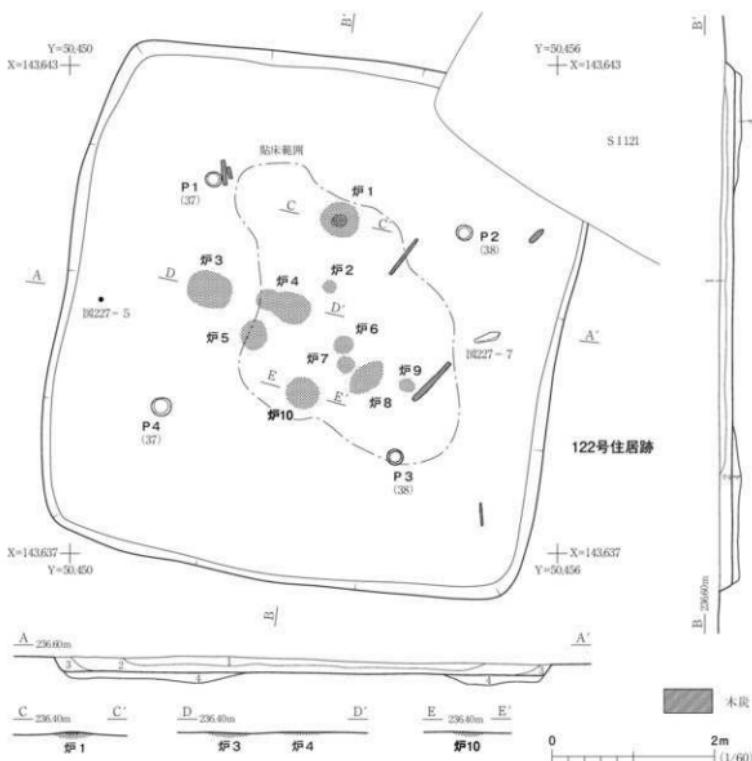


図226 122号住居跡

遺物 (図227、写真401・402)

本住居跡からは、土師器111点、土製品1点、石製品1点が出土した。このうち、土師器5点、土製品1点、石製品1点を図示した。

図227-1・2は、土師器鉢である。1の体部は楕円形で、平底を削りだし、無頭の口縁部の内面に縦を巡らせる。内外面にミガキと赤彩を施す。2は、長く延びる口縁部と半球形の体部上半の一部が遺存する。内面の磨滅が激しく、単位の不明瞭なミガキ調整と赤彩が内外面に施される。内面の口縁部直下には稜が一部にみられる。器壁は薄く、丁寧な作りである。

3は、土師器の壺である。平底と算盤玉形の体部をもつ。外面にナデもしくはミガキと赤彩を、内面にナデを施す。

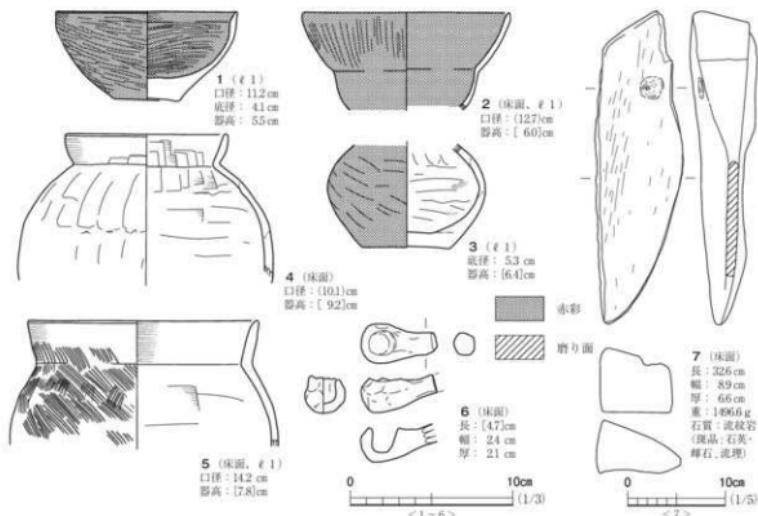


図227 122号住居跡出土遺物

4・5は、土師器の壺である。4は口縁部と体部の一部が遺存する。「く」字口縁で体部は球形である。体部外面に荒いナデ調整、内面にヘラナデを施す。5は「く」字の口縁部と体部上半が遺存する。口縁部下半と体部に目の細かなハケメ、体部内面にヘラナデを施す。

6は、杓子形の土製品である。球状の頭部に、やや上向きに柄が付く。柄の断面形は円形で、中ほどで折損する。小型で、指頭の圧痕を全体に残す。

7は、砥石である。砥石としては大型で、一面だけが平坦かつ平滑であることから、置き砥石と考えられる。同じ面には、敲打による直径2.5cmほどの凹みがあり、側縁の一部には磨り面があることから、凹石、磨石としても使用されたものである。

まとめ

隅丸方形の中型の住居跡で、一間四方の4本柱で上屋を支える構造である。床面に10箇所の地床炉が検出された。このような例は本遺跡では他にみられない。本住居跡の年代は、重複する古墳時代前期の住居跡である121号住居跡よりも古いか、本住居跡から出土した遺物も古墳時代前期のものである。古墳時代前期の住居跡どうしが重複する事例の一つである。

(青山)

123号住居跡 S I 123

遺構 (図228、写真148・266)

本住居跡は、V区のP・Q-21・22グリッドのL IVで、方形に広がる暗褐色土の範囲として検出された。標高236.4m前後で、北に向かってきわめて緩やかに下る場所である。本住居跡の北壁

の一部が120号住居跡の南西隅とわずかに重複するものの、新旧関係は明らかにできなかった。東側に28号烟跡と122号住居跡、南西に153号住居跡が位置する。

平面形は東西にやや長い隅丸方形で、規模は東西が6.0m、南北が5.8mである。西辺が北から5度東に傾く。壁は斜面上方にあたる南西部の残りがもっともよく19cm、斜面下方にあたる北壁がもっとも悪く5cmの高さが遺存していた。壁は65~70度の角度で立ち上がる。床面には、中央部を除いて貼床が施されている。最大で9cmの厚さをもつ。中央部は掘形底面をそのまま床としており、この部分と掘形底面は砂礫層が露出していた。床面は水平かつ平坦である。

堆積土は3層からなる。 ℓ 1は暗褐色の砂質土、 ℓ 2は壁ぎわに堆積する暗褐色の砂質土である。いずれもレンズ状に堆積し、自然堆積と思われる。 ℓ 3は貼床である。

住居内の施設は、地床炉1箇所、柱穴4基が検出された。

地床炉はP 1・4を結ぶ線上のP 4寄りに位置する。平面形は円形で、規模は径44cmを測る。断ち割りによって深さ5cmまで焼土化した範囲が及んでいることを確認した。地床炉の東側には、1個の細長く偏平な自然縛が炉の外縁に沿うように置かれていた。

4基の柱穴は四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置され、柱痕跡は確認されなかった。これを北西隅から時計回りにP 1~4とした。柱穴間の距離は北辺から時計回りに、3.0m、2.7m、2.8m、2.8m、深さはP 1から時計回りに、35cm、45cm、48cm、40cmである。

遺物は、土師器のミニチュア2点が西と南の壁ぎわの床面からそれぞれ1点、口縁部を欠損した鉢もしくは壺が南壁ぎわの床面で出土した。この他、堆積土中と床面から土器片が少量出土した。

遺物(図228、写真402)

本住居跡からは土師器66点が出土し、このうち5点を図示した。

図228-1は、土師器の高杯である。下端に稜を有するやや浅い楕形の杯部と「八」字に広がる脚部をもつ。裾径は杯部の口径より広く、裾の端部は上方にやや反り上がる。脚部の円窓は2箇所が欠損して遺存するのみである。

2は、土師器の壺である。平底で、体部下半が直線的に外傾して立ち上がり、ややつぶれた球形の体部上半に、「く」字の口縁がつく。外面はナデ調整で、底部付近にのみケズリが施される。体部内面にはヘラナデが、口縁部の内外面にはヨコナデが施される。外面の体部中ほどと、内面の底部付近に炭化物が付着する。底面には輪台の痕跡をわずかに残す。

3は、土師器の鉢もしくは壺である。底面に輪台の痕跡を残した平底で、半球形の体部下半が遺存する。内外面にナデが施される。

4・5は、土師器のミニチュアである。いずれも手づくねで、内外面に指頭圧痕を残し、4の内面はヘラナデで調整される。

まとめ

隅丸方形で一間四方の4本柱で上屋を支える構造の竪穴住居跡である。一個の自然縛を置いた地床炉をもつ。出土した土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

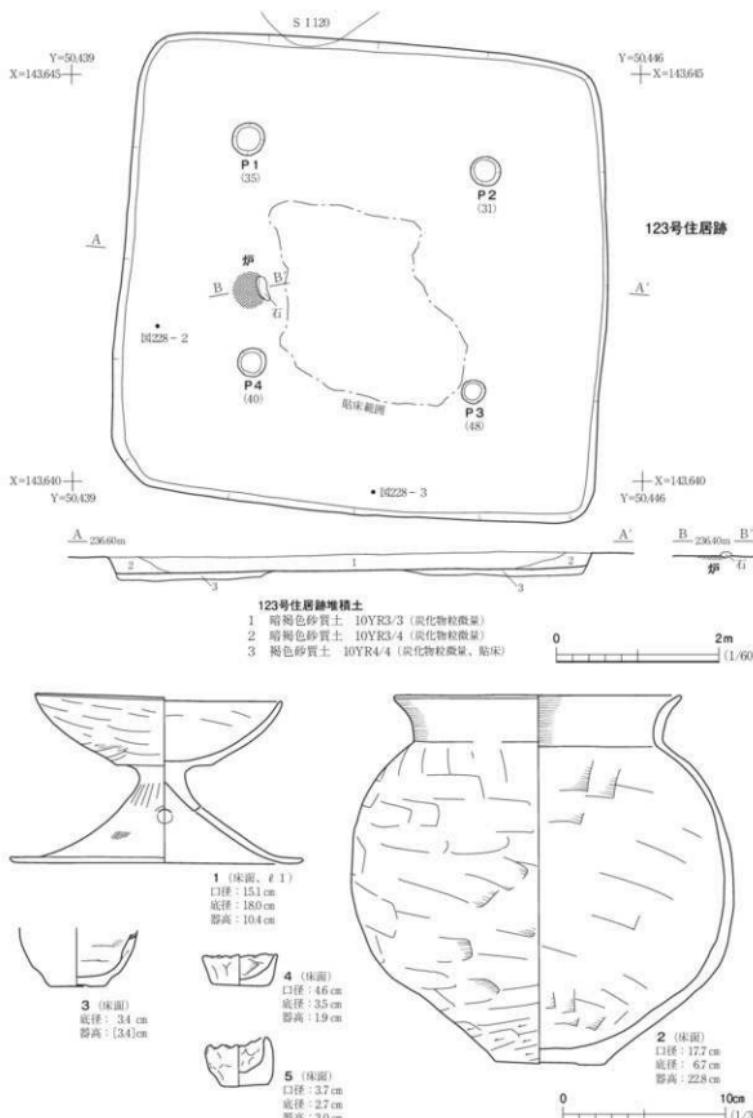


図228 123号住居跡・出土遺物

124号住居跡 S I 124

遺構 (図229、写真149)

本住居跡は、V区、P-23グリッドのL II bで、方形の黒褐色土の範囲とその北辺から北に延びる煙道が検出され、住居跡と認識した。標高236.6mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。南東に99号土坑が隣接する。東側には143号住居跡、北東側には152号住居跡が位置する。

平面形は方形で、規模は東西、南北ともに4.1mを測る。西辺は北から16度東に傾く。壁は残りがもっともよい西壁で高さ31cmである。四方の壁とも約70度の比較的急な角度で立ち上がる。

床面には、北東隅付近と、南部の約3分の1の範囲に貼床が施されていた。貼床は10cm前後の厚さをもち、上面は水平かつ平坦である。掘形底面は緩やかな凹凸がある。

堆積土はレンズ状に自然堆積した2層と、貼床の構築土からなる。上層から ℓ 1～3とした。 ℓ 1は黒褐色土で、 ℓ 2は焼ぎわに堆積する黒褐色砂質土である。 ℓ 3は貼床である。

住居内の施設はカマドを2基確認した。カマドは北壁と東壁に位置する。双方とも袖は遺存しないが、東壁のカマド底面から完形の甕が伏せ置かれた状態で出土したことから、廃絶時まで機能したのは東壁のカマドと考えられる。東壁の新しい方をカマド1、北壁の古い方をカマド2とした。

カマド1は東壁の南壁寄りに位置する。南壁からカマドの燃焼部中心までの距離が約1mの位置である。両袖は遺存しておらず、焼土面と、東壁を掘り込んだ煙道と考えられる張り出しが検出された。焼土面は最大長39cmの南北にやや長い楕円形で、焼け方は弱く、断ち割り断面の観察では焼土化した部分の深さは3cmであった。煙道と思われる壁面の掘り込みは、平面形が半円形で、幅67cm、奥行40cm、暗褐色砂質土の堆積土には焼土の小塊が多く含まれていた。カマド1については、両袖が遺存せず、カマドの位置には崩落した構築材もないことから、カマドを壊して残骸を撤去し、残った焼土面の上に土師器の甕を伏せ置いたと考えられる。

カマド2は北壁の中央に位置する。焼土面と煙道が検出された。焼土面は最大長46cmの楕円形で、断ち割り断面の観察で深さ5cmまでの範囲が焼土化していた。カマド1と比較すると、カマド2のほうが焼け方が強い。煙道は北壁に対してほぼ直角方向に延び、長さ173cm、最大幅38cm、検出面からの深さは5～7cmである。

遺物は、カマド1の焼土面に伏せ置かれて出土した土師器甕の他、カマド前面と南東隅で土師器甕の破片が出土した。堆積土と床面、貼床からは土器片が少量、剥片1点が出土した。

遺物 (図229、写真402)

本住居跡からは、土師器90点、剥片1点が出土し、このうち土師器2点、剥片1点を図示した。

図229-1は土師器の甕である。平底で張りのない体部に、端部を上方につまみ出した短い口縁部がつく。口縁部と体部外面はロクロナデ、体部下半にはヘラケズリ、内面にはナデが施される。

2は土師器の甕で、外傾する口縁と寸胴の体部の一部が遺存する。内外面にロクロナデを施す。

3は、剥片である。自然面を打点とし、二次加工はみられない。

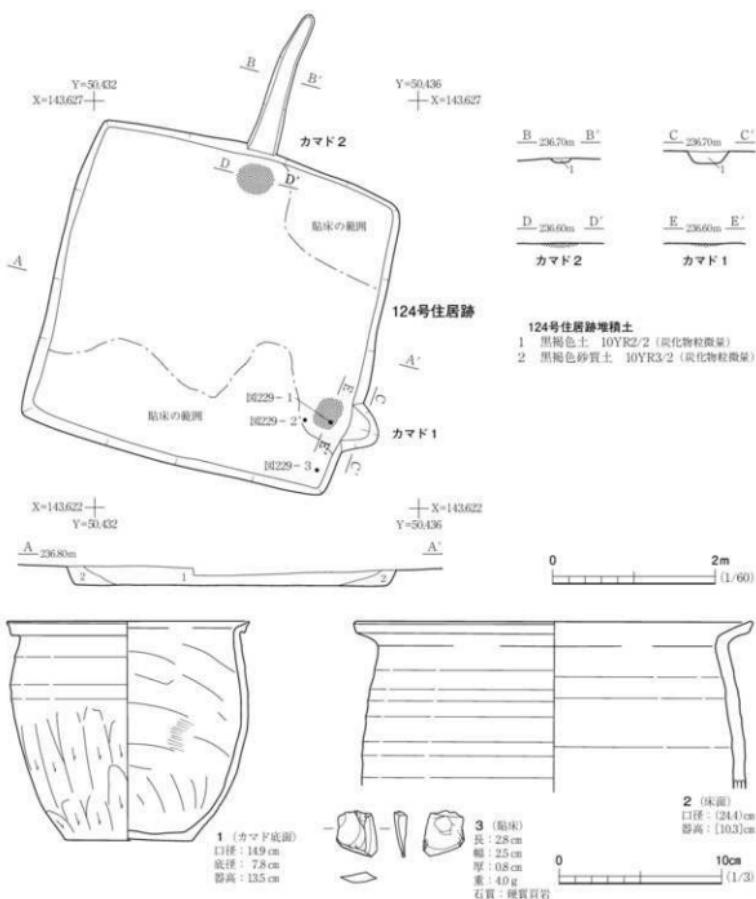


図229 124号住居跡・出土遺物

まとめ

中型の竪穴住居跡で、カマドを北壁から東壁へ作り替えている。柱穴は検出されなかった。出土した土器から、平安時代、9世紀に位置づけられる。

(青山)

125号住居跡 S I 125

遺構 (図230、写真150・151・269)

本住居跡は、Ⅲ区のH・I - 27グリッドのL II b上面で、灰黄褐色土が方形に広がる範囲を検

出した。標高235.9～236.1mの西から東に向かってきわめて緩やかに下る斜面である。本住居跡の北西部は86号住居跡と重複し、本住居跡が古い。北に79号土坑が隣接する。

平面形は方形で、規模は、東西が4.5m、南北が4.7mである。西辺は北から15度東に傾く。壁は、65～80度の角度で立ち上がる。

壁はもとより残りの良い西壁で最大28cmである。東壁の中央部附近は表土剥ぎの際に掘り下げすぎ、残りは悪い。床面には全面に貼床が施されていた。水平かつ平坦で、中央部や東寄りの狭い範囲が特に踏みしまっていた。掘形底面は緩やかな凹凸があり、貼床の厚さは最大24cmである。

堆積土は2層に区分した。 ℓ_1 は自然堆積した灰黄褐色土で、多量の焼土粒、微量の炭化物粒を含む自然堆積土である。 ℓ_2 は灰黄褐色の砂質土で、貼床である。

住居内の施設はカマドと4基の柱穴を検出した。

カマドは東壁ほぼ中央で確認された。検出当初は、崩落したカマド構築材と思われる淡黄色粘質土塊が焼土粒と炭化物粒を多く含んだ土の上にのり、これを除去したところ焼土面が検出され、横

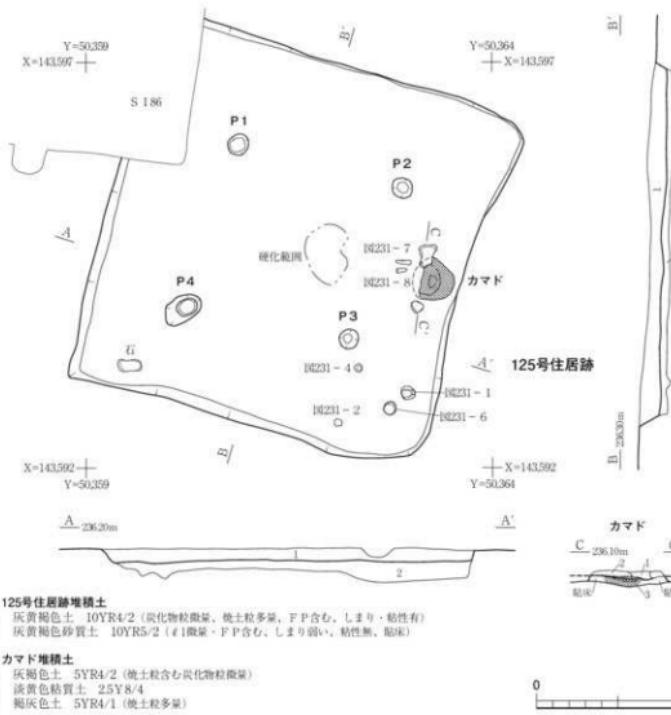


図230 125号住居跡

倒しの土製支脚が2点出土した。崩落したカマド構築材と焼土面の間には焼土粒を多量に含む褐灰色土が薄く堆積していた。これはカマド崩落前にカマド内に堆積した層と考えられる。焼土面はカマドを半裁した際に掘りすぎてしまい全形は明らかでないが、ややいびつな円形で、遺存した部分で径54cmを測る。中央が特に強く赤変硬化し、焼土化した範囲は深さ10cmに及んでいることを掘りすぎた部分の断面で確認した。両袖と煙道は検出されなかった。

床面から4基の柱穴を検出し、北西から時計回りにP1～4とした。4基の柱穴は四隅を結ぶ対角線上に一間四方に配置され、柱痕跡はない。4基の柱穴を結ぶ線は方形で、柱穴間の距離は北辺から時計回りに、21m、20m、20m、21mである。

遺物は、南東隅付近の床面から、ほぼ完形、もしくは一部を欠損した状態の土師器、須恵器、土製品が4点出土した。この他、堆積土と床面、カマド堆積土から、少量の土器片が散在して出土している。

遺物(図231、写真402・403)

本住居跡からは、土師器59点、須恵器8点、土製品3点、石製品1点が出土した。このうち、土師器4点、須恵器1点、土製品3点、石製品1点を図示した。

図231-1・2は土師器杯である。1の外面は無段の平底で、内面には稜が巡る。外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキのち黒色処理を施す。外面の口縁部下に輪積み痕、底面に静止糸切り痕が残る。2は平底で、外面にロクロナデのち底部付近に回転ヘラケズリ、内面にミガキのち黒色処理を施す。

3は、須恵器の杯である。平底から直線的に口縁部に至る器形で、底面に回転ヘラ切り痕を残し、内外面にロクロナデを施す。

4は、土師器の鉢である。平底で、短く直立する口縁部と体部の境の外面に段を巡らす。

5は、土師器の甕である。口縁部と体部の一部が遺存する。口縁部は外反し端部に面を作る。外面にロクロメを顕著に残す。

6は、用途不明の土製品である。土器の形を一応はしているものの、器形がどの器種にも該当しないこと、底部の厚さが4cmほどと分厚く約1.8kgもの重量があること、内面底部に複数の粘土塊を押し込んだ状態のまま焼成されていることなどの点から、土製品とした。口縁部を上にして図化したが、天地すら明らかにしえない。深い鉢形で、木葉痕を付す大きな平底とややくびれる胴部をもつ。口縁端部を欠損するが、遺存した上端部にヨコナデが施されていることから、口縁部はほぼ直立すると考えられる。体部下半の内外面の器壁は荒れるが、二次被熱ではなく、付着物もない。

7・8は、土製の支脚である。いずれも中実で細長の円錐台形で、外面に塗布・焼成された泥土がわずかに付着する。外面に明赤褐色の部分がわずかにみられるものの、二次被熱の痕跡はほとんど認められない。

9は、砥石である。四角錐台形で、4側面が砥ぎ減りによってやせ細り、中ほどから折損したものである。この砥石は、折損後に破断面から一側面へ錐状工具で穿孔する再加工を施し、下げ砥石

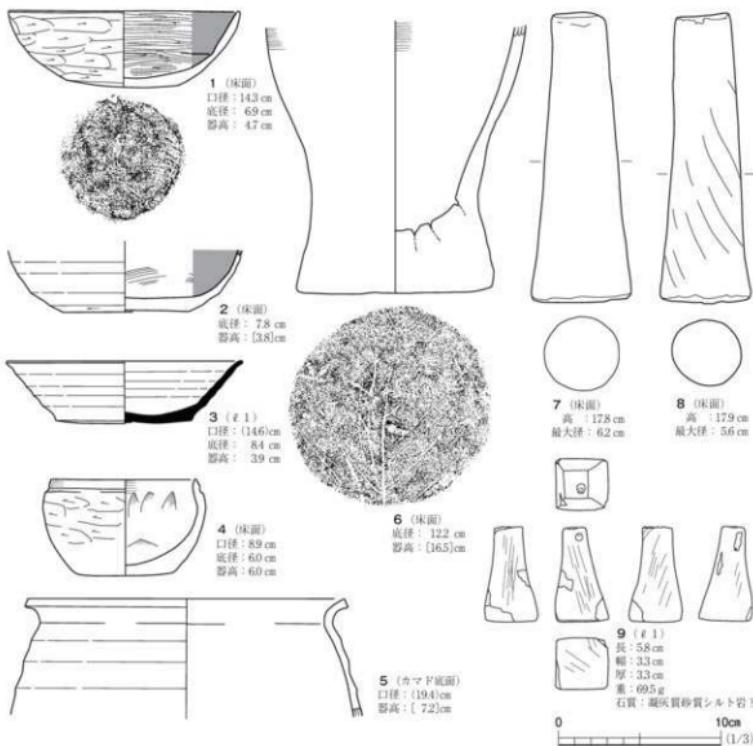


図231 125号住居跡出土遺物

としている。破断面以外の5面が使用により平滑になっている。

まとめ

一間四方の4本柱で上屋を支える中型の竪穴住居跡である。東壁にカマドを有する。出土した土器の特徴から、奈良時代、8世紀の後葉に位置づけられる。
(青山)

126号住居跡 S I 126

遺構 (図232、写真152)

本遺構は、V区北部のV-15・16グリッドに位置している。標高236.8 m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。110号住居跡を調査中に、不整形に広がるにぶい黄褐色土の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、100・103・110・118・127・142号住居跡である。本遺構が127号住居跡より新しく、それ以外の住居跡より古い。なお、118号住居

跡との新旧関係は明らかにできなかった。

堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。堆積過程は不明である。

平面形は、重複が激しく北側の大部分を壊されているが、南側の状態から、方形ないし長方形と考えている。規模は、遺存長が南北6.0m、東西が5.5mである。周壁は、残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で18cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に對して東に40度傾く。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。おむね平坦であるが、中央付近がやや高くなる。踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピット2基である。P 1は、南東隅に位置する。南側を土層確認トレンチで壊されているが、平面形は楕円形である。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。規模は長軸110cm、深さ16cmである。堆積土は、L IV②を多量に含み、炭化物・焼土粒を少量含む灰黄褐色土である。P 2は、床面北部中央に位置する。平面形は円形である。規模は、直径87cm、深さ17cmである。堆積土は、焼土塊を少量含むにぶい黄褐色砂質土である。

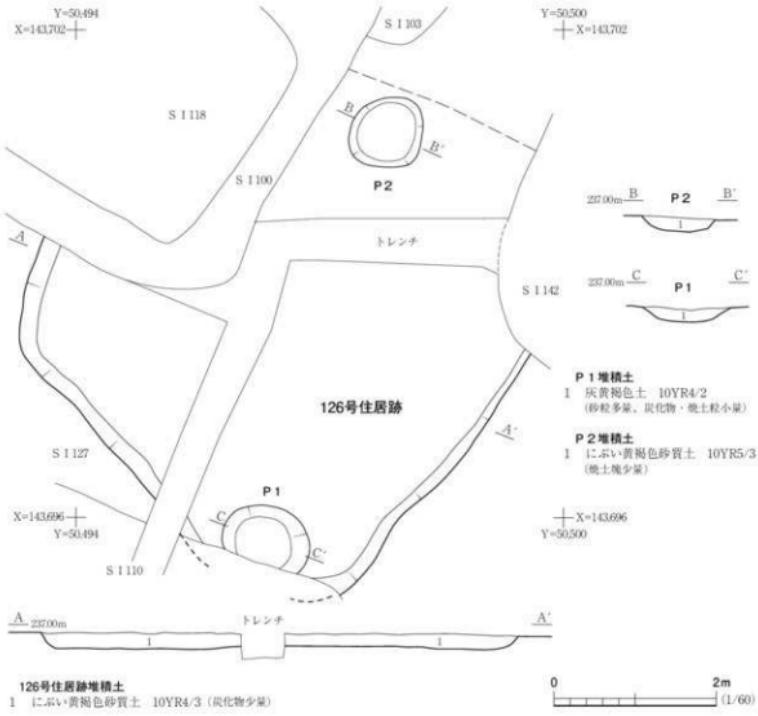


図232 126号住居跡

遺物は、土師器27点が出土した。小片のため図示しなかったが、土師器の壺の胴部片が主体を占める。いずれも古墳時代前期の所産である。いずれも堆積土上層から散発的に出土しており、周囲からの流れ込みと考えている。

まとめ

本遺構は6.0m以上の方形ないし長方形の住居跡である。南東隅に貯蔵穴が位置する。時期は、検出面や他遺構との重複関係から、弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えられる。(中野)

127号住居跡 S I 127

遺構 (図233)

本遺構は、V区北部のV-15・16グリッドに位置している。標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。126号住居跡を調査中に南西側に炉を検出したことから、周辺を精査したところ、灰黄褐色土が不整形に広がる範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、98・100・103・110・118・126号住居跡である。本遺構がいずれの遺構よりも古い。なお、118号住居跡との新旧関係は明らかにできなかった。

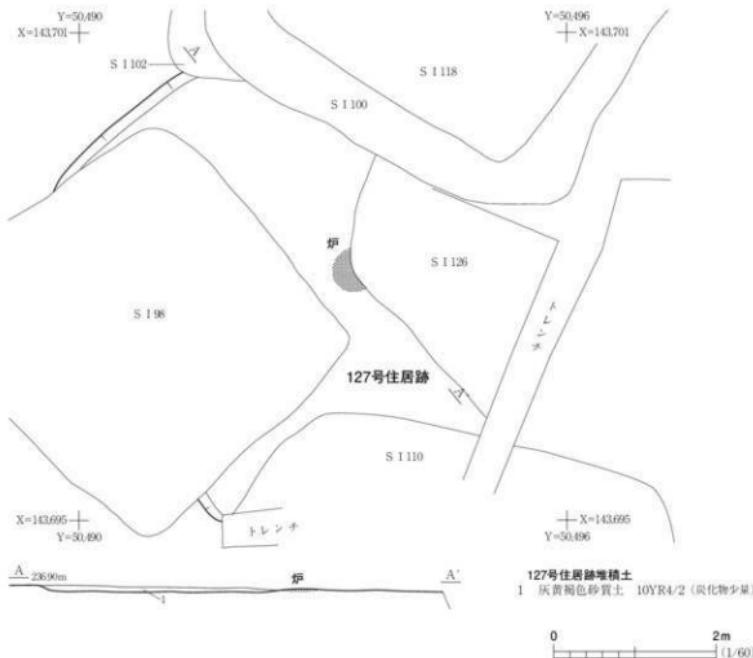


図233 127号住居跡

堆積土は、炭化物を含む灰黄褐色砂質土の単層である。堆積過程は不明である。

平面形は、重複が激しく、西壁と南壁の一部と炉を検出したにすぎないことから、不明である。規模は、遺存長が東西5.0m、南北3.7mである。周壁は、残りの良い北西壁側では20度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北西壁で6cmである。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用しているとみられ、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は地床炉である。地床炉は床面の中央部から1箇所確認した。平面形は楕円形と考えられ、規模は遺存長が53cmで、強く焼土化し、焼土化した厚さは1cmである。

遺物は、土師器が3点出土した。いずれも磨滅した小片のため図示できなかった。

まとめ

本遺構は、5.0m以上とみられる堅穴住居跡である。床面中央には地床炉が位置する。重複が激しく、他遺構に大部分が壊されており、平面形は明らかにできなかった。所属時期は、検出面や他遺構との重複関係から、弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えられる。
(中野)

128号住居跡 S I 128

遺構 (図234、写真153)

本遺構は、V区北部のT・U-15・16グリッドに位置している。標高236.5m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は94・107・138・141号住居跡である。新旧関係は、94・107号住居跡より古く、128・138・141号住居跡より新しいと考えている。



図234 128号住居跡

堆積土は、炭化物を含むくびい黄褐色砂質土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、おむね隅丸方形である。規模は、 $3.5 \times 3.1\text{m}$ である。周壁は、残りの良い東壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で10cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に30度傾く。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。おむね平坦で踏み締まりは弱い。住居内の施設は、一切確認されなかった。

遺物は弥生土器5点が出土した。いずれも磨滅した小片で図示できなかった。

まとめ

本遺構は、3.5mの隅丸方形の堅穴住居跡である。住居内の施設は確認されなかった。所属時期は、遺構の重複関係や出土遺物などから弥生時代終末期頃と考えられる。
(中野)

129号住居跡 S I 129

遺構 (図235、写真154)

本遺構は、V区北部のT・U-16・17グリッドに位置している。標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は108・137・140・189号住居跡で、重複する遺構の中では本遺構がもっとも新しい。調査では誤って108号住居跡を最初に調査したため、北西側の一部を壊してしまった。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色砂質土の単層である。堆積過程は、自然堆積と考えている。平面形は、隅丸方形である。規模は、 $3.8 \times 3.8\text{m}$ である。周壁は、残りの良い東壁側では30度の角度で

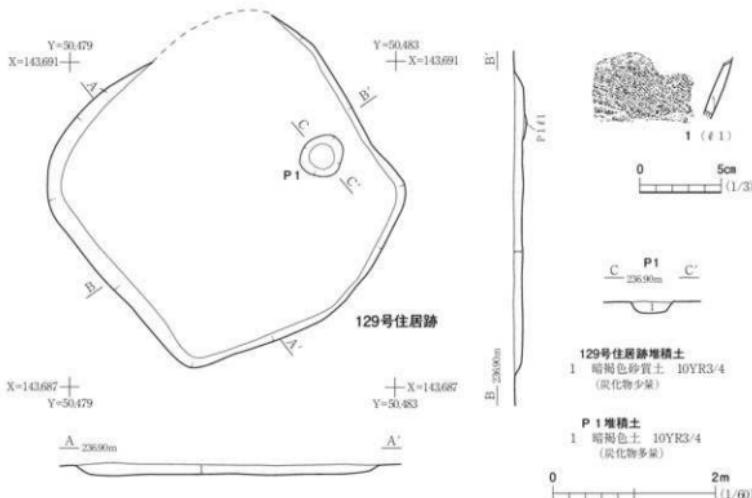


図235 129号住居跡・出土遺物

立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で12cmである。方位は、南西壁を基準とするなら北に対して西に40度傾く。床面は、140・189号住居跡の堆積土上に作られており、平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピット1基である。P1は北東壁側の中央に位置する。位置関係から貯蔵穴と考えている。規模は、直径55cm、深さ13cmである。堆積土は炭化物を多く含む暗褐色土である。

遺物は、堆積土から散在して出土しており、住居外から流入したものと考えている。

遺物(図235)

遺物は、弥生土器が20点出土し、このうちの1点を図示した。

図235-1は、撫糸文を地文とする胸部破片である。

まとめ

本遺構は3.8mの隅丸方形の住居跡である。遺構の重複の激しい地点でもっとも新しい遺構の一つである。時期は検出面や他遺構との重複関係などから古墳時代前期頃と考えられる。(中野)

130号住居跡 S I 130

遺構(図236、写真155)

本遺構は、V区北部のT-16・17グリッドに位置しており、標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。115号住居跡周辺の検出時に、長方形に広がる7.0×6.0mほどの遺構の範囲を確認したため、住居跡として調査を行った。

重複する遺構は、108・112・115・137・140・193号住居跡、137号土坑である。本遺構が108・112・115号住居跡より古く、それ以外の遺構より新しい。

堆積土は、6層に区分した。 ℓ 1は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土、 ℓ 2は炭化物を含む褐色砂質土である。 ℓ 3はLIV粒を多量に含み炭化物を少量含む暗褐色砂質土である。 ℓ 4は炭化物を含む暗褐色砂質土である。 ℓ 1～4は一部水平に堆積し、混入物の在り方などから、人為的な堆積土と考えている。 ℓ 5・6は壁ぎわに堆積する褐色砂質土である。

平面形は、おおむね隅丸長方形である。規模は6.7×5.9mである。方位は西壁で北から38度東を示す。周壁は遺存状態の良い東壁側では45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している東壁で35cmである。床面は、掘形底面のLIV下面を利用し、おおむね平坦となっている。床面中央では、3.7×3.1mの範囲で硬化面が形成されていた。住居内の施設は確認されなかった。

遺物は、堆積土中から土師器や弥生土器の小片が散在して出土している。

遺物(図236)

遺物は、土師器23点、弥生土器4点が出土した。このうち土師器1点を図示した。

図236-1は、壺の口縁部破片である。外面に棒状浮文が貼りつけられている。内面の口縁端部直下には粘土紐の剥落痕がめぐる。

まとめ

本遺構は、6.7×5.9mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。住居内の施設は確認されなかった。堆



図236 130号住居跡・出土遺物

積土の状況から人為的に埋めているものと考えている。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。(中野)

131号住居跡 S I 131

遺構(図237、写真156・157)

本遺構は、V区北部のT-17・18グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。133・146号住居跡と重複し、本遺構が新しい。

堆積土は5層に区分した。 ℓ_1 は炭化物を微量含む褐色砂質土である。上層に堆積する自然堆積

土で一部縞状になっている。 ℓ 2は、炭化物を含むにぶい黄褐色土である。 ℓ 3は炭化物を多量に含む褐色土である。 ℓ 4は炭化物と焼土粒を含む、にぶい黄褐色土である。 ℓ 5は褐色砂質土で、壁面の崩落土と考えている。 ℓ 2～4にかけては炭化材や焼土粒の集積が確認されている。これらの堆積土は、住居の材を焼却した後の人為的な堆積土と考えている。

炭化材は、 ℓ 3の上面でまとめて出土している。炭化材は、床面中央から東側にかけて検出されているが、いずれもランダムに出土しており、梁や垂木など用途のわかる材の配置ではない。最大の炭化材は、住居北側で検出されたもので、長さ23m、幅24cm、厚さ12cmである。あまり良く焼けていなかったためか、表面の5mmほどが炭化しており、中には堆積土が流入していた。おそらく生焼けの状態であった材の内部が腐食して、堆積土が入り込み、表面の炭化部分が残ったものと推測している。また、住居北側中央の ℓ 3では、200×100cmの範囲で、細かい炭化物粒とともに

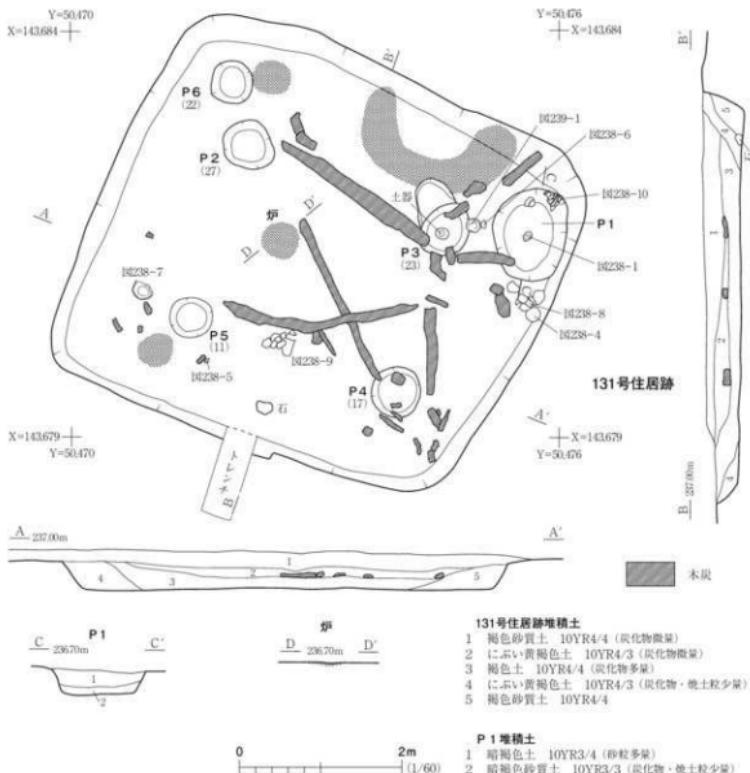


図237 131号住居跡

もに、焼土の集積が検出された。焼土は、馬蹄状に検出されている。また北西隅や南西隅においても直径50cm、厚さ10cmほどの焼土の集積が検出された。

平面形は、おおむね方形と考えている。規模は5.6×5.0mである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で80度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している南壁で50cmである。住居の方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に25度傾く。床面は掘形底面であるL IVをそのまま利用しており、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面中央からやや西に寄った位置に1箇所確認した。平面形は、円形である。規模は直径45cmほどで、焼け方は弱く、暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

ピットは、北東隅で1基検出した。P 1は、平面形が梢円形を呈する。規模は120×90cm、深さ30cmである。堆積土は2層に区分した。ℓ 1はL IV②を多量に含む暗褐色土である。ℓ 2は炭化物粒と焼土粒を含む暗褐色砂質土である。P 1の検出面からは図238-1や7・10の遺物が出土している。堆積土は水平に堆積することから人為的な堆積土と考えている。

貼床下からピット5基を検出した。P 2～5は炉を方形に囲むように配置されていた。平面形は梢円形ないし円形である。直径は50～68cm、深さは11～27cmである。堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色土で、柱痕などは見られなかった。これらのピットは床面では検出できなかつたが柱穴だった可能性も考えられる。P 6は北西隅で検出した。平面形は不整な円形である。規模は直径53cm、深さが22cmである。堆積土はP 2～5と同質である。

遺物は、北東隅の床面と南側中央から比較的まとまって出土している。遺物の出土位置は、図238-5・7・9が住居南側から南西隅にかけて出土した。図238-4・8・10は、P 1の南側、図238-6と図239-1はP 1の西側より出土した。特に、図239-1は口縁を床面に接した逆位の状態で出土した。

遺物(図238・239、写真403・404・435)

遺物は、土師器243点、弥生土器4点が出土し、土師器12点、弥生土器2点を図示した。

図238-1・2は土師器の高杯である。1は杯部が逆「八」字状に外傾する。脚部下半を欠損する。2は赤彩を施した土師器の高杯か器台の脚部片である。

3は土師器の器台である。脚部から受部の破片が分かれているため、復元実測している。ミガキ調整を施し、赤彩を塗布する。

4・5は土師器の鉢である。4は口縁部が外傾し、入念にヘラミガキ調整を施す。5は赤彩を施し、内外面ハケメ後に外面にナデを施す。

6と図239-1は土師器の壺である。6は赤彩を施した直口壺の口縁部片である。口縁部が直線的に外反する。図239-1は、複合口縁の壺である。体部上半が1/4ほど欠失している。内面や外面にはねの圧痕が確認できる。

8・9は球胴の土師器壺である。10・11は土師器の台付壺である。10は、ハケメ調整を施す。

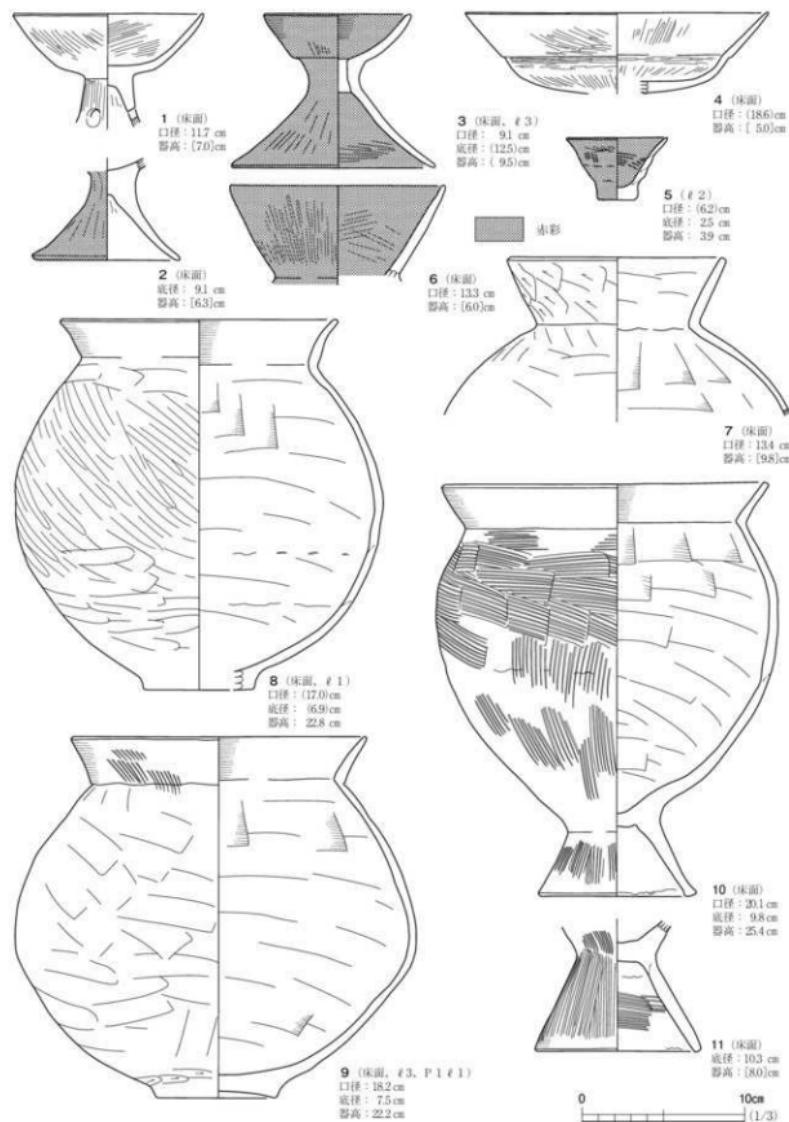


図238 131号住居跡出土遺物（1）

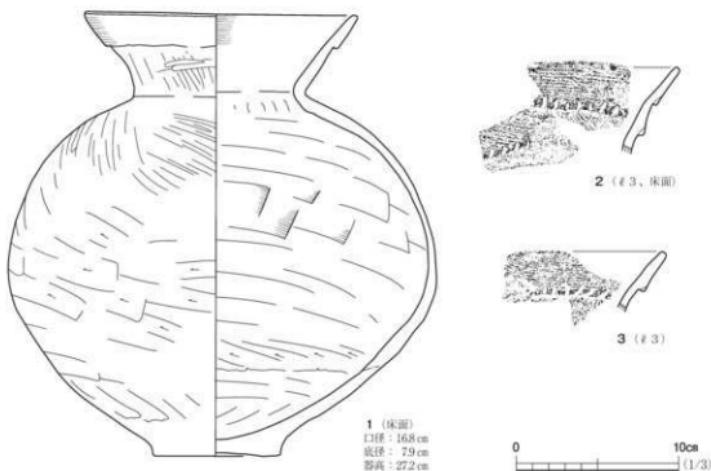


図239 131号住居跡出土遺物（2）

内面底部などに織の圧痕が見られる。

図239-2・3は弥生土器の口縁部破片で、同一個体である。撚糸地文に口縁部の下段には連続的に刺突文を施す。

まとめ

本遺構は、 5.6×5.0 mの長方形の堅穴住居跡である。地床炉1箇所と貯蔵穴が検出された。堆積土からは、炭化材や焼土の集積が確認された。このことから、火災住居と考えられ、住居廃絶時に、材を一部焼いて、埋めているものと考えられる。また、床面からは複数の土師器が出土している。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

132号住居跡 S I 132

遺構 (図240、写真159)

本遺構は、V区北部のS・T-17グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。133・140号住居跡と重複し、本遺構がいずれよりも新しい。131号住居跡の西側に、半月形に広がる遺構の範囲を検出した。土層観察用にトレーナーを入れたところ、床面と壁の立ち上がりが確認されたため、住居跡として調査を行った。

堆積土は、炭化物を含む褐色土の単層である。堆積過程は明らかにできなかった。

平面形は、西側の大半が搅乱で破壊されており、不明確な点が多いが、おおむね隅丸方形ないし長方形と考えている。規模は遺存する長軸は5.8mである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している南壁で18cmである。住居の方位は、残りの

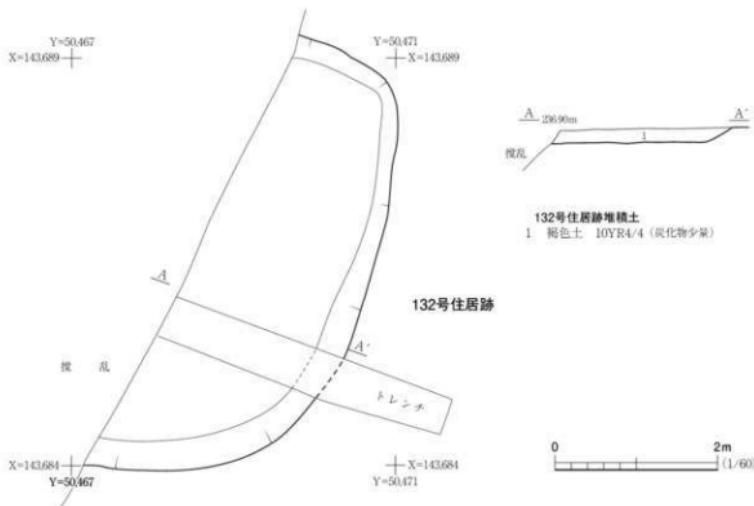


図240 132号住居跡

良い東壁を基準とするなら北に対して東に20度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用していた。踏み締まりは弱い。住居内の施設は確認されなかった。

遺物は、土師器が3点出土した。磨滅した小片で図示していない。いずれも古墳時代前期頃の甕の小片である。

まとめ

本遺構は、遺存長が5.8mの竪穴住居跡である。搅乱によって大半が壊されているため不明な点が多い。遺構の所属時期は、検出面や周辺の遺構などから古墳時代前期頃と考えられる。(中野)

133号住居跡 S I 133

遺構 (図241、写真159)

本遺構は、V区北部のS・T-17グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は131・132号住居跡で、本遺構がもっとも古い。131号住居跡の西側壁面において炭化物を含む土が確認されたため、周辺を精査したところ、不整形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は褐色砂質土で、一部縞状になっている。 ℓ 2は、褐色砂質土である。 ℓ 3は炭化物を含むくびい黄褐色土である。 ℓ 4は褐色の砂層である。いずれも、レンズ状や三角状に堆積していることから、自然堆積土と考えている。

平面形は、おむね不整な方形と考えている。規模は6.5×5.9mである。周壁は、遺存状態の良

い西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している西壁で22cmである。住居の方位は、残りの良い北壁を基準とするなら北に対して西に5度傾く。床面は掘形底面であるL IVをそのまま利用しており、全体的に硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央からやや西に寄った位置で1箇所確認した。平面形は、円形である。規模は直径34cmほどで、焼け方は弱く、暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

ピットは6基検出した。P 1は炉のすぐ南側に位置する。規模や形態から貯蔵穴と考えている。平面形が楕円形を呈し、底面は平坦に掘られている。規模は90×75cm、深さ35cmである。P 2～4は炉の西側および南西側に位置する。円形ないし楕円形のピットである。直径は33～60cm、深さは14～25cmで、機能は不明である。P 1～4の堆積土は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。P 5・6は北壁側の中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸100～110cm、深さ22～28cmである。堆積土は化物と焼土粒を含むにぶい黄褐色砂質土である。P 5・6の機能も不明である。

遺物は、P 1や堆積土から少量出土している。重複する131号住居跡からも弥生土器が出土して

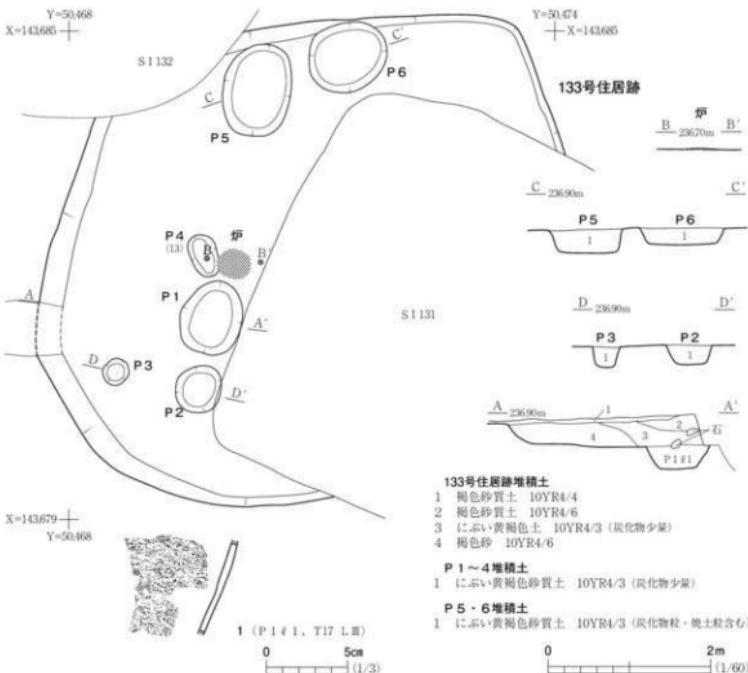


図241 133号住居跡・出土遺物

いるが、おそらく、本住居跡の遺物が混入したものと考えている。

遺 物 (図241)

遺物は、土師器7点、弥生土器4点が出土した。このうち、弥生土器1点を図示した。

図241-1は附加縄文を地文とする弥生土器の胴部片である。

ま と め

本遺構は、 $6.5 \times 5.9\text{ m}$ の隅丸長方形の堅穴住居跡である。床面からは地床炉1箇所とピットが検出された。遺構の所属時期は、出土遺物や遺構の重複関係から弥生時代終末期と考えられ、当該期においては比較的大型な住居跡と思われる。
(中野)

134号住居跡 S I 134

遺 構 (図242、写真160)

本遺構はV区北部のS-18グリッドに位置している。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。基本土層の確認するため搅乱の断面を精査していく際に、遺構らしき範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は135号住居跡で本遺構が新しい。

堆積土は単層で炭化物を少量含む褐色砂質土である。堆積過程は自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、西側を搅乱で破壊されているが、方形と考えている。規模は、南北36mである。周壁は、残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で20cmである。方位は、東壁を基準とするなら北から東に30度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用している。おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は検出されておらず、遺物も一切出土していない。

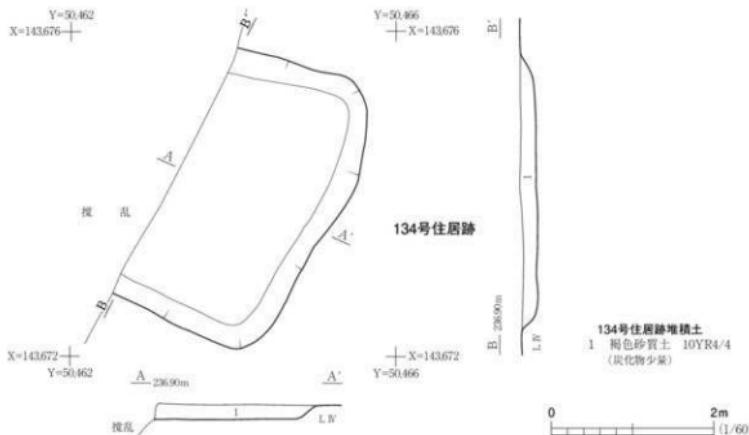


図242 134号住居跡

まとめ

本遺構は、3.6mの方形の竪穴住居跡である。西側が破壊され、遺物も出土しておらず、不明な点が多い。所属時期は、検出面や他の遺構との関係から古墳時代前期頃と考えている。(中野)

135号住居跡 S I 135

遺構 (図243、写真161)

本遺構は、V区北部のS・T-18・19グリッドに位置している。標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は134号住居跡で、本遺構が古い。

堆積土は、2層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色砂質土である。 ℓ 2は炭化物を少量含むにぶい黄褐色土である。堆積過程はいずれも自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は不整な長方形である。規模は6.7×5.6mである。周壁は残りの良い北壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で16cmである。方位は、西壁を基準とするなら真北

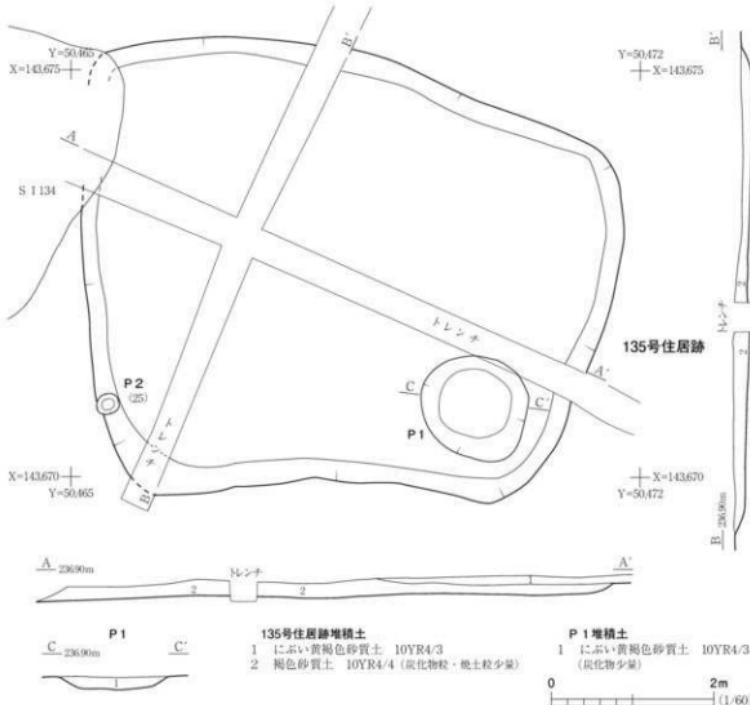


図243 135号住居跡

である。床面は、掘形底面である LIV をそのまま利用している。おおむね平坦に作られているが、全体的に踏み縮まりは弱く、硬化範囲も認められない。

住居内の施設は2基のピットである。P 1は南東隅の床面に位置する。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。平面形は円形で、底面は平坦である。規模は、直径120cm、深さ20cmで、堆積土は炭化物を少量含むにぶい黄褐色砂質土である。P 2は南西隅よりやや北に位置する。平面形は円形である。規模は直径28cm、深さ25cmである。P 2の機能については明らかにできなかった。

まとめ

本遺構は、不整な長方形の竪穴住居跡である。遺構の重複関係などから、周辺遺構の中では、古いものと考えている。所屬時期は、検出面などから弥生時代終末期頃と考えられる。(中野)

136号住居跡 S I 136

遺構 (図244, 写真162)

本遺構は、V区中央部のT・U-17・18グリッドに位置しており、標高236.7mの平坦面に立地

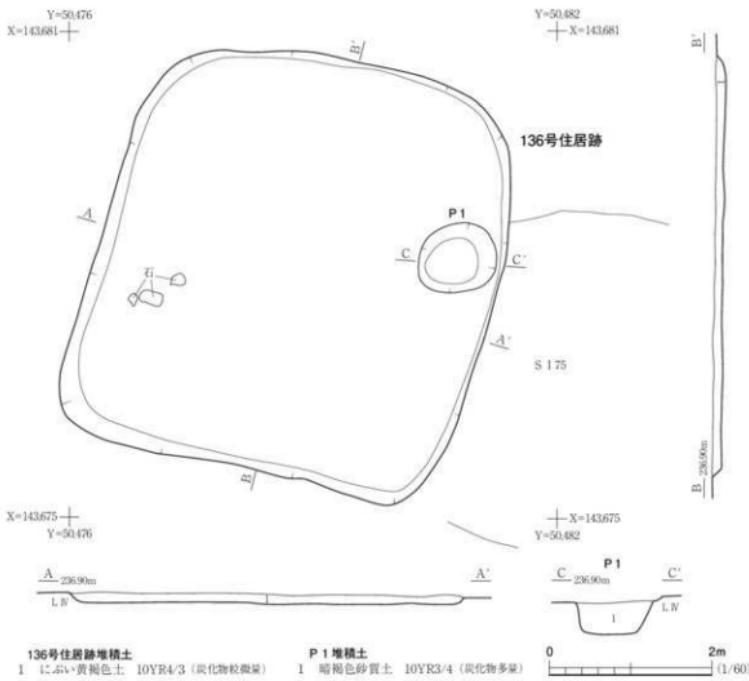


図244 136号住居跡

する。検出面はL IVである。重複する遺構は、75号住居跡である。本遺構が古い。

堆積土は、炭化物粒を微量含むにぶい黄褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は $5.2 \times 4.8\text{ m}$ である。周壁は、遺存状態の良い西壁側では45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で15cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に10度傾く。床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。おおむね平坦に作られているが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットを検出した。P 1は、床面の東壁中央よりやや北側に位置する。位置関係などから貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面を平坦に掘り込んでいる。規模は、 $100 \times 90\text{ cm}$ 、深さ35cmである。堆積土は、炭化物を多く含む暗褐色砂質土である。

遺物は、出土していないが、西壁側の中央付近の堆積土下部から床面にかけて $10 \sim 20\text{ cm}$ ほどの疊が3個出土している。疊は部分的に被熱しており、赤褐色に変化していた。

まとめ

本遺構は、5.2mの隅丸方形の堅穴住居跡である。住居内には貯蔵穴が存在する。遺構の所属時期は、遺物が出土していないことから不明な点が多いが、検出面や他遺構の重複関係などから弥生時代終末期頃と考えている。

(中野)

137号住居跡 S I 137

遺構(図245、写真163)

本遺構は、V区北部のT・U-16・17グリッドに位置しており、標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。検出時に、炭化物と焼土が含まれる土が長方形に広がる範囲を検出したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、108・129・130・140・189号住居跡である。本遺構が129号住居跡より古く、それ以外の住居跡より新しい。

堆積土は炭化物粒と焼土粒を多く含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。混入物が多いことから人為堆積土の可能性もある。しかし層厚が薄いことから詳細は不明である。

遺構の平面形は、隅丸長方形である。規模は、 $4.8 \times 3.1\text{ m}$ である。周壁は、遺存状態のもっとも良い西壁側では、45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存状態の良かった北壁で11cmである。住居の方位は、残りの良い西壁を基準とするなら、北に対して東に15度傾く。

床面は、掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。床面はおおむね平坦に作られ、表面には、わずかに炭化物が散らばっていた。全体的に踏み締まりは弱く、硬化した範囲などはみとめられなかった。

住居内の施設は、地床炉である。炉は、床面中央からやや西側に寄って位置している。炉の平面形は、円形を呈する。炉の底面はよく焼けており60cmの範囲にわたって赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

遺物は、堆積土から散在して出土している。

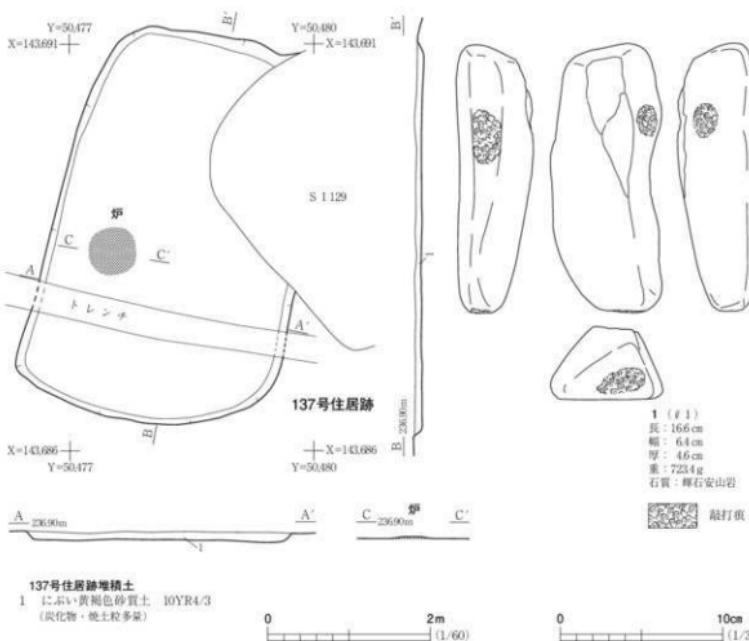


図245 137号住居跡・出土遺物

遺 物 (図245)

遺物は土器師1点、弥生土器23点、石器1点が出土した。このうち石器1点を図示した。比較的多く出土した弥生土器は、周辺に位置する他遺構からの流れ込みとみられ、いずれも小片で磨耗していた。

1は輝石安山岩の川原石を使用した敲石である。敲打痕が3箇所確認できる。

ま と め

本遺構は、4.8×3.1mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。地床炉が検出された。遺構の所属時期は、古墳時代前期頃と考えられる。
(中野)

138号住居跡 S I 138

遺 構 (図246、写真164)

本遺構は、V区北部のT-16・17グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、76・94・107・108・111・116・128・140・141号住居跡、137・138号土坑である。重複関係は、本遺構が140・141号住居跡より新しく、それ以外の遺

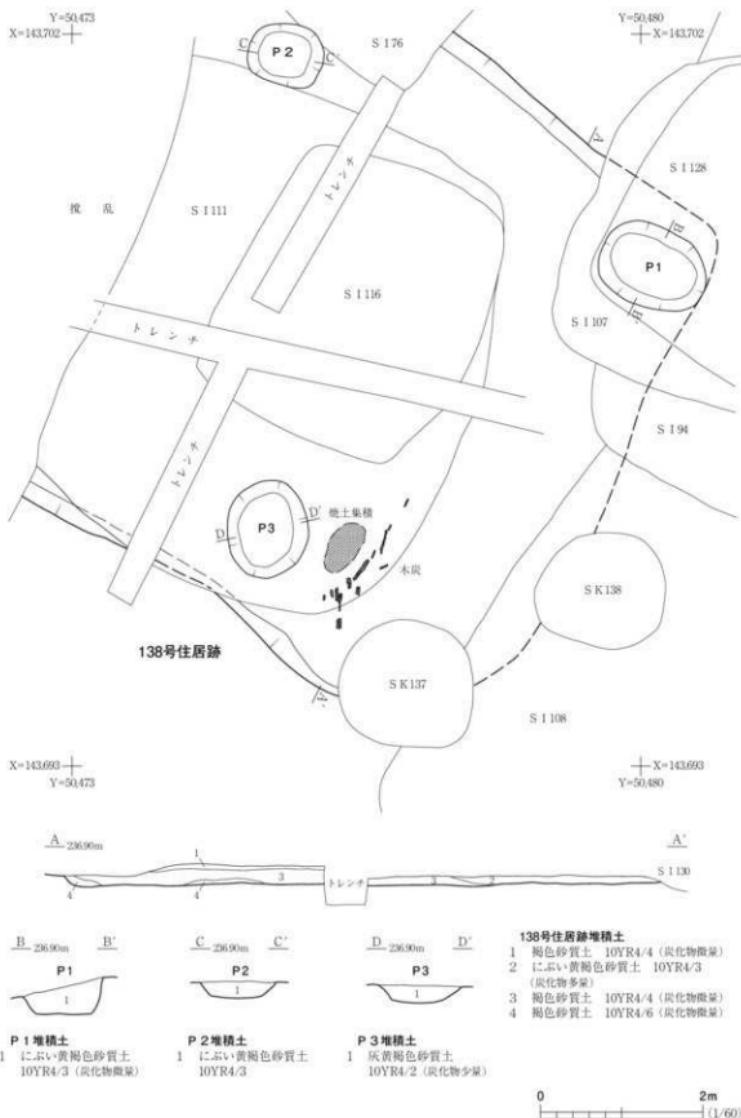


図246 138号住居跡

構より古い。

堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1は一部縞状になる褐色砂質土で自然堆積土である。 ℓ 2は住居の南側にのみ堆積し、炭化物を多量に含む、にぶい黄褐色砂質土である。 ℓ 3・4は炭化物を微量含む褐色砂質土である。 ℓ 3が床面まで均質に堆積する点などから人為的な堆積土と考えている。 ℓ 4の堆積過程は不明である。

住居跡の南側中央の床面直上から ℓ 2にかけて炭化材のまとまりと焼土の集積を確認した。材は5cm前後の細い材が主体を占める。おそらく住居廃絶時に部分的に材を焼却しているものと判断している。焼土集積は、P 3の東側で検出した。規模は長軸70cm、短軸50cm、厚さ5cmである。炉とも考えたが、床面からやや浮いており、焼土集積として扱った。

平面形は、他遺構との重複が激しい点や西側の大部分が壊されていることから、判断が難しいが、北壁や南壁、東壁の状況からおおむね方形か長方形と考えている。規模は南北が7.5mである。周壁は北壁側で45度で立ち上がり、遺存高が11cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して東に20度傾く。床面は掘形底面のL IVをそのまま利用し、硬く踏み締まっている。

住居内の施設はピットを3基検出した。P 1は北東隅付近に位置する。規模や形態から貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦に掘られている。規模は135×100cm、深さ27cmである。P 2は住居の北西側に位置する。平面形は楕円形である。底面はすり鉢状を呈する。規模は82×75cm、深さ18cmである。機能は不明である。P 3は南壁側の中央付近に位置する。平面形が楕円形で、底面はすり鉢状になる。規模は120×100cm、深さ20cmである。P 1～3の堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色や灰黄褐色の砂質土である。

本遺構から遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、遺存長7.5mの方形ないし長方形の堅穴住居跡である。重複が激しい地点に位置し、残りは悪い。遺構からは貯蔵穴を含むピットが3基検出された。 ℓ 2から床面にかけて焼土の集積や炭化材が出土しており、火災住居と考えている。遺構の所属時期は、出土遺物がなかったものの、他遺構との重複関係から古墳時代前期と考えられる。

(中野)

139号住居跡 S I 139

遺構(図247、写真165)

本遺構は、V区北部のT-18・19グリッドに位置しており、標高236.8m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構はないが、西側3mに135号住居跡、北側3mに75・136号住居跡が近接する。135号住居跡の東側を検出していた際に、遺構の範囲とみられる南北8m、東西5mほどの炭化物が混じる土の広がりを確認した。精査した結果、住居跡であることが判明したことから、調査を行った。

堆積土は炭化物を微量含む褐色砂質土である。堆積過程は明確にできなかった。

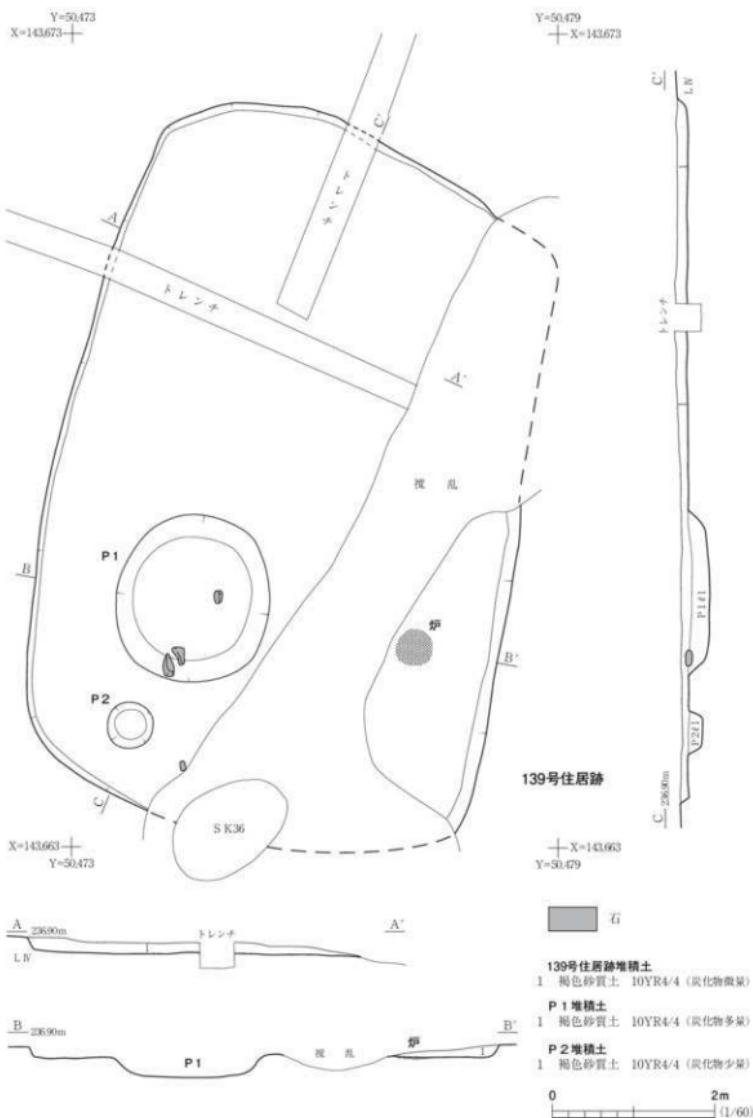


図247 139号住居跡

平面形は、おむね不整な隅丸長方形と考えている。規模は $8.8 \times 5.8\text{m}$ である。周壁は、遺存状態の良い西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも残りの良い西壁で16cmである。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に15度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用して構築していた。踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の東壁側の中央付近で1箇所確認した。平面形は円形である。規模は直径44cmほどで、炉の底面は、焼け方は弱く、暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは1cmである。

ピットは、2基検出した。P1は、炉の西側1.5mに位置する。規模や形態から貯蔵穴と考えている。平面形が円形を呈し、底面は平坦に掘られている。規模は $20.8 \times 19.0\text{cm}$ 、深さ24cmである。堆積土は、炭化物を多く含む褐色砂質土で、焼碟が3点出土した。P2はP1のすぐ南側に位置する。平面形は円形である。直径は55cm、深さは17cmである。堆積土は炭化物を少量含む褐色砂質土である。ピットの機能は不明である。

遺物は、P1の北側の堆積土から、やまとめて弥生土器が出土している。

遺物 (図248、写真435・437)

遺物は、弥生土器20点、石器1点が出土した。このうち、弥生土器7点、石器1点を図示した。

図248-1～3は口縁部片、4～6は胴部片、7は底部片である。1は口縁が外反する器形で、横位に撚糸を施し、口縁部下の段には連続的に刺突文を施す。頭部は無文となり、その下には斜位に撚糸を施文する。2・3は同一個体である。口端部に小波状の突起が付く。口縁部には繩文を施文し、沈線で弧線文を描く。口縁部下の段には、1と同様に連続的に刺突文を施す。4～6は附加繩文を施す。7は底部に木葉痕が確認できる。8は頁岩製の調片である。一部自然面を残す。

まとめ

本遺構は、 $8.8 \times 5.8\text{m}$ の隅丸長方形の大型の竪穴住居跡である。本調査区で検出された弥生時代の住居跡の中では最大である。床面からは地床炉1箇所とピットが検出された。遺構の所属時期は、出土遺物などから弥生時代終末期と考えられる。

(中野)

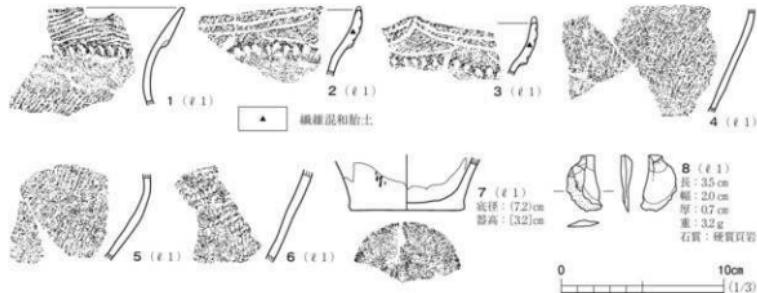


図248 139号住居跡出土遺物

140号住居跡 S I 140

遺構 (図249、写真166)

本遺構は、V区北部のT・U-16・17グリッドに位置しており、標高236.6m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。130号住居跡の周辺を検出したところ、100×90mの広い範囲にわたって炭化物が混じる土が堆積するのを確認した。当初は複数の住居跡とも考えたが、土層の状況などから1軒の住居跡であることが明らかとなり、調査を行った。重複する遺構は、108・111・112・115・129・130・137・138・189・193号住居跡、137号土坑である。重複関係は、本遺構が189号住居跡より新しく、それ以外の遺構より古い。

堆積土は、3層に区分した。 ℓ 1は炭化物と焼土粒を少量含む暗褐色砂質土である。 ℓ 2は炭化物粒塊を微量含むにぶい黄褐色砂質土である。 ℓ 3は炭化物粒塊を微量含む褐色砂質土である。 ℓ 1は人為的な堆積土と考えている。 ℓ 2・3の堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、西側を搅乱で失っているが、おおむね方形と考えている。規模は南北が10.0m、東西の遺存長が9.5mで、周辺の遺構群の中では最大規模である。周壁は、遺存状態の良い南壁側では30度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している東壁で13cmである。方位は、東壁を基準とするなら、北に対して30度東に傾く。

床面は、L IV下面に構築しており、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットを2基検出した。P 1は、北東隅に位置する。平面形は円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径60cm、深さ18cmである。P 2は、北東隅よりやや南に位置する。平面形は楕円形で底面は平坦に掘り込まれている。規模は215×152cm、深さ17cmである。P 1は貯蔵穴と考えているが、P 2の機能は不明である。ピットの堆積土は炭化物と焼土粒を含む暗褐色砂質土である。

遺物は、土師器3点が出土した。いずれも小片であり図示していないが、土師器の壺の胴部片で、古墳時代前期の所産である。

まとめ

本遺構は、規模が10.0mの大型の堅穴住居跡である。今回の調査で確認されたの中でも、最大規模のものである。しかし住居内の施設はピットのみで、遺物も少量の土師器片が出土したに過ぎず、詳細な部分は不明な点が多いといわざるをえない。遺構の所属時期は、出土遺物や遺構の重複関係などから古墳時代前期頃と考えられ、周辺地域と比較しても屈指の規模といえる。 (中野)

141号住居跡 S I 141

遺構 (図250、写真167)

本遺構は、V区中央部のT・U-15・16グリッドに位置しており、標高236.6mの平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、76・94・107・111・116・128・138号住居跡であ

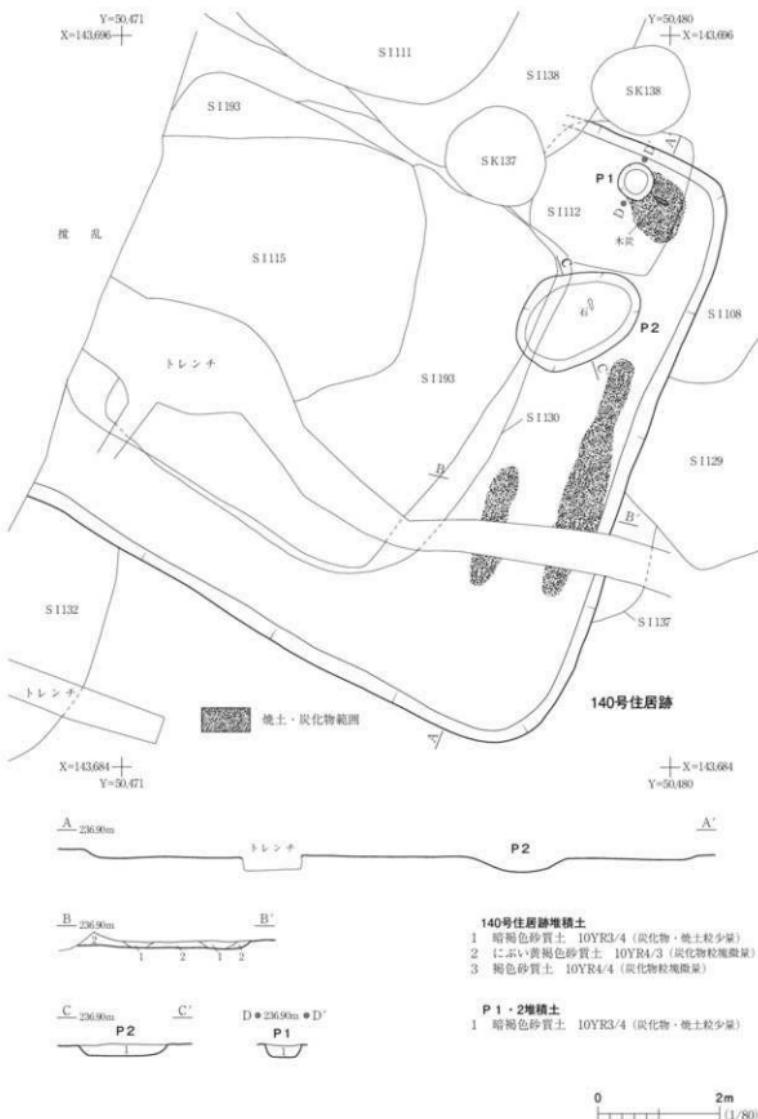


図249 140号住居跡

る。重複する他の遺構より本遺構が古い。

堆積土は炭化物粒を微量含むにぶい黄褐色砂質土である。層厚が薄く、堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、残りが悪いが隅丸方形と考えている。規模は $6.7 \times 6.7\text{m}$ である。周壁は、遺存状態の良い西壁側では45度立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している西壁で20cmである。方位は、残りの良い北壁を基準とするなら北に対して東に25度傾く。床面は、掘形底面であるLIV下面をそのまま利用しており、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットを2基確認した。P1は、床面の中央から南側に寄って位置する。平面形は円形である。規模は、直径30cm、深さ15cmである。P2は、床面の中央から北側に寄って位



図250 141号住居跡

置する。平面形は円形である。規模は、直径43cm、深さ22cmである。ピットの堆積土は、L IV砂粒を多く含む灰黄褐色砂質土である。

遺物は、土器が2点出土している。いずれも小片で磨滅しているため図示していない。時期も不明である。その他に住居の南側の ℓ 1から、20cmほどの焼け礫が4点出土している。

ま と め

本遺構は、6.7mの隅丸方形の竪穴住居跡である。重複する遺構が多く残りが悪い。出土遺物も乏しいため不明な点が多い。しかし他遺構との重複関係では、周辺遺構の中でもっとも古い住居跡の一つである。遺構の所属時期は、弥生時代終末期頃と考えている。
(中野)

142号住居跡 S I 142

遺構 (図251、写真168)

本遺構は、V区北部のV・W-15・16グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、126号住居跡で本遺構が新しい。

堆積土は、炭化物を少量含む褐色砂質土である。堆積過程は層厚が薄いため不明である。

遺構の平面形は、東側を失っているが、隅丸方形ないし長方形と考えている。

規模は、遺存長が4.2mである。周壁は西壁側では40度の角度で立ち上がる。壁の遺存高はもともと残りの良い西壁で10cmである。住居跡の方位は、西壁を基準とするなら、北に対して東に25度傾く。床面は、L IV下面をそのまま利用しており、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設はピットが1基である。ピットは、南西隅からやや北側に位置する。床面の位置から貯蔵穴と考えている。平面形は梢円形である。規模は長軸90cm、短軸62cm、深さ27cmである。

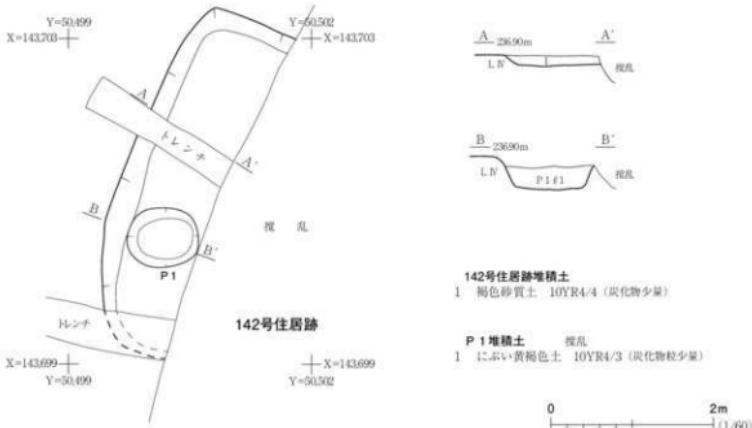


図251 142号住居跡

堆積土は炭化物を含むくびい黄褐色土である。

遺物は、土師器が59点、弥生土器1点が出土している。遺物は掲載していないが、ハケメを施した、球形の甕が2点以上と鉢などもみられる。弥生土器は、撫糸を施した口縁部片である。

まとめ

本遺構は、4.2mの堅穴住居跡である。東側が斜面地で失われており、遺存状態が悪く不明な点が多い。遺構の所属時期は、出土遺物や重複関係などから古墳時代前期頃と考えられる。(中野)

143号住居跡 S I 143

遺構 (図252、写真169)

本住居跡は、V区南部のP・Q-23グリッドで検出された。検出面はLIVで、褐色土の範囲として検出された。標高236.5mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。北に152号、東に160号、南に148号、西に124号の各住居跡が位置する。

平面形は隅丸方形で、やや平行四辺形ぎみである。規模は、東西が3.5m、南北が3.4mである。東辺は北から26度東に傾く。壁は、南壁のもっとも残りがよい場所で23cm、北壁の残りがもっとも悪い場所で5cmである。壁は比較的急な角度で立ち上がる。床面は、中央部と東壁の中央を除いた部分に貼床が施されていた。上面は水平かつ平坦である。掘形の底面は緩やかな凹凸がある他、南東隅付近に50×38cm、掘形底面からの深さ10cmの楕円形の落ち込みが検出された。貼床の



図252 143号住居跡

厚さは最大8cmである。

堆積土は3層からなる。これをℓ1～3とした。ℓ1は褐色の砂質土で、ℓ2は壁にむかうにしたがい層厚を増す暗褐色の砂質土である。いずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。ℓ3は褐色の砂質土で、貼床である。

住居内の施設は、地床炉1箇所を検出した。柱穴、貯藏穴は検出されなかった。

地床炉は、南西隅にかなり寄った位置にある。南西隅から地床炉の中心までの距離は約90cmである。平面形は梢円形で、最大で51cm、深さ6cmまで焼土化した範囲が及んでいた。

床面からはほぼ完形の土器が10点出土した。これらは住居跡の南半にまとまっていた。貼床中からは一部を欠損した鉢が1点出土した。この他、堆積土と床面から土器片が少量出土している。

遺物(図253・254、写真404～406)

遺物は、土師器167点、弥生土器2点、剥片1点が出土し、このうち土師器11点を図示した。

図253-1は、土師器の鉢である。つぶれた半球形の体部の底を凹み底とし、長く外傾する口縁部を載せる。口縁部は上部で内面側に屈曲し端部は直立する。底部を含む全面に光沢を放つほどミガキと赤彩を施す。

2は、土師器の鉢である。ややつぶれた球形の体部と、その上端を手びねりによってつまみ出したような短い口縁部をもつ。口縁部は薄く、不規則に波打ち、外面に指頭圧痕を顕著に付す。底部は剥離により欠失する。外面にナデ、内面にヘラナデを施す。

3は、土師器の鉢である。輪台状の平底と無頸で椀形の体部をもつ。内外面にナデを施す。

4は、土師器の小型の壺である。輪台状の平底の底部、最大径を中ほどにもつ張りのある体部、「く」字口縁をもつ。体部外面に、浅いハケメとナデのち、最大径付近にミガキ、内面にヘラナデを施す。

5は、土師器の壺である。平底で、なで肩の体部、「く」字口縁をもつ。内外面にナデを施す。

6は、片口を有する土師器の壺である。輪台状の底部、最大径を上部に有する体部、「く」字口縁をもち、頭部外面には粘土紐の積み上げ痕を残した段を有する。体部内外面を同じ原体によりヘラナデを施す。

7は素口縁の壺である。口縁部と体部上半が遺存する。体部は球形で、直線的に外傾する口縁部をもつ。体部外面にハケメ、内面にヘラナデを施す。

8・9は、土師器の台付壺である。8は、体部に比してやや小ぶりな台部、最大径を上部に有する張りのある体部、「く」字口縁を有する。体部上半にナデ、下半にケズリ、体部内面にヘラナデを施す。体部外面の一部と内面の底部付近に炭化物が薄く付着する。9は、直線的に開く台部、最大径を上部に有する体部、「く」字口縁をもつ。体部上半にハケメ、体部内面にヘラナデを施す。内面の片一方側の体部上半から底部にかけて炭化物が薄く付着する。

10は、土師器の有孔鉢である。無頸の椀形で、底部に11孔を穿つ。外面調整はやや模様とするものの、幅広の平行する単位による調整が施される。ハケメではなく、タタキメの可能性もあるが

第3節 住居跡

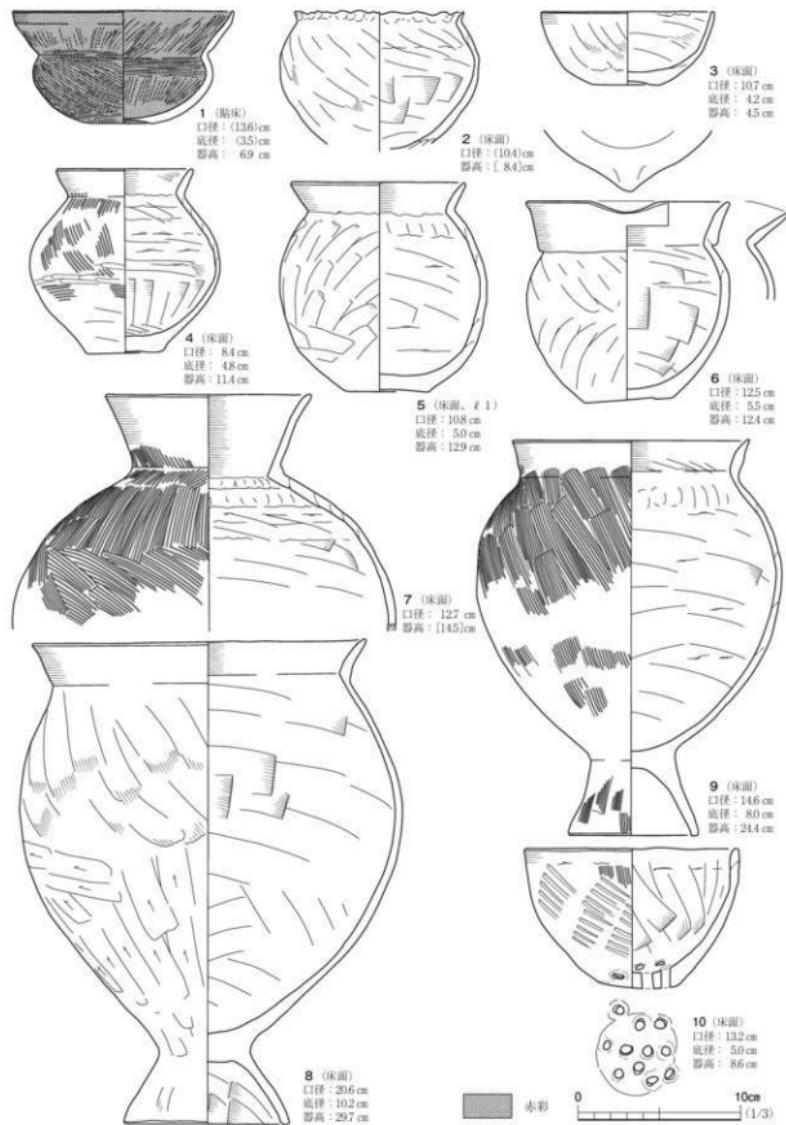


図253 143号住居跡出土遺物 (1)

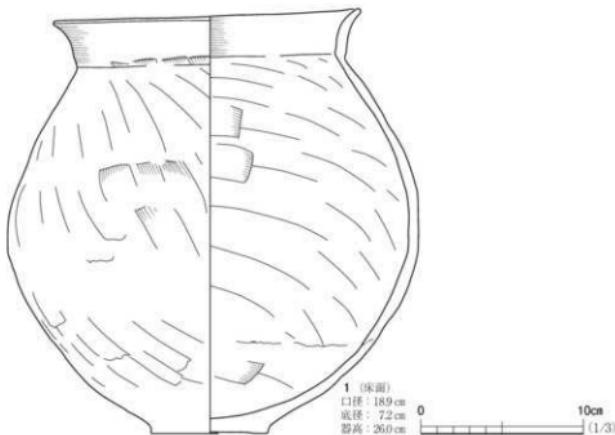


図254 143号住居跡出土遺物（2）

断言できない。内面調整は明瞭なヘラナデ調整が施される。

図254-1は、土師器の甕である。円板形の平底と中位に最大径をもつ体部、「く」字口縁をもつ。体部内外面にヘラナデ調整を施す。

まとめ

小型の竪穴住居跡で、南西隅からやや離れた位置に地床炉をもつ。床面から多くの土器が出土した。その特徴から古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

144号住居跡 S I 144

遺構 (図255、写真170)

本住居跡は、V区南西部のO-22グリッドで検出された。検出面はL IVで、重機によるL II b・IIIの除去の際に、一部掘りすぎてしまい西半部は失われ、遺存したのは東半部のみである。標高236.4mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。北に46号、東に153号、南に154号、西に145号の各住居跡が位置する。

全形は不明であるが、遺存した部分から隅丸方形か隅丸長方形であったと思われる。規模は、南北が最大3.4m、東西の遺存した部分の最大が1.4mである。東辺は北から10度東に傾く。壁は、北東隅がもっとも残りがよく高さ9cmである。床面は掘形底面であるL IVをそのままとし、水平かつ平坦である。住居内の堆積土は暗褐色の砂質土のみである。

住居内の施設は、地床炉1箇所を検出した。本住居跡の平面形が方形であるとすれば地床炉は床面の東部に寄った位置にあることになる。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は床面直上から器台が1点出土した。この他、堆積土から少量の土器片が出土している。

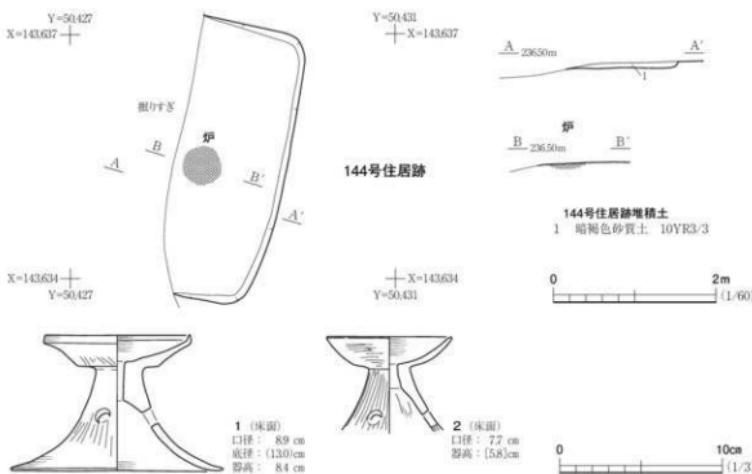


図255 144号住居跡・出土遺物

遺 物 (図255、写真406・407)

本住居跡からは土師器13点が出土し、このうちの2点を図示した。

図255-1・2は、土師器の器台である。いずれも、受け部から脚頂部へ貫通孔を穿つ。2は裾を欠失するが、いずれも3方向に円窓を穿ち、「八」字に開く脚部をもつ。1の受け部は、口縁端部を上方につまみ出し、下端に稜を有する。2の受け部は皿形である。

ま と め

小型の竪穴住居跡で、重機による上層の掘削の際に西半部分を削平してしまった。出土した土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。

(青 山)

145号住居跡 S I 145

遺 構 (図256、写真171・266・269)

本住居跡は、V区のN・O-22グリッドで検出された。検出面はLIVで、褐色土の範囲として検出された。標高235.8～236.0mの西に向かってきわめて緩やかに下る斜面である。他の遺構との重複はない。北に46号、東に144号、南に154号の各住居跡が位置する。

平面形は隅丸方形で、西辺がやや長い台形ぎみである。規模は、東西4.1m、南北4.7mである。西辺は北から31度西に傾く。壁は、緩斜面の上方にあたる南東隅付近がもっとも残りがよく25cm、北東隅がもっとも残りが悪く8cmの高さが遺存していた。壁は四方とも80度ほどの比較的急な角度で立ち上がるものの、西辺など一部に50度ほどの比較的緩やかな角度で立ち上がる部分がある。床面は、北部の3分の1ほどの部分と西壁ぎわの一部を除いて、貼床が施されている。上



図256 145号住居跡

面は水平かつ平坦である。掘形の底面は緩やかな凹凸があり、貼床の厚さは最大13cmである。

堆積土は3層からなる。 ℓ 1は褐色の砂質土で、 ℓ 2は壁にむかうにしたがい層厚を増すにぶい黄褐色の砂質土である。いずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積とみられる。 ℓ 3は褐色の砂質土で、貼床である。

住居内の施設は、地床炉1箇所、貯蔵穴1基を検出した。柱穴は確認されなかった。

地床炉は、北壁にかなり寄って位置する。平面形はほぼ円形で、径50cmほど、深さ5cmまで焼土化した範囲が及んでいることを断ち割り断面で確認した。炉の脇には3個の細長い自然礫が焼土面の縁辺に沿うように「コ」字形に配置されていた。

貯蔵穴と考えられるピットは南東隅に壁に接して位置する。これをP1とした。平面形はほぼ円形で、規模は最大の部分で77cm、床面からの深さ22cmである。

遺物は、床面から土師器12点と凹石1点が出土した。完形の土器が多い。北・西壁ぎわ、地床炉の近くに散在した他、P1から甕と台付甕が出土した。この他、住居内堆積土および貼床の中から比較的多くの土器片が出土した。

遺物 (图257・258、写真406~408)

遺物は、土師器306点、礫石器が1点出土し、このうち土師器12点、礫石器1点を図示した。

图257-1・2は土師器の高杯である。1は杯部と脚部の接合部付近が、2は脚部裾の一部が遺

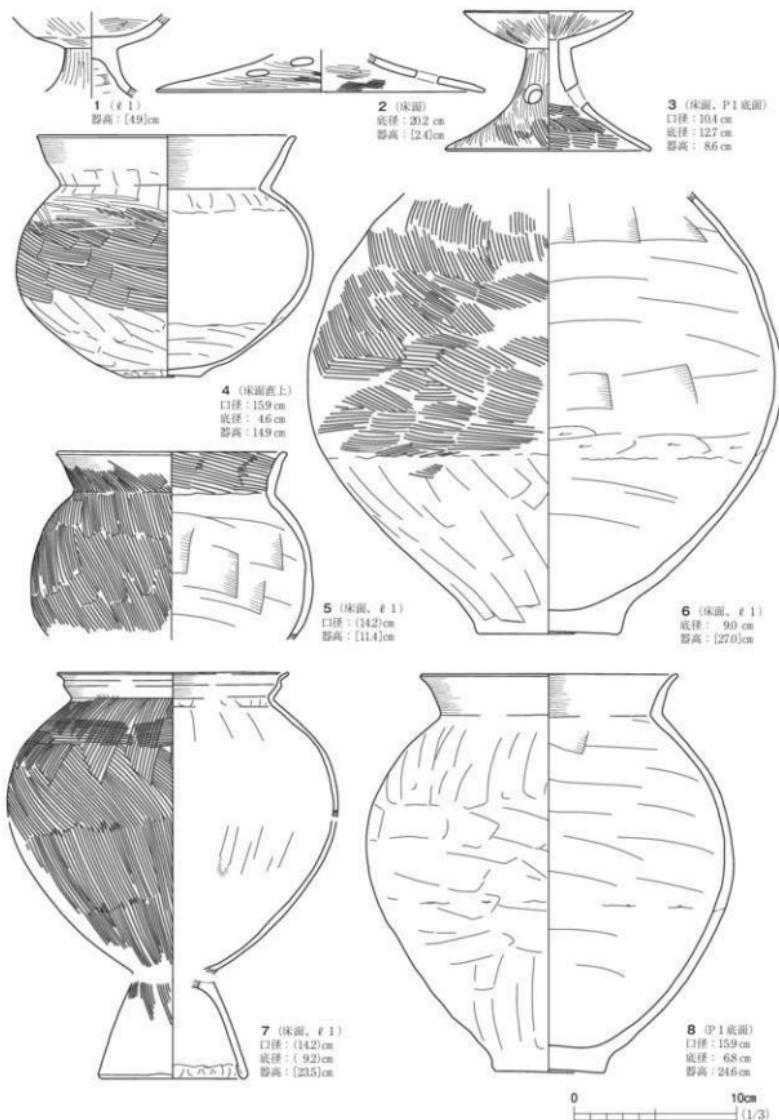


図257 145号住居跡出土遺物（1）

存する。2は円窓が複数段にわたって穿たれたものと思われる。

3は土師器の器台である。「八」字に開く脚部に皿形の受け部がのる。受け部から脚頂部へ貫通孔、脚部に3方向の円窓を穿つ。外面と受け部内面にミガキ、脚部内面にハケメが施される。

4は、土師器の鉢である。やや小さな平底、張りのあるつぶれた球形の体部、「く」字口縁をもつ。体部外面にナデのちハケメを施し、上部にさらにミガキを、底部付近にケズリが施される。内面は平滑にナデる。体部外面の一部に焼成時にいたタスキがみられる。

5は、土師器の甕である。ややつぶれた体部上半と「く」字口縁が遺存する。外面の口縁部下半以下と口縁部内面にハケメ、体部内面にヘラナデを施す。体部外面には薄く炭化物が付着する。

6は、土師器の壺である。平底の底部と球形の体部をもつ。口縁部を欠失する。体部上半にハケメ、下半にナデ、内面にヘラナデを施す。体部最大径の位置のやや下には、成形時の輪積み痕が観察され、これを境に上下で調整の不連続がみられる。

7は、土師器のS字状口縁台付甕である。口縁部から体部上半にかけての破片、体部の中位から下半にかけての破片、台部の破片から図上で復元した。断面がS字に屈曲する口縁部、最大径を上部にもつ器壁の薄い体部、端部を内側に折り返す台部をもつ。口縁部内面の端部直下には、ごく浅い凹線が巡る。体部外面には深いハケメが、上半は左下がりに、最大径付近以下には右下がりに、肩部にはその上にさらに横方向に施される。台の頂部は閉じ、その上面に指頭による連続する押圧が巡っているのが、体部との剥離面に観察される。台部内面の天井部の隅付近には、砂を多く混和させた胎土が薄く塗りつけられている。体部中位以下は被熱によって赤変し、体部内面の下部、3分の1以下には、粒状の炭化物が点々と一面に付着する。炊飯した米粒のコゲが付着したものと思われる。

8は、土師器の甕である。円板形の平底、張りのある体部、「く」字口縁をもつ。体部外面をナデ、内面をヘラナデで調整する。

図258-1・2は土師器の台付甕である。1は、円錐台形の台部、なで肩でやや長胴の体部、「く」字口縁をもつ。体部と台部の接合技法はわからないが、両者の間に厚い中実部分がある。体部外面をナデ、内面をヘラナデで調整する。体部中位と内面の底部付近に炭化物が付着する。体下部は被熱により赤変している。2は1より大型で、器形、器面調整、炭化物の付着する状況が相似する。2の外面からは炭化物のサンプルを採取し、¹⁴C年代測定を行った(付章第3節参照)。

3は、土師器の有孔鉢である。一孔を穿つ平底、深い鉢形の体部、外側に肥厚する口縁部をもつ。外面にケズリとミガキ、内面にヘラナデが施される。

4は、土師器のミニチュアである。手づくねで平底の鉢を模し、内外面にナデを施す。

5は、凹石である。三角柱形の自然礫を横倒し、その一稜線に2箇所の凹みが穿たれる。

ま と め

中型の竪穴住居跡で、3個の細長い自然礫を置いた地床炉をもつ。柱穴は確認されなかった。床面から多くの土器が出土し、その特徴から古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

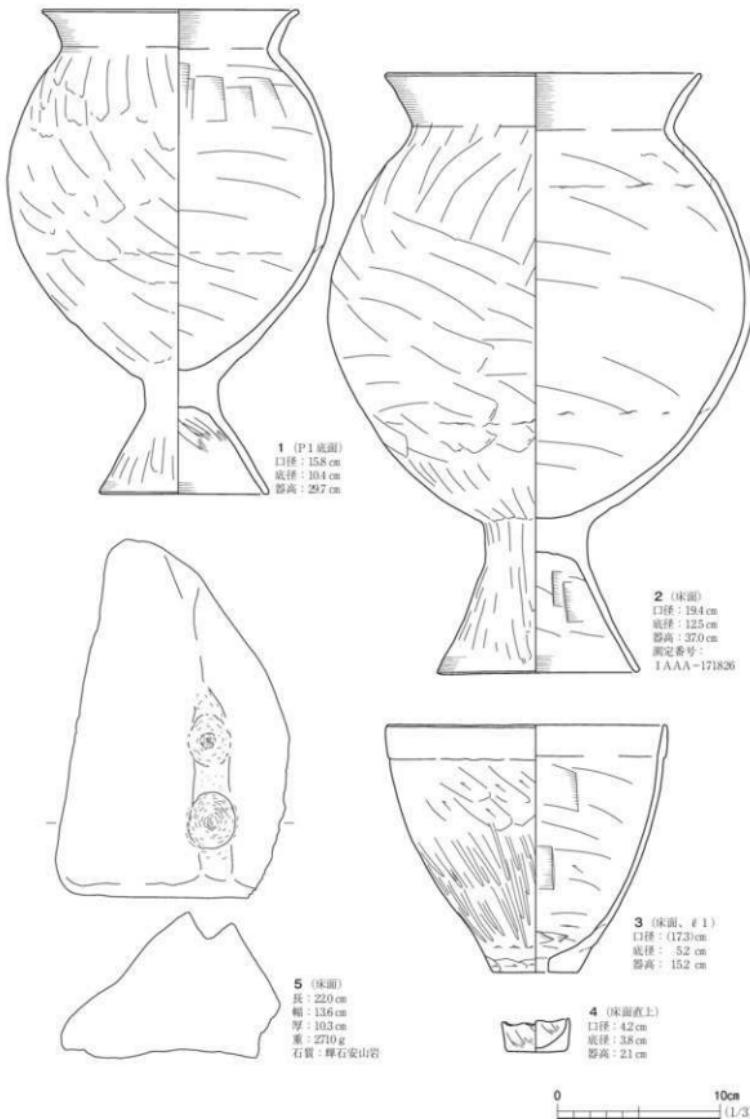


図258 145号住居跡出土遺物（2）

146号住居跡 S I 146

遺構 (図259、写真172)

本遺構は、V区北部のT-18グリッドに位置しており、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、131・133号住居跡であり、本遺構が古い。131号住居跡を調査中に、不整形に広がる遺構の範囲を検出した。土層観察用のトレーナを入れたところ、壁の立ち上がりが確認されたため、住居跡として調査を行った。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は炭化物を含むにぶい黄褐色土である。 ℓ 2は、炭化物を含む暗褐色土である。いずれも水平に堆積しており、人為的な堆積土と考えている。

平面形は、ほとんどが131号住居跡に壊されており、不明確な点が多いが、おおむね方形ないし長方形と考えている。規模は遺存長3.1mである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で70度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している南壁で30cmである。住居の方位は、残りの良い南壁を基準とするなら北に対して西に80度傾く。床面は、掘形底面であるLIVをそのまま利用しており、確認された範囲の踏み締まりは弱い。

住居内の施設は一切検出されていない。重複部分に存在していた可能性も考えられる

遺物は、土器1点が出土した。磨滅した小片で図示していない。

まとめ

本遺構は、遺存長が3.1mの竪穴住居跡である。131号住居跡に大半が壊されているため、不明な点が多い。遺構の所属時期を明示する遺物はないものの、検出面や他遺構との重複関係などから、古墳時代前期以前と考えられる。

(中野)

147号住居跡 S I 147

遺構 (図260、写真173)

本遺構は、V区北部のO・P-25グリッドに位置している。標高236.2m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構はない。



図259 146号住居跡

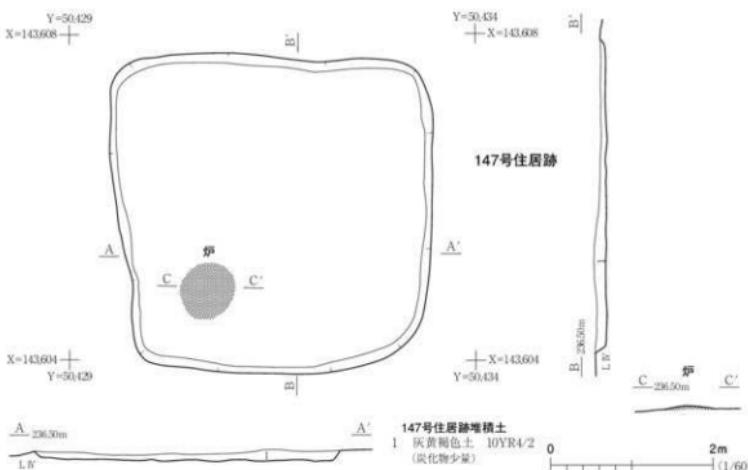


図260 147号住居跡

堆積土は、炭化物を含む灰黃褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、おおむね隅丸方形である。規模は、 $4.0 \times 3.9\text{m}$ である。周壁は、残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で13cmである。方位は、東壁を基準とするならば真北を指す。床面は掘形底面であるL IV下面をそのまま利用している。おおむね平坦に作られている。全体的に踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉を1箇所検出した。地床炉は、床面の南西隅に位置している。平面形は円形で、炉の上面は、床面の高さより5cmほど高くなっている。規模は、直径67cmで赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは3cmである。

遺物は、土師器が5点出土した。いずれも小片であり図示していないが、ハケメ調整を施した甕の胴部片で、古墳時代前期の所産である。

まとめ

本遺構は、4.0mの隅丸方形の竪穴住居跡である。南西隅からやや中央に寄った所に、地床炉が位置する。所属時期は、検出面や遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。
(中野)

148号住居跡 S I 148

遺構 (図261、写真174・270)

本遺構は、V区南部のP-23・24グリッドに位置しており、標高236.5m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構はない。

堆積土は3層に区分した。①は炭化物を微量含む、にぶい黄褐色土である。床面まで均一に堆

積し、一部縞状になっている。 ℓ 2は、壁面近くに三角状に堆積する褐色砂質土である。 ℓ 3は褐色砂質土で、LIV粒を多く含む貼床の構築土である。

平面形は隅丸方形で、規模は $4.1 \times 3.9\text{m}$ である。周壁は、遺存状態の良い東壁側で70度の角度をもって立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で 36cm である。方位は、残りの良い西壁を基準とするなら、北に対して西に25度傾く。床面は貼床を構築しており、比較的硬く踏み締まっていた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央からやや北西に寄った位置で1箇所確認した。平面形は楕円形である。規模は長軸 48cm 、短軸 45cm ほどで、暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは 1cm である。

ピットは、南西隅で1基検出した。P 1は、平面形が円形で貯藏穴と考えている。底面はおむね平坦に掘り込まれているが、北西の底面には $74 \times 32\text{cm}$ で深さが 8cm ほどの窪みがある。全体の規模は直径 125cm 、深さ 13cm である。堆積土は炭化物を少量含む暗褐色土である。

遺物は、図262-2が ℓ 1の下面より正位で出土している。1・4~6は、南西隅付近の ℓ 1下面から床面の出土である。特徴的な出土状態のものは、5と6で、床面に逆位で置かれた6の有孔鉢の上に、脚部を欠損した5の台付甕が上に載せられた状態で出土している。また、北西隅付近からP 1にかけての ℓ 1の下面から床面にかけては、いわゆる編物石や焼けた礫など20点ほどが出

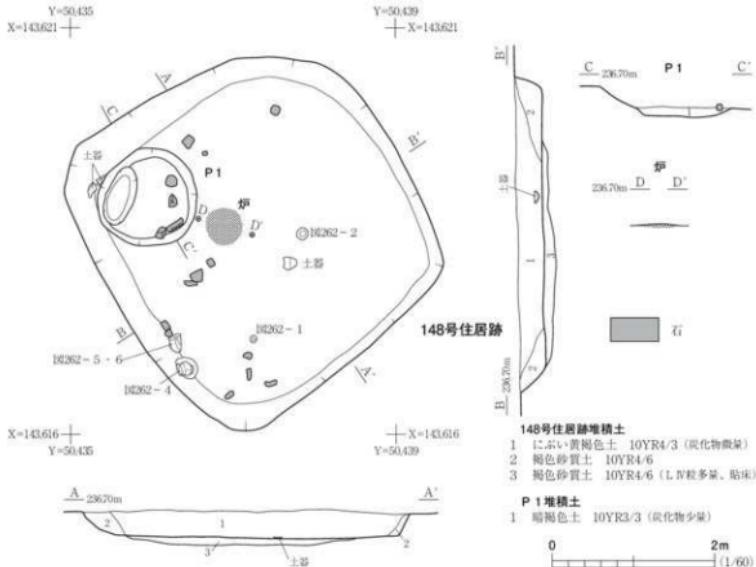


図261 148号住居跡

土している。

遺物 (図262、写真408)

遺物は、土師器198点、石器1点が出土した。このうち土師器6点を図示した。

図262-1は、器台である。「八」字状の脚部をもつもので、外面をハケメ調整後にヨコナデ調整を施す。2は、口縁部が外側に外傾し、平底になる鉢である。3は、赤彩を施した壺である。口縁部が欠損する。4・5は、台付壺である。5は、台部を欠損する。外面にナデ調整を施す。内面には底部から器形の1/3ほどには煤の付着がみられる。6は、単孔の有孔鉢である。

まとめ

本遺構は、4.1mほどの方形の堅穴住居跡である。床面中央では地床炉1箇所、北西隅で貯蔵穴が検出された。床面に逆位で置かれた有孔鉢の上に、脚部を欠いた台付壺が載せられて出土している。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。
(中野)

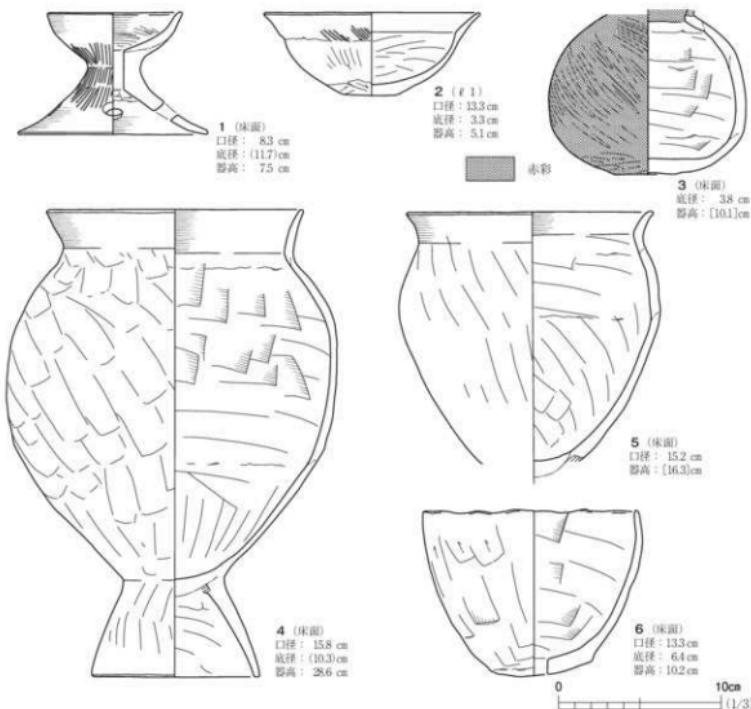


図262 148号住居跡出土遺物

149号住居跡 S I 149

遺構 (図263、写真175)

本遺構は、V区南部のS-19・20グリッドに位置しており、標高236.4m付近の平坦面に立地する。輸出面はL.IVである。重複する遺構はない。

堆積土は、炭化物を微量含むにぶい黄褐色砂質土である。遺構の遺存状態が悪く、層厚が薄いことから堆積過程は明らかにできなかった。

平面形は、西側を失っているが、隅丸長方形である。規模は 6.5×5.7 mである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で8cmである。

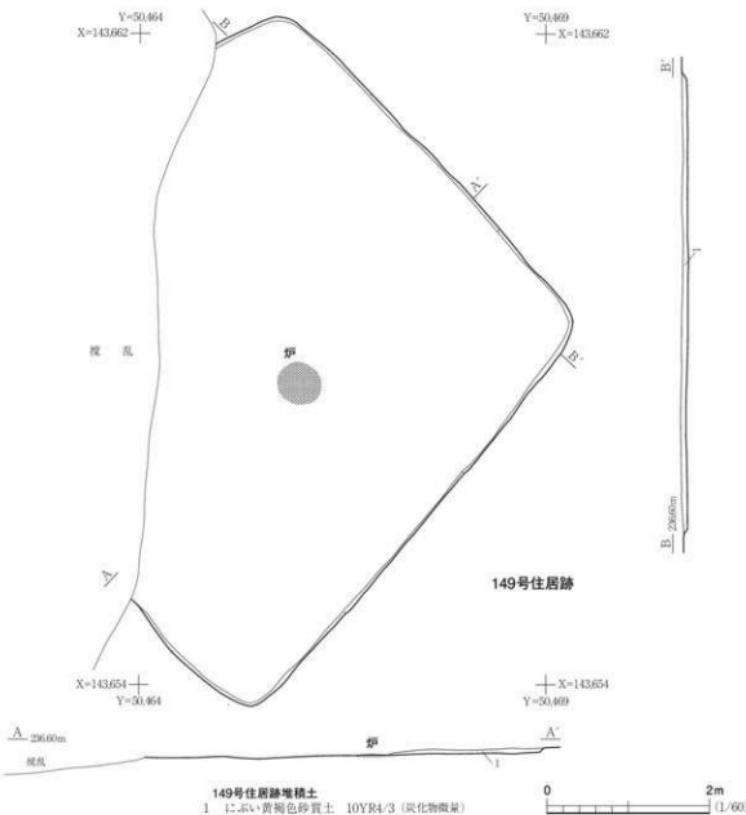


図263 149号住居跡

方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に40度傾く。床面は掘形底面であるL IVをそのまま利用している。全体的に踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉である。地床炉は、床面のはば中央で1箇所確認した。平面形は円形である。規模は直径50cmほどで、暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは1cmである。

遺物は、遺構内から出土しなかった。

まとめ

本遺構は、 6.5×5.7 mほどの隅丸長方形の竪穴住居跡である。床面中央には地床炉1箇所が検出された。遺物は出土していない。遺構の所属時期は、判断材料が乏しいが、遺構の検出面や周辺の遺構との関係から古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

150号住居跡 S I 150

遺構 (図264、写真176)

本遺構はV区南部のS-21グリッドに位置し、標高236.7m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は23号烟跡で、本遺構が古い。L III bを除去していた際に、烟跡とそれに壊されている長方形の遺構とみられる範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は炭化物を微量含む、暗褐色砂質土である。西壁側では、堆積土下部から炭化材が出土したが、層厚が薄く、堆積要因は明らかにできなかった。

平面形は、隅丸長方形である。規模は 3.2×2.5 mである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で60度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で14cmである。方位は、東壁を基準



図264 150号住居跡

とするなら、北に対して東に30度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用している。平坦かつ水平に作られているが、全体的に踏み締まりは弱い。

住居内の施設は認められず、遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は、3.2×25mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。住居内の施設も検出しておらず、遺物も出土していない。遺構の所属時期は、判断材料が乏しいが、遺構の検出面や周辺の遺構との関係から弥生時代終末期から古墳時代前期頃の時間幅で考えている。

(中野)

151号住居跡 S I 151

遺構 (図265、写真177・270)

本遺構は、V区北部のQ-25・26グリッドに位置しており、標高236.2m付近の西側から東側に

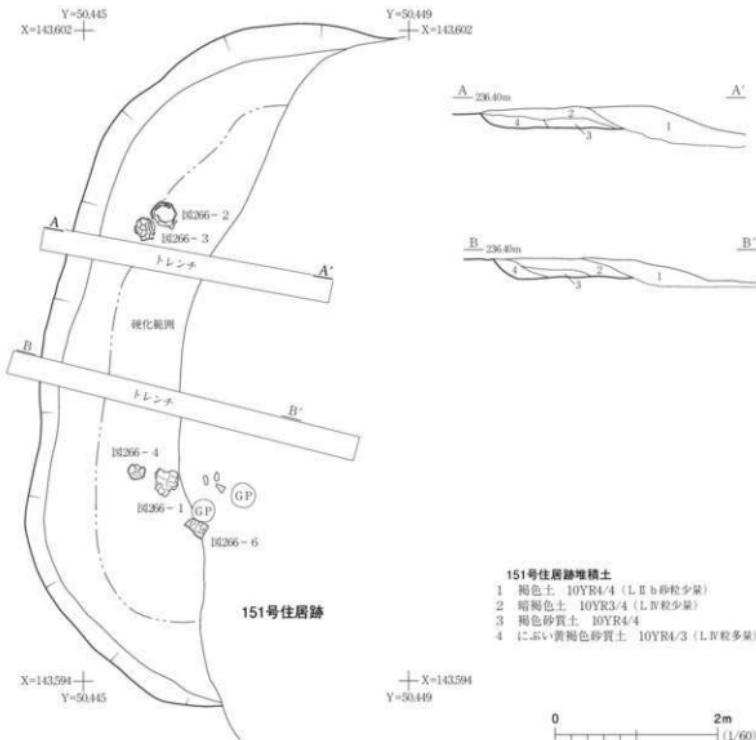


図265 151号住居跡

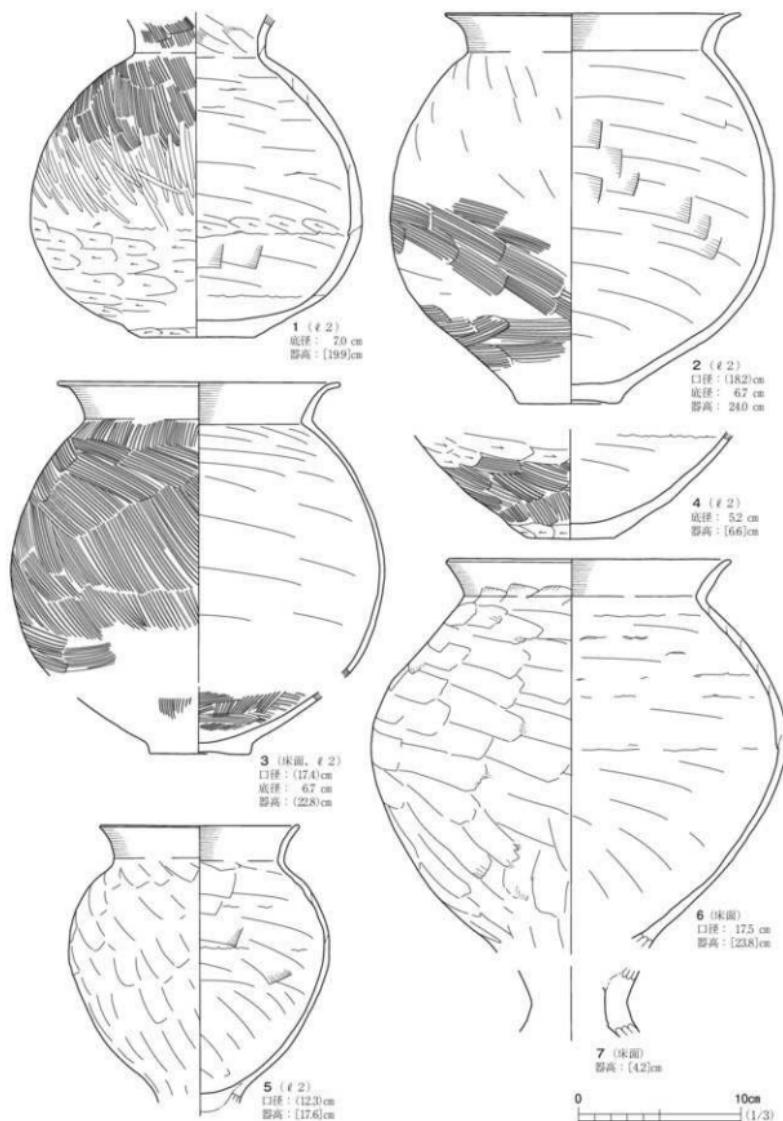


図266 151号住居跡出土遺物

下る緩斜面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は、34・35号建物跡、93号土坑であり、本遺構が古い。

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1は白色粒を含む褐色土である。基本土層のL II bに対応すると思われる。 ℓ 2は、L IV粒を含む暗褐色土である。 ℓ 3は褐色砂質土である。 ℓ 4はL IV粒を多量に含む、いぶい黄褐色砂質土である。いずれも堆積状況などから自然堆積土と考えられる。

平面形は、東側が斜面部で削られており残りが悪いが、楕円形ないし隅丸方形と推測している。規模は長軸が8.4mである。周壁は、遺存状態の良い西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している西壁で25cmである。住居の方位は、残りの良い西壁を基準とするなら北に対して東に10度傾く。床面は貼床は施されずにL IVをそのまま利用している。6.5×1.5mの範囲が、踏み締まりによって硬化していた。

住居内の施設は、確認されなかった。

遺物は、北西隅付近の ℓ 2から、図266-2と3が出土している。 ℓ 2が堆積する以前に2の土器を逆位に、3を正位で並べて遺棄したものと考えている。115号住居跡の甕の出土状態と共通している。1・4~6は住居南側の ℓ 2から床面にかけてまとめて出土した。

遺物(図266、写真409)

遺物は、土師器236点が出土した。このうち土師器7点を図示した。

図266-1は胴部の下半部が膨らむ壺である。1/3ほど遺存しており口縁部が欠損している。外面はハケメ調整後に胴部中段は縱位方向にヘラミガキを施し、胴部下半から底部にかけてヘラケズリで調整している。2・3は球胴形の甕である。口縁部が頸部から「く」字に外反し、底部がケズリによって上げ底状を呈する。2は上半がナデ調整で下半部が斜位方向にハケメを施す。内面の下側には煤が付着する。3は口端部が短く反り返る。外面はハケメ調整を施す。甕にはいざれも外面中段に炭化物が付着する。4は甕の底部片である。外面と底面に穀痕が見られる。5~7は台付甕である。5は台部を欠損し、外面にナデ調整を施す。内面の上半部まで煤が付着する。6は、7と同一個体の可能性がある。外面にナデ調整を施す。

まとめ

本遺構は、長軸長が8.4mの堅穴住居跡である。東側が斜面部になることから、大半が失われているため、不明な点が多い。堆積土からは、逆位と正位の状態で甕が出土しており、並べて遺棄したものと考えられる。115号住居跡の甕の出土状態と共通している。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。

(中野)

152号住居跡 S I 152

遺構(図267、写真178)

本住居跡は、V区、P・Q-22・23グリッドのL IVで検出された。標高236.3mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。北に153号住居跡、南に143号住居跡が位置する。143号住居跡

の全景写真撮影のための清掃中に、土器片を含むきわめて不明瞭な遺構とみられる範囲が認められた。周辺をあらためて削ったが範囲ははつきりせず、10cmほど掘り下げたところでようやく暗褐色土の方形の広がりが確認された。このため、143号住居跡と近接するにも関わらず、本住居跡の検出面の標高は143号住居跡よりも20cm弱低い。

平面形は隅丸方形で、規模は、 2.7×2.6 mである。東辺は北から42度東に傾く。壁は、南壁のもっとも残りがよい場所で13cm、北壁の残りがもっとも悪い場所で6cmである。壁は55~65度の角度で立ち上がる。床面は、中央部を除いて貼床が施されており、上面は水平かつ平坦となっている。掘形の底面は緩やかな凹凸がある。貼床の厚さは最大7cmである。

堆積土は3層からなる。 $\ell 1$ は暗褐色の砂質土で、 $\ell 2$ は暗褐色砂質土である。これらはレンズ状に堆積する自然堆積土である。 $\ell 3$ は褐色の砂質土で、貼床である。

住居内の施設は、地床炉2箇所と貯蔵穴1基を検出した。柱穴は検出されなかった。

2箇所の地床炉は床面北部にあり、炉1・2とした。炉1は北壁ぎわ北西隅寄りにある径33cmの円形の焼土面、炉2は床面中央から北壁寄りにある径35cmの円形の焼土面である。

貯蔵穴と考えられるピットは床面の東隅に位置し、平面形が椭円形、規模は大部分で43cm、床面からの深さ18cmである。床面を検出した段階ではその存在に気づかず、貼床の検出作業によって存在を認識できた。掘り込み面は床面と考えられ、底面は堀形底面をさらに掘り込む。



図267 152号住居跡・出土遺物

遺物は、P 1 から一部を欠損した状態の土師器の有孔鉢が出土した。この他、検出作業中に鉄鎌 1 点と、堆積土から弥生土器を含む少量の土器片が出土した。

遺物 (図267、写真409・448)

本住居跡からは、土師器 19 点、弥生土器 3 点、鉄鎌 1 点が出土した。このうち、土師器 1 点と鉄鎌 1 点を図示した。

図 267-1 は、土師器の有孔鉢である。平底に 7 孔を穿ち、体部は外傾しそのまま素口縁に至る。内外面の口縁部付近に輪積み痕を残す。

2 は、鉄鎌である。刃部先端は鋭角で、刃部はふくらを有し、逆刺の先端は鋭角に尖る。無茎である。鎌身の中央に 1 箇所の穿孔を有する。断面は偏平である。

まとめ

小型の竪穴住居跡で、2 箇所の地床炉と 1 基の貯蔵穴をもつ。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴から出土した土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。(青山)

153号住居跡 S I 153

遺構 (図268、写真179・267)

本住居跡は、V 区の P-22 グリッドの L IV で検出された。標高 236.4 m の平坦な場所である。他の遺構との重複はない。本住居跡は、検出作業が非常に難航した。南に位置する 152 号住居跡の写真清掃中に土器片を含む不明瞭な遺構らしき範囲が認識された。あらためて検出作業を行ったが不明瞭だったため、付近を 10 cm ほど掘り下げたところ、暗褐色土の遺構範囲を一応認識できたため、土層観察畦を 1 箇所残して掘り下げ始め、50 cm ほどの深さで床面に至った。続いて壁出し作業に移ったが、南西部は当初認識していた範囲の外側で壁が検出された。しかも一部は壁に到達したことに気づかずには掘りすぎてしまい、床面と同じ高さで貼床外側の範囲が検出されたことで壁を掘りすぎたことが判明した部分があったほどである。それほど基盤層と遺構堆積土の峻別が難しく、土層観察畦の延長線上に入れた断ち割り断面においてもそれは同様であった。本住居跡の外形が認識できたのは貼床の外側の輪郭によってであった。

平面形は隅丸方形で、規模は、東西 5.2 m、南北 4.8 m である。西辺は北から 37 度西に傾く。周囲の住居跡に比して深く掘り込まれ、壁の高さは、もっとも残りがよい場所で 50 cm、もっとも悪い場所で 32 cm である。壁はいずれも 80 度ほどの急な角度で立ち上がる。

床面には、中央部を除いて貼床が貼られていた。床面中央部は掘形底面をそのまま床面としていた。この部分と、貼床部分の掘形底面の一部に砂層が露出していた。貼床の厚さは最大 10 cm である。掘形の底面においても柱穴などは検出されなかったが、一部に砂層が露出するなどしていたため分かりづらかったというが正直な所見である。

堆積土は 3 層からなる。 ℓ 1・2 は暗褐色の砂質土で、 ℓ 2 は壁にむかって層厚を増す。いずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。 ℓ 3 は黒褐色砂質土の小塊を斑状に含んだ暗褐色

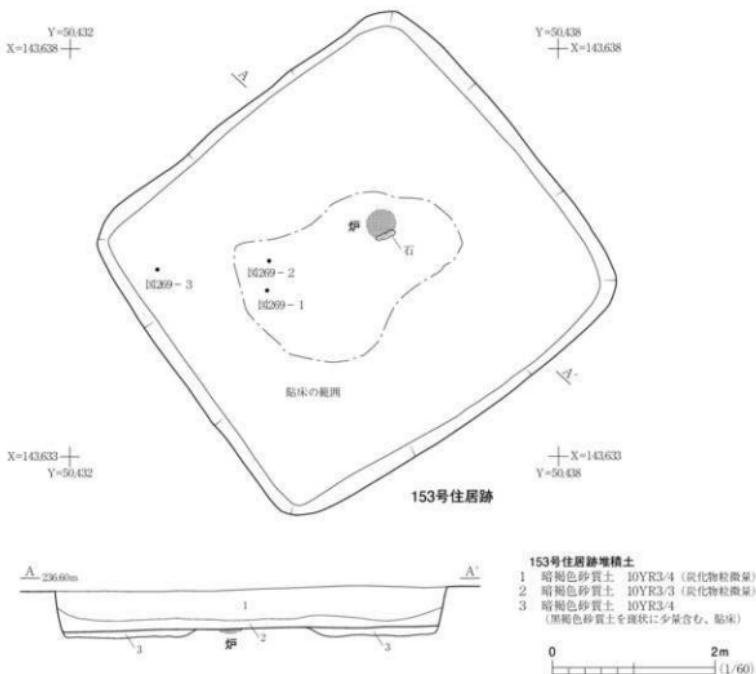


図268 153号住居跡

色の砂質土で、貼床である。貼床に含まれていたこの黒褐色の小塊によって、貼床の範囲を識別することができた。上述したように、本住居跡の平面形を決定したのは貼床の範囲によってである。

床面からは地床炉1箇所を検出した。柱穴や貯蔵穴などは検出されなかった。地床炉は床面中央部からやや北寄りにある平面形が円形の焼土面で、径36cm、脇に焼土面の外縁に沿うように細長い自然縛が1個置かれていた。自然縛は片側が被熱により赤く変色していた。

遺物は、床面および床面からやや浮いた状態で、一部を欠損した状態の土器が3点出土した。地床炉のすぐ北側では破片の状態で甕が出土したが、破片はそろっていなかったことから破損したものを遺棄したものと思われる。この他、堆積土から土器片が散在して出土している。堆積土から出土した土器の中には複数の弥生土器片が含まれ、本住居跡周辺の遺構外、南側に位置する143・154号住居跡の堆積土から出土した破片と接合した。

遺物 (図269、写真409・410)

本住居跡からは、土師器154点、弥生土器19点が出土した。このうち、土師器3点、弥生土器9点を図示した。

図269-1は、土師器の壺である。平底で、最大径を中ほどよりやや上にもつ張りのある体部、「く」字に外傾する口縁部をもつ。口縁部内外面にハケメ、体部外面に強いナデ、体部内面の上半にケズリ、下半にヘラナデが施される。外面の体部中ほどと内面の底部付近に炭化物が付着する。

2は、土師器の壺である。「く」字口縁と体部上半が遺存する。口縁部と体部の外面にハケメ、口縁部内面にヨコナデ、体部内面にヘラナデを施す。

3は、台付壺である。台部のみが出土した。外面にハケメ、内面にヘラナデを施す。

4～12は弥生土器である。4～7は胎土・色調・厚さなどの特徴から同一個体と考えられ、附加条第2種を施す。8～12も、上述の弥生土器と地文以外の特徴を同じくする。地文は縄の間隔のせまい撲糸文であるが、8・10には二種類の縄文が共存していることから、すべて同一個体の可能性がある。その場合、体部中位以下が附加縄文、体部上位が撲糸文で、12には無文部があることから、あるいは頭部に無文帯が巡るのかもしれない。内面には条を有するナデが施される。

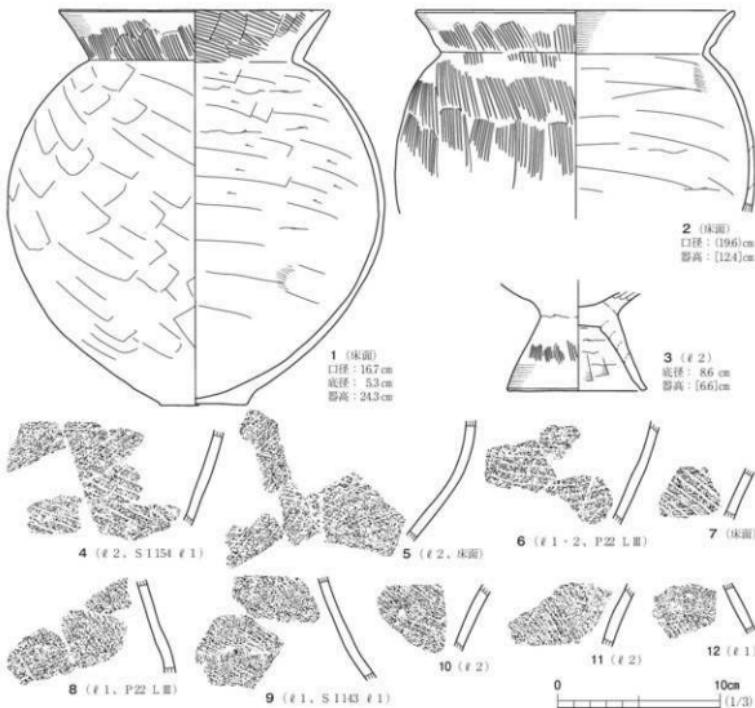


図269 153号住居跡出土遺物

まとめ

中型の堅穴住居跡で、1個の自然礫を置いた地床炉をもつ。柱穴や貯藏穴などは検出されなかつた。床面から出土した土器の特徴から、古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

154 a・b号住居跡 S I 154 a・b

遺構(図270、写真180~182・267)

本住居跡は、V区、調査区南部のO・P-22・23グリッドのLIVで暗褐色の方形の範囲を検出した。標高236.2mの平坦な場所である。他遺構との重複はない。北側に144号住居跡が位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は、東西が最大3.7m、南北が最大3.5mである。西辺は北から40度東に傾く。壁の高さは、もっとも残りがよい場所で32cm、もっとも悪い場所で23cmである。壁はいずれも比較的急角度で立ち上がる。床面は全面に貼床が施され、その上面は水平で平坦である。

堆積土は、レンズ状に堆積する5層からなる。 ℓ 1は暗褐色の砂質土で、 ℓ 2は黒褐色の砂質土、 ℓ 3は壁ぎわに堆積する暗褐色砂質土である。これらは自然堆積土と思われる。 ℓ 4・5は貼床の構築土である。 ℓ 4は上面の貼床で、暗褐色砂質土を斑状に含むにぶい黄褐色砂質土が全面に貼られていた。 ℓ 5は下面の貼床で、周縁部に褐色の砂質土が貼られていた。

床面からは地床炉1箇所と貯藏穴と考えられるピット1基、灰白色粘土塊を検出した。柱穴は検出されなかった。

地床炉は床面中央部やや南寄りにある楕円形の焼土面で、最大部分の長さが62cmである。

灰白色粘土塊は、南壁ぎわの中央からやや西壁によった位置の浅い皿状に掘りくぼめられた床面の上に、平面形を最大径50cmの楕円形に、最大の厚さ10cmの円板形に整えて置かれていた。

上面の貼床を除去したところ、地床炉のある床面がもう一面現れた。このため、上の床面を154a号住居跡、下の床面を154 b号住居跡とした。a号の貼床下には自然堆積土がみられなかつたことから、b号が機能を停止した直後に客土を入れて貼床を施したと考えられる。

154 b号住居跡の床面で検出されたのは地床炉1箇所で、柱穴などは検出されなかつた。b号住居跡の床面からの壁の高さはもっとも残りの良い部分で47cmである。

地床炉は床面中央からやや北西寄りにある焼土面で、平面形は楕円形、最大部分の長さは58cmである。焼土面の中央やや北東寄りに細長い自然礫が焼土面の長軸方向に直交しておかれてい。

貯藏穴は北隅で検出された。これをP1とした。平面形は楕円形で、規模は最大部分で60cm、最小部分で49cm、床面からの深さは18cmである。

154 b号住居跡の床面には、中央部を除く部分に褐色砂質土の貼床が施されていた。掘形の底面には緩やかな凹凸があり、貼床の厚さは最大10cmである。

遺物は、154 a号住居跡の床面からはほぼ完形の小型の台付甕が1点、 ℓ 1~3と床面からは弥生土器を含む少量の土器片が出土した。154 b号住居跡からは、貯藏穴から敲石が1点、床面直上と貼床から少量の土器が出土した。

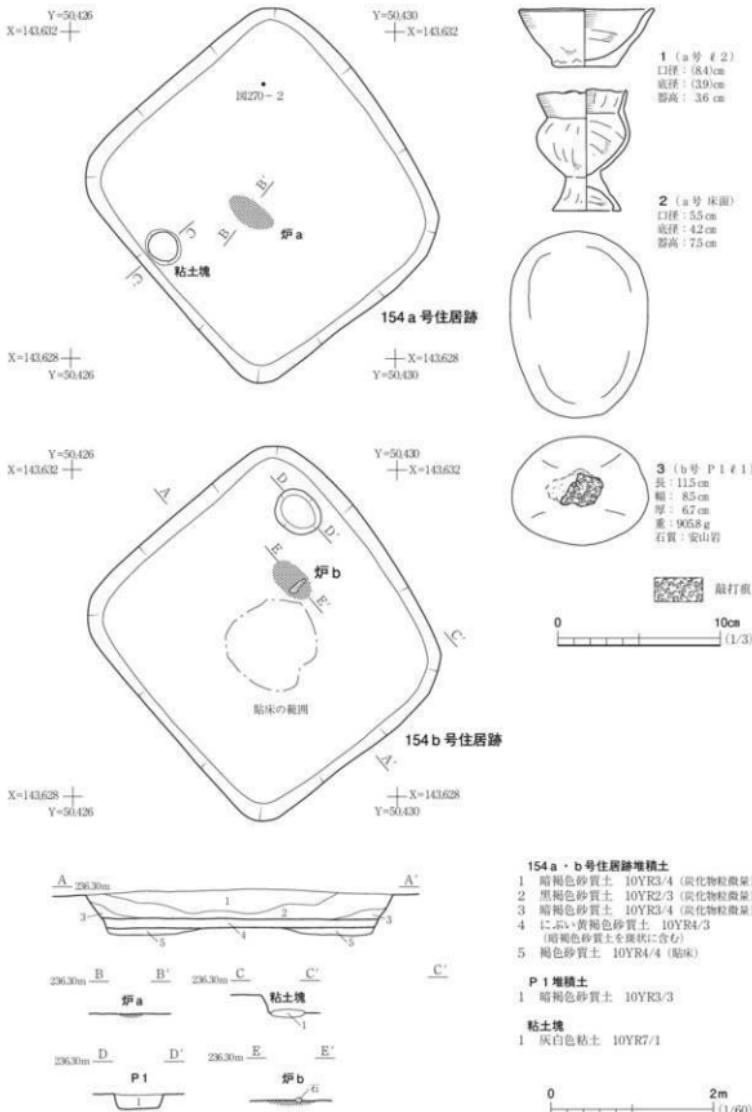


図270 154a・b号住居跡・出土遺物

遺物 (図270、写真409)

本住居跡のa号からは、土師器64点、弥生土器2点、b号からは、堆積土すなわちa号の貼床から土師器38点、P1から敲石1点が出土した。このうち、a号から出土した土師器2点、b号のP1から出土した敲石1点を図示した。

図270-1は、土師器の鉢である。平底で外傾する無頭の体部をもつ。口縁端部はわずかに外反する。内外面にナデ調整を施す。

2は、土師器の小型の台付甕である。実用できる大きさではないのでミニチュアというべきかもしれない。断面台形の台部、張りのある球形の体部、「く」字口縁をもつ。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。台部には指頭の圧痕が残る。

3は、敲石である。こぶし大の自然礫の一端に2~3cm大の敲打痕を有し、反対側の端部には平滑な部分を有する。

まとめ

小型の住居跡で、上下2面の床面をもつ。いずれの床面からも柱穴は検出されなかった。それぞれの床面に地床炉が確認されたことから、初めにb号で人が生活し、その後にb号の床面に客土を入れて床を貼り直し、その上面を床面とするa号でまた人が生活したと考えられる。本住居跡の時期は、土器の特徴からa・b号とも古墳時代前期に位置づけられる。

(青山)

155号住居跡 S I 155

遺構 (図271、写真183)

本住居跡は、V区のN-23・24グリッドのL II bで、黒褐色土が方形に広がる範囲と東に延びる煙道が検出されたことにより住居跡と認識した。標高236.3~4mの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。東には174・184号住居跡、北側には187号住居跡が位置する。

平面形は方形で、規模は39×40mである。東辺は北から4度東に傾く。壁の高さは残りがもっともよい部分で45cm、もっとも残りの悪い部分で31cmである。四方の壁とも70度ほどの比較的急な角度で立ち上がる。

床面には、中央部を除いて貼床が施されていた。上面は水平かつ平坦である。掘形の底面は緩やかな凹凸があり、貼床の厚さはもっとも厚い部分で13cmである。

堆積土は4層からなる。 ℓ 1は黒褐色土、 ℓ 2は暗褐色土、 ℓ 3は壁ぎわに堆積するにぶい黄褐色土で、いずれもレンズ状の自然堆積土と思われる。 ℓ 4はにぶい黄褐色土で、貼床である。

カマドは東壁の中心からやや南壁に寄って確認された。両袖と焼土面、煙道、煙出しピットからなる。規模は、両袖の幅が最大93cm、袖の先端から壁までが63cm、袖の基底部幅が最大で35cm、床面からの遺存高は最大27cmである。両袖は褐色土で構築され、天井は崩落していた。右袖の先端には自然礫が立位の状態で貼り付いていた。焼土面は直径30cmの円形で、両袖先端を結ぶ線のやや内側、両袖の中央や右袖寄りに位置する。焼土化した範囲は5cmの深さに及び、右

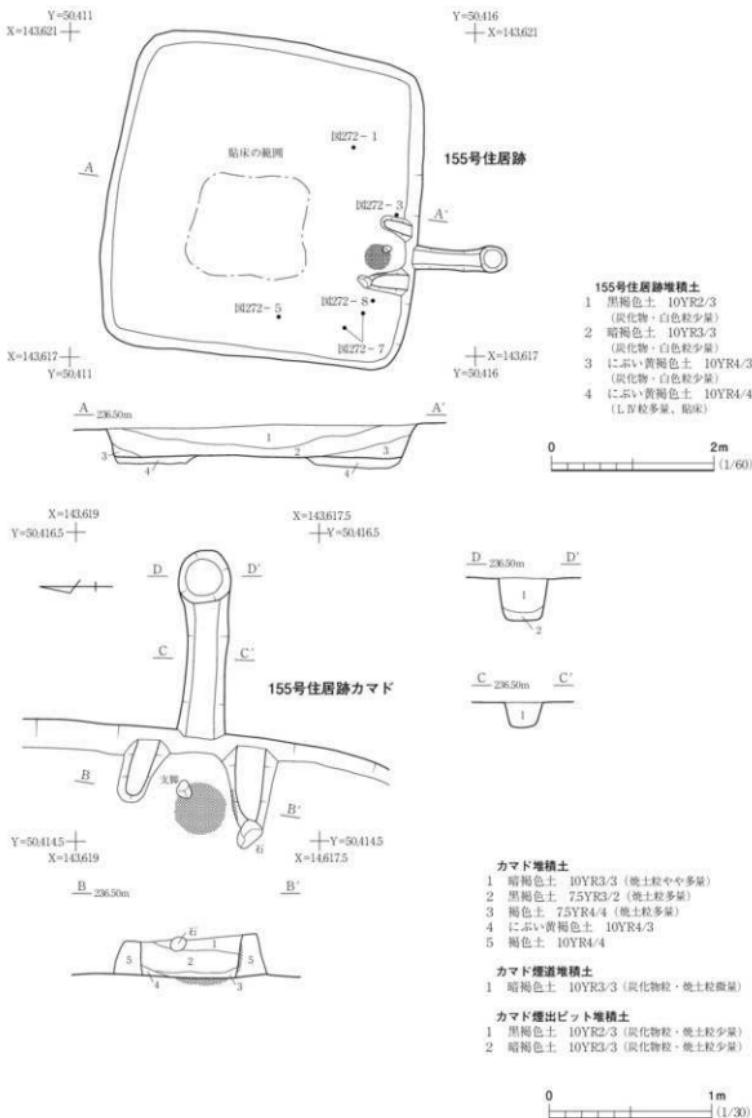


図271 155号住居跡

袖の内面も一部が焼土化していた。焼土面の北東端、燃焼部の中央部には、石製の支脚が立って遺存していた。支脚は、円形の断面の細長の自然礫を中ほどで割った、もしくは割たるもので、割れ口を下にして、基部を3cmほどカマド底面に埋めて立てられていた。支脚は、長さ19cm、径8cmで、上端は丸みをおびる。支脚上には口縁部を下にした状態の土器が3点重ね置かれていた。3点の土器は下から甕、杯で、もっとも上の土器は底部のみで器種は不明である。

煙道は東壁に対してほぼ直角の方向に延び、先端には煙出しピットが掘りこまれていた。煙出しピットを含めた煙道の長さは112cm、最大幅27cm、検出面からの深さは煙道が15cm、煙出しピットが25cm、煙出しピットの直径は32cmである。

遺物は、カマドとその周辺、南壁ぎわの東部の床面で比較的多くの土器が出土した。その他、堆積土、煙道、貼床の中から土器の小片が少量出土した。

遺物（図272、写真410）

本住居跡からは、土師器118点、須恵器6点、弥生土器21点が出土した。このうち、土師器6点、須恵器2点を図示した。なお、本住居跡から出土した弥生土器はいずれも胎土や色調から同一個体と考えられ、また、本住居跡が位置するN-24グリッドのLIIIから出土した弥生土器と接合したことから、本章の「第14節 遺構外出土遺物」に掲載した。

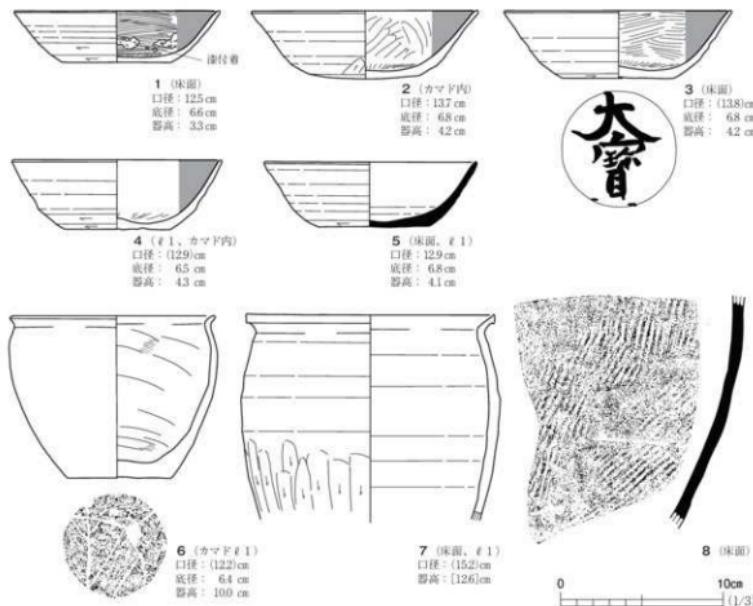


図272 155号住居跡出土遺物

図272-1~4は土師器の杯である。いずれも平底から直線的に外傾し口縁部に至る。外面にロクロナデのうち、1・3・4が底部付近に回転ヘラケズリ、2が手持ちヘラケズリ、内面にはいずれもミガキのうち黒色処理を施す。1の内面部付近には漆が付着する。3の底面には「大寶」の墨書がある。

5は、須恵器の杯である。平底で、体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。内外面にロクロナデを施し、底部付近は回転ヘラケズリによる再調整が施される。

6は、土師器の甕である。輪積み成形で、木葉痕を付す平底と外反する短い口縁部をもつ。外面は二次被熱により激しく劣化・磨滅する。

7は、土師器の甕である。体部中位以上が遺存する。なで肩で、口縁部は短く外傾し、口縁端部をつまみあげる。内外面にロクロナデを施したのち、体部の下半に縱方向のケズリが施される。

8は、須恵器の甕である。体部の破片で、外面に平行タタキメ、内面にはナデが施され、アテ具痕は確認されるが、不明瞭である。

まとめ

中型の堅穴住居跡で、東壁にカマドを有する。カマドには支脚が立ったままで、3点の土器がその上にかぶせられた状態で出土した。柱穴は検出されなかった。本住居跡の年代は、出土した土器から、平安時代、9世紀に位置づけられる。

(青山)

156号住居跡 S I 156

遺構(図273、写真184)

本遺構は、V区北部のQ・R-27グリッドに位置しており、標高235.5m付近の西側から東側に下る緩斜面に立地する。検出面はL II b ②である。重複する遺構はない。

堆積土は4層に区分した。ℓ 1は炭化物を少量含む黒褐色土である。L II a ②に対応する堆積土である。ℓ 2は、白色粒子と炭化物粒を多く含む黒褐色土である。L II a ③に対応する土層である。ℓ 3は白色粒を多量に含む褐色土である。L II b ①に対応する土層である。ℓ 4はL II b粒を多量に含む褐色土である。いずれの堆積土も自然堆積土である。

平面形は南側が斜面部で削平され残りが悪いが、方形ないし長方形と考えている。規模は遺存長が6.0mである。周壁は遺存状態の良い西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高はもっとも遺存している西壁で38cmである。住居の方位は残りの良い北西壁を基準とするなら北に対して東に50度傾く。床面は掘形底面であるL II b ③をそのまま利用しており、硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、確認されなかった。

遺物は、北西隅のℓ 3から、図273-1と2が出土している。

遺物(図273、写真410)

遺物は、土師器90点が出土した。このうち土師器2点を図示した。

図273-1は長胴形の甕である。底部を欠失する。2は口縁部から胴部にかけての瓶の破片であ

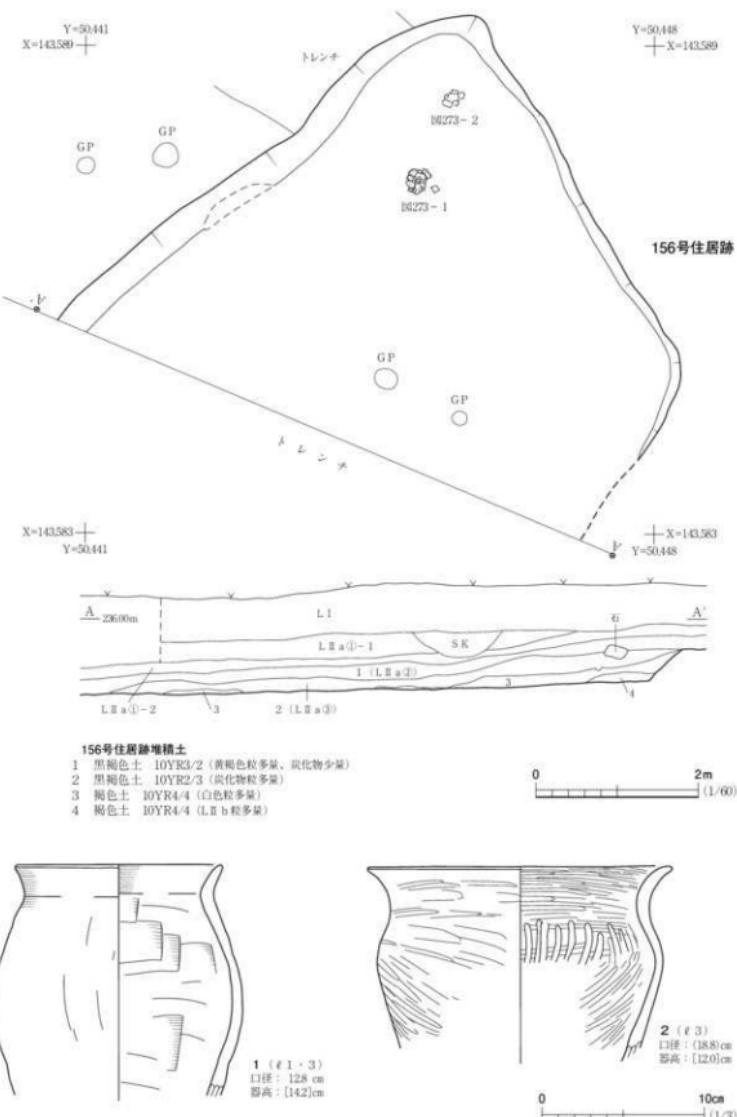


図273 156号住居跡・出土遺物

る。内外面ともにヘラミガキを施す。

まとめ

本遺構は、遺存長が60mの堅穴住居跡である。南側と東側が斜面部になることから、大半が失われているため、不明な点が多い。堆積土からは、土器類の甕と瓶が出土した。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代後期と考えられる。(中野)

157号住居跡 S I 157

遺構 (図274、写真185)

本遺構は、V区南部のR-21グリッドに位置しており、標高236.4m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、122号住居跡で、本遺構が古い。122号住居跡の西側を検出している際に、隅丸方形の遺構範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は2層に区分した。 ℓ 1はにい黄褐色砂質土である。 ℓ 2は褐色砂質土である。堆積過程はおおむね自然堆積と考えている。

平面形は、南側を122号住居跡に壊されているが、隅丸方形と考えている。規模は3.5×3.2m以上である。周壁は、遺存状態の良い東壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で20cmである。方位は、西壁を基準とするなら、北に対して西に10度傾く。床面は掘形底面であるLIVをそのまま利用しており、おおむね平坦かつ水平に作られている。全体的に踏み縮まりは弱く、硬化範囲は認められなかった。

住居内の施設は一切みとめられず、遺物も出土していない。

まとめ

本遺構は、3.5×3.2m以上の隅丸方形の堅穴住居跡である。住居内の施設も検出しておらず、遺

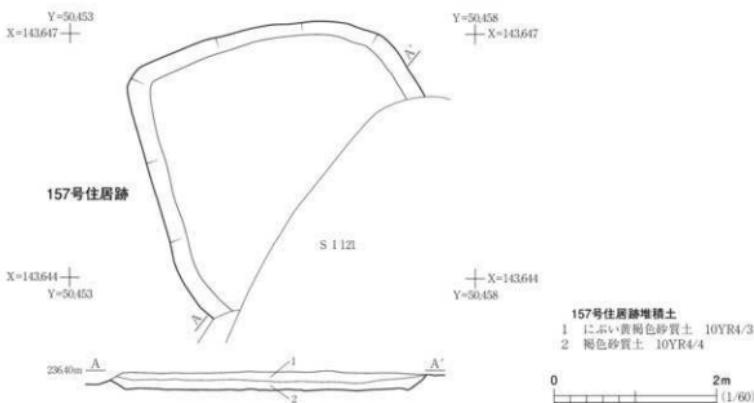


図274 157号住居跡

物も出土していない。遺構の所属時期は、判断材料が乏しいが、遺構の検出面や周辺の遺構との重複関係から、弥生時代終末期から古墳時代前期頃の時間幅で考えている。

(中野)

158号住居跡 S I 158

遺構 (図275、写真186)

本遺構は、V区南部のR-22グリッドに位置している。標高236.3m付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構はない。

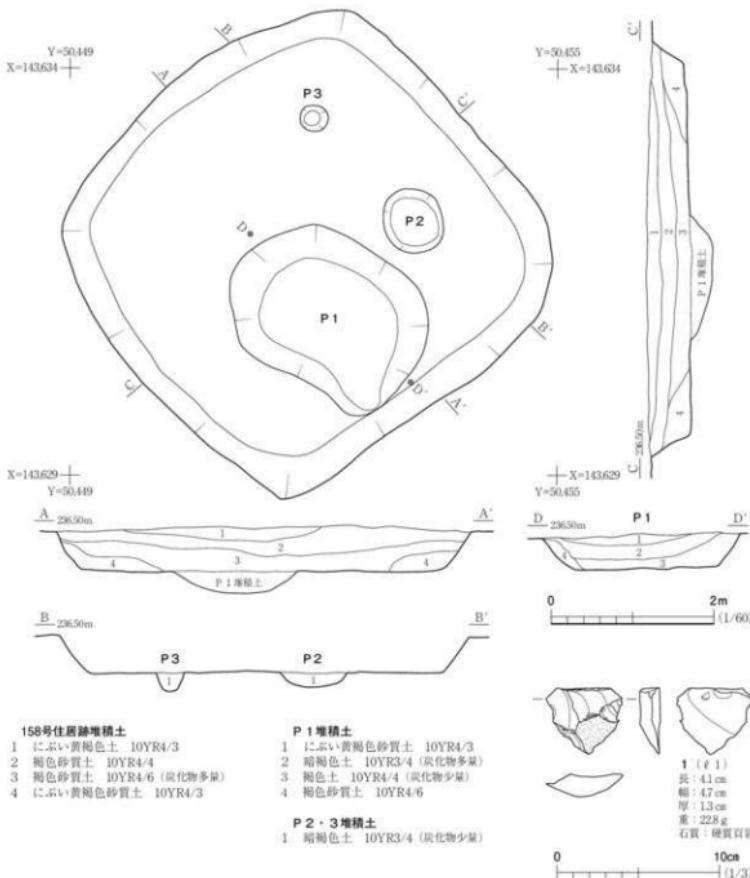


図275 158号住居跡・出土遺物

堆積土は、4層に区分した。 ℓ 1はにぶい黄褐色土である。 ℓ 2は褐色砂質土である。 ℓ 3は炭化物を多量に含む褐色砂質土である。 ℓ 4はにぶい黄褐色砂質土である。レンズ状に徐々に堆積していく様子がみて取れることから、いずれも自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は、 $5.1 \times 5.1\text{m}$ である。周壁は、残りの良い北西壁側では60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北西壁で 45cm である。方位は、南西壁を基準とするなら北から西に45度傾く。床面は掘形底面であるL IVをそのまま利用しており、おおむね平坦に作られている。全体的に踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピットを3基検出した。P 1は、東南壁側中央に位置する。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。平面形は不整な楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、 $250 \times 285\text{cm}$ 、深さは 42cm である。P 2は、P 1の北東側に位置する。平面形は不整な円形で、底面はすり鉢状に掘り込まれている。規模は、直径 85cm 、深さ 17cm である。P 3は、北隅に位置する。平面形は円形である。規模は、直径 32cm 、深さ 23cm である。P 1・2の堆積土は炭化物を少量含む暗褐色土である。ピットの機能は不明である。

遺物は、住居内堆積土 ℓ 1から出土しており、それ以外の堆積土からは出土していない。いずれも周囲からの流れ込みと思われる。

遺物（図275）

本住居跡からは、土師器が14点、石器が1点出土している。このうちの、石器1点を図示した。出土した土師器は、甕の胴部の小片がほとんどで図化できなかった。いずれも、古墳時代前期頃の所産である。

図275-1は一部に自然面を残す剥片である。

まとめ

本遺構は、 $5.1 \times 5.1\text{m}$ の隅丸方形の竪穴住居跡である。住居内の施設として貯蔵穴とピットが検出された。所属時期は、判断材料が乏しいが、検出面や周辺の遺構などから、弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えられる。

（中野）

159号住居跡 S I 159

遺構（図276、写真187）

本遺構は、V区南部のQ・R-23・24グリッドに位置している。標高 236.4m 付近の平坦面に立地する。検出面はL IVである。重複する遺構は160号住居跡とピット群で、160号住居跡より新しく、ピット群より本遺構が古い。

堆積土は、炭化物を微量含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。

平面形は、隅丸長方形である。規模は、 $5.5 \times 4.5\text{m}$ である。周壁は、残りの良い東壁側では60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で 20cm である。方位は、東壁を基準とするならば真北である。床面は、掘形の底面であるL IVをそのまま利用しており、おおむね平坦で、踏み締まり

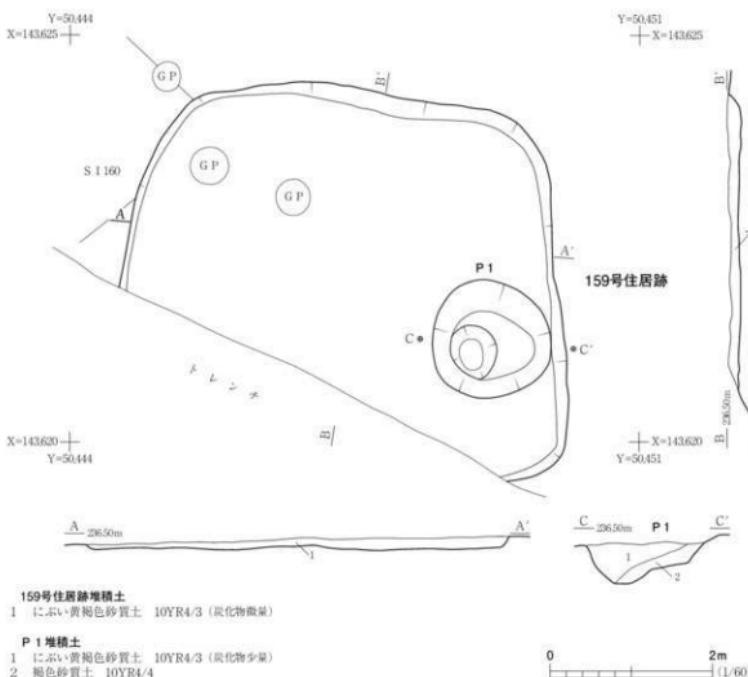


図276 159号住居跡

は弱い。

住居内の施設は、ピット1基を検出した。P 1は、東壁側中央よりやや南に位置する。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。平面形は不整な円形である。底面の西側に直径67cm、深さが12cmほど深くなるようにもう一段掘り込まれている。全体の規模は、直径145cm、深さ51cmである。堆積土は2層に区分した。ℓ 1は炭化物を少量に含むにぶい黄褐色砂質土である。ℓ 2は褐色砂質土である。

本住居跡からは、土師器の破片が13点出土した。出土状況は、堆積土から散発的に出土している。出土した土師器は、甕の胴部の小片がほとんどで、図化できなかった。いずれも古墳時代前期頃の所産である。

まとめ

本遺構は、5.5×4.5mの隅丸長方形の堅穴住居跡である。貯蔵穴が検出された。所属時期は、判断材料が乏しいが、検出面や周辺遺構などから古墳時代前期頃と考えられる。

(中野)

160号住居跡 S I 160

遺構 (図277、写真188)

本遺構は、V区北部のQ-23グリッドに位置している。標高236.3m付近の平坦面に立地する。検出面はLIVである。重複する遺構は、159号住居跡とピット群で本遺構が古い。

堆積土は2層である。ℓ1は炭化物が少量含む暗褐色砂質土である。ℓ2は小礫を含む褐色砂質土である。堆積過程は、おおむね自然堆積と考えている。

遺構の平面形は隅丸長方形である。規模は、4.3×3.0mである。周壁は、残りの良い北東壁側では60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で30cmである。方位は、北東壁を基準とするなら40度西に傾く。床面はLIVに作られ、おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、ピット1基を検出した。P1は北隅に位置する。平面形は不整な円形である。規模は直径24cm、深さ16cmである。堆積土は単層で、機能などは特定できなかった。

遺物は、図示しなかったが、石器4点が出土した。出土状況は、住居跡の中央よりやや南側の堆積土下層より剥片が4点まとまって出土している。

まとめ

本遺構は、4.3×3.0mの隅丸長方形の竪穴住居跡である。堆積土からは剥片が出土した。所属時期は、検出面や遺構との重複関係などから弥生時代終末期頃と考えられる。
(中野)

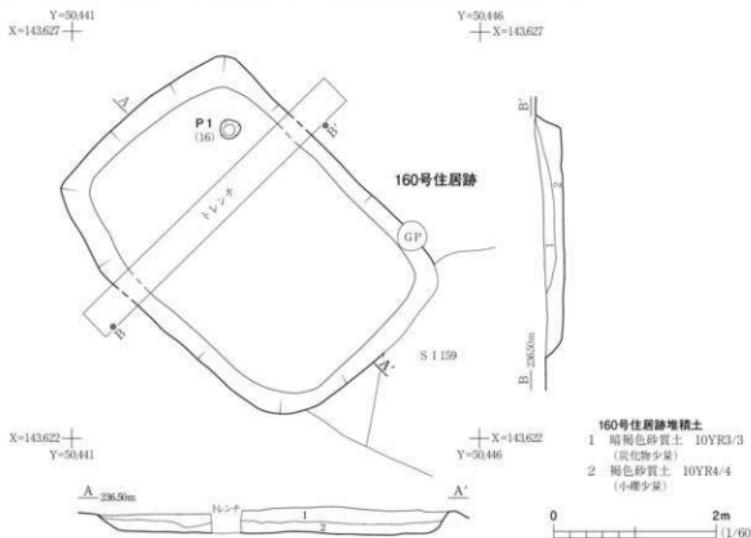


図277 160号住居跡

報告書抄録

ふりがな	あぶくまがわじょうりゅうかせんかいしゅうじょうたかごちくいせきちょうさほうこく							
書名	阿武隈川上流河川改修事業高本地区遺跡調査報告							
副書名	高木遺跡							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第531集							
編著者名	青山博樹、吉野道夫、小暮伸之、谷中 隆、植松晚彦、中野幸大、神林幸太朗、菅野美句、荒木麻衣、松本 茂							
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2019年(平成31年)3月11日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	※※※				
高木遺跡	福島県須賀川市 浜尾字高木	07207	00184	37°17'39"	140°24'7"	2015年5月12日	36,000m ²	河川改修(浜尾遊水地整備)に伴う記録保存調査
						2016年2月26日		
						2016年4月18日		
						2017年1月31日		
						2017年4月18日		
2018年1月29日								
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
高木遺跡	集落跡	弥生時代終末期	住居跡	229軒	弥生土器	阿武隈川の河畔に立地する、 弥生時代終末期、古墳時代前期、 同後期、奈良・平安時代、中世 の遺跡で、洪水の被害をたびた び被っていた。		
		古墳時代前中期	建物跡	36棟	土師器			
		古墳時代後期	柱列跡	4列	須恵器			
		古墳時代後期	埋葬跡	55箇所	赤焼土器			
		奈良・平安時代	方形区画遺構	2基	陶器			
		中世	溝	22条	土製品			
			祭祀遺構・土器集中地	3箇所	鐵器			
			土坑	170基	石製品			
			土器埋設遺構	4基	器物			
			焼造構	3箇所	貨			
	遺物包含層	1箇所						
要約	<p>弥生時代終末期 住居跡34軒などからなる集落跡が確認された。住居跡は重複が多く、同時に併存したものは敷軒程度と考えられる。</p> <p>古墳時代前期 112軒の住居跡などからなる大規模な集落跡である。出土土器から前期前葉に位置づけられる。住居跡の他、烟跡、土坑、土器埋設遺構、遺物包含層が検出された。甕の約半数を台付甕が占める点が特記される。</p> <p>古墳時代後期 28軒の住居跡などからなる集落跡である。住居跡の他、烟跡、溝跡、土坑、祭祀遺構が検出された。土器はいずれも舞台式の新しい段階のものである。出土土器に会津や関東からの外來の土器が含まれる。</p> <p>奈良・平安時代 奈良時代は住居跡8軒、建物跡7棟、平安時代は住居跡47軒、建物跡8棟からなる集落跡が確認され、奈良時代から平安時代へ継続して営まれた集落であったことが判明した。住居跡と建物跡の他、烟跡、土坑、柱列跡が確認された。</p> <p>中世 建物跡21棟、柱列跡、井戸跡を含む土坑、大型の方形区画遺構、烟跡が検出された。建物跡は3つの群を構成する。方形区画遺構は宗教施設と考えられる。</p>							

*經緯度数値は世界測地系(測地成果2011)による。

福島県文化財調査報告書第531集

阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告

高木遺跡

第1分冊〔本文編1〕

平成31年3月11日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団	遺跡調査部
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116) 福島市春日町5-54
	国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所	(〒960-8584) 福島市黒岩字榎平36
印 刷	株式会社日進堂印刷所	(〒960-2194) 福島市庄野字柿場1-1